

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集

# 志羅山遺跡発掘調査報告書

(第47・56・67・73・80次調査)

都市計画街路毛越寺線整備事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# **志羅山遺跡発掘調査報告書**

**(第47・56・67・73・80次調査)**

**都市計画街路毛越寺線整備事業関連遺跡発掘調査**

## 序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成12年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,200箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因ともなりました都市計画街路整備事業を例に挙げるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための道路交通網の整備もまた県民の切実な願いでもあります。このため埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という、相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す処置をとってまいりました。

本書は平成7年から発掘調査が開始された都市計画街路毛越寺線の整備事業に関連した、志羅山遺跡の調査結果をまとめたものであります。遺跡は平泉町市街地の南部にあたり、北上川と太田川による河岸段丘に立地しています。調査の結果、奥州藤原氏四代の政治・経済の中心地であった「都市平泉」に係わる遺構・遺物が多数発見されました。特に町割りの中核を成す東西及び南北に走る道路跡や、建物を区画する板塀、金銅製品工房に伴う「捨て場」や埴堀埋納遺構の発見は、当時の都市計画を考察する上で貴重な資料といえます。また、宗教的な文章が書かれた木簡をはじめとする豊富な遺物は、当時の人々の生活を解明する一助となるものと考えられます。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する关心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望する次第であります。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にご協力とご援助を賜りました岩手県一関地方振興局土木部や平泉町教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人岩手県文化振興事業団  
理事長 千葉 浩一

## 例　言

1. 本報告書は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山6-1ほかに所在する志羅山遺跡の発掘調査結果を集録したものである。
2. 本遺跡の調査は、都市計画街路毛越寺線整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と岩手県一関地方振興局土木部との協議を経て、財団法人文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成7年から平成11年にかけて実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。  
遺跡番号：NE-76-1088 遺跡略号：SY-95-47・SY-96-56・SY-97-67・SY-73・SY-99-80
4. 調査期間、担当者及び調査面積は下記のとおりである。

47次調査	平成7年8月1日～11月30日	高橋佐知子・高橋英樹・大場慎也	981m <sup>2</sup>
56次調査	平成8年4月8日～9月17日	星雅之・菊池栄壽・山下浩幸	2,000m <sup>2</sup>
67次調査	平成9年7月1日～10月31日	朝倉雄大・高橋央央	550m <sup>2</sup>
73次調査	平成10年4月9日～5月15日	朝倉雄大・羽柴直人	105m <sup>2</sup>
80次調査	平成11年4月9日～8月4日	酒井宗孝・安藤由紀夫	766m <sup>2</sup>
5. 室内整理期間及び担当者は下記のとおりである。

47次調査	平成7年11月1日～平成8年3月31日	高橋佐知子・高橋英樹
56次調査	平成8年11月1日～平成9年3月31日	星雅之・菊池栄壽・山下浩幸
67次調査	平成10年1月1日～3月31日	朝倉雄大
73次調査	平成11年3月1日～3月31日	朝倉雄大
80次調査	平成11年11月1日～平成12年3月31日	酒井宗孝
6. 出土遺物の鑑定及び分析に当たっては次の個人・機関に委託・依頼した。(敬称略)  
※トヨレ造構土壤分析……(株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所 ※火山灰同定……(株)古環境研究所  
※石質鑑定……佐藤次郎(長内水源工業)、矢内桂三・柳沢忠昭(花崗岩研究会)  
※樹種・種子同定……木工舎「ゆい」 ※鉄滓分析……川崎テクノリサーチ株式会社
7. 基準点測量及び空中写真の撮影、鉄器・木製品の保存処理は次の機関に委託した。  
※基準点測量……第一航業株式会社、株式会社一測設計 ※空中写真撮影……東邦航空株式会社
8. 発掘調査及び整理・報告書作成において次の機関・個人のご協力とご指導をいただいた。(敬称略)  
機関：平泉町教育委員会・前沢町教育委員会・水沢市埋蔵文化財調査センター・岩手県教育委員会  
個人：本澤慎輔、及川司、八重樋忠郎、菅原計二、鈴木江利子、伊藤博幸、阿部一、及川真紀、斎木秀雄、井上喜久男、藤澤良祐、青木修、松村恵司、小池伸彦、飯村均、前川佳代、五十川伸矢、藤原良章、芦野寛、川島茂裕、入間田宣夫
9. 本書の執筆は各調査次の整理担当者が分担し、編集は高橋佐知子が行った。
10. 野外調査では、平泉町・一関市をはじめとする地元の方々の多大なるご協力を得た。
11. 本遺跡で出土した遺物及び各種実測図・写真等の調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。なお、平泉町教育委員会の調査区と重複する遺構内の遺物については、平泉町教育委員会文化財センターが保管している。

## 目 次

序

例言

報告書抄録

本文			
I. 調査に至る経過	1	VII. 第67次調査の報告	391
II. 遺跡の立地と環境	1	VIII. 第73次調査の報告	485
1. 遺跡の立地と地形・地質	1	VIII. 第80次調査の報告	585
2. 周辺の遺跡	5	図版	
III. 調査の方法と室内整理	8	図 1 岩手県図に見る遺跡の位置	2
1. 調査の方法	8	図 2 遺跡周辺地形図	3
2. 室内整理	10	図 3 遺跡周辺地形分類図	4
IV. 第47次調査の報告	15	図 4 周辺の遺跡分布図	6
V. 第56次調査の報告	177	図 5 調査範囲図	9
		図 6 遺構配置図	11

### 第47次調査目次

[本 文]

1. 調査・整理の方法	15	5. 分析・鑑定	99
2. 基本層序	15	(1) トイレ遺構の土壤分析	99
3. 検出された遺構と遺物	16	(2) 出土材樹種同定	112
4. まとめ	92	(3) 鉄滓等の分析・調査	115

[ 表 ]

第1表 遺物観察表 手づくねかわらけ	86	第6表 遺物観察表 土製品	89
第2表 遺物観察表 ロクロかわらけ	88	第7表 遺物観察表 石製品	90
第3表 遺物観察表 中国産陶磁器	88	第8表 遺物観察表 木質遺物・種子・漆紙	91
第4表 遺物観察表 国産陶器	88	第9表 遺物観察表 国産陶磁器(近世以降)	92
第5表 遺物観察表 金属製品	89		

[図 版]

第1図 遺構配置図	17	第7図 12区遺構平面図・断面図	31
第2図 10区(1)	19	第8図 13区(1)遺構平面図・断面図	35
第3図 10区(2)遺構平面図・断面図	20	第9図 13区(2)遺構平面図・断面図	36
第4図 11区(1)遺構平面図・断面図	24	第10図 14区(1)遺構平面図	39
第5図 11区(2)遺構平面図・断面図	26	第11図 14区(2)遺構平面図・断面図	41
第6図 11区(3)遺構平面図・断面図	27	第12図 15区遺構平面図・断面図	44

第13図	16区(1)遺構平面図・断面図	47
第14図	16区(2)・17区遺構平面図・断面図	49
第15図	18区・19区(1)遺構平面図・断面図	55
第16図	19区(2)遺構平面図・断面図	57
第17図	19区(3)・20区(1)遺構平面図・断面図	60
第18図	20区(2)遺構平面図・断面図	64
第19図	21区・22区平面図・断面図	66
第20図	23区・24区平面図・断面図	69
第21図	25区・26区・27区遺構平面図・断面図	71
第22図	46区遺構平面図・断面図	75
第23図	出土遺物10区・11区・12区・13区	78
第24図	出土遺物14区・16区・17区・19区(1)	79
第25図	出土遺物19区(2)	80
第26図	出土遺物19区(3)・20区(1)	81
第27図	出土遺物19区(4)・20区(2)	82
第28図	出土遺物19区(5)・20区(3)	83
第29図	出土遺物19区(6)・20区(4)・24区 ・27区(1)	84
第30図	出土遺物27区(2)・46区	85
第31図	13区～15区検出の建物跡	92
第32図	溝・堀の方向	93
第33図	かわらけの分類別割合・法量の分布	96

#### [写 真 図 版]

写真図版 1	航空写真 遺跡遠景	137
写真図版 2	航空写真 遺跡上空	138
写真図版 3	10区(1)	139
写真図版 4	10区(2)	140
写真図版 5	11区(1)	141
写真図版 6	11区(2)	142
写真図版 7	11区(3)・12区(1)	143
写真図版 8	12区(2)	144
写真図版 9	12区(3)・13区(1)	145
写真図版10	13区(2)	146
写真図版11	13区(3)・14区(1)	147
写真図版12	14区(2)	148
写真図版13	14区(3)・15区(1)	149
写真図版14	15区(2)	150
写真図版15	16区(1)	151
写真図版16	16区(2)	152
写真図版17	16区(3)・17区(1)	153
写真図版18	17区(2)	154
写真図版19	18区・19区(1)	155
写真図版20	19区(2)	156
写真図版21	19区(3)	157
写真図版22	19区(4)	158
写真図版23	19区(5)	159
写真図版24	20区・21区	160
写真図版25	23区・24区・25区・26区	161
写真図版26	22区・27区	162
写真図版27	46区(1)	163
写真図版28	46区(2)	164
写真図版29	出土遺物10区・11区・12区(1)	165
写真図版30	出土遺物12区(2)・13区・14区・ 15区・16区(1)	166
写真図版31	出土遺物16区(2)・17区・19区(1)	167
写真図版32	出土遺物19区(2)	168
写真図版33	出土遺物19区(3)	169
写真図版34	出土遺物19区(4)	170
写真図版35	出土遺物19区(5)	171
写真図版36	出土遺物19区(6)・20区・24区 27区(1)	172
写真図版37	出土遺物27区(2)	173
写真図版38	出土遺物27区(3)・46区	174

#### 第56次調査目次

##### [本 文]

1. 調査・整理の方法	177
1 野外調査	177
2 室内整埋	177
2. 基本層序	178

3. 検出された遺構と遺物	180	1. 据立柱建物跡	302
4. 遺物	271	2. 满跡	302
1 古代の遺物	271	3. 崩跡	304
2 12世紀の遺物	271	4. 土坑	304
3 中世・近世の遺物	273	5. 井戸跡	306
4 近代・現代の遺物	273	6. かわらけの出土状況	308
5. 第56次調査のまとめと若干の考察	302	7. 総括	313

[ 表 ]

第1表 遺構表(1)	316	第6表 遺物(4)	321
第2表 遺構表(2)	317	第7表 遺物(5)	322
第3表 遺物(1)	318	第8表 遺物(6)	323
第4表 遺物(2)	319	第9表 遺物(7)	324
第5表 遺物(3)	320		

[図 版]

第1図 遺構2区	182	第23図 遺構33(1)・34区	224
第2図 遺構3区(1)	184	第24図 遺構33区(2)	225
第3図 遺構3(2)・4区	186	第25図 遺構35・36(1)区	227
第4図 遺構5区(1)	187	第26図 遺構36区(2)	228
第5図 遺構5区(2)	188	第27図 遺構37区	231
第6図 遺構6区(1)	190	第28図 遺構38区	233
第7図 遺構6区(2)	191	第29図 遺構39区	235
第8図 遺構7・8区(1)	194	第30図 遺構42区	237
第9図 遺構8区(2)	196	第31図 遺構43区(1)	240
第10図 遺構9区(1)	198	第32図 遺構43区(2)	241
第11図 遺構9区(2)	199	第33図 遺構44区	243
第12図 遺構9(3)・10・43・44区	200	第34図 遺構45区(1)	245
第13図 遺構28区(1)	203	第35図 遺構45区(2)	246
第14図 遺構28区(2)	204	第36図 遺構48・49区	249
第15図 遺構28区(3)	207	第37図 遺構50区	251
第16図 遺構28区(4)	208	第38図 遺構51区(1)	253
第17図 遺構28区(5)	209	第39図 遺構51区(2)	255
第18図 遺構28区(6)	212	第40図 遺構52区	258
第19図 遺構28区(7)	213	第41図 遺構53区	260
第20図 遺構29区	216	第42図 遺構54区	262
第21図 遺構30区	219	第43図 遺構55・56区	265
第22図 遺構31区	223	第44図 遺構60・61区	267

第45図	遺構62区	269	第62図	出土遺物(16)	289
第46図	遺構64区	270	第63図	出土遺物(17)	290
第47図	出土遺物(1)	274	第64図	出土遺物(18)	291
第48図	出土遺物(2)	275	第65図	出土遺物(19)	292
第49図	出土遺物(3)	276	第66図	出土遺物(20)	293
第50図	出土遺物(4)	277	第67図	出土遺物(21)	294
第51図	出土遺物(5)	278	第68図	出土遺物(22)	295
第52図	出土遺物(6)	279	第69図	出土遺物(23)	296
第53図	出土遺物(7)	280	第70図	出土遺物(24)	297
第54図	出土遺物(8)	281	第71図	出土遺物(25)	298
第55図	出土遺物(9)	282	第72図	遺構配置図(1)	299
第56図	出土遺物(10)	283	第73図	遺構配置図(2)	300
第57図	出土遺物(11)	284	第74図	遺構配置図(3)	301
第58図	出土遺物(12)	285	第75図	かわらけ分類別構成	307
第59図	出土遺物(13)	286	第76図	28区土坑1、2号51区井戸跡出土 かわらけ	311
第60図	出土遺物(14)	287			
第61図	出土遺物(15)	288	第77図	かわらけ法景図	312

[写 真 図 版]

写真図版 1	航空写真 遺跡遠景	327	写真図版19	遺構(17)	345
写真図版 2	航空写真 遺跡上空	328	写真図版20	遺構(18)	346
写真図版 3	遺構(1)	329	写真図版21	遺構(19)	347
写真図版 4	遺構(2)	330	写真図版22	遺構(20)	348
写真図版 5	遺構(3)	331	写真図版23	遺構(21)	349
写真図版 6	遺構(4)	332	写真図版24	遺構(22)	350
写真図版 7	遺構(5)	333	写真図版25	遺構(23)	351
写真図版 8	遺構(6)	334	写真図版26	遺構(24)	352
写真図版 9	遺構(7)	335	写真図版27	遺構(25)	353
写真図版10	遺構(8)	336	写真図版28	遺構(26)	354
写真図版11	遺構(9)	337	写真図版29	遺構(27)	355
写真図版12	遺構(10)	338	写真図版30	遺構(28)	356
写真図版13	遺構(11)	339	写真図版31	遺構(29)	357
写真図版14	遺構(12)	340	写真図版32	遺構(30)	358
写真図版15	遺構(13)	341	写真図版33	遺構(31)	359
写真図版16	遺構(14)	342	写真図版34	遺構(32)	360
写真図版17	遺構(15)	343	写真図版35	遺構(33)	361
写真図版18	遺構(16)	344	写真図版36	遺構(34)	362

写真図版37 遺物(1) .....	363	写真図版50 遺物(14) .....	376
写真図版38 遺物(2) .....	364	写真図版51 遺物(15) .....	377
写真図版39 遺物(3) .....	365	写真図版52 遺物(16) .....	378
写真図版40 遺物(4) .....	366	写真図版53 遺物(17) .....	379
写真図版41 遺物(5) .....	367	写真図版54 遺物(18) .....	380
写真図版42 遺物(6) .....	368	写真図版55 遺物(19) .....	381
写真図版43 遺物(7) .....	369	写真図版56 遺物(20) .....	382
写真図版44 遺物(8) .....	370	写真図版57 遺物(21) .....	383
写真図版45 遺物(9) .....	371	写真図版58 遺物(22) .....	384
写真図版46 遺物(10) .....	372	写真図版59 遺物(23) .....	385
写真図版47 遺物(11) .....	373	写真図版60 遺物(24) .....	386
写真図版48 遺物(12) .....	374	写真図版61 遺物(25) .....	387
写真図版49 遺物(13) .....	375		

## 第67次調査目次

### [本文]

1. 調査・整理の方法 .....	391	(6)70区 .....	427
2. 基本層序 .....	391	(7)71区 .....	428
3. 検出された遺構と遺物 .....	395	4. まとめと考察 .....	442
(1)1区 .....	395	(1)遺構 .....	442
(2)65区 .....	399	(2)出土遺物 .....	446
(3)66区 .....	411	5. 分析・鑑定 .....	450
(4)68区 .....	416	(1)出土材樹種同定 .....	450
(5)69区 .....	427	(2)トイレ遺構土壤分析 .....	454

### [表]

第1表 かわらけ観察表 .....	438	第4表 木製品観察表 .....	441
第2表 国産陶磁器観察表 .....	439	第5表 石器・石製品観察表 .....	441
第3表 中国陶磁器観察表 .....	440		

### [図版]

第1図 67次・73次調査グリッド配置図 .....	392	第7図 65区(3) .....	403
第2図 遺構配置図 .....	393	第8図 65区(4) .....	405
第3図 1区(1) .....	396	第9図 65区(5) .....	407
第4図 1区(2) .....	397	第10図 65区(6) .....	409
第5図 65区(1) .....	400	第11図 66区(1) .....	412
第6図 65区(2) .....	402	第12図 66区(2) .....	413

第13図	66区(3).....	414	第21図	71区 .....	431
第14図	68区(1).....	417	第22図	出土遺物(1) .....	433
第15図	68区(2).....	419	第23図	出土遺物(2) .....	434
第16図	68区(3).....	420	第24図	出土遺物(3) .....	435
第17図	68区(4).....	422	第25図	出土遺物(4) .....	436
第18図	68区(5).....	425	第26図	出土遺物(5) .....	437
第19図	69区・70区(1) .....	429	第27図	68区掘立柱建物跡3・4・5号 .....	443
第20図	69区・70区(2) .....	430			

#### [写 真 図 版]

写真図版 1	航空写真 遺跡遠景 .....	465	写真図版 10	68区(2) .....	474
写真図版 2	航空写真 遺跡上空から .....	466	写真図版 11	68区(3) .....	475
写真図版 3	調査区近景・1区(1) .....	467	写真図版 12	69区・70区 .....	476
写真図版 4	1区(2) .....	468	写真図版 13	71区 .....	477
写真図版 5	65区(1) .....	469	写真図版 14	出土遺物(1) .....	478
写真図版 6	65区(2) .....	470	写真図版 15	出土遺物(2) .....	479
写真図版 7	65区(3)・66区(1) .....	471	写真図版 16	出土遺物(3) .....	480
写真図版 8	66区(2) .....	472	写真図版 17	出土遺物(4) .....	481
写真図版 9	68区(1) .....	473	写真図版 18	出土遺物(5) .....	482

### 第73次調査目次

#### [本 文]

1. 調査・整理の方法 .....	485	4. まとめと考察 .....	526
2. 基本層序 .....	485	(1)遺構 .....	526
3. 検出された遺構と遺物 .....	487	(2)出土遺物 .....	530
(1)67区 .....	487	5. 分析・鑑定 .....	535
(2)72区 .....	494	(1)出土材樹種同定 .....	535

#### [ 表 ]

第1表	かわらけ観察表 .....	518	第4表	木製品観察表 .....	524
第2表	国産陶器観察表 .....	519	第5表	辦板材観察表 .....	525
第3表	中国磁器観察表 .....	524	第6表	遺構の新旧関係表 .....	526

#### [図 版]

第1図	遺構配置図 .....	486	第4図	67区(3) .....	490
第2図	67区(1) .....	488	第5図	67区(4) .....	491
第3図	67区(2) .....	489	第6図	67区(5) .....	493

第7図	72区(1).....	495	第20図	出土遺物(12).....	511
第8図	72区(2).....	498	第21図	出土遺物(13).....	512
第9図	出土遺物(1).....	500	第22図	出土遺物(14).....	513
第10図	出土遺物(2).....	501	第23図	出土遺物(15).....	514
第11図	出土遺物(3).....	502	第24図	板塀材(1).....	515
第12図	出土遺物(4).....	503	第25図	板塀材(2).....	516
第13図	出土遺物(5).....	504	第26図	板塀材(3).....	517
第14図	出土遺物(6).....	505	第27図	区画想定図 .....	528
第15図	出土遺物(7).....	506	第28図	かわらけ法量分布図(1) .....	531
第16図	出土遺物(8).....	507	第29図	かわらけ法量分布図(2) .....	532
第17図	出土遺物(9).....	508	第30図	国産陶磁器出土数 .....	533
第18図	出土遺物(10).....	509		出土量グラフ .....	
第19図	出土遺物(11).....	510			

[写 真 図 版]

写真図版 1	67区(1).....	543	写真図版21	出土遺物(12).....	563
写真図版 2	67区(2).....	544	写真図版22	出土遺物(13).....	564
写真図版 3	67区(3).....	545	写真図版23	出土遺物(14).....	565
写真図版 4	67区(4).....	546	写真図版24	出土遺物(15).....	566
写真図版 5	67区(5).....	547	写真図版25	出土遺物(16).....	567
写真図版 6	67区(6).....	548	写真図版26	出土遺物(17).....	568
写真図版 7	72区(1).....	549	写真図版27	出土遺物(18).....	569
写真図版 8	72区(2).....	550	写真図版28	出土遺物(19).....	570
写真図版 9	72区(3).....	551	写真図版29	出土遺物(20).....	571
写真図版10	出土遺物(1).....	552	写真図版30	出土遺物(21).....	572
写真図版11	出土遺物(2).....	553	写真図版31	出土遺物(22).....	573
写真図版12	出土遺物(3).....	554	写真図版32	出土遺物(23).....	574
写真図版13	出土遺物(4).....	555	写真図版33	出土遺物(24).....	575
写真図版14	出土遺物(5).....	556	写真図版34	出土遺物(25).....	576
写真図版15	出土遺物(6).....	557	写真図版35	出土遺物(26).....	577
写真図版16	出土遺物(7).....	558	写真図版36	出土遺物(27).....	578
写真図版17	出土遺物(8).....	559	写真図版37	出土遺物(28).....	579
写真図版18	出土遺物(9).....	560	写真図版38	出土遺物(29).....	580
写真図版19	出土遺物(10).....	561	写真図版39	出土遺物(30).....	581
写真図版20	出土遺物(11).....	562			

## 第80次調査目次

### [本文]

1. 調査・整理の方法	585	(6)溝跡	607
(1)グリッドの設定と遺構名	585	(7)埋納遺構	611
(2)遺物の取り上げ	585	(8)遺物包含層	613
(3)室内整理	585	4. まとめ	643
2. 基本層序	586	(1)遺構	643
3. 検出された遺構と遺物	587	(2)遺物	644
(1)堅穴住居跡	587	6. 分析・鑑定	647
(2)道路跡	589	(1)火山灰同定	647
(3)掘立柱建物跡・柱穴	595	(2)出土材樹種同定	649
(4)井戸跡	599	(3)種実同定	663
(5)土坑	601		

### [表]

検出遺構一覧	615	木器・木製品観察表	640
土器観察表	635	石器・石製品観察表	642
陶磁器観察表	638	金属器観察表	642
土製品観察表	639		

### [図版]

第1図 グリッド配置図	585	第17図 4~6号溝跡	609
第2図 基本土層柱状図	586	第18図 7~9号溝跡	610
第3図 実測図凡例	586	第19図 1~3号埋納遺構	612
第4図 1号住居跡(1)	588	第20図 遺物包含層断面	613
第5図 1号住居跡(2)	589	第21図 遺構配置図	616
第6図 1号道路跡(1)	591	第22図 遺構内出土遺物1(1~14)	617
第7図 1号道路跡(2)	592	第23図 遺構内出土遺物2(15~52)	618
第8図 1号道路跡(3)	593	第24図 遺構内出土遺物3(53~70)	619
第9図 西端部柱穴群	595	第25図 遺構内出土遺物4(71~78)	620
第10図 中央柱穴群	596	第26図 遺構内出土遺物5(79~94)	621
第11図 中央南端部柱穴群	597	第27図 遺構内出土遺物6(95~126)	622
第12図 東端部柱穴群	598	第28図 遺構内出土遺物7(127~148)	623
第13図 1・2・4号井戸跡	604	第29図 遺構内出土遺物8(149~177)	624
第14図 3号井戸跡・1~5号土坑	605	第30図 遺構内出土遺物9(178~198)	625
第15図 7~11号土坑	606	第31図 遺構内出土遺物10(199~219)	626
第16図 3号溝跡	608	第32図 遺構内出土遺物11(220~257)	627

第33図 造構内出土遺物12 (258~281) .....628	第36図 包含層出土遺物2 (314~334) .....631
第34図 造構内出土遺物13 (283~306) .....629	第37図 造構内出土遺物3 (363~389) .....632
第35図 造構内出土遺物14 (307~313) ・包含層出土遺物1 (314~334) .....630	第38図 造構内出土遺物4 (390~412) .....633
	第39図 造構内出土遺物5 (413~432) .....634

[写 真 図 版]

写真図版 1 空中写真 .....667	写真図版21 遺物包含層 (J 5区) · 東端部柱穴群 .....687
写真図版 2 1号道路跡 .....668	写真図版22 造構内出土遺物1 (1~26) .....688
写真図版 3 道路跡出土木簡 .....669	写真図版23 造構内出土遺物2 (27~60) .....689
写真図版 4 1号埋納造構 .....670	写真図版24 造構内出土遺物3 (61~77) .....690
写真図版 5 出土遺物 .....671	写真図版25 造構内出土遺物4 (78~90) .....691
写真図版 6 出土遺物 .....672	写真図版26 造構内出土遺物5 (91~131) .....692
写真図版 7 空中写真 (2) ·基本層序 .....673	写真図版27 造構内出土遺物6 (132~156) .....693
写真図版 8 1号住居跡 (1) .....674	写真図版28 造構内出土遺物7 (157~193) .....694
写真図版 9 1号住居跡 (2) .....675	写真図版29 造構内出土遺物8 (194~213) .....695
写真図版10 1号道路跡 (1) .....676	写真図版30 造構内出土遺物9 (214~244) .....696
写真図版11 1号道路跡 (2) .....677	写真図版31 造構内出土遺物10 (245~262) .....697
写真図版12 1号道路跡 (3) .....678	写真図版32 造構内出土遺物11 (263~292) .....698
写真図版13 3·4号溝跡 .....679	写真図版33 造構内出土遺物12 (293~313) .....699
写真図版14 5·8·7·9溝跡 .....680	写真図版34 包含層出土遺物1 (314~355) .....700
写真図版15 1~4号井戸跡 .....681	写真図版35 包含層出土遺物2 (356~382) .....701
写真図版16 1~4号土坑 .....682	写真図版36 包含層出土遺物3 (383~402) .....702
写真図版17 5~9号土坑 .....683	写真図版37 包含層出土遺物4 (403~419) .....703
写真図版18 10·11号土坑·1~3号 埋納造構 .....684	写真図版38 包含層出土遺物5 (420~432) .....704
写真図版19 遺物包含層 (H·I 4区) .....685	写真図版39 木簡赤外線写真 .....705
写真図版20 遺物包含層 (J·K 4区) .....686	

報告書抄録

ふりがな	しらやまいせきはっくつちようさほうこくしょ						
書名	志羅山遺跡発掘調査報告書（第47・56・67・73・80次調査）						
副書名	都市計画街路毛越寺線整備事業関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第352集						
編著者名	高橋佐知子・星雅之・朝倉雄大・酒井宗孝						
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001						
発行年月日	西暦2001年3月						

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
志羅山遺跡	岩手県平泉町平泉 字志羅山6-1ほか	03402	NE76-1088	38度 59分 06秒	141度 07分 10秒	19950801～ 19951130 19960408～ 19960917 19970701～ 19971031 19980409～ 19980515 19990409～ 19990804	981m <sup>2</sup> 2,000m <sup>2</sup> 550m <sup>2</sup> 105m <sup>2</sup> 766m <sup>2</sup>	「都市計 画街路毛 越寺線」 整備に伴 う緊急発 掘調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志羅山遺跡	都市遺跡	平安時代末 (12世紀)	道路跡 1 溝跡 127 堀跡 14 柱穴列 11 掘立柱造物跡 26 垣塙埋納遺構 3 井戸跡 14 土坑 88 池状遺構 1 カマド状遺構 3 鍛冶関連遺構 1 遺物包含層 柱穴 1258 不明遺構 1	かわらけ (ロクロ・手づくね) 困産陶器 (涅美・常滑・東北窑・ 瀬戸・美濃・唐津) 中国産陶磁器 (白磁・青磁・青白磁・ 褐釉陶器) 木製品 (ちゅう木、カナ書き 木簡、箸、下駄、笹器 婆、漆器椀、漆器皿、 人形、曲げ物) 土製品(瓦、埴、壁土、 羽口、埴壇、焼壘?) 石製品(底石) 金属製品(古鏡、鐵津) その他(植物種子、堀 板材)	(47次) 観自在王院東側の大区画 を掘する大溝(南側・東側) の一部を検出 (56次) かわらけ埋納土坑、トイ レ状土坑を検出。溝の方向 に規則性(東5°及び15° ぶれるものの2種に大別) (67次) トイレ遺構、12Cの整 地層などを検出。井戸頃め の遺構? (73次) 屋敷区画が判明、池状遺 構、堀板材を検出 (80次) 道路跡(第14・46・66・ 69・74・78・79次調査検出 部分の最北部)、垣塙埋納遺 構(金銅製品を製作?)を 検出。カナ書き木簡が出土。

## I. 調査に至る経過

志羅山遺跡第47・56・67・73・80次の調査は、都市計画道路毛越寺線の改良工事に伴う緊急発掘調査である。都市計画道路毛越寺線は、平泉の中心部を東西に連絡する都市の骨格を形成する道路であるとともに、主要地方道平泉巣美線として周辺の特別景勝巣美渓・毛越寺・中尊寺等を連絡する観光道路として役割を担っている。しかし、車道・歩道幅共に狭隘なために円滑な交通が不可能なうえ、毛越寺付近では急カーブのために見通しが悪く、交通事故の危険を孕んでいる。また、周辺部では歴史ある古都の情緒を感じられる景観形成が成されていない。このことから、平成元年平泉駅から毛越寺間を、古代都市平泉における大路空間をイメージした安全性と利便性の高い道路、観光客を考慮した快適な歩行空間としての道路整備を行うこととなった。

当該箇所の全域は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、この取り扱いについて一関地方振興局土木部と岩手県教育委員会文化課との間で協議を行った結果、起業区及びこれに伴う家屋の移転地全てについて発掘調査を実施することになった。さらに、調査にあたっては、起業地内は財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、家屋移転地については平泉教育委員会が実施することとし、平成7年度から調査を開始した。しかし、隣接する区域を時間差を持って調査を行うことによる、非効率性解消の見地から第75次調査からは隣接区域毎に両機関で分担して実施することとした。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地と地形・地質 (図1、2、3 写真図版1)

志羅山遺跡が所在する平泉町は北上川低地帯の南端部に位置し、南は一関市、北は前沢町・衣川村、東は東山町に接している。総面積は63.39km<sup>2</sup>で町域の中央部を北上川が南流し、東側には北上山地の西縁部である東福山塊が迫り、西側には標高120～210mの磐井丘陵(狹義には平泉丘陵)が広がっている。

松尾芭蕉が源義經最期の地である「高畠」から眺望し「大河なり」と称した北上川は、主流部の延長249km、流域面積10,250km<sup>2</sup>、支流数216を有する東北地方最大の河川で、西侧に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地との間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾にその河口を開く。この流域は盛岡市北部の四十四田峽谷と一関市孤禪寺峠谷を境にして上・中・下流域に分けられており、平泉町は中流域の下流部にあたる。

中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いによって対象的な様相を呈している。新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、大小の扇状地が複合する広い平野部を西岸に創り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、本流及び支流によって解析され段丘化している。これに対して古生代・中生代の地層とこれに貫入する花崗岩類から成り、老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山塊に続く丘陵の最辺部に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。

流域の第四系及び地形の研究は中川久夫他の業績が大きく、中流域の段丘を高位から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類した。また、流域最大の規模を持つ胆沢扇状地に形成された段丘群を一首坂段丘、胆沢段丘、水沢段丘に大別し、さらに胆沢段丘は上野原、横道、堀切、福原の4段丘に細分されている。しかし、平泉町から一関市にかけては丘陵地が東に張り出すため段丘の発達は悪く、火山碎屑物に覆われる段丘

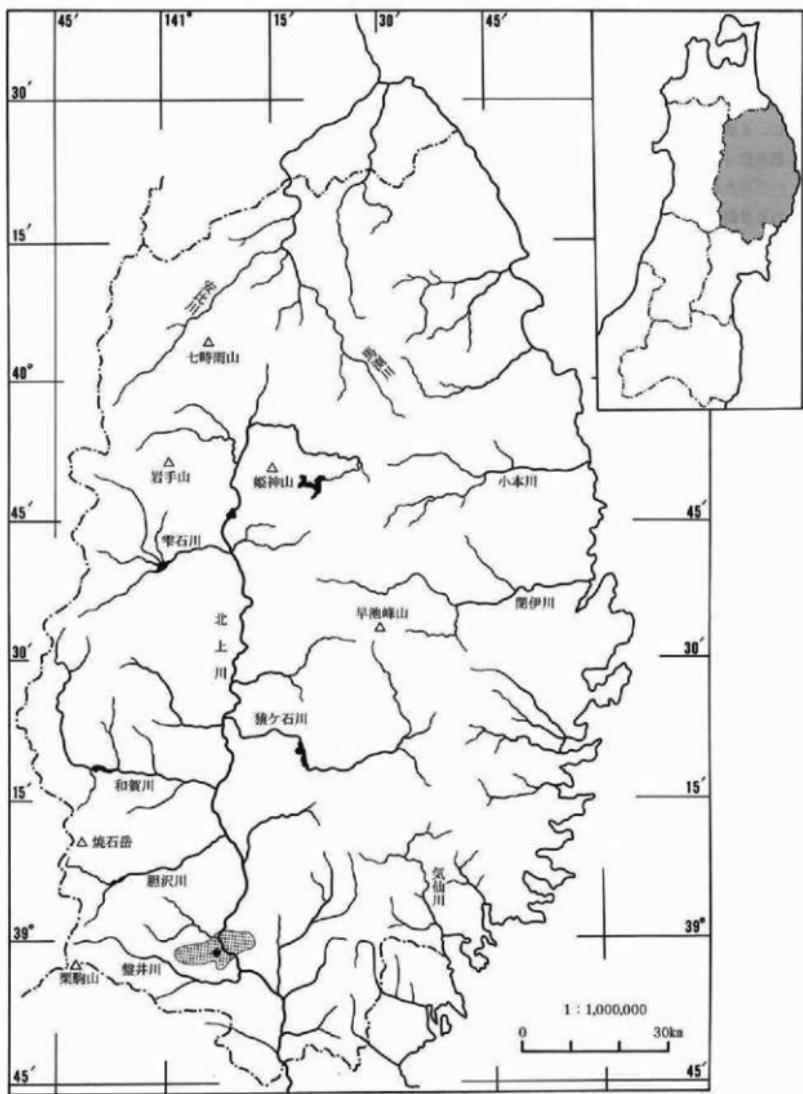


図1 岩手県図に見る遺跡の位置

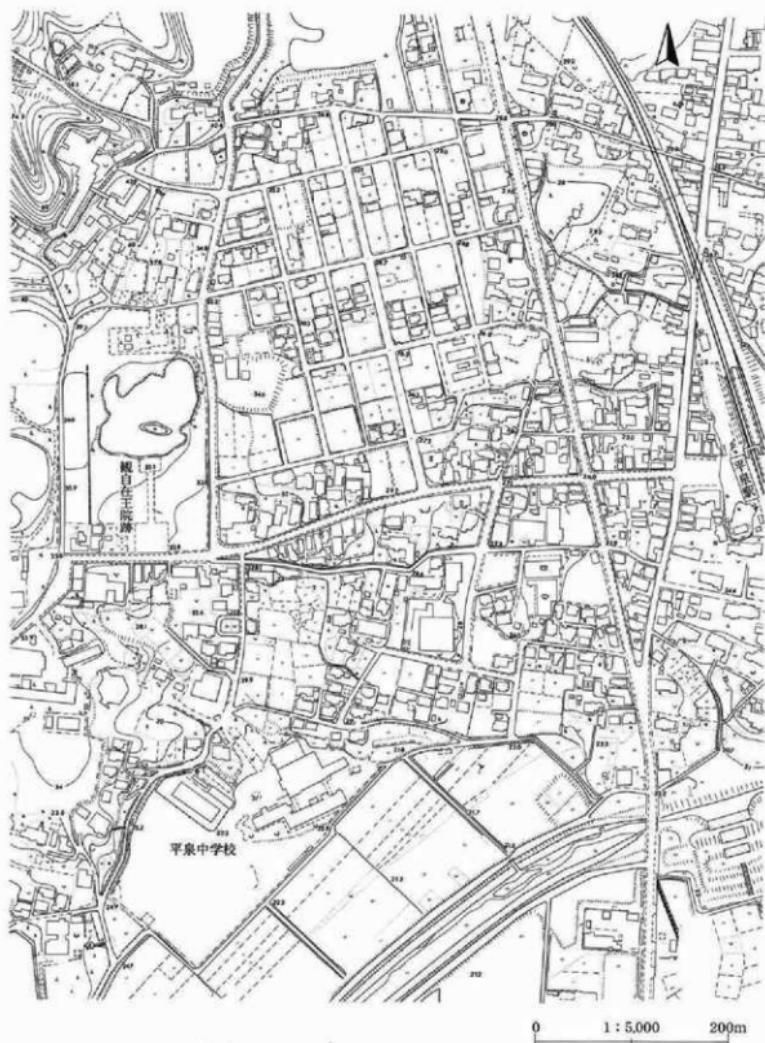


図2 遺跡周辺地形図

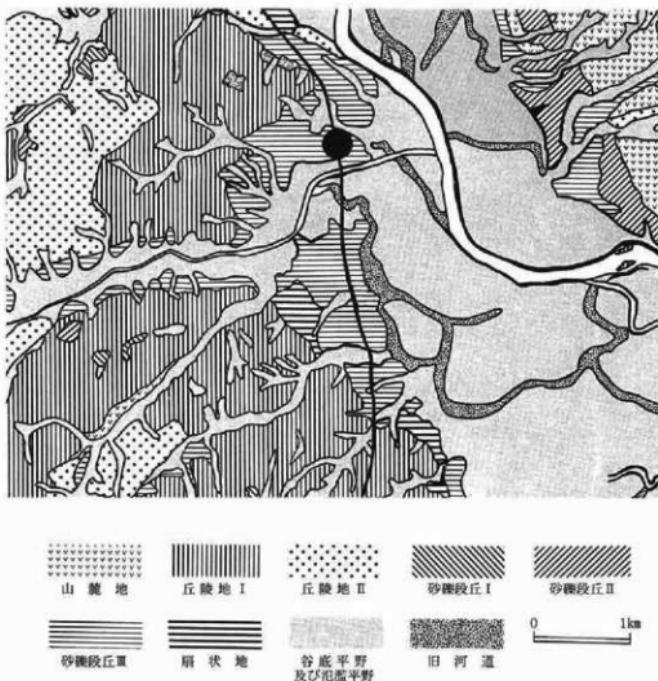


図3 遺跡周辺地形分類図

は少ない。特に北上川流域では先の水沢段丘に相当する面が僅かに観察されるだけで、両岸には氾濫原が広く分布している。(図3参照)

西行法師の歌枕となってる東稜山塊は、町内の最高地点である東稜山(595.7m)のほか音羽山(539m)、経塚山(519.1m)、駒形山(430m)等の定高性を持つ山体が集合している。古生代の粘板岩とこれを貫く中生代白亜紀の花崗岩によって構成され、特に主峰である東稜山は花崗岩主体の山体である。

志羅山遺跡は、北緯 $38^{\circ} 59' 06''$ 、東経 $141^{\circ} 07' 10''$ 付近、平泉町市街地の南部にあたり町役場をほぼ中心として南北約400m、東西約450mの範囲で、総面積は189,000m<sup>2</sup>に及ぶ。なお、国土地理院の1:50,000地形図では「一開」(NJ-54-14-15)の図幅に含まれる。西側丘陵部からの小規模な沢により解析を受けているが、巨視的に見れば先の水沢段丘上に立地する。表土下部の土層は粘性の強い低地土壤で、下部では砂質となるが調査区内では段丘構成礫層を確認できた部分はない。標高は24~32mで、緩やかな傾斜で南東方向に下がる地形である。現状は一部水田を残すが、大部分は宅地化されている。

なお、報告する調査区は東西に500mと長く、層序は一樣ではない。このため基本層序は、調査年次毎に記述している。

## 2. 周辺の遺跡（図4）

「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧（1999年4月）によれば、平泉町内には103カ所の遺跡が確認されている。旧石器時代に遡る遺跡の登録はないが、沢尻扇伏地における遺跡の分布状況から今後東西の丘陵部分から発見される可能性は高い。

縄文時代の遺跡の登録は少ないが、各遺跡からの遺物出土状況から町内のほぼ全域に分布するものと考えられる。しかし、調査された遺跡は少なく北上川東岸の新山権現社遺跡（1991）、中村I遺跡（1998）、北上川西岸の泉屋遺跡（1993・1999）だけである。新山権現社遺跡では、後期前葉期から中葉期の遺物が多量に出土し、該期の土器変遷を考察する上で指標となる資料が得られた。中村I遺跡では60m<sup>2</sup>の狭い面積から晩期前葉期～中葉期の遺物がコンテナ100箱以上も出土している。泉屋遺跡では後期末葉期から晩期初頭期の遺物が出土し、特に初頭期の人面付注口土器は特筆される。しかし、いずれの遺跡も遺物量に対して明確な遺構の検出は少ない。地内における該期遺跡の分布状況を概観すると、東岸部では背後の山地から続く丘陵線沿いに沿って多くの遺跡が存在が予想され、西岸で目立った遺構が検出されない原因としては、後世の遺跡（特に12世紀代）と複合することによるところが大きいものと考えられる。なお、弥生時代の遺構の検出例はなく遺物も極僅かであるが、縄文時代の遺跡同様本調査の遺跡が多いためであろう。

古墳時代及び奈良時代（8世紀代）の遺構・遺物は発見されていない。9世紀・10世紀になると柳之御所跡、佐野I遺跡、瀬原I遺跡、志羅山遺跡から竪穴住居跡が検出されている。しかし、隣接する胆江地区の遺跡で見られるような密集した人規模な集落跡はなく、単発的な検出状況である。なお、中尊寺境内の調査では、該期遺構の難解となる「十和田a陥下火山灰」が堆積する大溝が検出されており、住居跡の検出状況と共に律令体制化で当地が果たしていた役割を考える上で興味ある課題である。

初代藤原清衡が当地に居を構えてから約1世紀、二代基衡、三代秀衡治世を経て四代泰が源頼朝によって滅ぼされた1189年までの期間が当地が最も隆盛し、栄華を極めた「奥州藤原氏」の時代である。この藤原氏に関連する遺跡群は狭義に「平泉遺跡群」と呼ばれ、国指定史跡4箇所をはじめ古代末から中世初頭の「都市遺跡」としての性格を持つ。

平泉遺跡群の多くは北上川西岸、現在の市街地の範囲に重なる。これらの遺跡は、昭和5年の毛越寺金堂円障寺の調査を嚆矢とし、毛越寺・中尊寺・觀自在王院の寺院跡を中心に発掘調査が行われた。この結果、毛越寺庭園の整備、觀自在王院の史跡公園としての復元整備も併せて実施されている。昭和44年以降には、寺院以外の調査も行われているようになり、ことにも近年の各種開発工事に伴う緊急発掘調査により、「都市遺跡」の様相が明らかにされていった。特に一関遊水池事業に関連して昭和63年度から平成5年度の6年間、当埋蔵文化財センターと平泉町教育委員会によって調査が実施された柳之御所遺跡は、塙跡や園池跡を伴う大規模な建物跡、遺跡を囲む大溝跡等の遺構、大量に出土するかわらけ・国産陶器、豊富な輸入陶磁器や木器、木製品などの遺物が発見され、広く一般の注目を集めることになった。これにより平泉遺跡群の中でも重要な位置を占める遺跡であることが明らかになり、『吾妻鏡』に見られる「平泉館」である可能性も指摘されている。なお、柳之御所遺跡はその重要性から工事計画が変更され保存されることになり、平成9年国指定史跡の認定を受け、現在も県教育委員会による内容確認調査が継続されている。

中世初頭の当地は「平泉保」として文献に登場するが、実体は不明な部分が多い。調査された遺跡では、白山社遺跡第2次調査区と志羅山遺跡第35次調査区から13世紀代の遺構が検出されているだけである。これに続く14世紀代の遺構もなく、泉屋遺跡第2次調査区のみが確認されているにすぎない。なお、毛越寺・中尊寺の両寺院は都市荒廃の中で、維持し続けている。15～16世紀代の城館跡は北上川両岸の丘陵地

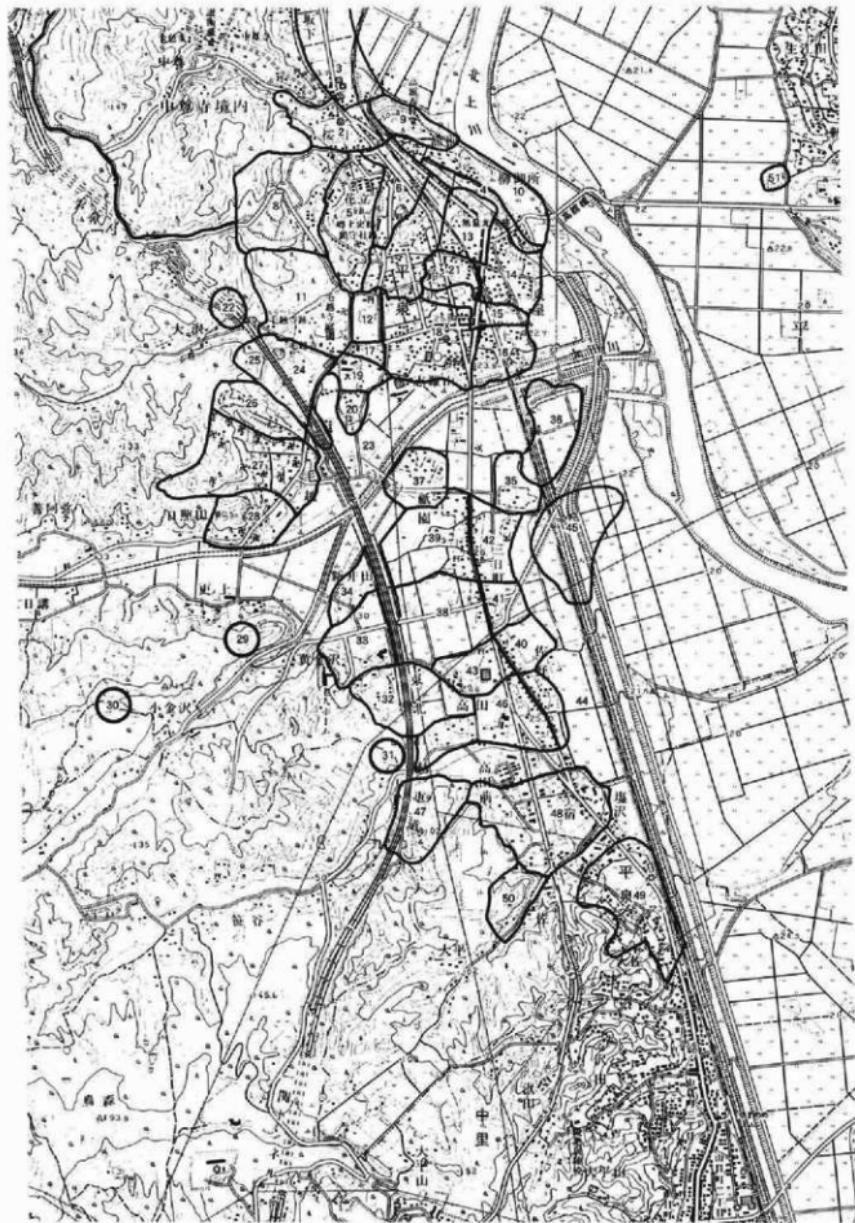


図4 周辺の遺跡分布図

## 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代/備考	No.	遺跡名	種別	時代/備考
1	中尊寺境内	寺社跡	平安 伽藍遺跡 かわらけ 陶磁器 国指定特別史跡	21	白山社遺跡	寺社跡	平安/中世 塚 建物跡 かわらけ
2	衣間遺跡	寺社跡	平安 かわらけ 南磁器	22	大沢遺跡	散布地 織文・縄文土器 石器	
3	坂下遺跡	寺社跡	平安 伽藍遺跡 かわらけ 陶磁器	23	毛越Ⅰ	城郭跡 平安	
4	室間ヶ瀬遺跡	散在地	平安 池跡 かわらけ 陶磁器	24	毛越Ⅱ	散在地 平安	
5	金剛山遺跡	経塚	平安 陶器跡	25	毛越Ⅲ	散在地 平安	
6	花解I遺跡	寺社跡	平安 城原跡 磐石 かわらけ 瓦 陶磁器	26	毛越IV	散在地 平安 かわらけ	
7	花解II遺跡	寺社跡	平安 墓 窯跡 建物跡 瓦 かわらけ 陶磁器	27	毛越V	散在地 平安 城郭跡 かわらけ	
8	鈴懸の森遺跡	経塚	平安 陶磁器	28	毛越VI	散在地 平安 かわらけ	
9	高野路跡	城郭跡	平安/繩文 上草 堀 墓 平場 本部 部屋 かわらけ	29	鳥居崎跡	城郭跡 中世/近世	
10	柳之御所遺跡	居船跡	平安 墓 道路跡 園地跡 陶器 建物跡 井戸跡 土坑 かわらけ 陶磁器 木製品 国指定史跡	30	比丘尼寺跡	寺社跡 平安 墓石	
11	毛越寺跡	寺社跡	平安/繩文 伽藍遺跡 陶器 井戸跡 園地跡 かわらけ 陶磁器 国指定特別史跡	31	黒沢船跡	城郭跡 中世/近世	
12	般若山王院跡	寺社跡	平安 伽藍遺跡 園地跡 かわらけ 陶磁器	32	片岡I遺跡	城郭跡 中世/近世 織文・縄文土器 石器	
13	無量光院跡	寺社跡	平安 伽藍遺跡 積型六構積 織田司遺跡 かわらけ 陶磁器 国指定特別史跡	33	片岡II遺跡	散在地	
14	伽羅之御所	居船跡	平安 上草 墓 かわらけ 陶磁器	34	新井田遺跡	散在地	
15	鈴沢の池遺跡	岸壁跡	平安 かわらけ	35	上野竹I遺跡	散在地	
16	泉屋遺跡	屋敷跡	平安/繩文 建物跡 上草 井戸跡 道路跡 遺物(山古志)	36	上野竹II遺跡	散在地	
17	倉町遺跡	屋敷跡	平安 かわらけ 陶磁器	37	横塚遺跡	散在地	
18	志羅山遺跡	屋敷跡	平安/小世 建物跡 井戸跡 道路跡 かわらけ 陶磁器 告吉遺跡	38	根園I遺跡	散在地 平安 かわらけ	
19	国術館跡	居船跡	平安/小世 土塁 墓 かわらけ 陶磁器	39	根園II遺跡	寺社跡 平安 かわらけ	
20	高野船遺跡	居船跡	平安 かわらけ 陶磁器	40	三日町I遺跡	集落跡 平安/中世/近世 車 仕石 陪葬 物語	
				41	二日町II遺跡	散在地 余良 土師器 須恵器	
				42	三日町III遺跡	寺社跡 平安	
				43	佐野川遺跡	散布地 余良 土師器	
				44	佐野遺跡	墓地跡 近世 氷塊 土坑 陶磁器	
				45	森永遺跡	墓地跡 近世 建物跡 陶磁器	
				46	高田遺跡	散在地 織文 石器	
				47	新堀遺跡	城郭跡 中世/近世 主郭 副郭 塙切	
				48	宿道跡	散在地	
				49	正法道跡	散布地	
				50	大仏遺跡	城郭跡 中世/近世 鮫 切 平塚	
				51	矢崎I遺跡	散布地 平安 かわらけ	

に分布しているが、調査例はない。なお、柳之御所跡からは明鉄(洪武通寶・永楽通寶)がまとまって出土した柱穴があり、平野部での該期遺跡の分布を考察する上で興味深い資料である。

志羅山遺跡は、昭和58年度の第1次調査を皮切りに、国道4号整備事業、太田川築堤時事業、毛越寺街路整備事業及び住宅建築に係わり平成11年12月現在で81次にわたる調査が実施され、東側に隣接する泉屋遺跡(平成11年度19次調査)とともに、都市構造を考察する上で貴重な資料を提供してきている。これまでの調査の主な成果としては、平成7年の第46次調査で検出された道路跡や大型建物等の遺構群、平成4年度第21次調査で検出された井戸跡出土完形の白磁水注、平成9年度の第66次調査での驚喜文象眼巻、第66次や平成10年度の第77次調査での神仏名や種字が書かれた筒塔婆等の出土遺物が挙げられる。

## <参考・引用文献>

- (1) 中川久夫他(1963b): 北上川中流域の第四系及び地形、北上川流域の第四紀地史(2)、地質学雑誌第69巻第811号。
- (2) " (1981): 第四系、『北上川流域地質図(二十分之一)』、長谷地質調査事務所。
- (3) 目加田義正他(1978): 北上三系開発地域 土地分類基本調査(一閑)、岩手県。
- (4) 木泽慎輔他(1988): 「古代の平泉地方」、『平泉町史』編証・論説編、平泉町。
- (5) 小野寺信吾(1997): 「平泉の地形・地質の概要」、『平泉町史』自然・民俗編、平泉町。
- (6) 八重樋忠郎(1997): 志羅山遺跡第52次発掘調査報告書、平泉町教育委員会。
- (7) 三浦健一・松本達彦(1994): 柳之御所跡、岩手県文化振興事業団第228集、(財)岩手県文化振興事業団。
- (8) 羽柴直人(1997): 泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団第247集、(財)岩手県文化振興事業団。
- (9) 岩手県立埋蔵文化財センター(1995): 発掘された北の都、「柳之御所遺跡発掘調査報告書」、図録、岩手県。
- (10) 岩手県教育委員会(1999): 岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧、岩手県。

### III. 調査の方法と室内整理

#### 1. 調査の方法

##### (1)調査区の区割りと遺構名(図5)

今回報告する調査区は、県道毛越寺・厳美線の両側約500m、国道4号の両側約100mで、調査区の幅は4m前後の部分が多く、調査区域全体を包括するグリッドの設定はできなかった。このため遺構の平面実測における軸線の設定は平面直角座標系(X-Y系)に合わせ共通にしたが、区割り及び区名については調査年次毎に便宜的に行っている。年次毎の区名及び基点とした座標値は各調査年次毎に後述する。

検出された遺構は、種類別に調査区名と通し番号を付して3区1号土坑、4区3号溝跡…と呼称した。

なお、欠番となっているものについては調査の進行、または整理作業の過程で他の種別に変更したもの、遺構としての認定から除外したものである。前者の場合は一部旧遺構名も併せて記載している。

##### (2)粗掘りと遺構検出

調査区のほとんどが宅地や道路であるため、この舗装部及び盛り土の除去のため粗掘りには重機(パワーショベル)を使用し、この後人力によって遺構の検出を行った。なお、旧河道等堆積土が厚い部分では、作業の安全を考慮し、十和田a降下火山灰層までは除去したが、この下部についての調査は行っていない。

##### (3)遺構の精査と実測・遺物の取り上げ

検出された遺構は、豊穴住居跡は4分法、井戸跡を含む土坑類は2分法を原則として精査を行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。なお、記録として必要な図面及び写真撮影は、精査の各段階において適宜これを行った。

遺構の平面実測にあたっては、トータル・ステーションによって基準点を設定する、簡易的な遺り方測量を原則としたが、一部道路跡(側溝を含む)や調査範囲図については平板測量で平面図を作成した。実測図の縮尺は1/20を基本としたが、豊穴住居跡のカマド等の施設や埋納遺構は1/10、一部道路跡の平面図は1/40で実測図を作成した。

遺構内からの出土遺物は、埋土の層位毎に取り上げたものもあるが、多くは上部・中部・下部に分けて取り上げた。床面(底面)及び床面直上の遺物の遺物は、必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面制作後に取り上げた。遺構外や包含層からの出土遺物については、調査区名と層位を記して取り上げている。

##### (4)写真撮影

野外での写真撮影は、6×7cm判カメラ(モノクロ)をメインカメラとし、35mm判カメラ2台(モノクロ・カラー・リバーサル)を補助カメラ、この他にポラロイドカメラをメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。なお、調査区が比較的広い第80次調査では、調査がある程度進行した段階で高所作業車(6×7cm:モノクロ、35mm:カラー・リバーサル)及び小型飛行機(4×5in:モノクロ、6×7cm:カラー、35mm:カラー・リバーサル)による空中写真的撮影を実施している。

##### (5)広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙普及活動の一環として、第47次調査では平成7年10月28日、第80次調査では平成11年6月19日に現地説明会を開催した。また、個人や団体の見学要請、新聞・テレビ等マスコミからの取材要請があった場合は、可能な限りこれに応じ、広報活動の一部とした。

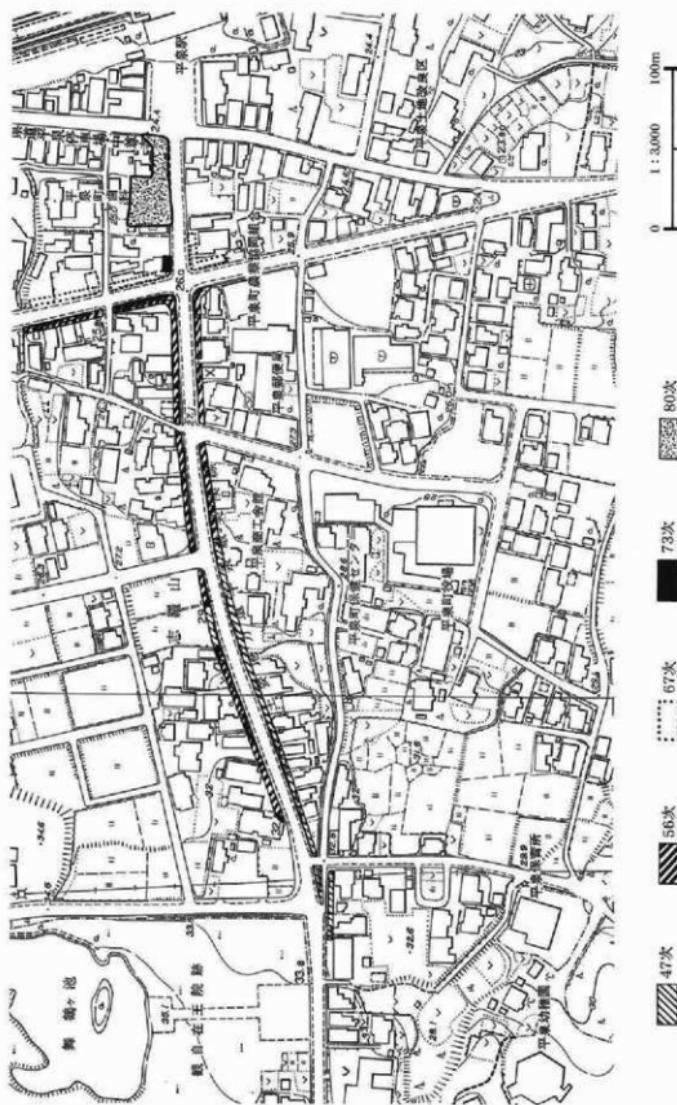


図5 調査範囲図

## 2. 室内整理

各年次の室内整理期間は「例書」に示した。作業手順は各年次ともおおむね次のとおりである。まず、遺構図面の点検と補正及びトレス、遺物の注記、接合・復元を優先させて行った。次に什分け・登録、遺物の写真撮影・拓本・実測を併行して進めた。この後実測図の点検とトレスを行い、図版・写真図版作成を順に行った。遺構・遺物における個々の整理方法及び図版作成は下記を原則としているが、一部に変更もあり、詳細は各年次に記載している。

### (1) 遺構

各遺構の掲載縮尺は以下を原則としたが、規模によって変更しているものもあり各図面にはスケール・縮尺率を付した。区域図…1/100～1/80、遺構配置図…1/200、竪穴住居跡…1/50、掘立柱建物跡…1/50・1/40、井戸跡・土坑…1/50・1/40、竪穴住居跡のカマド・埋納遺構…1/30。なお、写真図版の縮尺は任意である。

竪穴住居跡及び建物跡の軸方向は、座標北からの角度で、平面図における北印も座標北を示す(第80次調査原点[X = -112,600, Y = 24,800]における真北方向角は $0^{\circ} 10' 48''$ 西偏する)。竪穴住居跡の床面積は、壁下端をデジタル式のプラニメーター(エリアカーブメーター)で3回計測し、この平均値を採用した。

### (2) 遺物

土器の実測図は原則として反転実測が可能なものの(口縁部・底部が1/4以上残存)に限ったが、一部は平面実測して掲載した。なお、陶磁器類の小破片は推定実測で掲載した。掲載遺物の縮尺率は下記を原則としたが、変更の場合はスケール・縮尺率を付した。

上器・陶磁器の実測図及び拓本…1/3(小破片や小型ものは1/2)、木器・木製品…1/3(大型のものは1/4・1/6)、金属器…1/2・1/1、石器・石製品…1/1・1/2・2/3、土製品…1/3。遺物写真の縮尺については、ほぼ実測図に準じた。

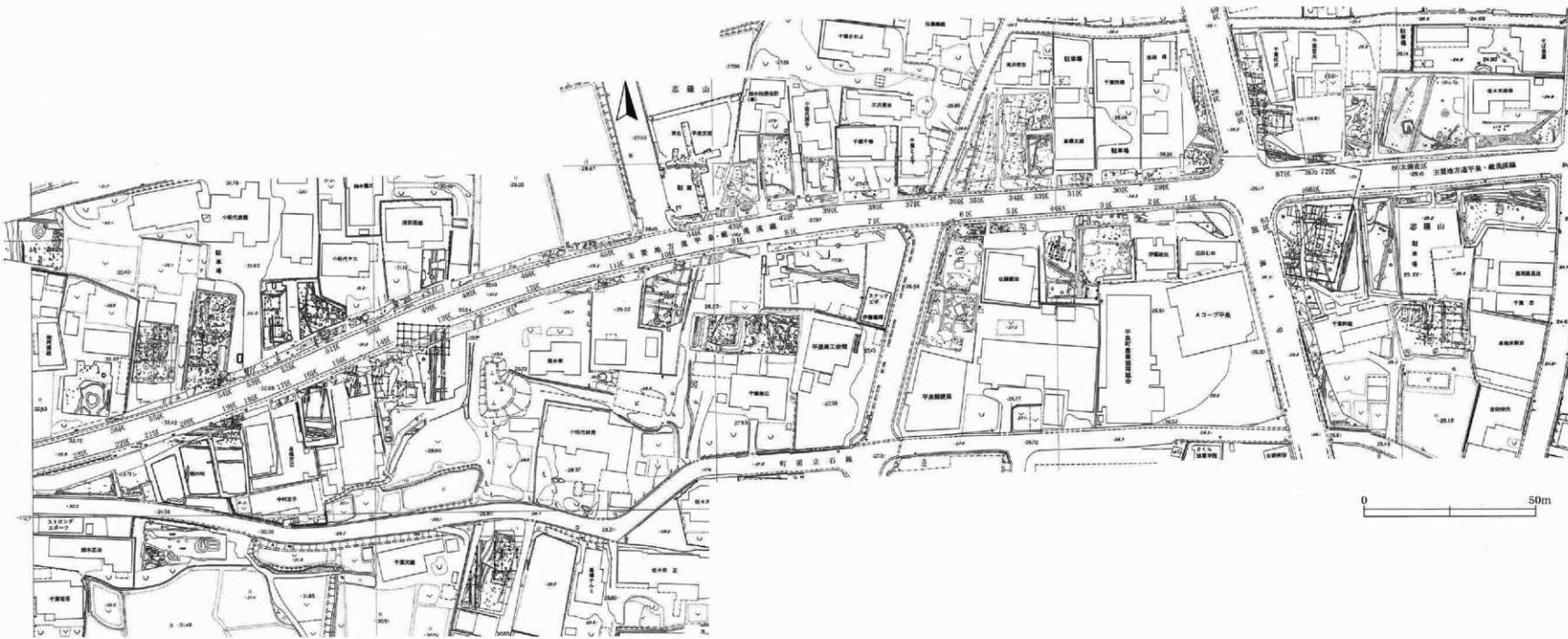


図6 遺構配置図

## **志羅山遺跡第47次調查**



## IV. 第47次調査の報告

### 1. 調査・整理の方法

#### (1) 野外調査について

##### ①調査区の区割り

本次では、調平泉駅と毛越寺を結ぶ県道平泉・巣美線の、親自在下院跡の南東隅付近から東に約250mの地点までの道路南側と一部北側を含む981mを調査した。幅が3m前後と細長い調査区であったことと、県道に沿って家屋が連なり、通行の安全や道路と家屋の通行を遮断しないように調査は一軒ごとに行わなければならなかつた。そのため調査区全体を包括するようなグリットは設定はしていない。調査は、用地の収用番号ごとに区割りして行った。本次調査は10区から27区、46区を調査した。

##### ②遺構名

遺構名は調査区ごとに10区1号土坑、11区1号土坑というように付した。なお、柱穴状土坑については10区P1、P2・・・のように調査区ごとに略号Pを番号の前に付した。

##### ③遺構の平面実測

軸線の設定は平面直角座標系（第X系）を使用し、調査区内に基準点を設定した。調査範囲の都合上、補点を数多く打ち、利用した。各調査区の座標値は遺構配置図の中に記した。

#### (2) 室内整理について

##### ①建物の軸方向について

調査区が狭小なことから、建物の梁方向、桁方向が不明なことが多い。従って、軸方向の記載にはおおむね南北方向の軸線が公共座標第X系の北から東または西へ何度傾いているかを記載している。

##### ②溝の方向について

検出された部分の両端の幅中央を結んだ線が北からあるいは東西から何度傾いているかを記載した。端端に曲がっているものについては記載していない。

## 2. 基本層序

基本層序は調査区により、多少の違いがある。おおむね西側は地山面まで削平されているのではないかと思われる部分が多く、東よりの調査区では地山上に包含層が形成されている部分がある。

### I 層 盛り土、水田跡など後世の改変によって造成された層。層厚50~140cm

以下のとおり大まかに2層に分けられるが、特にa層に関してはさらに細分される。それぞれの注記は図版中に示した。

a層 砂利、客土層 炭がらや黄褐色粘土、アスファルト等を含む。

b層 水田 灰~黒褐色土 粘性、締まりあり 鋼鉄屑を下位に有する場合がある。

### II 層 遺物包含層 暗褐色土 粘性あり 締まり弱い 炭化物を含む

### III 層 黄褐色粘土層（地山）層厚不明 調査区により還元色（青灰色）で検出される。

なお、調査時において市街地であることと碎石による盛土が多かったため、人力による試掘坑をあけることができなかつたこと、I層が多様であったことにより、調査区ごとに算用数字で、上層から番号をつけ、調査終了時に、調査区全体の層を把握した上で、基本層序を設定した。断面図には算用数字のままの層序をのせ注記に基本層序との層にあたるか示した。

### 3. 検出された遺構と遺物

#### 10区

本区は47次調査の最東端にあたり、JR平泉駅から西へ約320mの地点である。本区から検出された遺構は掘立柱建物跡1棟、溝3条、柱列1条、土坑4基、柱穴状土坑17基である。本区の土層は現代の水田上に盛り土がなされており、Ⅲ層も上面が削平されている可能性がある。すべての遺構の検出面はⅢ層上面である。遺構内から砥石、かわらけが、遺構外から陶器片、瓦片が出土した。

##### 1号掘立柱建物跡（第3図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞一部のみの検出である。本区中央部から検出された。調査区外に伸びているために、全体像は明らかではないが、検出されている部分は1間×2間分である。柱穴は4基である。軸線方向はN-17°-Eである。

＜平面形・規模＞柱間を測ると南側柱列は2.05m、2.2m、東側柱列は2.0mである。柱穴の径は26~34cmで、深さは12~53cmである。

＜覆土・堆積状況＞P5からは残柱が出土し、P22、P18からは6×8cmの礫が出土した。P18には柱痕も認められる。埋土は灰黄褐色土が主である。

＜出土遺物＞P5から出土した残柱はクリと同定されている。また、P18からかわらけの細片が出土している。

＜時期＞出土遺物から12世紀に属する可能性がある。

##### 1号溝（第2図、写真図版3・4）

＜位置・検出状況＞本区西側から検出された短い溝である。南側は1号土坑と、北側は1号柱列のP12と重複しており、いずれも本溝の方が古い。P12より北側には延長部分は検出されなかった。非常に浅いため、削平を受けた可能性がある。方向はN-1.5°-Eである。

＜平面形・規模＞規模は全長90cm、幅14cm、深さ7cmである。

＜壁・底面＞底部はやや内湾しており、壁は若干外傾して立ち上がる。

＜覆土・堆積状況＞上層は黒褐色土で、下層に灰白色土が堆積している。

＜出土遺物＞かわらけの細片が埋土から出土している。

＜時期＞出土遺物と、かわらけを出土している1号土坑に切られていることから12世紀に属する可能性が高い。

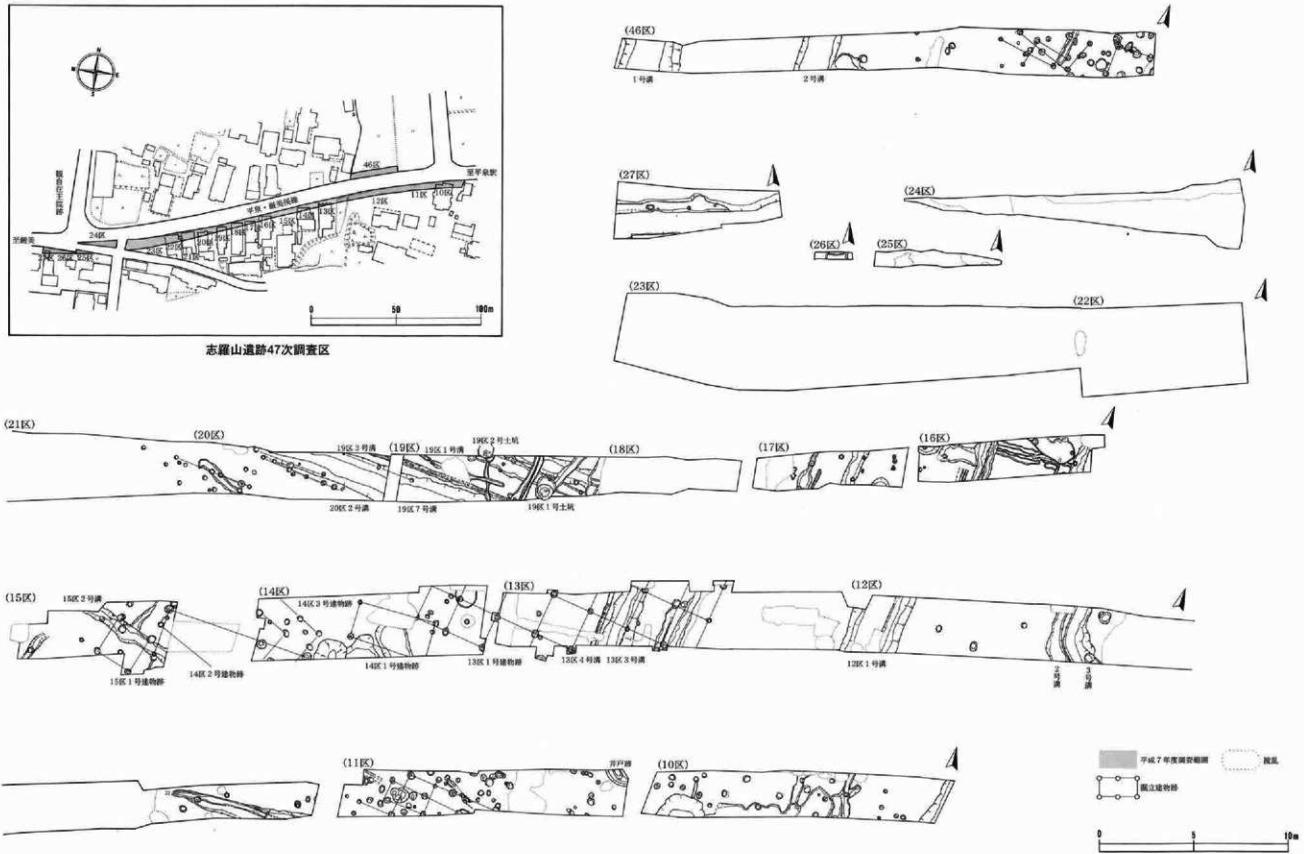
##### 2号溝（第2図、写真図版3・4）

＜位置・検出状況＞本区中央部から検出された。P4と重複しており、本溝の方が古い。南側は2号土坑と重複しており、本遺構が古い。北側は一部擾乱を受けているが調査区外に伸びると推測される。方向はN-0°-Wである。

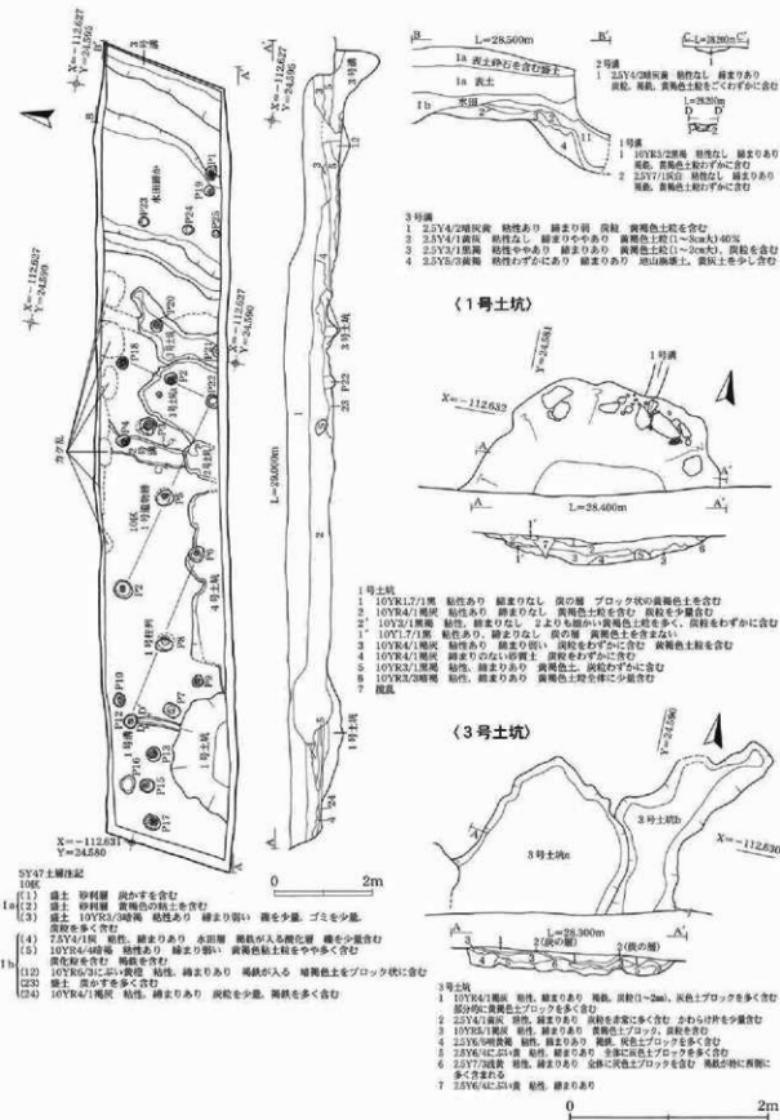
＜平面形・規模＞全長1.7m、深さ6cm、幅30~48cmである。

＜壁・底面＞底部は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。

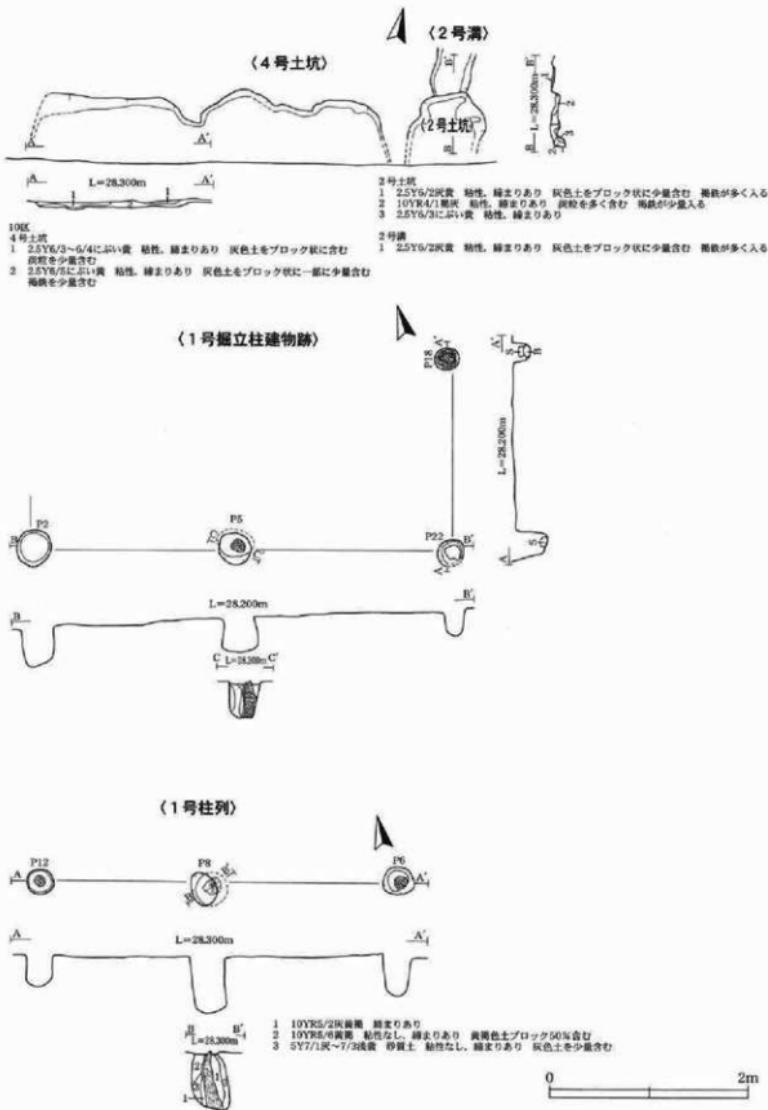
＜覆土・堆積状況＞埋土は暗灰黄色土の单層である。



第1図 47次調査 遺構配置図



第2図 10区遺構平面図・断面図(1)



第3図 10区遺構平面図・断面図 (2)

<出土遺物>かわらけの細片が出土したが、図化できるような遺物は出土していない。

<時期>埋土や出土遺物、重複関係から12世紀に属する可能性が高い。

### 3号溝（第2図、写真図版3・4）

<位置・検出状況>本区東端から検出された。現在の地境に沿う溝で、本区検出分は西側の肩の部分である。

南北はいずれも調査区外に伸びており、長さ、幅などの規模は不明である。方向はN-21.7°-Eである。

<壁・底面>断面を観察すると、壁はゆるやかにやや内湾気味に立ち上がる。

<覆土・堆積状況>4層に分層され、上位は粘性に富み黄褐色土粒を含む暗灰黄色土、下位はⅢ層の崩壊土が主体である。

<出土遺物>上層より陶磁器片が出土したが、小片で図化に至らなかった。

<時期>埋土は他の12世紀と思われる遺構に比べて締まりがなく、暗い土色を呈している。時期を確定できるような遺物がないので、不明な点が多いが、12世紀よりも新しい可能性がある。

### 1号柱列（第3図、写真図版3）

<位置・検出状況>本区西側から検出された。建物跡の一部である可能性もあるが、調査区が狭いため、明らかにできなかった。東西方向の柱穴3基からなる柱列である。方向はN-79.5°-Wで、1号掘立柱建物跡の東西方向とほぼ同じである。

<平面形・規模>柱間は西から1.8m、1.9mで、全長3.9mである。柱の径は28~34cm、深さは30~66cmである。

<覆土・堆積状況>P12、P6は柱跡が認められる。また、P8からは残柱が検出された。埋土は黄褐色土ブロック、灰色土を含む黄褐色、浅黄色土である。

<出土遺物>P8から検出された残柱はクリと同定されている。また、すべての柱穴からかわらけの細片が出土している。

<時期>4号土坑をP6が切っているので12世紀以降と考えられるが、詳しい年代は不明である。

### 1号土坑（第2図、写真図版4）

<位置・検出状況>調査区西側から検出された。1号溝と重複し、本土坑の方が古い。約半分程が、南側の調査区外に伸びている。平泉町教育委員会が行った本区の南側の宅地部分の調査（第23次調査）では、本土坑の南半分が検出されている。

<平面形・規模>検出部分の径は2.65mである。平面形はやや凹凸があるものの円形を基調としている。

<壁・底面>底部はやや内湾しながらも平坦で、壁はごくゆるやかに立ち上がる。壁面には20~30cmの扁平な石が据えられ、小石もその間に入っている。

<覆土・堆積状況>6層に大別され、炭を含んだ褐灰色土が主体である。最上層には炭の層が堆積している。

<出土遺物>（第23図、写真図版29）1の砥石と2の特殊なかわらけ、3の鉄滓、4の白磁片が出土している。その他にかわらけの細片が多く出土している。

<時期>かわらけと12世紀の所産と思われる白磁片が出土していることから、12世紀に属する可能性が高い。

### 2号土坑（第3図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞調査区中央の南よりから検出された。南側は調査区外に伸びている。本土坑は東側に3号上坑、北側の2号溝を切っている。残存部分を見ると4号土坑とも切り合うと思われるが、町教育委員会の調査区と接するところで削平されており、明らかでない。

＜平面形・規模＞平面形は不整形である。規模は残存部分で径77cm、深さ3～10cmである。

＜壁・底面＞底面にかなりの凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

＜覆土＞灰色土、炭粒、褐鉄を含む灰黄色土が主体で、固く締まり、ブロック状に堆積している。

以上のことから本土坑は穴を穿って使用する目的の土坑とは限らず、整地層などの可能性も考えられる。

＜出土遺物＞かわらけの細片が出土しているが、図化に至らなかった。

＜時期＞かわらけを出土した3号土坑と覆土がよく似ていることから12世紀に属する可能性が高い。

### 3号土坑（第2図、写真図版3・4）

＜位置・検出状況＞調査区中央から検出された。

＜平面形・規模＞不整形な平面の形状から2基の土坑と思われたが、断面で観察する限りでは1基ととえられた。

＜壁・底面＞底面はやや凹凸があり壁は外形、あるいは内済気味に立ち上がる。規模は確認できる部分の径で2.2～2.03mである。

＜覆土＞固く締まり、灰色土ブロックを含んだ黄色がかった土が主体で、2層目は炭粒を非常に多く含む。

以上のことから本土坑は2号土坑と同様に穴を穿って使用する目的の土坑とは限らず、整地層などの可能性も考えられる。

＜出土遺物＞（第23図、写真図版29）5、6、7は覆土から出土したかわらけ、8は鉄片である。2層からはかわらけの破片も出土している。また、覆土中層から9～13の壁土が出土している。

＜時期＞出土遺物から12世紀に属すると考えられる。

### 4号土坑（第3図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞調査区西側から検出された。2号土坑と1号土坑にはさまれて存在し、南側は同様に調査区外に伸びている。1号上坑と切り合っていた可能性もあるが、本土坑がごく浅いため、新旧関係は不明である。

＜平面形・規模＞また、全体の形状も深さがないため、立ち上がりを確認できない部分が多く、不明である。

2号土坑、3号土坑と同様に不正形と思われる。

＜壁・底面＞底面はやや凹凸がある。

＜覆土＞灰色土をブロック状に含むにぶい黄色土である。

＜出土遺物＞かわらけの細片が出土したが、図化に至らなかった。

＜時期＞本土坑は2号土坑、3号土坑と埋土が類似しており、深さなどは3号土坑よりは浅いものの、類似する遺構と考えられる。そのことから、12世紀に属する可能性が高い。

### 柱穴状土坑（第2図、写真図版3）

＜位置・検出状況＞本区東端を除き、全体から17基検出された。建物の一部と見られるものが多いが、判

定できなかった。

＜平面形・規模＞円形を呈し、径が16～38cm、深さ15～75cmである。

＜覆土＞柱痕が見られるものが多い。P3からは残柱が出土しており、クリと同定された。

＜遺物＞（第23図、写真図版29）P7からは15の国産陶器破片、P2、P3、P4、P7、P10、P13からかわらけの細片が出土した。

＜時期＞何時期かに別れる可能性があるが、12世紀のものと見られる国産陶器、かわらけ細片が出土しているものもあることから、一部は12世紀に属すると考えられる。

#### 10区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	30	34	柱痕		11	18	18	柱痕		19	24	18	柱痕	
3	34	74	柱痕	かわらけ細片	13	32	32	柱痕	かわらけ細片	20	24	16	柱痕	
4	28	69	柱痕	かわらけ細片	14					21	24	15		
7	40	40	柱痕	かわらけ細片	15	14	14	柱痕		23	24	18		
9	21	21	柱痕		16	16	16			24	24	15		
10	28	28	柱痕	かわらけ細片	17	17	17	柱痕		25	16	17		

#### 遺構外出土遺物（第23図、写真図版29）

本区北寄りの1層下位から14の陶器、東側の浅い段差から16の瓦、そのほかに遺構検出面の全面からかわらけの細片が出土している。

#### 11区

本区は47次調査の東よりに位置し、JR平泉駅より西へ350mである。調査は調査区南側の宅地部分の侵入路を確保するため、東半と西半に分割して行い、さらに北西隅の部分を両者の調査終了後抜取した。三者の境部分では検出残しがないよう注意を払ったがなお、万全ではないかもしれない。検出された遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝3条、井戸跡1基、柱穴土坑45基である。本区においてもⅢ層まで水田でかなり削平され、現表土は採石を多く含む盛り土である。すべての遺構の検出面はⅢ層上面である。本区中央部は電柱埋設のため深く攪乱を受けている。

#### 1号掘立柱建物跡（第5図、写真図版5）

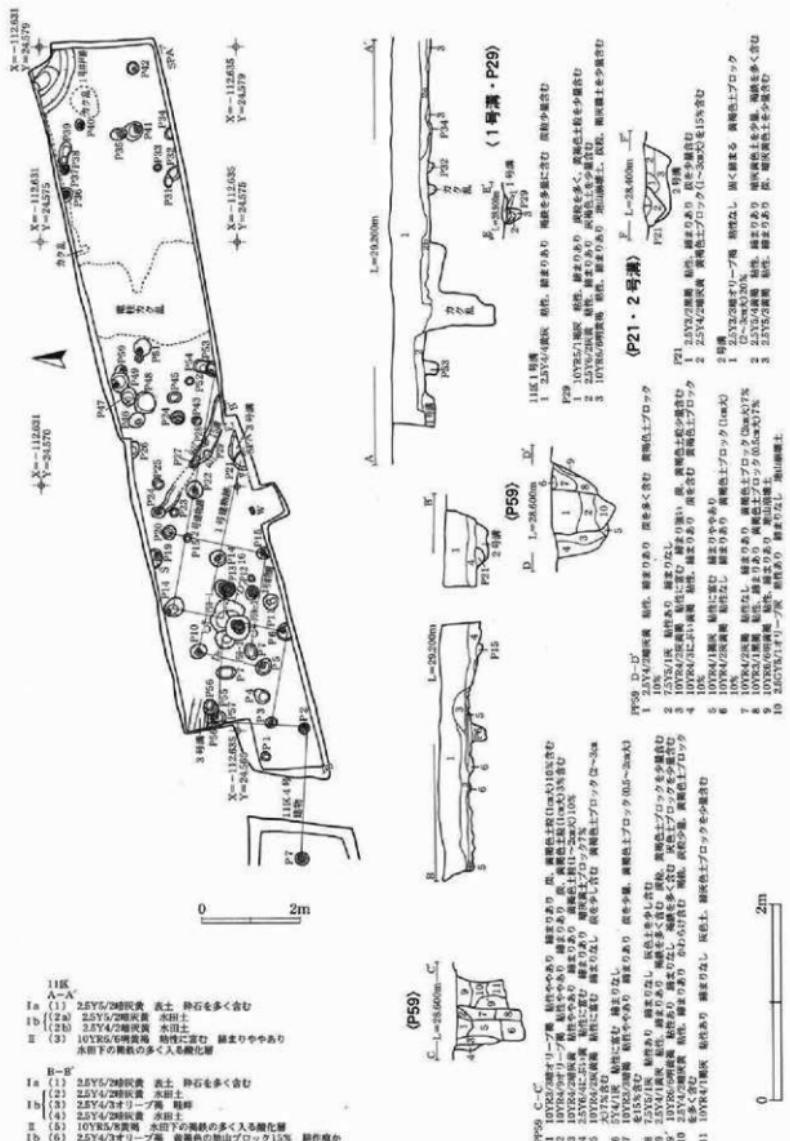
＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。建物のほとんどは調査区外に伸びている。

＜平面形・規模＞1間×2間分が検出された。柱間は梁方向と思われる西側柱が1.35m、桁方向と思われる北側の柱列が西から2.0m、2.1mである。東西の軸方向はN-55°-Wを示す。柱穴は4基検出され、平面形は円形を基準としている。径は32～40cm、深さは13～25cmである。

＜覆土＞P21を除いて柱痕が認められる。柱部分は粘性に富む灰黄褐色～灰色土で、木質が残存している。それ以外は黄褐色土や黒褐色土のブロックを含む埋め戻された土である。

＜出土遺物＞P5、P10からかわらけ細片が出土した。

＜時期＞出土遺物と、埋土の状況から12世紀の可能性も考えられる。



#### 第4図 11区構造平面図・断面図(1)

## 2号掘立柱建物跡（第6図、写真図版6・7）

＜位置・検出状況＞本区西寄りに位置する。1間×3間分が検出されているが、大部分は調査区外に伸びている。柱穴は5基検出された。

＜平面形・規模＞柱間は梁方向が2.35m、桁方向が西から1.9m、2.5m、2.5mである。桁方向はN-76.5°-Eを示す。柱穴の平面形は円形である。径は22~44cmで、最も西側のP3が他に比して小さい。深さもP3が19cmと浅いが、他は25~37cmを測る。これらのことからP3は底部分の柱である可能性がある。

＜覆土＞P53を除き柱痕が検出されている。柱部分は粘性に富み、一部木質が残存する黄灰土である。柱痕以外は黄褐色土ブロックを含む埋め戻された土である。

＜出土遺物＞（写真図版29）P14から19の器種、用途不明の鉄製品が出土しているほか、P6、P14、P22からかわらけの細片が出土した。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀の可能性がある。

## 3号掘立柱建物跡（第5図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。大部分は調査区外に伸びており、1間×1間分しか検出されていないため、建物跡となり得るか不明な点も多いが、可能性は捨て切ないので、ここに載せた。

＜平面形・規模＞柱間は東西方向が2.1m、南北方向が2.0mである。南北の柱方向はN-20°-Eを示す。柱穴は3基検出され、平面形は円形及び長円形である。深さは26~34cmである。

＜覆土＞P15、P24は柱痕が認められる。

＜出土遺物＞P7から産地不明の中世に属すると考えられる陶器片のほか、かわらけの細片が出土した。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀の可能性も考えられる。

## 4号掘立柱建物跡（第5図、写真図版5）

＜位置・検出状況＞本区西側から、12区にまたがって位置する。1間×2間分が検出されたが、大部分は調査区外に伸びている。

＜平面形・規模＞柱間は南北方向が1.8m、東西方向が西から2.7m、2.7mである。南北の柱方向は、N-0°-Eを示す。柱穴は4基検出され、平面形は円形を基調とする。径は22~30cm、深さは13~56cmである。

＜覆土＞すべてに、柱痕が認められる。P57の柱材はクリと同定されている。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明であるが、覆土と出土遺物の状況から12世紀の可能性も考えられる。

## 1号溝跡（第4図、写真図版5・6）

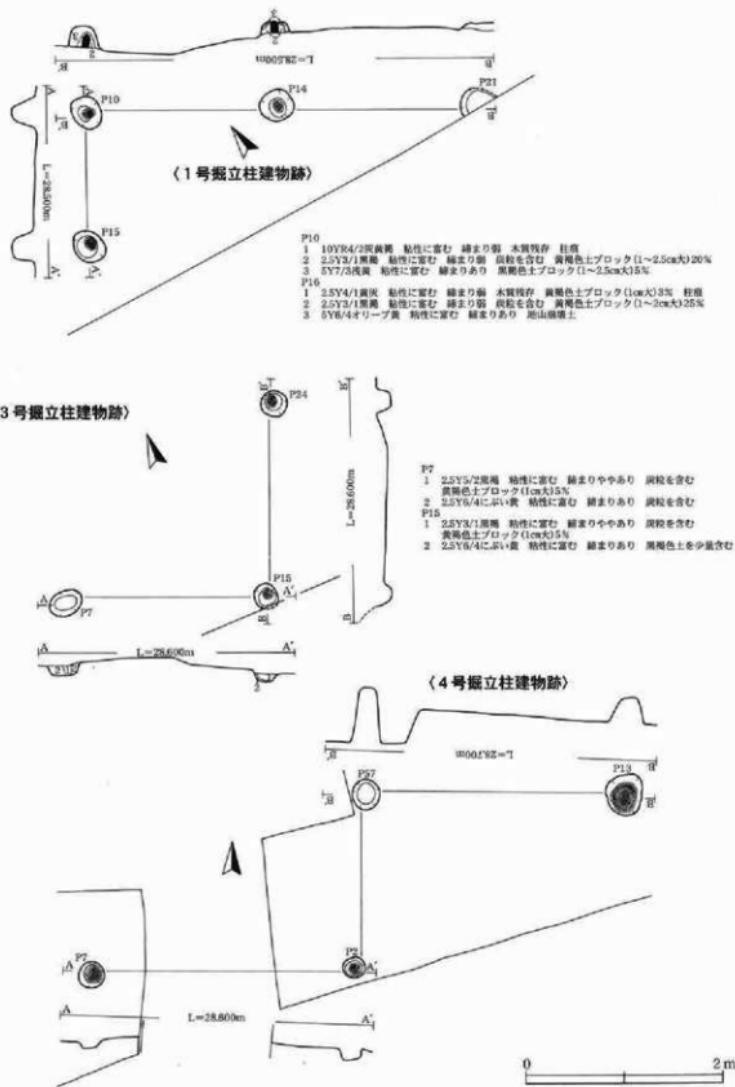
＜位置・検出状況＞本区中央に位置する。南側は調査区外に伸びる。北側はP24に切られ、以北は検出されなかった。また削平を受けており、一部が途切れている。P29、P27、P35と重複し、本溝の方が新しい。方向はN-61.5°-Wである。

＜平面形・規模＞溝の全長は2.6m、幅は20~28cm、深さは5cm程度である。

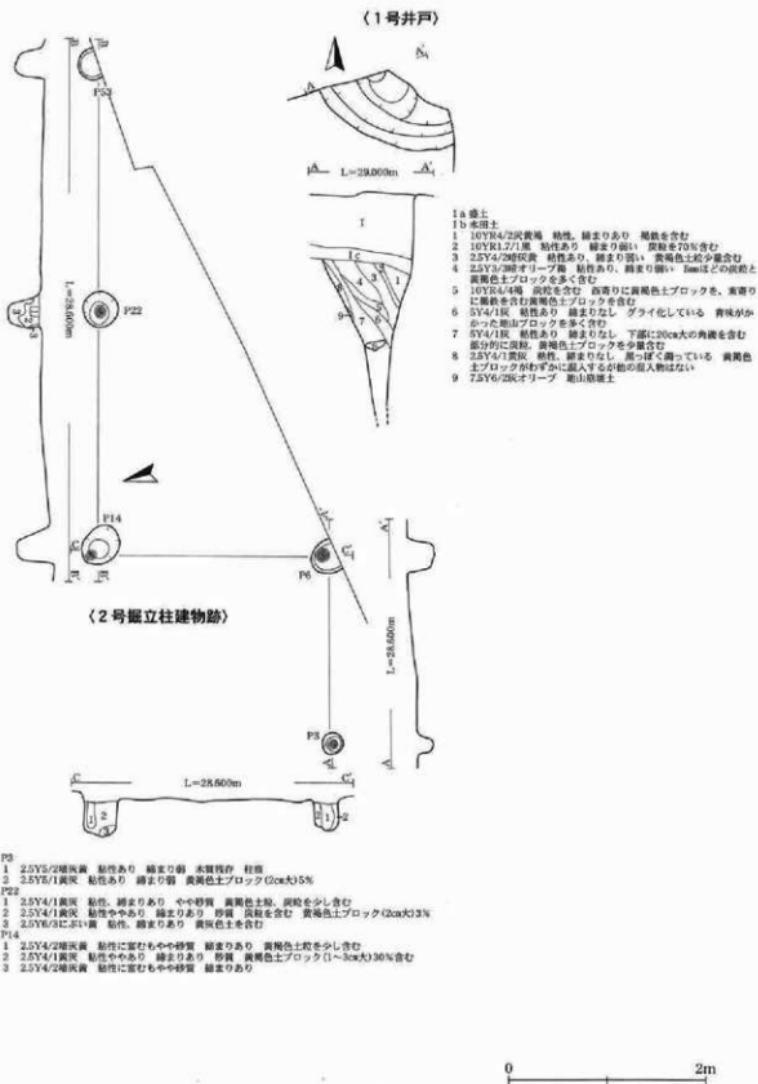
＜壁・底面＞底は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。

＜覆土＞褐鉄を多量に含む黄灰色土の単層である。

＜出土遺物＞ない。



第5図 11区造構平面図・断面図(2)



第6図 11区造構平面図・断面図 (3)

<時期>不明であるが、覆土の状況から12世紀の可能性も考えられる。

#### 2号溝跡（第4図、写真図版5）

<位置・検出状況>本区中央南端に位置する。ほとんどが南側の調査区外に伸びており、全容は不明である。

P21と重複しており、本溝の方が古い。また、本区北西隅に検出された3号溝とつながる可能性もある。

<平面形・規模>長さ、幅とも不明であるが、深さは検出部分で25cmを測る。

<覆土>3層に細分され、上面に褐鉄を多く含む黄褐色土が主体である。

<出土遺物>ない。

<時期>不明であるが、覆土の状況から12世紀の可能性も考えられる。

#### 3号溝（第4図、写真図版6）

<位置・検出状況>本区北西隅に位置する。この部分は水田の削平を他に比して受けでおらず、Ⅲ層上面の標高がやや高いことから、本溝が検出されたものと考えられる。P55、P56、P58と重複しており、本溝の方が古い。西側は調査区外に伸び、東側部分は削平されて不明であるが、延長は2号溝とつながる可能性がある。方向はN-77.2° -Wである。

<平面形・規模>検出部分の長さは80cm、幅38cm、深さ8cmである。

<覆土>暗オリーブ褐色～黄褐色である。

<出土遺物>かわらけ断片が出土している。

<時期>不明であるが、覆土の状況から、12世紀に属する可能性がある。

#### 1号井戸跡（第6図、写真図版7）

<位置・検出状況>本区北東隅に位置する。井戸の一部分のみの検出であり、大部分は調査区外に伸びている。検出部分が非常に矮小であるため、底部まで掘りあげることができなかつた。

<平面形・規模>規模は不明で、深さは1.5m以上である。

<壁・底面>壁は直立気味に急角度で立ち上がる。

<覆土>埋土は掘りあげた部分だけで、9層に細分され、炭粒を含む灰色土が主体である。埋土の上層は炭粒が多く含まれる。

<出土遺物>ウリ科の植物の種も少量ではあるが出土した。かわらけの細片も出土している。

<時期>出土遺物が少ないため、不明である。

#### 柱穴状土坑（第4図、写真図版5・6・7）

<位置・検出状況>43箇所検出された。東半の中央にまばらであり、そのほかは全体に分布している。建物を構成する柱穴と考えられるが、調査区が矮少なことなどから不明である。P59-1、-2、-3、-4は切り合っており、-3が最も新しく、次いで-2である。

<平面形・規模>いずれも円形を基調としている。径は18~43cm、深さは11~80cmである。前述のP59は径が40cm前後、深さ48~70cmで、他に比して規模が大きい。

<覆土>P59は-3のみが柱痕跡が認められる。暗褐色土や黄褐色土、炭を含んだ黄色みの強い土が主体である。柱痕跡を残す柱穴が多い。P47から出土した柱痕はクリと同定されている。

<出土遺物> (第23図、写真図版29) P59から17の「元豊通宝」が出土した。そのほか、P11、P20、P25、P26、P35、P47、P49、P51、P59からかわらけの細片が出土した。

11区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	18	7			28	14	63			44	30	29	柱痕	
3	22	19	柱痕		29	18	16			45	28	20	柱痕	
8	40	13			30					46	34	20	柱痕	
9					31	30	38			47	36	66	柱痕	かわらけ細片
11	32	42	柱痕	かわらけ細片	32	32	13			48	46	34		
12	30	16	柱痕		33	18	65	柱痕		49	40	30	柱痕	かわらけ細片
13	42	18	柱痕		34	24	48			50	26	27	柱痕	
16	36	17	柱痕		35	28	38	柱痕	かわらけ細片	51	36	43	柱痕	かわらけ細片
17	16	59	柱痕		36	28	15	柱痕		52	18			
18	16	80			37	20	11	柱痕		54	24	25		
19	40	17	柱痕		38	50	66			55	32	17	柱痕	
20	28	15	柱痕	かわらけ細片	39	50	13			56	24	82		
23	20	16			40	22	18	柱痕		58	26			
25	26	12	柱痕	かわらけ細片	41	38	38	柱痕		59	53	柱痕	かわらけ細片	
26	36	25	かわらけ細片		42	24	25	柱痕		59	52	柱痕	かわらけ細片	
27	26	3			43	22	11	柱痕						

<時期>何時期かに別れると思われるが、P59に関しては北宋銭が出土したことから、12世紀に属すると考えられる。

#### 遺構外出土遺物

遺構検出面からかわらけの細片が出土した。

12区

本区は47次調査区の東寄りに位置し、県道嚴美平泉駅線の南側に位置する。県道をはさんだ北側には46区が存在する。平泉殿丘の毛越寺、觀自在王院ののる面から1段下がったところにある調査区である。幅は最大で3.5mと狭いが、長さは36mに及び、南側の地権者が営業をしていることもあって危険を避けるため4分割して次々に埋め戻しながら調査を行った。時間の制約もあったため、分割した調査区の境部分の検出は十分でなかった可能性もある。本区は水田などで一部はかなりの削平を受けており、その上に採石などの盛り土をして現在の地表面が形成されている。すべての遺構の検出面はⅢ層である。

#### 1号溝 (第7図、写真図版8)

<位置・検出状況>調査区西端に位置する。標高が西から1段下がったところに等高線に沿って位置する南北方向の溝である。溝の長軸方向はN=0° - Wである。県道をはさんだ北側の46区では本遺構につながると見られる1号溝が検出されている。

<平面形・規模>検出部分の幅は2.9m、長さは調査区の幅いっぱいの3.3mで、南北ともに調査区外に伸びている。

＜壁・底面＞底は東よりが一段低く掘られており、そのほかは平坦である。西壁は外湾気味に立ち上がり、東壁は段を持つ。

＜覆土＞10層に細分される。そのうち1～6層は古い溝の埋没後再度堀り込まれたと見られる。古い溝の覆土は西壁の部分と東壁の後の部分に残っている。全般に古い溝はにぶい灰黄がかった土で、新しい溝の土はやや黒っぽい。また、木の葉の堆積も覆土中層から下層にかけて見られる。

＜出土遺物＞（第23図、写真図版29）覆土上層から21、26の常滑産陶器片、覆土からかわらけ、陶器片22、23の渥美産陶器片、27の磁石、壁際、下層から20の手づくねかわらけ、24、25の常滑産陶器片、栗の実、甲虫、かわらけなどが出土した。

＜時期＞出土遺物から、12世紀に属すると考えられる。

## 2号溝（第7図、写真図版8・9）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや西によった地点に位置する。3号溝と重複関係にあり、本溝の方が新しい。

＜平面形・規模＞幅は55～90cm、長さは調査区の幅いっぱいの約3mで、南北は調査区外に伸びる。南北方向の溝ではあるが東方面にゆるくカーブしている。カーブする方向は重複する3号溝とほぼ同一である。

＜壁・底面＞底面はやや内湾し壁はやや外傾気味に立ち上がる。

＜覆土＞2層に分けられ、グライ化した灰色土をブロック状に含む明黄褐色土及びにぶい黄色土である。全体に褐鉄を多く含んでいる。

＜出土遺物＞（第23図、写真図版29・30）覆土から28、29の渥美産陶器片、29、30の瓦、32の鉄滓、かわらけの細片が出土している。

＜時期＞出土遺物とかわらけが出土した3号溝を切っていることから12世紀以降の可能性がある。

## 3号溝（第7図、写真図版8・9）

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや西によった地点に位置する。2号溝に切られており、本溝の方が古い。また、底面よりP3が検出されたことから本溝の方が新しい。

＜平面形・規模＞幅は0.8～1.6mで、長さは調査区幅いっぱいの約3mである。南北は調査区外に伸びる。2号溝と同様東にゆるくカーブしている。

＜壁・底面＞東側の壁は浅い段を持つ。底面は平坦である。

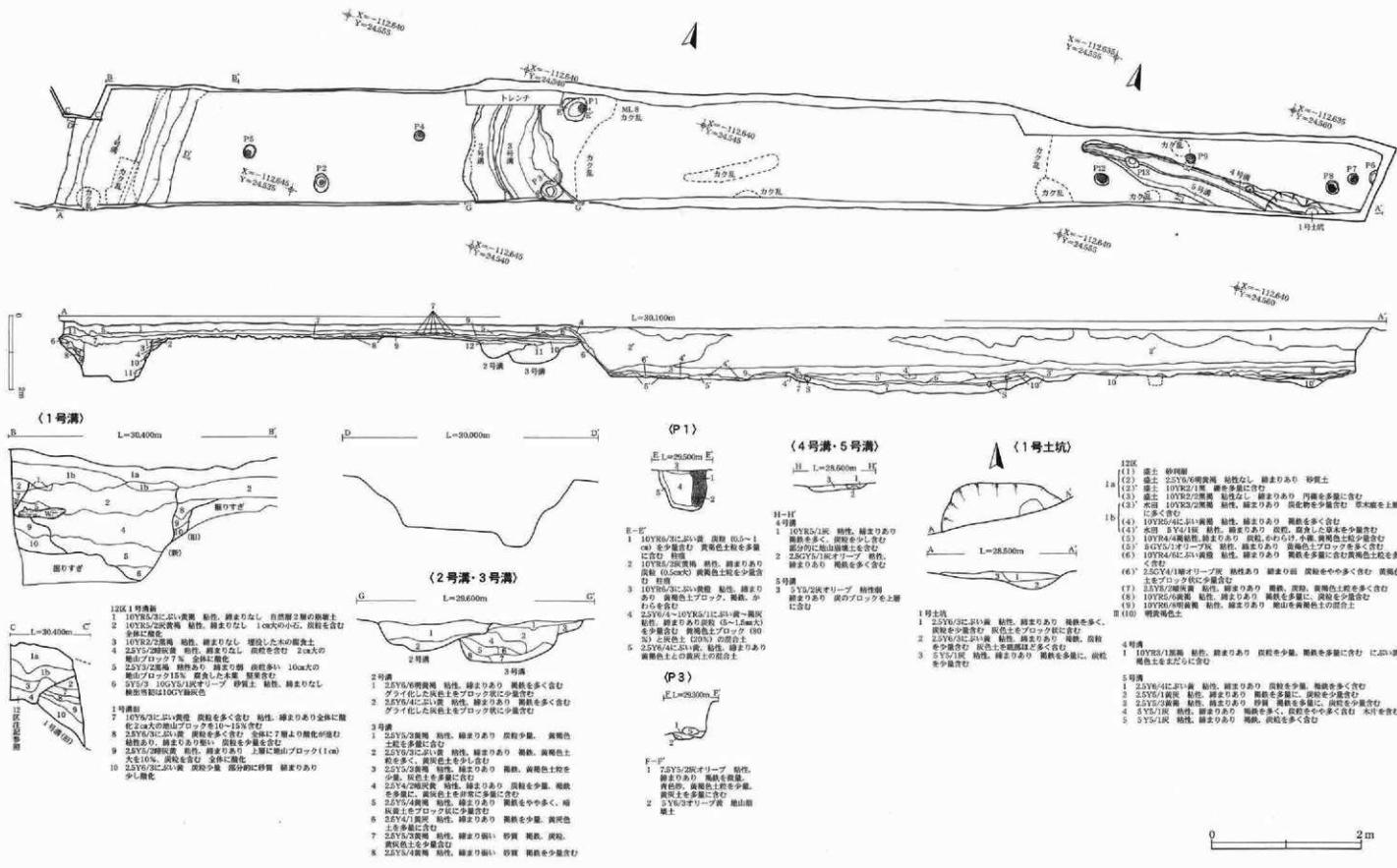
＜覆土＞8層に細分される。全体に黄色味が強く、Ⅲ層起源の土と考えられる。炭粒や黄灰色の土を含み、層により褐鉄を多く含んでいる。最下層は砂質土で、中層は粘性、締まりの強い黄灰色土、黄褐色土で、水の流れた形跡がある。

＜出土遺物＞（第23図、写真図版30）覆土から33のかわらけのほか、かわらけ細片が出土している。

＜時期＞不明な点が多いが、出土遺物から12世紀の可能性がある。

## 4号溝（第7図、写真図版7・9）

＜位置・検出状況＞本区東寄りから検出された。5号溝、1号土坑と切り合っており、本溝の方が新しい。東側は調査区外に伸びている。西側で溝は終わっているが、ここが溝の端なのか、あるいはそれ以西が削平されているためここで終わるのかは判断できなかった。溝の方向はN-90°～Wである。



第7図 12区遺構平面図・断面図

＜平面形・規模＞幅約30cm、長さは検出部分で7m、深さ8cmである。

＜壁・底面＞底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。

＜覆土＞2層に細分され、粘性、締まりのある灰色土が主体である。

＜出土遺物＞かわらけの細片が出土した。

＜時期＞不明な点が多いが、覆土の状況から、12世紀の可能性が高い。

#### 5号溝（第7図、写真図版7・9）

＜位置・検出状況＞本区東寄りから検出された。4号溝、1号土坑と切り合っており、本溝が4号溝より古く、1号土坑より新しい。4号溝とは同じ場所で切り合っており、同様の性格をもつ溝と考えられる。東側は調査区外に伸び、西側で終わっている。方向はN-86°-Wである。

＜平面形・規模＞幅約85cm、長さは検出部分で7m、深さ8cmである。

＜壁・底面＞底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。

＜覆土＞締まりのある灰オリーブ色の単層で、上層に炭を含む。

＜出土遺物＞（第23図、写真図版30）覆土から34の手づくねかわらけのほかかわらけ細片が出土している。

＜時期＞出土遺物と覆土の状況から、12世紀の可能性が高い。

#### 1号土坑（第7図、写真図版7・9）

＜位置・検出状況＞調査区東側に位置する。土坑の南側は調査区外に伸びており、全容は不明である。4号溝、5号溝に切られており、本土坑が最も古い。

＜平面形・規模＞円形を基調としていると考えられる。検出部分での最大径は1.6mを測る。深さは21cmである。

＜壁・底面＞底面は内湾しており、中央より東側が最も深い。壁はゆるやかに立ち上がる。

＜覆土＞3層に細分され、褐鉄を多量に、炭粒を少量含むにぶい黄色土、灰色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明な点が多いが、12世紀と考えられる5号溝に切られていることと、覆土の状況から最も新しく考えて、12世紀と思われる。

#### 柱穴状土坑（第7図、写真図版7・8）

＜位置・検出状況＞11区の4号掘立柱建物を構成するP7を除いて12基検出された。中央の削平部分を除いて、検出されている。東側は4号溝、5号溝の周辺に、西側は2号溝、3号溝の周辺と1号溝までの間である。掘立柱建物を構成する柱穴と思われるが、柱の並びなどを確認できなかった。P1、P3は規模、深さ、2基の柱穴を結ぶ方向などからおそらく同じ遺物を構成する柱穴かと推定される。

＜平面形・規模＞すべての柱穴は円形を基調としている。規模は3号溝東側のP1とP3が他に比して大きく、それぞれ68cm、58cmである。深さも56cm、27cm（3号溝溝底から）と深い。他は径が26～50cm、深さ10～30cmである。

＜覆土＞柱痕のあるものがほとんどである。特に東側から検出された柱穴からは柱の木質部分が残るものがあった。P1は柱痕が残り、その周りを黄褐色土ブロックを含む土で埋め戻している。P3からは根がため石と思われる礫が出土した。P9からは残柱が出土した。16×8cmの長方形の柱で、他と異なる。この残柱は

12区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	68	56	柱痕		5	36	11	柱痕		10	50	24	柱痕	
2	50	30	柱痕	かわらけ細片	6	36	68		かわらけ細片	11	42	25		
3	58	26		かわらけ細片	8	38	24	柱痕	かわらけ細片	12	40	7	柱痕	
4	28	23	柱痕		9	26	22	柱痕		13	40			

クリと同定された。一般に東側から検出された柱穴の覆土は、西側から検出された柱穴の覆土に比して粘性が強い。

<出土遺物>P2、P6、P8からかわらけの細片、P3からロクロ使用のかわらけ底部が出土した。

<時期>何時期かに別れる可能性があるが、P1、P2は12世紀に属すると思われる。

#### 遺構外出土遺物（第23図、写真図版30）

調査区中央付近の水田耕作土から35の白磁片、37の碁石と思われる黒色の石、地山面から5cmほど浮いて36の産地不明の陶器破片が出土した。そのほか遺構検出面からかわらけの細片が出土している。

#### 13区

本区は47次調査の中央からやや東よりにある。県道巣美平泉駅線の南側で、毛越寺、觀自在王院ののる段丘の縁に位置する。本区から検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝4条、土坑1基、柱穴状土坑7基である。本区の東より約2/5は水田を作る際に削平されている。現在の地表面はその水田の上に砾石を多く含む盛り土をして形成されている。すべての遺構検出面はⅢ層である。

#### 1号掘立柱建物跡（第9図、写真図版9・10）

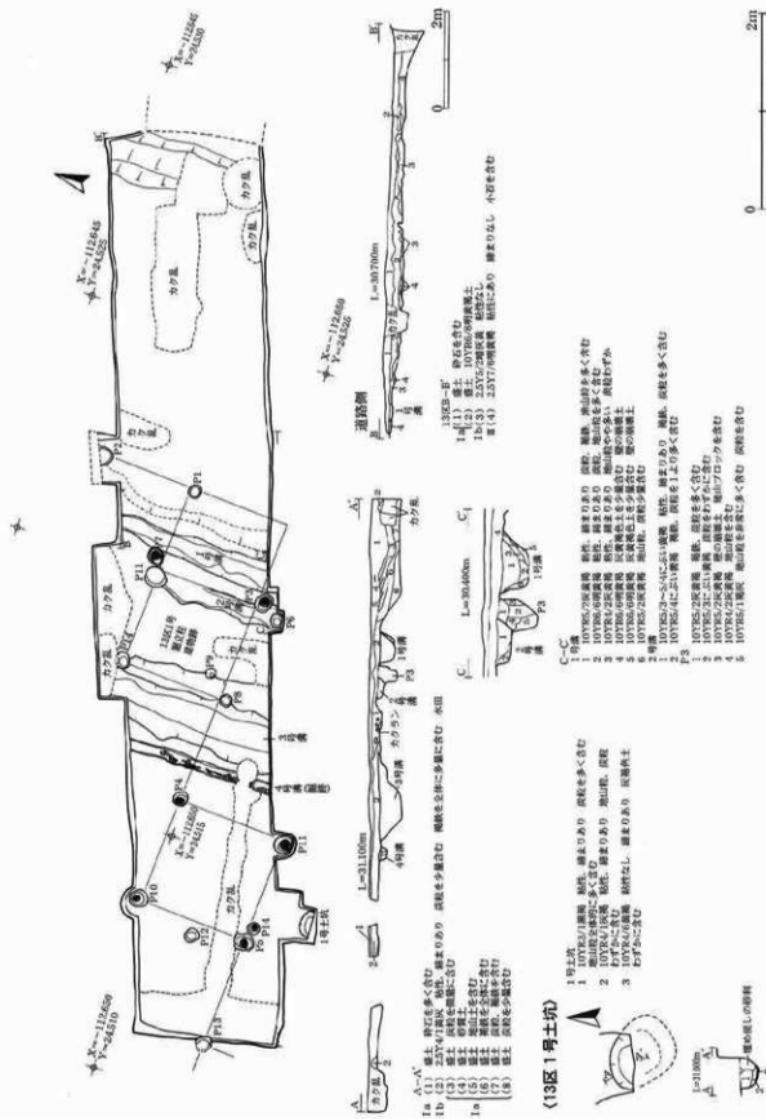
<位置・検出状況>本区中央から14区東によりかけて位置する。北側は県道の下に伸び、南側は宅地部分に伸びている。南側は平成4年に町教育委員会が行った18次調査で検出されており、今回の調査で建物の北東隅から南西隅の柱穴を結ぶ対角線から南東半分が明らかになり、建物の全体像を推定することができるようになった。東側の側柱は水田造成時に上部が削られており、ごく浅くしか残っていない。同様に調査区北壁際の柱穴も道路側溝埋設時に削られており、浅い。今回検出された本遺構の柱穴は15基である。

2号溝、3号溝、14区1号土坑と切り合っており、2号溝、14区1号土坑より古い。3号溝と切り合うP8及びP14は3号溝の壁面で検出したが、プランに気付かず掘り下げてしまった可能性もある。

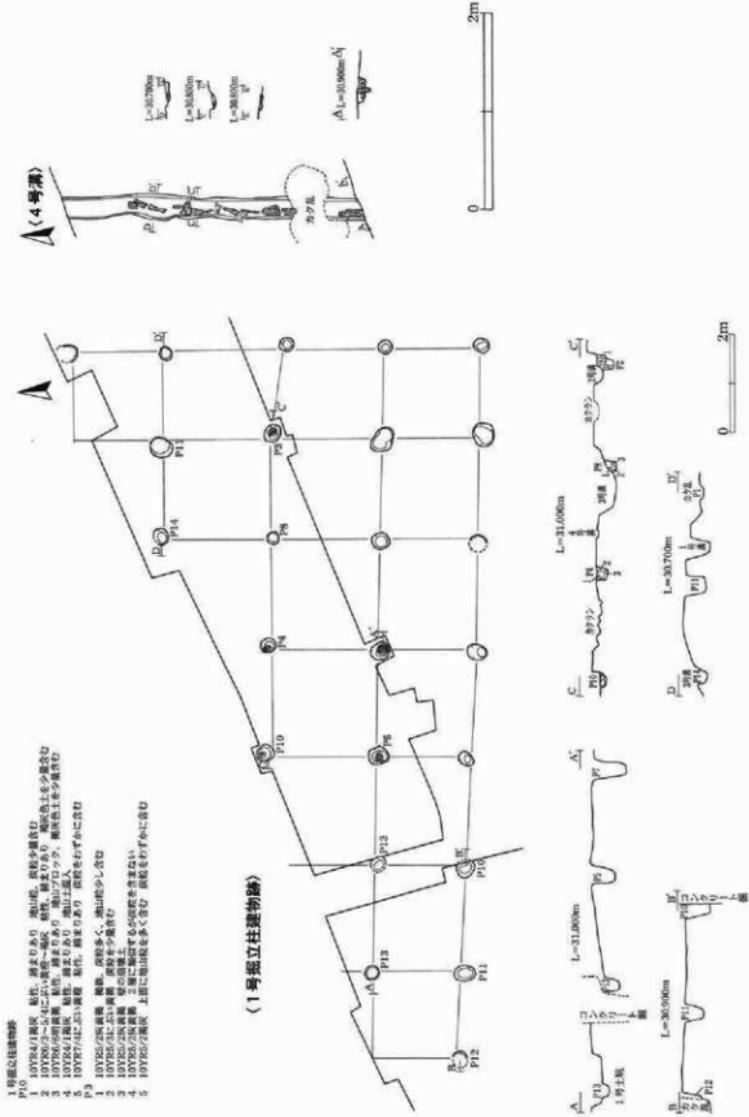
<平面形・規模>4間×7間の東西棟である。柱間は桁行きが西から1.75m、2.15m、2.2m、2.2m、2.25m、2.2m、1.85mである。梁行きが北から2.0m、2.25m、2.4m、1.8mである。それぞれ、最も外側の柱間が他の間隔よりやや狭いことから四面庇で、総柱の建物であると考えられる。梁行き方向はN-5°-Eである。柱の平面形は円形を基準としており、径は18~40cm、深さは削平されたP1が7cm、溝と切り合うP8が29cm、P14が24cmで30~52cmである。

本建物跡は志羅山遺跡の現在までに検出された建物跡のうち最大級のもので、この地区の主要な建物であると予想される。

<覆土>柱痕の確認できたものはP3、P4、P10、P5、P11である。地山の黄褐色土ブロックや炭粒を含む褐灰色、灰黄褐色土が主体である。



第8図 13区遺構平面図・断面図



第9図 13区(2)遺構平面図・断面

<出土遺物>P7からかわらけの細片が出土している。

<時期>覆土の状態や周辺の出土遺物などから12世紀代の建物跡と考えられる。

#### 1号溝（第8図、写真図版9・10）

<位置・検出状況>本区の中央に位置する南北方向の溝である。北側は県道に、南側は宅地部分へ伸びている。2号溝と平行している。

<平面形・規模>南側は深く、北側に向かうにつれて細く、浅くなる帯状の溝である。北に向かって徐々に低くなる地形のためかと思われる。長軸方向はN-4°-Eである。幅は30~60cm、長さは調査区の幅いっぱいの約3.1mである。深さは最深部で25cmを測る。底は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状である。

<覆土>炭粒や地山の黄褐色土粒を含む灰黄褐色土が主体で、上層には褐鉄を多く含む。壁際には灰黄褐色土を少量含む壁の崩壊土が堆積する。

<出土遺物>かわらけの細片が出土している。

<時期>覆土の状況や出土遺物から12世紀代の溝と考えられる。

#### 2号溝（第8図、写真図版9・10）

<位置・検出状況>本区中央に位置する。1号溝と平行する南北方向の溝で、北側は徐々に浅くなって消滅し、南側は調査区外の宅地部分へと伸びる。1号掘立柱建物跡のP3、P11及び柱穴状土坑のP7と重複しており、本溝の方が新しい。方向はN-1°-Eである。

<平面形・規模>北へ向かうにしたがって、徐々に浅くなる帯状の溝である。幅は38~50cm、長さは検出部分で2.5mである。深さは最深部で15cmを測る。

<壁・底面>底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

<覆土>褐鉄、炭粒を多く含むにぶい黄褐色土である。

<出土遺物>かわらけの細片が出土している。

<時期>覆土の状況などから12世紀代の溝と考えられる。

#### 3号溝（第8図、写真図版9・10）

<位置・検出状況>本区中央からやや西寄りに位置する。本溝の西側に存在する4号溝（堀跡）、及び東側の1号溝、2号溝と平行する溝である。1号掘立柱建物跡のP8、P14と重複している。これらの柱穴は本溝を掘りあげたところ壁で検出されたものであるが、溝覆土を掘りこんで作られた柱穴を識別できなかった可能性もある。本溝は北側の県道へ伸びていると考えられるが、県道側溝の埋設時に擾乱を受けて、明らかではない。南側は調査区外の宅地部分へも伸びており、18次調査で検出されている。西壁及び東壁の一部に擾乱を受けている。方向はN-1.5°-Eである。

<平面形・規模>南北へ伸びる帯状の溝である。幅は1.2~1.6cm、長さは検出部分で3.2m、深さは最深部で40cmの大溝である。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がるが、東側に段を持つ。

<覆土>灰黄褐色～黄灰色土が主体で、炭粒、褐鉄を含む。

<出土遺物>（第23図、写真図版30）38、39は覆土から出土したコースター状のかわらけである。40、41は覆土から出土した白磁壺の破片、42は常滑産の甕口縁部である。そのほか、覆土中より43~51の壁上

やロクロ使用のかわらけ底部、てづくねかわらけの細片が出土した。

＜時期＞覆土の状況や出土遺物から12世紀代の溝と考えられる。

#### 4号溝（堀跡）（第8図、写真図版9・10・11）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。本造構の東に3号溝が平行して存在する。また、1号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。一部に擾乱を受けている。溝の底面や覆土下層で、板の痕跡が認められることから、堀跡と考えられる。溝は北に向かうにつれて、徐々に浅くなり、調査区北壁付近では、板の痕跡は見えなくなる。方向はN-0°-Eである。

＜平面形・規模＞帯状の布掘りの溝で、厚さ2~7cm、長さ10~25cmの板を並べて埋設し、あるいは若干打ち込んで（Δ-Δ'）いる。溝の幅は22cm前後、長さは調査区幅いっぱいの3mである。深さは1~6cmである。

＜覆土＞にぶい黄褐色土で覆われているが、板痕跡は炭粒を含んだやや暗い灰黄褐色土である。

＜出土遺物＞かわらけの細片が出土している。

＜時期＞覆土の状況や過去に検出された12世紀に属すると考えられる堀と同様であることから、該期の堀跡と思われる。

#### 1号土坑（第8図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞調査区西側の南壁際に位置し、南側は宅地部分に伸びている。平成4年度の18次調査では本土坑の南約半分が検出されている。

＜平面形・規模＞18次調査の平面図と合成すると楕円形を呈している。径は75×60cm、深さ20cmを測る。

＜覆土＞18次調査の埋め戻しの碎石が入り込んでおり、全容は明らかではないが、3層に細分され、炭粒や地山起源の黄褐色土粒が多く含む黒褐色土が主体である。

＜出土遺物＞かわらけの細片が出土している。

＜時期＞不明な点が多いが、覆土の状況から12世紀に属する可能性がある。

#### 柱穴状土坑（第8図、写真図版9・10）

＜位置・検出状況＞5基検出された。東側の削半部分を除き、2号溝沿い、3号溝沿い、さらに西側に分布している。建物を構成する柱穴と考えられるが、1号掘立柱建物跡の柱穴のすぐ脇にある柱穴P6、P7、P14は、あるいは同建物の建て替えなどの跡かもしれない。そのほかは柱穴同士対応するものが見いだせなかった。

＜平面形・規模＞円形を基調としている。径は24~34cm、深さは16~42cmである。

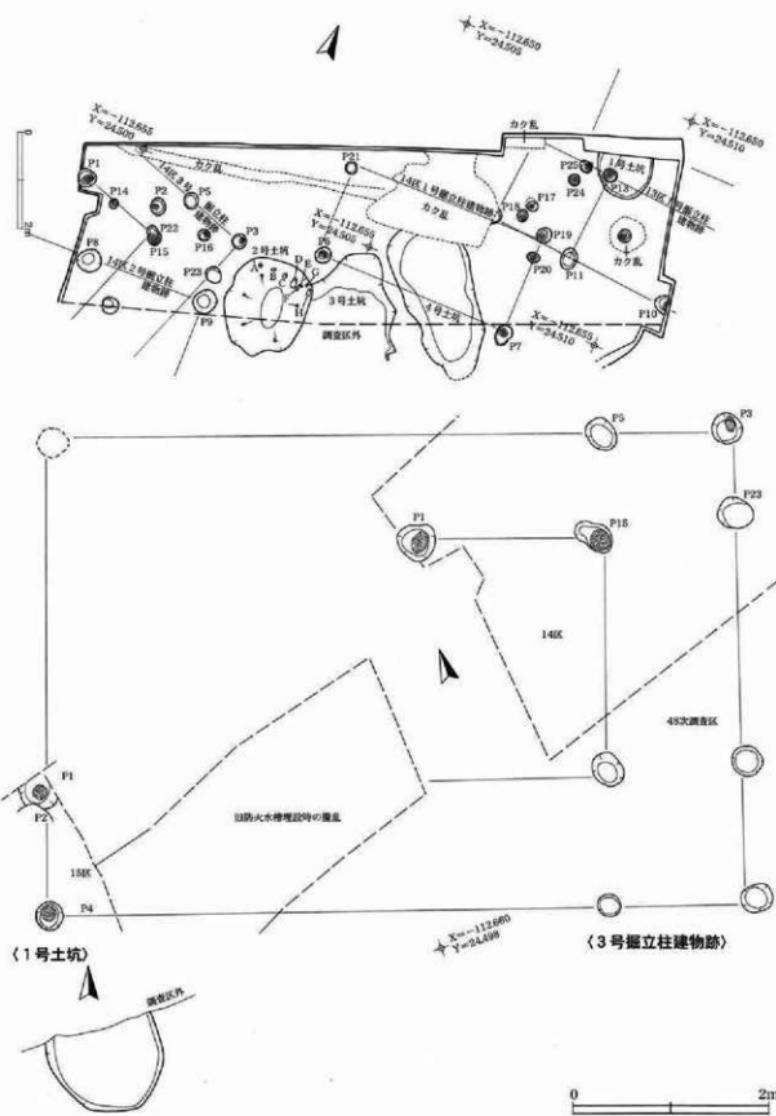
＜覆土＞炭化物、地山粒を含むにぶい黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞P9、P12からかわらけの細片が出土している。

＜時期＞覆土の状況が1号建物跡とよく似ており、12世紀代に属する可能性が高い。

13区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
2	32	28	柱痕		9	24	20		かわらけ細片	15	34	21		
6	28	42			12	26	28		かわらけ細片	16	24	16	柱痕	



第10図 14区遺構平面図 (1)

### 遺構外出土遺物

擾乱から52～55の中国産白磁、西半の水田耕作土から56の須恵器系陶器帯、遺構検出面からかわらけ縞片が出土している。

### 14区

本区は47次調査のほぼ中央で、県道巣美・平泉駅線の南側に位置する。本区から検出された遺構は掘立柱建物跡3棟、土坑4基、柱穴状土坑12基である。本区の調査は町教育委員会が第48次調査として南側の宅地部分を同時に調査することになったため、それと合わせて行った。互いの調査区の境部分の掘り残しがないようにするために、建物などをできるだけ広い範囲で捉えられるようにするために、また記録を重複してとらずに済むようにするために、そのため、町教委調査区部分にかかっている遺構の記録は同教育委員会の第48次調査の報告を参照願いたい。

#### 1号掘立柱建物跡（第11図、写真図版11・12）

＜位置・検出状況＞調査区中央に位置する。検出されたのは東西1間、南北1間分であるが、北側調査区外の県道にも伸びている可能性がある。検出された柱穴は4基である。

＜平面形・規模＞検出された部分からは全体の規模や平面形はわからない。南北の柱筋の方向はN-2.5°-Wである。柱間は南側の側柱が4.0m、東の側柱が2.1mを測る。柱穴は円形を基調としており、径は26～42cm、深さは14～33cmである。

＜覆土＞P19、P7、P6には柱痕が認められる。柱底は炭粒や細かい黄褐色土粒を含む灰黄褐あるいは褐色土色である。その回りは黄褐色土ブロックや白色土を含む締まりのある土で、埋め戻されている。いずれも10YRから5Yまでの黄色がかった類似の上である。

＜出土遺物＞P19からかわらけが出土している。P10から出土した残柱は、コナラ属、コナラ亜属、コナラ節の一種と同定された。P21の覆土から58～63の壁土が出土している。P19、P21からかわらけの細片が出土している。

＜時期＞出土遺物や覆土の状況から12世紀代に属すると考えられる。

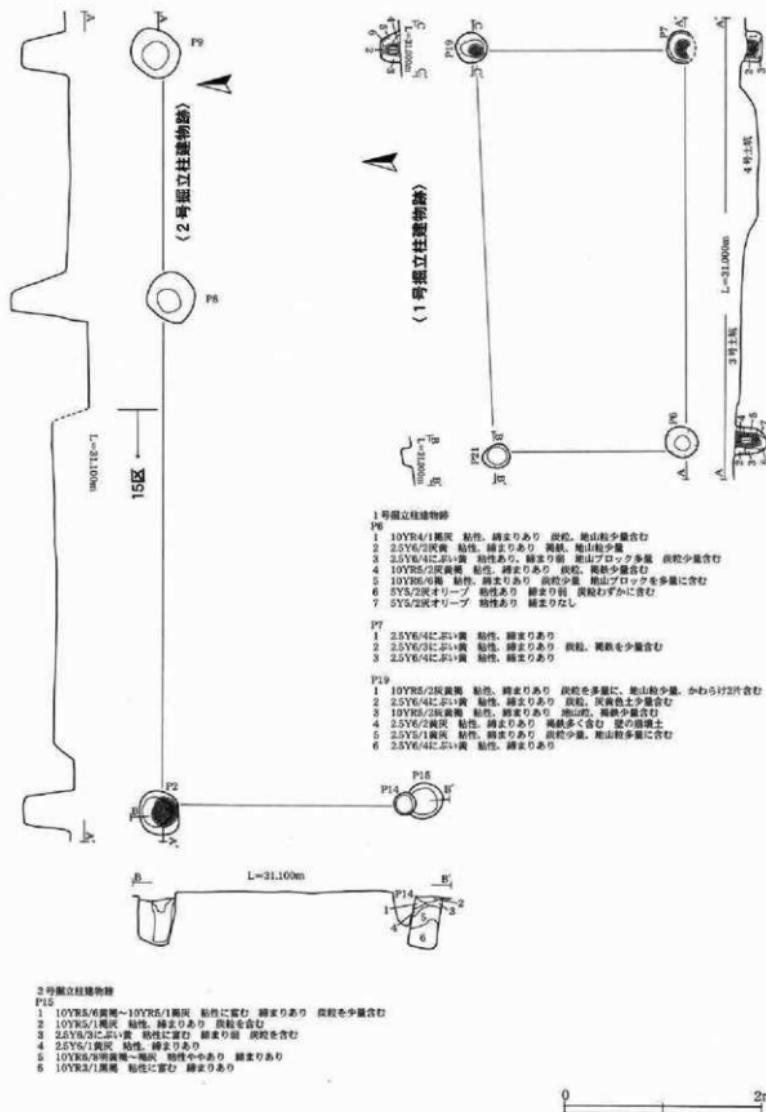
#### 2号掘立柱建物跡（第11図、写真図版11・12）

＜位置・検出状況＞調査区西側から15区にかけて位置する。建物は南側の宅地部分の町教委48次調査区に伸びている。また、15区南側の第27次調査区部分にも伸びている。検出された柱穴は4基であるが、町教委調査区部分検出のものも含めると9基である。また、15区の東側は防火水槽埋設のため、削平されているので、本区のP5と15区のP2の間に柱穴が存在していた可能性がある。本建物跡は3号建物跡と重複しており、15区検出のP2と3号建物跡のP1が切りあっている。本建物跡のほうが新しいと思われるが、ごくわずかしか重なっていないことから確かではない。

＜平面形・規模＞本区及び15区からは北側柱が東西3間分、西側柱が南北1間分の検出であるが、2間×3間の建物跡と想定される。北側柱の柱間は西から5.15m、2.6mで、西側柱の柱間は2.5mである。柱穴は円形を基調としており、径は14～52cm、深さ32～60cmを測る。柱筋方向はN-0°-Wである。

＜覆土＞15区検出のP2には柱痕が残る。

＜出土遺物＞かわらけの細片以外は出土遺物はない。



第114図 14区造構平面図・断面図(2)

<時期>覆土の状況などから12世紀代に属すると考えられる。

### 3号掘立柱建物跡（第10図、写真図版11）

<位置・検出状況>調査区西側から15区にかけて位置する。南側は町教育委員会の調査区、北側は調査区外の県道に伸びる。検出された柱穴は7基であるが、町教委調査区検出のものも含めると11基である。15区東側の防火水槽埋設部分には柱穴があったと思われるが、削平されていて不明である。14区2号建物跡と重複する。新旧関係は15区検出の本建物のP1を2号建物のP2が切っていて本建物の方が古いと思われるが、ごくわずかしか重なっていないため、確かではない。

<平面形・規模>四面に庇を持ち、身舎部分で1間×2間以上の建物であったと考えられる。柱間は北面の庇P5とP3の間1.3m、東側庇部分が北から1.9m、2.55m、1.4m、身舎部分北側柱が東から1.8m、東側柱が2.3mである。15区検出のP1とP4の間は1.15mである。なお、15区検出のP1は身舎か庇部分が不明である。柱穴の径は27~40cm、深さ26~40cmである。梁行きの方向はN-18.3°-Eである。

<覆土>14区P1、P3、15区P1、P4には柱痕跡が認められる。柱痕跡は炭粒や褐鉄を少量含む褐灰及び黄褐色土で、周辺は黄褐色土ブロックを含む土で埋め戻されている。14区P2は柱痕跡のあるP15に切られている。

<出土遺物>P1、P5、P23、15区P1、P4からかわらけの細片が出土した。

<時期>覆土及び出土遺物から12世紀代に属すると考えられる。

### 1号土坑（第10図、写真図版12）

<位置・検出状況>本区東側に位置する。北側の一部は県道の側溝埋設時に擾乱を受けて失われている。13区1号掘立柱建物跡のP13と重複しており、本土坑の方が新しい。

<平面形・規模>一部不明であるが、円形を呈していると思われる。径は1.15mである。

<壁・底面>底部はやや内湾気味で、壁は外傾して立ち上がる。

<覆土>調査の不手際のため、記録を取っていない。

<出土遺物>かわらけの細片以外が出土した。

<時期>不明である。

### 2号土坑・3号土坑・4号土坑（第10図、写真図版11・13）

以上の土坑は町教育委員会が行った第48次調査区に伸びているため、平面図以外の記録は前述の報告を参照されたい。

14区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	36	38		かわらけ細片	15	40	19		かわらけ細片	23	36	33		かわらけ細片
2	34	51		かわらけ細片	16	26	35			24	24	14	柱痕	
3	34	30			17	24	10	柱痕		25	28	20		
4	42	22	柱痕	かわらけ細片	18	22	26	柱痕	かわらけ細片	26	26	14		
5	32	28		かわらけ細片	20	24	27	柱痕						
14	20	21			22	40	15							

#### 柱穴状土坑（第10図、写真図版11）

＜位置・検出状況＞本区中央を除く西側と東側に分布している。12基検出された。建物などを構成する柱穴と考えられるが、確認することができなかった。

＜平面形・規模＞円形を呈する。径は20～42cm、深さは14～35cmを測る。

＜覆土＞にぶい黄色～黄灰色土で、炭化物を含むものが多い。P14、P15、P16、P17、P18、P24、P25には柱痕跡が認められる。

＜出土遺物＞P15、P18、P23、P25からかわらけの細片が出土した。

＜年代＞覆土の状況から大部分が12世紀に属すると考えられる。

#### 遺構外出土遺物（写真図版30）

I層から57のコースター状かわらけ、表採で50銭硬貨が出土した。そのほか、検出面からかわらけの細片が出土した。

#### 15区

本区は47次調査区のほぼ中央、県道巣美・平泉駅線の南側に位置する。本区の東側約3分の1は防火水槽埋設時に深く掘削され、遺構は破壊されている。現地表面は砕石や炭がらを含んだ盛り土によって形成されている。盛り土の下には地山が酸化したように見えるにぶい黄色土があり、遺構検出面はその直下のⅢ層である。本区で検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝3条、柱穴状土坑10基である。

本区に隣接する南側の防火水槽埋設部分は町教育委員会が平成5年に第27次調査を行っており、柱穴12基、土坑1基、溝跡3条が検出されている。

#### 1号掘立柱建物跡（第12図、写真図版13）

＜位置・検出状況＞本区中央に位置する。2号溝と重複しており、本建物の方が2号溝より新しい。また、建物は西側や擾乱を受けている東側に伸びていた可能性もある。南北の軸方向はN-143°-Eである。検出された柱穴は4基である。

＜平面形・規模＞東西1間、南北1間が検出されている。柱間は南側柱が1.05m、東側柱が1.0mを測る。

＜覆土＞すべての柱穴に柱痕跡が認められる。柱痕は炭粒を含んだやや黒っぽい土で、周辺は黄褐色土ブロックを含む黄色味の強い土で埋め戻されている。

＜出土遺物＞P5、P7からかわらけが出土している。68はP5から67はP7から出土した壁土である。

＜時期＞覆土の状況や出土遺物から12世紀に属すると考えられる。

#### 1号溝（第12図、写真図版14）

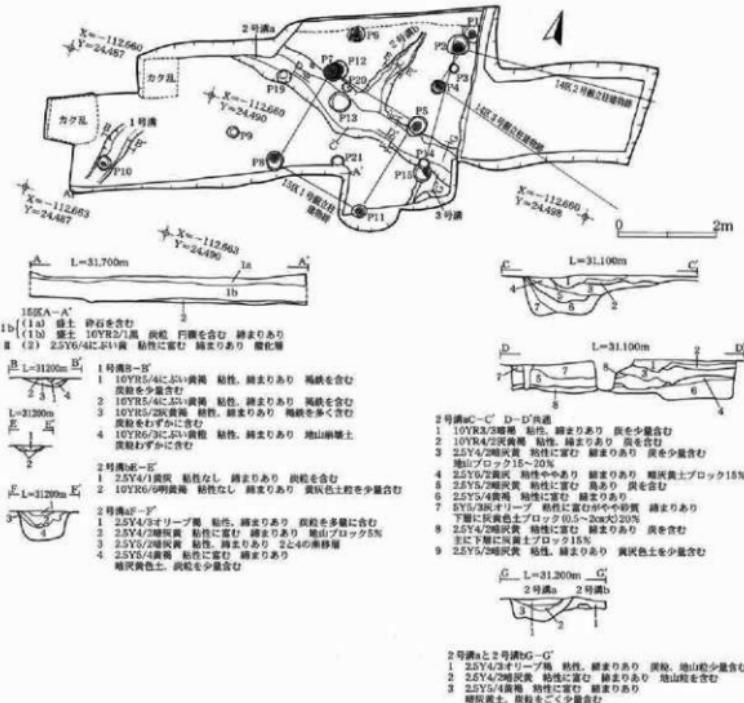
＜位置・検出状況＞本区西端に位置する。南北方向の溝であるが、南側及び北側は徐々に浅くなり自然に消えている。P10と重複しており、本溝が新しい。方向はN-17.5°-Eである。

＜平面形・規模＞帯状の溝で、幅30～48cm、長さは1.3mである。

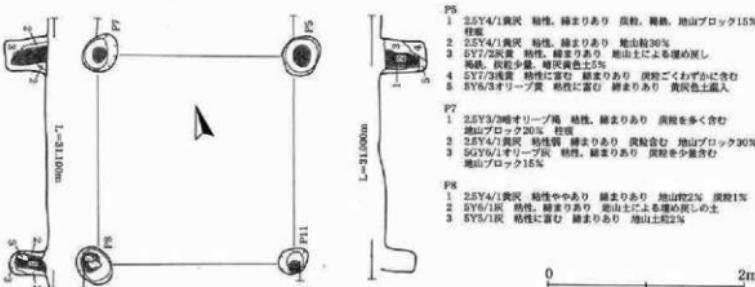
＜壁・底面＞底は内湾し、ゆるやかに立ち上がる。

＜覆土＞4層に細分され、褐鉄を多く含む灰黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。



(1号橋立柱建物跡)



第12図 15区造構平面図・断面図

<時期>出土遺物がなく、不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

#### 2号溝（第12図、写真図版13・14）

<位置・検出状況>本区中央に位置する。東西方向の溝aに、一部南北方向の溝bがつながっており、両者は同時に開いていた様子からひとつの溝としてとらえた。東側及び西側はそれぞれ調査区外に伸びている。北側は徐々に浅く、細くなり調査区北壁の手前で消える。1号掘立柱建物跡、3号溝及びP19、P7、P12、P20、P13、P5、P14、P15と切り合っているが、3号溝より新しく、他の造構よりも古い。東西方向はN-77.5°-W、南北方向はN-21.5°-Eである。

<平面形・規模>T字形の溝である。幅は東西方向が53~85cm、南北方向が10~70cmである。深さは東西方向が33~40cm、南北方向は浅く、5~20cmを測る。長さは東西方向が5.3m、南北が1.9mである。北に向かうにつれて細くなり、消える。

<壁・底面>底は平坦かやや内湾気味で、溝の交差部分は南北方向が浅くなつて北に向かうにつれ浅くなる。壁は外傾して立ち上がる。

<覆土>9層に細分される。やや黄色味の強い粘性に富んだ土が主体である。東西方向と南北方向の溝の交差する部分を観察すると、1~2層、3~5層、6~8層と3期に大別されるようである。これらのうち南北方向の溝は上位2期の覆土のみが堆積している。このことは南北方向の溝が深いことも関係しているかもしれないが、最初に東西方向の溝があり、ややあって南北方向の溝が掘られた可能性も示唆している。

<出土遺物>（写真図版30）65は1層から出土した中国産白磁壺の破片である。そのほか、かわらけの細片が多く出土している。

<時期>出土遺物、重複関係、及び覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

#### 3号溝（第12図、写真図版13・14）

<位置・検出状況>本区中央からやや東よりの南側に位置する。2号溝、1号掘立柱建物跡、14区2号掘立柱建物跡、P15と重複関係にあり、本溝が最も古い。なお、本造構の南側と東側は調査区外に伸びており、南側部分は町教育委員会が行った62次調査で、検出されている。

<平面形・規模>不明である。

<壁・底面>底は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

<覆土>調査の不平地により不明である。

<出土遺物>ない。

<時期>重複関係により12世紀に属すると考えられる。

#### 柱穴状土坑（第12図、写真図版13）

<位置・検出状況>本区1号掘立柱建物跡周辺と西端に分布する。10基検出された。建物跡を構成する柱

15区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
3	20	27	柱痕	かわらけ細片	10	30	5			15	40	43		
6	28	59	柱痕	かわらけ細片	12	36	40			19	30			
9	22	11	柱痕		13	42		柱痕	かわらけ細片	21	24	3		

穴がほとんどと思われるが、確認できなかった。これらのうちP4、P6は1号掘立柱建物跡の軸線上に対応する位置にあることから、同建物跡の柱穴かもしだい。1～3号溝と重複するものもあるが、P10を除き、重複する溝よりも柱穴の方が新しい。また、P12は1号掘立柱建物跡のP7と重複しているが、P12の方が新しい。

＜平面形・規模＞円形である。径は20～42cm、深さ59cmである。

＜覆土＞柱痕が認められるものも多い。P6は炭を含む暗灰黄色土の柱痕の周辺を灰オリーブ色土で埋め戻している。P10からは残柱が出土した。柱の上部は腐食しており、炭を含む締まりのない黄灰色土と化している。周辺は暗灰黄色土で埋め戻している。

＜出土遺物＞（写真図版28）P10から出土した残柱はアサダと同定されている。P6、P15からは板状の木片が出土し、それぞれクリと同定されている。P13から、66の中国産白磁が、P3、P4、P6、P8、P13からかわらけ細片が出土した。

＜時期＞覆土の状況からほとんど12世紀に属すると考えられる。

#### 遺構外出土遺物（写真図版30）

遺構検出面から69のかわらけ、そのほか細片が多数出土している。

#### 16区

47次調査区の中央付近で、県道厳美平泉駅線の南側に位置する。本区東端の一部は電柱埋設のため、擾乱を受けている。現地表面は以前水田であったところに盛り土をして形成されており、遺構検出面は水田造成のため、削られているものと思われる。ただし西側の一部はⅢ層の上位に遺物包含層と思われる層がうすく堆積している。すべての遺構の検出面はⅢ層である。

本区南側の宅地部分は町教育委員会が平成5年度に第26次調査を行っており、柱穴4基、溝跡12基が検出された。

本区から検出された遺構は、溝9条、土坑3基、柱穴状土坑8基である。

#### 1号溝（第13図、写真図版15）

＜位置・検出状況＞本区東端に位置する南北方向の溝である。遺構の主に北側は電柱埋設のための擾乱を受けている。P1、6号溝と重複関係にあり、本溝が新しい。また、西側は1号土坑と隣接している。遺構の南側は、調査区外に伸びており、26次調査の5号溝である。

＜平面形・規模＞帯状の溝で、幅はやや広くなったり、狭くなったりしている。全長1.5m、幅50～70cm、深さ13cmである。溝の方向はN-65°-Eである。

＜壁・底面＞底面はおおむね平坦であるが、東側の一部に凹みを持つ。壁は外傾して立ち上がる。

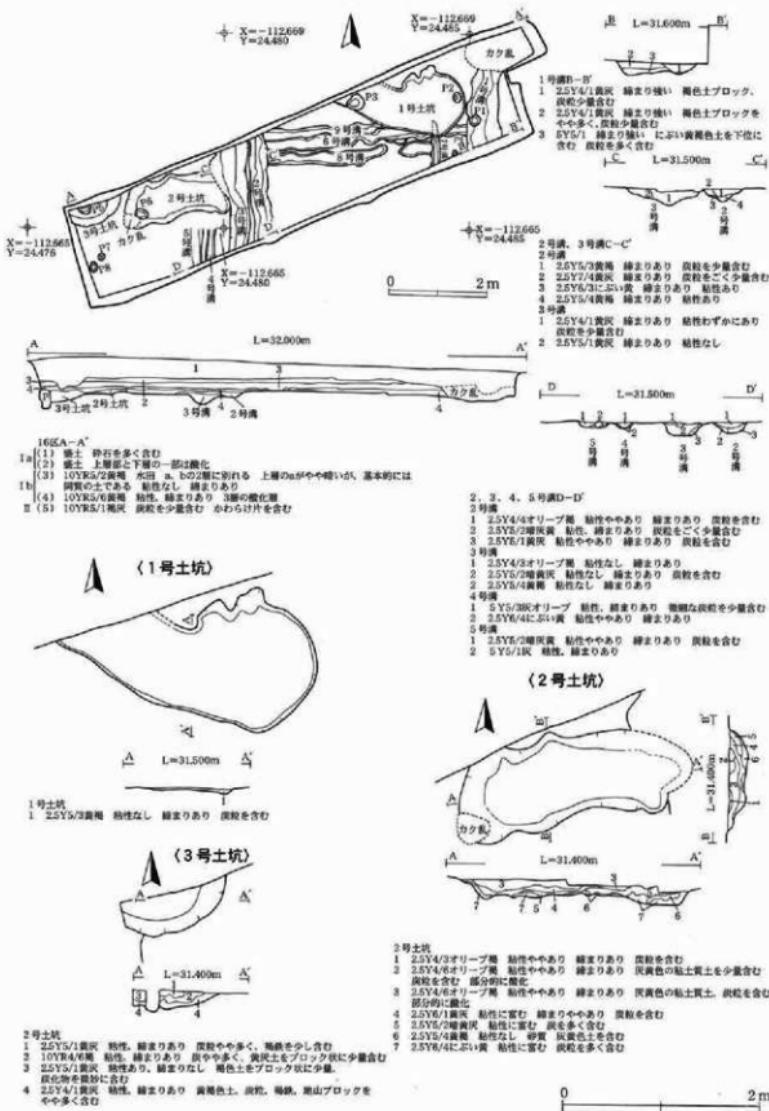
＜覆土＞褐色上ブロックや炭を少量含む黄灰色土が主体である。

＜出土遺物＞少量のかわらけ細片が出土した。

＜時期＞不明な点が多いが、覆土の状況から12世紀に属する可能性が高い。

#### 2号溝（第13図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞本区中央やや西寄りに位置する南北方向の溝である。遺構の西側は3号溝と接し平行し



第13図 16区造構地平面図・断面図 (1)

ている。北側で、6号溝、8号溝、9号溝を切っている。溝の北側及び南側は調査区外に伸びている。26次調査では3号溝とした溝である。溝の方向はN-3°-Wである。

＜平面形・規模＞帯状の南北溝で、全長2m、幅30~40cm、深さ13cmである。

＜壁・底面＞底面は内湾し、壁も内湾して立ち上がる。断面形態は薄いU字状である。

＜覆土＞4層に細分され、炭粒を少量含む黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞少量のかわらけ細片が出上した。

＜時期＞覆土の状況や切り合い関係から12世紀に属すると考えられる。

#### 3号溝（第13図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。東側に1号土坑、西側に4号溝が平行して存在する。北寄りの部分は2号土坑と重複関係にあり本溝の方が新しい。溝の北側及び南側は調査区外に伸びている。南側の26次調査では2号溝とした溝である。溝の方向はN-7°-Wである。

＜平面形・規模＞北よりの部分が幅がややふくらむが、帯状の溝である。全長2m、幅35~70cm、深さ14cmを測る。

＜壁・底面＞底は内湾し、壁もやや内湾気味に立ち上がる。断面形態は浅いV字状を呈する。

＜覆土＞2層に細分され、炭粒を少量含む黄灰色土が主体である。

＜出土遺物＞（第24図、写真図版30・31）覆土より74~77のかわらけが出土した。74のかわらけは19区10号溝出土のかわらけと接合している。そのほかかわらけ細片が出土している。

＜時期＞出土遺物、覆土の状況や切り合い関係、遺構の形態から2号溝と同様の性格を持つ溝で、12世紀に属すると考えられる。

#### 4号溝（第13図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。東側に3号溝、西側に5号溝が平行して走る。本溝は北側に向かうにつれて浅くなり、調査区南壁から60cm程で消える。南側は調査区外に伸びる。26次調査では1号溝とした溝である。

＜平面形・規模＞細い帯状の溝で、長さ60cm、幅15~17cm、深さ6cmである。溝の方向はN-2°-Eである。

＜壁・底面＞底は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。

＜覆土＞微細な炭粒を少量含む灰オリーブ色土である。

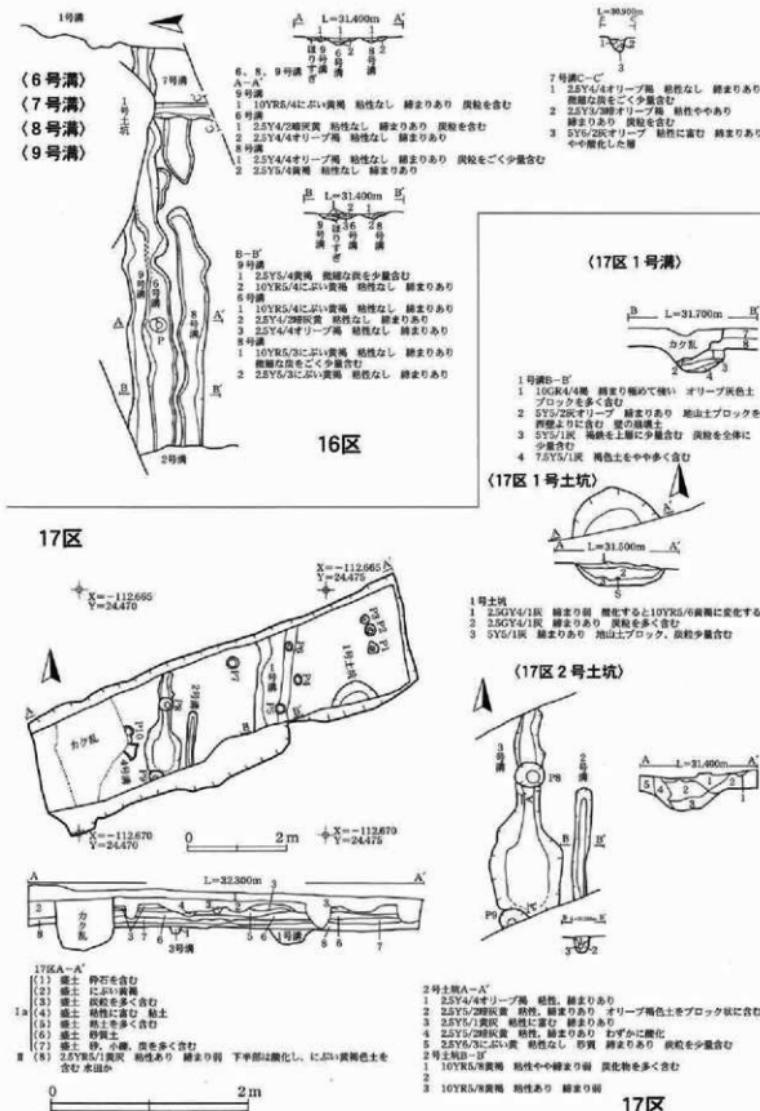
＜出土遺物＞ない。

＜時期＞2号溝3号溝に平行すること、覆土の状況から12世紀代に属すると考えられる。

#### 5号溝（第13図、写真図版15・16）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。東側に4号溝が平行して走る。本溝は検出の際Ⅲ層を削り過ぎてしまい、西側の壁を検出することができなかった。従って、本区南壁に残る断面から規模を推定した。また、4号溝と同様、南壁から60cm程で、徐々に浅くなり消える。南側は調査区外に伸びる。26次調査では6号溝とした溝と思われる。

＜平面形・規模＞細い帯状の溝と思われる。長さ60cm、幅は南壁で30cm、深さ5cmである。



第14図 16区(2)・17区遺構平面図・断面図(2)

<壁・底面>底は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。

<覆土>炭粒を含む暗灰黄色土である。

<出土遺物>かわらけの細片が出土している。

<時期>2号～4号溝と同じ方向性を持つことと覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

#### 6号溝（第14図、写真図版15・16）

<位置・検出状況>本区中央に位置する東西方向の溝である。北側に9号溝、南側に8号溝が平行して走り、9号溝とは重複している。本溝の方が新しい。東側は1号土坑、西側は2号溝によって切られている。また、7号土坑とも重複しているが、新旧関係は明らかでない。

<平面形・規模>一部が細くなっているが帯状の溝である。長さは検出部分で4.1m、幅10～30cm、深さ6cmである。軸方向はN-85°-Eである。

<壁・底面>底は内湾しており、壁も内湾気味にゆるやかに立ち上がる。

<覆土>炭粒を含む暗灰黄色土が主体である。

<出土遺物>（第24図、写真図版31）底面から78のロクロ成形のかわらけが伏せた形で出土した。

<時期>出土遺物から12世紀に属すると考えられる。

#### 7号溝（第14図、写真図版15・17）

<位置・検出状況>本区東側に位置する。南側は調査区外に伸び、北側は8号溝を切り、1号土坑に切られている。6号溝とも重複していると思われるが新旧は明らかでない。26次調査で、4号溝とした溝である。溝の方向はN-1.8°-Wである。

<平面形・規模>細い帯状の溝で、幅14～15cm、長さ0.6m、深さ14cmを測る。

<壁・底面>底は内湾し、壁は外傾して直立気味に立ち上がる。

<覆土>炭粒を含むオリーブ色がかった土が主体である。

<出土遺物>ない。

<時期>覆土の状態から12世紀に属すると考えられる。

#### 8号溝（第14図、写真図版15・16）

<位置・検出状況>本区中央に位置する。6号溝、9号溝と平行に走る東西溝である。西側は2号溝に、北側は7号溝に切られる。溝の方向はN-85°-Eである。

<平面形・規模>部分的に細くなるものの帯状の溝で、西から2.5mのところでいったん30cmほど途切れ、また70cm伸びて、7号溝に切られる。7号溝の東側及び2号溝の西側からは検出されていないので、本溝の長さはこれらの2条の溝の間におさまると考えられる。幅は18～34cm、深さは6cmである。

<覆土>微細な炭粒を少量含む黄褐色土及びにぶい黄褐色土が主体である。

<出土遺物>ない。

<時期>覆土の状態と、6号溝との共通点から12世紀に属すると考えられる。

#### 9号溝（第14図、写真図版15・16）

<位置・検出状況>本区中央に位置する。6号溝、8号溝と平行して走る東西溝で、6号溝に切られている。

東側は1号土坑、西側は2号溝に切られる。溝の方向はN-85°-Eである。

＜平面形・規模＞部分的に細くなる場所があるが、帯状の溝で、西から2.5mのところで南へカーブする。

＜覆土＞微細な炭粒を少量含む黄褐色土、及ぶオリーブ褐色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞覆土の状態と6号溝との共通点から6号溝よりは古いものの、12世紀に属すると考えられる。

#### 1号土坑（第13図、写真図版15・17）

＜位置・検出状況＞本区東側に位置する。本土坑の北側は調査区外に伸びるが、一部壁が徐々に薄くなり、不明瞭になる。6号～9号溝を切り、1号溝と東側で接する。P3に切られる。

＜平面形・規模＞不整形で、非常に浅い。壁の一部に凹凸が見られる。径は2.5m×1.45m、深さが最深部で8cmである。

＜壁・底面＞平坦な部分もあるが、ほとんどに凹凸が見られる。壁は外傾気味に立ち上がる部分と徐々に薄くなり、ごくゆるやかに立ち上がる部分がある。

＜覆土＞炭粒を含む黄褐色土である。

＜出土遺物＞（第24図、写真図版30）70は覆土から出土したろくろ使用のかわらけである。そのほかかわらけの細片が出土した。

＜時期＞出土遺物と覆土の状態から12世紀に属すると考えられる。

#### 2号土坑（第13図、写真図版15・17）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。本土坑の東側は3号溝に切られ、北側の一部は調査区外に伸びている。西側をP6に切られている。

＜平面形・規模＞長円形を基調とした不整形である。径は2.46×0.92mで、深さは20cmを測る。

＜壁・底面＞底はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。

＜覆土＞7層に細分され、炭粒や灰黄色粘土を含むオリーブ褐色及び暗灰黄色土が主体である。

＜出土遺物＞（第24図、写真図版30）71は覆土から出土した手づくねかわらけ、72はろくろ使用のかわらけ、73は上層から出土した須恵系陶器の壺の体部破片である。そのほかかわらけの細片が出土している。

＜時期＞出土遺物や遺構の切り合い関係、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

#### 3号土坑（第13図、写真図版15・17）

＜位置・検出状況＞本区北西隅に位置する。遺構の西端と北側は調査区外に伸びている。

P8に一部切られている。

＜平面形・規模＞調査区外に伸びているため、全容は明らかでないが、円形を基調としていると考えられる。

＜壁・底面＞底面は内湾し、壁もゆるやかに内湾して立ち上がる。

＜覆土＞4層に細分され、炭粒、褐鉄、ブロック状の黄灰土が主体である。

＜出土遺物＞少量のかわらけ細片が出土した。

＜時期＞覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

#### 柱穴状土坑（第13図、写真図版15）

### 16区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	20	24	柱痕		3	36	24	柱痕		5	22	25		かわらけ細片
2	22	24			4	12	5			6	36	5		

<位置・検出状況> 7基検出された。建物の一部を構成する柱穴と思われるが、明確にできなかった。主に本区西寄りと東寄りに分布する。次のように重複するすべての遺構を切っている。P1は1号溝を切り、P2、P3は1号土坑を切る。また、P5は3号土坑を切り、P6は2号土坑を切っている。

<平面形・規模>円形を基調とするが、P2はややゆがんだ形をしている。径は12~36cm、深さは5~24cmである。

<覆土>P1、P3は柱痕が認められる。

<出土遺物>P5から少量のかわらけ細片が出土した。

<時期>不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 遺構外出土遺物（第24図、写真図版31）

包含層から79のコースター状かわらけ、80の常滑産壊破片が出土した。そのほかかわらけ細片が出土している。

### 17区

本区は47次調査区の中央からやや西よりに位置し、県道平泉・嚴美線の南側である。本区の西側の一部は宅地であったため、便橋が埋められていた部分が、深く擾乱を受けている。遺構の検出面はすべてⅢ層であるが、Ⅲ層上面は水田で削平され、その上に盛り土が施されて現在の地表面を形成している。検出された遺構は溝4条、土坑2基、柱穴状土坑10基である。

### 1号溝（第14図、写真図版17・18）

<位置・検出状況>本区中央からやや東によりに位置する南北方向の溝である。溝の北側及び南側はともに調査区外に伸びている。溝の長軸方向はN-3°-Eである。

<平面形・規模>帯状の溝で、検出部分の長さが2.0m、幅0.6~0.82m、深さ22cmを測る。

<壁・底面>底は内湾し、壁も内湾して立ち上がる。

<覆土>4層に細分される。褐鉄を含む褐色土及び灰色土が主体である。

<出土遺物>（第24図、写真図版31）4層から81のろくろ使用のかわらけが出土した。このかわらけはP8出土の破片と接合した。そのほか覆土中よりかわらけの細片が出土している。

<時期>出土遺物と覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 2号溝（第14図、写真図版18・19）

<位置・検出状況>本区中央に位置する南北方向の溝である。北端は調査区中央付近にあり、南端は調査区外に伸びる。溝の方向はN-0°-Wである。

<平面形・規模>細い帯状の溝で、検出部分の長さが、1.1m、幅13~16cm、深さ17cmを測る。

<壁・底面>底は内湾し、壁はやや外傾して、直立気味に立ち上がる。

＜覆土＞炭化物を多く含む黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 3号溝（第14図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞本区西よりに位置する南北方向の溝である。2号土坑に接続して北へ調査区外に伸びており、P8に切られている。2号土坑とは同時に開いていたと考えられる。溝の軸方向はN-0°-Wである。

＜平面形・規模＞帯状の溝で、幅20~25cm、長さ1.2m、深さ17cmを測る。

＜壁・底面＞底面は平坦で、壁は外傾ぎみに立ち上がる。

＜覆土＞2号土坑と共通する土で、オリーブ褐色土をブロック状に含む暗灰黄色土である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 4号溝（第14図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。擾乱で一部が破壊されていることと、上面が削平されていることから残存状況は悪く、一部が検出されたのみである。南北方向の溝と考えられる。P10によって切られている。

＜平面形・規模＞残存状況が悪いことから全体の形は不明である。長さは検出部分で50cm程、幅は不明である。

＜壁・底面＞ごく浅いため、明確ではないが、底部は平坦である。壁は調査時の不手際により掘り過ぎてしまったところがあり、不明である。

＜覆土＞溝と気づかず掘り進んでしまったため、詳しい記録は取っていないが、粘性がなく、締まりのある明黄褐色土である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 1号土坑（第14図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞本区東側に位置する。南側は調査区外に伸びており、全容は不明である。

＜平面形・規模＞不明であるが円形を基調とすると考えられる。径は0.9m、深さ25cmを測る。

＜壁・底面＞底面は平坦で、壁は内湾ぎみに立ち上がる。

＜覆土＞3層に細分され、炭粒を含む灰色土が主体である。上層は還元色で、酸化すると黄褐色に変化する。

＜出土遺物＞かわらけの細片が出土した。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀に属する可能性がある。

### 2号土坑（第14図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞調査区西よりに位置する。3号溝と北側でつながっており、南側は調査区外に伸びると思われるが、P9に切られている。

＜平面形・規模＞全容は明らかでないが隅丸の長方形を基調とすると思われる。径は0.75×1.2m、深さ30

17区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	24	41			4	22	30	柱痕		7	26	33	柱痕	かわらけ細片
2	24	50	柱痕	かわらけ細片	5	20	44		かわらけ細片	8	30	35		かわらけ細片
3	20	56		かわらけ細片	6	16	7			9	28			

cmを測る。

〈壁・底面〉底は内湾し、壁は外傾して立ち上がる。

〈覆土〉オリーブ褐色土ブロックを含む暗灰黄色土、及び黄灰色土が主体である。南壁際は一部酸化している。

〈出土遺物〉ない。

〈時期〉不明であるが、覆土の状況から12世紀に属する可能性がある。

#### 柱穴状土坑（第14図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉10基検出された。いずれも建物などを構成する柱穴と考えられるが、明らかにできなかった。擾乱の部分と西端を除いて、平均的に分布する。

〈平面形・規模〉円形を基調とする。径は16~30cm、深さは、7~50cmである。

〈覆土〉柱痕跡は検出されなかった。黄灰~暗黄灰色土が主体で、炭を含んでいることが多い。

〈出土遺物〉（第24図、写真図版31）P 8から出土したろくろ使用のかわらけ81は1号溝出土の破片と接合した。P 2、P 3、P 5、P 7、P 8、P 10かわらけの細片が出土している。

〈時期〉P 8に関しては12世紀に属すると考えられる。他の柱穴も出土遺物や覆土が類似することから、同時代の可能性が高い。

#### 遺構外出土遺物（第24図、写真図版31）

包含層から82の鉄滓やかわらけ細片が出土している。

#### 18区

本区は47次調査区の西側に位置する。県道平泉巣美線の南側である。本区の調査は南側が営業を行っていることから東半と西半とに分割して行った。宅地であったため、西側は端を残して深く擾乱を受けており、東側は水田により削平されている。遺構が検出されたのは西端のみである。検出面のⅢ層も水田により削平されていると思われる。遺構は溝が2条（うち1条は19区から続いている。）が切り合って検出された。

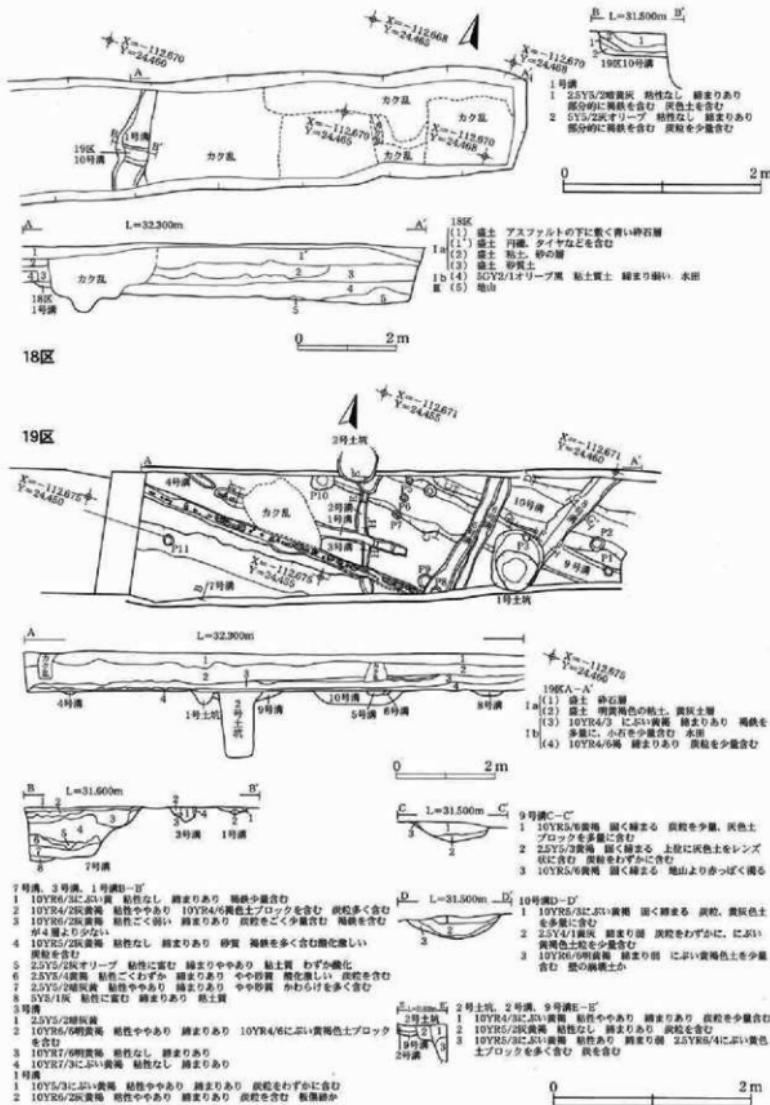
#### 1号溝（第15図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉本区西端から検出された南北方向の溝である。北側の東壁は擾乱により一部削られている。溝の中央からやや南よりの地点で、19区10号溝と切り合っており、本溝の方が新しい。10号溝は本溝の底面で検出された。溝の方向はN-2° -Wである。

〈平面形・規模〉帯状の溝で、幅40~60cm、長さ2.1m、深さ20cmである。

〈壁・底面〉底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

〈覆土〉部分的に褐鉄、炭粒を含む暗黄灰色土及び灰オリーブ色土である。



第15図 18区・19区 (1)遺構地平面図・断面図

<出土遺物>かわらけの細片が少量出土した。

<時期>不明であるが、覆土の状況などから12世紀に属する可能性が高い。

#### 遺構外出土遺物

検出面からかわらけ細片が出土している。

#### 19区

本区は47次調査区の西側に位置し、県道平泉巣美線の南側である。本区南側の宅地部分は平成6年に町教育委員会が32次調査を行っており、柱穴33基、溝跡6条、堀跡1条、詳細不明遺構1基が検出されている。

本区の遺構はすべてⅢ層で検出されているが、直上は酸化層で、上の水田の影響を受けている。おそらく検出面は水田によって、いくぶん削平されているものと考えられる。本区から検出された遺構は溝10条（うち2条は堀跡）、上坑2基（うち1はトイレ遺構）、柱穴状土坑11基である。

#### 1号溝跡（堀跡）（第16図、写真図版19・21・22）

<位置・検出状況>本区西側から検出された。擾乱によって一部破壊されている。本溝の西側延長線上に、4号溝が存在する。また、2号溝を切っており、3号溝（堀跡）とは平行に走る東西方向の溝である。方向はN-89° -Eである。

<平面形・規模>帯状の溝である。長さ4.2m、幅15~29cm、深さ8cmを測る。

<壁・底面>底は平坦で、壁はやや外形して立ち上がる。西端には板の痕跡が観察される。2~4cm厚で、8~16cmの長さの板を溝底に打ち込んでいる。覆土中で板の痕跡が観察されるか確認しなかったので確かではないが、堀を造る際、布掘りの溝の底に若干打ち込んでいるのではないかと考えられる。中央及び東側からは板の痕跡は検出されなかった。東側には落ち込んでいる部分がある。

<覆土>2層に細分され、上層は褐鉄、浅黄色土をブロック状に含むにぶい黄褐色土、下層は浅黄色土をブロック状に含む灰黄褐色土である。埋め戻したと考えられる。

<出土遺物>かわらけの細片が少量出土した。

<時期>遺構の形態や覆土の状態から、12世紀に属する可能性が高い。

#### 2号溝跡（第15・16図、写真図版19）

<位置・検出状況>本区中央に位置する南北方向の溝である。1号溝、2号土坑に切られ、3号溝、9号溝を切っている。南側は調査区外に伸びているが、32次調査では検出されていない。溝の方向はN-20.5° -Wである。

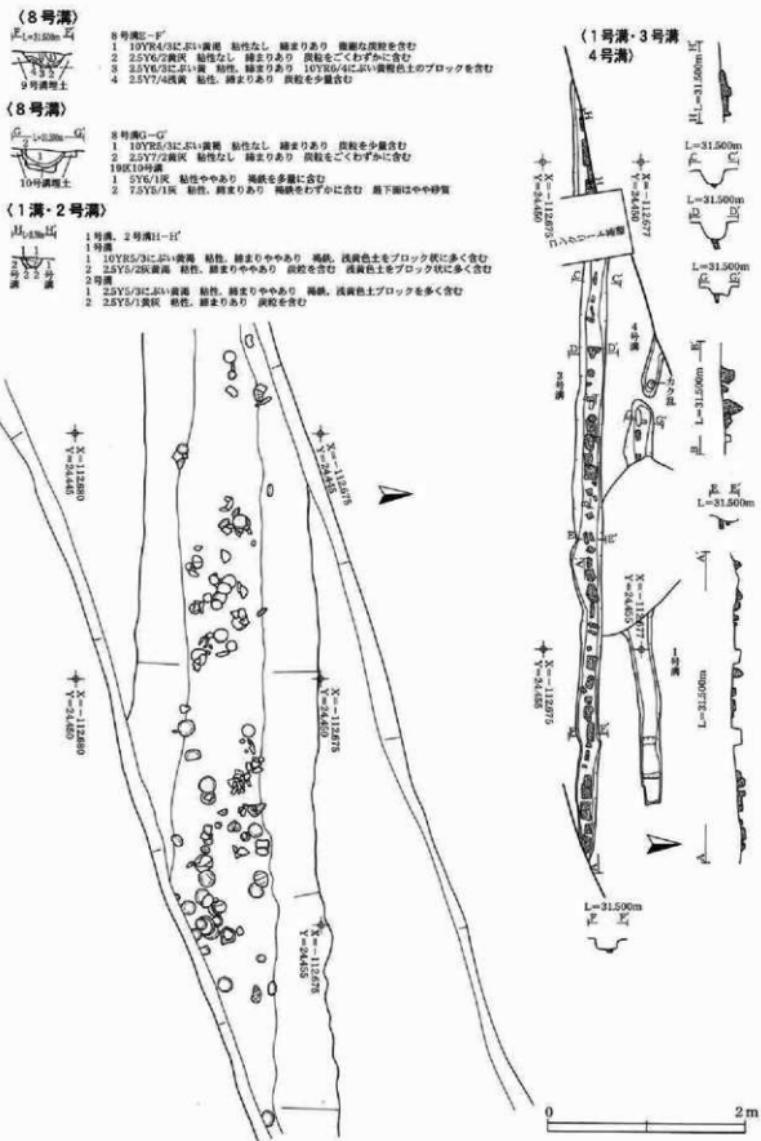
<平面形・規模>若干蛇行するが、帯状の溝である。長さは検出部分で2.0m、幅12~22cm、深さ10cmを測る。

<壁・底面>底は内湾し、壁は外傾して立ち上がる。

<覆土>上面に褐鉄、浅黄色土ブロックを含むにぶい黄褐色土、下面は炭粒を含む黄灰色土である。

<出土遺物>かわらけの細片が出土した。

<時期>不明であるが、覆土の状態から12世紀に属する可能性が高い。



第16図 19区(2)造橋平面図・断面図

### 3号溝（堀跡）（第16図、写真図版19・21・22）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する東西方向の溝である。2号溝に切られる。西側は20区に延長が伸び、東側は調査区外に伸びている。東側で5号溝と切り合っているが、接する部分がわずかなため、新旧関係は明らかにできなかった。溝の方向はN-87.3°-Wである。

＜平面形・規模＞帯状の溝である。長さは20区で検出された部分も含めると8.0m、幅16~33cm、深さ17cmである。

＜壁・底面＞底は平坦、あるいはやや内湾気味で、壁は外傾して直立気味に立ち上がる。底面には厚さ2~9cm、長さ6~23cmの木材を打ち込んだ跡が観察された。覆土中では検出が困難であったが、おそらく布振りの溝の底面に堀の木材を若干打ち込んで、固定しているものと考えられる。

＜覆土＞暗灰褐色土やにぶい黄褐色土ブロックを含む明黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。＜時期＞覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 4号溝（第16図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞調査区北西隅に位置する。1号溝の延長線上にごくわずかに離れてある溝で、西側は調査区外に伸びている。ただし、1号溝とは長軸方向をやや異にしており、N-77.2°-Wである。

＜平面形・規模＞ごく一部の検出のため、明らかでないが帯状の溝である。長さは0.64m、幅18cm、深さ4cmである。

＜壁・底面＞底は内湾してゆるやかに立ち上がる。

＜覆土＞1号溝と同様ににぶい黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。＜時期＞不明であるが、遺構の検出状況や覆土などから12世紀の可能性が高い。

### 5号溝（第15図、写真図版19・22）

＜位置・検出状況＞本区東側に位置する南北方向の溝である。6号溝と平行しているが、一部切り合っており、本溝の方が新しい。3号溝と一部接しているが、新旧関係は不明である。さらに直行する9号溝、及び10号溝を切り、P8、P9を切っている。南側及び北側は調査区外に伸びているが、南側調査区の32次調査では検出されていない。溝の方向はN-13.5°-Eである。

＜平面形・規模＞南側がやや広がる帯状の溝である。長さは検出部分で2.8m、幅20~40cm、深さ8cmである。

＜壁・底面＞底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

＜覆土＞締まりのある黄灰にぶい黄褐色土である。

＜出土遺物＞クロクロ使用のかわらけを含むかわらけの細片が出土している。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

### 6号溝（第15図、写真図版19・22）

＜位置・検出状況＞本区東側に位置する南北方向の溝である。5号溝と平行しているが北側で5号溝に切られている。直交する9号溝、10号溝を切っている。南側調査区の32次調査では検出されていない。方向はN-4.8°-Eである。

＜平面形・規模＞帯状の溝で、長さは検出部分で2.5m、幅15~20cm、深さ8cmを測る。

<壁・底面>底は平坦で、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。  
<覆土>縫まりのある黄灰～にぶい黄褐色である。  
<出土遺物>ない。  
<時期>不明であるが、覆土の状況から12世紀に属すると考えられる。

#### 7号溝（第16図、写真図版19～21）

<位置・検出状況>本区西側に位置する。20区から連続して検出された東西方向の大溝で、南側の壁は調査区外にある。3号溝（辨跡）とほぼ平行して走るが、東端では両者は接近している。20区3号柱列に切られている。また、1号柱列とも重複しているが、新旧を明らかにできなかった。南側調査区の32次調査では1号溝として報告されている。溝の方向はN-88.5°-Wである。  
<平面形・規模>広い帯状の溝で、20区検出分を含めると長さ8.2m、幅1.68～1.96m、深さ0.56mを測る。  
<壁・底面>底は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。  
<覆土>8～10層に細分される。上面は微細な炭を含むやや酸化した灰黄褐色で、中位～下位は粘性の非常に強い土と砂質土が交互に層になって堆積する。これらの状況から、本造構には水が流れていると推測される。  
<出土遺物>（第25～29図、写真図版32～36）19区と20区の境付近を中心に大量のかわらけが底面及び底面からやや浮いた状態で出土した。133～249である。復元できたかわらけの数は111個である。復元個体数が多いことと、出土状態から、水が流れている時に完形のものを投げ捨てたと考えられる。そのほか覆土の上面から268、270の中国産陶磁器、250～267の渥美産、常滑産国産陶器、268の中国産青磁破片、269の中国産白磁破片、かわらけと同じ層位から271の瓦、272の羽口、273の漆紙が出土している。  
<時期>出土遺物から12世紀に属する。

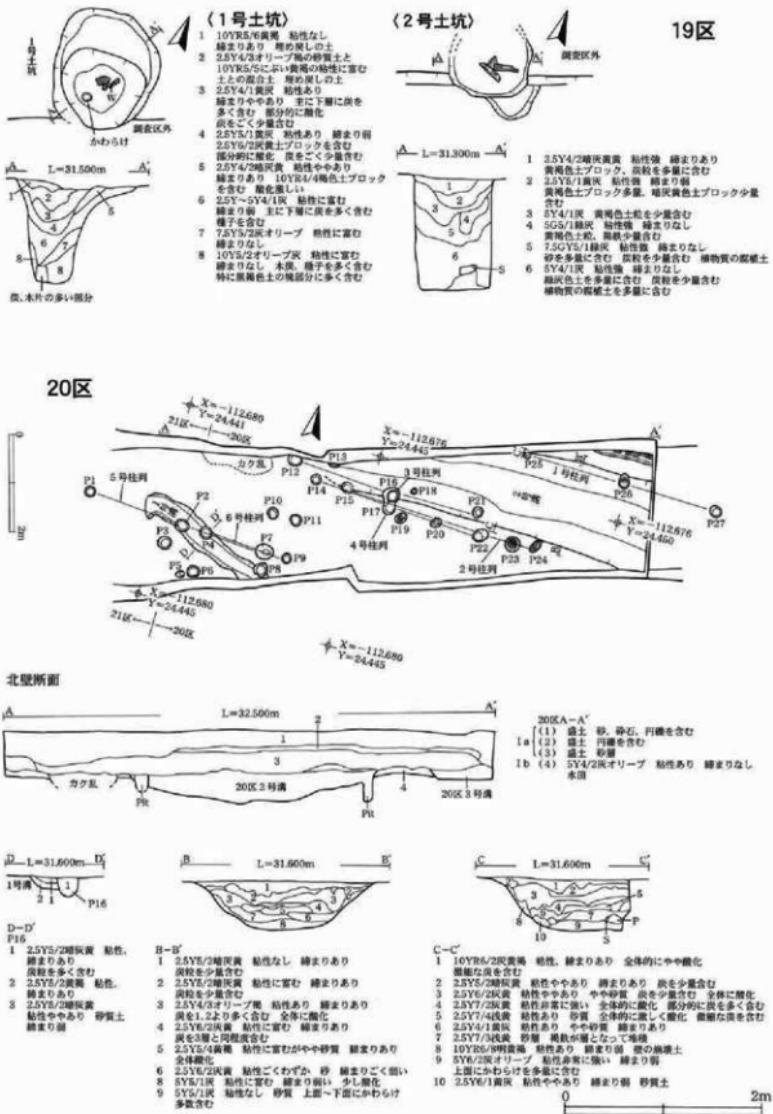
#### 8号溝（第15図、写真図版19・20）

<位置・検出状況>本区東側に位置する南北方向の溝である。1号土坑を切り、9号溝、10号溝を切っている。北側及び南側は調査区外に伸びており、32次調査では、6号溝として、報告されている。方向はN-22.3-Eである。  
<平面形・規模>帯状の溝で、長さは検出部分で3m、幅40cm、深さ18cmである。  
<壁・底面>底は内湾し、壁もやや内湾気味に立ち上がる。  
<覆土>2～4層に細分され、炭粒を含むにぶい黄褐色土あるいは黄灰色土が主体である。  
<出土遺物>かわらけの細片が出土した。  
<時期>不明であるが、重複関係や覆土の状況から12世紀に属する可能性がある。

#### 9号溝（第15図、写真図版19・23）

<位置・検出状況>本区東半から中央にかけて検出された東西方向の溝である。東側と西側は調査区外に伸びている。重複する造構はP10、2号土坑、2号溝、5号溝、6号溝、8号溝、1号土坑で、いずれの造構よりも古い。P4、P5、P6、P7、P3、P1とも重複する。また、10号溝と平行している。方向はN-86.5°-Wである。

<平面形・規模>幅がふくらんだり、細くなったりするが帯状の溝で、長さは検出部分で6.3m、幅50～



第17図 19区(3)・20区(1)造構平面図・断面図

90cm、深さ20cmを測る。

＜壁・底面＞底は内湾し、壁も内湾して立ち上がる。

＜覆土＞3層に細分され、炭粒を少量、灰色土ブロックを多量に含む固く締まった黄褐色土が主体である。

＜出土遺物＞ない。＜時期＞切り合ひ関係や覆土の状況から12世紀と考えられる。

#### 10号溝（第15図、写真図版19・23）

＜位置・検出状況＞本区東半から検出され、9号溝と平行して走る東西方向の溝である。5号溝、6号溝、8号溝、P2、18区1号溝と重複し、いずれの造構よりも古い。溝の西側は調査区外に伸び、東側は攪乱で切られている。方向はN-86.5-Wである。

＜平面形・規模＞幅が細くなるところもあるが帯状の溝で、長さが検出部分で6.0m、幅0.8~1.0m、深さ28cmを測る。

＜壁・底面＞底は内湾し、壁も内湾して立ち上がる。

＜覆土＞炭粒、黄灰色土を含む固く締まったにぶい黄褐色土、黄灰色土が主体である。

＜出土遺物＞（第28図、写真図版36）275は、中層より出土したろくろ使用の大皿である。そのほか覆土中よりかわらけの細片が出

土している。

＜時期＞出土遺物、覆土の状況から12世紀に属する。

#### 1号土坑（第19図、写真図版19・23）

＜位置・検出状況＞本区東側に位置する。土坑の南側の上端は調査区外に伸びている。8号溝に切られ、9号溝、P3を切っている。

＜平面形・規模＞円形を基調としている。径は1.22×1.08m、深さ1.05mである。

＜壁・底面＞底は平坦で、南壁は外傾しながら直立気味に立ち上がる。北壁は上端より下端がかなり小さく、距離があるため底面から直立気味に立ち上がり、上端にいたって開いている。

＜覆土＞8層に細分される。2層はオリーブ褐色の砂質土で、埋め戻したような土である。以下は種子などを含む土で、特に下層は木の葉、炭、木片の多い部分が塊状に堆積している。

＜出土遺物＞（第24図、写真図版31）北壁付近の6層から埴が出土した。また、8層の木の葉が多く出土している層から85の小型のづくねかわらけが出土した。そのほか7層、8層からちゅう木と思われる木片が出土している。87から100は木製、101、102は半裁の竹製である。そのほか83、84のかわらけ、多量のかわらけ細片、種子類が出土し、寄生虫卵などが検出されている。これらの種子と寄生虫卵については分析結果が出ている。種子、寄生虫卵、ちゅう木と思われる木片の出土から本造構は造構と推定した。

＜時期＞出土遺物、覆土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

#### 2号土坑（第19図、写真図版19・23）

＜位置・検出状況＞本区中央の北壁付近に位置する。造構の大部分は調査区外に伸びている。2号溝、9号溝を切っている。造構の北壁は歩道の下にあるため調査できなかった。

＜平面形・規模＞円形を呈するが東側に段を持つ。径は0.95m、深さ1.12mである。

＜壁・底面＞底は平坦で、ほぼ壁は直立して立ち上がる。

＜覆土＞6層に細分される。粘性の強い灰～緑灰色土が主だが、5層には砂を多量に含み、下層の6層は植物の腐食土と思われる。最下層には、周囲と異なるやや黒みがかった層が堆積している。6層を寄生虫、種子、花粉分析を行ったところ、糞便は含まれているものの、便所である可能性は、低いとの分析結果を得ている。

＜出土遺物＞（第24～25図、写真図版32）底面付近よりちゅう木と思われる細い木製品が多く出土した。105～129である。そのうち128、129は竹を半裁したものである。130～132は自然木の枝を利用したちゅう木か。覆土から104の砥石が出土しており、P4出土の破片と接合している。103のかわらけは底面の直上より出土したものである。また、覆土中よりかわらけの細片が多く出土している。

＜時期＞覆土の状況、出土遺物から12世紀に属すると考えられる。ちゅう木が多く出土していることから、檜そのものではないにしても、トイレに関連するちゅう木の廐糞坑などの可能性が高い。

#### 柱穴状土坑（第15図、写真図版19）

＜位置・検出状況＞ 10基検出された。8号溝、9号溝、10号溝沿いに分布し、特に9号溝沿いからは北壁に添って、多く検出されている。

＜平面形・規模＞円形を基調としているが、P10はやや角ばっており、径も48cmと大きい。9号溝沿いの柱穴はP4が28cmのほかは14～22cm、深さ15～24cmと小型である。その他は径20～30cm、深さ14～25cmである。

＜覆土＞炭を含んだ黄褐色～ぶい黄色土が多い。柱痕跡は、検出できなかった。

＜出土遺物＞（第24図、写真図版31）P4上層から104の砥石が出土し、2号便所跡出土の破片と接合している。P1、P2からかわらけの細片が出土している。

＜時期＞覆土の状況などから12世紀に属する可能性が高い。

#### 遺構外出土遺物（写真図版31）

検出面から276の渥美産陶器、277の常滑産陶器のほか、多くのかわらけ細片が出土している。

#### 19区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	22	24		かわらけ細片	5	14	26			9	28	19		
2	30	25		かわらけ細片	6	18	15			10	48			
3	18	27			7	18	29			11	24	23		
4	28	21			8	20	14							

#### 20区

本区は47次調査区の西側で、県道平泉・巣美線の南側に位置する。本区もⅢ層まで水田によって削平され、その上に盛り土をして現在の地表面が形成される。本区の南側は営業地であることから通路確保のため、西半と東半に分けて調査を行った。東半は19区から続く遺構が多かったため、19区と同時に調査を行っている。また、先に西半の調査を行ったため、19区から延びる7号溝の上場がちょうど境部分になってしまい、掘り残しが生じて、はっきりと検出することができなかった。

検出された遺構は柱列6条、溝2条（うち1条は19区7号溝の延長）、柱穴状土坑11基である。検出面はⅢ層

であるが、もとは西半は東半より標高が高かったとみえ、水田造成によって、より深く削られているらしい。

#### 1号溝（第18図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本溝は調査区西側に位置する東西方向の溝である。本造構と5号柱列、6号柱列は重複関係にあり、本溝の方が古い。溝の西端は南に若干曲がって消え、東側は調査区外に伸びている。溝の軸方向はN-68°-Wである。

＜平面形・規模＞帯状の溝で西端で若干南に曲がり、その後は徐々に消えてなくなる。おそらく削平を受けて消滅したと思われる。長さは検出部分で3m、幅30~50cm、深さ11cmである。

＜壁・底面＞底は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。

＜覆土＞2層に細分される。灰褐色土が主体である。＜出土遺物＞ない。

＜時期＞覆土の状況などから12世紀に属すると推定される。

#### 2号溝（19区7号溝と同じ）

##### 1号柱列（第18図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本区北東隅から19区西側にかけて位置する東西方向の柱列である。19区7号溝の北壁上場付近から検出されており、重複している。本柱列の方が古いと思われるが、確認できなかった。柱穴は3基で、2間分が検出されている。軸方向はN-89°-Wである。

＜平面形・規模＞検出された部分の柱間は西から2.0m、2.0mで、全長は4.1mである。柱穴は円形、梢円形を基調とする。径は12~28cm、深さ28~35cmである。

＜覆土＞P26に柱痕が確認された。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞覆土の状況、重複関係などから12世紀に属すると考えられる。

##### 2号柱列（第18図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本区中央から検出された東西方向の柱列である。19区7号溝の南壁に沿って検出された。3号柱列、4号柱列と軸方向をほぼ同じくし、重複している。西端P15は19区7号溝の延長部分南壁上場付近と重複していると考えられるが、新旧は明らかにできなかった。軸方向はN-88°-Wである。

＜平面形・規模＞柱間は西から1.9m、2.0mで、全長4mである。柱穴は円形を基調とするが、東端のP24は長円形で、径12~28cm、深さ15~36cmを測る。

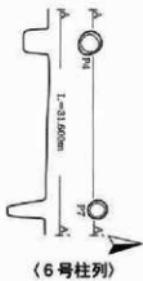
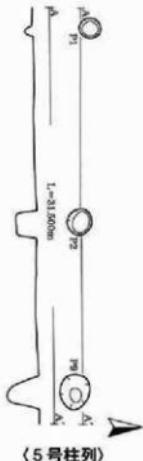
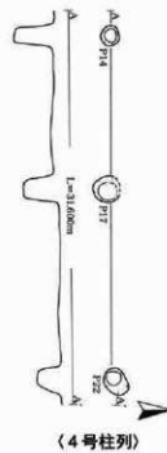
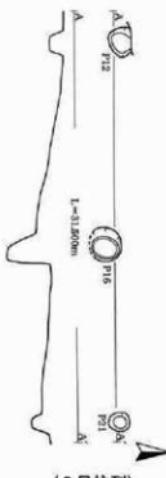
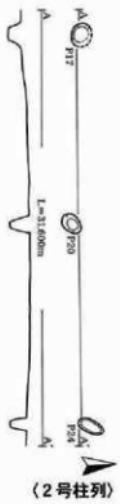
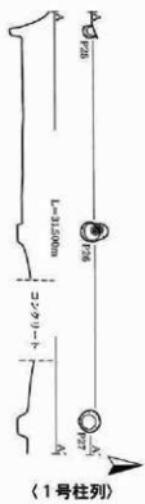
＜覆土＞P26に柱痕が確認された。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞覆土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

##### 3号柱列（第18図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本区中央から検出された東西方向の柱列である。2号柱列、4号柱列と軸方向をほぼ同じくしているが、それよりやや北側に位置している。また、P12が19区7号溝と一部が切り合っており、本柱穴の方が新しい。軸方向はN-89.5°-Eである。



第18図 20区(2)造構平面図・断面図

＜平面形・規模＞柱間は西から2.15m、1.80mで、全長4.3mである。柱穴は円形を基調とする。径22～34cm、深さ16～44cmを測る。

＜覆土＞おむね灰黄褐色土である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞礪土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

#### 4号柱列（第18図、写真図版24）

＜位置・出土状況＞本区中央から検出された東西方向の柱列である。2号柱列と軸方向をほぼ同じくしており、重複しているが、直接柱穴が切り合っていないため、新旧は不明である。19区7号溝の南壁に沿って検出された。軸方向はN-88°-Wである。＜平面形・規模＞柱間は西から1.65m、1.9mで、全長3.78mである。柱穴は円形、長円形を基調とする。径27～29cm、深さ27～42cmを測る。

＜覆土＞おむね灰黄褐色土である。

＜出土遺物＞（写真図版36）P14から278のかわらけが出土した。

＜時期＞礪土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

#### 5号柱列（第18図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本区中央から検出された東西方向の柱列である。2号柱列、3号柱列、4号柱列と軸方向をほぼ同じくしているが、それより、約1.8m南側に平行に検出された。6号柱列と重複しているが直接柱穴が切り合っていないため、新旧は不明である。軸方向はN-90°-Eである。

＜平面形・規模＞柱間は西から2.0m、1.8mである。全長4.0mである。柱穴は円形、長円形を基調とする。径23～37cm、深さ8～33cmを測る。

＜覆土＞おむね灰黄褐色土である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞礪土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

#### 6号柱列（第18図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本区中央から検出された東西方向の柱列である。2基の柱のみの検出であるが、町教育委員会が行った南側の調査区や周辺の遺構の状況から柱列とした。2号柱列、3号柱列、4号柱列、5号柱列と軸方向をほぼ同じくしている。2～4号柱列のほぼ1.8～2.0m南側に平行に検出されている。5号柱列とは重複しているが、直接柱穴が切り合っていないため、新旧は不明である。軸方向はN-88.5°-Wである。

＜平面形・規模＞柱間は1.73mである。柱穴は円形を基調とする。径20～25cm、深さ25～40cmを測る。

＜覆土＞おむね灰黄褐色土である。

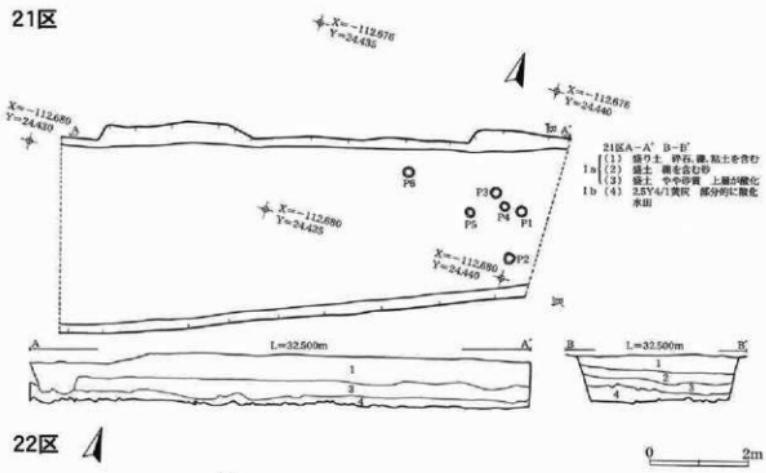
＜出土遺物＞ない。

＜時期＞礪土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

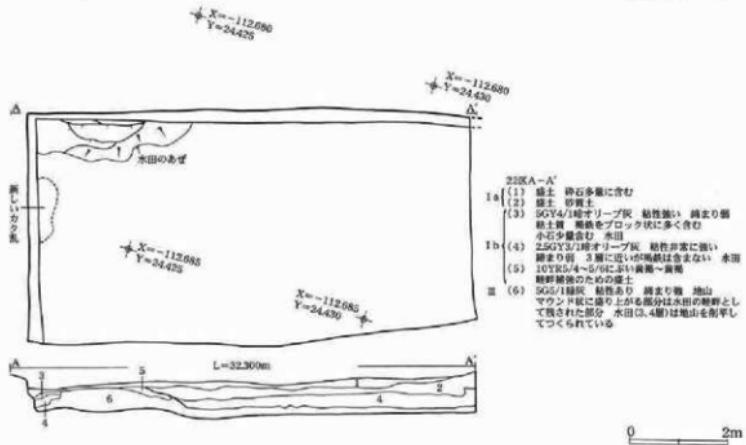
#### 柱穴状土坑（第17図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞本区の主に西側と19区7号溝延長部分の南側に沿って検出された。12基の柱穴状土坑である。建物などを構成する柱穴と考えられるが、確認できなかった。

## 21区



## 22区 A



第19図 21区・22区造構平面図・断面図

20区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
3	28	—			10	22	—			18	14	13		かわらけ細片
5	16	—			11	22	—			19	24	23		
6	24	—			13	20	—		かわらけ細片	23	28	66		
8	30	—			17	26	32		かわらけ細片	27	20	—		

<平面形・規模>円形を基調とする。径は14~30cm、深さは13~66cmを測る。

<覆土>灰色、灰オリーブ褐色土で、粘性に富む。

<出土遺物>P13、P17、P18からかわらけの細片が出土している。

<時期>覆土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

#### 遺構外出土遺物

北西隅から源美産陶器破片、検出面全域からかわらけの細片が出土している。

#### 21区

本区は47次調査区の西側で、県道平泉巣美渓線の南側に位置する。水田によってⅢ層まで水平に削平されており、水田の上は盛土によって現在の地表面が形成されている。もともとは西によるほど標高が高かつたと見られ、結果として西側はより深く削られているようである。そのためか東側を除いて、遺構は検出されていない。検出された遺構は柱穴状土坑5基、20区1号掘立柱建物跡1棟の延長部分で、検出面はⅢ層である。

#### 柱穴状土坑（第19図、写真図版24）

<位置・検出状況>本区東よりに位置する。5基の柱穴状土坑である。検出面のⅢ層は深く削平を受けていること見られ、いずれも浅い。建物などを構成する柱穴と思われるが、確認できなかった。

<平面形・規模>円形を基調とする。径は20~24cm、深さは5~17cmである。

<覆土>灰色~灰オリーブ色土で、粘性、締まりに富み、炭粒を含む。

<出土遺物>ない。

<時期>覆土の状況などから12世紀に属すると考えられる。

#### 21区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
2	24	17			4	22	5		かわらけ細片	6	22	9		
3	20	8	かわらけ細片		5	20	10							

#### 遺構外出土遺物

ない。

#### 22区（第19図、写真図版26）

本区は47次調査区の西側に位置する。水田の造成によって、Ⅲ層が深く削平されており、遺構、遺物の

検出はなかった。現地表面は水田の上に盛り土をして形成されている。本区北西隅にあぜとして残された部分から推定するとⅢ層は40~50cmは削られていると考えられる。

#### 23区（第20図、写真図版25）

本区は47次調査区の西側に位置する。現在は水田で、その造成のためⅢ層まで削られている。遺構、遺物の検出はなかった。

#### 24区（第20図、写真図版25）

本区は47次調査区の西側に位置する。県道平泉・嚴美浜線と町道の間にはさまれた三角形の地帯である。かつては水出で、その造成のためⅢ層まで削半されている。現在の地表面はその上に盛り土をして形成されている。遺構、遺物は検出されなかった。

#### 遺構外出土遺物（第29図、写真図版36）

擾乱から280のすり鉢、I層から281のキセル、282の在地産陶器が出土している。

#### 25区（第21図、写真図版25）

本区は47次調査区の西側で、24区の町道立石線を挟んだ南側に位置する。現在の地目は畑である。本区も擾乱がⅢ層まで入り、遺構遺物は検出されなかった。

#### 26区（第21図、写真図版25）

本区は47次調査区の西端で、県道平泉・嚴美浜線の南側である。調査区が矮小なため、よく確認できなかったが、Ⅲ層までおそらく水田などによる擾乱が入り、現在の地表面は盛り土によって形成されている。遺構、遺物は検出されなかった。

#### 27区（第21図、写真図版26）

本区は47次調査区の最西端で、県道平泉・嚴美浜線の南側である。本区は遺跡としては倉町遺跡に含まれる地区である。擾乱によってⅢ層もかなり削られており、盛土もされている。遺構の残存状況は悪く性格が不明なものもある。遺構の検出面はⅢ層である。

検出された遺構は溝2条、鍛冶関連の遺構が1基、不明遺構が1基、柱穴状土坑が5基である。

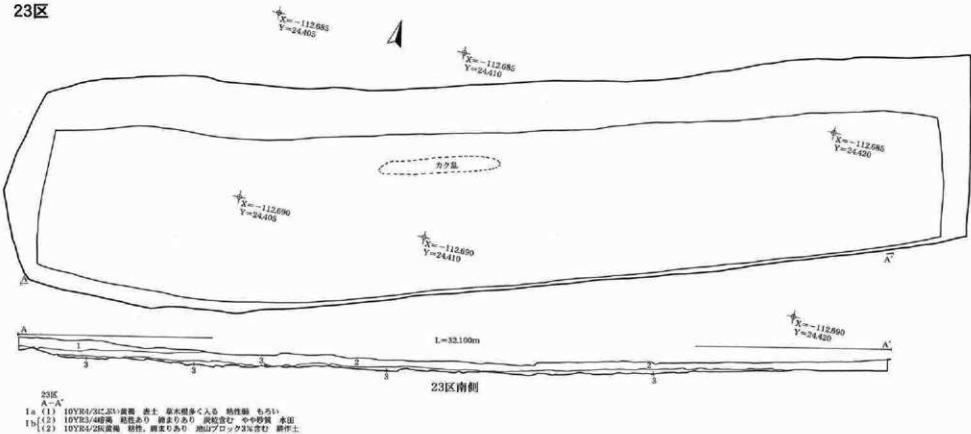
本区の南側の一部は平成4年に倉町遺跡第1次調査が行われ、3つの遺構が検出されている。調査区が矮小なため、いずれも性格は明確ではないが、ひとつからは椀型泮や羽口が出土している。本区の1号鍛冶関連遺構は1次調査の遺構1、1号不明遺構は1次調査の遺構2の延長部と考えられる。

#### 1号溝跡（第21図、写真図版26）

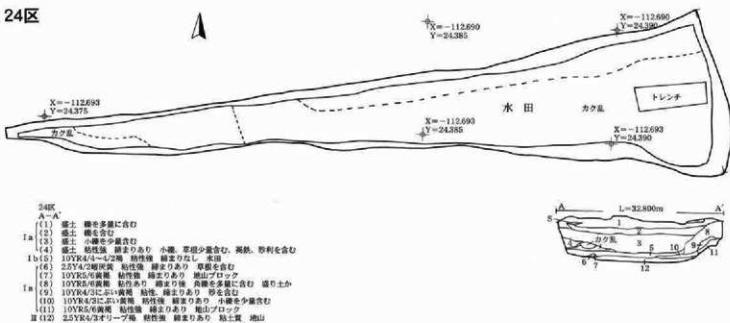
＜位置・検出状況＞本区北側に位置する東西方向の溝で、北側は調査区外に伸びている。西側、東側も調査区外に伸びる。本溝の上を新しい側溝が流れしており、その側溝はごく最近客土によって埋められている。検出された部分は北壁を徐く溝の一部である。2号溝と重複しており、本溝の方が新しい。

＜平面形・規模＞帶状の溝と思われるが、北側が調査区外に伸びているため不明である。本区内で若干蛇行

23区

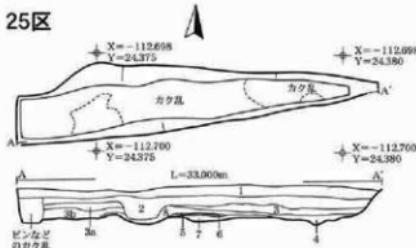


24区

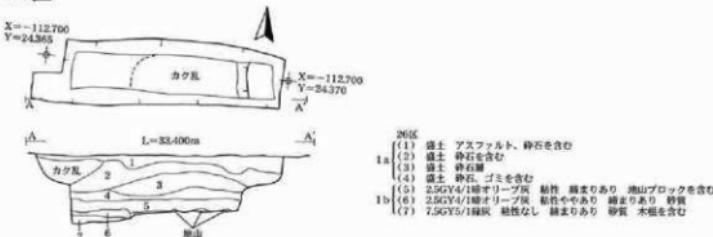


第20図 23区・24区平面図・断面図

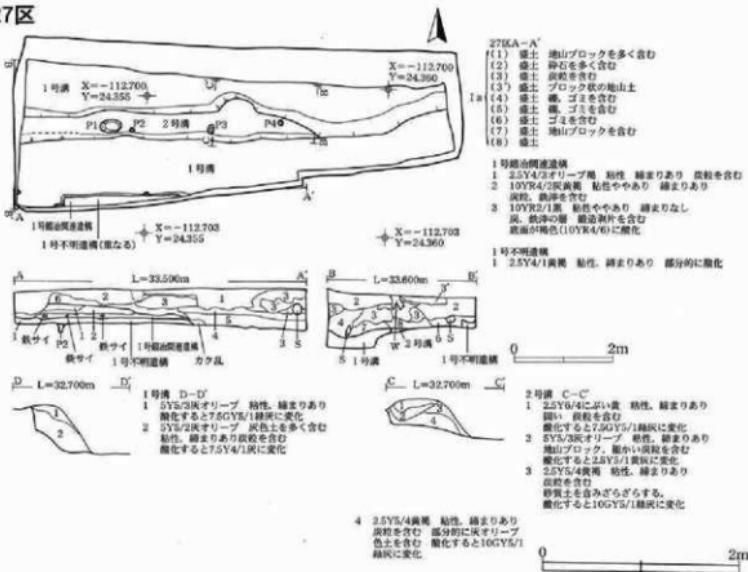
25区



26区



27区



第21図 25区・26区・27区造構平面図・断面図

する。幅は検出部分で最大1.1m、長さ8.7m、深さ0.9mである。

＜壁・底面＞底は平坦で、壁はやや外傾気味に段をもって立ち上がる。

＜覆土＞ほとんど削平されているが、灰オリーブ色土で、粘性に富む。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞覆土の状況から12世紀に属すると推定される。

#### 2号溝跡（第21図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞本区北側に位置する東西方向の溝で、1号溝に切られている。

＜平面形・規模＞帯状の溝であるが、1号溝に切られているため、全容は不明である。長さは検出部分で6.1m、深さ10~50cmである。

＜壁・底面＞底は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。

＜覆土＞4層に細分され、にぶい黄色土、灰オリーブ色土、黄褐色土で、炭粒や地山上のブロックを含み、一部は砂を含んでいる。すべて還元状態で検出され、酸化すると緑灰や黄灰、灰オリーブ色に変化する。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞覆土の状況から12世紀に属すると推定される。

#### 1号鍛冶関連遺構（第21図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞本区南側に位置する。遺構の北側及び西側は擾乱によって消滅し、東側は調査区外に伸びている。検出された部分はごく矮小で、遺構の形態などは不明である。平泉町教育委員会が行った倉町遺跡1次調査の遺構1とつながると思われる。また、1号不明遺構と上下に重なって検出されており本遺構が新しい。

＜平面形・規模＞大部分が削平されているため、2.6m×20cmとごく矮小な部分のみ検出された。

＜壁・底面＞底面はごく水平である。壁は不明。

＜覆土＞3層に細分される。上層は炭粒を含むオリーブ褐色土で、その下の2層には炭粒や鉄滓が含まれる。浮下層からは炭粒、鉄滓に加えて、鍛造剥片も多く検出された。

＜出土遺物＞（第29図、写真図版36・37）285の羽口、286~288の鉢型岸、289の粒状岸、290~292の鍛造剥片が検出された。

＜時期＞今次調査では時期を決定できる遺物は出土していないが、倉町遺跡1次調査では遺構1からかわらけ片が出土していることから12世紀もしくはそれ以降と推定している。

#### 1号不明遺構（第21図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞本区南側に位置する。遺構の北側及び西側は擾乱によって消滅し、東側は調査区外に伸びている。検出された部分はごく矮小で、遺構の形態などは不明である。1号鍛冶関連遺構の直下に重なって検出された。

＜平面形・規模＞大部分が削平されているため、2.6m×20cmとごく矮小な部分のみ検出された。

＜壁・底面＞底面は水平である。壁は不明。

＜覆土＞単層で、部分的に酸化した黄褐色土である。

＜出土遺物＞ない。

27区柱穴計測表

No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	46	12			3	18	6			4	10	11		
2	8	11												

<時期>重複関係から1号鍛冶関連遺構よりも古く、12世紀かそれ以降と推定される。

#### 柱穴状土坑（第21図、写真図版26）

<位置・検出状況>本区2号溝の壁に4基と南側の調査区壁際に1基がある。2号溝の壁際のP1～P4は2号溝との新旧関係は明らかにできなかった。あるいは壁に取りつく土留めのような杭の可能性もある。調査区南壁際のP5は1号不明造構、2号不明造構より古い。

<平面形・規模>円形もしくは梢円形を呈し、径8～46cm、深さ6～12cmを測る。

<覆土>暗灰オリーブ色を呈し、粘性に富む。

<出土遺物>ない。

<時期>覆土の状況から12世紀に属する可能性がある。

#### 遺構外出土遺物（第30図、写真図版36～38）

新しいと考えられる石敷きの下から282、283の土製品、擾乱から293～295の常滑産、296～298の渥美産の陶磁器、299の瓦のほか、300の十錢硬貨、301～305のすり鉢、306～309の大堀相馬産などの陶器、310～313の肥前産、平清水産などの磁器、そのほか近世～近代にかけての瓦、キセル吸い口、317の不明の木製品が出土している。

#### 46区

本区は47次調査区の東寄りで、県道平泉・厳美淡線の北側に位置する。現況は水田で、観自在王院や毛越寺ののる段丘から一段下がった場所である。検出面はⅢ層であるが、水田の造成によって削平されているものと考えられる。検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝3条、土坑1基、柱穴状土坑33基である。

#### 1号掘立柱建物跡（第22図、写真図版27・28）

<位置・検出状況>本区東側に位置する。部分のみの検出なので、真に建物跡となり得るか確信は持てないが、埋土と柱の並びから建物跡として報告することにした。検出分は2間×1間分で、柱穴は4基である。輪線方向はN-20° - Eである。2号掘立柱建物跡、3号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。

<平面形・規模>南側柱列の柱間は1.5m、1.75m、東側柱列の柱間は1.9mである。柱穴の径は28～36cm、深さ13～48cmを測る。

<覆土>P10、P23からは柱痕が検出された。P10の柱痕は13cm、P23の柱痕は8×20cmである。暗オリーブ褐色土のブロックを含む黄褐色土が主体である。

<出土遺物>P14からかわらけの細片が出土している。

<時期>不明であるが、本次調査の14区、15区付近で検出される12世紀に属すると思われる建物跡の埋土と異なり、全体に黒っぽい土である。このちがいは時期差を示すものかも知れないが、不明な点が多い。

### 2号掘立柱建物跡（第22図、写真図版27・28）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。1間×2間分が検出されたが、大部分は調査区外に伸びていると考えられる。そのため、建物跡になり得るか不明な点も残る。

＜平面形・規模＞柱間は南北方向が1.95m、東西方向が1.7mである。南北の柱方向はN-2°-Wを示す。柱穴は4基検出され、平面は円形、長円形である。径は18~35cm、深さは32~53cmである。

＜覆土＞P7を除き、柱痕が認められる。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀の可能性も考えられる。

### 3号掘立柱建物跡（第22図、写真図版27・28）

＜位置・検出状況＞本区西側に位置する。1間×1間分が検出されたが、大部分は調査区外に伸びていると考えられる。そのため、建物跡になり得るか不明な点も残る。

＜平面形・規模＞柱間は南北方向が1.59m、東西方向が1.84mである。南北の柱方向はN-4°-Wである。柱穴は3基検出され、平面形は円形、不整形である。径は27~37cm、深さは25~38cmである。

＜覆土＞すべての柱穴に柱痕は認められなかった。地山のブロックや炭を含む黄褐色土、灰オリーブ色土である。

＜出土遺物＞ない。

＜時期＞不明であるが、覆土の状況から12世紀の可能性も考えられる。

### 1号溝（第22図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞木調査区西端に位置する南北方向の大溝である。北側及び南側は調査区外に伸びている。

＜平面形・規模＞幅の広い大溝で、長さは検出部分で1.61m、幅3.15m、深さ1.0mである。方向はほぼN-6°-Wである。

＜壁・底面＞底は平坦で、壁はやや内湾気味に立ち上がる。東壁には浅い段がある。

＜覆土＞上層はにぶい黄褐色土で褐灰色土や褐鉄を多く含む。中層は黒褐色土と灰黄褐色土である。下層はグライ化した暗オリーブ灰色～緑灰色土で、炭粒を含んでいる。上層は締まりがあり、中層から下層は締まりが弱い。全体的に褐鉄を多く含む。

＜出土遺物＞覆土中から木片やかわらけの繊片が多く出土した。

＜時期＞12区検出の1号溝の延長と考えられ、出土遺物から12世紀の可能性がある。しかし、覆土の状況は12区の1号溝とやや異なる。

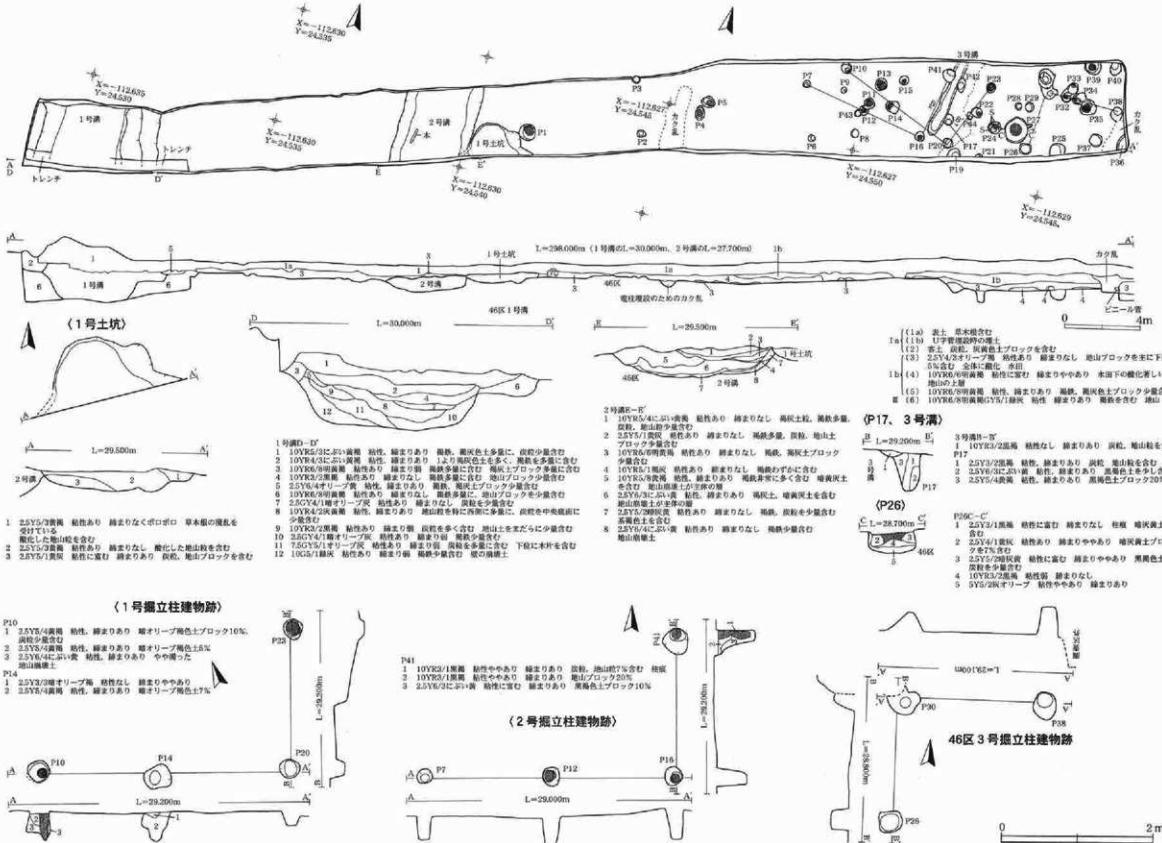
### 2号溝（第22図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞調査区中央付近に位置する南北方向の大溝である。1号土坑と重複し、本溝の方が古い。溝の北側及び南側は調査区外に伸びている。

＜平面形・規模＞幅の広い大溝で、長さは検出部分で1.9m、幅2.0m、深さ40cmである。方向はほぼN-0°-Wである。

＜壁・底面＞底はゆるやかに内湾し、壁も内湾ぎみに立ち上がる。

＜覆土＞にぶい黄色～褐灰色土で、締まりがなく、褐鉄や地山崩壊土を含む。



<出土遺物>覆土中からかわらけの細片が出土したほか、底から木片が出土した。

<時期>不明な点が多いが、出土遺物から12世紀の可能性もある。

### 3号溝（第22図、写真図版27・28）

<位置・検出状況>調査区東側に位置する南北方向の溝である。P17、P42、2号掘立柱建物跡と重複する。

本溝はP17よりも新しく、P42、2号掘立柱建物跡よりも古い。溝の北側は調査区外に伸びている。

<平面形・規模>長さは検出部分で2.1m、幅33cm、深さ8cmである。方向はN-8.5°-Eである。

<壁・底面>底面・壁友ゆるやかに内湾する。

<覆土>炭粒や地山起源の黄褐色上粒を含む黒褐色土の单層である。

<出土遺物>覆土中からかわらけの細片が出土した。

<時期>不明であるが、出土遺物や2号掘立柱建物跡に切られていることから、12世紀の可能性がある。

### 柱穴状土坑（第22図、写真図版27・28）

<位置・検出状況>本調査区東側に集中して検出され、中央部分はまばらである。西側からは検出されていない。

<平面形・規模>円形、梢円形を呈する。規模は径が18~63cm、深さ8~56cmである。

<覆土>大きく分けて二種類の覆土がある。黄褐色又は黄灰色土で、粘性に富む覆土の柱穴はP1、P5、P6、P9、P11、P13、P19、P29、P32、P34、P36、P43である。そのほかは、黒色土、黒褐色土で、締まりのない覆土の柱穴である。

<出土遺物>（第30図、写真図版38）P4から318の古瀬戸折縁深皿の破片、P35(319~321)、P39(322)から種子が出土している。そのほか、P8、P26、P35、P39、P40からかわらけ細片が出土している。

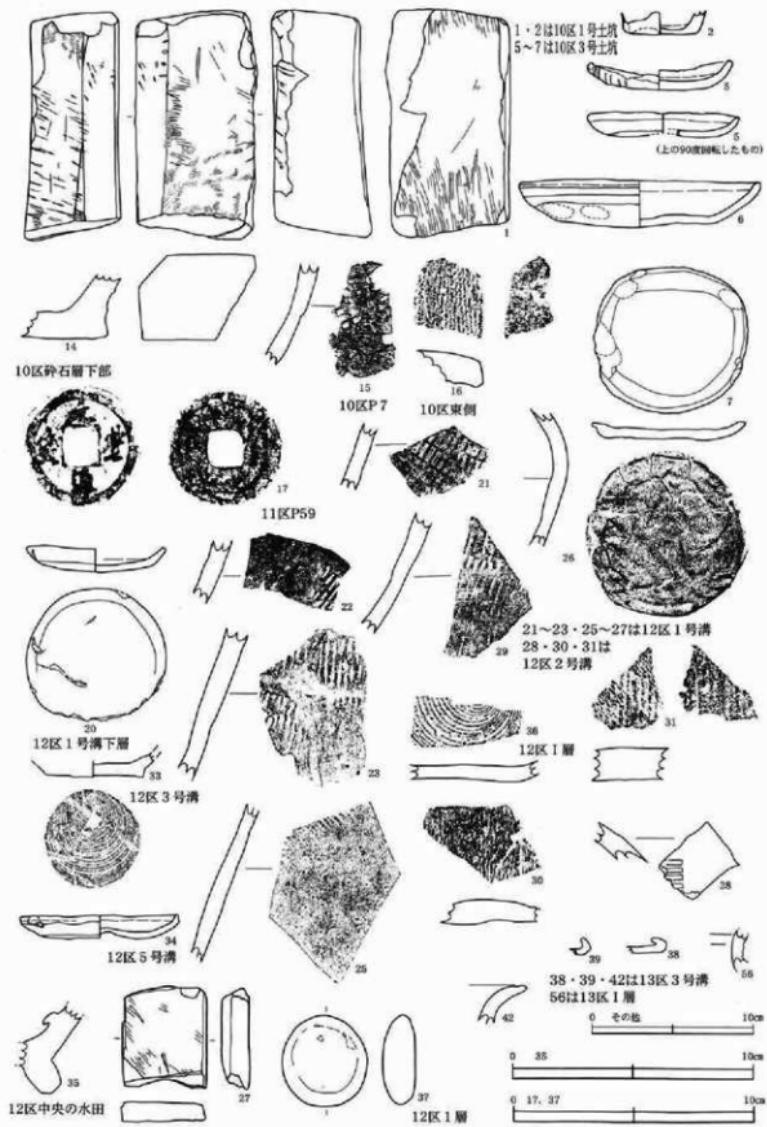
<時期>覆土の状況から12世紀に含まれる黄褐色又は黄灰色土の覆土の柱穴とそれより新しいものとのあらざると思われる。時期は年代を推定できる資料が少ないが、318の年代観から14世紀頃に属する可能性もある。

### 遺構外出土遺物

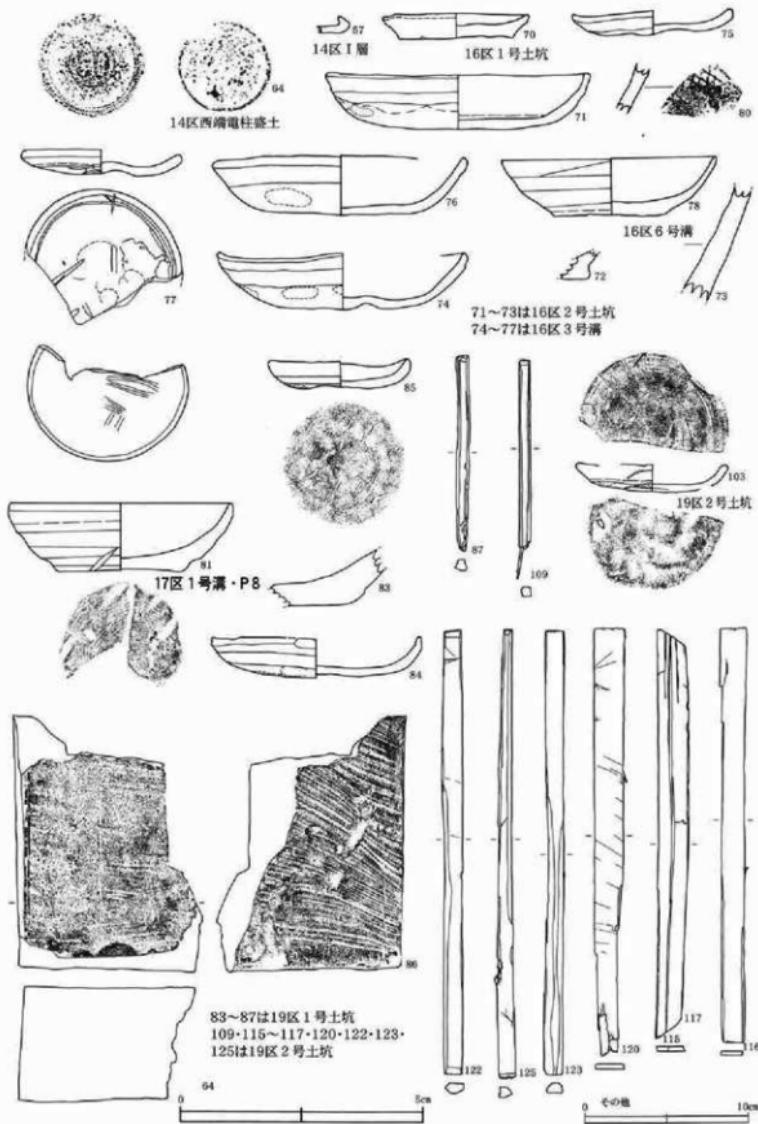
遺構検出面からかわらけ細片が出土している。

46区柱穴計測表

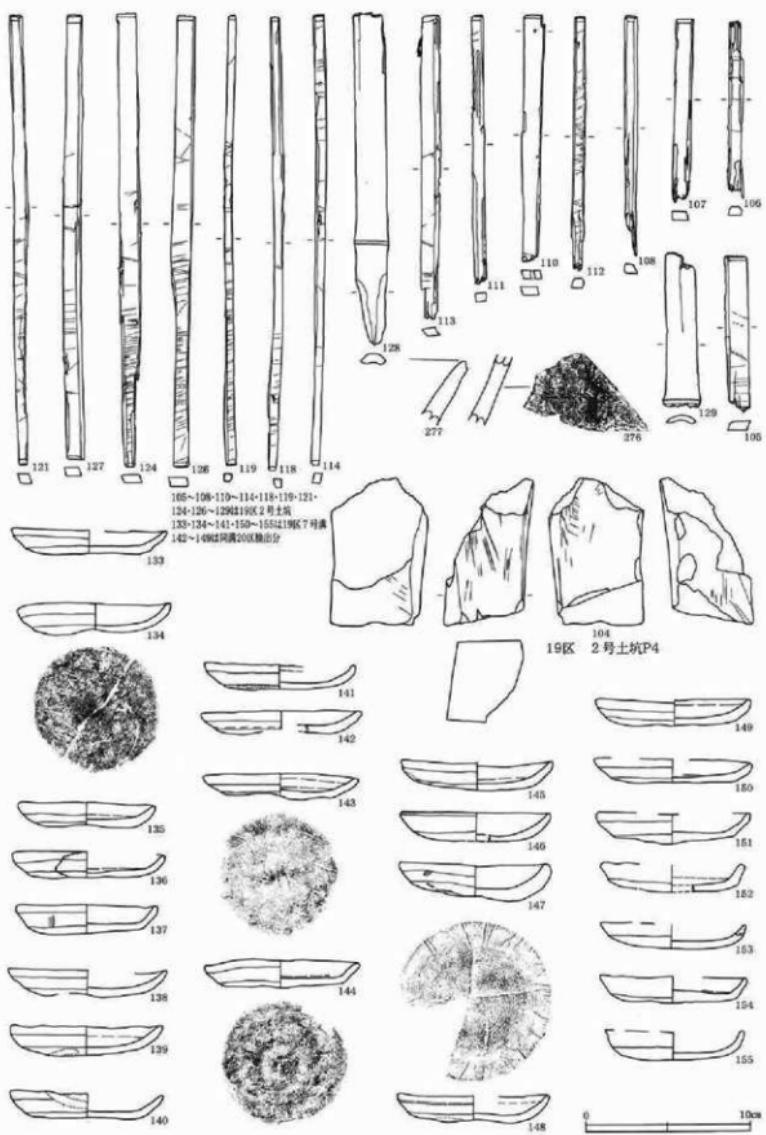
No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物	No.	径	深さ	備考	遺物
1	44	46	柱痕		17	30	56			32	36	21	柱痕	
2	26	19	柱痕		18					33	30	10		
3	22	8	柱痕		19	28	16			34	38	17		
4	38	43	柱痕		21	20	32			35	40	54	柱痕	かわらけ細片
5	36	34	柱痕		22					36	24			
6	18	20			24	36	28	柱痕		37	34	30		
8	22	21	かわらけ細片		26	34	38	柱痕	かわらけ細片	39	44	37	柱痕	かわらけ細片
9	18	15			27	14				40	30	36		かわらけ細片
11	28	29	柱痕		28	20	11			42	38	33		
13	32	44	柱痕		29	24	22			43	18			
15	24	29	柱痕		31	50	46			44	20			



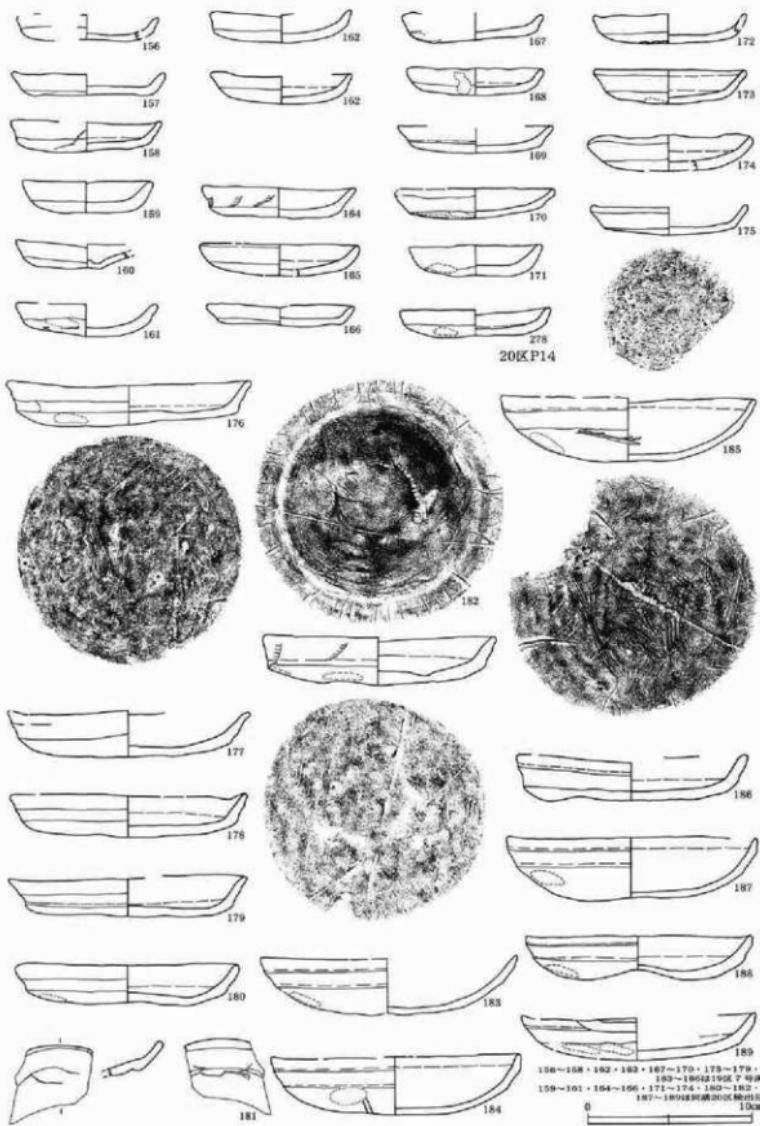
第23図 出土遺物10区、11区、12区、13区



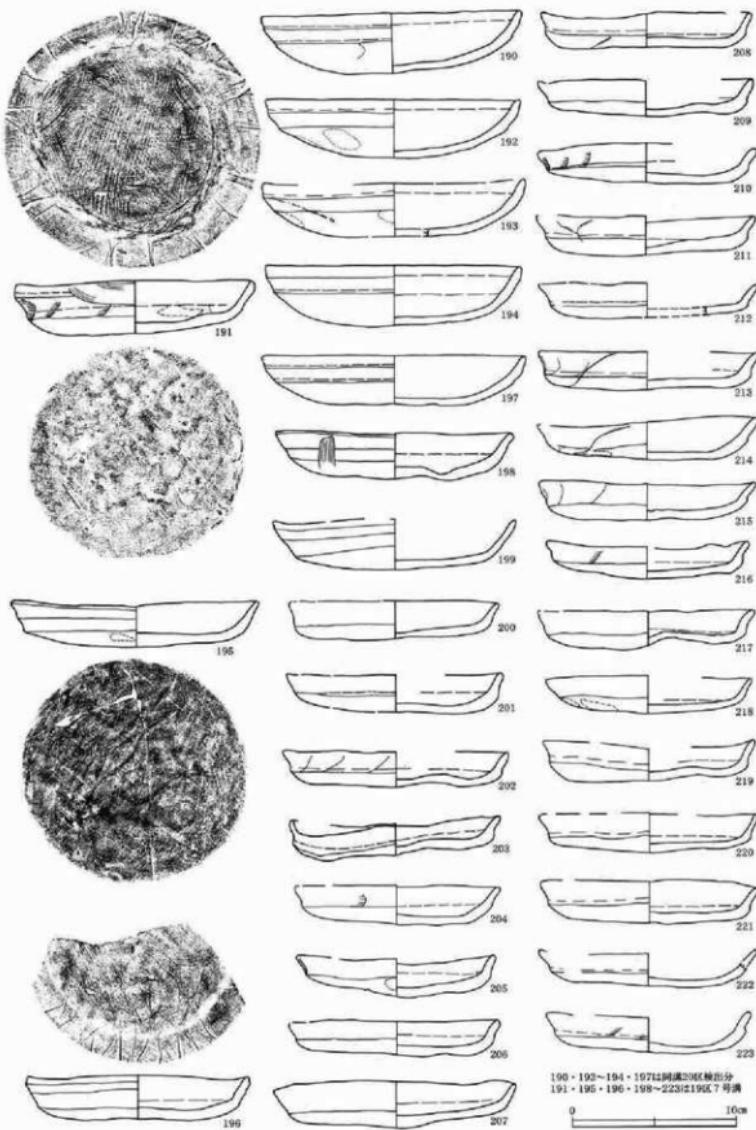
第24図 出土遺物14区、16区、17区（1）、19区（1）



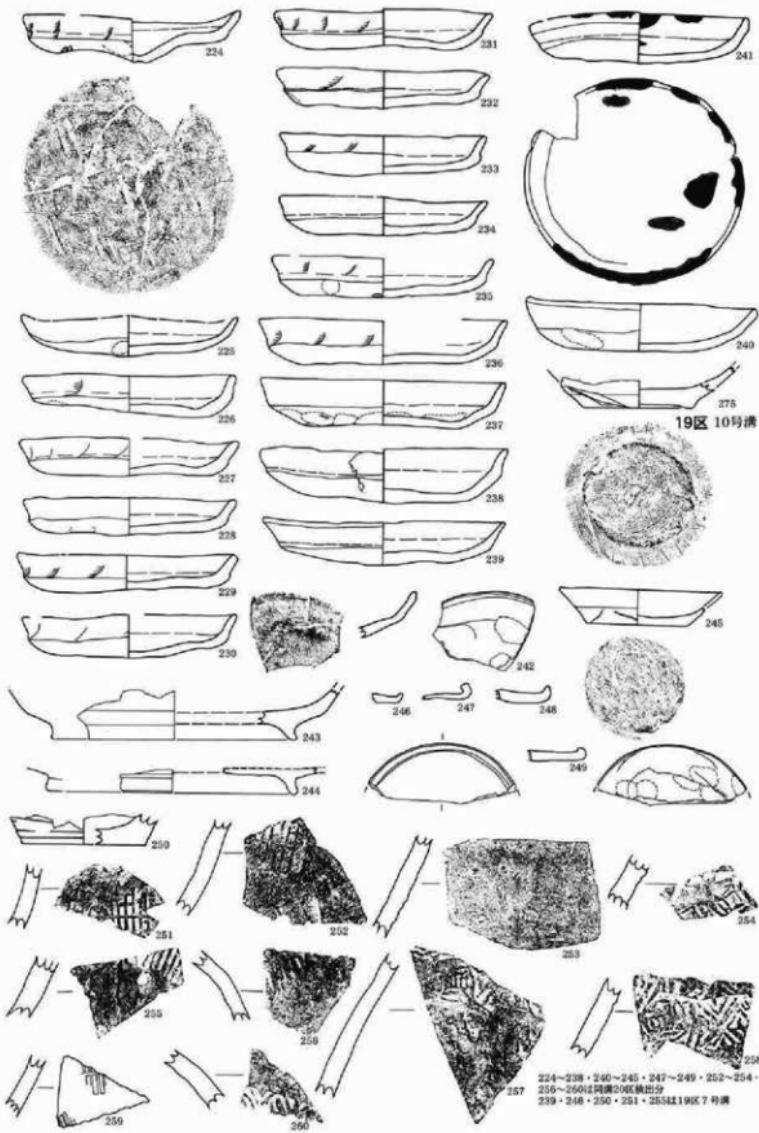
第25図 出土遺物 19区(2)



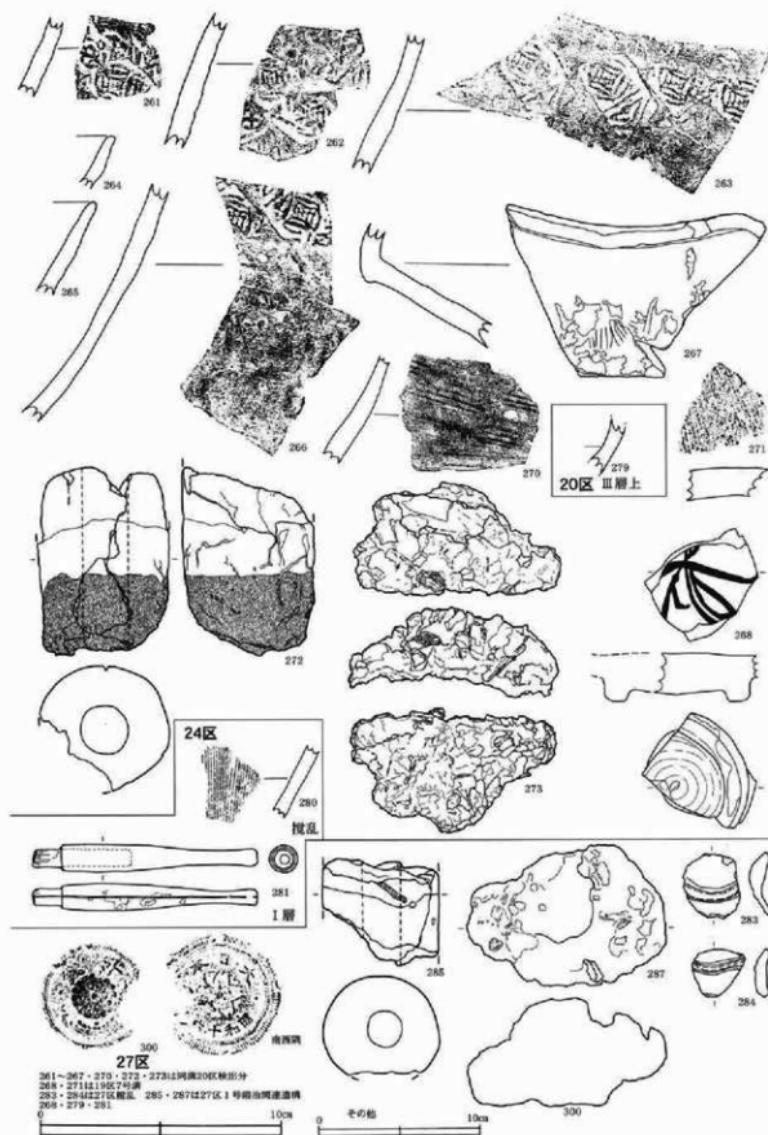
第26図 出土遺物 19区(3)、20区(1)



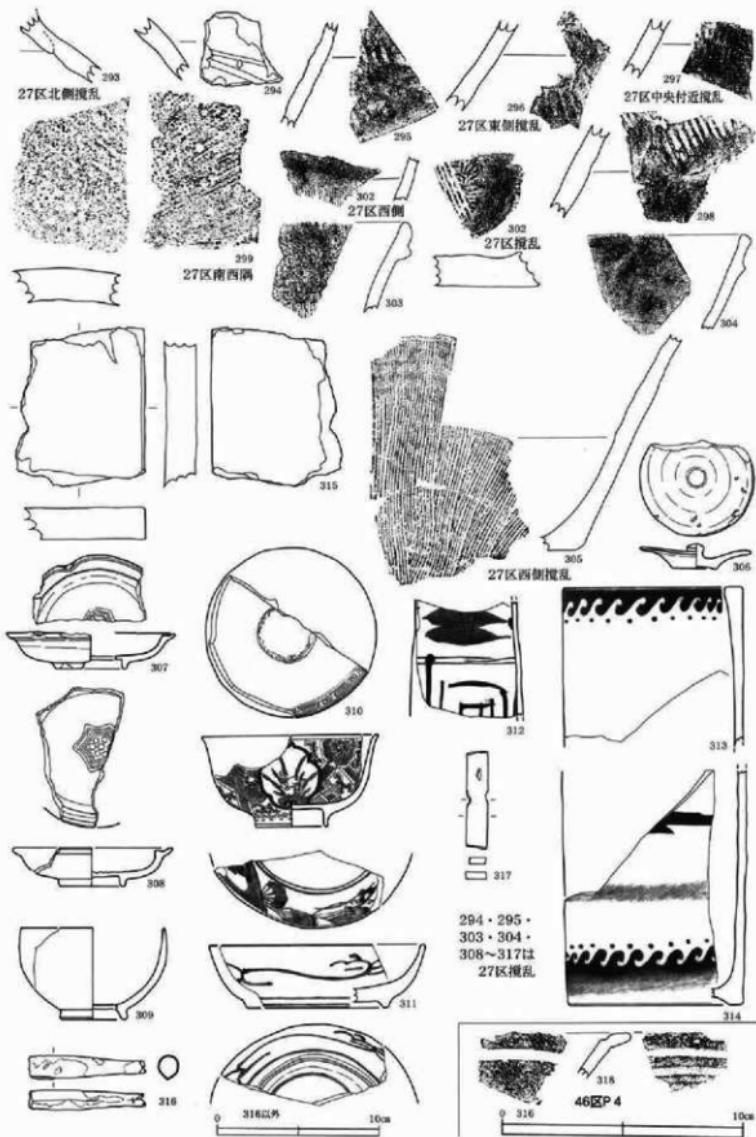
第27図 出土遺物 19区(4)、20区(2)



第28図 出土遺物 19区(5)、20区(3)



第29図 出土遺物 19区(6)、20区(4)、24区、27区(1)



第30図 出土遺物27区(2)、46区

第1表 手づくねかわらけ

名	規格	寸	厘	分	秒	日積 cm <sup>3</sup>	積率 %	完	度	色調	備	考	固形	百分比
2	1号土坑	埋土	特殊	-	-	底部	淡黄	底部から急にたちあがる、砂石を含む細い砂土	-	-	-	-	23	29
5	10 3号土坑	埋土	D4	9.4	1.5	2/5	灰黄	-	-	-	-	-	23	29
6	10 3号土坑	埋土	C4	15.0	3.0	既述完形	灰白	底部外側すのこ痕、指痕板、海綿骨針、微細粒含む	-	-	-	-	23	29
7	10 3号土坑	埋土	D2	9.0	1.7	光形	灰白	すのこ痕、羽根、口縫部に指痕板	-	-	-	-	23	29
20	12 1号井	下層	D2	8.7	1.7	4/5	灰白	-	-	-	-	-	23	29
34	12 5号井	埋土	C4	9.9	1.5	1/2	灰白	外側中央が小さく凹む	-	-	-	-	23	30
38	13 3号井	埋土	C2	-	-	1.0	小片	灰黄	-	-	-	-	23	30
39	13 3号井	埋土	C2	-	-	1.1	小片	灰白	外側に指痕付着	-	-	-	23	30
57	14 1号井	I層	C2	-	-	1.1	小片	淡黄	-	-	-	-	24	30
69	15 2号井	-	-	-	-	1/5	淡黄	内面に布痕、外側に指痕板、外側に黒斑	-	-	-	-	24	30
71	16 2号土坑	埋土	C5	16.3	3.5	1/2	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板、内面の一部に黒斑	-	-	-	-	24	30
74	-	-	C5	15.4	3.5	4/5	灰黄	-	-	-	-	-	24	30
75	16 3号井	埋土	C3	9.9	1.6	3/5	灰黄	指痕板、内面にハケ目	-	-	-	-	24	30
76	16 3号井	埋土	D4	15.7	3.7	既述完形	灰黄	底部外側にすのこ痕、指痕板	-	-	-	-	24	31
77	16 3号井	埋土	C3	9.9	1.7	3/5	灰白	内面にモミ痕、ハケ目、外側に難ぎ日、中央が凹む	-	-	-	-	24	31
79	16 水槽下敷土	ゴースト	-	-	-	一小片	淡黄	指痕が全体に多量に付着	-	-	-	-	24	31
84	19 1号土坑	埋土	C5	12.9	2.5	3/5	灰白	指痕板、砂粒を含む	-	-	-	-	24	31
85	19 2号土坑	埋土	C3	8.7	1.8	光形	灰白	内面ハケ目が、底部外側にすのこ痕、指痕板	-	-	-	-	24	31
103	19 2号土坑	底直上	D3	9.4	1.7	3/5	灰黄	指痕板	-	-	-	-	24	31
133	19 2号井	埋土	C2	9.6	1.7	4/5	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板、外側に鉄付着	-	-	-	-	25	32
134	19 7号井	底直	C3	9.5	2.0	既述光形	淡黄	底部外側にすのこ痕、外側中央に凹み、指痕板	-	-	-	-	25	32
135	19 7号井(20)	小～下層	C3	8.5	1.5	1/3	灰白	-	-	-	-	-	25	32
136	19 7号井	埋土	C3	9.5	1.7	既述完形	灰白	弱い指痕板、鉄多量に付着	-	-	-	-	25	32
137	19 7号井	埋土	C3	8.7	1.8	既述完形	灰白	指痕板	-	-	-	-	25	32
138	19 7号井	埋土	C3	9.8	1.7	2/3	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板	-	-	-	-	25	32
139	19 7号井	埋土	C3	9.4	1.9	完形	淡黄	指痕板	-	-	-	-	25	32
140	19 7号井	埋土	C3	9.5	1.6	1/2	灰黄	指痕板、内外層に鉄付着	-	-	-	-	25	32
141	19 7号井	埋土	C3	9.4	1.7	4/5	灰白	指痕板、鉄多量に付着	-	-	-	-	25	32
142	19 7号井(20)	中～下層	C3	16.0	1.4	1/3	灰白	-	-	-	-	-	25	32
143	19 7号井(20)	埋土	C3	9.6	1.7	既述完形	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板	-	-	-	-	25	32
144	19 7号井(20)	埋土	C3	9.8	1.6	既述完形	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板、鉄付着	-	-	-	-	25	32
145	19 7号井(20)	埋土	C3	9.4	1.9	既述完形	灰白	弱い指痕板、内面に鉄付着	-	-	-	-	25	32
146	19 7号井(20)	埋土	C3	9.3	1.8	1/3	灰白	底部外側に弱いすのこ痕と弱い指痕板	-	-	-	-	25	32
147	19 7号井(20)	埋土	C3	9.4	2.3	完形	灰白	底部外側にすのこ痕、外側中央に指痕板、外壁上部～底部内一部にスズ村苔	-	-	-	-	25	32
148	19 7号井(20)	中～下層	C4	9.4	1.8	4/5	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板、外側中央が凹む	-	-	-	-	25	32
149	19 7号井(20)	埋土	C4	9.5	1.7	完形	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板、外側一部に鉄付着	-	-	-	-	25	32
150	19 7号井	埋土	C4	9.7	1.5	4/5	灰白	指痕板、主に外側に難波村苔	-	-	-	-	25	32
151	19 7号井	埋土	C5	9.4	1.9	2/5	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板	-	-	-	-	25	32
152	19 7号井	埋土	D2	8.7	1.8	4/5	灰白	弱い弱指痕板、鉄付着	-	-	-	-	25	32
153	19 7号井	埋土	D2	8.9	1.6	1/2	灰白	鉄少量化付着	-	-	-	-	25	32
154	19 7号井	埋土	D2	8.9	1.7	4/5	灰黄	指痕板	-	-	-	-	25	32
155	19 7号井	埋土	D2	8.5	1.9	既述完形	灰白	指痕板	-	-	-	-	25	32
156	19 7号井	埋土	D2	8.7	1.6	3/5	灰白	-	-	-	-	-	26	32
157	19 7号井	埋土	D2	9.5	1.5	3/5	淡黄	底部外側にすのこ痕、内外層指痕	-	-	-	-	26	32
158	19 7号井	埋土	D2	9.3	2.0	既述完形	灰白	弱い弱指痕板	-	-	-	-	26	32
159	19 7号井(20)	埋土	D2	8.1	2.0	既述完形	灰白	指痕板、外側と内面縁部に鉄付着	-	-	-	-	26	32
160	19 7号井(20)	埋土	D2	-	1.8	2/3	灰白	内面中央に指痕板の凹み、内面に棒状工具痕、外側1/2に鉄付着	-	-	-	-	26	32
161	19 7号井(20)	埋土	D2	8.7	2.1	2/3	灰白	底部外側に弱い指痕板、粘土難波苔。内面に鉄付着	-	-	-	-	26	32
162	19 7号井	埋土	D2	8.7	2.0	4/5	灰白	底部外側に弱い指痕板、付着	-	-	-	-	26	32
163	19 7号井	埋土	D2	8.7	2.0	4/5	灰白	指痕板、難波村苔	-	-	-	-	26	32
164	19 7号井(20)	埋土	D2	9.5	2.0	完形	灰白	底部外側にすのこ痕、古め細かい砂土、砂粒を含まない	-	-	-	-	26	32
165	19 7号井(20)	埋土	D2	9.9	2.0	1/3	灰白	指痕板	-	-	-	-	26	32
166	19 7号井(20)	埋土	D2	9.2	1.4	既述完形	淡黄	弱い指痕板、外側1/3と内面1/3縁部に鉄付着	-	-	-	-	26	32
167	19 7号井	埋土	D2	8.7	1.9	2/3	灰白	弱い指痕板	-	-	-	-	26	32
168	19 7号井	埋土	D2	8.4	1.7	2/3	灰白	弱い指痕板	-	-	-	-	26	33
169	19 7号井	埋土	D2	9.5	1.7	1/2	灰白	指痕板	-	-	-	-	26	33
170	19 7号井	埋土	D4	9.8	1.9	4/5	灰白	底部外側にすのこ痕、指痕板	-	-	-	-	26	33
171	19 7号井(20)	上層	D2	8.2	1.9	完形	灰白	弱い指痕板、鉄付着(内面底部)、底部外側に黒斑	-	-	-	-	26	33

No.	施設名	位置	層位	分類	口径 cm	標高 m	光度	色調	備考	周波 数	基準
172	19 7号井(20-2)	埋土	D2	9.4	1.8	2/3	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		26	33
173	19 7号井(20-2)	中～下層	D4	9.3	2.1	2/5	灰白	指揮痕		26	33
174	19 7号井(20-2)	中～下層	D4	10.2	2.3	2/5	灰白	帶砂含む砂土		26	33
175	19 7号井	埋土	D4	9.6	1.8	3/5	灰白	底部外壁面のこび、外面に鈍鉄		26	33
176	19 7号井	埋土	C3	15.1	2.8	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、砂粒をあまりキメの細かい砂土		26	33
177	19 7号井	埋土	C3	14.9	2.9	ほぼ完形	灰黄	底部外壁面のこび、指揮痕		26	33
178	19 7号井	埋土	C3	14.6	2.7	ほぼ完形	灰黄	底部外壁面のこび、指揮痕		26	33
179	19 7号井	埋土	C3	14.7	2.7	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		26	33
180	19 7号井(20-2)	埋土	C3	13.8	2.7	ほぼ完形	淡黃	底部外壁面のこび、指揮痕、内面底部・口部側の一部にスス付着、内面ナメ		26	33
181	19 7号井(20-2)	下層	C3	—	—	—	白	硬さ日、外側に鈍鉄付着		26	33
182	19 7号井(20-2)	埋土	C3	14.4	3.1	完形	淡黃	前面凹凸があり、底部外壁面に多少、指揮痕、さざなわく砂粒を含む砂土、内面の一部に鈍鉄付着		26	33
183	19 7号井(20-2)	埋土	C4	15.8	3.7	1/2	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		26	33
184	19 7号井	埋土	C4	15.5	3.8	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、内外面に鈍鉄付着		26	33
185	19 7号井	埋土	C4	15.7	4.1	4/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、鈍鉄付着		26	33
186	19 7号井	埋土	C4	14.2	2.9	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		26	33
187	19 7号井(20-2)	埋土	C4	15.4	4.0	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、内面に鈍鉄付着、海綿骨針、散砂含む砂土		26	33
188	19 7号井(20-2)	埋土	D2	14.9	2.8	—	—	—		26	33
189	19 7号井(20-2)	中～下層	C4	14.4	2.9	3/5	灰白	強い指揮痕		26	33
190	19 7号井(20-2)	埋土	C4	16.0	3.8	完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、鈍鉄付着		27	33
191	19 7号井	埋土	C4	14.8	3.4	完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、外壁の約70%、内面10%にスス付着、内外面にハケメ		27	33
192	19 7号井(20-2)	埋土	C4	15.6	3.6	1/3	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、内外面に鈍鉄付着		27	33
193	19 7号井(20-2)	中～下層	C4	16.2	3.5	1/2	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		27	33
194	19 7号井(20-2)	埋土	C4	15.8	3.9	完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、内面調査版(ナデ)		27	33
195	19 7号井	埋土	C5	15.3	2.8	完形	淡黃	底部外壁面のこび、指揮痕、きめ細かで移動を含まない砂土		27	34
196	19 7号井	埋土	D2	13.9	2.8	3/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、内外面にスス付着、内面にハケメ		27	34
197	19 7号井(20-2)	埋土	C4	16.3	3.2	1/3	淡黃	ごく強い指揮痕		27	34
198	19 7号井	埋土	C5	14.7	3.0	ほぼ完形	淡黃	底部外壁面のこび、指揮痕、内面に鈍鉄付着		27	34
199	19 7号井	埋土	C5	15.0	3.2	4/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		27	34
200	19 7号井	埋土	D2	13.0	2.5	ほぼ完形	淡黃	底部外壁面のこび、指揮痕		27	34
201	19 7号井	床面近く	D2	14.2	3.5	2/3	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、主に内面に鈍鉄付着		27	34
202	19 7号井	埋土	D2	14.0	2.3	4/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		27	34
203	19 7号井	埋土	D2	15.0	2.6	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、外壁に鈍鉄付着		27	34
204	19 7号井	埋土	D2	12.6	2.5	ほぼ完形	灰白	指揮痕		27	34
205	19 7号井	埋土	D2	12.3	2.7	—	灰白	指揮痕		27	34
206	19 7号井	埋土	D2	13.0	2.3	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		27	34
207	19 7号井	埋土	D2	15.0	3.0	ほぼ完形	淡黃	此部外商すのこび、指揮痕、内面に鈍鉄付着		27	34
208	19 7号井	埋土	D2	12.9	2.3	完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、鈍鉄付着		27	34
209	19 7号井	埋土	D2	13.2	2.3	4/5	淡黃	指揮痕		27	34
210	19 7号井	埋土	D2	13.5	2.5	4/5	淡黃	底部外壁面のこび、指揮痕、内外面に鈍鉄付着、難ぎ日		27	34
211	19 7号井	埋土	D2	13.5	2.5	完形	灰白	西部外壁面のこび、指揮痕、主に内面に鈍鉄付着		27	34
212	19 7号井	西端埋土	D2	13.5	2.3	2/1	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、内面に鈍鉄付着		27	34
213	19 7号井	埋土	D2	13.5	2.5	4/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		27	34
214	19 7号井	埋土	D2	13.5	2.7	ほぼ完形	淡黃	指揮痕		27	34
215	19 7号井	埋土	D2	13.3	2.5	完形	灰白	底部外壁面のこび		27	34
216	19 7号井	埋土	D2	12.4	2.4	4/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、外壁に鈍鉄付着		27	34
217	19 7号井	埋土	D2	13.3	2.5	完形	灰白	指揮痕、底面凹凸、内面鈍鉄付着		27	34
218	19 7号井	埋土	D2	12.6	2.4	4/5	淡黃	指揮痕		27	34
219	19 7号井	巣下層	D2	13.0	2.6	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		27	34
220	19 7号井	埋土	D2	13.5	2.5	ほぼ完形	淡黃	指揮痕		27	34
221	19 7号井	埋土	D2	13.4	2.8	ほぼ完形	灰白	指揮痕		27	34
222	19 7号井	埋土	D2	13.4	2.3	3/5	淡黃	指揮痕、内外面に鈍鉄付着		27	34
223	19 7号井	埋土	D2	12.6	2.6	4/5	淡黃	指揮痕、主に内外面に鈍鉄付着		27	34
224	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.4	3.1	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、中央が円み弓が凸起する底部		28	34
225	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.4	2.6	1/2	灰白	底部外壁面のこび、弱い指揮痕、鈍鉄付着		28	34
226	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.2	2.7	完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、鈍鉄付着		28	34
227	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.5	2.4	4/5	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、鈍鉄付着		28	34
228	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.1	2.3	完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕、鈍鉄付着		28	34
229	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.6	2.5	完形	淡黃	底部外壁面のこび、指揮痕		28	34
230	19 7号井(20-2)	埋土	D2	13.3	2.7	ほぼ完形	灰白	底部外壁面のこび、指揮痕		28	34

No.	調査区	位	西	層位	分類	寸幅	高さ	厚さ	完	度	色調	備	考	回版	通鑑
231	19	7号溝(29)	埋土	D2	13.4	2.7	鉛灰光沢	淡黄	底板多点に含む	-	-	28	24		
232	19	7号溝(29)	埋土	D2	13.1	2.5	鉛灰光沢	淡黄	底部外表面のこ痕、指痕底、内面に荷鉄付着	-	-	28	34		
233	19	7号溝(29)	埋土	D2	12.7	2.6	鉛灰光沢	灰白	鉛灰・荷鉄痕	-	-	28	34		
234	19	7号溝(29)	埋土	D2	12.8	2.5	鉛灰光沢	灰白	底部外表面のこ痕、荷鉄付着	-	-	28	34		
235	19	7号溝(29)	埋土	D2	13.6	2.6	4/5	鉛灰	底部外表面のこ痕、荷鉄付着	-	-	28	34		
236	19	7号溝(29)	埋土	D2	15.3	3.0	4/5	灰白	底部外表面のこ痕、弱い指痕痕	-	-	28	34		
237	19	7号溝(29)	埋土	D2	15.1	3.0	1/5	灰白	底部外表面のこ痕？、指痕痕	-	-	28	35		
238	19	7号溝(29)	中下層	D2	15.2	3.5	4/5	淡黄	底部外表面のこ痕、内面工具痕(ハケ跡)？、荷鉄付着	-	-	28	35		
239	19	7号溝	埋土	D4	14.9	2.9	鉛灰光沢	灰白	底部外表面のこ痕、指痕痕	-	-	28	35		
240	19	7号溝(29)	中下層	D4	14.3	3.1	鉛灰光沢	淡黄	弱い指痕痕、きめ細かく砂粒含まない胎土	-	-	28	35		
241	19	7号溝(29)	下層	D4	13.5	3.2	鉛灰光沢	灰白	底部外表面のこ痕？、指痕痕、内面80%、外側底部20%にススの付着	-	-	28	35		
242	19	7号溝(29)	埋土	D4	-	-	-	灰白	底部底	-	-	28	35		
246	19	7号溝	埋土	D-1	-	(0.6)	-	灰白	たち上がりが鋭い、荷鉄付着	-	-	28	35		
247	19	7号溝(29)	上層	D-	-	(1.1)	小片	灰白	-	-	-	28	35		
248	19	7号溝(29)	上層	D-	-	(1.1)	小片	灰白	-	-	-	28	35		
249	19	7号溝(29)	埋土	D-1	-	(0.6)	1/3	灰白	内面に荷鉄付着	-	-	28	35		
278	26	P14	埋土中層	D2	9.3	1.8	-	淡黄	底部外表面にごく弱いこ痕、指痕痕	-	-	--	36		

第2表 ロクロカわらけ

No.	調査区	位	西	層位	分類	寸幅	高さ	厚さ	備	考	色調	回版	通鑑	
33	12	3号溝	埋土	r	-	6.1	-	-	砂粒含む胎土	-	淡黄	23	30	
70	16	1号土坑	埋土	rdf1	9.1	7.1	1.6	-	-	-	淡黄	24	30	
72	16	2号土坑	埋土	-	-	-	-	-	内外面に黒斑	-	淡黄	24	30	
78	16	6号溝	底面	Rd24	13.2	6.9	3.7	-	底部に重にすのこ痕、摩耗しい	-	淡黄	24	31	
81	17	1号溝	上層	Rb01	14.0	7.6	4.3	-	内面に荷鉄付着、底部外表面にすのこ痕、体部下端に条かけ痕	-	淡黄	24	31	
83	19	1号土坑	7窟から8窟	R	-	-	-	-	大粒、砂粒を多く含む粗い胎土	-	淡黄	24	31	
243	19	7号溝(29)	中～下層	高台付	-	15.1	-	-	大型	-	淡黄	28	35	
244	19	7号溝(29)	上層	高台付	-	15.6	-	-	大型？ 内外面に荷鉄多く付着	-	灰白	28	35	
245	19	7号溝(29)	埋土	E-II-1	9.9	6.0	2.2	-	砂粒を含む胎土	-	淡黄	28	35	
275	19	10号溝	表中層	Rd-0	-	7.7	-	-	内面に虫歯	-	灰白	28	36	

第3表 中国産陶磁器

No.	調査区	位	東	西	層位	種類	器種	底位	分類	年代	備	考	回版	通鑑	
4	10区	1号土坑	埋土中	白組	繪	繪	体部	-	I	12C	化粧十がない	-	29		
35	12	水手中	白組	金(内面墨付)	金(水墨)	高台	III系	12C木	13Mまであるかもしれない、達磨形あり	-	-	30			
40	13	3号溝	埋土	白組	繪	繪	II	12C	化粧十あり、内面無繪	-	-	30			
41	13	3号溝	埋土	白組	重	重	体部	II	12C	四耳罐、内面無繪	-	-	30		
52	13	西半	カク乱	白組	内面墨(水墨)	體部	II	12C後半	内面施繪	-	-	30			
53	13	中央一	カク乱	白組	金	金	体部	12C	内面無繪	-	-	30			
54	13	中央	カク乱	白組	金	金	体部	II英	12C	化粧十あり、内面無繪	-	-	30		
55	13	東半	カク乱	白組	金	金	体部	III	12C後半	-	-	30			
65	15	2号溝	1層	白組	繪	繪	体部	12C	内面施繪	-	-	30			
66	15	P13	埋土	白組	粗	粗	口縁	VI	12C中盤	化粧土あり	-	-	30		
268	19	7号溝	表上層	青磁	繪	繪	底部	12C青十	しのぎ連弁がつくか	-	-	36			
269	19	7号溝	3層	白組	繪	繪	体部	金三	12C後半	内面施繪	-	-	36		
270	19	7号溝(29)	上層	荷輪陶器	變	体部下	12C	タタキを臺り少し、体部下のため難はかかっていない	-	-	36				

第4表 国産陶器

No.	調査区	位	東	西	層位	種類	器種	部位	年代	押印	その他の	回版	通鑑	
15	10	P7	埋土	不明	變	体部	-	12世紀	東海の技術で製作	-	-	29		
21	12	1号溝	上層	常滑	變	体部	12C後半	押印	-	-	29			
22	12	1号溝	埋土	御器	變	体部	12C	押印	-	-	29			
23	12	1号溝	埋土	御器	變	体部	12C	押印	-	-	29			
24	12	1号溝	下層	常滑	變	体部	上半	12C後半	-	-	29			
25	12	1号溝	壁際	常滑	變	体部	12C後半	押印	-	-	29			
26	12	1号溝	上層	常滑	變	体部	上半	12C後半	押印	-	-	29		
28	12	2号溝	埋土	鹿窓	變	体部	上半	12C	押印	-	-	29		
29	12	2号溝	埋土	鹿窓	變	体部	下半	12C	押印	-	-	30		
36	12	東周	泰山周易井	变	-	底部	-	-	-	-	-	30		

No.	調査区	位 置	層 位	種 類	規 様	部 位	年 代	押 印・その他の	図版番号
42	13	3号溝	埋土	常滑	斐	口唇部	12C後半?		23 30
36	13	西半	水田土	須恵系	垂	頭部			23 30
73	16	2号十坑	上層	須恵系	垂?	体部			24 31
80	16	中央部	水田下陶化層	常滑	斐	体部	12C後半四手		24 31
250	19	7号溝	埋土	常滑	三新斐?	頭部	12C後半3手	砂底	28 35
251	19	7号溝	埋土	常滑	斐	体部	12C後半3手	押印が鏃、265と同一	28 35
252	19	7号溝(20-2)	最上層	常滑	斐	体部上半	12C後半3手	押印	28 35
253	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牽引	28 30
254	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半?	牵引押印	28 35
255	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C	押印	28 35
256	19	7号溝(20-2)	皮土?	常滑	斐	体部上半	12C	押印	28 35
257	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牽引押印	28 35
258	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牽引押印	28 35
259	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部上半	12C後半3手	押印	28 35
260	19	7号溝(20-2)	最上層	常滑	斐	体部	12C後半	牵引押印	28 35
261	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牵引押印	29 35
262	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牵引押印	29 35
263	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牵引押印	29 35
264	19	7号溝(20-2)	埋土	常滑	斐	口唇部	12C後半?		29 35
265	19	7号溝(20-2)	埋土	常滑	鉢	口部部	12C後半3手		29 35
266	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牵引押印	29 35
267	19	7号溝(20-2)	上層	常滑	斐	体部	12C後半	牵引押印	29 36
293	27	北側	擾乱	常滑	斐	体部上半	12C		30 -
294	27	不明	擾乱	常滑	-	体部上半	12C		30 37
295	27	不明	擾乱	常滑	斐	体部	12C	押印	30 37
296	27	不明	不明	常滑	斐	体部	12C	押印	30 37
297	27	-	擾乱	常滑	斐	体部	12C	押印	30 37
298	27	南西隅	擾乱	常滑	斐	体部上半	12C	押印	30 37
318	46	P4	理上	占溝	折紙深井	II舞部	14C中葉	灰褐色でうまくでていない	30 38

第5表 金属製品

No.	調査区	位 置	層 位	種 類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	年 代	備 考	図版番号
3	10	1号十坑	埋土	鍍津	3.9	2.3	21	19.7	気泡あり、あまりさびはない	- 29
8	10	3号上坑	埋土	鍍津	3.5	1.9	0.9	4.9	気泡あり、鍍さびでおおわれている	- 29
17	11	P59	埋土	古鏡	2.4	2.3	0.1		元鏡造生?	23 29
19	11	P14	埋土	不明	3.2	1.2	0.9	4.4		- 29
32	12	2号溝	埋土	鍍津	5.6	4.2	3.3	83.17	鉛垂付器、気泡	- 30
64	14	西隅	電柱線土	銭	2.1	2.1	0.2	2.4	50	24 30
82	17	水田下能工窟	鐵	鉢	4.2	2.0	1.5	46.0	気泡あり、さびが2/3くらいおおっている、2個	- 31
281	24	西隅	I 下位	セシル皿	8.1	1.1	1.1	14.5	木質残存	29 36
286	27	1号6号隕石	埋土下位	楕円形	9.8	9.1	4.6			- 36
287	27	1号6号隕石	埋土下位	楕円形	12.2	8.8	6.7			- 36
288	27	1号6号隕石	埋土下位	楕円形				430.3		- 37
289	27	1号6号隕石	埋土下位	鉛状形						- 36
290	27	1号6号隕石	埋土下位	細孔鋸刺片						- 37
291	27	1号6号隕石	埋土下位	鍛造鋸片				16.6		- 37
292	27	1号6号隕石	埋土下位	鍛造鋸片				8.9		- 37
300	27	南西隅	祝私	銭	2.1	2.1	0.2	1.3	昭和16年 十枚、□口日本大、□六十和解	29 37
316	27	不明	擾乱	セシル皿	4.8	1.0	0.9			30 38

第6表 土製品

No.	調査区	位 置	層 位	分 類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	備 考	図版番号
9	10	3号十坑	岬上中層	縫土	1.5	1.3	0.9	1.2	- 29
10	10	3号C坑	埋土中層	縫土	2.1	1.3	1.1	2.3	- 29
11	10	3号C坑	理土中層	縫土	2.2	2.0	1.0	3.6	- 29
12	10	3号上坑	埋土中層	縫土	2.3	1.1	0.7	1.1	- 29
13	10	3号土坑	埋土	縫土	5.2	4.8	3.4	49.0	- 29
16	10	更別の街溝	埋土	瓦	(4.8)	(4.2)	(2.3)	41.1	23 29

No.	測定区	位 置	層 位	分類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	角 (cm)	備 考	回数	回数
30	12	2号溝	埋上	瓦	4.8	7.3	—	40.1	—	30	
31	12	2号溝	埋土	瓦	5.2	4.4	2.1	45.3	—	30	
43	13	3号溝	埋上	埋土	3.9	2.4	2.2	17.86	—	30	
44	13	3号溝	埋土	埋土	2.6	1.8	1.4	3.4	—	30	
45	13	3号溝	埋土	埋土	1.9	1.3	1.0	1.7	—	30	
46	13	3号溝	埋土	埋土	2.0	1.6	1.2	2.3	—	30	
47	13	3号溝	埋土	埋土	2.7	1.7	1.0	3.6	—	30	
48	13	3号溝	埋土	埋土	2.9	2.0	1.6	4.9	—	30	
49	13	3号溝	埋土	埋土	2.6	1.9	1.2	4.7	—	30	
50	13	3号溝	埋土	埋土	2.7	2.1	1.5	5.4	—	30	
51	13	3号溝	埋土	埋土	4.0	4.1	2.4	28.2	—	30	
58	14	P21	埋土	埋土	2.5	1.8	1.1	2.6	—	30	
59	14	P21	埋土	埋土	2.0	1.5	1.2	2.8	—	30	
60	14	P21	埋土中層	埋土	2.9	2.1	1.2	4.2	—	24	30
61	14	P21	埋土中層	埋土	2.2	2.1	0.7	2.1	—	29	30
62	14	P21	埋土中層	埋土	2.5	1.7	1.0	3.2	—	29	30
63	14	P21	埋土中層	埋土	6.3	5.2	3.0	57.3	—	29	30
67	15	P7	埋土	埋土	—	—	—	74.2	—	29	30
68	15	P5	埋土	埋土	—	—	—	26.8	—	29	30
86	19	1号上坑	埋土	埋土	6.0	5.0	3.0	10.0	—	30	31
271	19	7号溝	埋土	瓦	5.5	5.6	4.9	61.2	—	36	
272	19	7号溝(20-21)	埋土	羽目11	11.7	8.2	7.8	51.3	—	36	
283	27	遺物(石式)	上鉢?	石	4.1	3.5	1.3	6.4	—	36	
284	27	遺物(石式)	下鉢?	石	3.0	3.3	1.0	9.9	—	36	
285	27	1号不規則	埋土下層	羽口	6.7	7.2	—	20.6	—	36	
299	27	—	—	瓦	9.8	7.0	0.2	218.4	—	36	
315	27	—	—	瓦	9.8	8.1	2.1	189.1	近世以降	38	

第7表 石製品

No.	測定区	位 置	層 位	分類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考	石 材	產 地	年 代	回数
1	10	1号上坑	埋土	砾石	14.2	7.6	5.4	NP14	1面が割れて岩敷付箇	斜長石閃緑岩 英羽所産	新石器時代	23 29
27	12	1号上坑	埋土	砾石	6.3	5.2	1.3	81.7	磨面は1面のみ	鈍板岩	北上高地 古生界	23 29
37	12	中央水田	水田土	砾石(?)	1.9	1.8	0.7	8.7	—	鈍板岩 基岩漂砾	中生界	23 30
104	19	P4上坑	埋土上層	砾石	9.2	5.9	5.1	27.0	表面に擦痕、色や質でて使用し、特に	斜長石閃緑岩 奥利産地	新第三系 帶砂岩	25 31

第8表 木質遺物・種子・漆紙

No.	測定区	位 置	層 位	種 類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考	回数	回数	
87	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	12.2	0.9	0.7	両側面は削りたような感じ	—	24	31
88	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	2.0	0.8	0.3	—	—	31	
89	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	3.2	1.0	0.4	—	—	31	
90	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	3.3	0.9	0.3	—	—	31	
91	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	3.7	1.0	0.3	—	—	31	
92	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	4.2	1.0	0.3	—	—	31	
93	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	4.0	1.3	0.5	—	—	31	
94	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	3.8	1.2	0.3	—	—	31	
95	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	4.4	1.0	0.3	—	—	31	
96	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	4.2	1.1	0.3	—	—	31	
97	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	5.2	1.1	0.6	—	—	31	
98	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	5.2	1.2	0.4	—	—	31	
99	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	5.7	1.1	0.5	—	—	31	
100	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	6.1	1.3	0.4	—	—	31	
101	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	8.7	1.1	0.6	半截の竹	—	31	
102	19	1号土坑	7層か8層	5号木?	9.2	1.2	0.6	半截の竹	—	31	
105	19	2号土坑	埋土	5号木?	9.8	1.4	0.6	先端に瘤とり、人目に直行する方向に擦痕	—	25	32
106	19	2号土坑	埋土	5号木?	11.0	1.0	0.5	—	—	25	32
107	19	2号土坑	埋土	5号木?	11.5	1.2	0.5	—	—	25	32
108	19	2号土坑	埋土	5号木?	14.9	0.8	0.6	—	—	25	32
109	19	2号土坑	埋土	5号木?	13.6	0.8	0.6	先端に瘤とり	—	24	32
110	19	2号土坑	埋土	5号木?	15.4	1.3	0.5	端部に穿孔1ヶ所、先端に瘤とり	—	25	32

No.	調査区	位	層	種	高さ cm	幅 cm	厚さ cm	備	考	図版	写真
111	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	16.7	0.7	0.5	西側縁に面とり。先端に面とり		25	32
112	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	15.9	0.7	0.6	先端に面とり、側縁に面とり		25	32
113	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	18.9	1.3	0.5	先端に面とり		25	32
114	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	28.0	1.0	0.6	木口と直行方向に細い擦痕		25	32
115	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	26.4	1.0	0.3	117と接合		24	32
116	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	25.8	1.7	0.3			24	32
117	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	24.6	1.2	0.3	115と接合。木口と直行方向に細い擦痕。折れ		24	32
118	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	28.2	0.9	0.5	西側に面とり		25	32
119	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	28.0	0.8	0.5	先端に面とり。折れ		25	32
120	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	26.0	2.0	0.5	木口と直行方向に細い擦痕		24	32
121	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	28.0	1.0	0.6	先端に面とり		25	32
122	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	27.6	1.1	0.7	肉先面端面とり、西側側面端面とり(約2/3)		24	32
123	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	27.6	1.2	0.6	側縁に面とり		24	32
124	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	28.2	1.5	0.5	先端に面とり。木口と直行方向に擦痕		25	32
125	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	27.9	1.4	0.7	面とり(側面)		24	32
126	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	28.1	1.5	0.6	側縁に面とり。木口と直行方向に擦痕		25	32
127	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	27.7	1.3	0.5	側縁に面とり。木口と直行方向に擦痕。折れ		25	32
128	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	20.7	2.1	0.7	竹(竿端)。先端側面から削り		25	32
129	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	9.7	2.2	0.6	竹(竿端)		25	32
130	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	7.6	1.2	1.1	小枝。ナナメ方向の切断面(1方)		—	32
131	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	8.2	1.4	1.0	小枝。切削面(1方)		—	32
132	19	2号土坑	埋土	ちゅうき	8.2	1.5	1.2	小枝。切削面なし		—	32
273	19	7号 sond (20-2)	埋土	せんじ	12.8	7.1	5.5			26	36
274	19	7号 sond	埋土	せんじ	2.3	1.8	1.6			—	36
317	27		1	木札?	6.1	1.3	0.4	側縁から抉り		30	38
319	46	P35	埋土	せんじ	2.7	2.5	1.7			—	38
320	46	P35	埋土	せんじ	2.8	2.2	1.7			—	38
321	46	P35	埋土	せんじ	3.0	2.0	1.5			—	38
322	46	P39	埋土	せんじ	3.3	2.1	1.5			—	38
323	46	P39	埋土	せんじ						—	38

第9表 国産陶陶器(近世以降)

No.	調査区	位	古	層	種	高	幅	厚	年代	備	考	図版	写真
280	24	西端	I層	擾乱	不明	すり鉢						29	36
282	24	西端	I層	擾乱	鉢	明治以前						—	36
301	27	西側	擾乱	おきあひ	鉢	明治以前						—	37
302	27	中央付近	擾乱	不明	すり鉢	近世~						30	37
303	27		擾乱	不明	すり鉢							30	37
304	27	西端	I	不明	すり鉢							30	37
305	27	西端	I	不明	すり鉢							30	37
306	27		擾乱	東北?	土びん壺	明治以前						30	37
307	27		擾乱	大壺	竹縫縦	18Cか19C						30	38
308	27		擾乱	大壺	折縫縦	18Cか19C						30	37
309	27		擾乱	大壺	飯茶碗	18C						30	37
310	27		擾乱	不明	飯茶碗	茶木18C	上手、色絵、朱付の上に彩色、江戸期に入る					30	38
311	27		擾乱	肥料	皿	IV期(18C)						30	38
312	27		擾乱	平滑水	かんごくくり	19J~明治	山水模写					30	37
313	27		擾乱	不明	花人?	19C	上部が開け					30	38
314	27		擾乱	?	皿	19C						—	38

#### 4.まとめ

ここでは、本遺跡の主体となる12世紀後半の遺構と遺物を整理し、まとめをしたい。

##### (1) 遺構

###### ①掘立柱建物跡

10区1棟、11区4棟、13区1棟、14区3棟、15区1棟、46区3棟が検出された。調査区が狭小なため、全体のプランをつかめるものは少なく、また狭い範囲で組んだものなので真にこれからのような建物跡になるか、わからない部分も多い。しかし、13区、14区、15区など隣接の宅地を町教育委員会が調査した区では建物の規模、形態が明らかとなった。

13区1号建物跡 4間×7間の総柱の建物

14区2号建物跡 2間×3間の建物

14区3号建物跡 1間四面以上の建物

これらの建物は県道平泉・嚴美線改良工事に伴う志羅山遺跡の調査の中では規模が大きく、この付近の中心的な建物と思われる。さらに、14区南側の48次調査区でも、掘立柱建物が3棟検出されており、その中の1棟は1間四面の建物であることがわかっている。(平泉町教育委員会首原計二氏のご教授による。)

また、建物の軸方向についてはある程度建物規模の判明したもので

13区1号建物跡 N-5° -E

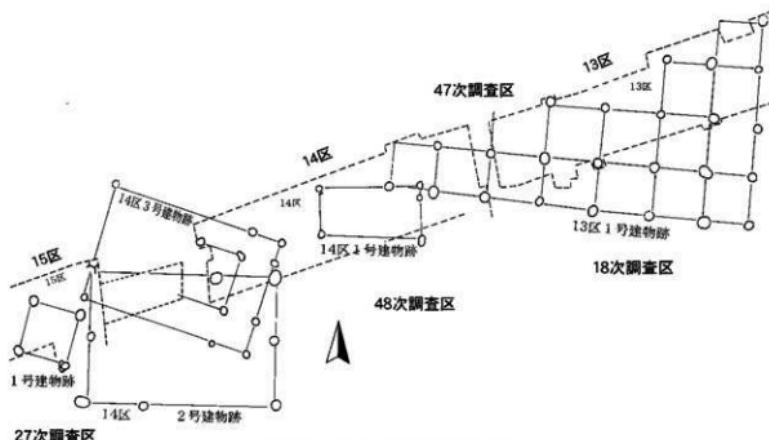
14区1号建物跡 N-2.5° -W

2号建物跡 N-0°

3号建物跡 N-18.3° -E

15区1号建物跡 N-14.3° -E

と、北から若干東西に振れるもの(13区1号、14区1号、2号)と東に傾くもの(14区3号、15区1号)に大別される。軸方向の違いは時期差を示すと思われることから、13区から15区にかけての地帶は屋敷地



第31図 13区～15区検出の建物跡

の中で建物が継続して建てられる場所であったことがわかる。

#### ②溝、堀について

溝幅約2m以上の比較的規模の大きい、19区7号溝（20区2号溝）、12区1号溝、46区1号溝、2号溝と、その他の比較的細い溝がある。

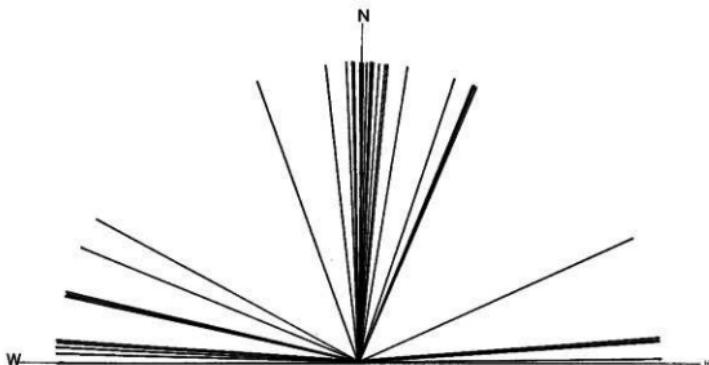
19区7号溝と12区1号溝（及び46区1号溝）は特にその規模の大きさから周辺を大きく区画する溝と考えられる。これらの溝は親自在王院の東側に想定される大区画（本澤1993、1995）を画するものと推定される。町教育委員会が発掘した19区、20区南側の20次調査、32次調査の結果、19区7号溝の南側にはその北側と異なり、造構が極端に少ないこと、塗跡（3号溝、1号溝、4号溝）が付随していることから、道路側溝の可能性も高いことを町教育委員会皆原計二氏よりご教示いただいた。本溝は粘土と砂が交互に堆積しており、出土したかわらけに完形品が多いことからも水が流れていると考えられる。20区との境付近から大量のかわらけのほか少量の漆紙、自然木などが出土し、この箇所で廃棄が行われていたことが注目される。

#### 溝、堀の方向について

カーブするものを除いた直線的な溝、堀についてそれぞれの方向を示したのが、第32図である。このデータは何度も述べるとおりごく狭い調査範囲の検出結果から取ったもので、特に溝、堀などの場合部分的なぶれも反映している可能性がある。本来ならば隣接する教育委員会の調査地の検出結果も踏まえて、取るべきものであり、ごく大まかな傾向であることをお断りしておく。

最も集中しているのはN方向と西にごくわずかにふれるもの（及びそれから約90度東西にふれる方向）である。次に、北から東へ20度前後ふれるもの（及びそれから約90度東西にふれるもの）である。

本澤慎輔氏は柳之御所跡や花立I遺跡、志羅山遺跡など平泉遺跡群の建物及び区画溝の方向について分析し、N-15°-E、N-8~12°-E、及び毛越寺や親自在王院、その東に溝で区画された志羅山遺跡の西地区のN-178°48.06"-Eの方向の造構群は12世紀第3四半期の所産であり、N-19°-Eの方向を持つ造構は無量光院を建立した秀衡の時代の12世紀第4四半期の所産と見ている。（本澤1993）



第32図 溝・堀の方向

まさに親自在王院の東隣りにあたる本次調査区の西側部分では、ほぼ北、ほぼ東西方向の溝堀が多く、16区ぐらいから東に20度前後ふれる溝も現れてくる。なお、19区でも東にふれる溝が1条検出され、重複するほぼ東西方向の溝2条を切っていることは、この方向性を持つ遺構の新しさを示していると思われる。また、大区画内の志羅山遺跡西地区のなかでも、20度前後東にふれた区画や建物方向が現れることは、12世紀第4四半期になって從来の北方向の屋敷割が一部崩れ、新しい区画で建物を建てたり土地を区する動きがあったことを示す可能性があるが、今後この地区で、重複した両者の遺構の新旧関係が明らかになる例が増えることを待ちたい。

## (2) 遺物

### ①かわらけの分類について

今次調査出土のかわらけのうち特殊なものを除く手づくねかわらけ、ロクロかわらけを次のように分類した。この分類は松本建速氏が柳之御所遺跡出土かわらけで行った分類（松本1995「柳之御所跡」分冊3 Xかわらけの形態分類と編作）などをもとに吉田理氏が「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書P267～269（1997）」で行ったもの（分類図はP315に掲載）によっている。

手づくねかわらけ分類表

古い	新しい
大	小
C	C
D	D



※1 段を渡すように焼かれた場合はC（2段階）とする

※2 C1とD1との判別方法——C1→下段と同じくらい上段が長い（よって2段になる）  
——D1→下段よりも上段が短い

※3 面取（例）とつまみ（例）との違い——面取……断面が三角形に尖る（口丸）△  
（なお両方ともつまみの内縫する）——つまみ……断面が丸い（口丸）△

### ロクロかわらけ分類表

R d' 1 0 - 1	初めの数字…外形 (顔の形)
R d : ロクロ大面	0 : 丸い
r d : ロクロ小面	1 : 直線的
R b : ロクロ大輪	2 : 直線的で2段
r b : ロクロ小輪	後の数字…輪の数 (外面)
'有 : 高台が全く無い	0 : 輪が無い、見えない※
'無 : 高台がある	1 : 1段見える
	2 : 2段見える
	3 : 3段見える
	4 : 4段見える
	5 : 5段以上見える

※  
高台と口縁部との境が  
はっきり見えないとき  
の方が多い

内面の形  
0 : ゆるやか  
1 : 底に対し壁面が直線的 多くはこの形をとる

#### 特殊なかわらけ

手づくねかわらけのうち特殊なかわらけ（いわゆるコースター状かわらけ、または内折れかわらけと呼ばれるもの）は10区1号土坑の2、13区3号溝出土の38、39、14区1層出土の57、16区水田下の褐鉄層出土の79、19区7号溝の246～249の合計9点出土した。

今次調査で出土したかわらけのうち、図化したものは手づくねかわらけ135点（うち特殊かわらけ9点）、ロクロかわらけ10点である。出土遺構は圧倒的に19区7号溝（20区2号溝と同じ）が114点と多い。次いで16区3号溝4点、10区3号土坑3点である。

手づくねかわらけは上記分類でC 2、C 3、C 4、C 5、D 2、D 3、D 4があり、C 5'、D 4'は見られなかった。図化した中での点数、割合は次の表、グラフ1のとおりで、半数近くをD 2が占め、次いでC 3、C 4が多い。C 2、D 3は各1点のみであった。

分類	C 2	C 3	C 4	C 5	D 2	D 3	D 4	特殊
数	1	23	18	7	62	1	10	9

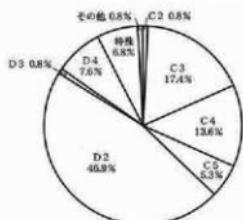
#### 47次調査 手づくねかわらけの分類別個数

ロクロかわらけは10点のうち5点が19区、3点が16区から出土しており、点数が少ない上に出土する場所が特定されているようである。中でも19区7号溝はそのうち3点を数える。法量のわかるものは少なく、破片での出土が多い。また、小型品とわかるものは3点、大型品とわかる、あるいは推測されるものは6点である。

#### ②19区7号溝（20区2号溝）出土のかわらけについて

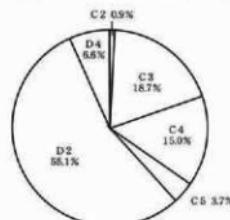
出土したかわらけのうち、復元できたものは114個を数える。復元個体数のうちロクロ成形のものは3個で、他の111個は手づくねのものである。特例かわらけと手づくねかわらけを分類したところ次の表、グラフ2のとおりとなった。全体の復元個体内での割合とほぼ同じ傾向を示しており、D 2が圧倒的に多く、C 3、C 4がそれに次いでいる。

47次調査手づくねかわらけの分類別割合

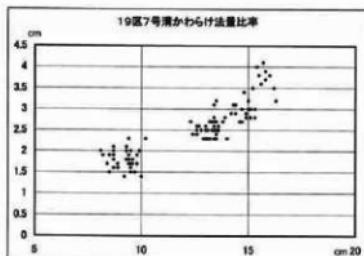


グラフ1

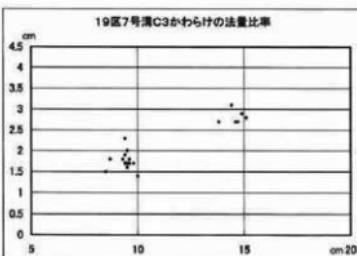
19区7号溝手づくねかわらけの分類別割合



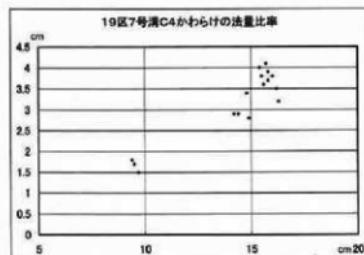
グラフ2



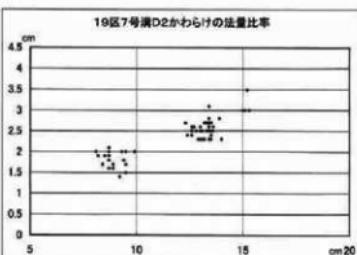
グラフ3



グラフ4



グラフ5



グラフ6

第33図 かわらけの分類別割合、法量分布

これらの法量について、口径と器高の分布を表したものが、グラフ3である。大まかであるが、口径10cm以下、器高2.5cm以下の小皿（小）、口径13.5cm以下、器高3.2cm以下のまとまり（大-1）、おおむね口径13.6～15.5cm、器高3.3cm以下のまとまり（大-2）、口径15cm以上、器高3.4以上のまとまり（大-3）

が認められる。

分類別に法量に変化があるか、ある程度の個体数のある、C3、C4、D2についてグラフ化したのが、グラフ4～6である。3種とも小皿（小）については同じような傾向を示す。

C3については（大-2）のみ

C4についてはもっとも大型の（大-3）が多く、そのほかは（大-2）

D2については、（大-1）が大部分で、他は（大-2）が少量あるのみ

つまり、大皿でも小型の（大-1）は一段なでで、口縁部が直線的に立ち上がるD2の技法で製作されている。また、もっとも大型の（大-3）は二段なでで、上段を強くつまむ技法で製作されている。

松本建連氏は柳之御所出土かわらけの分類と編年（松本1995）において、

大皿を15.0cm以上、

13.6～14.9cm、

13.5cm以下

の3分類に分け、手づくねかわらけの口径の変化を「I期の遺構出土のかわらけの方が、II期の遺構出土のものよりも大きい。そして、およそ13.5cmぐらいがI、II期を分ける境界線になる。15cmを越す製品はI期の遺構に多いがII期にある。一方、13.5cmよりも小さな製品はII期にしかない。ただし、計測の際の誤差や個体のゆがみによって、数mmの差は生ずる可能性がある。」とし、「I期を12世紀中葉（1150年代～1175年頃）、II期を1175年ごろ以降としている。本次調査のかわらけの場合、松本氏の大皿の3分類と若干のずれ（15.0cmを境として分けることができず、15.5cmぐらいで分類される。）があるが、ほぼ同じような傾向を示しており、13.5cm以下の製品（大-1）を多く有することから松本氏の謂うII期としてよいのではないかと思われる。」

分類	C2	C3	C4	C5	D2	D4	特殊
数	1	20	16	4	59	7	

#### 19区7号溝 手づくねかわらけの分類別個数

##### ③中国産陶磁器について

図化した13点のうち、白磁が11点を占める。年代はおおむね12世紀代と思われるものが多いが、19区7号溝最上層から出土した青磁は13世紀代の可能性がある。

出土した場所は6点が13区からで、同区の大型建物と関連があるかもしれない。

##### ④国产陶器について

図化した34点のうち、涅美産が16点、常滑産が13点である。常滑、涅美産の陶器は12世紀後半と思われるものが多い。出土地点は12区1号溝、19区7号溝（20区2号）溝で大半を占める。19区7号溝ではかわらけはどちらかといえば覆土下層から多く出土するのに対し、陶器は上層からの出土が多い。

なお、主要地方道平泉巣美線の北側の46区から、14世紀中葉と思われる古瀬戸折縁深皿の破片が出土している。この破片が出土した柱穴は他の区で検出された12世紀と思われるものと違い、やや黒っぽい覆上の柱穴である。周辺には同様の柱穴が多く、この破片がこのような柱穴の年代を示すものだとすれば、12世紀以後の平泉の様子を探る資料となろうが、周辺の調査を待ちたい。

#### 参考文献

- 岩手県文化振興事業団 1995 「柳之御所跡」埋蔵文化財調査報告書第228集
- 埋蔵文化財センター 1997 「泉屋道跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」埋蔵文化財発掘調査報告書 第247集
- 2000 「志羅山道跡第46・66・74次発掘調査報告書」埋蔵文化財調査報告書 第312集
- 宇野隆夫 1981 「第4章 遺物の考察:『京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-白河北殿北辺の調査』  
京都大学埋蔵文化財研究センター」
- 平泉町教育委員会 1993 「倉町道跡第1次志羅山道跡第11・12・19・22次発掘調査報告書」
- 1993 「志羅山道跡第13・15・16・17・18・20次発掘調査報告書」
- 1994 「志羅山道跡第26・27次発掘調査報告書」
- 1995 「平泉道跡群発掘調査報告書」
- 1997 「志羅山道跡第35次発掘調査報告書」
- 本澤慎輔 1993 「12世紀平泉の都市景観の復元--現在の地形景観と発掘調査成果をもとに--」  
『古代文化』45・9
- 1995 「都市平泉の成立と構造」『中世都市研究2 古代から中世へ』
- 松本建連 1992 「柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味--柳之御所跡のかわらけの系譜とひらいづみにおけるかわらけの出現から見た文化変化の一様相--」  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要』XII
- 1993 「柳之御所跡出土かわらけ編年試案」同『紀要』XIII
- 1995 「Xかわらけの形態分類と編年」『柳之御所跡』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 1997 「12世紀平泉の四面削立柱建物」同『紀要』XVI

## 5. 分析、鑑定

### (1) 志羅山遺跡47次調査におけるトイレ遺構分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

トイレ遺構等の糞便堆積物は、堆積物中の寄生虫卵密度、花粉組成、種実組成にそれぞれ特異性が認められる。したがって、これらの分析を総合的に行うことによって、対象となる堆積物が糞便であるか否かがわかり、トイレ遺構を示唆することが可能である。また、寄生虫の特異な生活史や食用とされた花粉や種実を復元することによって、それらを排泄した人々の飲食物や食生活の検討を行うことも可能となる。

ここでは、志羅山遺跡47次調査において検出された土坑内堆積物について検討を行った結果について報告する。

#### 2. 試料

調査対象は、志羅山遺跡47次調査19区より検出された土坑のうち、12世紀とされる1号土坑と2号土坑の2カ所である。試料は、1号土坑では底に塊状に堆積した黒褐色土(SY47便-1)と第8層オリーブ灰色土(SY47便-3)、2号土坑では最下層の第6層灰色土(SY47便-2)の計3点である。

表1 試料

試料番号	遺構・堆積物
SY47便-1	19区1号土坑 最下層黒土
SY47便-3	19区1号土坑 第8層オリーブ灰色土
SY47便-2	19区2号土坑 第6層灰色土

#### 3. 寄生虫卵分析

##### (1) 方法

寄生虫卵の分離、抽出は金原(1992、1994)を踏襲し、試料に以下の処理を施して行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 片方にアセトトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるとい

う操作を3回繰り返して行った。

## (2) 結果

1号土坑のSY47便-1からは回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、SY47便-3からは回虫卵、鞭虫卵、2号土坑のSY47便-2からは回虫卵、鞭虫卵、日本海翌頭条虫卵がそれぞれ検出された。SY47便-1では回虫卵、鞭虫卵の出現密度が極めて高く、試料（堆積物）1cm<sup>3</sup>中に70,000個に達する寄生虫卵が検出された。SY47便-3でもSY47便-1よりは少ないが9,000個以上に達する。なお、SY47便-2では1,000個に満たない。

## 4. 花粉分析

### (1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂一粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び冰酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレーパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### (2) 結果

#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉14、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計37である。これらの学名と和名および粒数を表1に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

##### 〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ、グミ属、モクセイ科、リョウブ

##### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科

### 〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アザケ科、ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ科、センブリ属—ツルリンドウ属—リンドウ属、シソ科、オオバコ属、タンボボ属、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

### 〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

#### 2) 1号土坑

SY47便-1、SY47便-3は樹木花粉が極めて低率で草本花粉の占める割合が非常に高い。SY47便-1ではイネ属型を含むイネ科が優占し、アブラナ科の出現率も高い。他にヨモギ属、カラハナソウ属、ヒユ科、ソバ属などが出現する。SY47便-3ではアブラナ科、イネ属型を含むイネ科、センブリ属—ツルリンドウ属—リンドウ属の出現率が高く、ヨモギ属、カラハナソウ属、ヒユ科なども出現する。

#### 3) 2号土坑

SY47便-2は樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、樹木花粉ではスギやコナラ属コナラ亜属がわずかに出現する。草本花粉ではヒユ属が優占し、カラハナソウ属、アブラナ科、ヨモギ属が出現する。

## 5. 種実同定

### (1) 方法

試料（堆積物）100ccを0.25mmの篩を用いて水洗選別を行い、その残渣を双眼実体顕微鏡下で観察した。必要に応じて生物顕微鏡観察も行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、節、種の階級で示した。

### (2) 結果

#### 1) 分類群

樹木7、草本28の計35が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。

以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

### 〔樹木〕

#### ・クワ属 *Morus* 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面は粗い。長さ1.6mm、幅1.4mm。

#### ・ナシ *Pyrus* 果実 パラ科

黒褐色で球形を呈し、一端が突出している。表面は粗い。長さ7.7~8.3mm、幅5.8~8.3mm。

#### ・サクラ属サクラ節 *Prunus sect. Pseudocerasus* 核 パラ科

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。長さ6.8mm、幅5.7mm。

■

#### ・キイチゴ属 *Rubus* 核 パラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。長さ2.2~2.5mm、幅1.3~1.4mm。

#### ・ウルシ属 *Rhus* 種子 ウルシ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある。断面は偏平である。長さ4.2mm、幅3.3mm。

- ・マタタビ属 *Actinidia* 種子 マタタビ科  
茶褐色で楕円形を呈す。表面には規則的に並ぶ孔がある。長さ1.8~2.5mm、幅1.3~1.5mm。
  - ・カキノキ属 *Diospyros* 種子 カキノキ科  
破片である。茶褐色を呈し、表面には光沢がある。
- [草本]
- ・イネ *Oryza sativa* L. 種 イネ科  
茶褐色で偏平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。長さ6.2~7.0mm、幅3.3~3.7mm。
  - ・アワ *Sectaria italica* Beauv. 種 イネ科  
茶褐色で楕円形を呈し、表面には横方向の微細な隆起がある。長さ2.5~2.7mm、幅1.4~1.5mm。
  - ・ヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno 種 イネ科  
黄褐色~茶褐色で楕円形を呈し、表面には微細な縦方向の模様がある。長さ3.0~3.7mm、幅1.5~2.0mm。  
内穎の長細胞の側壁が深く切れ込み、側枝が長い。
  - ・ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科  
黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、基部に針状の付属物がある。断面は両凸レンズ形である。  
表面には横方向の微細な隆起がある。長さ2.1~2.3mm、幅1.8~1.9mm。
  - ・カヤツリグサ科A・B・C・D *Cyperaceae A·B·C·D* 果実  
Aは黄褐色で広倒卵形を呈す。断面は片凸レンズ状である。基部に針状の付属物を持つ。長さ2.0~2.1mm、幅1.5mm。  
Bは黒褐色で、やや光沢がある。倒卵形を呈し、断面は片凸レンズ形である。長さ2.3~2.4mm、幅1.4~1.5mm。  
Cは茶褐色で倒卵形を呈す。断面は偏平である。長さ1.6~1.7mm、幅1.1~1.2mm。  
Dは黒褐色で倒卵形を呈す。断面は偏平である。長さ1.2~1.5mm、幅0.8~0.9mm。
  - ・イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科  
黒褐色~黒色で楕円形を呈す。片面に文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。長さ3.4~3.8mm、幅1.8~2.0mm。
  - ・コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子  
ミズアオイ科  
淡褐色で楕円形である。表面には縦方向に8~10本程度の隆起があり、その間には横方向に微細な溝線がある。種皮は薄く、半透明である。長さ1.0~1.1mm、幅0.4~0.5mm。
  - ・タデ属A・B・C *Polygonum A·B·C* 果実 タデ科  
タデ属Aは黒褐色でやや光沢があり、卵形を呈す。基部に突起を持ち、断面は三角形である。長さ2.6~2.8mm、幅1.3~1.5mm。  
タデ属Bは黒褐色で卵形を呈し、基部に突起を持つ。表面には網目模様があり、断面は両凸レンズ形である。長さ2.2~2.4mm、幅1.5~1.7mm。  
タデ属Cは黒褐色で卵形を呈し、先端がややとがる。断面は両凸レンズ形である。長さ2.4~2.5mm、幅1.8~1.9mm。

- ・ギシギシ属 *Rumex* 果実 タデ科  
黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。断面は三角形である。長さ2.2~2.3mm、幅1.3~1.4mm。
- ・アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科  
黒色で光沢があり、円形を呈す。中央にくぼんだヘソがあり、ヘソから周縁まで浅い溝がはしる。径1.0~1.1mm。
- ・ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科  
黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。径1.2~1.3mm。
- ・ナデシコ科A・B *Caryophyllaceae A・B* 種子  
Aは黒色で円形を呈し、一端がくびれてヘソがある。表面には小突起が密に分布する。径0.9~1.1mm。  
Bは黒色で円形を呈し、一端がくびれてヘソがある。表面には小突起が密に分布する。径1.3mm。Aよりも小突起が大きい。
- ・ヘビイチゴ属・オランダイチゴ属・キジムシロ属  
*Duchesnea-Fragaria-Potentilla* 種子 バラ科  
黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。長さ1.1mm、幅0.6mm。
- ・カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科  
茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。長さ1.4~1.5mm、幅0.8~0.9mm。
- ・エゴマ *Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Hara 果実 シソ科  
茶褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径2.0~2.4mm。径2.0mm以上をエゴマとし、2.0mm以下をシソ属とした。
- ・シソ属 *Perilla* 果実 シソ科  
茶褐色で球形を呈し、下端にヘソがある。表面には大きい網目模様がある。径1.5~1.8mm。破片で径が不明なものはすべてシソ属 (*Perilla*) の破片とした。
- ・ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科  
茶褐色~黄褐色で円形を呈し、一端にくぼみがある。表面には不規則で微細な網目模様がある。断面は扁平である。径3.2~3.7mm。径が3.0mm以上と大きく、現生ナスの種子を酸処理したら網状構造が一致したので、ナスと同定した。
- ・ナス科A・B *Solanaceae A・B* 種子  
Aは黄褐色で円形を呈す。表面には網目模様がある。径1.8~2.2mm。  
Bは黄褐色で楕円形を呈す。表面には網目模様がある。長さ1.7~1.8mm、幅1.2~1.3mm。
- ・ゴマ *Sesamum indicum* L. 種子 ゴマ科  
黄褐色~茶褐色で楕円形を呈し、一端がややとがる。表面には微細な網目模様がある。長さ2.7~3.0mm、幅1.6~1.9mm。
- ・ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科  
淡褐色~黄褐色で長椭円形を呈す。上端は「ハ」字状にくぼむ。  
19区1号土坑最下層出土種子で計測可能なものは1個体で、7.2mmであった。  
19区1号土坑出土種子で計測可能なものは4個体で、6.8mm、7.2mm、7.2mm、7.2mmであった。

19区2号土坑出土種子で計測可能なものは6個体で、6.6mm、6.9mm、7.1mm、7.3mm、7.8mm、8.2mmであった。

- ・メナモミ *Siegesbeckia pubescens* Makino 果実 キク科

黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。長さ3.1mm、幅1.6mm。

### 2) 1号土坑

SY47便-1、SY47便-3はヒエ、イネ、シソ属が多く、エゴマ、ナス、ウリ類が検出される。樹木の種実ではキイチゴ属、マタタビなどが検出された。他に食用や薬用となる植物としては、草本種実ではアカザ属、ヒユ属、アワ、ゴマ、樹木種実ではクワ属、ナシ属、サクラ節、カキノキ属が検出されている。

### 3) 2号土坑

SY47便-2はヒユ属が極めて多く、ナス科、タデ属、ヒエ、ウリ類、イネが検出される。

## 6. 考察

### 1) トイレ遺構の可能性

寄生虫卵分析において、SY47便-1で試料（堆積物）1cm<sup>3</sup>におよそ70,000個、SY47便-3で9,000個以上に達する量の寄生虫卵が検出されたように、1号土坑では高密度である。SY47便-2では1,000個に満たず、寄生虫卵密度は低い。花粉分析では、1号土坑のSY47便-1、SY47便-3でイネ属型を含むイネ科、アブラナ科の出現率が高く、ソバ属などの明らかに食用となる植物の花粉が多い。2号土坑のSY47便-2はヒユ属、カラハナソウ属、アブラナ科、ヨモギ属が多く、食用となる植物は含まれているものやや少ない。種実同定では、1号土坑SY47便-1、SY47便-3でヒエ、イネ、シソ属、エゴマ、ナス、ウリ類の食用となる栽培植物の種実が多く、樹木種実もキイチゴ属、マタタビ、クワ属、ナシ属、サクラ節、カキノキ属の食べられるもので占められる。2号土坑ではヒエ、ウリ類、イネの明らかに食用となる種実が検出されている。なお、ヒユ属が多く検出されたがこれは積極的に食用とされたとは考えにくい。

以上からみて、1号土坑の堆積物（SY47便-1、SY47便-3）は明らかに糞便の堆積とみなされる。よって、1号土坑はトイレ遺構である蓋然性が高い。2号土坑の堆積物（SY47便-2）は糞便が含まれているものの少なく、遺構自体もトイレ遺構である蓋然性が低い。

### 2) 食生活と薬用植物について

1号土坑（SY47便-1、SY47便-3）では回虫卵、鞭虫卵が多い。回虫、鞭虫は一般的な定住農耕によつて蔓延的に感染し、花粉と種実とも多いイネ科の穀類や花粉で多いアブラナ科の野菜類が重要な感染源であったと考えられる。肝吸虫卵からコイ科の淡水魚の摂食が、日本海製頭条虫卵の検出からサケ、マスの摂食が示唆されるがそれほど多くは食べられていなかったとみなされる。草本花粉でイネ属型を含むイネ科、アブラナ科の出現率が高く、種実で出現しているイネ、ヒエ、アワのイネ科の穀類とアブラナ科の野菜が多く摂食されていたとみなされる。イネ、ヒエ、アワのイネ科の穀類は頭の中に花粉が多く残存するため、脱穀後にも含まれていたものが反映されたとみなされ、ソバ属も同様と考えられる。種実からは穀類のほかにエゴマ、シソ属、ウリ類などが摂食され、クワ属、ナシ属、サクラ節、キイチゴ属、マタタビ、カキノキ属などのビタミン豊富な果樹の摂食が示唆される。

SY47便-3で花粉の出現率のやや高いセンブリ属—ツルリンドウ属—リンドウ属には薬用となるセンブリ *Swertia japonica* Makinoが含まれる。全草を用いるため充分に花粉が反映されると考えられ、センブリが

胃薬として用いられていたことが示唆される。

以上、1号土坑(SY47便-1、SY47便-3)の分析からは、イネ、ヒエ、アワのイネ科の穀類とアブラナ科の野菜がよく食べられ、ソバ、エゴマ、シソ属、ウリ類の畑作物、クワ属、ナシ属、サクラ節、キイチゴ属、マタタビ、カキノキ属の果物およびコイ科の淡水魚、サケ・マス類が摂食されていたことが示唆される。

#### 参考文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原 京 7条1坊一、奈良国立文化財研究所、p.14-15.
- 金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物、医動物学、新版臨床検査講座、8、医薬出版社、p.9-55.
- 金原正明 (1994) 便所堆積物からさぐる古代人の食生活。助成研究の報告4、味の素食の文化センター、p.35-48.
- 中村純 (1973) 花粉分析、古今書院、p.82-110.
- 鳥倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
- 中村純 (1980) 日本薬花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13、p.187-193.
- 中村純(1977)稻作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30.

表2 志羅山遺跡47次調査における寄生虫卵分析結果

学名	分類群	(試料0.1cc中)	1号土坑		2号土坑
			SY47便-1	SY47便-3	SY47便-2
Helminth eggs	寄生虫卵				
<i>Ascaris</i>	蛔虫卵	2643	355	48	
<i>Trichuris</i>	鞭虫卵	4519	581	11	
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵	28			
<i>Diphyllobothrium nihonkaiense</i>	日本海製頭条虫卵				2
Total	計	7190	936	61	
	(試料1cc中に算定)	71900	9360	610	

表3 志羅山遺跡47次調査における花粉分析結果

学名	分類群 和名	1号土坑			2号土坑
		SY47便-1	SY47便-3	SY47便-2	
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複縫管束亞属	1	5	2	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	4	3	11	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			2	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		2	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属		1	2	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属・アサダ			3	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ・シイ属	3	1	4	
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	1	2	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	6	16	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1		
<i>Elaeagnus</i>	グミ属			1	
Oleaceae	モクセイ科		1		
<i>Clethra barbinervis</i>	リョウブ			2	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Leguminosae	マメ科	2			
Araliaceae	ウコギ科	1			
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	200	149	120	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	133	62	18	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	6	14	
<i>Humulus</i>	カラハナソウ属	11	9	58	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属ナエタデ節	2		5	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1			
Chenopodiaceae	アカザ科			4	
Amaranthaceae	ヒュ科	6	8	272	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	3	2	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属		2		
Cruciferae	アブラナ科	75	211	47	
Umbelliferae	セリ科			2	
<i>Swertia-Tripterospermum</i>	センブリ属・ツルリンドウ属			133	3
<i>-Gentiana</i>	-リンドウ属				
Labiateae	シソ科			3	
<i>Plantago</i>	オオバコ属			5	
Lactucoideae	タンボボ亜科			1	
Asteroideae	キク亜科			3	
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	1		3	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	16	13	63	
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	單条溝胞子	2	6	10	
Trilate type spore	三条溝胞子	2	4	12	
Arboreal pollen	樹木花粉	15	21	46	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	0	0	
Nonarboreal pollen	草本花粉	449	596	623	
Total pollen	花粉总数	467	617	669	
	(試料1cc中に算定)	26152	22212	37464	
Unknown pollen	未同定花粉	3	3	3	
Fern spore	シダ植物胞子	4	10	22	

表4 志羅山遺跡47次調査における種実同定結果

学名	分類群 和名	(100cc中) 部位	1号土坑			2号土坑	
			SY47便-1	SY47便-3	SY47便-2		
arbor	樹木						
<i>Morus</i>	クワ属	種子			1		
<i>Pyrus</i>	ナシ属	種子	2				
<i>Prunus sect. Pseudocerasus</i>	サクラ属サクラ節	核	1				
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核	2	17			
<i>Rhus</i>	ウルシ属	種子	1				
<i>Actinidia</i>	マタタビ属	種子	3	4	1		
<i>Diospyros</i>	カキノキ属	種子	1				
herb	草本						
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	穎	34	6	2		
		破片	28	2			
<i>Setaria italica Beauv.</i>	アワ	穎	8				
<i>Echinochloa utilis</i> Ohwi et Yabuno	ヒエ	穎	262	66	12		
		破片	74	9	2		
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実	8				
Cyperaceae A	カヤツリグサ科A	果実	2				
Cyperaceae B	カヤツリグサ科B	果実	4				
Cyperaceae C	カヤツリグサ科C	果実	3				1
Cyperaceae D	カヤツリグサ科D	果実			1		
<i>Aneilema keisak Hassk.</i>	イボクサ	種子	9		3		
<i>Monochoria vaginalis Presl</i> var. <i>plantaginea Solms Laub.</i>	コナギ	種子	2				
<i>Polygonum A</i>	タデ属A	果実	1		7	11	
<i>Polygonum B</i>	タデ属B	果実	5				
<i>Polygonum C</i>	タデ属C	果実	11			14	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属	果実	2				
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	2	10	3		
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	10	5	110		
<i>Caryophyllaceae A</i>	ナデシコ科A	種子	3		1	6	
<i>Caryophyllaceae B</i>	ナデシコ科B	種子	1				
<i>Duchesnea-Fragaria-Potentilla</i>	ヘビイチゴ属・オランダイチゴ属 キジムシロ属	種子	1				
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子			1		
<i>Perilla frutescens Britton</i> var. <i>japonica Hara</i>	エゴマ	果実	40	47			
<i>Perilla</i>	シソ属	果実	21	40			
		破片	22	85			
<i>Solanum melongena L.</i>	ナス	種子	10	2			
<i>Solanaceae A</i>	ナス科A	種子	4	3	3		
<i>Solanaceae B</i>	ナス科B	種子		1	13		
<i>Sesamum indicum L.</i>	ゴマ	種子		2			
<i>Cucumis melo L.</i>	ウリ類	種子	3	4	6		
<i>Siegesbeckia pubescens Makino</i>	メナモミ	果実	2				
Total		合計	582	325	184		
Unknown	不明		3	3	0		

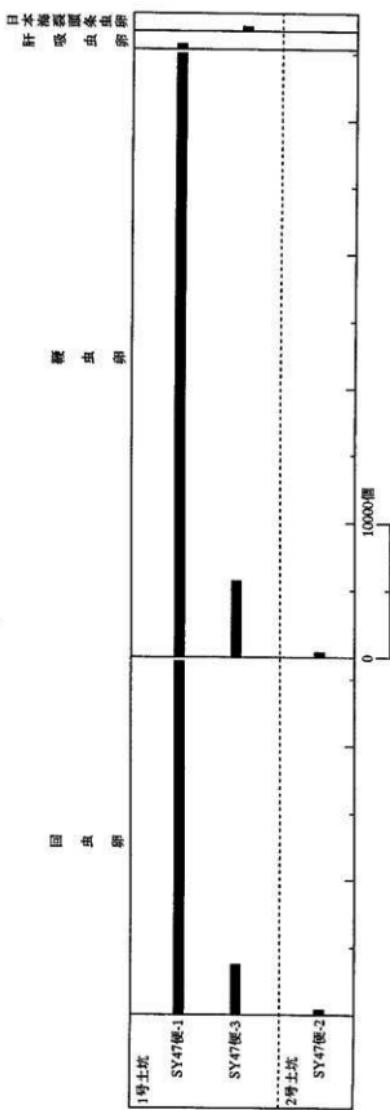


図1 志羅山遺跡第47次調査における寄生虫卵組成図（試料1cc中）

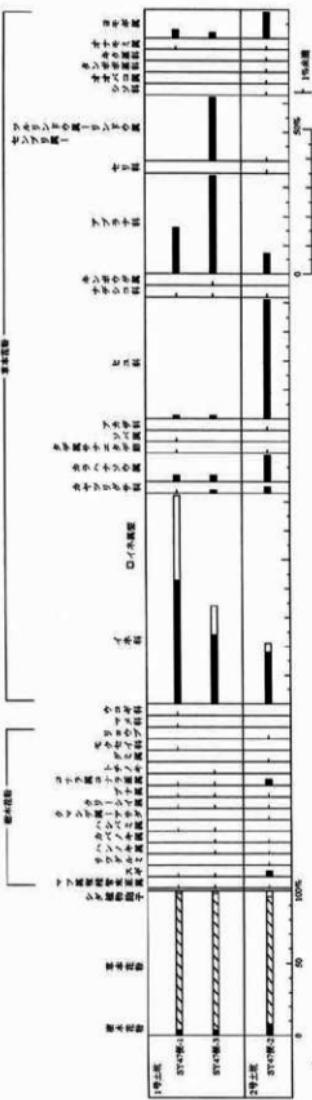


図2 志摩山道路第47次調査における花粉組成図（花粉总数が基準）

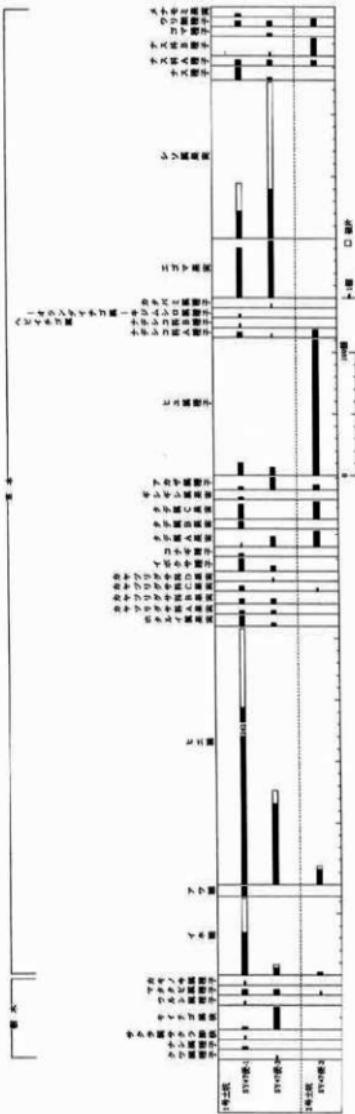
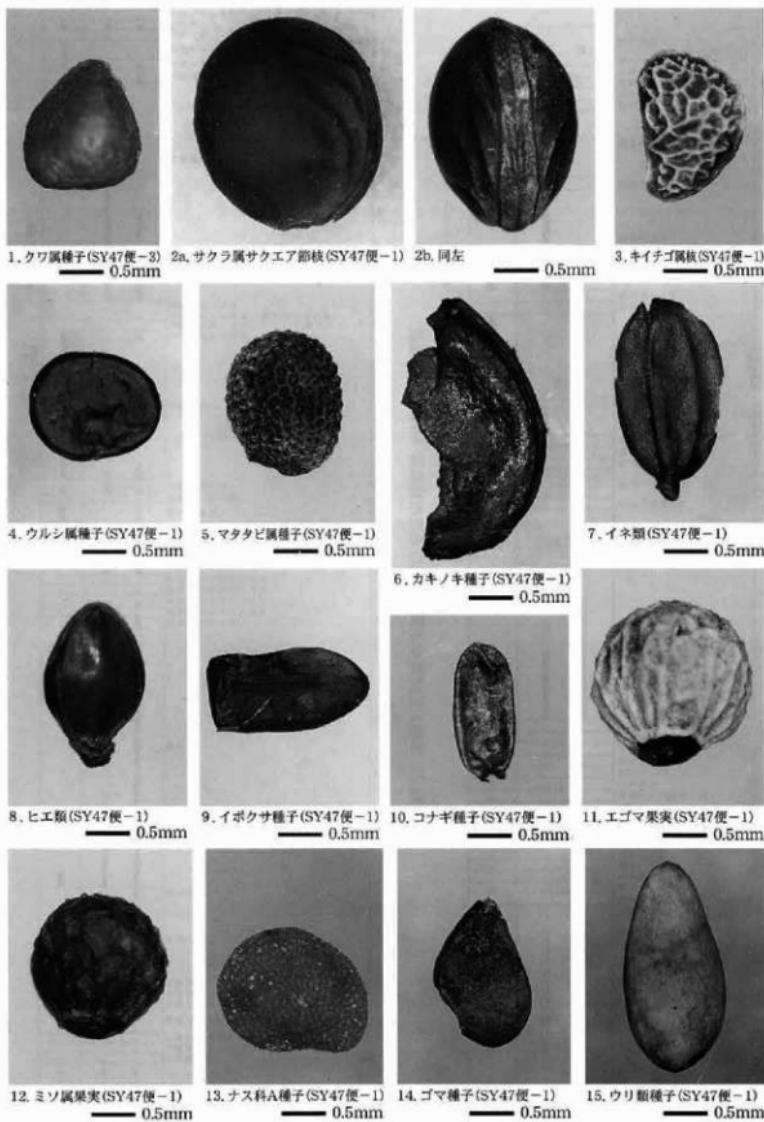
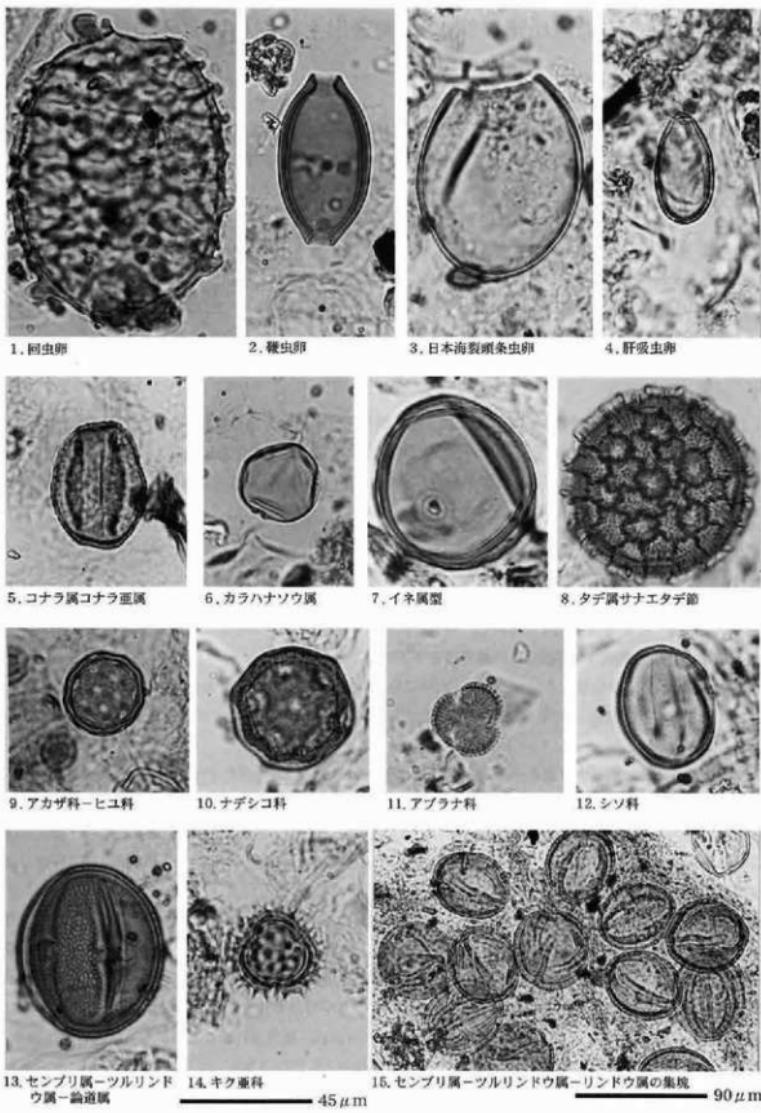


図3 志摩山道路第47次調査における花粉組成図（100cc中）





志羅山遺跡47次調査の寄生虫卵・花粉・胞子遺体

## (2) 志羅山遺跡第47次調査出土材樹種同定報告書

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

### 1. 試料

試料はNo.1～10の10点である。試料はいずれも柱材とみられ、No.7は12世紀のものとされる13区1号掘立柱建物跡（検出遺構は14区P10）から、その他の9点は12世紀？か中世？のものとされる柱穴状小穴から検出された（表1参照）。

### 2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の後手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封し人、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

### 3. 結果

試料は以下の3Taxa（分類群、ここでは節・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I・II」（1989）にしたがつた。また、一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。

#### ・アサダ (*Ostrya japonica*) カバノキ科 No.9

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合、横断面では梢円形、管壁は薄い。道管は單穿孔をもち、内壁にらせん肥厚が認められる。壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、1～2細胞幅、1～15細胞高。柔組織は短接線状。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道（中南部）・本州・四国・九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

#### ・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No.7

環孔材で孔眼部は1～2列、孔眼外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では梢円形～円形、小道管は管壁は薄く、横断面では多角形、ともに単独。單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合組織よりも。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、カシワ (*Quercus dentata*)・ミズナラ (*Q. crispula*)・コナラ (*Q. serrata*)・ナラガシワ (*Q. aliena*)といいくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*)に次ぐ優良材である。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 10.

環孔材で孔間部は1～4列、孔間外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜～放射方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単(～2)列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短節線状、年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、梢木や海底粗朶などの用途が知られている。

以上の同定結果を検出遺構と推定される所属年代とともに一覧表で示す(表1)。

用材は強度が大きく耐朽性に優れるクリを中心としたもので、掘立柱としては最適なものといえよう。なお、同様にクリを中心とした用例は隣接する泉屋遺跡第11次・第13次調査(既報)および泉屋遺跡第15次調査(別稿)でも得られる。

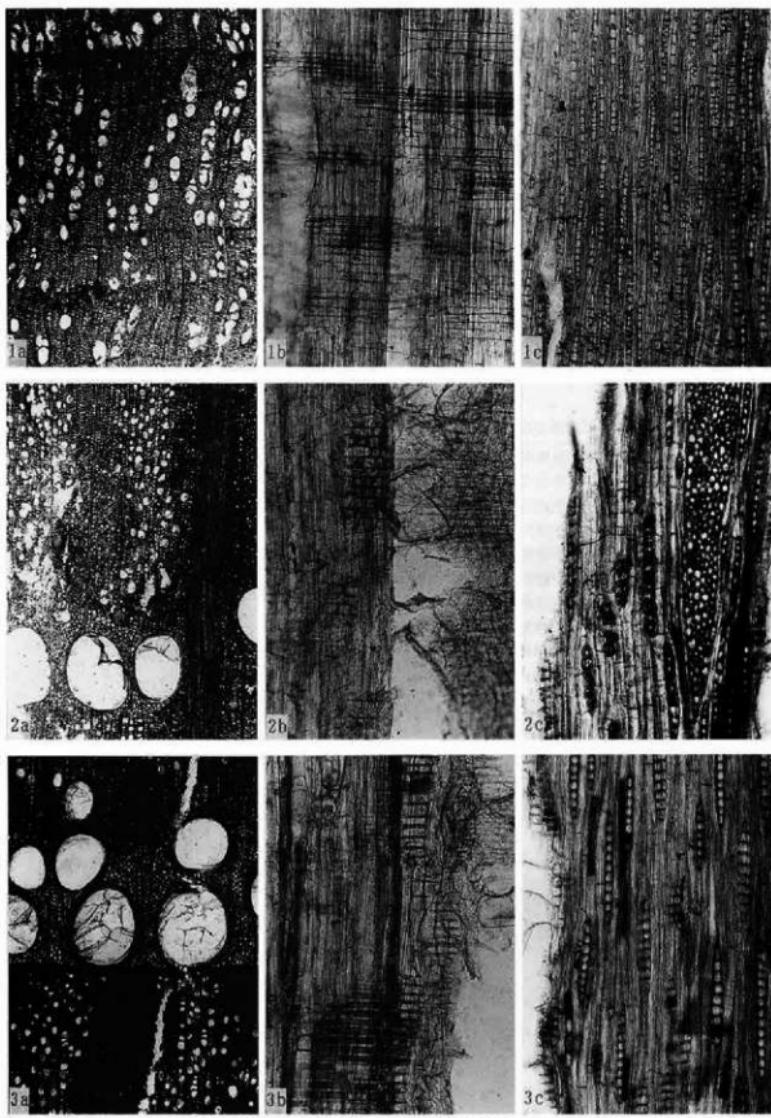
表1 志羅山遺跡第47次調査出土柱材の樹種

試料番号	検出遺構	所属年代	種名
1	10区P3	中近世?	クリ
2	10区P5	中近世?	クリ
3	10区P8	中近世?	クリ
4	11区P47	中近世?	クリ
5	11区P57	中近世?	クリ
6	12区P9	中近世?	クリ
7	14区P10	12世紀	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
8	15区P6	12世紀?	クリ
9	15区P10	12世紀?	アサダ
10	15区P15	12世紀?	クリ

引用文献

半井 信二 1979～1982 「木の辞典 第1巻～第17巻」、かなえ書房。

佐竹 義輔・原 寛・瓦理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I・II」、平凡社、321・305pp.



図版1 1. アサダ (No.9) 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (No.7) 3. クリ (No.8)

### (3) 平泉町志羅山遺跡出土鉄滓等の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社分析・評価センター

岡原 正明・伊藤 俊治

#### 1. はじめに

(財) 岩手文化振興事業団・埋蔵文化財センター般が発掘調査されました。平泉町志羅山遺跡から出土した鉄滓について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査のご依頼がありました。

調査の観点として、①製鉄原料の推定、②製鉄工程上の位置づけ、③観察上の特記事項など、を中心に調査をいたしました。

その結果についてご報告いたします。

#### 2. 調査項目および試験・検査方法

##### (1) 調査項目

試料 No.	試料 の 性 格	出 土 遺 構 No.	着 磁 力	重 量 g	成 分 分析	組 織 写 真	X線 回 折	外 観 写 真
SY-1	精鍊 鉄滓	SY47 1号 鍛冶関連遺構	中	206.8	前○	○	○	○
					後○	○		
SY-2	精鍊 鉄滓	SY47 1号 鍛冶関連遺構	やや 弱	602.5	○	○	○	○
						○		
SY-3	鍛造 剥片	SY47 1号 鍛冶関連遺構	強	20.1	○	○	○	○
						○		
SY-4	製鍊 鉄滓	SY47 12区 下の水田上	上・弱 底・中	365.8	○	○	○	○
SY-5	粒状滓 (湯玉)	SY47 1号 鍛冶関連遺構	やや 強	1.2	○	○	○	○

註：資料の性格は分析・調査の結果に基づき記入しました。

#### (2) 重量計測と着磁度調査

計重は電子天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入してあります。また着磁度調査については、直径30mm・1300ガウス(0.13 テスラ)のリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで個別調査結果の文中に表示しました。

#### (3) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影しました。

#### (4) 化学成分分析

化学成分分析JISの分析法に準じて行いました。分析方法および分析結果は12頁の一覧表に示しておりますので、ご参照下さい。

この調査は化学成分を知ることで鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄溶かの判断用データを得るために行いました。

分析は、鉄滓、鍛造剥片とも18項目行いました。

#### (5) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上)します。その後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。

#### (6) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射(回折)されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定するものです。

多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定されます。装置の使用や測定条件、測定結果は20頁以降に添付してあります。

### 3. 調査および考察結果

次に調査および考察結果を述べます。

#### (1) 試料No.SY-1 鉄滓

長さ110mm幅65mm高さ45mmで全体が水酸化鉄に覆われた牡蠣殻状に二段形成された楕形を呈する資料である。黒色で発泡し上部がなんだ塊である。着磁力は中程度、メタルチェッカーによる残存金属の反応はない。重量は206.8gである。分析・調査は「前後」二段とも行う。「前」は最初に形成された下部の滓、「後」は上部にある滓である。

##### 試料No.SY-1前

化学成分分析の結果、全鉄(T.Fe)は40.4%とやや少なく酸化第一鉄(ウスタイト: FeO)は25.4%であり、酸化第二鉄(ヘマタイト: Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)は29.3%で相対的にやや高い値であった。結合水(C.W.)が2.53%

とやや高く、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の一部がオキシ水酸化鉄（ゲーサイト等： $\text{FeOOH}$ ）になっているものと推定される。所謂、造渾成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ) と呼ばれる鉱物質部分が37.3%とやや多く、チタニウム（酸化チタニウムで表示： $\text{TiO}_2$ ）の量は0.36%、バナジウム（V）の値は0.007%であり少ない。砂鉄にはチタニウムとバナジウムが多く含まれ、これらの元素は製鍊や鍛冶加工の過程で鉄滓のほうに移行してくる。鉄源が鉱石の場合にはこれらの元素含有量は非常に少くなり、通常銅（Cu）等の元素の含有量が多くなる。

金属顕微鏡による淬断面の観察で、滓の中には丸い気泡が観察されるが、白い薺型のウスタイトの結晶と灰白色のゲーサイトおよび灰色短冊状のファイヤライト（鉄と珪素の酸化化合物： $\text{Fe}_2\text{SiO}_4$ ）の結晶が認められる。

X線回折の結果によると、ウスタイトに加えマグネタイト（四三酸化鉄： $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ）の強いピークが観察される。ファイヤライトの他シリカ（石英やクリストバライ特： $\text{SiO}_2$ ）や鉱物質化合物の存在が認められる。以上の結果を総合すると、この試料は砂鉄を鉄源とする精錬滓と考えられる。

#### 試料No.SY-1後

化学成分分析の結果、T.Feは41.9%とやや少なくFeOは31.0%であり、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ は24.8%でやや高い値であった。C.W.が2.46%とやや高く $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の一部がオキシ水酸化鉄に変化しているものと推定される。造渾成分は34.6%とやや多く、チタニウムの量は0.27%バナジウムの値は0.009%でありやや少ない。化学成分分析で得られた値は「試料No.SY-1前」の値と近似しており、鉄滓の形状から2回の異なった大鍛冶で形成された滓の積み重なりとも推定されたが、同一の鍛冶加工で生成された可能性も考えられる。

顕微鏡による淬断面の観察結果も「試料No.SY-1前」の場合とほぼ同じで、滓の中には丸い気泡が観察されるが、白い薺型のウスタイトの結晶と灰白色のゲーサイトおよび不明瞭ではあるがファイヤライトの結晶が認められる。

X線回折の結果によると、精錬工程の進行に伴って次第に多くなるウスタイトおよびマグネタイトの強いピークが観察される。ファイヤライトの存在は認められなかったが鉱物質化合物の存在が認められる。

以上の結果を総合し形状を加味すると、この試料は砂鉄を鉄源とする精錬塊形滓と考えられる。

#### (2) 試料No.SY-2 鉄滓

長さ120mm幅80mm高さ60mmで黄土色の水酸化鉄が固着した大きな塊である。植物纖維痕や鉱物の噛み込んだ状況が観察され、二段階に形成されたようにも思われる。着磁力はやや弱く、メタルチェッカーによる残存金属の反応はない。重量は602.5gである。

化学成分分析の結果、T.Feは55.1%とやや多くFeOは44.0%であり、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ は29.8%であった。C.W.が2.94%とやや高く、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の一部がオキシ水酸化鉄に変化しているものと推定される。造渾成分は21.4%とやや少なく、チタニウムの量は0.39%バナジウムの値は0.026%であり少ない。

淬断面の顕微鏡による観察では、美しい白い薺型のウスタイトの結晶が存在し精錬が進行した滓であることが判る。また、灰白色のゲーサイトも認められる。

X線回折の結果によると、ウスタイトの強いピークが観察されマグネタイトのピークも認められる。この他ファイヤライトや鉱物質化合物の存在が認められる。

以上の結果を総合し形状を加味すると、この試料は砂鉄を鉄源とする精錬塊形滓と考えられる。

### (3) 試料NoSY-3 鋳造剥片

剥片は肉厚のものから薄片のものまで種々混合しており、磁選によって収集された様子の資料である。着磁力は強いが、メタルチェッカーによる残存金属の反応はない。重量は20.1gである。

化学成分分析の結果、T.Feの値は68.4%と非常に高くFeOも48.3%と高い。また $Fe_2O_3$ は43.9%であるが、C.W.が0.86%と低いのでオキシ水酸化鉄の量は少ないものと推定される。造洋成分は6.33%と極めて少なく、チタニウムの量は0.11%バナジウムの値は0.005%であり共に少ない。

偏平な津断面の顕微鏡観察によると、その厚さは少なくとも0.2mm以上あり白い薬型のウスタイトの結晶が存在している。

X線回折の結果によると、ウスタイトとマグネタイトの強いピークが観察されるほか、ファイヤライト、ヘマタイトや鉱物質化合物の存在が認められる。

以上の結果を総合すると、この試料は砂鉄を鉄源とする鋳造剥片と考えられる。

### (4) 試料NoSY-4 鉄滓

直径90mm厚さ50mmで二段形成された楕形を呈し、水酸化鉄に覆われた塊である。底部に木炭の噛み込みと火床材の付着が観察される。上部中央が年年底だ塊でヒビ割れがある。着磁力は底部が中程度、上部は弱い。メタルチェッカーによる残存金属の反応はない。重量は365.8gである。分析・調査は下段について行う。

化学成分分析の結果、T.Feの値は26.0%と非常に低くFeOも23.9%と低い。また $Fe_2O_3$ は10.5%、C.W.は0.62%であった。一方、造洋成分は61.3%と極めて多い。チタニウムの量は0.69%バナジウムの値は0.007%であった。

津断面の顕微鏡観察で、ウスタイトやマグネタイトの結晶は全く認められない。一面に短冊様にファイヤライト結晶が存在し、その間をガラス質の鉱物質が埋めている。組織観察では製錬の初期の滓と見受けられる。

X線回折の結果によると、マグネタイトのピークや弱いウスタイトのピークが観察されるほか、ファイヤライトとシリカや鉱物質化合物の存在が認められる。

この試料は滓の断面組織、化学成分分析結果およびX線回折の結果からは砂鉄を鉄源とする製錬滓と考えられる。しかし、木炭の噛み込みと火床材の付着、楕形の形状からは精錬滓とも見受けられる。ここでは滓組織、成分の検討結果を重視して製錬滓に分類する。炉内滓ではなくおそらく鉄塊を取出す過程で剥落した製錬滓の部分が残ったものであろう。

### (5) 試料NoSY-5 粒状滓

直径1mm～6mmの中空の状態のものもある粒状滓(湯玉)である。着磁力はやや強く、メタルチェッカーによる残存金属の反応はない。重量は1.2gである。

化学成分分析の結果、T.Feの値は73.1%と極めて高い。FeOや $Fe_2O_3$ は試料が少なく残念ながら分析できなかった。一方、造洋成分は2.99%と極めて少ない。チタニウムの量は0.17%バナジウムの値は0.018%であった。

津断面の顕微鏡観察によると、滓は主として一面ウスタイトの結晶で構成されている状態が判り、鍛錬鍛冶の粒状滓の典型的な組織を示している。

X線回折の結果でも、ウスタイトとマグネタイトのピークのみが観察され、粒状滓中の鉱物質化合物など

の不純物は非常に少なく検出されない。また、粒状滓の中には金属鉄の存在を示すピークも検出されている。

以上の結果を総合すると、この試料はおそらく砂鉄を鉄源として作成された鉄を鍛冶加工する過程で発生した粒状滓（湯玉）と考えられる。

#### 4. まとめ

- (1) 鉄滓の鉄源は砂鉄と推定される。
- (2) 試料NoSY-1～SY-5の鉄滓には、製錬や精錬（大鍛冶）あるいは鍛冶加工（小鍛冶）過程の全ての工程の滓が網羅されている。
- (3) 粒状滓（湯玉）には金属鉄が検出された。ただし、組織写真では認められない。
- (4) 鉄滓の性格付は次のとおりである。

試料NoSY-1 精錬橢形滓 [大鍛冶滓]

試料NoSY-2 精錬橢形滓 [大鍛冶滓]

試料NoSY-3 鍛造剥片 [小鍛冶滓]

試料NoSY-4 製錬滓

試料NoSY-5 粒状滓（湯玉）[小鍛冶滓]

#### 5. 参考

- (1) 鉄滓の発生を鉄の生産工程から大きく分類すると、

- ①製錬滓 砂鉄や鉄鉱石を木炭等の炭素で還元して、酸素を取り除き、金属鉄を取り出す時に発生するもので、が内滓や炉底滓および炉外流出滓などがある。
- ②精鍛鍛冶滓 ①で出来た鉄塊から、さらに不純物を取り出して加工しやすい状態の鉄素材（鉄塊）に（大鍛冶滓）する時に生成するもので、成分的には①の製錬滓に近い。
- ③鍛造鍛冶滓 ②で出来た鉄素材や製品の鉄を加熱・鍛打して、鉄製品を作っていく過程で生成する鉄（小鍛冶滓）滓で、その生成過程により橢型鍛冶滓、鍛造剥片や粒状鉄滓（通称湯玉）等の形となる。
- ④鉄物滓 鉄を溶解し、鋳型に流し込んで鉄物を作る時に生成するもの。

等があります。

鉄は再加工（いわゆるリサイクル）の可能な素材として利用できるので、鍛冶場には各所で新規に生産された鉄と一緒にリサイクル品が持ち込まれてきた可能性もあると、考えるのが妥当であります。

素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものか、製鉄技術の進歩の状況はどうであったか等については、特定製鐵遺跡に付随する鍛冶工房や、製品としての鉄器類の追跡調査と研究を進めて行く過程で更に解明出来るものと思います。

#### (2) 鉄の分析結果について

分析結果表に記載されている全鉄分（Total Fe=T.Feと表示）の量と、その後に記載されている金属鉄（M.Fe）、酸化第一鉄（FeO）および酸化第一鉄（Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）との関係を簡単に述べると、後者の二つは酸化鉄（鉄と酸素の化合物）を示しており、それらの中の鉄（Fe）の量と金属鉄（M.Fe）の量とを合計したものが前者の全鉄分（T.Fe）となります。

したがって、分析値を合計する場合には全鉄分を除外して集計する必要があります。

また、酸化鉄にはこの他にもいろいろな形態をしたものがあり、鉄津中の鉄の成分量を見る場合には、全鉄分 (T.Fe) が重要になります。

なお、酸化鉄の他の化合物としては四三酸化鉄 ( $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 = \text{Fe}_3\text{O}_4$ ) がありますが、化学成分分析から直接含有量は求められません。

また、水分との接触が多い鉄器や鉄津の場合、水分 (C.W.) と酸化第二鉄とが結合したオキシ水酸化鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O} = 2\text{FeOOH}$ ) が一般的に認められます。その時の鉄錆の形態は、ゲーサイト [Goethite:  $\alpha$ - $\text{FeOOH}$ ]、アカゴナイト [Akaganite:  $\beta$ - $\text{FeOOH}$ ]、レビッドクロサイト [Lepidocrocite:  $\gamma$ - $\text{FeOOH}$ ] の3種類であり、生成環境や条件により変化します。

### (3) 鉄津の化合物について

鉄津を構成する化合物は一般に次のようなもので、顕微鏡写真およびX線回折の結果によると、原則としてこれらの存在がいずれかの組み合わせで認められます。なお、このほかにガラス質の化合物も存在します。：

ウスタイト	: Wustite ( $\text{FeO}$ )	白色の薺玉又は葡萄の房状の結晶
ファイヤライト	: Fayalite ( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )	短冊状やレース状の長い結晶
マグネタイト	: Magnetite ( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )	白色、多角盤状または樹枝状の結晶
ヘマタイト	: Hematite ( $\alpha$ - $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )	赤褐色～赤紫色
マグヘマイ特	: Maghemite ( $\gamma$ - $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )	赤紫色～黒紫色
ウルボスピニル	: Ulvöspinel ( $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )	淡褐色、角尖状～六角形状結晶
イルメナイト	: Ilmenite ( $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )	褐色針状の長い結晶
シュードブルッカイト	: Pseudobrookite ( $\text{Fe}_2\text{O}_5 \cdot \text{TiO}_2$ )	針状または板状結晶
ゲーサイト	: Goethite ( $\alpha$ - $\text{FeOOH}$ )	黄赤色、不定型
アカゴナイト	: Akaganite ( $\beta$ - $\text{FeOOH}$ )	黄色、不定型
レビッドクロサイト	: Lepidocrocite ( $\gamma$ - $\text{FeOOH}$ )	橙赤色、不定型
ヘーシナイト	: Hercynite ( $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_5$ )	ウスタイト中に多く析出。胡麻粒状

この他、石英=クオーツ (Quartz: $\text{SiO}_2$ )、ルーサイト (Leucite:  $\text{KAlSi}_3\text{O}_8$ )、プラギオレーゼ [Plagioclase:  $(\text{Na}, \text{Ca})(\text{Al}, \text{Si})_4\text{O}_8$ ]、ドロマイト [Dolomite:  $\text{CaMg}(\text{CO}_3)_2$ ] 等の鉱物やガラス質のものがあります。なお、色調は前記したものと若干異なる場合もあります。

分析結果(平泉町志羅山遺跡)

鉄滓関係

単位: % (m/m)

成分 試料No.	TFe	MFe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	C·W	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	TiO <sub>2</sub>	MnO	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	C	V	Cu
SY-1 前	40.4	0.20	25.4	29.26	2.53	25.6	5.73	41.7	0.78	0.36	0.20	0.74	<0.01	0.85	3.18	0.40	0.007	0.017
SY-1 後	41.9	0.50	31.0	24.76	2.46	20.7	4.74	7.86	1.33	0.27	0.29	0.75	<0.01	0.64	3.91	0.25	0.009	0.027
SY-2	55.1	0.08	44.0	25.79	2.94	15.9	3.65	1.63	0.42	0.39	0.14	0.29	<0.01	0.26	0.78	0.48	0.026	0.003
SY-3	68.4	0.15	48.3	43.93	0.86	4.86	1.06	0.21	0.20	0.11	0.11	0.23	<0.01	0.74	0.16	0.44	0.005	0.009
SY-4	26.0	0.09	23.9	10.50	0.62	46.5	11.6	2.46	0.71	0.69	0.19	0.25	<0.01	1.72	2.43	0.20	0.007	0.003
SY-5	73.1	*	*	*	*	1.76	0.68	0.40	0.15	0.17	0.12	0.11	<0.01	0.12	0.17	*	0.018	0.003

\* 試料不足のための分析不可

[分析方法] 鉄滓等の分析方法はJIS法に準拠し、以下の方法とした。

T.Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム触媒カリウム滴定法

M.Fe : 同素メタノール分解-E D T A滴定法

FeO : ニクロム触媒カリウム滴定法

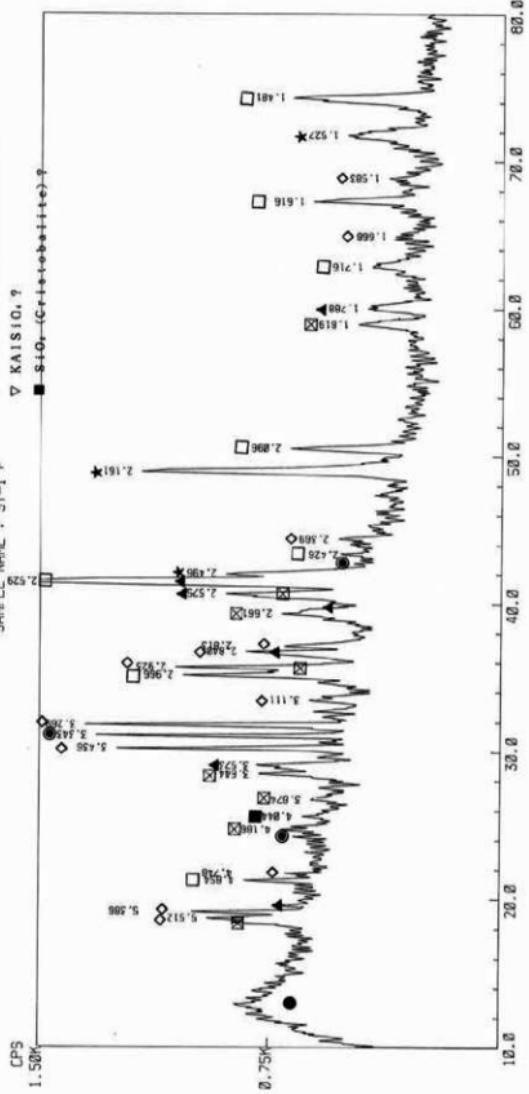
Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> : 計算

C·W : カールフィシャー法

$\left. \begin{array}{l} \text{SiO}_2, \text{Al}_2\text{O}_3, \text{CaO} \\ \text{MgO}, \text{TiO}_2, \text{MnO} \\ \text{P}_2\text{O}_5, \text{K}_2\text{O} \end{array} \right\}$  : ガラススピード蛍光X線分析法

\* : CaO, MnO, MnO<sub>2</sub>は含有率に基づき、ICP

法又はX線法で分析しています。



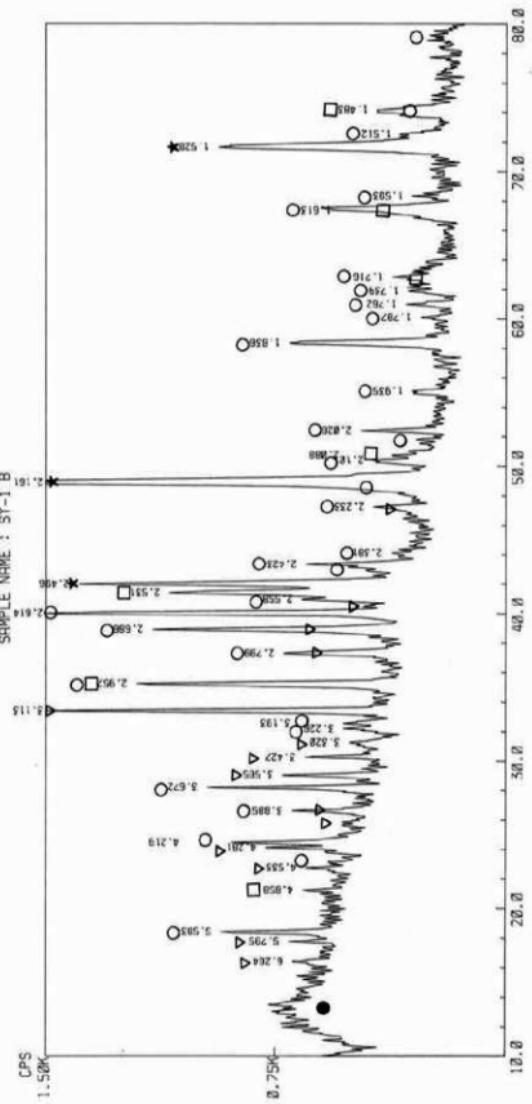
```

MEASUREMENT DATE : 96. 2. 9.
FILE NAME : A191120
TARGET
VOL. AND CUR: 50V 35mA
SLITS SPEED : 0.1 RS/3 SS 1
STEP(SAMPLE) : 02 DEG
PRESENT TIME : 0 SEC
SAMPLE NAME: ST-1 B
SAMPLE MEAN:
OPERATOR

```

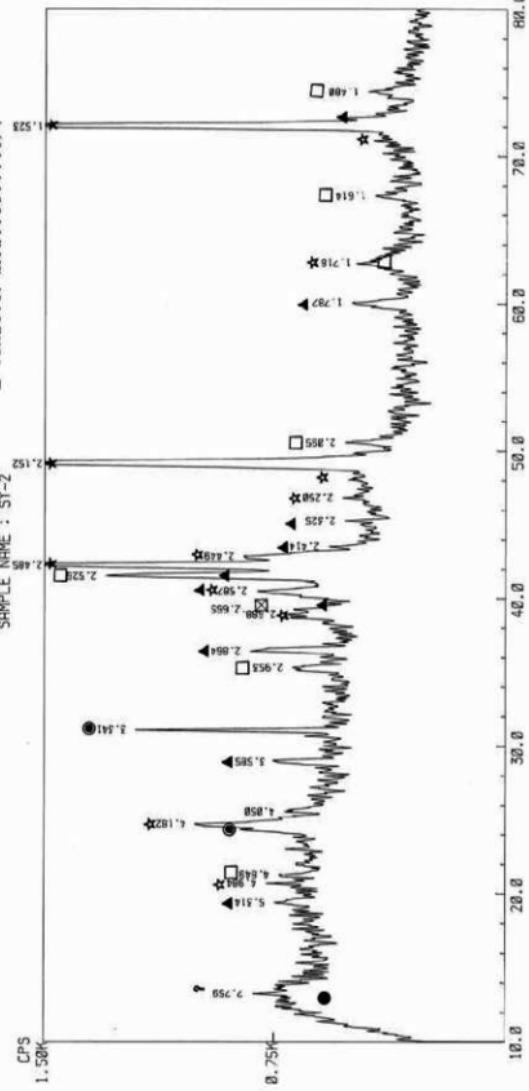
DATA DRAWING DATE : 02-26-1996  
 SMOOTHING NO.: 11  
 THRESH. INTEN.: 442 CPS  
 2nd DERIV.: 176 CPS/DEG/DEG  
 WIDTH: .09 DEG  
 B.G. REDUCTION: EXECUTION  
 OUTPUT FILE:

- ★ FeO (Wustite)
- CaFeSiO<sub>4</sub> (Kirschsteinite)
- ▽ KAlSiO<sub>4</sub>
- Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> (Magnetite)



MEASUREMENT DATE : 96. 2. 9  
 FILE NAME : R921B0  
 TURNT : La  
 VOL AND CUR: 5KV 35mA  
 SLITS : D3.1 RS.3 35.1  
 SCAN SPEED : 2. DEG/MIN.  
 STEP/AMPLE : .02 DEG  
 PRESET TIME : 0 SEC  
 SAMPLE NAME: SY-2  
 SAMPLE MENO :  
 OPERATOR :

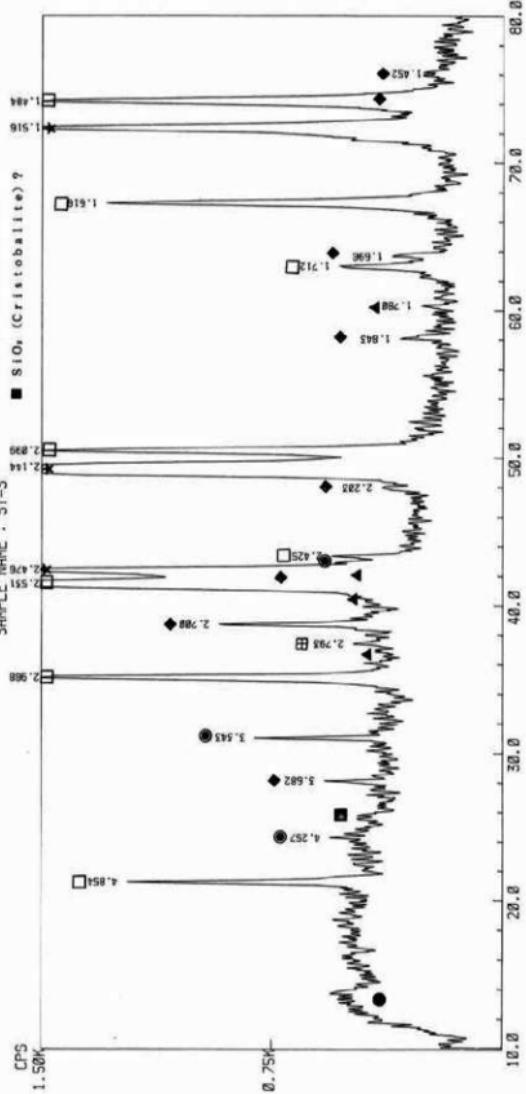
DATA DRAWING DATE : 02-13-1996  
 SMOOTHING NO.: 11  
 THRESH. INTEN.: 194 CPS  
 2x4 DERIV.: 75 CPS/(DEG\*DEG)  
 WIDTH: .09 DEG  
 B.G. REDUCTION: EXECUTION  
 OUTPUT FILE: :



MEASUREMENT DATE : 96. 2. 99  
 FILE NAME : RY93100  
 TARGET : Co  
 VOL and CUR: 5KV 35mA  
 SLITS SPEED: 2 DEG/MIN.  
 SURF. STEP(SHR.): .02 DEG  
 PRESET TIME: 0 SEC  
 SAMPLE NAME: ST-3  
 SAMPLE MENO:  
 OPERATOR :

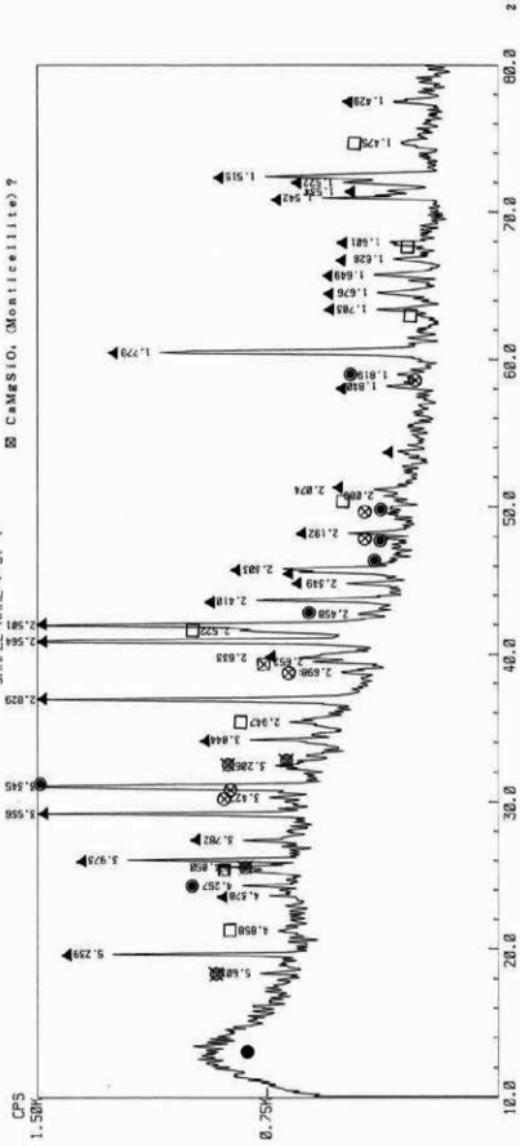
DATA DRAWING DATE : 02-15-1996  
 SMOOTHING NO.: 11  
 THRESH. INTEN.: 517 CPS  
 2nd DERIV.: 176 CPS/(DEGxDEG)  
 VDTH: .09 DEG  
 B.G. REDUCTION: EXECUTION  
 OUTPUT FILE:

□ Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub> (Magnetite)  
 ★ FeO (Wustite)  
 ◆ a-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> (Hematite)  
 ● SiO<sub>2</sub> (Quartz, low)  
 ▲ Fe<sub>3</sub>SiO<sub>4</sub> (Peyelite)  
 ■ FeCO<sub>3</sub> (Siderite)?



MEASUREMENT DATE : 96. 2. 9  
 FILE NAME : RT94100  
 TARGET : Ca  
 VOL AND CUR : 5KV 35mA  
 SLITS : 0.1 MM X 3 MM  
 SCAN SPEED : 2. DEGMIN.  
 STEP/SAMPLE : .02 DEG  
 PRESET TIME : 0 SEC.  
 SAMPLE NAME: SY-4  
 SAMPLE NUMBER :  
 OPERATOR :

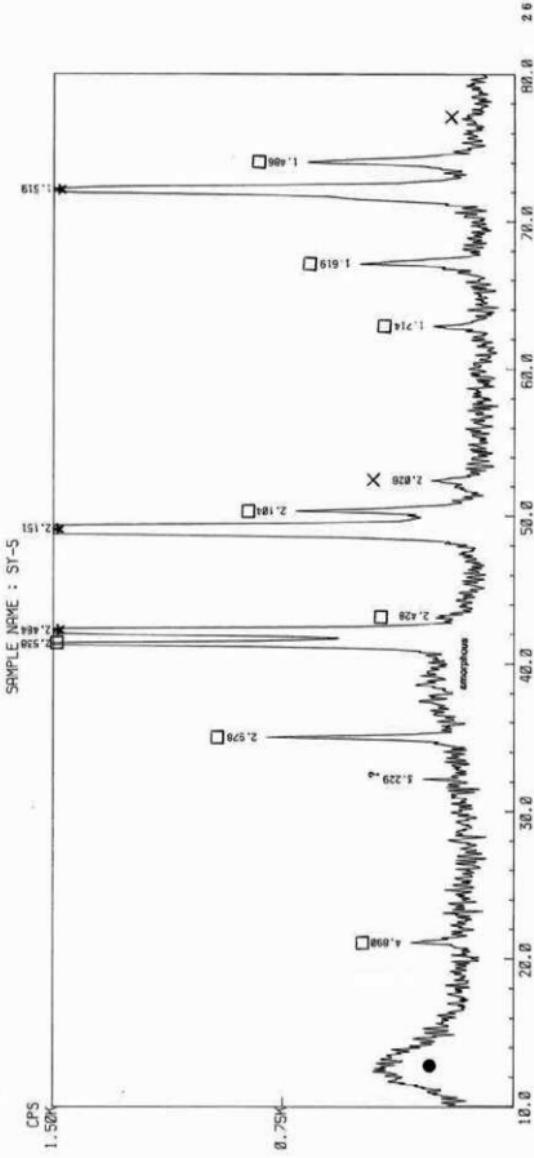
DATA DRAWING DATE : 02-13-1996  
 SMOOTHING NO.: 11,  
 THRESH. INTEN.: 119 CPS  
 2x4. DERTIV.: 126 CPS/(DEG\*DEG)  
 WIDTH: 69 DEG  
 B.G. REDUCTION: EXECUTION  
 OUTPUT FILE :



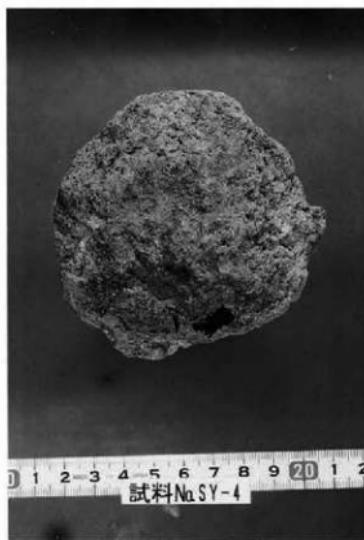
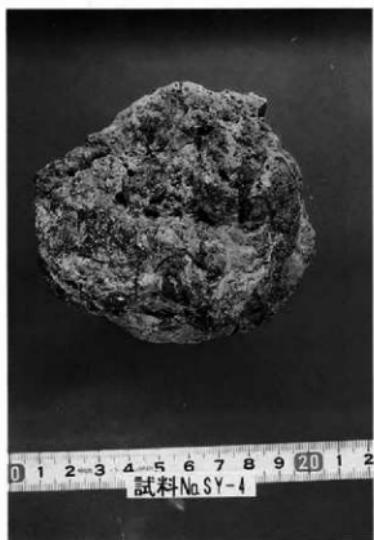
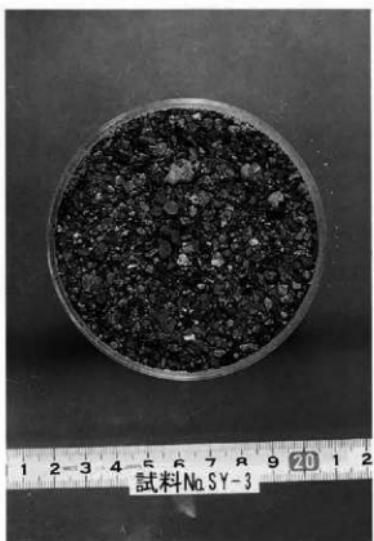
MEASUREMENT: DATE : 96.- 7. 9  
 FILE NAME : RY93120  
 TARGET : Co  
 VOL AND CUR: SRKV 35mA  
 SLITS : 0.5 MM X 1.5 MM  
 SCRN SPEED : 2. DEG/MIN.  
 STEP/SAMPL.: 0.2 DEG  
 PRESET TIME: 0 SEC  
 SAMPLE NAME: ST-5  
 SAMPLE HEND:  
 OPERATOR :

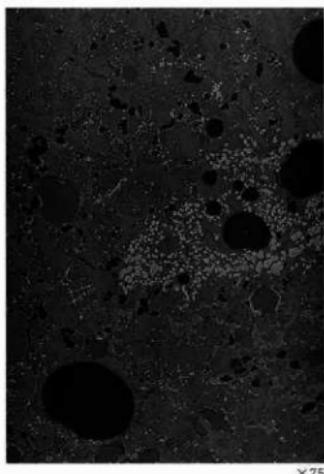
DATA DRAWING DATE : 02-13-1996  
 SMOOTHING NO.: 11  
 THRESH. INTEN: 465 CPS  
 2nd DERIV: 175 CPS/DEG/DEG  
 WIDTH: .09 DEG  
 B.G. REDUCTION: EXECUTION  
 OUTPUT FILE:

★ FeO (Wustite)  
 □ FeO (Magnetite)  
 × α-Fe

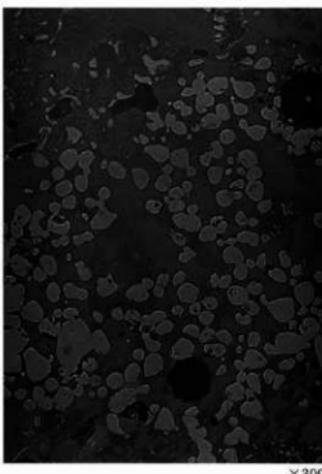






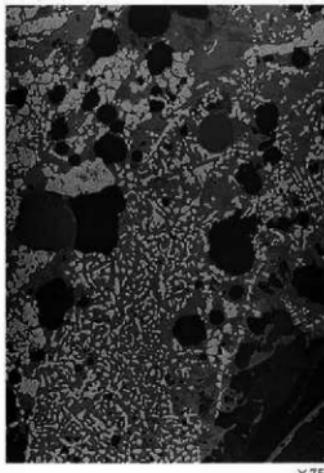


×75

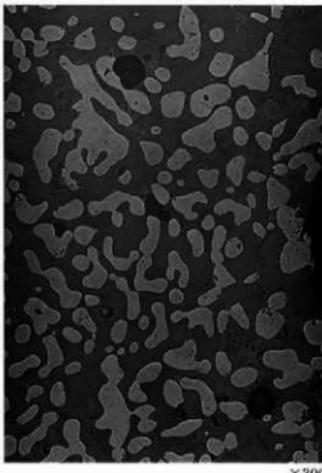


×300

No. SY-1 鉄滓  
(前)



×75



×300

No. SY-1 鉄滓  
(後)

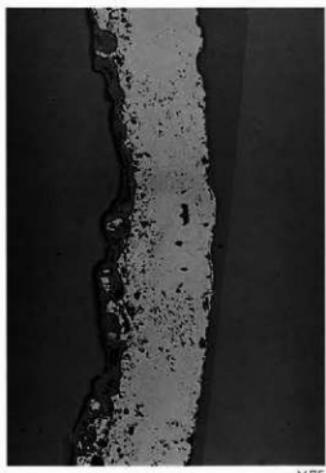


×75

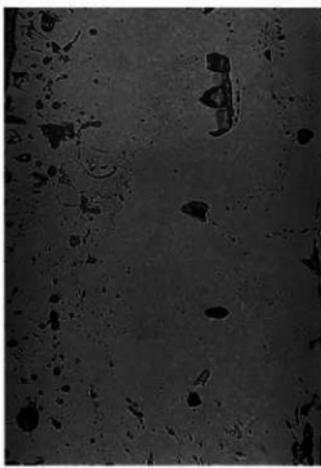


×300

No. SY-2 鉄滓

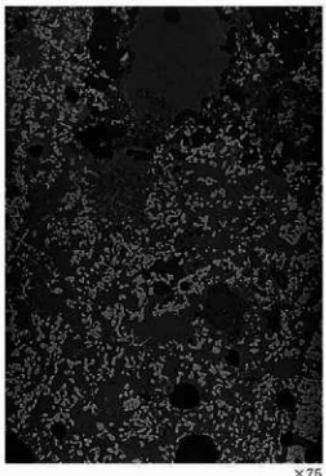


×75

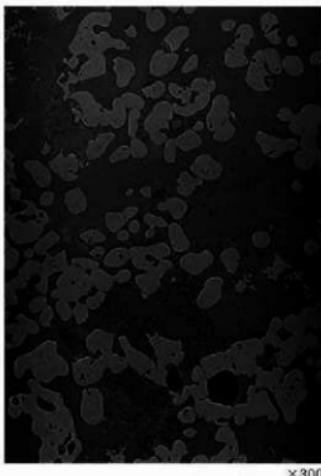


×300

No. SY-3 鋼造剥片  
(肉薄)



×75



×300

No. SY-3 鋸造剥片  
(肉厚)

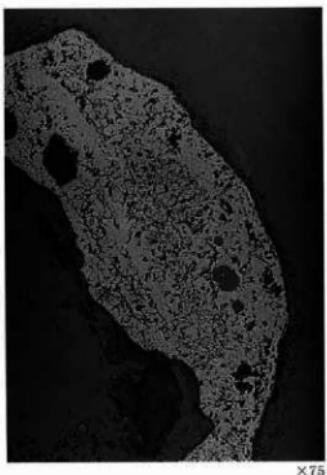


×75



×300

No. SY-4 鋸造剥片



×75



×300

No. SY-5 粒状滓

修理番号：  
1996年 2月26日川鉄テクノリサーチ株式会社  
分析・評価センター  
千葉事務所〒260 千葉市中央区川崎町1番地  
TEL 043-262-2313  
FAX 043-266-7220

## 試験報告書

### 1. 件名

X線回折による、平泉町志羅山遺跡出土鉄滓の定性分析

### 2. 試料記号

①NaSY-1 F (前) ②NaSY-1 B (後) ③NaSY-2 ④NaSY-3 ⑤NaSY-4 ⑥NaSY-5 合計 6本

### 3. 測定装置

理学電気株式会社製ガイガーフレックス (RAD-II A型)

### 4. 測定条件

① 使用X線	C o - K $\alpha$ (波長=1.79021Å)
② K $\beta$ 線吸収フィルター	F c
③ 電圧・管電流	50KV・35mA
④ スキャニング・スピード	2° / m i n.
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D・S・スリット	1°
⑦ R・S・スリット	0.3mm
⑧ S・S・スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

### 5. 測定結果

同定された物質は、チャートに記入致しましたので、チャートを御参照下さい。

### 6. 測定者のコメント

●印のピークは、試料ホルダーからのものと思われます。

志羅山遺跡第47次調査

写 真 図 版



写真図版1 連絡運搬(南から)



写真図版2 通路上空(南から)





47次調査 調査区



10区完掘状況 東→



10区完掘状況 西→

写真図版3 10区(1)



1号溝断面南→



2号溝断面南→



3号溝断面北→



3号溝断面南→



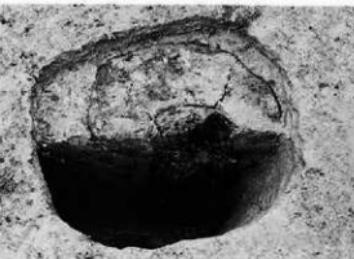
1号土坑



1号土坑断面



3号土坑断面



1号掘立柱建物跡 P5断面

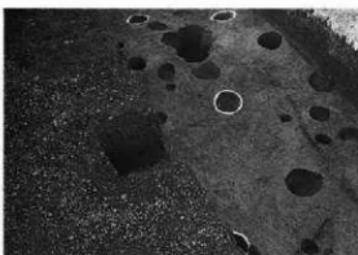
写真図版 4 10区(2)



東半完掘状況四→



東半完掘状況一→



1号塙立柱建物跡



1号塙立柱建物跡P10断面



1号塙立柱建物跡P16断面

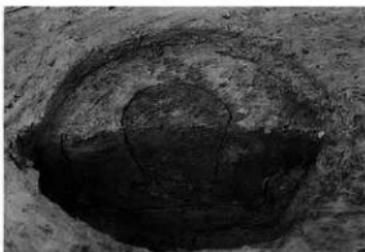


1号塙立柱建物跡P53とP54切り合ひ

写真図版 5 11区(1)



2号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡P22断面



2号掘立柱建物跡P3断面



3号掘立柱建物跡



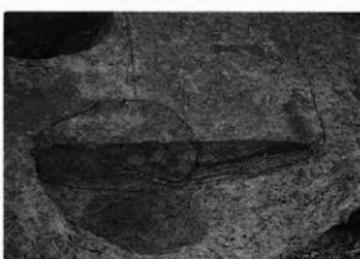
柱穴群



1号溝、P 切り合ひ

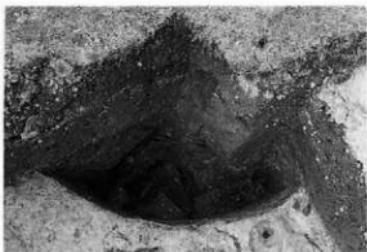


北面溝拡張部分完掘状況



4号溝、P55切り合ひ

写真図版 6 11区(2)



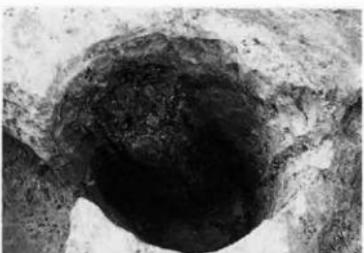
11区 1号井戸跡



11区 1号井戸跡断面



11区 2号柱立柱建物跡P3断面



11区P47残柱



12区東側完掘状况



12区(中央)

写真図版7 11区(3)・12区(1)



12区西侧完掘状況西→



12区中央部東より部分完掘状況



12区西侧調査区南壁土層断面



1号溝南→

写真図版 8 12区(2)



12区 2号溝、3号溝



2号溝、3号溝断面



12区 4号溝、5号溝、1号土坑断面



12区P1断面



13区西半完掘状況東→



13区東半完掘状況西→

写真図版9 12区(3)・13区(1)



1号掘立柱建物跡(東側)



1号掘立柱建物跡(西側)



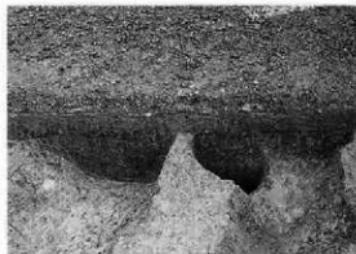
1号掘立柱建物跡柱穴(14区12P)断面



1号掘立柱建物跡柱穴(14区P10)断面



1号溝(左) 2号溝(右)



1号溝、2号溝、P3断面



3号溝(左) 4号溝(右)



3号溝断面

写真図版10 13区(2)



13区4号溝(堀跡)断面A-A'



13区4号溝(堀跡)断面D-D'



13区4号溝(堀跡)断面



13区1号土坑



14区実掘状況北→

写真図版11 13区(3)・14区(1)



完掘状況東→



1号掘立柱建物跡



1号土坑断面



2号掘立柱建物跡

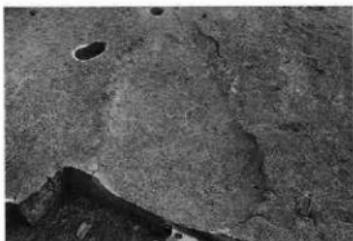


2号掘立柱建物跡  
(15区検出部分)

写真図版12 14区(2)



14区 2号土坑



14区 3号土坑



15区 完掘状况束→



15区 1号掘立柱建物跡



1号掘立柱建物跡P10

写真図版13 14区(3)・15区(1)



1号掘立柱建物跡P1(右)断面



1号掘立柱建物跡P5断面



1号溝断面



2号溝南→



2号溝西→



2号溝交差部断面西→



2号溝F-F'



2号溝、3号溝切り合ひG-G'

写真図版14 15区(2)



完掘状況西→



1号溝



1号溝断面



2号～5号溝

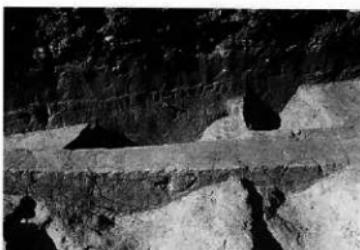


2号溝(左)、3号溝(右)断面

写真図版15 16区(1)



3号溝遺物出土状況



2号溝、3号溝と2号土坑切り合い



4号溝(左)5号溝(右)断面



6号溝、7号溝、8号溝、9号溝、1号土坑切り合い



6号溝、8号溝、9号溝



6号溝かわらけ出土状況

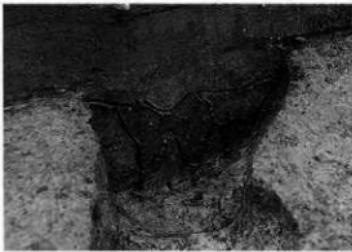


6号溝、8号溝、9号溝断面

写真図版16 16区(2)



16区7号溝



16区7号溝断面



16区2号土坑



16区2号土坑断面



16区3号土坑



3号土坑断面



16区1号土坑



17区調査区北壁断面

写真図版17 16区(3)・17区(1)



17区完掘状况西→



1号溝



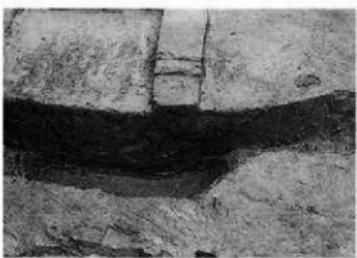
1号溝断面



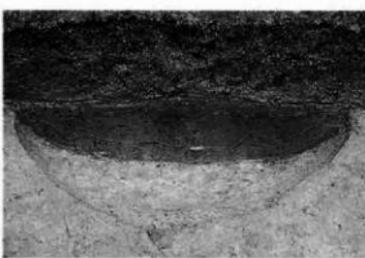
2号溝、2号土坑、P8、P10、4号溝



1号土坑



2号土坑断面



1号土坑断面

写真図版18 17区(2)



18区東半完掘状況東→



18区西半完掘状況東→



18区1号溝



18区1号溝19区10号溝切り合い



19区完掘状況西→

写真図版19 18区・19区(1)



調查区北壁土層断面



8号溝



8号溝断面F-F'



8号溝断面G-G'



7号溝遺物出土状況

写真図版20 19区(2)



7号溝断面B-B'



7号溝断面(20区検出部分)C-C'



7号溝断面(20区検出部分)B-B'



3号溝(削跡)板痕跡(20区検出部分)



1号溝(左) 3号溝(右)



3号溝(削跡)板痕跡

写真図版21 19区(3)



1号溝( sondage) 断面G-G'



3号溝( sondage) 断面(A-A')



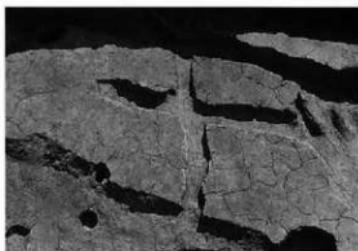
3号溝( sondage) 断面



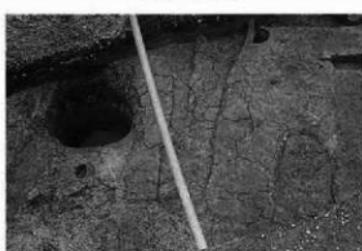
3号溝( sondage) 断面C-C'



3号溝( sondage) 断面



2号溝



6号溝(左) 5号溝(右)

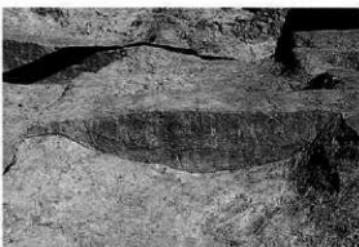


調査風景

写真図版22 19区(4)



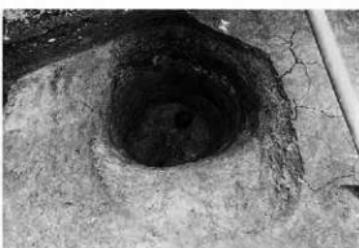
9号溝(右)、10号溝(左)



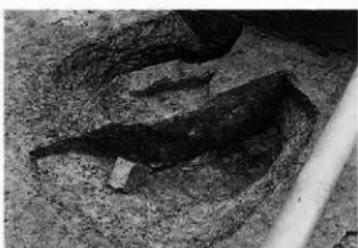
9号溝断面



10号溝断面



1号便所跡



1号便所跡出土状況



1号便所跡断面



2号便所跡



2号便所跡断面

写真図版23 19区(5)



20区東半完掘状況西→



20区西半完掘状況東→



20区1号坑P16断面



調査風景(18区付近)



21区東半完掘東→



21区西半完掘状況東→

写真図版24 20区、21区



23区完掘状況東→



24区完掘状況東→



25区完掘状況西→



26区完掘状況西→

写真図版25 23区、24区、25区、26区



27区完掘状況東→



1号溝断面C-C'



1号溝断面D-D'



27区鉄津出土状況



調査風景(24区付近)



22区完掘状況



22区土層断面N-S→

写真図版26 22区・27区



西半完掘状況西→



東半完掘状況東→



1号溝西→



1号溝断面



2号溝南→

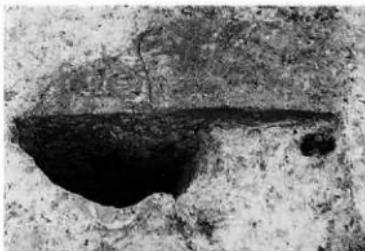


2号溝断面

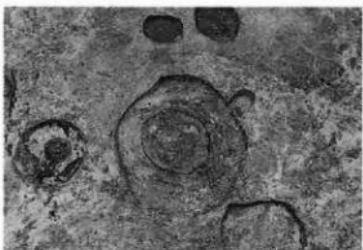
写真図版27 46区(1)



P26断面



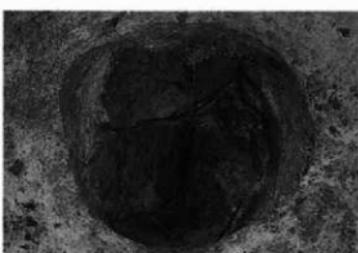
P17、3号溝断面



P24棟出状況



P4断面



P24根石出土状況



P15断面

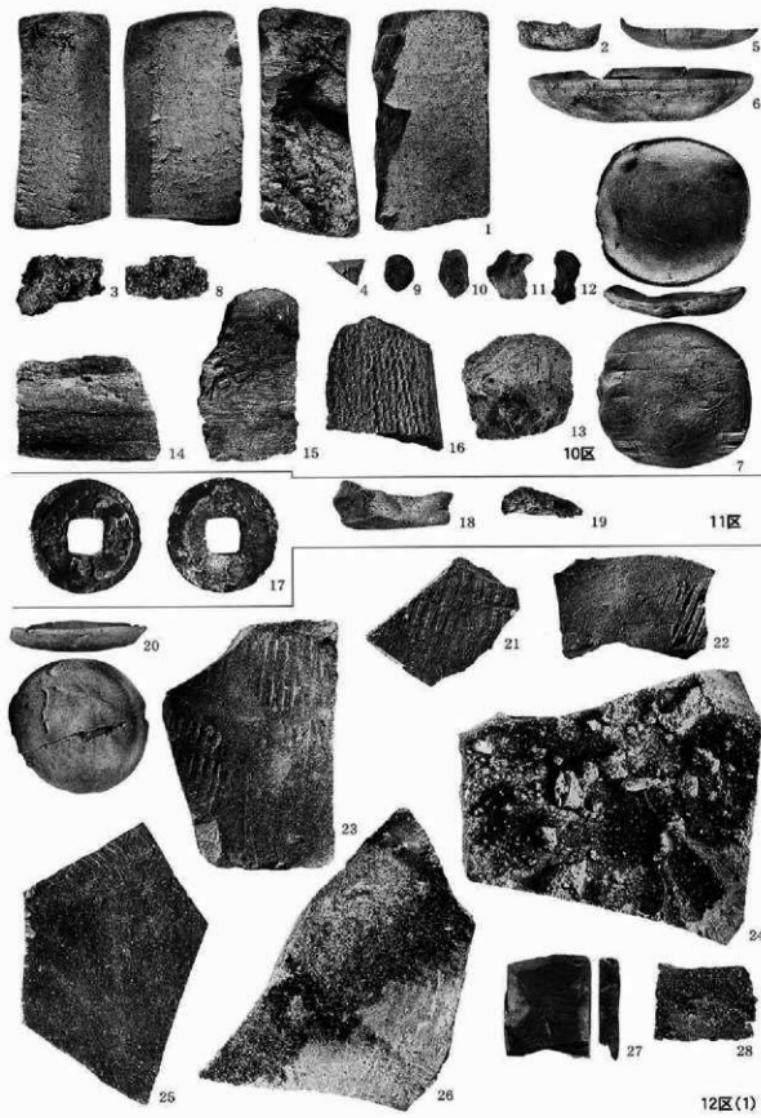


調査区南壁断面

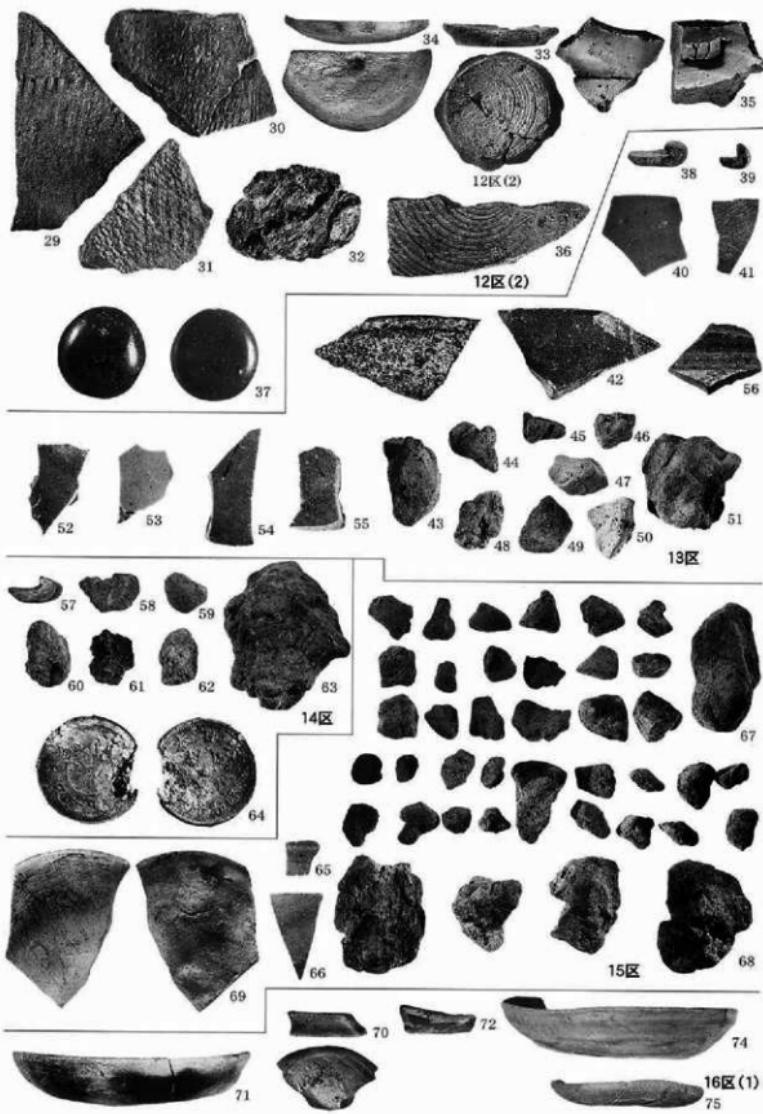


調査風景

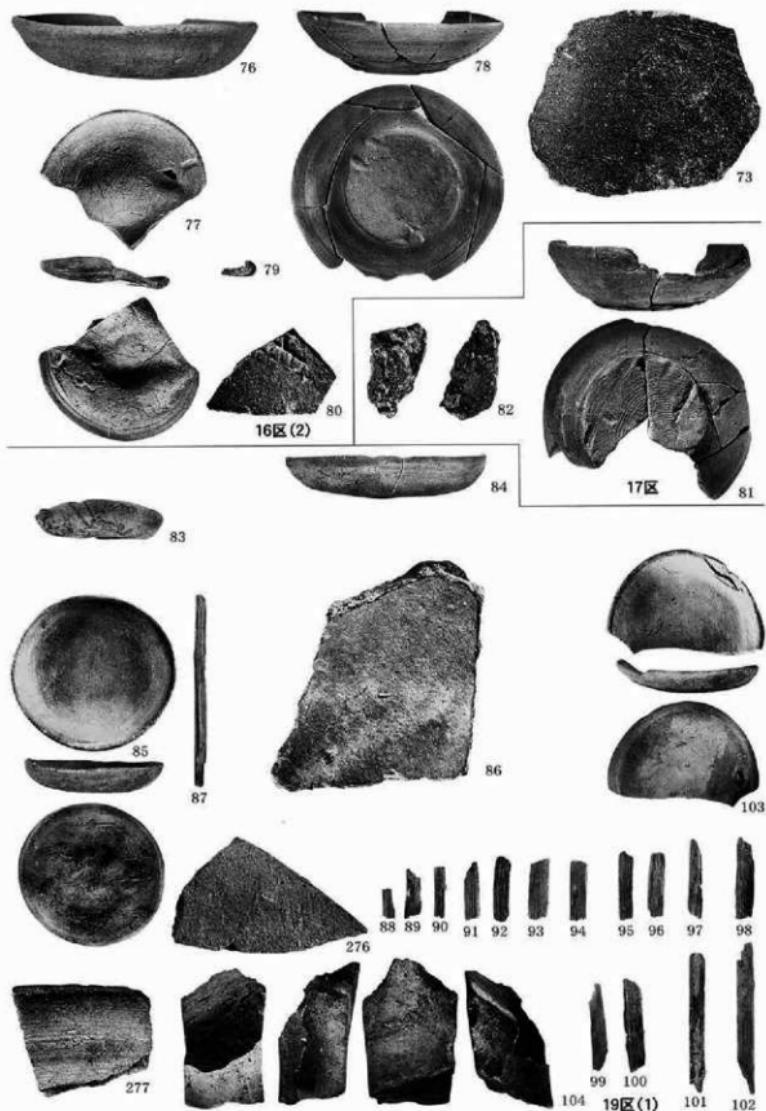
写真図版28 46区(2)



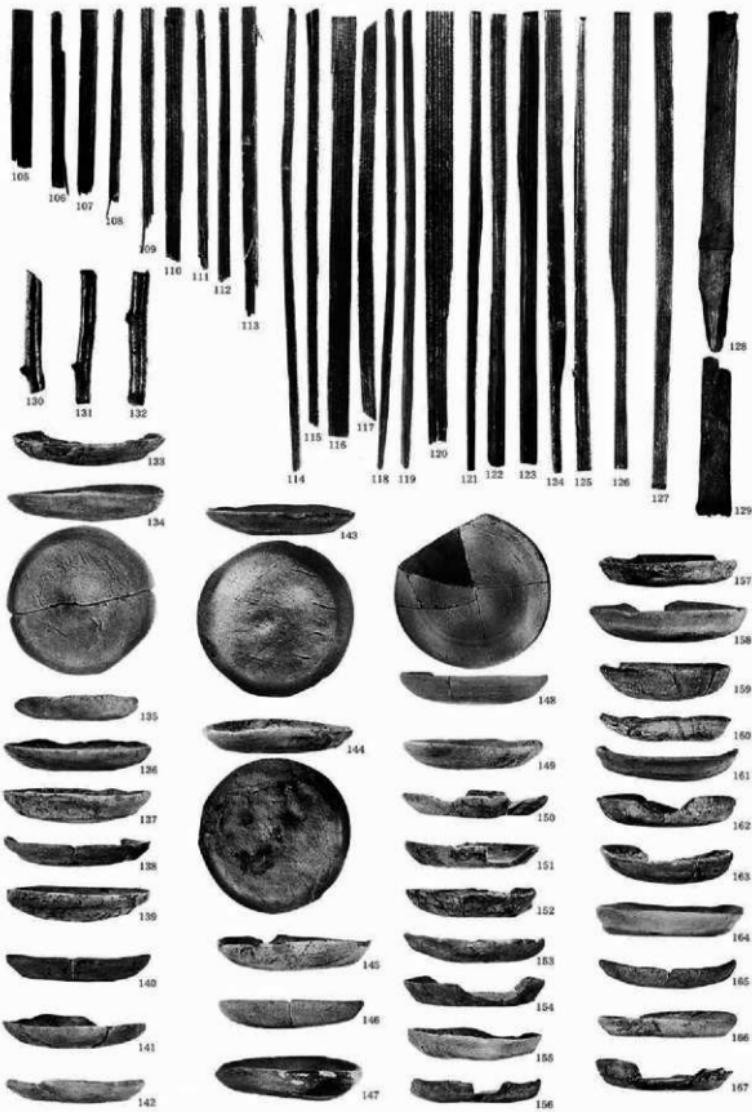
写真図版29 出土遺物10区、11区、12区(1)



写真図版30 出土遺物12区(2)、14区、15区、16区(1)



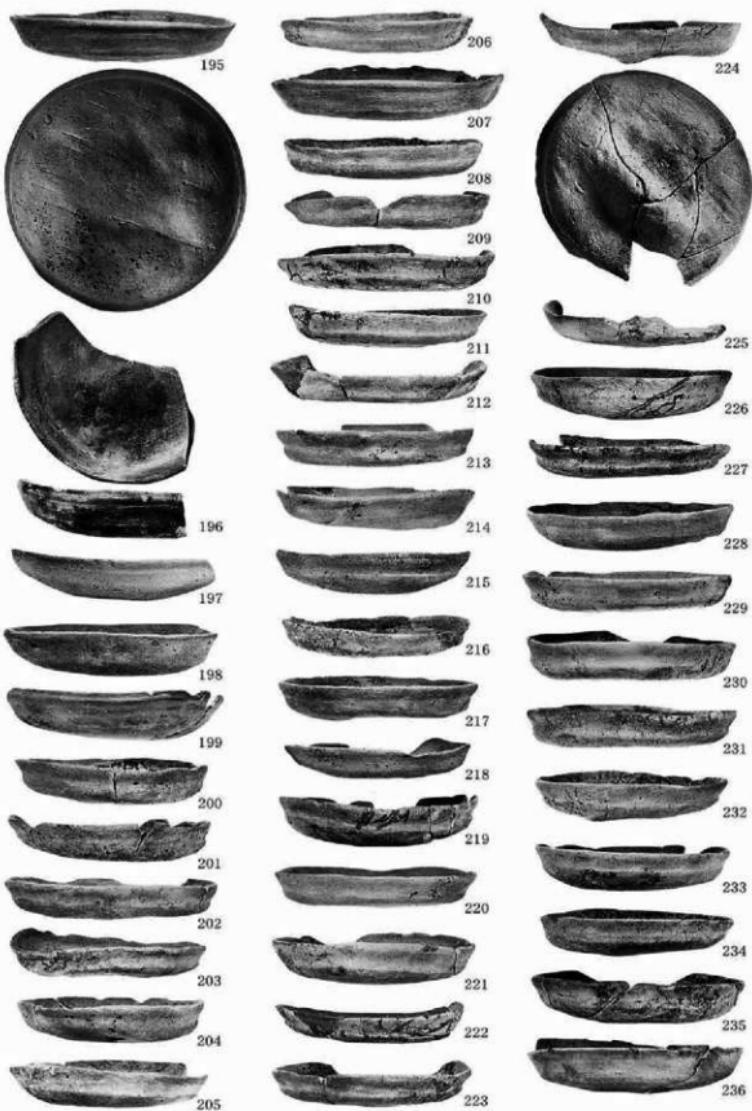
写真図版31 出土遺物16区(2)、17区、19区(1)



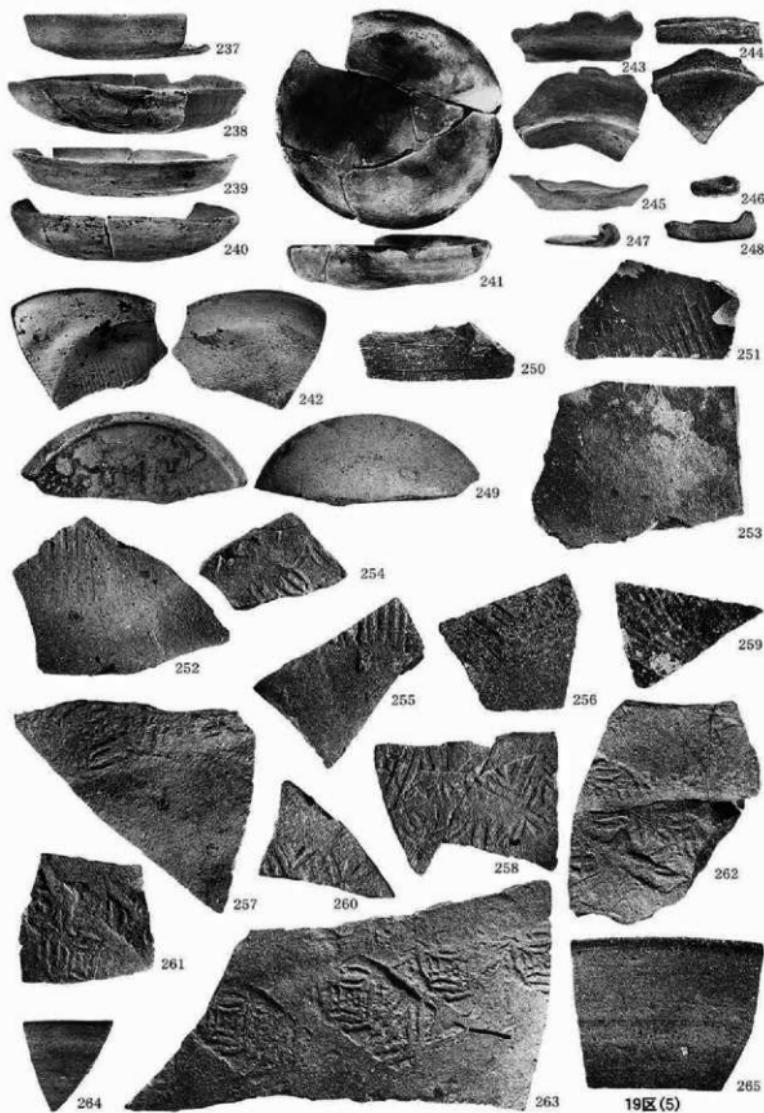
写真図版32 出土遺物19区(2)



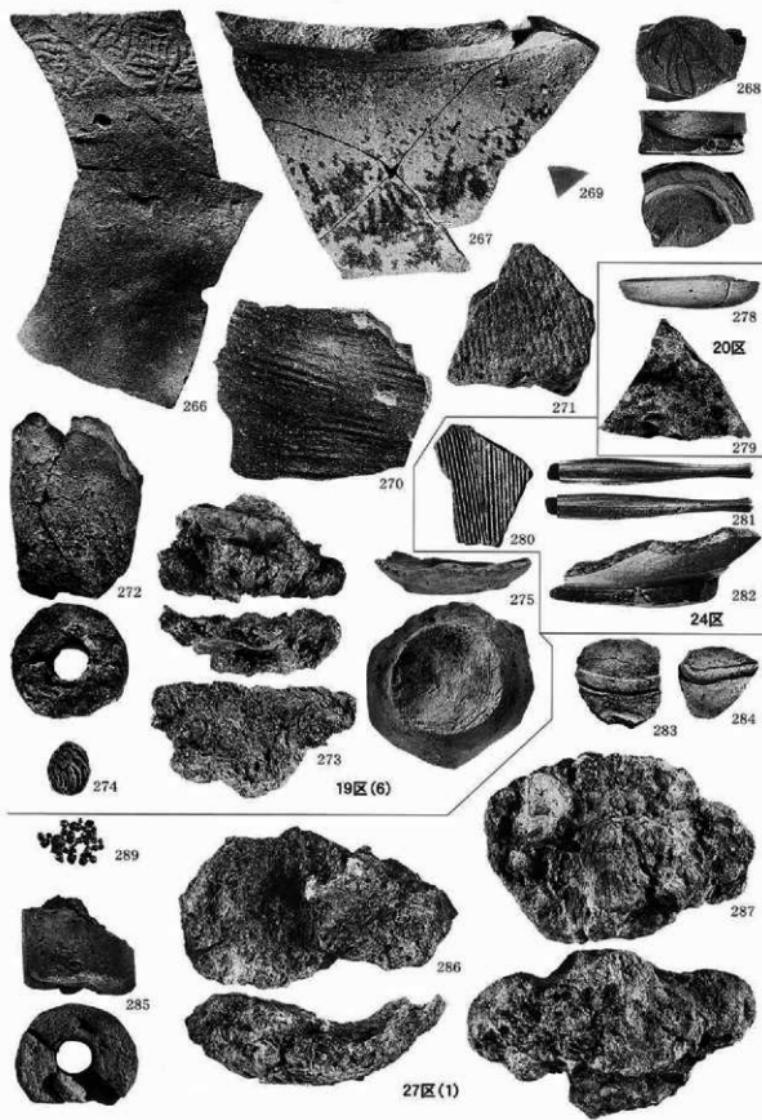
写真図版33 出土遺物19区(3)



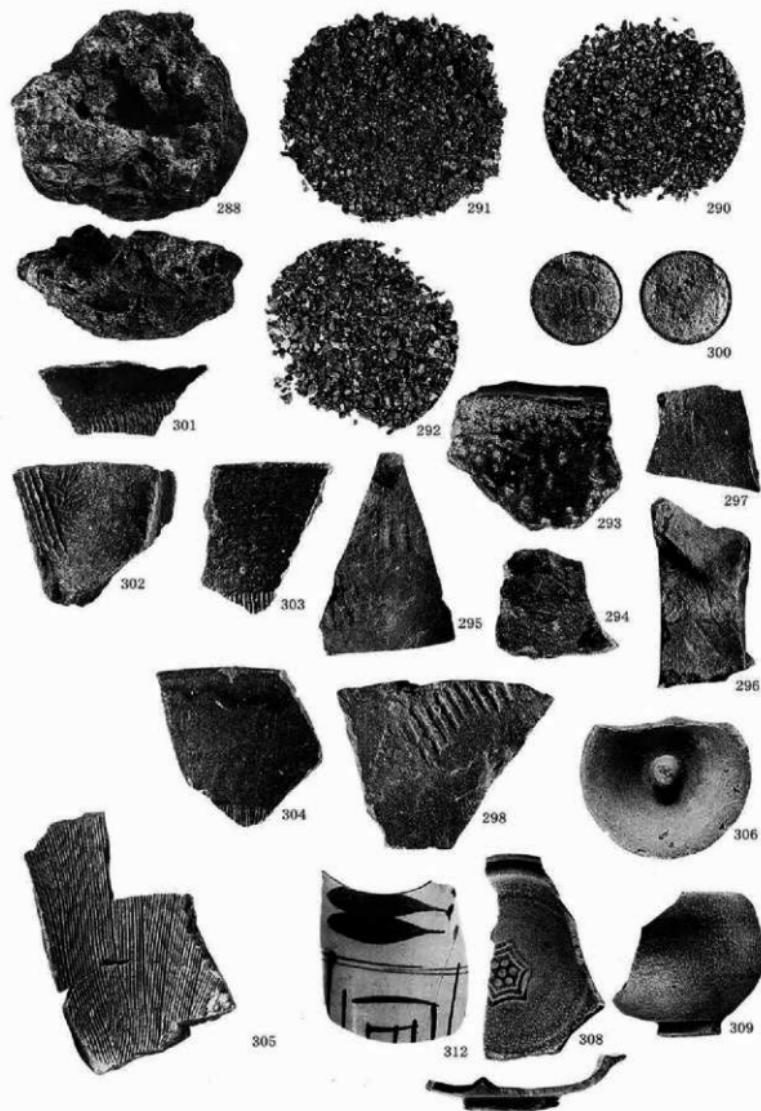
写真図版34 出土遺物19区(4)



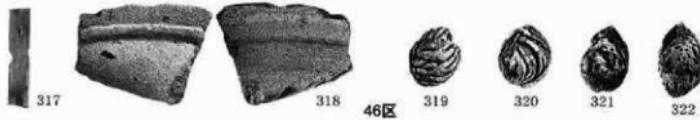
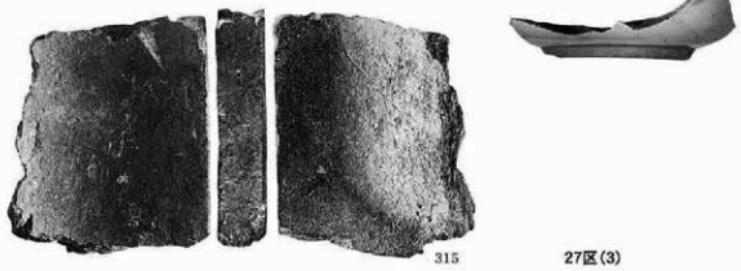
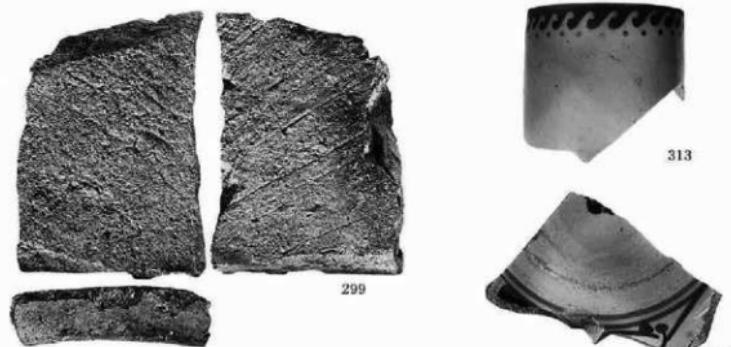
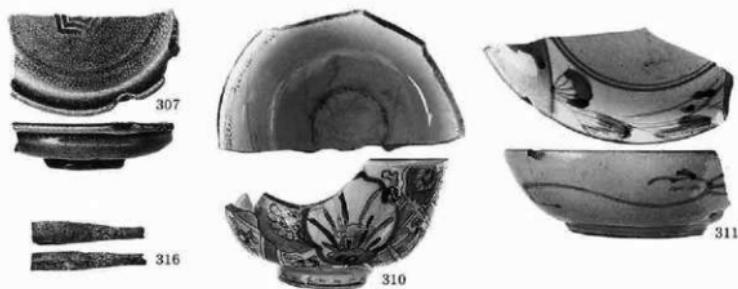
写真図版35 出土遺物19区(5)



写真図版36 出土遺物19区(6)、20区、24区、27区(1)

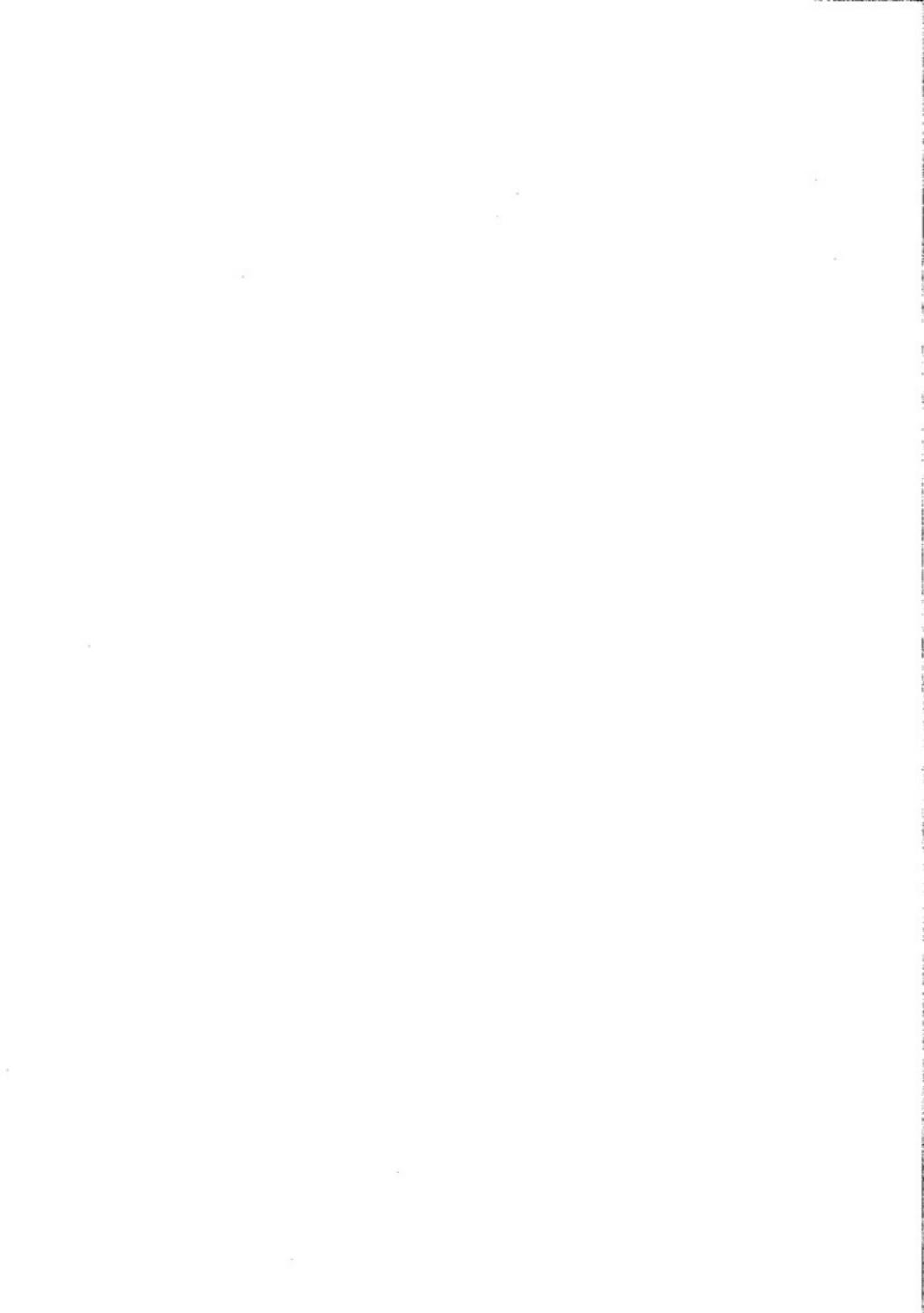


写真図版37 出土遺物27区(2)



写真図版38 出土遺物27区(3)、46区

# 志羅山遺跡第56次調查



## V. 第56次調査の報告

### 1. 調査・整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 調査区の設定と遺構の呼称

今回の調査は、主要地方道平泉・巣美渓線沿いを中心に国道4号沿いの一部分、東西方向で約400m、南北方向で約100mの範囲にわたって行われた。調査区の設定は、基準点測量を委託し、平面直角座標系を利用して行った。調査区の全長が長いことから、基準点及び補助点を合わせて約30カ所に設定し、測量時の基準とした。また、一軒の宅地の間口ごとに調査を進める必要があったことから、一軒毎に用地番号を付けて調査を行った。グリッドは設定せず、各用地毎のトレンチ調査的な方法を用いた。よって、遺構名の命名及び遺物の取り上げは用地番号を用いて行った。(例としては、28区井戸跡1号、29区溝跡1号、28区遺物包含層出土等) なお、X・Y座標値は各調査区図に記載している。

##### (2) 粗掘り・遺構検出

市街地内が調査区なことから、現地表面から地山面までは、コンクリート及び近・現代の盛土が50~100cm程堆積する。遺構検出面は1面のみであるため、上記のコンクリート及び近・現代の盛土の除去は重機で行った。調査区内では雑土の処理ができなかったため、調査区外に運びだしている。また調査時間外は、調査中の場所にはバリケードの設置と鉄板を敷くことを徹底し、安全対策に努めた。

##### (3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構の精査は、大形の土坑等を除き基本的に2分法を採用して掘り下げ、写真撮影、断面実測の後に完掘し、写真撮影、平面実測を行った。井戸などのように現地表面から深い遺構は、調査時の安全を加味し、150cm程の深さまで土層の断面実測を行い、それ以上深い場合は遺構の平面形を破壊して掘り下げ、断面図を作成した。なお、例外として51区井戸跡のように特出して深いものは、レベルから空断面を作成して合算する等の方法を採用した。

#### 2 室内整理

野外調査で得られた実測図・写真・遺物等の各資料は、室内整理の段階で次のように処理、整理した。

##### (1) 遺構図面

遺構図面は、野外調査時は平面、断面図とともに縮尺1/20を原則としたが、必要に応じて1/5、1/10で作成を行った。時間的な余裕がなく、レベルの有無・方位・グリッドの位置等の最小限度の点検のみを行った。よって平面図と断面図が合わない等の問題については、写真やフィールドカード等を参照して修正した第2原図を作成し、トレースを行った。

### (2) 遺物

遺物は洗浄と出土地点毎の仕分けを現場で行った。室内整理の段階で注記・接合・復元を行った後、登録・分類の作業を行った。

報告書に掲載した遺物は、登録した中からさらに選択したもので、実測・拓影・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。時間及び紙面の関係等から、遺物は以下のように選択したものを報告書に掲載した。

＜土器類＞ 土器類は、完形品及び接合復元により、1/2程度以上の残存率のものを優先した。ただし、遺構内出土のものは、上記の基準外のものでもできるだけの掲載に努めた。

＜陶磁器類＞ 陶磁器類は、以下のような基準で選択した。中国産の輸入陶磁器は小片でも全て掲載した。国産の陶器類は12世紀及び中世と思われるものはできるだけの掲載を行った。近世・現代の陶磁器類は出土数の半分程を掲載した。

＜漆器＞ 全般に残存率が悪いため、写真は全て掲載したが、付図には実測可能なもののみとした。

＜木製品＞ 製品あるいは加工が確認されるものは全て掲載した。

＜その他＞ 古鏡や墓石は全て掲載したが、瓦の一部分や種子類等は掲載していない。

### (3) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格毎にモノクロはネガアルバムにリバーサルフィルムはスライドアルバムにボラロイドはインスタントフォトアルバムに整理した。

### (4) 報告書について

＜遺構の記載＞ 遺構は、各調査区毎に記載している。

＜遺物の記載＞ 遺物は、遺構内出土と遺構外遺物を一括して記載する。

＜遺構図版＞ 遺構図版の縮尺については、以下のとおりである。平面図については、各調査区を1/100、掘立柱建物跡・井戸・廻跡等は1/50を基本として掲載した。断面図は、調査区の土層は1/100、各遺構の断面図は1/50で掲載した。なお、図中の土器はP、木材類はWと略称している。

＜遺物図版＞ 遺物図版の縮尺については、以下のとおりである。土器類を1/3、陶磁器類は1/2または1/3、木製品は大きさにより1/3、1/4、1/6、その他（漆器・古鏡等）のものは大きさにより1/1～1/3で掲載した。

＜写真図版＞

遺構写真は、全て任意である。遺物写真は原則として、土器類を1/2、陶磁器類は1/2または1/3、木製品は大きさにより1/3、1/4、1/6、その他（漆器・古鏡等）のものは大きさにより1/1～1/3で掲載した。

## 2. 基本層序

今回の調査は、東西方向で約400m、南北方向で約100mと広範囲に亘って行われた。遺跡内で見られた土層は、現代における土地の利用法や旧地形の違いから地点によって若干様相が異なるものの、人皆は現地表面から30～100cmの盛土を除去した段階で地山面（Ⅲ層と呼称した粘土層で、遺構検出面でもある）となる。また局所的ではあるが、5～20cm程の自然堆積層（遺物包含層の性格の土層）が確認された。

I 層 砂利層（盛土）5～15cmコンクリート面下部

- I a層 粘土層（盛土）10~30cm 砂・現代遺物（瓶、ビニールなどのゴミ）を含む
- I b層 炭殻土層（盛土）20cm程 主に30~43区付近に分布、汽車燃料の再利用されたもの（地元の方のお話しでは昭和30~40年頃）
- I c層 黄灰色泥質粘土質上（水田耕作層）10~25cm ほぼ調査区全域に見られる。
- I d層 赤褐色粘土質土（水田耕作層下部）5~10cm 水田耕作層の下部に堆積する。酸化鉄の集積が縦線状に多く見られる
- II 層 灰黄褐色粘土質土（遺物包含層）5~10cm 28~30区で確認された。土器片・炭化物粒を含む。12世紀～中世の遺物包含層と思われる。
- II a層 灰色～灰褐色粘土質土（自然堆積層）20cm前後 60~64区で確認された。遺物はほとんど出土しないが、II層と同質土層と考えられる。
- III 層 黄褐色粘土層 地山。検出時は青灰色を呈するが時間を置くと黄色となる。場所によっては砂土を少量含む。

### 3. 検出された遺構と遺物

志羅山遺跡第56次調査は、東西方向で約400m、南北方向で約100mの範囲を県道毛越寺線及び国道4号沿いに3~4mの幅で行った。調査の性格上、地割りを使った区名毎に遺構の記載を行う。

遺構の記載について、各区の全体図（原則1/100）の他に、報告を強調したい遺構のみ拡大図（原則1/50）で掲載した。また本調査区と平泉町文化財センターが過去に調査を行った部分が隣接する場合は、平泉町文化財センター検出遺構図と合成もしくは対応する付図を作成して掲載した。例としては、掘立柱建物跡などが該当する。各遺構の時期について、ほとんどの遺構検出面がⅢ層（地山）もしくはⅠd層であるため、出土遺物がない場合は時期の推定が困難である。よって遺構の時期については、長年平泉町で発掘調査を実施している同町文化財センターの調査員の方々にご指導を賜った覆土の色調や土質から時期を推定した。例としては、灰・褐灰・明黄褐・浅黄褐色などの粘土質土は12世紀の可能性が高く、黒・黒褐・暗褐色の粘土質シルト主体の場合は中世や近世の可能性が高いなど（ここで使用する中世の時代定義は、藤原氏滅亡以降を示した）。

出土遺物の記載について、かわらけの出土量の単位は4号のビニール袋（0.5kg前後）を基準としている。それより少い場合は、少量・微量と言う表現方法で置き換えている。陶磁器類、及びその他の遺物の出土量は点数を記載している。

#### 2区（第1図、写真図版3）

位置 国道4号と県道毛越寺線の合流点付近に位置する。

検出遺構 溝跡2条、土坑2基を検出した。

##### 2区溝跡1号

＜検出状況＞ Ⅱ層～Ⅲ層で検出した。遺構の長軸方向は、N-110°-Eである。東側はプランが確認されなかった。北側で2区溝跡2号と重複関係にあり、本遺構が新しい。

＜規模＞ 規模は開口部径65~145cm、底部径50~100cm、深さは14cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は灰黄褐色シルトを主体とし、酸化鉄の集積が多く見られる。上位の褐色シルトは遺物包含層の再堆積層（流れ込み）と思われる。全般的に自然堆積の様相である。

＜壁・床面＞ 壁は直立気味に立ちあがり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞（第47図1~4、写真図版37） かわらけ約4袋分、陶器片1点が出土している。

土器 出土した中で、実測可能なものは大形のロクロ成形によるかわらけ2点、大形の手づくねかわらけ1点である。

陶器 濡美産1点が出土している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

##### 2区溝跡2号

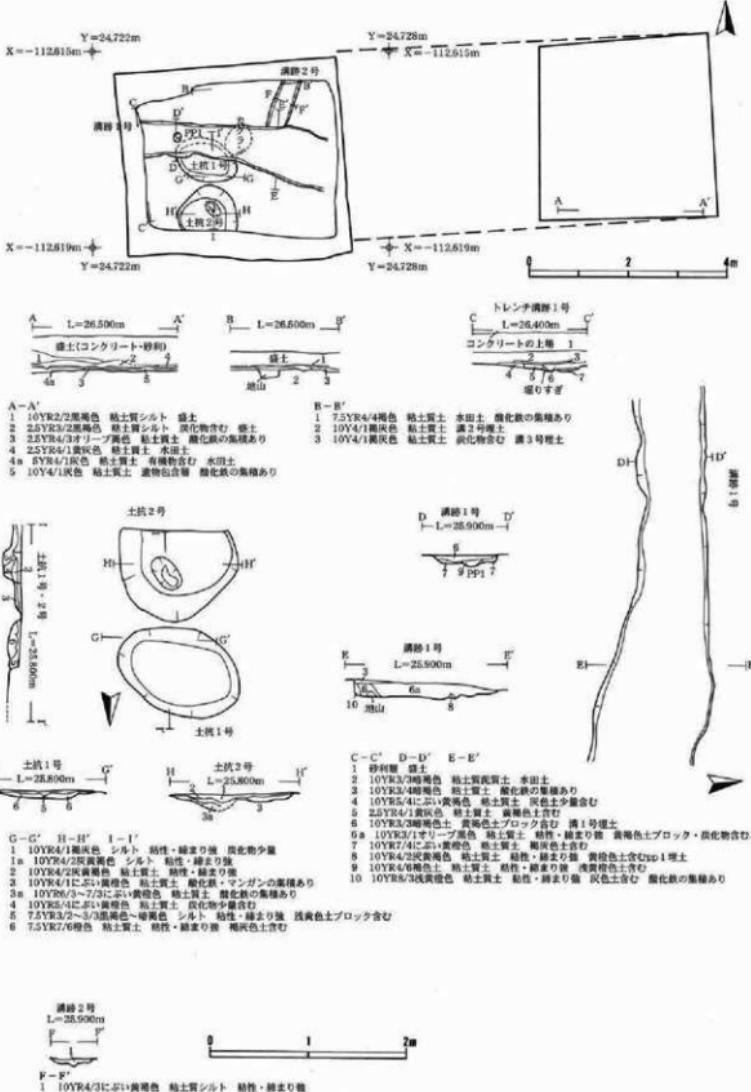
＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向は、N-20°-Eである。南側で2区溝跡1号と重複し、本遺構が古い。

＜規模＞ 規模は開口部径42cm、底部径32cm、深さ5cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐色粘土質土による単層である。自然堆積層と思われる。

＜壁・底面＞ 挖り込みは明瞭ではない。

- <出上遺物> 覆土上位からかわらけの小片が微量出土している。
- <時期> 不明である。2区溝跡1号より古期であることは把握できる。
- 2区土坑1号
- <検出状況> Ⅲ層上面で検出した。
- <平面形・規模> 平面形は楕円形で、規模は開口部径129×87cm、底部径105×62cm、深さ7cm程である。
- <覆土・堆積状況> 灰黄色シルトを主体とし、酸化鉄の集積が多く見られる。自然堆積の様相である。
- <壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底気味である。
- <付属施設> 底面において、中央より若干北側の部分で小穴状の落ち込みが検出された。
- <出土遺物> 出土遺物はない。
- <時期> 不明である。
- 2区土坑2号
- <検出状況> Ⅲ層上面で検出した。北側で2区溝跡1号と重複関係にあるが新旧関係は把握できなかった。
- <平面形・規模> 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径119cm、底部径90cm、深さ17cm程である。
- <覆土・堆積状況> 覆土はにぶい黄橙色粘土質土を主体とする。上位に堆積する1層は遺物包含層の流れ込みによるものと思われる。
- <壁・底面> 掘り込みは明瞭ではない。底面はほぼ平坦である。
- <出土遺物> 出土遺物はない。
- <時期> 2区土坑1号と同時期、あるいは付随する土坑と推測される。
- 遺構外の遺物 遺物包含層中より、かわらけ11袋分、磁器数点が出土した。また、遺物包含層の上位から鉄滓が出土している。
- 2区のまとめ 本区には12世紀の遺物包含層が僅かながら残存し、遺構は包含層下位から検出されている。検出された個々の遺構の年代は、明確ではないが中世よりは古い時期（12世紀？）に構築されたものと推定される。
- 3区（第2・3図、写真図版4）
- 位置 国道4号と県道毛越寺線の合流点付近、「スーパー丸茂」前に位置する。
- 検出遺構 土坑6基、柱穴14基を検出した。
- 3区上坑1号
- <検出状況> Ⅲ層上面で検出した。
- <平面形・規模> 平面形は楕円形で、規模は開口部径173×76cm、底部径117×53cm、深さ10cm程である。
- <覆土・堆積状況> 覆土は上位の黄灰色粘土質土と浅黄色粘土質土に大別される。酸化鉄の集積が全般に多く見られる。
- <壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。
- <出土遺物> (第47図7・8、写真図版37) 覆土上位から大形の手づくねかわらけ1点、底面直上から大形の手づくねかわらけ1点、柱状高台1点が出土している。
- <時期> 出土している遺物は12世紀のものである。
- 3区土坑2号
- <検出状況> Ⅲ層上面で検出した。完形のかわらけ14点が一括出土した。かわらけ埋納遺構的な性格の



第1回 2区

土坑と考えられる。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径31cm、底部径18cm、深さ20cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐色粘土質シルトによる単層である。人為堆積によるものである。

＜壁・底面＞ 壁はほぼ直立気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞（第47図9～22、写真図版37・38） 小形のロクロ成形によるかわらけが14点出土している。全て完形品である。精査当初は重なって埋められていたと判断されたことから、第3図の通り5段階に分けて取り上げを行った。精査の結果、かわらけの埋め方に規則性は発見しなかった。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

### 3区土坑3号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。3区PP12と重複し、本造構が古い。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径170×120cm、底部径140×95cm、深さ14cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は黒色泥質粘土質上による単層である。人為堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾し、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。

### 3区土坑4号

＜検出状況＞ Ⅲ層で検出したが、北壁土層断面の観察から第2図D-D'ライン5層中から掘り込まれている。尚、5層は地山の再堆積層あるいは漸移層と推定される層である。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径196cm、底部径180cm、深さ7cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は黒色泥質粘土質シルトを主体とする。人為堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾し、底面は平坦を基調にやや凹凸がある。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 構築面から推察すると現代盛土の堆積された時期よりは古いことがわかるが、明確な時期は不明である。

### 3区土坑5号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径129×70cm、底部径56×33cm、深さ37cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は2層に大別される。褐灰色粘土質土を主体とし、壁際ににぶい黄橙粘土質砂質土が堆積する。人為・自然堆積の判別はできなかった。

＜壁・底面＞ 壁は外傾し立ち上がり、断面形は半円状を呈する。底面は丸底気味である。

＜出土遺物＞ かわらけ小片2袋分が出土している。

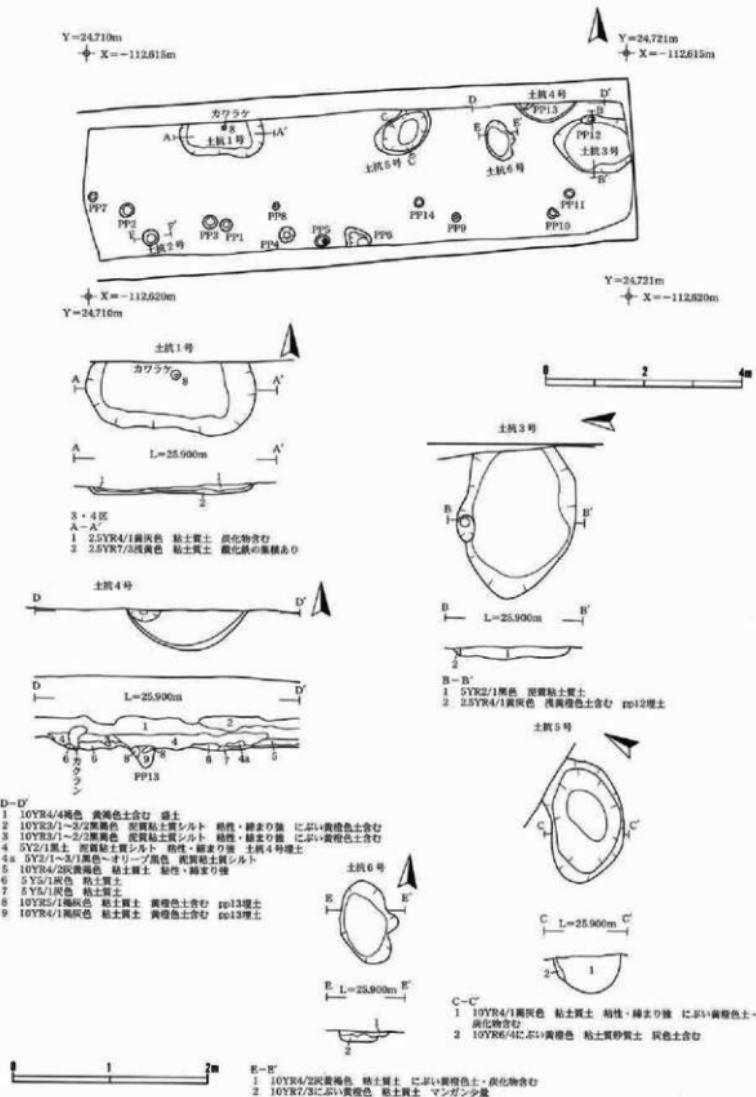
＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

### 3区土坑6号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径85×52cm、底部径66×44cm、深さ9cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は上位に灰黄褐色粘土質土、下位ににぶい黄橙色粘土質土が堆積する。自然堆積の様相である。



### 第2図 3区(1)

＜壁・底面＞ 壁は西側は直立気味に東側は段を持って立ち上がる。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。覆土の状況からは古い様相が窺える。

遺構外の遺物 近世以前の遺物は出土していない。

3区のまとめ 土坑1・2・5号からかわらけが出土しているが、何れも用途（性格）不明な土坑である。特に土坑2号からはかわらけの完形品以外出土遺物がないことから、意図的にかわらけの完形品を埋納している。儀式など特殊な用途に使用されたものと思われる。

#### 4区（第3図、写真図版5）

位置 国道4号と県道毛越寺線の合流点付近から30m程西に位置する。防火水槽が地下にあることから2m程のトレンチ調査にとどめた。遺構の検出はなく、また遺物も出土していない。

#### 5区（第4・5図、写真図版5・6）

位置 県道毛越寺線沿いで、「餃油店」前に位置する。

検出遺構 獨立柱建物跡1棟、溝1条、土坑1基、柱穴64基を検出した。

##### 5区独立柱建物跡1号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。本調査区内では、PP4、PP15、PP18、PP30で構成される1軒1間の建物跡を検出したのみである。建物の方向軸はN-75°-Eである。

＜規模＞ 柱穴間隔は約1.6m、柱穴の深さは0.1~0.5m程度である。

＜覆土＞ 黒褐色シルトを主体とする。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 柱穴の覆土は黒褐色土を主体としたものである。12世紀より新しいと思われる。

##### 5区溝跡1号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。長軸方向は、N-125°-Eである。

＜規模＞ 規模は開口部径63cm、底部径42cm、深さ26cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 黒褐色土シルトを主体とする。自然堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり断面形は浅鉢形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 覆土の様相から12世紀以降のものと思われる。

##### 5区土坑1号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。

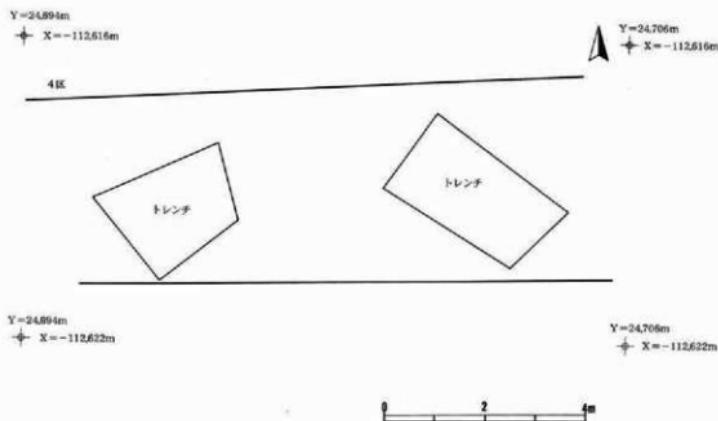
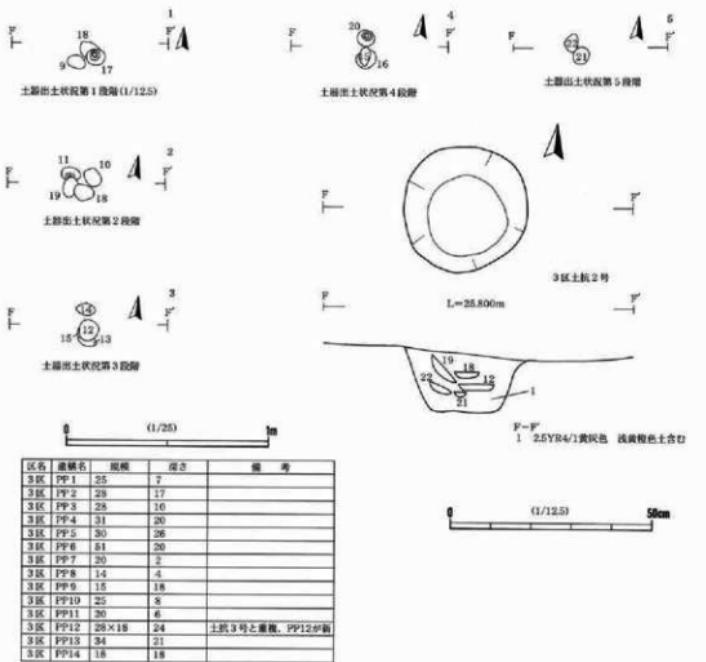
＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径170cm、底部径90cm、深さ82cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 14層に細分される。上位（1~5a層）は自然堆積で、下位（6~10a層）は人為堆積と判断される。

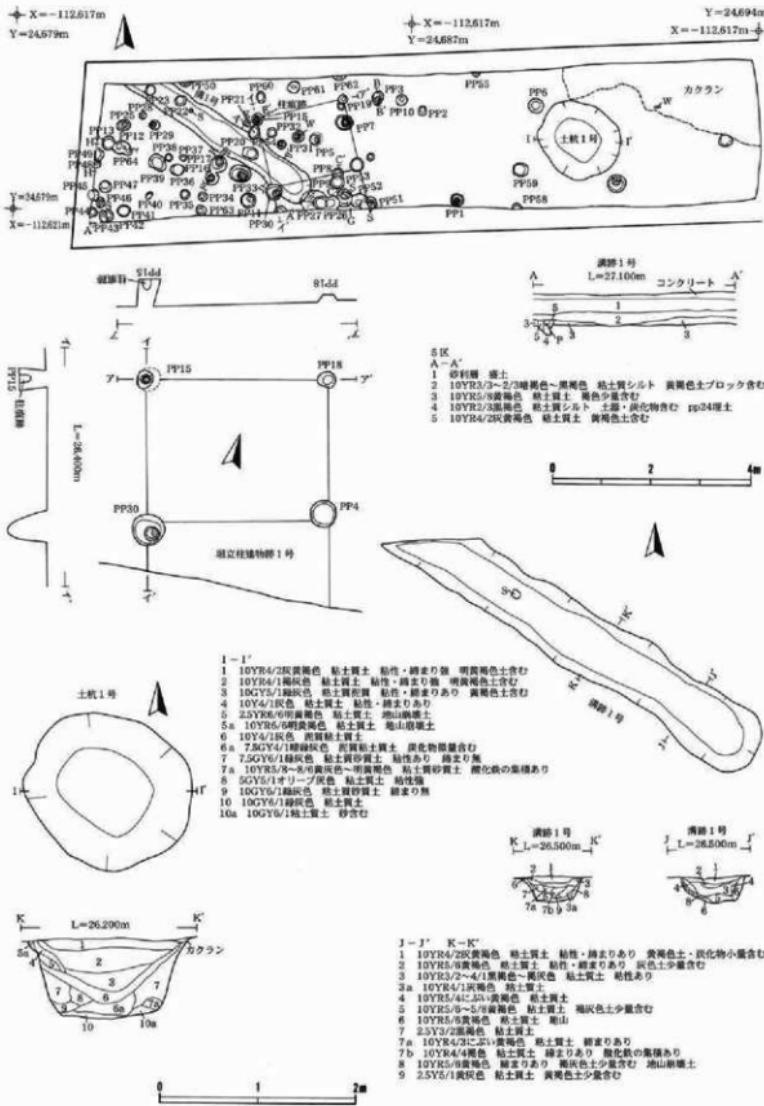
＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 山土遺物はない。

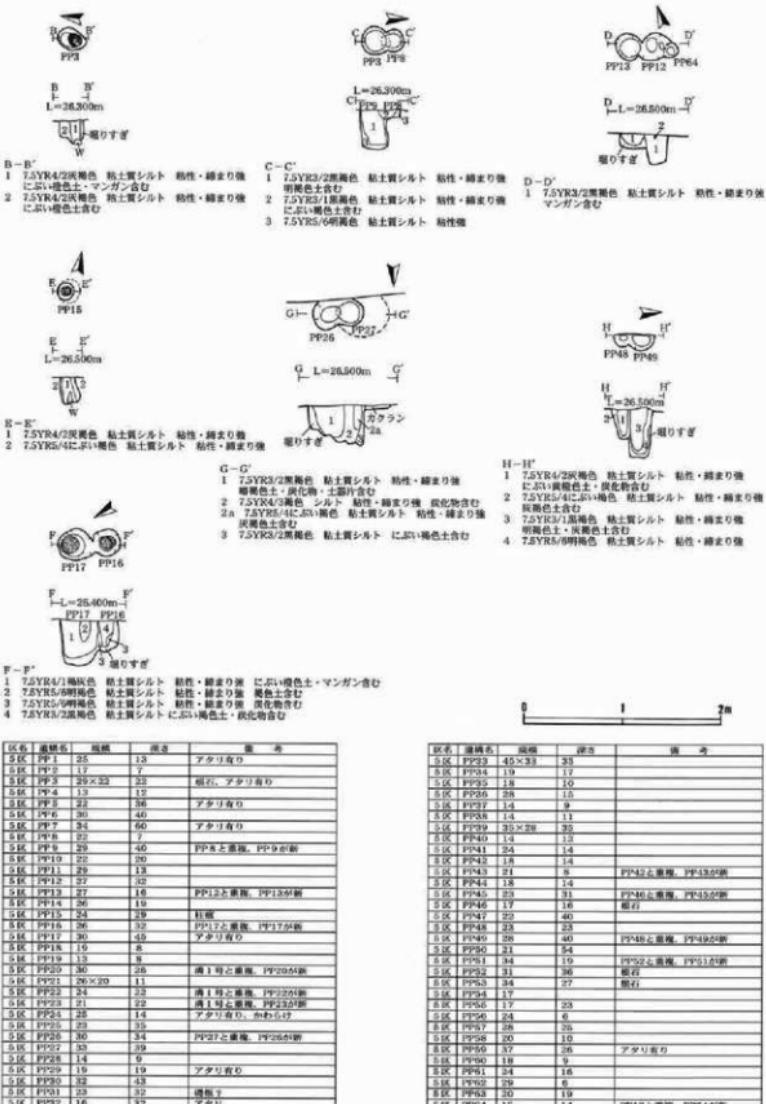
＜時期＞ 時期は不明である。規模から推定して当初は井戸跡の可能性を示唆して精査を進めたが、深さや状況からは否定的である。正し、掘る途上で中断した井戸穴である可能性は考えられる。



第3図 3(2)・4区



第4図 5区(1)



第5図 5区(2)

遺構内の遺物（第47図23～25、写真図版38） かわらけ2袋分程が出土した。

かわらけ PP45からロクロ小形1点とPP23から手づくね小形1点が出土している。

その他 PP3からモモと思われる種子類とPP53から粘土塊が出土している。

遺構外の遺物（第47図26、写真図版38） 遺構検出時に東北産と推定される陶器片が出土している。時期は13～14世紀と推定される。

陶器 地山直上から東北産瓷器系1点（26）が出土している。

5区のまとめ 検出された柱穴数は多かったが、柱穴配列から建物跡を復元できるのは1棟のみであった。ただし、柱穴数から推定して複数棟の掘立柱建物跡の存在が示唆される。また、柱穴の覆土は概して黒色土を主体としたものであることから、12世紀よりは新しい時代、おそらくは中世と思われる。

#### 6区（第6・7図、写真図版7）

位置 県道毛越寺線沿いで、「理容エンゼル」前に位置する。

検出遺構 滝跡5基、柱穴100基を検出した。

##### 6区溝跡1号

＜検出状況＞ III層上面で検出された。遺構の長軸方向はN-95°-Eである。

＜規模＞ 開口部径110cm、底部径45cm、深さ14cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 2層に細分される。自然堆積か人為堆積かは判別できなかった。

＜壁・底面＞ 壁はゆるく外反する。断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞（第48図29） 陶器小片1点と陶磁器小片1点が出土した。

陶器 渥美産の山茶碗の破片と思われる（不掲載）。

陶磁器 中国産青磁の小破片で、器種は碗と思われる。

＜時期＞ 明確には判断できなかった。出土している陶磁器は12世紀と推定される。

##### 6区溝跡2号

＜検出状況＞ 検出面はIII層上面である。遺構の長軸方向はN-125°-Eである。

＜規模＞ 開口部径40cm、底部径33cm、深さ18cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 褐灰色シルトによる単層である。自然堆積か人為堆積かは判別できなかった。

＜壁・底面＞ 断面形は浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。

##### 6区溝跡3号

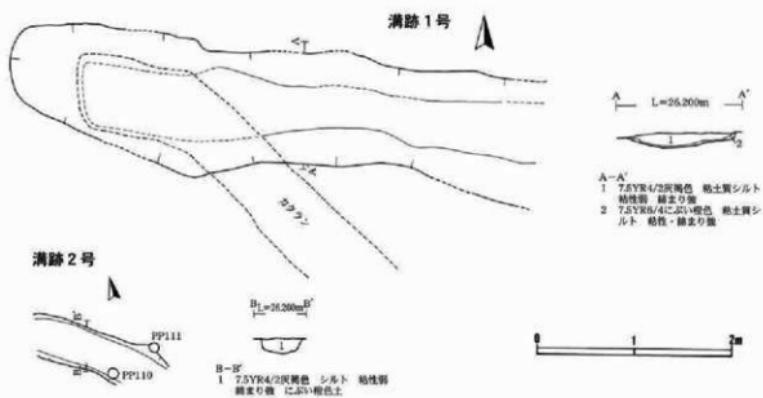
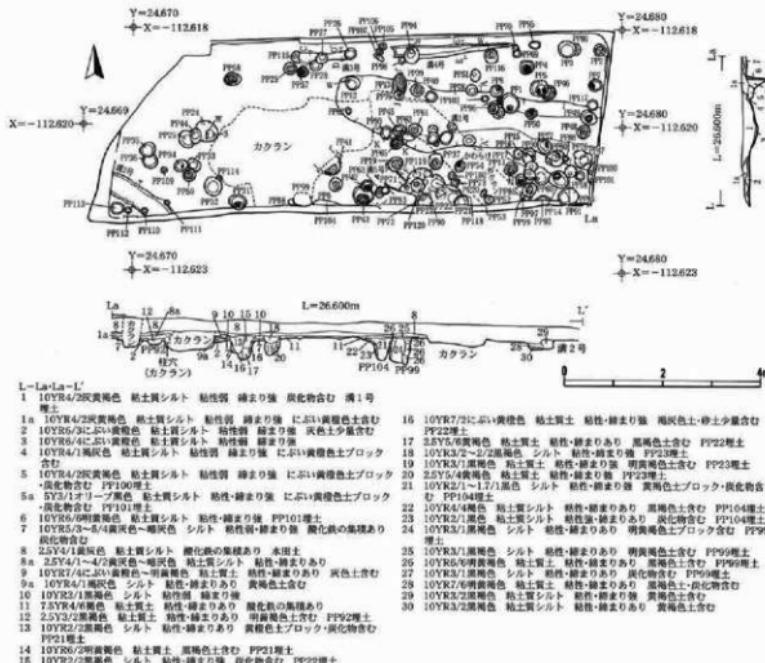
＜検出状況＞ 検出面はIII層上面である。遺構の方向軸はN-90°-Eである。

＜規模＞ 開口部径20cm、底部径17cm、深さ10cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 灰黄褐色粘土質シルトを主体とする。自然堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はピーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜付随施設＞ 野外の調査時においては、PP15、PP26、PP27が本遺構と重複関係にあると捉えてきたが、本遺構の付随する柱穴の可能性がある。あるいは柱穴列的な遺構の可能性も示唆されるが、調査では解明できなかった。



### 第6図 6区(1)



<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。

#### 6 区溝跡 4 号

<検出状況> 検出面はⅢ層上面である。遺構の長軸方向はN-90°-Eである。6区溝跡3号と同一の溝で（柱穴列？）ある可能性が高い。

<規模> 開口部径20cm、深さ17cm程である。

<覆土・堆積状況> 2層に区分される。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、第7図に掲載した断面図E-E'ラインは、セクションを設定した場所が調査区外との境界のためV字状に見える。（北側に若干広がると思われる）

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。

#### 6 区溝跡 5 号

<検出状況> 検出面はⅢ層上面である。遺構の長軸方向はN-100°-Eである。

<規模> 開口部径32cm、底部径27cm、深さ17cm程である。

<覆土・堆積状況> 灰褐色粘土質土による単層である。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は逆台形状である。底面は凹凸がある。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。

遺構内の遺物（第47・48図27・28、30、写真図版39） 柱穴から陶磁器片、陶器片、器種不明の木製品が出土している。

陶器 PP23から常滑産緑釉小皿の口唇部1点（27）とPP58から瀬戸産緑釉小皿の口縁部1点（28）が出土している。

木製品 PP24から器種不明品が出土している。

遺構外の遺物 遺構外出土遺物はない。

6区のまとめ 今年度調査を行った区の中で、最も柱穴の検出数が多い。ただし、柱穴配列から復元できる建物跡はなかった。柱穴の覆土は、5区同様黒色土を主体とすることから12世紀より新しい時代の掘立柱建物跡の存在が示唆される。

### 7区（第8図、写真図版8）

位置 県道毛越寺線沿いで、「岩手銀行平泉支店」前に位置する。

検出遺構 溝跡1条を検出した。

#### 7 区溝跡 1 号

<検出状況> 表土を除去した段階で検出した。長軸方向は、N-125°-Eである。

<規模> 開口部径84cm、底部径53cm、深さ10cm程である。

<覆土・堆積状況> 黄褐色粘土質土を主体とする。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は外反気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 時期は不明である。覆土の状況から12世紀のものと推定する。

**遺構外の遺物** 遺構外出土遺物はない。

**7区のまとめ** 12世紀と推定される溝跡を1条検出したに留まる。

**8区（第8・9図、写真図版8・9）**

**位置** 県道毛越寺線沿いで、「岩手銀行平泉支店」前に位置する。

**検出遺構** 溝跡1条、井戸跡2基、土坑1基、柱穴15基を検出した。

**8区溝跡1号**

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-5°-Eである。

＜規模＞ 開口部径22cm、底部径15cm、深さ5cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐灰色泥炭土を主体とする。自然堆積的様相であるが明確には判断できない。

＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形は丸底の浅鉢状を呈する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。覆土の状況から近代のものと推定される。

**8区井戸跡1号**

＜検出状況＞ 8区東側で岩手銀行駐車場出入口前に位置する。Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 調査区内で確認できるのはプランから推定して、平面形は円形で、規模は開口部径192cm、底部径110cmである。深さは、調査の安全性を加味して現地表面から150cm程下げた段階で中止したため不明である。

＜覆土・堆積状況＞ 1・2層は盛土、3～5層が記録を行った覆土である。全体的には自然堆積的様相であるが、明確には判断できなかった。

＜壁・底面＞ 壁は下位から中位にかけて外傾し、中位から上位で強く外反する。断面形はロート状に近い。調査の安全面を加味し、底面までの掘り下げは行っていない。

＜出土遺物＞ 自然木等が出土した。

＜時期＞ 時期を判別できる遺物の出土がない。覆土の様相と断面形から12世紀と推定される。

**8区井戸跡2号**

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。調査は安全性の問題から早急に掘り下げ埋め戻しを行った関係で土層断面の作成（実測）は行っていない。

＜平面形・規模＞ 調査区内で確認できるプランから推定すると、平面形は円形で、規模は開口部径約157cm、底部径約117cmである。深さは検出面から約144cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐灰色泥炭土を主体とする。非常に脆い土質であった。自然堆積的様相であるが、明確には不明である。

＜壁・底面＞ 壁は外反して立ち上がり、断面形は逆台形状と推定される。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

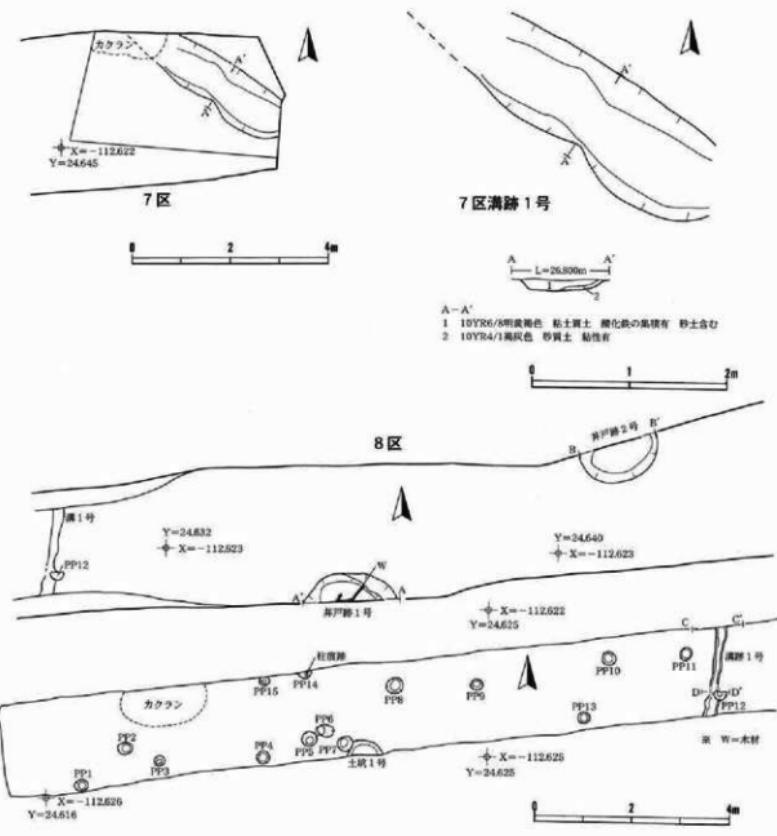
＜時期＞ 時期は不明である。

**8区土坑1号**

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は凹形で、規模は開口部径77cm、底部径53cm、深さ8cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は黒褐色粘土質土による単層である。



区段	通路名	規格	延長	備考
8区	PP1	28	29	
8区	PP2	29	36	
8区	PP3	21	11	
8区	PP4	25	20	
8区	PP5	29	33	
8区	PP6	34×26	34	
8区	PP7	32	27	
8区	PP8	33	19	
8区	PP9	25	17	
8区	PP10	28	11	
8区	PP11	23	42	
8区	PP12	26	14	第1号と重複。PP12が新
8区	PP13	23	10	
8区	PP14	26	17	柱道路
8区	PP15	20	8	

第8図 7・8区(1)

＜壁・底面＞ 壁は外反気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。

遺構外の遺物 遺構外の出土遺物はない。

8区のまとめ 12世紀と思われる遺構は井戸跡1号が挙げられる。井戸跡1号は、かわらけや陶器などの出土がなく、覆土の様相と断面形（ロート状）から推定するものである。井戸跡の検出地は、銀行の駐車場出入口付近の真下であったことと、調査区境外（道路下方向）に遺構が延びることから、安全性を重視し底面までの精査は断念した。よって、厳密には時代特定はできない。また、堆積する覆土についても、短時間で精査を終えたことにも起因するが、土層觀察に不備があったことは否めない。精査時は自然堆積層と捉えられたが、状況から考えておそらくは人為堆積により構成された覆土であろう。

#### 9区（第10・11・12図、写真図版10）

位置 県道毛越寺線沿いで、「岩手銀行平泉支店」の西隣りに位置する。

検出遺構 溝跡2条、堀跡1条、柱穴1基を検出している。

##### 9区溝跡1号

＜検出状況＞ 現地表面から砂利（盛土）50～60cmを除去した段階で、明黄褐色粘土質土と褐灰色泥質土の混ざった土（1b + 1c層）の広がりを検出した。9区溝跡2号と重複関係にあり、本遺構が古い。遺構の長軸方向は、N=15°～Eである。平泉町文化財センターが実施した第31次・第57次調査結果から、本区と43区から大規模な溝が検出されることは当初から予想された。調査の安全性を加味し、現地表面から地下4mまでの深さの矢板（シートパイル）を設置して精査を始めた。安全性を重視して短時間で精査を行ったため、土層觀察断面の作成は現地表面から150cm以下（3e層）の細分は行っていない。

＜規模＞ 開口部径は280～310cm、底部径50～80cm、深さは検出面から175cm、現地表面から275cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 青灰色泥質土が本遺構の土埋土である。覆土は9区溝跡2号を含め16層に区分を行った（第11図B-B'）。上記した3e層は細分が可能であろう。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形はV字状を呈する。

＜出土遺物＞（第48・65図30～35、281、写真図版39・55） かわらけ、陶磁器、陶器、瓦片、古銭、木製品が出土している。

かわらけ 4号ビニール7袋分の出土があった。手づくねが多い。

陶磁器 青磁小片、近世陶磁器が出土している。

陶器 濡美、東北産、唐津等が出土している。

瓦 埋土中～下位で近現代のものと推定される平瓦片が出土した（不掲載）。

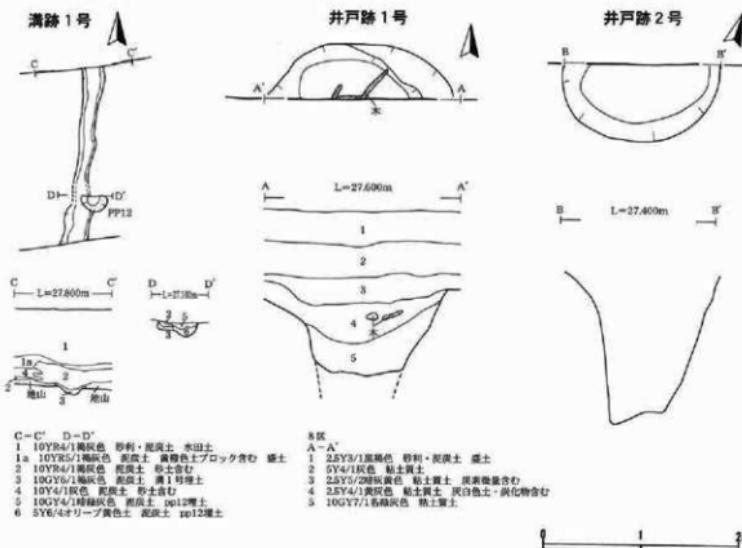
古銭 永楽通寶（明、1408年）が1枚出土している。

木製品 器種不明のものが出土している。

＜時期＞ 出土遺物から本遺構の廃絶された時期は、近世以降と推定される。ただし構築・使用時期については不明である。

##### 9区溝跡2号

＜検出状況＞ 現地表面から砂利（盛土）50～60cmを除去した段階で、明黄褐色粘土質土と褐灰色泥質土



第9図 8区(2)

の混ざった土（1b・1c層）の広がりを検出した。軸方向はN-15°-Eである。西側の上端は、47次調査区に跨がる。

＜規模＞ 規模は第47次調査区との照合から開口部径96cm、底部径45~60cm、深さは検出面から150cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は7層に細分される。自然堆積的様相であるが明確には判断できなかった。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞（第48図36・37、写真図版50） 陶磁器数点と種別不明の木製品の一部分が出土した。

陶磁器 中國産白磁が1点出土している。

木製品 37は曲物の底部と思われる。

＜時期＞ 9区溝跡1号との截り合い関係から本遺構が新しいことがわかる。よって廃絶された時期は近代以降と推定される。また、精査時に明確な判断ができなかつたため遺構としては認知しなかつたが、第11図B-B'の1a・1b・1c層部分は、溝跡1・2号より新しい溝跡に伴う覆土である可能性も考えられる。

9区堀跡

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で、不明瞭ではあるが板痕跡（アタリ）と思われるものを検出した。遺構の長軸方向はN-105°-Eである。

＜規模＞ 布掘りの規模は開口部径40~50cm、底部径20~30cm、深さ45cm。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は、アタリ部分が黄灰色粘土質シルト、掘り方部分は浅黄色粘土質シルトを主体とする。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は地点によって若干の相違があるが、概ねビーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 覆土下位で須恵器片1点が出土した。

＜時期＞ 時期は覆土の様相から12世紀と推定される。

遺構外の遺物 遺構外からの遺物は出土していない。

9区のまとめ 堀跡については12世紀と推定されるが溝跡2条は明確には不明である。出土遺物から推定すると近世の可能性が高い。また、本区で検出された溝跡1・2号は、平泉町文化財センターが調査を実施した第31次調査・第57次調査で検出された溝跡及び43区で検出された溝跡と同一のものであり、対応関係を検討する必要がある。

## 28区（第13・14・15・16・17・18・19図、写真図版11・12）

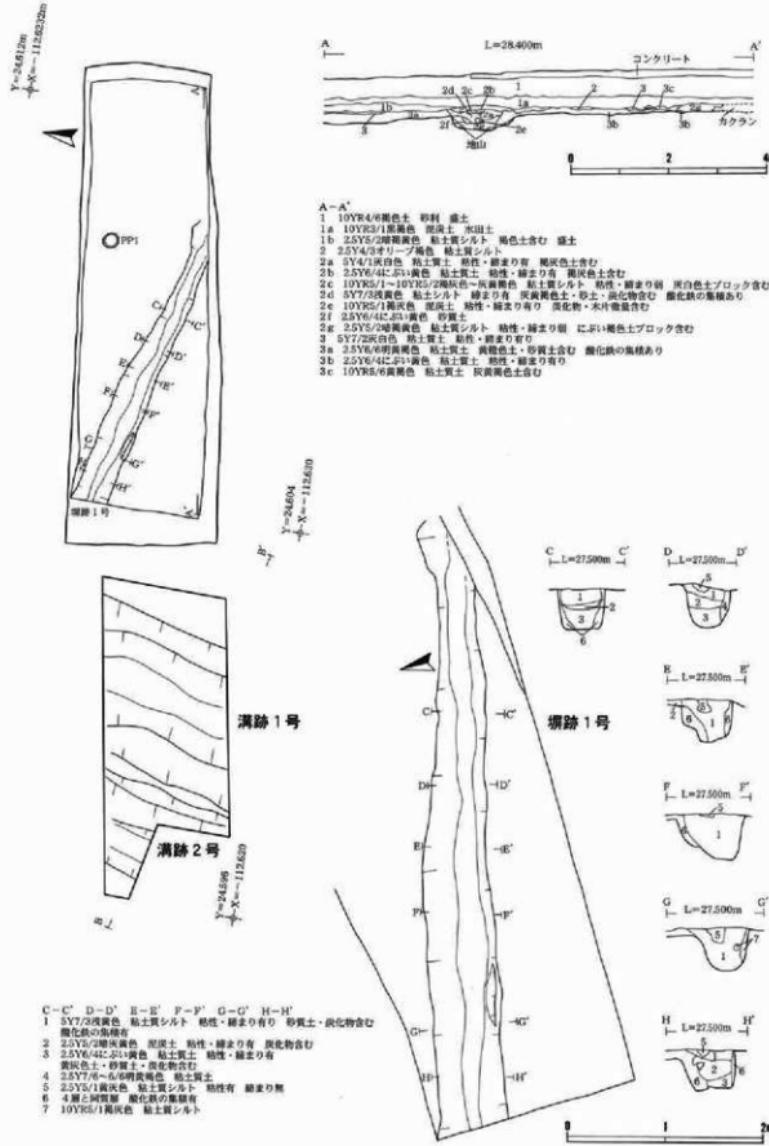
位置 国道4号と県道毛越寺線の合流付近に位置する。地割り名が不明のため便宜上28区と命名した。

検出遺構 挖立柱建物跡3棟、溝跡7条、井戸跡3基、土坑10基（トイレ？土坑1基）、柱穴87基を検出した。

28区挖立柱建物跡1号

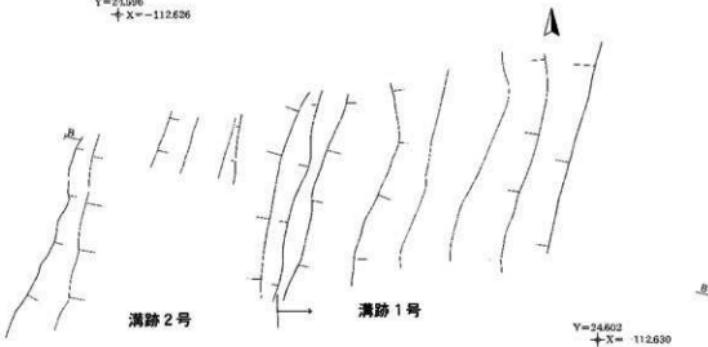
＜検出状況＞ 遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。桁？行きの軸線方向は、N-5°-Eである。

＜平面形・規模＞ 柱穴7個により構成される。柱穴の規模は、開口部径22~30cm、深さ15~31cm程度である。PP27とPP28の間に柱穴が検出されなかつたが、3間×1間の建物跡と推定される。間尺は、東西方向でPP1とPP4の柱穴間隔が205cm、PP4とPP29の柱穴間隔が410cmである。南北方向ではPP28とPP29の柱穴間隔が240cmである。



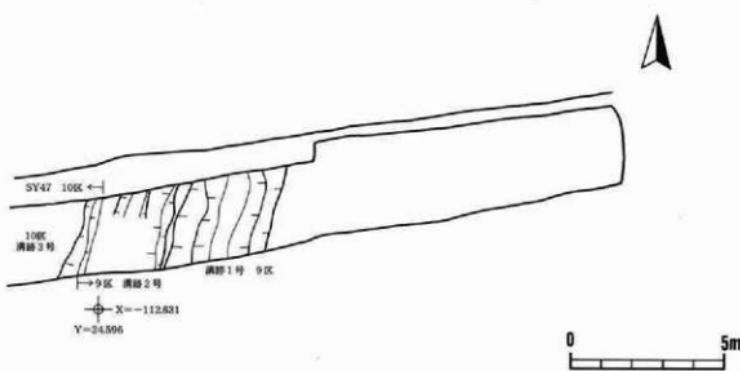
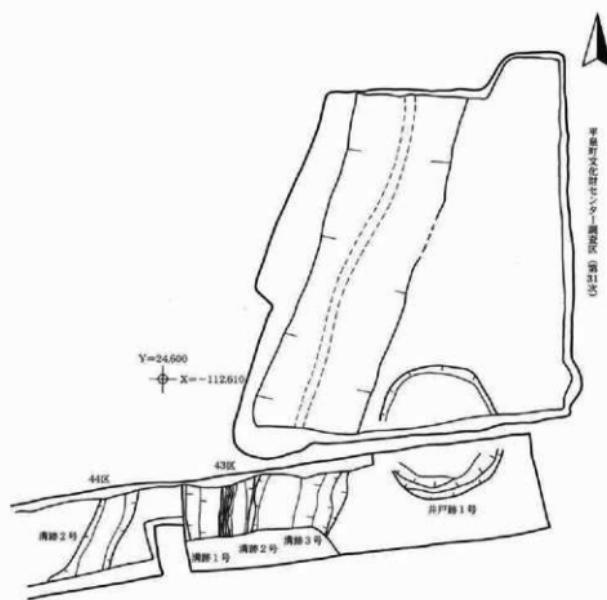
第10図 9区(1)

Y=24.096  
+ X=-112.626



底名	標高名	基標	等高	備考
SHK	PP1	30	17	

第11図 9区(2)



第12図 9(3)・10・43・44区

＜覆土＞ 柱穴の覆土の様相は何れも似通った傾向で捉えられる。アタリ部分は灰褐色粘土質シルトと明褐色粘土質シルトの混土で、掘り方部分は明褐～明黄褐色粘土質土である。

＜出土遺物＞ 柱穴からの出土遺物はない。

＜時期＞ 掘立柱建物跡を構成する柱穴が遺物包含層下位から検出されていることと、柱穴の覆土の様相から12世紀のものと推定される。

#### 28区掘立柱建物跡2号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向は、N-70°-Eである。柱穴同士の載り合い（PP46とPP70）から掘立柱建物跡3号より古いことがわかる。

＜平面形・規模＞ 調査区内では2間×1間の柱穴配列を検出したのみであるが、建物跡は調査区外に延びる可能性がある。柱穴6個により構成される。柱穴の規模は、開口部径18~20cm、深さ10~20cm程度である。間尺は、東西方向でPP47とPP43の柱穴間隔が250cm、南北方向でPP47とPP57の柱穴間隔が210cmである。南北方向ではPP65とPP70の柱穴間隔が105cmである。

＜覆土＞ 柱穴の覆土の様相は多少バラツキがあるが、何れも炭化物を少量含む。

＜出土遺物＞ 柱穴からの出土遺物はない。

＜時期＞ 明確には不明である。覆土の様相からの判断としては、12世紀以降と推定される。

#### 28区掘立柱建物跡3号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。輪線方向は、N-90°-Eである。

＜平面形・規模＞ 調査区内では1間×1間の柱穴配列を検出したのみであるが、建物跡は東西方向においては調査区外に延びる可能性がある。柱穴4個により構成される。柱穴の規模は、開口部径20~25cm、深さ10~42cm程度である。間尺は、東西方向でPP60とPP43の柱穴間隔が160cm、南北方向でPP60とPP63の柱穴間隔が85cmである。

＜覆土＞ 柱穴の覆土は褐灰～灰黄褐色粘土質土を主体とする。

＜出土遺物＞ 柱穴からの出土遺物はない。

＜時期＞ 明確には不明である。覆土の様相からの判断としては、12世紀以降と推定される。

#### 28区溝跡1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。浅い掘り込みの段（強りだし）を持つ。長軸方向はN-100°-Eである。

＜平面形・規模＞ 規模は浅い掘り込みの段を含めると上幅93cm、開口部径60cm、底部径41cm、深さ38cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は3層に大別される。主覆土が1層系で、褐灰～黄灰色粘土質土及び泥質粘土質土でかわらけ片・陶器片を含む。覆土の堆積については、様相からは自然堆積と捉えたが明確ではない。

＜壁・床面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は軽く北に傾斜する。

＜出土遺物＞（第49図38~42、写真図版39） 遺物の出土は、覆土上位の1層系を主体とする。からかわらけ、陶器、中国産輸入陶磁器が主に埋土上位から出土している。

かわらけ 覆土上位（1~1a層）より9袋分、覆土中位より9袋分、覆土下位（5層）より2袋分のかわらけが出土している。大形の手づくねかわらけの小片が多い。実測可能であった大形のかわらけ1点を掲載する。

陶器 常滑産、瀬美産の破片が11点出土している（掲載は4点）。41は大甕の胴部片と思われる。その他は

器種の推定が明確ではない。

磁器 中国産白磁の底部片が1点出土（不掲載）している。四耳壺でⅢ期（森田1995年）と思われる。

＜時期＞ 出土遺物は12世紀のものである。覆土についても古い様相が窺える。

#### 28区溝跡2号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-90°-Eである。

＜平面形・規模＞ 規模は開口部径23cm、底部径11cm、深さ16cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は2層に大別される。暗灰黄色粘土質土が主体である。自然堆積と思われる。

＜壁・床面＞ 壁は緩く外傾し、断面形は浅鉢状を呈する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。覆土からは古い様相である。

#### 28区溝跡3号

＜検出状況＞ I層中で検出した。長軸方向はN-90°-Eである。

＜平面形・規模＞ 東側が調査区外なことから開口部径・底部径とも不明である。深さは90cm以上である。

＜覆土・堆積状況＞ オリーブ褐色を主体とする。人為堆積で、Ⅲ層（地山土）相当の土を使って埋め戻しを行っている。

＜壁・床面＞ 西壁のみの確認であるが、壁は外傾し、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 覆土は現代の盛土と判断され、旧上水道に伴う溝（痕跡）と思われる。

#### 28区溝跡4号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-90°-Eである。

＜平面形・規模＞ 規模は開口部径192cm、底部径31cm、深さは検出面から110cm、現地表面から179cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ オリーブ黒色泥質土を主体とする。1～1b層は現代の盛土層、2～3b・3h・4層は整地層（中世以降）、3c～3g層は自然堆積の様相で捉えられる。

＜壁・底面＞ 壁は外傾し、断面形は逆台形状を呈する。底面は西から東へ緩く傾斜する。

＜出土遺物＞（第49図43～76・78～82、写真図版39～41）かわらけ、陶器片、粘土塊が出土している。覆土上位～中位に堆積する3c・3f層からの出土量が多い。

かわらけ 手づくねかわらけの大形と小形が数点出土している。

陶器 常滑、涅美が多量に出土している。少量ではあるが須恵器及び東北産と思われる陶器が出土している。その他 粘土塊が2点出土している（不掲載）。

＜時期＞ 覆土の下位で出土した79は、13～14世紀のものと考えられることと近世の遺物が出土していない状況から、本造構の廃絶時期は中世より古いと推定される。構築時期については、本区の調査からは言及できない。

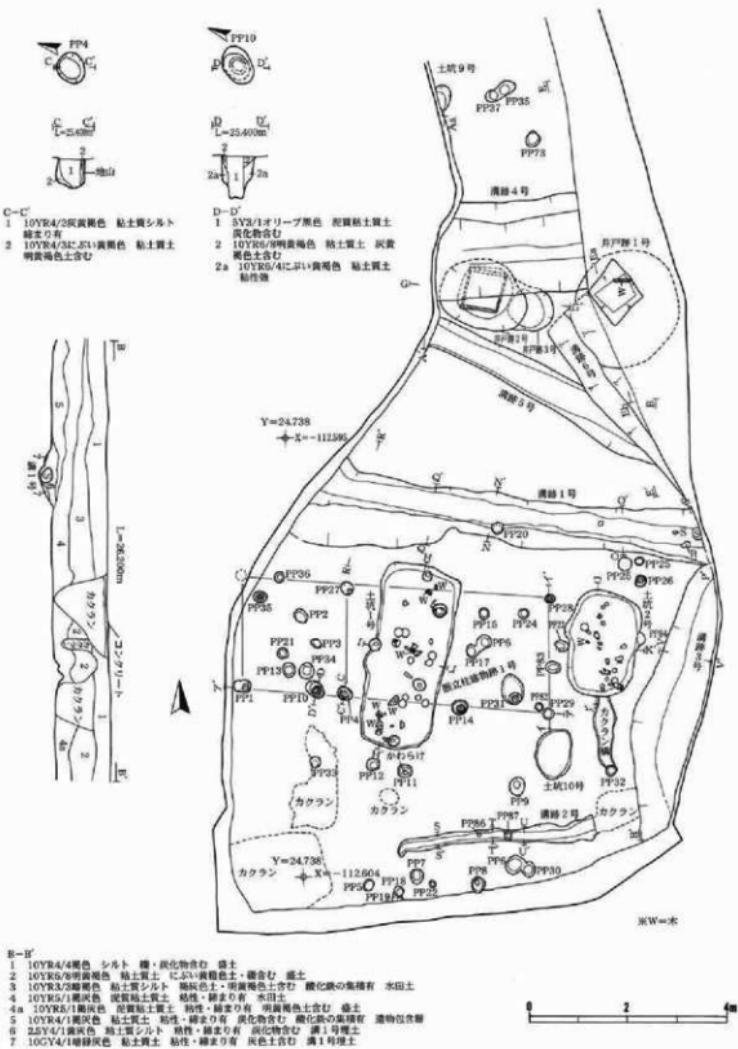
#### 28区溝跡5号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-115°-Eである。

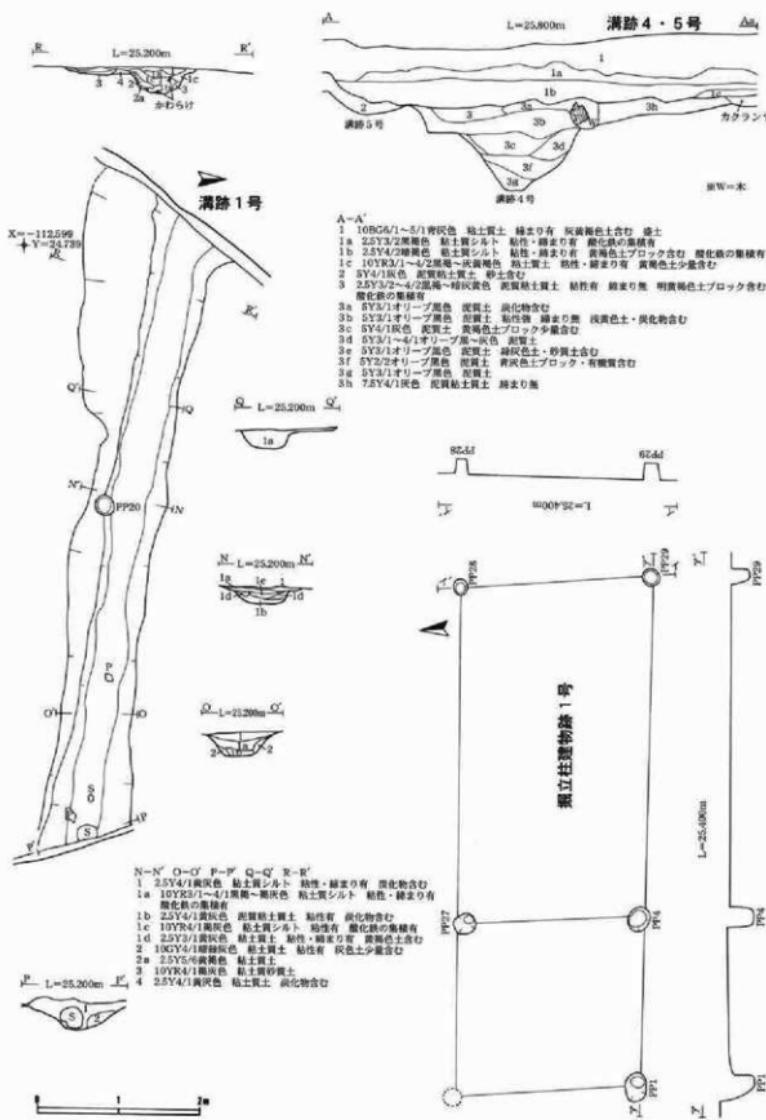
＜平面形・規模＞ 規模は開口部径58cm、底部径39cm、深さ20cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は灰色泥質粘土質土の単層である。

＜壁・底面＞ 断面形は浅皿状を呈する。



第13回 28区(1)



第14図 28区(2)

- ＜出土遺物＞ 古瀬戸と思われる平茶碗の胴部小片が出土している。
- ＜時期＞ 明確な時期は不明である。覆土の土層等などからは古い様相で捉えられる。
- 28区溝跡6号
- ＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-150°-Eである。28区井戸跡1号と重複関係にあるが、新旧関係は明確ではない。
- ＜平面形・規模＞ 東側が調査区外でプランの一端を精査したに過ぎないため、開口部径・底部径とも不明である。深さは64cm程である。
- ＜覆土・堆積状況＞ 暗灰色粘土質土を主体に黄褐色粘土質土ブロックが混じる。
- ＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は緩く北側に傾斜する。
- ＜出土遺物＞ 覆土中から出土遺物はない。
- ＜時期＞ 不明である。28区溝跡3号と同一の可能性はあるが、底面の標高差が大きいことと覆土の様相が違うことから判断できない。
- 28区溝跡7号
- ＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-90°-Eである。
- ＜規模＞ 規模は開口部径33cm、底部径18cm、深さ16cm程である。
- ＜覆土・堆積状況＞ 覆土は黒褐色粘土質土を主体とする。
- ＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は南に向かって緩やかに傾斜する。
- ＜出土遺物＞ (第52図83~87、写真図版42) 底面主体に覆土中からかわらけや陶器片が出土している。  
かわらけ 大形の手づくねかわらけを主体に小形の手づくねかわらけが出土している。  
陶器 常滑、源美が数点出土している。
- ＜時期＞ 明確には時期を断定できない。出土している遺物は12世紀のものである。正し、覆土の色調が黒色主体であることから12世紀以降に廃絶された可能性が高い。
- 28区井戸跡1号
- ＜検出状況＞ 溝跡6号の下位で検出した。本遺構が古いと思われるが明確ではない。
- ＜平面形・規模＞ 規模は開口部径162cm、底部径60cm、深さは検出面から237cm、現地表面から404cm程である。
- ＜覆土・堆積状況＞ 覆土は12層に細分される。1~3層は人為堆積層と捉えられる。4~5層は自然堆積の様相ではあるが明確ではない。
- ＜壁・底面＞ 壁は底面から100cm程直立気味に立ち上がり、中位で幅が広がる。断面形はロート状を呈する。
- ＜付属施設＞ 底面付近には井戸枠に使用されたと思われる材が検出された。
- ＜出土遺物＞ 出土遺物はない。
- ＜時期＞ 断面形がロート状を呈することから12世紀、あるいは中世の井戸跡と推定される。
- 28区井戸跡2号跡
- ＜検出状況＞ 28区溝跡4号及び28区井戸跡3号と重複関係にあり、溝跡4号より古く、井戸跡3号より新しい。
- ＜平面形・規模＞ 規模は開口部径178cm、底部径103cm、深さは検出面から160cm、現地表面から241cm

である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は暗灰黄色粘土質土による単層である。人為堆積と推定される。

＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はロート状を呈する。底面は平坦である。

＜付属施設＞ 底面付近から井戸枠が、ほぼ完全な形で検出された。

＜出土遺物＞（第57図189～192、383、写真図版49・50・61） 井戸枠の検出面より数cm上で中世と思われる漆器片が出土している。

漆器 中世と思われる漆器皿である。内面には全面に黒漆が塗布され、赤漆で文様が描かれる。

井戸枠 井戸枠がほぼ原形のまま残存していた。写真図版49に掲載したようなほど組み合わせる構造が確認できた。

＜時期＞ 出土遺物から中世の可能性が高い。

28区井戸跡3号

＜検出状況＞ 28区井戸跡2号の東側で検出された。本遺構が古い。

＜平面形・規模＞ 規模は開口部径89cm、底部径79cm、深さは検出面から112cm、現地表面から221cmである。標高は28区井戸跡2号より若干高い。

＜覆土・堆積状況＞ 褐灰色粘土質土を主体に黄橙色粘土質土がブロックで入る。明確ではなかったが、人為堆積と思われる。

＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 28区井戸跡2号よりは古いことは断定できるが、不明である。

28区土坑1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面において、かわらけを多量に含む暗褐色～にぶい黄橙色土の広がりを検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は方形で、規模は開口部径377×155cm、底部径360×146cm、深さ20cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 暗褐色粘土質シルトで粘性・締まりが強い上質である。2層に大別される。覆土下位は、上位に比べ黒色が強い。自然堆積の様相を呈する。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦である。

＜付属施設＞ 本遺構の底面及び壁際から柱穴が5基検出された。PP1～PP4は本遺構に伴うかあるいは古い可能性がある。PP5は本遺構の覆土を切ることから別の遺構（建物跡など）に伴うものであろう。

＜出土遺物＞（第52・53図90～122、写真図版42～45） 多量のかわらけと陶器片3点、及び木材片が1・2層中心に床面で出土している。

かわらけ 多量（48点と推定される）のかわらけが出土している。内訳は大形の手づくねが30点、小形の手づくねが11点、小形のロクロ成形のかわらけが7点出土している。実測可能である34点を掲載する。

陶器 常滑3点が出土している。

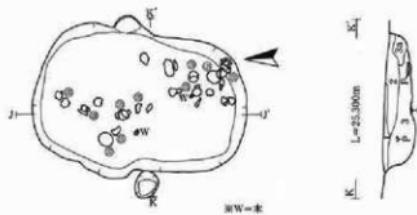
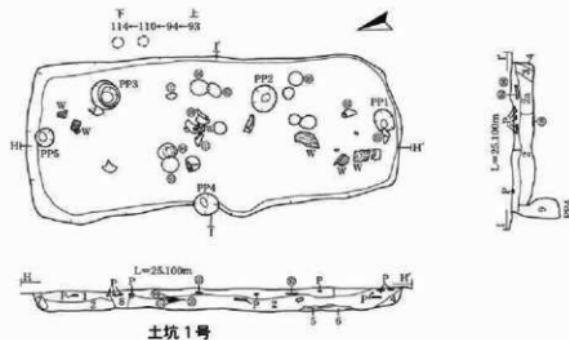
木材 明確にはわからなかったが、なんらかの部材と思われるものが10点程出土している。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀に廃絶されたものと思われる。

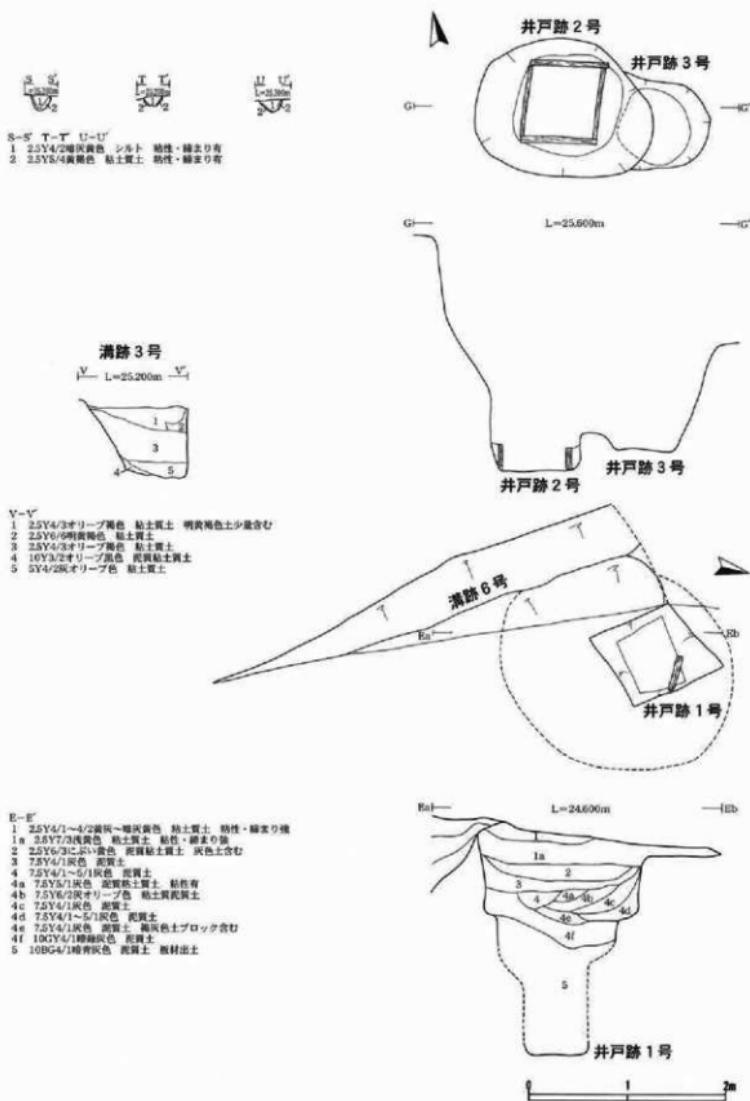
28区土坑2号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面において、かわらけを多量に含む灰褐色土の広がりを検出した。

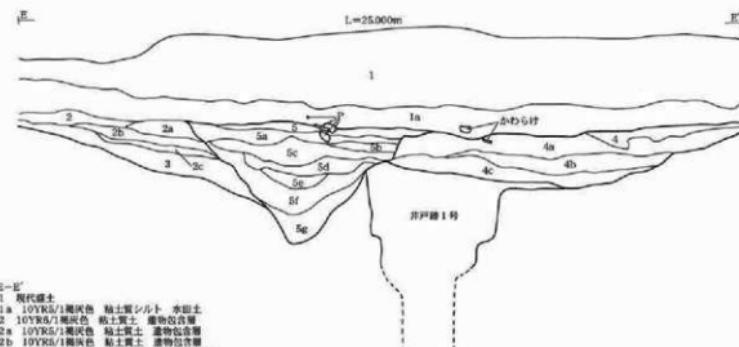
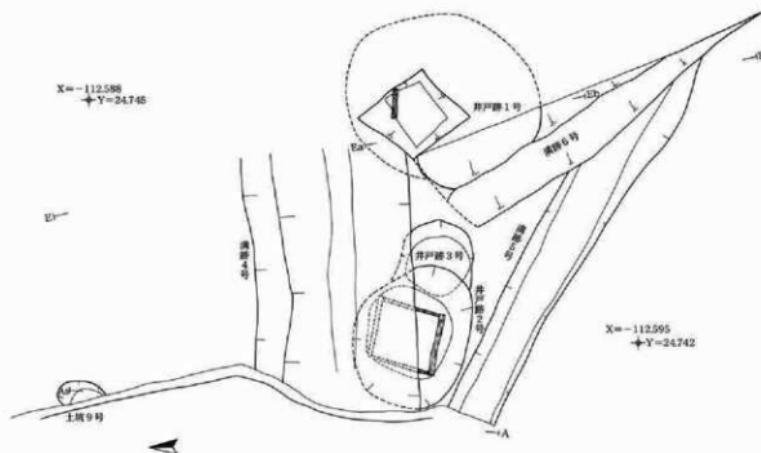
＜平面形・規模＞ 平面形は隅丸方形で、規模は開口部径220cm、底部径150cm、深さ32cm程である。



第15圖 28區(3)



第16図 28区(4)



E-E' 1 現代盛土

- 1a) 10YR5/1黒褐色 色土質シルト 水田土
- 1b) 10YR7/1黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 2) 10YR5/1黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 3) 10YR5/1オリーブ黒色 地下土質 地物土含合層
- 4) 25YL7/2黒褐色 土質土 黑化層
- 5) 25YL7/2黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 6) 25YL7/3(1)青褐色 地下土質 地物土含合層
- 7) 25YL7/3(2)青褐色 地下土質 地物土含合層
- 8) 5YR5/1(1)黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 9) 5YR5/1(2)黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 10) 10YR4/1黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 11) 10YR3/2(1)黒褐色-灰褐色 地下土質 地物土含合層
- 12) 10YR3/2(2)黒褐色-灰褐色 地下土質 地物土含合層
- 13) 5YR5/3(1)オリーブ黒色 地下土質 地物土含合層
- 14) 5YR5/3(2)オリーブ黒色 地下土質 地物土含合層
- 15) 5YR5/4(1)黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 16) 5YR5/4(2)黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 17) 25YL1/2(1)黒褐色 地下土質 地物土含合層
- 18) 25YL1/2(2)黒褐色 地下土質 地物土含合層

第17圖 28區(5)

＜覆土・堆積状況＞ 4層に区分される。主体となるのは暗褐色粘土質シルトで、自然堆積的様相を呈する。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦である。

＜付属施設＞ 本遺構に伴うか不明であるが短軸の両端にPP23、及び柱穴の可能性が高い痕みを検出した。

＜出土遺物＞（第53・54図123～140、写真図版46・47） 覆土中位の3～3a層を主体に遺物が出土している。遺物の種類としては、かわらけ、陶器片、漆器？が出土している。

かわらけ 多量（約27個体と推定される）のかわらけが3層主体に出土している。内訳は大形の手づくねかわらけ9点、小形の手づくねかわらけ14点、大形のロクロ成形のかわらけが1点、小形のロクロ成形のかわらけが3点が出土している。実測可能であった20点を掲載する。

陶器 泥瓦1点、獣投2点、中国産と思われる陶器1点が出土している。

漆器 黒漆の塗布が確認されることから漆器と思われるが、残存率が悪く明確ではない。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀に廃絶されたものと思われる。

#### 28区土坑3号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。28区土坑8号と新旧関係にあり、本遺構が古い。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径97cm、底部径53cm、深さ70cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土はオリーブ黒～灰色の粘土質土を主体とし、有機質に富む。自然堆積的様相を呈する。

＜壁・底面＞ 壁はほぼ直立気味に立ち上がる。断面形はビーカー状を呈する。

＜出土遺物＞（第51・54図77・141～144図、写真図版41・47） 埋土中位～下位で陶器・須恵器が出土している。

陶器 常滑産が6点出土している。器種の判別が可能なものは142のみで大甕の胸部片である。

須恵器 1点の出土で、壺の口～肩部が出土している。中世のものと思われる。

＜時期＞ 出土遺物は全て12世紀のものである。

#### 28区土坑4号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径91cm、底部径72cm、深さ13cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は3層に細分される。上位に褐灰色粘土質土、下位ににぶい黄褐色粘土質土が堆積する。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾して立ち上がり断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞（第54図145、写真図版47） 大形の手づくねかわらけが、底面直上で1点出土している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

#### 28区土坑5号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径46cm、底部径29cm、深さ13cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は2層に大別される。上位に褐灰色泥質粘土質土、下位に灰黃褐色が堆積する。人為堆積か自然堆積かの有無は判断できなかった。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。覆土の状況から古い様相が窺える。

## 28区土坑6号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径69cm、底部径65cm、深さ16cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は灰黄褐色粘土質シルトによる単層である。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。覆土の状況から古い様相が窺える。

## 28区土坑7号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径40～60cm、底部径30cm、深さ25cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐灰色粘土質による単層である。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾し、断面形は浅鉢状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ (第54図146、写真図版47) かわらけ1点と渥美産の陶器1点が出土している。

かわらけ 大形の手づくねかわらけが1点出土している。

陶器 渥美産の口縁部片が出土している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

## 28区土坑8号

＜検出状況＞ 覆土の状況からトイレ状土坑と思われるものである。Ⅲ層上面で検出した。現代の井戸跡及び28区土坑3号と重複関係にあり、本遺構が古い。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径105cm、底部径80cm、深さ111cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は黒～オリーブ黒色の泥質土が主体で、4・6・7層に多量の種子類が混入する。人為による堆積と思われる。

＜壁・床面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。

＜出土遺物＞ (第54図146～150、152～155、写真図版47・48) 埋土上位～中位を主体に、かわらけ、陶器、木製品などの遺物が出土している。

かわらけ 大形の手づくねかわらけ1点が出土している。

陶器 常滑産と渥美産の胴部片があわせて5点出土している。

木製品 チュウ木と思われる木製品が4本出土している。

＜時期＞ 出土遺物は12世紀が主体である。覆土の状況からは、古い様相と捉えられる。

## 28区土坑9号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

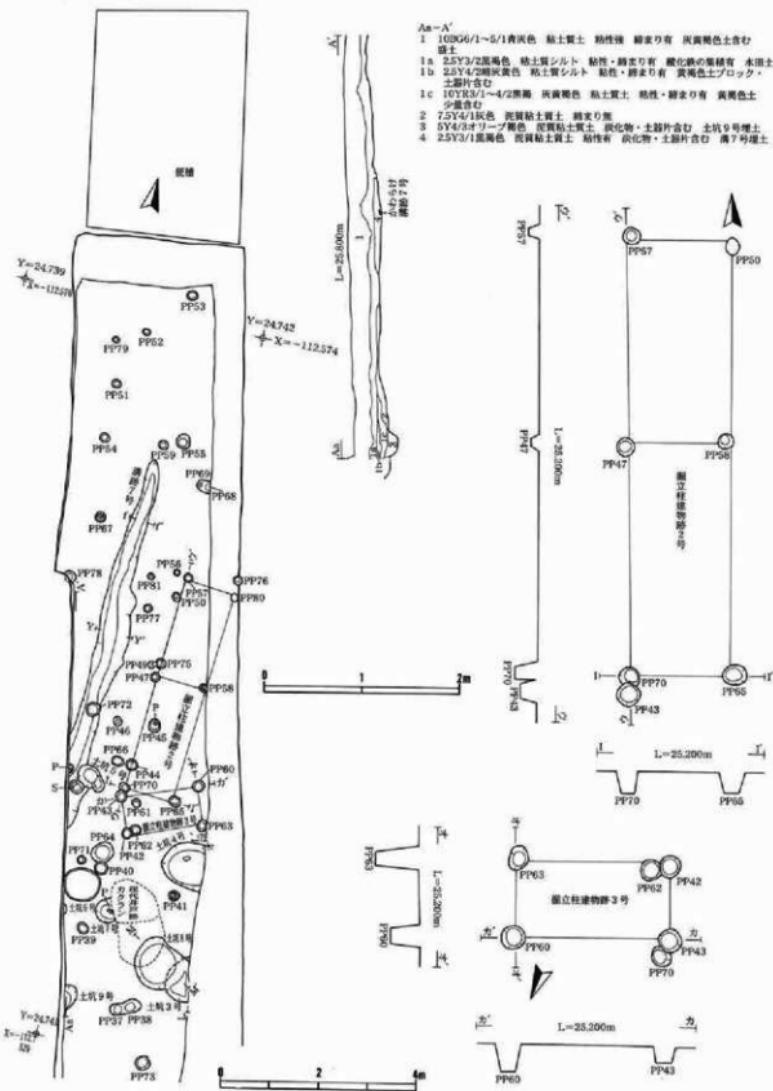
＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径52cm、底部径41cm、深さ22cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土はオリーブ褐色の単層である。人為堆積的様相であり、短い時間幅で埋められたと思われる。

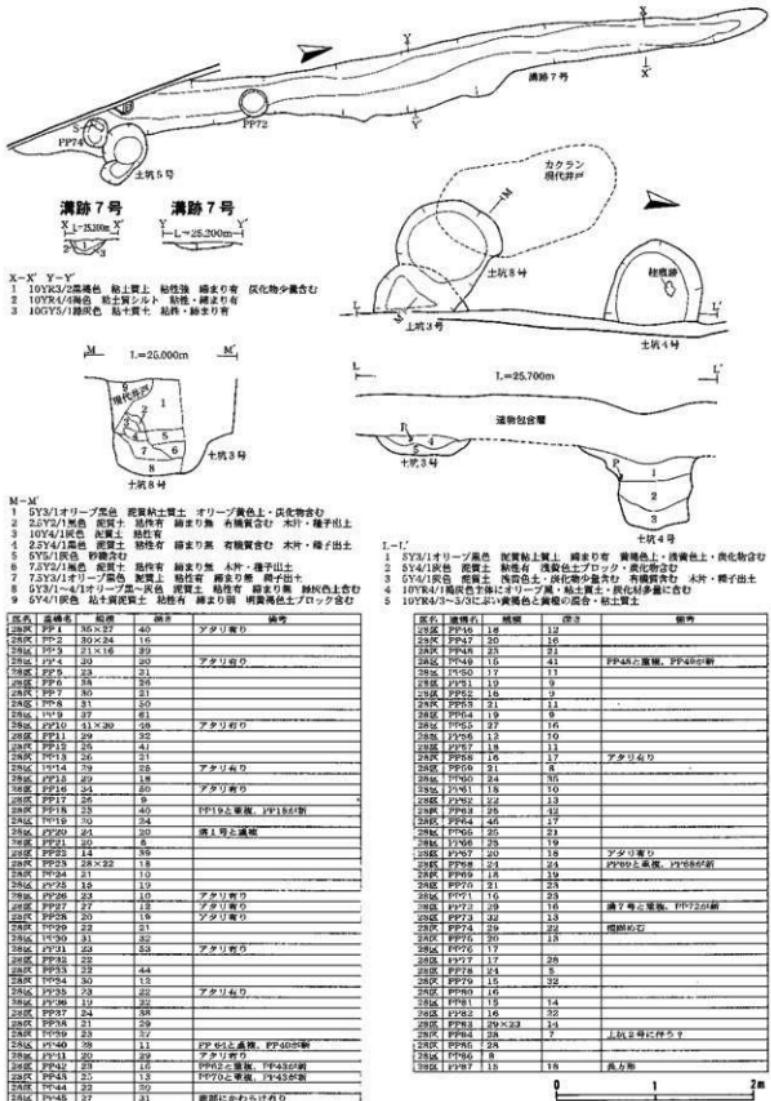
＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。

＜出土遺物＞ (第54図151、写真図版47) かわらけの小片と渥美産の陶器1点が出土している。

かわらけ 小片が少量出土した。



第18回 28区(6)



第19回 28区(7)

陶器 常滑産の肩部が出上している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

28区土坑10号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径52cm、底部径41cm、深さ16cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐色灰色の单層である。

＜壁・底面＞ 壁は緩やかに立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。浅い落ち込みとも考えられる。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。

28区遺構内遺物（第55図156～159、写真図版48） 数点の遺物が柱穴から得られた。

かわらけ PP11から大形のロクロかわらけが出土している。

陶器 PP63とPP45から渥美産が出上している。

遺構外の遺物（第55図164～177、写真図版48） 遺物包含層が局所的に残存する。特に29区との続縫部分から北側のエリアと、国道4号沿いで28区溝跡4号の上位付近の堆積が良好であった。出土した主な遺物としては、かわらけ、常滑産・渥美産の陶器が、小片を含めてコンテナ1箱分程度出土した。

かわらけ 小形の手づくねを主体とする。163は内折れのかわらけである。

陶器 常滑産を主体に渥美産及び須恵器が出土している。

28区のまとめ 他の区に較べて面積的にも平面的にも広く調査した区であったこともあり、多数の遺構に恵まれた。検出遺構についても、大形の溝跡、遺物廃棄土坑、トイレ状土坑、井戸枠の残存していた井戸跡など貴重な資料が得られた。また、本区には所々12世紀の遺物包含層が残存し、相当量の遺物が出土している。

## 29区（第20図、写真図版13）

位置 国道4号と県道毛越寺線の合流付近に位置する。

検出遺構 溝跡3条、カマド状遺構1基、土坑1基、柱穴11基を検出した。

29区溝跡1号

＜検出状況＞ Ⅱ層を除去した段階で検出した。

＜規模＞ 開口部径9cm、底部径6cm、深さ2cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 灰褐色粘土質シルトを主体に、ぶい橙色粘土がブロック状に少量混入する。单層である。

＜壁・底面＞ 深さは2～3cmで断面形は浅皿状を呈する。レベル的に見て南側から北側に緩く傾斜する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。

29区溝跡2号

＜検出状況＞ Ⅱ層を除去した段階で検出した。29区溝3跡号と重複関係にあり、本遺構が新しい。

＜覆土・堆積状況＞ ぶい赤褐色粘土質シルトによる单層である。

＜壁・底面＞ 断面形は鉢状を呈し、深さは10cm程度である。底面はほぼ平坦である。なお29区溝跡3号よ

り本遺構が3~5cm掘り込みが深い。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。西側が擾乱により破壊を受け、明確ではないため溝跡としたが、29区カマド状遺構の煙道部に相当する可能性がある。

29区溝跡3号

＜検出状況＞ II層を除去した段階で検出した。

＜覆土・堆積状況＞ 暗褐色粘土質シルトにより單眉で、酸化鉄の集積が縦方向に線状で入る。

＜壁・底面＞ 断面形は薺研堀状を呈し、深さ18cm程度である。底面は南から北に緩く傾斜する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。

29区カマド状遺構1号

＜検出状況＞ II層上面で暗褐色土の不整な広がりを検出した。

＜平面形・規模＞ 北側が擾乱で破壊されているため全体の形状は不明であるが、楕円形状と溝状の土坑が合わさったような形状が推定される。規模は200×180cm程度と推定される。

＜覆土・堆積状況＞ 上位に暗褐色粘土質シルト（1層）、下位に褐灰色粘土質土主体の酸化鉄を含む土層（2層）が堆積する。自然堆積と判断される。2層は部分的（東壁際付近）に焼成を受けている可能性がある。

＜壁・床面（底面）＞ 断面形は浅鉢状を呈し、深さは4~14cmである。明瞭ではないが、底面は焼成を受けているとと思われる。

＜付属施設＞ 上記したとおり29区溝跡2号が煙道部の可能性がある。

＜出土遺物＞ かわらけ小片が、4号ビニール袋で3袋出土した。

＜時期＞ 不明である。

29区土坑1号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。南側半分は歩道とのノリ部分下位に続く。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形と推定される。開口部径36cm、底部径31cm、深さ19cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は暗褐色粘土質土を主体とし、自然堆積的に捉えられる。

＜壁・底面＞ 断面形は浅皿状を呈し、底面は多少凹凸がある。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。

29区柱穴

＜検出状況＞ II層下位では明瞭ではなく、全てIII層上面まで掘り下げた段階で検出した。

＜平面形・規模＞ 開口部径は20~30cm程度で、深さは10~40cmとばらつきがある。

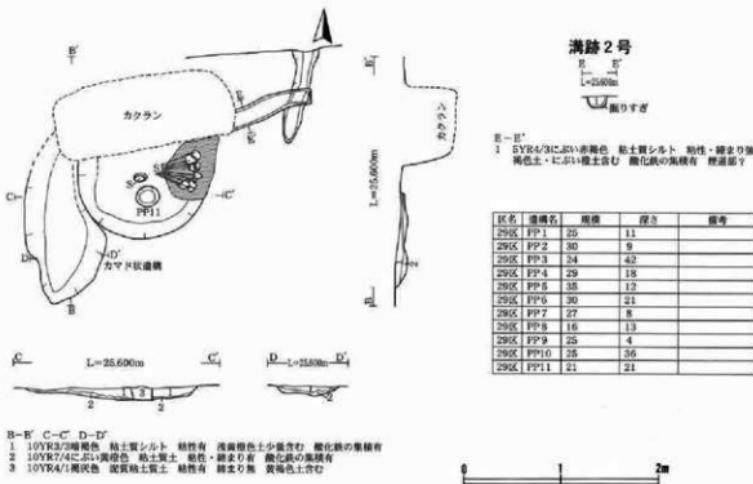
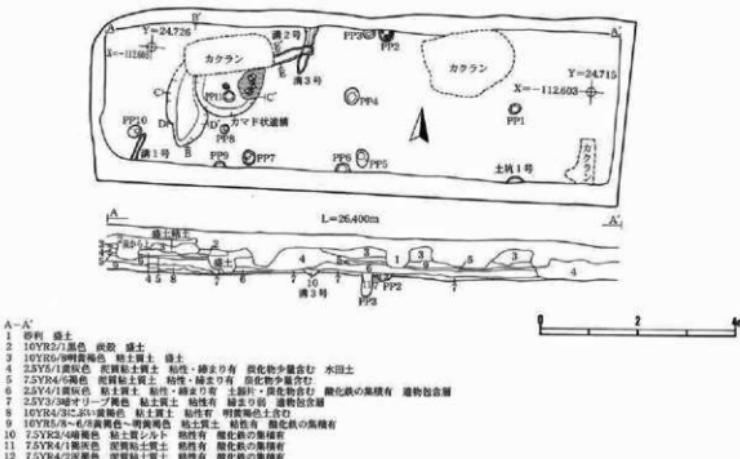
＜覆土・堆積状況＞ 覆土は灰褐色粘土質シルト及び明褐色粘土質土を主体とする。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 覆土は古い様相で、12世紀の可能性が高い。

遺構外の遺物（第55図178、写真図版48） 盛土中よりかわらけ小片1袋と陶器片が2点出土している。  
陶器 常滑、渥美が各1点ずつである。

29区のまとめ 柱穴と29区溝跡1号に12世紀の可能性がある。その他の遺構は、近世以降と推定される。



第20図 29区

また29区の土地利用について、土層観察から以下のことが考えられる。4層と6層が水田土と判断されることから、水田は2時期に造成されていることがわかった。水田造成の時期について、炭カラ層（2層）は地権者の話によると、昭和30～40年頃に鉄道燃料を再利用して盛られたもので、4層の水田土は戦前より古いと思われる。よって5層を挟み6層の水田土は、近代以前の可能性も考えられる。

### 30区（第21図、写真図版14）

位置 国道4号と県道毛越寺線の合流付近に位置する。

検出遺構 溝跡1条、土坑6基、柱穴21基を検出した。

#### 30区溝跡1号

＜検出状況＞ 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。

＜平面形・規模＞ 規模は開口部18cm、底部14cm、深さ6cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は暗褐色～褐色粘土質を主体とする。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。覆土の様相からの判断としては古い様相が窺える。

#### 30区土坑1号

＜検出状況＞ 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径50cm、底部径34cm、深さ18cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐色粘土質シルトと黄褐色土粘土質土による混土（1層）を主体とし、壁間に浅黄色粘土質土（2・3層）が見られる。2・3層は地山（壁）崩壊土と判断される。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ かわらけ小片と陶器片が数点出土した。出土している陶器片は全て常滑である。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

#### 30区土坑2号

＜検出状況＞ 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径65cm、底部径28cm、深さ30cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は上位の明黄褐色粘土質シルトと中位～下位の黄灰色粘土質シルトに区分される。覆土の堆積様相は、明確には判断できなかったが、人為堆積と推定される。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は乳頭状を呈する。底面は丸底気味である。

＜出土遺物＞（第58図193、写真図版51） 陶器1点が出土している。

陶器 濵美産の大甕の肩部が、底面直上で出土している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

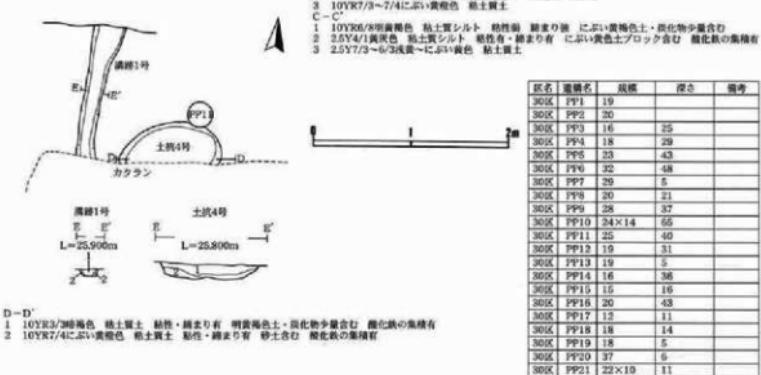
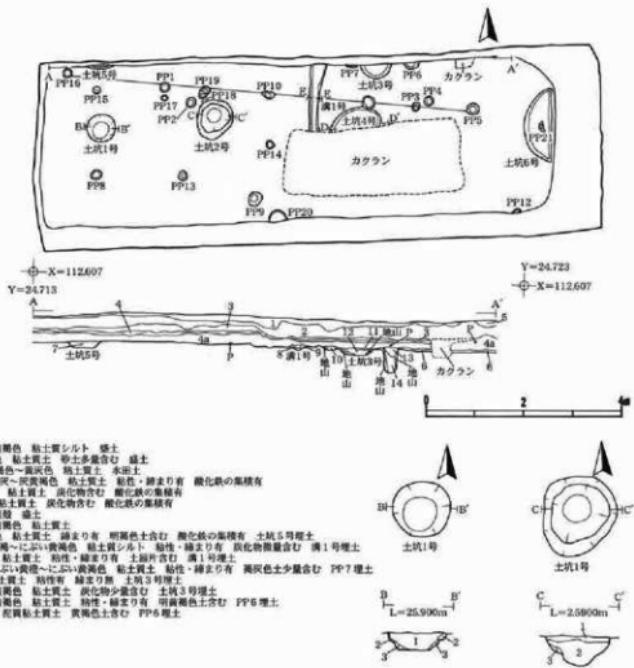
#### 30区土坑3号

＜検出状況＞ 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。北側半分は調査区外である。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径65cm、底部径51cm、深さ15cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土はにぶい黄褐色粘土質土を主体とする。覆土の様相は明確には判断できなかったが、人為堆積の可能性が高い。

- <壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。
- <出土遺物> かわらけ 1点、陶器片 1点が出土している。
- 土器 小形のロクロ成形によるかわらけが 1点出土している。
- 陶器 常滑 1点が出土している。
- <時期> 出土している遺物は12世紀のものである。
- 30区土坑 4号
- <検出状況> 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。
- <平面形・規模> 平面形は橢円形で、規模は開口部径109×60cm、底部径89cm、深さ18cm程度である。
- <覆土・堆積状況> 覆土は上位に暗褐色粘土質土、下位ににぶい黄橙色粘土質土により構成される。
- <壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。
- <出土遺物> 出土遺物はない。
- <時期> 不明である。
- 30区土坑 5号
- <検出状況> 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。
- <平面形・規模> 平面形は円形で、規模は開口部径60cm、底部径37cm、深さ 8 cm程度である。
- <覆土・堆積状況> 覆土は暗褐色～にぶい黄褐色粘土質土による単層である。
- <壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。
- <出土遺物> 出土遺物はない。
- <時期> 不明である。
- 30区土坑 6号
- <検出状況> 遺物包含層下位を除去した段階で検出した。
- <平面形・規模> 平面形は円形で、規模は開口部径152cm、底部径140cm、深さ 7 cm程度である。
- <覆土・堆積状況> 覆土は褐色の単層である。
- <壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。
- <付属施設> 明瞭な掘り込みではないが、底面中央付近で小穴を検出した。
- <出土遺物> 出土遺物はない。
- <時期> 不明である。
- 30区柱穴
- <検出状況> II層（遺物包含層）を除去した段階で検出した。PP16、PP1、PP14、PP10、PP11、PP3、PP5は、ほぼ 2m 間隔で並ぶことから、北側の調査区外に掘立柱建物跡があると推定される。
- <平面形・規模> 平面形、規模、深さともばらつきが多いが、概ね開口部径20cm程度の小形のものが多い。
- <覆土> にぶい黄橙色粘土質土を主体とするものが多い。
- <出土遺物> 出土遺物はない。
- <時期> 明確な時期は不明であるが、II層除去後で検出していることと、覆土の様相から中世以前と考えられる。
- 遺構外の遺物（第58図195～200、写真図版51） かわらけ小片、陶器片数点、また擾乱から現代のものと思われる陶磁器片が出土している。
- 陶器 常滑産、渥美産の他に産地不明の陶器が出土している。



第21図 30区

**30区のまとめ** 本区は遺物包含層が存在し（第21図断面A-A'の4a層）、また同層下位から全般に浅い土坑を検出している。また、上層断面を作成した付近に残存がなく記録を残せなかつたが、粗掘り作業中（重機による）に現代あるいは近代の水田に伴う覆土（表土？）が局所的に見られた。

### 31区（第22図、写真図版15）

**位置** 県道毛越寺線沿いで、「岩手日日新聞平泉支局」東隣に位置する。

**検出遺構** 溝跡5条、土坑2基、柱穴19基を検出した。

#### 31区溝跡1号

<検出状況> III層上面で検出した。西側は33区とのノリ面下位に続く。

<規模> 開口部径・底部径は不明である。深さは8cm程度である。

<覆土・堆積状況> 覆土は褐色上泥質粘土質シルトによる単層で、自然堆積と推定される。

<壁・底面> 断面形は浅皿状を呈する。

<出土遺物>（第58図207、写真図版51） 覆土上位～中位でかわらけ数点と陶器1点が出土している。

かわらけ 大形のロクロ成形によるものと小形の手づくねによるものが出土している。

陶器 淵美産の胴部片が出土している。

<時期> 出土している遺物は12世紀のものである。

#### 31区溝跡2号

<検出状況> III層上面で検出したが、北壁の土層断面（第22図A-A'）を観察した結果、本来は盛土中から掘り込まれていることがわかった。

<規模> 規模は、開口部径26cm、底部径13cm、地山面から深さ18cmである。

<覆土・堆積状況> 覆土は現代の盛土により構成される。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、断面形は鉢状を呈する。底面は丸底気味である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 北壁の上層断面（第22図断面A-A'）から判断すると現代に構築・廃絶された溝であることがわかる。

#### 31区溝3号

<検出状況> III層上面で検出した。本溝跡は、町教育委員会が実施した第40次調査で検出された溝跡の延長部分となる。

<規模> 規模は、開口部径166cm、底部76cm、深さ76cmである。

<覆土・堆積状況> 覆土は7層に細分される。1層は褐色粘土質土を主体とし、遺物はあまり含まない。1a～1f層は灰色の泥質粘土質土を主体で、遺物は主に1a、1b、1c層から出土している。上位の1層は人為堆積と判断できるが、1a～1f層は自然堆積か人為堆積か判断できなかった。覆土の上位ほど酸化鉄の集積が顕著に見られる。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、断面形は鉢状を呈する。精査時は絶えず水が溜まることから排水ポンプを随時稼働しながらの精査なため、底面が平坦かどうかは不明である。本来溝の機能時には、南北何れかの方向に流れていたのかあるいは流れがなかったのかなどの判断はできなかった。

<出土遺物>（第58図208～211、写真図版52） 1a層及び1c層からの出土を主体とする。かわらけ数点、陶器片3点、用途不明の木製品が出土している。

かわらけ 実測可能なものは5点である。小形のロクロ成形かわらけを主体に大小の手づくねかわらけが出土している。

陶器 墓土下位の1c層より渥美彦の胴部片が出土している。

木製品 覆土下位より211が出土した。

<時期> 出土している遺物は12世紀のものである。

#### 31区溝跡4号

<検出状況> III層上面で検出した。明瞭なプランではなかったことから当初は土坑の可能性を想定したものである。東側で重複関係にある31区溝跡3号との新旧関係は明確ではない。根拠は弱いが覆土の状況から本造構が新しいと推測されるが、31区溝3号の東側に本造構の延長が確認できなかったことから、あるいは同時存在の可能性もある。

<平面形・規模> 規模は開口部径112cm、底部49cm、深さ24cm程度である。

<覆土・堆積状況> 褐灰～灰褐色の粘土質シルトを主体とし、酸化鉄の集積が多く見られる。自然堆積と推定される。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。

#### 31区溝5号

<検出状況> III層上面で検出した。PP19との新旧関係は判別できなかった。あるいは柱穴列的な造構の可能性がある。

<平面形・規模> 規模は開口部径28cm、底部径16cm、深さは8cm程度である。

<覆土・堆積状況> 覆土はにぶい黄褐色土を主体とする。堆積状況は人為、自然の判別が把握できなかった。

<壁・底面> 壁は外傾し、断面形は深鉢状を呈する。底面は緩く西側に傾斜する。

<付属施設> PP19が溝中央に位置する。PP12についても明瞭ではないが、本造構に付随する可能性がある。<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。

#### 31区土坑1号

<検出状況> III層で検出した。南側は調査区外に広がる。

<平面形・規模> 平面形は円形と推定される。規模は、開口部径73cm、底部径32cm、深さ13cm程度である。

<覆土・堆積状況> 覆土は褐色粘土質土による単層である。人為堆積と推定される。

<壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。

#### 31区土坑2号

<検出状況> III層上面で検出した。

<平面形・規模> 開口部径101×13cm、底部径89×10cm、深さ10cm程度である。

<覆土・堆積状況> 覆土は、溝跡3号の覆土上位と類似する。自然堆積的様相である。

<壁・底面> 壁は緩く外傾し、断面形はほぼV字状を呈する。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 明確には不明であるが、覆土は古い様相が窺える

31区柱穴

<検出状況> Ⅲ層上面において19基を検出した。

<規模> 開口部径20cm程のものが多い。

<覆土・堆積状況> 覆土は暗褐色土及び褐色粘土質土がほとんどである。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 覆土の状況は古い様相が窺える。

遺構外の遺物（第58図212、写真図版52） 盛土中より小形の手づくねかわらけと涅美陶器片2点が出土した。

31区のまとめ 全般に時期の同定ができなかった造構が多い。隣接する30区で見られた遺物包含層及び水出土は、本区では確認されなかった。

### 33区（第23・24図、写真図版16）

位置 県道毛越寺線沿いで、「まるよし文具店」東隣に位置する。

検出遺構 挖立柱建物跡2棟、柱穴15基を検出した。

33区掘立柱建物跡1号

<検出状況> Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-10° - Eである。

<平面形・規模> 2間×1間の柱穴配列を検出した。建物跡は調査区外に延びる可能性がある。柱穴5個により構成される。柱穴の規模は、開口部径15~28cm、深さ12~38cm程である。間尺は東西方向でPP6とPP11の柱穴間隔が155cm、PP11とPP12の柱穴間隔が155cmである。尚、PP8とPP13の間からは柱穴が検出されなかった。南北方向の間尺でPP12とPP13の柱穴間隔が235cmである。

<覆土> 柱穴の覆土は、灰黄色粘土質土を主体とする。

<出土遺物> 柱穴からの出土遺物はない。

<時期> 明確には不明である。覆土の様相からの判断としては、12世紀と推定される。

33区掘立柱建物跡2号

<検出状況> Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-10° - Eである。

<平面形・規模> 調査区内では1間×1間の柱穴配列を検出した。建物跡は調査区外に延びる可能性がある。柱穴4個により構成される。柱穴の規模は、開口部径28~55cm、深さ18~38cm程である。アタリが把握できたPP7から、柱の直径は15cm程と推定される。間尺は東西方向で210cm、南北方向で210cm程である。<覆土> 柱穴の覆土は、灰黄褐色粘土質土を主体とする。

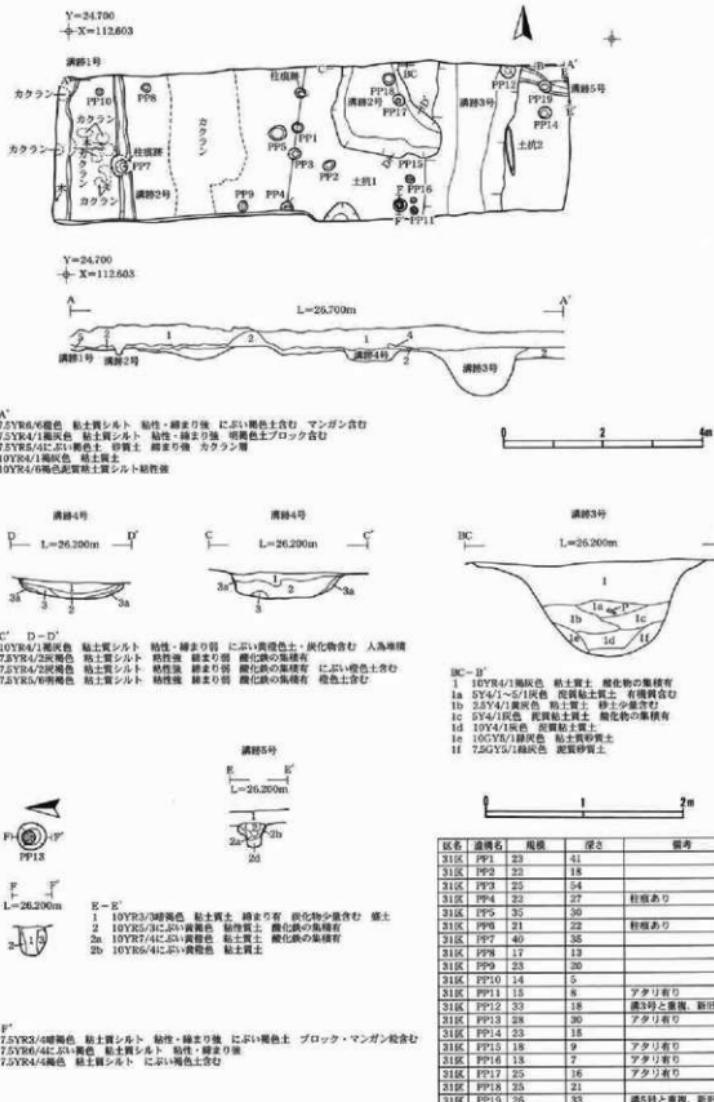
<出土遺物> 柱穴からの出土遺物はない。

<時期> 明確には不明である。覆土の様相から12世紀と推定される。

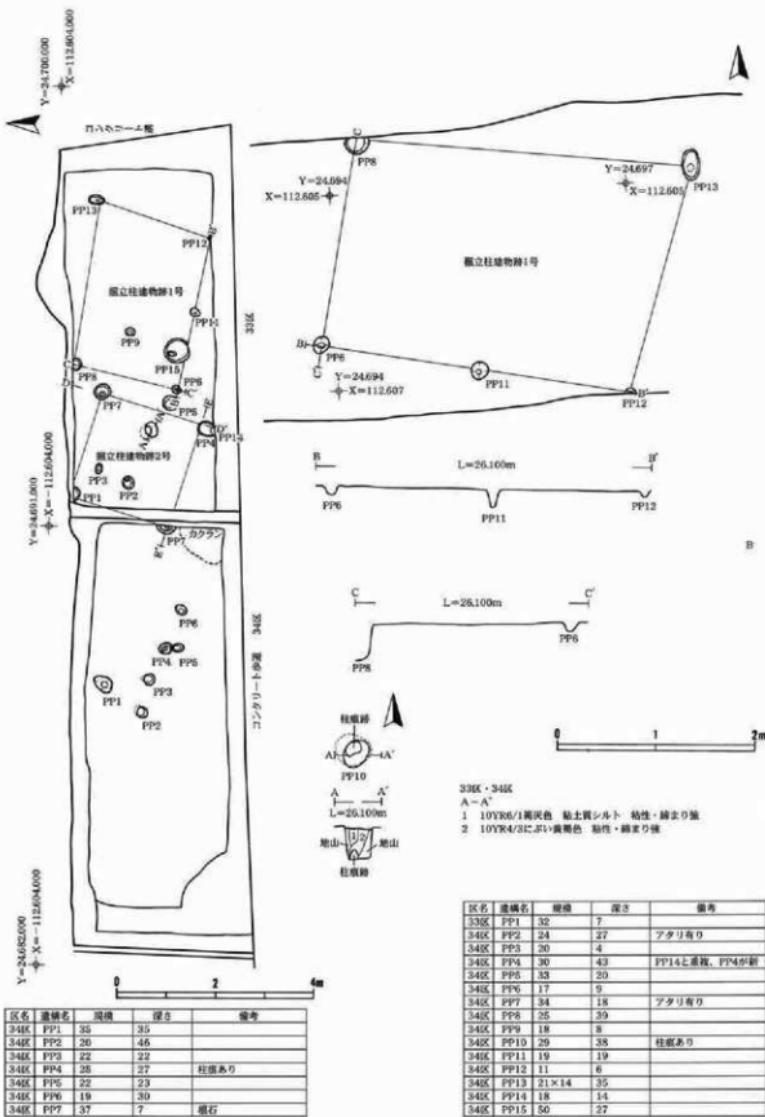
遺構外の遺物（第59図213~215、写真図版52） かわらけ、陶器、陶磁器が少量出土した。

陶器 出自が把握できるのは、常滑窯の1点である。

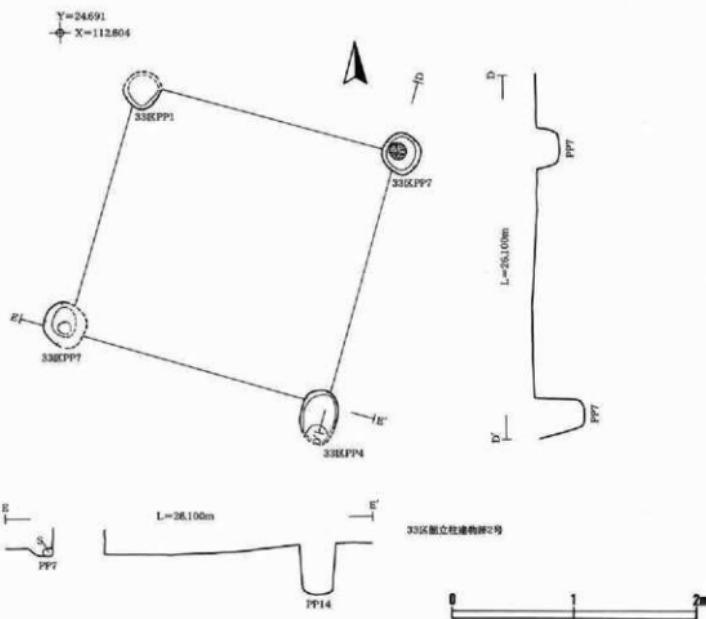
33区のまとめ 12世紀と推定される掘立柱建物跡2棟を検出した。



第22図 31区



第23図 33(1)・34区



第24図 33区(2)

### 34区（第23図、写真図版16）

位置 県道毛越寺線沿いで、「まるよし文具店」前に位置する。

検出遺構 柱穴7基を検出した。

遺構外の遺物（第59図216、写真図版52） Ⅲ層（地山）直上から陶器片が出土している。

陶器 常滑産が出土している。

34区のまとめ 覆土の様相から、柱穴は12世紀と推定される。

### 35・36区（第25・26図、写真図版17）

位置 県道毛越寺線沿いで、「県南タクシー」前に位置する。元白山社参道と思われる道路と隣接する。

検出遺構 挖立柱建物跡1棟、溝跡1条、柱穴18基を検出した。

36区掘立柱建物跡1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-25°-Eである。

＜平面形・規模＞ 調査区内では2間×1間の柱穴配列を検出した。平泉町文化財センターが行った第37次調査区で検出された掘立柱建物跡と柱穴の配列が一致する。

＜覆土＞ 柱穴の覆土は灰褐色土を主体とする。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 明確には不明である。覆土の様相から12世紀と推定される。

36区溝跡1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。軸線方向はN-15°-Eである。平泉町文化財センターが行った第37次調査区で検出された溝跡の延長部分（続き）に相当する。

＜規模＞ 規模は開口部径75cm、底部径27cm、深さ22cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は上位の灰色泥質土と中位～下位の暗緑灰色泥質粘土質土に大別される。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は平坦である。仮に水が流れていしたものであれば、溝が機能時には南北何れかの方向に流れていたのか本調査区検出部分からはわからない。地形的に考えれば、南から北と推定される。

＜出土遺物＞（第59図217・387、写真図版52・61） かわらけ少量、陶磁器片数点、漆器に付着していたと思われる漆の皮膜が出土している。

かわらけ 実測可能と判断される残存率まで復元できたのは、ロクロ成形による大形のかわらけ1点である。

漆器 387は、漆の皮膜と推定される（写真掲載のみ）。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものを主体とする。覆土は古い様相が窺える。

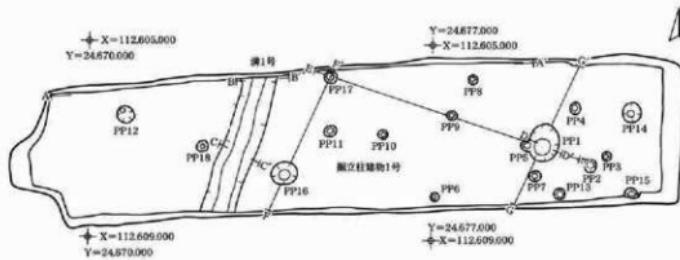
遺構内の遺物（第59図219、写真図版52） 陶器片が1点出土している。

陶器 PP12から古瀬戸の平碗が出土しており、14～15世紀のものと思われる。

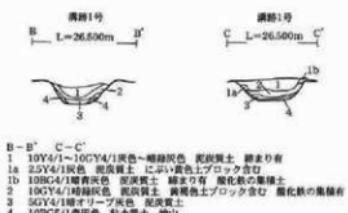
遺構外の遺物（第59図219、写真図版52） 陶器片が1点出土している。

陶器 東北産と思われる陶器片が1点と近～現代の陶磁器数点が出土している。

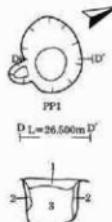
35区・36区のまとめ 本区は白山社に通じる参道の可能性がある古道跡側縁にあたる。よって本区で検出された溝跡は参道の側溝的性格を有する可能性がある。



A - A'  
 1 砂利 土  
 2 10YR8/4に近い黄褐色 粘土質土 黄土  
 3 10YRS/1黄灰色粘土シルト 硫化物含む  
 4 10BG5/1青灰色 粘土質土



B - B' C - C'  
 1 10YV1/1-10GY4/1灰褐色～暗緑灰色 粘土質土 腐泥あり  
 2 10YV4/1暗緑灰色 灰褐色～灰褐色上にロック含む  
 3 10GY4/1暗緑灰色 灰褐色 緑褐色 有機物の堆積土  
 2 10GY4/1暗緑灰色 灰褐色 土塊化土ブロック含む 硫化鉄の集積有  
 3 5GY4/1薄オーラープ灰褐色 暗灰土  
 4 10BG5/1青灰色 粘土質土 地山

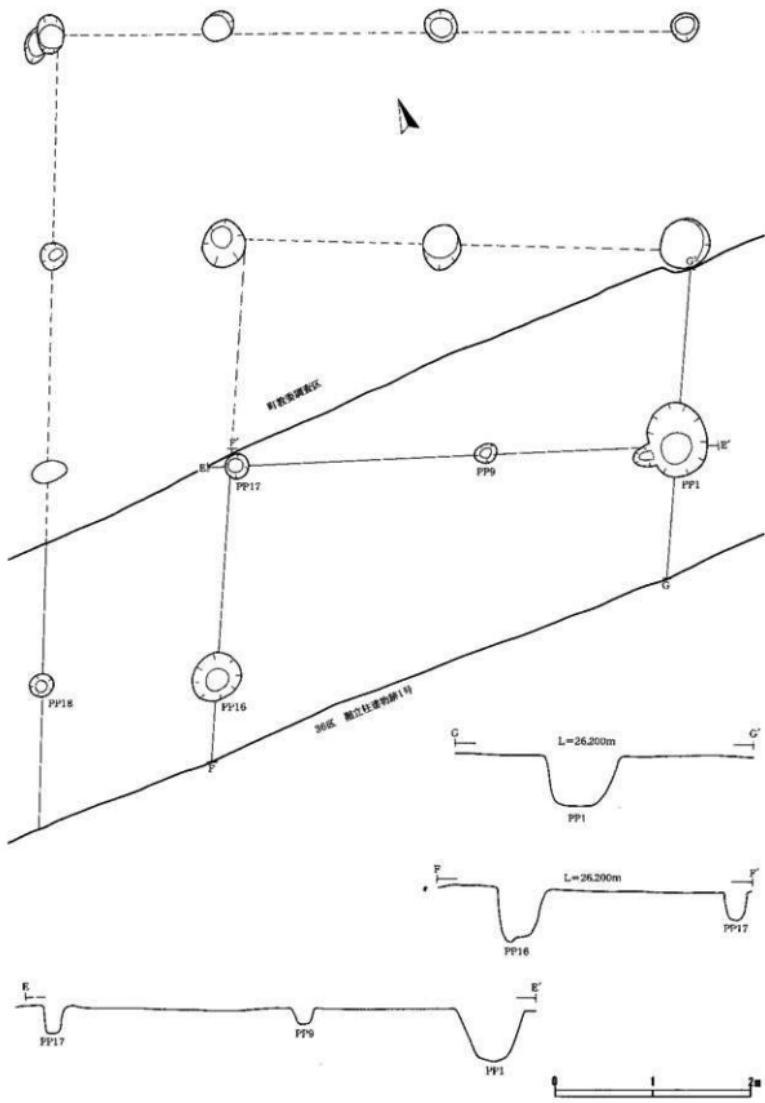


D - D'  
 1 10GY5/1静灰色 暗灰土  
 2 5BG4/1青灰色 穴隙充填土質  
 3 10YR5/1灰褐色 粘土質泥灰土 明黄色土含む 硫化鉄の集積有



区名	測点名	規格	測定	備考
36K	PP1	76×59	52	PP5と重複。PP1が新
36K	PP2	27	27	
36K	PP3	19	16	
36K	PP4	24	19	
36K	PP5	20	24	
36K	PP6	19	18	
36K	PP7	25	14	
36K	PP8	20	14	
36K	PP9	23	17	
36K	PP10	20	21	
36K	PP11	28	9	
36K	PP12	39	38	
36K	PP13	24	47	
36K	PP14	43	34	
36K	PP15	26	16	
36K	PP16	63	63	
36K	PP17	25	29	
36K	PP18	25	16	

第25図 35・36(1)区



第26図 36区 (2)

37区（第27・30図、写真図版18）

位置 県道毛越寺線沿いで、「県南タクシー」西隣に位置する。元白山社参道と思われる道路と隣接する。  
検出遺構 溝跡5条、柱穴26基、木樁1条を検出した。

37区溝跡1号

＜検出状況＞ 盛土を除去した段階で検出した。遺構の長軸方向はN-20°-Eである。

＜規模＞ 開口部径177cm、底部径70cm、深さ92cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 1層は現代の盛土層である。遺構の覆土は2~4層系（第27図B-B'・C-C'）で、9層に細分される。2~3層は人為堆積層で、4層系は自然堆積と推定される。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜付属施設＞ 底面沿いに木樁の残存する部分が確認される。

＜出土遺物＞（第56図187、写真図版51） 近現代と思われる陶磁器片が数点出土した。

陶磁器 産地は特定できないが、近現代の陶磁器片が3点出土した（揭露は1点）。

＜時期＞ 出土遺物や木樁の残存状況から現代のものと推定される。

37区溝跡2号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-125°-Eである。37区溝3号及び溝4号と重複関係にあり、本遺構が最も古く次いで3号、4号の順に古い。

＜規模＞ 開口部径80cm、底部径53cm、深さ14cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 灰色粘土質シルトを主体とする。自然堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁はほぼ直立気味に立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 陶磁器小片が出上した。

＜時期＞ 出土遺物からは明確な時期を判断できない。

37区溝跡3号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-105°-Eである。37区溝2号よりは新しく、37区溝4号よりは古いことが確認できる。

＜規模＞ 開口部径44cm、底部径17cm、深さ16cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 第27図A-A'ラインの6層が本遺構の埋土と判断され、底面付近が残存するのみである。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がりると推定され、底面は短軸方向では丸底気味である。

＜出土遺物＞（第56・60図188・238~245、写真図版51・53） 近世と思われる陶磁器片が数点出土している。

陶磁器 近世と思われるが、産地等は特定できない。

＜時期＞ 不明である。出土遺物と覆土の様相から近世以降の遺構と推定される。

37区溝跡4号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-100°-Eである。

＜規模＞ 本遺構の南壁は調査区外となるため開口部径、底部径とも不明である。深さは17cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 灰色泥質土を主体とする。人為堆積と推定される。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は北壁から推定すると逆台形状を呈すると思われる。底面は短軸では平坦で長軸では東に傾斜する。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。調査区を覆う盛土よりは古い時期のものであることがわかるが、覆土の様相から現代のものと推定される。

#### 37区溝跡5号

<検出状況> III層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-130°-Eである。

<規模> 開口部径32cm、底部径26cm、深さ5cmである。

<覆土・堆積状況> 黒褐色泥質土による単層である。人為堆積と思われる。

<壁・底面> 壁は僅かに立つ。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 明確には不明である。隣接する木樁と同時期の遺構と推定され、近代から現代のものであろう。

#### 37区木樁跡

<検出状況> 盛土を除去した段階で検出した。遺構の長軸方向はN-145°-Eである。

<規模> 開口部径20cm、底部径5cm、深さ14cmである。

<覆土・埋設状況> 第27図E-E'ライン1層が掘り方で2層は地山である。据えられている木材より若干大きめの溝状に掘り、半截された木材が据えられている。

<底面> 幾分丸底気味である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 近代から現代のものと推定される。地元の方のお話では、昭和初期にはなかったとのことから、大正以前と思われる。

#### 遺構内の遺物（第59図220、写真図版52図）

陶器 37区PP1から陶器片が出土した。

遺構外の遺物 近世と思われる陶磁器小片が数点出土した。

37区のまとめ 37区と接する第59次調査区（平泉町教育委員会）からは、12世紀と思われる井戸跡等が検出されているが、本区からは12世紀と思われる遺構は確認されていない。

#### 38区（第28・30図、写真図版19号）

位置 県道毛越寺線沿いで、「千葉知春氏宅」前に位置する。

検出遺構 溝跡1条、土坑3基、カマド状遺構1基、柱穴6基を検出した。

#### 38区溝跡1号

<検出状況> 盛土除去後のIII層上面で検出した。遺構はN-100°-Eに延びた後に、南に直角気味に曲がる。

<規模> 開口部47cm、底部径38cm、深さ10cmである。

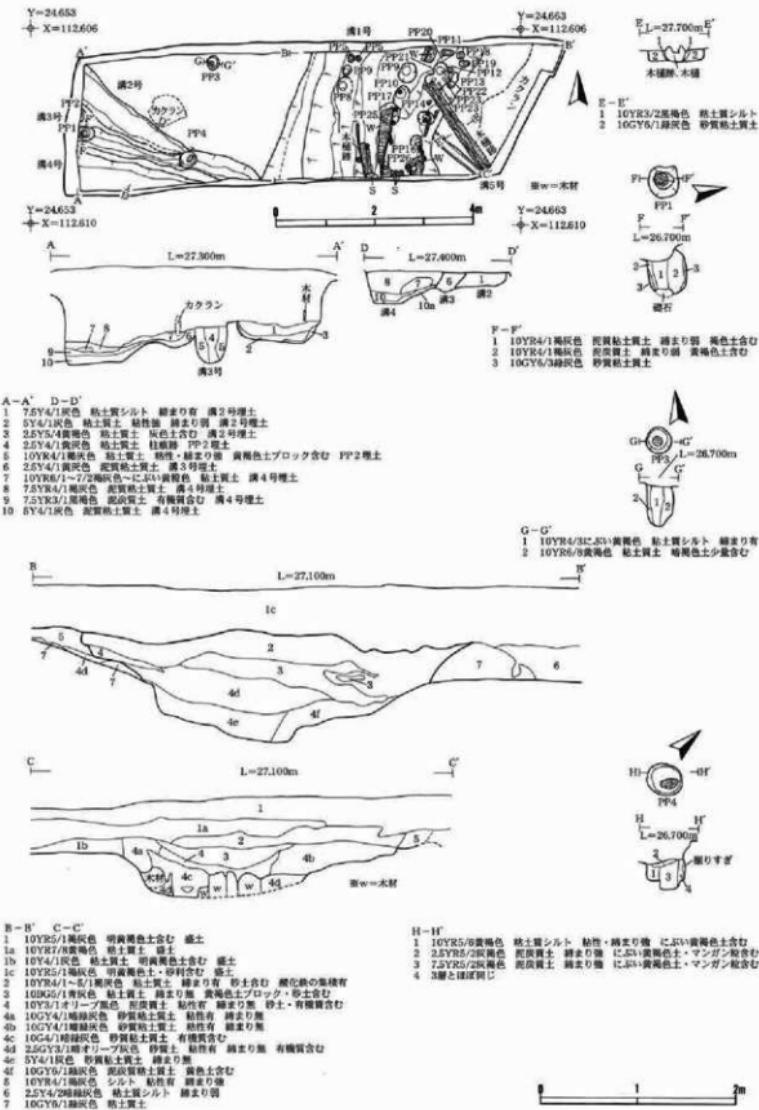
<覆土・堆積状況> オリーブ黒泥炭質土による単層である。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は外傾し、断面形は浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦で、幾分南方向（道路方向）に傾斜する。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 明確には不明であるが、現代の水田用水路と思われる。

#### 38区土坑1号



第27回 37回

<検出状況> III層上面で検出した。

<平面形・規模> 平面形は円形で、規模は開口部径60cm、底部径38cm、深さ10cmである。

<覆土・堆積状況> にぶい黄橙色泥質粘土質土を主体とする。自然堆積的様相である。

<壁・底面> 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。覆土の様相から12世紀の可能性が高い。

### 38区上坑2号

<検出状況> III層上面で検出した。本調査区ではプランの半分が検出され、残りは調査区外に延びる。

<平面形・規模> 平面形は円形と推定できる。規模は開口部径124cm、底部径118cm、深さ47cmである。

<覆土・堆積状況> 明黄褐色粘土質土による単層である。

<壁・底面> 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。覆土の様相から12世紀以降の可能性が高い。

### 38区上坑3号

<検出状況> III層上面で検出した。

<平面形・規模> 開口部径38cm、底部径19cm、深さ15cmである。

<覆土・堆積状況> 褐色粘土質土による単層である。

<壁・底面> 壁は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。覆土の様相から12世紀以降の可能性が高い。

### 38区カマド状遺構

<検出状況> III層上面で検出した。

<平面形・規模> 平面形は楕円形の土坑を2つ重ねたような不整形状で、規模は最大長で開口部径180×57cm、底部径150×32cm、深さ19cmである。

<覆土・堆積状況> 西壁際に焼土が堆積し、また埋土中にも炭化物が多量に含まれる。

<壁・底面> 壁は残存状態の良い西側では外傾に立ち上がる。底面はほぼ平坦気味である。

<付属施設> 中央や西側底面から開口部径10cmの浅い柱穴状土坑を検出した。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 不明である。「高玉遺跡」をはじめ、過去に行われた平泉町遺跡群の調査からは、同様の遺構の検出例が比較的散見される。それらは、中世～近世と推定されているものが多い。

遺構内の遺物 粘土塊1点が出土している。

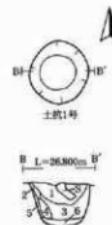
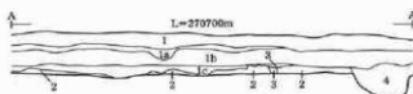
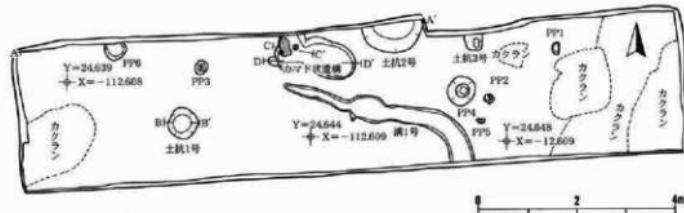
遺構外の遺物（第60・61図246～252、写真図版53） 盛土中から近世と思われる陶磁器小片が数点出土している。

陶磁器 近世と思われるが産地は特定できない。

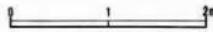
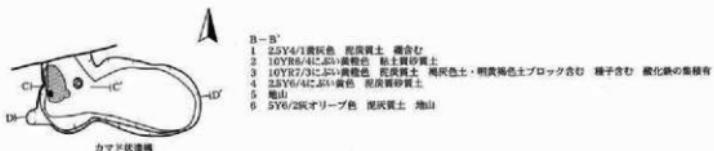
38区のまとめ 12世紀と推定される遺構は検出されず、近世と思われる遺構・遺物を主体とする。

### 39区（第29・30図、写真図版20）

位置 県道毛越寺線沿いで、小料理店「朋」前に位置する。



- A-A'
- 1 10YR4/6褐色 砂質土 粘性・細まり無 土山
  - 1a 10YR2/3(4)明黃褐色 粘土質シルト 粘性・細まり有 土山
  - 1b 10Y7/3(4)淡黃褐色 砂質土 明黃褐色土ブロック含む 土山
  - 1c 8Y3N/2(4)褐色 粘土質土 硬化物含む 硬化鉄の集積有 土山
  - 2 2.5Y6/4にぼり黄色 砂質土質土
  - 3 8Y7/4/1灰褐色 热土質土 粘性強 細まり有 黄褐色、黄褐色土含む 土坑邊縁土
  - 4 10YR6/9明黄褐色 砂質土 オリーブ黒色土含む 土山 2号土堆



第28図 38区

検出遺構 溝跡 2 条、井戸跡 1 基、柱穴 3 基を検出した。

#### 39区溝跡 1 号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。遺構の長軸方向は、N-100°-Eである。

＜規模＞ 開口部径 170cm、底部径 60cm、深さ 22cm 程である。

＜覆土・堆積状況＞ 灰褐色粘土質シルトによる単層である。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。ただし、壁上部は削平を受けている可能性が高い。底面はやや丸底気味である。

＜出土遺物＞ (第62図252・253・388、写真図版53・61) 陶器小破片と石製品が出土している。

陶器 常滑産の陶器小破片が出土している。

陶磁器 近世と思われる陶磁器片が数点出土している。

石製品 388は碁石と思われる (写真掲載のみ)。

＜時期＞ 明確には不明である。出土遺物と覆土の様相から新しい時代のものと思われる。

#### 39区溝跡 2 号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。遺構の長軸方向は、N-10°-Eである。

＜規模＞ 開口部径 50cm、底部径 15cm、深さ 15cm 程である。

＜覆土・堆積状況＞ オリーブ灰色粘土質シルトによる単層である。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はやや丸底気味である。

＜出土遺物＞ 近世と思われる陶磁器片が数点出土している。

＜時期＞ 明確には不明である。出土遺物と覆土の様相から新しい時代のものと思われる。

#### 39区井戸跡 1 号

＜検出状況＞ III層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 開口部径 180cm、底部径 112cm、深さ 185cm 程である。

＜覆土・堆積状況＞ 9 層に細分される。覆土上位の 1~4 層は人為堆積と思われる。中位の 5~8 層は自然堆積的様相であるが明確ではない。下位の 9 層は人為堆積層と捉えられる。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 近世陶磁器が数点出土している。

＜時期＞ 出土遺物から近世以降と推定される。また、覆土の様相や遺構の断面形等も新しい様相が窺える。

遺構外の遺物 近現代の陶磁器片が少量出土した。12世紀の遺物は出土していない。

39区のまとめ 本区からは12世紀の遺構が希薄であったが、近世以降の生活跡の一端が確認された。

#### 42区 (第30図、写真図版21)

位置 県道毛越寺線沿いで、小料理屋「朋」の西隣に位置する。

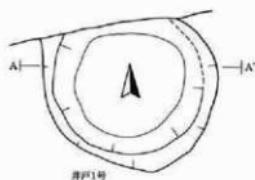
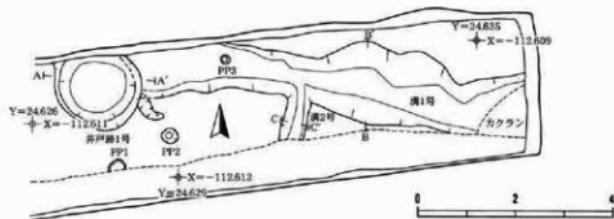
検出遺構 井戸跡 1 基、柱穴 5 基を検出した。

#### 42区井戸跡 1 号

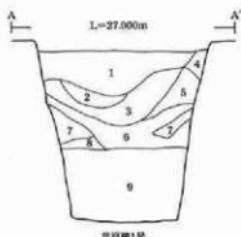
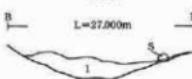
＜検出状況＞ III層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形で、規模は開口部径 310cm、底部径 86cm、深さ 173cm 程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土上位に黒褐色泥炭土、覆土下位に浅黄～灰色粘土質土が堆積する。土層断面の觀察からは自然堆積か人為堆積かの判別は困難である。尚、覆土上位、下位いずれからも同様の遺物（手づく



卷之三



B-B' 1 10YR4/1褐色 地土質シルト 絶性・鹽まり有 オリーブ灰土ブロック  
炭化物含む 炭化鉄の集積有

標題 29



C-C' 1 10YY6/2オリーブ灰色 砂質粘土質シルト 緑灰色土・青灰色土ブロック含む

100

- | A-A'                          | B-B'                                |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| 1 10YR/1 紫褐色<br>7 5YR/1 紫褐色   | 土質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 2 10YR/1 灰色<br>7 5YR/1 灰色     | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 3 10YR/1 灰色<br>7 5YR/1 灰色     | オーリーブ色土層上<br>オーリーブ色土層上<br>オーリーブ色土層上 |
| 4 2.5YT/1 黄褐色<br>7 5YR/1 麻斑褐色 | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 5 10YR/1 紫褐色<br>7 5YR/1 紫褐色   | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 6 10YR/1 紫褐色<br>7 5YR/1 紫褐色   | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 7 10YR/1 紫褐色<br>7 5YR/1 紫褐色   | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 8 10YR/1 紫褐色<br>7 5YR/1 紫褐色   | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |
| 9 10YR/1 紫褐色<br>7 5YR/1 紫褐色   | 底質上層<br>底質上層<br>底質上層                |

ねかわらけ片)が出土していることから、短い時間差の中で堆積された覆土である可能性が高い(人為堆積?)。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉(第59・62図222・223、255~262、写真図版52・53) 手づくねかわらけ小片が4号ビニール2袋分と陶器数点と陶磁器片7点が出上している。

かわらけ 手づくねの大形とロクロ成形による小形のかわらけが確認された。

陶器 濡美産の鉢と常滑産の鉢が出土している。

陶磁器 覆土中位より12世紀と思われる中国産白磁四耳壺2点と不明1点が出土している。また、覆土上位より15世紀と思われる瀬戸産1点、16世紀と思われる美濃産2点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から12世紀~中世までの時期幅で捉えられる。

遺構外の遺物 遺構外からの出土遺物はない。

42区のまとめ 本区から検出された井戸跡、柱穴は、出土遺物や覆土の様相から12世紀の遺構と推定される。尚、検出された柱穴5基では建物跡の復元はできなかった。

#### 43区(第31・32図、写真図版22)

位置 県道毛越寺線沿いで、スナック「ニューキング」前に位置する。

検出遺構 井戸跡1基、溝跡3条を検出した。

#### 43区溝跡1号

〈検出状況〉 現地表面から60~80cmほどの砂利盛土(第31図B-B'ライン1層)が堆積し、その下位に鉄道燃料の津(昭和20~40年頃に盛土として再利用された炭滓で、地元の方には炭からと呼ばれている)が20cm~60cm程堆積し、それらを除去した段階で緑灰色粘土質土(2、4層)の広がりを検出し、溝跡と断定した。検出面はⅢ層上面となる。

本区で検出された溝跡3条の存在は、土層断面の観察から把握できたものである。溝跡1号、2号、3号の新旧関係は、真ん中の2号が一番新しいことがわかるが、1号と3号の新旧関係は本区では掴めなかった。遺構の長軸方向はN-0°-Eで、正方位を示す。

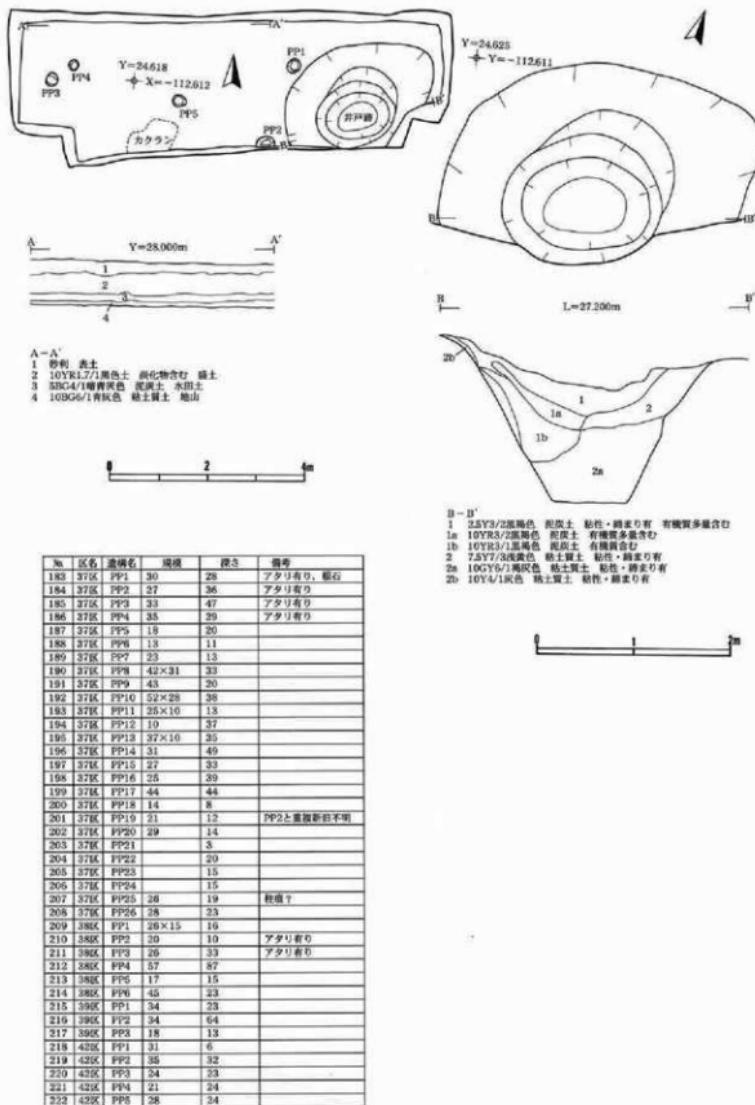
〈規模〉 開口部径は不明、底部径20cm、深さは検出面から180cm、現地表面から244cm程である。

〈覆土・堆積状況〉 第31図に掲載した43区の溝跡断面(B-B')は39層に区分した(土質による更なる細分は可能であるが、大別的に概観した)。その中で1号溝跡の覆土と判別ができるのは3層系で、暗緑灰色泥質粘土質土を主体とする。堆積状況は自然堆積的様相で捉えられる。ただし、水年の時間の中で埋没したものではなく、溝の改築などに伴い堆積した土壤が、自然堆積化したものと思われる。

〈壁・底面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は逆台形に近い。底面は南北方向においてほぼ平坦である。本調査区の幅が狭いことにも起因するが、水が流れていったと仮定した場合、北流か南流かについては、上記のとおり南北方向でレベル差がないため判断できない。本区の北側(第31次平泉町教育委員会)や道路を挟んで対応関係にある9区、及び第57次調査結果を踏まえて検討する必要がある。

〈出土遺物〉(第59・62・64・65図224・231・263・264・271~273・279・281、写真図版52~55) かわらけ片、陶器、中国産輸入陶磁器、墓石、木製品、古鏡が出土している。

かわらけ 4号ビニール1袋分のかわらけ片が出土している。手づくねがほとんどで、復元されたものはない。



第30図 42区

陶器 器種はわからないが、渥美産の陶器片が覆土上位を中心に数点出土している。

陶磁器 白磁碗の胸部下半の破片が1点出土している。12世紀後半のものと思われる。

石製品 墓石と思われる。サンスクリット語でキリーカと読む梵字が刻印されている。

木製品 連衡下駄 曲物の破片?、器種不明の部材等が出土している。

古銭 永楽通寶(明、1408年)が6枚出土している。

<時期> 12世紀のかわらけも相当量出土しているが、近世と推定される墓石が出土していることを加味すると、廃絶時期は近世以降の可能性が高い。構築時期について出土遺物から推定すると、上限は12世紀で、下限は近世までの可能性がある。覆土の様相からは古い時代の溝跡と捉えている。

43区溝跡2号

<検出状況> 溝跡1号同様にⅢ層上面で検出した。土層断面の観察から重複する溝跡1号及び3号より本造構が新しいことがわかる。造構の長軸方向はN-5°-Eである。

<規模> 開口部径255cm、底部径60cm、深さは検出面から170cm、現地表面から240cm程である。

<覆土・堆積状況> 本造構の覆土と判別できるのは、第31回溝跡断面(B-B')2層系(2~21)である。暗緑灰~暗青灰色泥質土を主体とし、所々に砂質土の混入が見られる。上位は人為堆積、下位は自然堆積の様相で捉えられるが、明確には断定できない。最上位に堆積する2・2a層については、明確な判断ができなかったが、本造構とは別の溝跡(新設若しくは改修)に伴う覆土の可能性も考えられる。状況から考えて、短い時間幅の中で埋まったものと想定されることから、溝の改修的な作業が行われ、その時分に発生した堆積土(旧溝に溜まつた土、整地土、壁の崩壊土などが考えられる)により構成されている可能性が考えられる。また、砂の混入具合から判断して、埋没時(あるいは整地時)若しくは埋没過程の時期には、若干量の水を蓄えていた可能性が考えられる。混入されている砂の堆積様相は、層を成して水平気味に堆積しているわけではなく、小ブロック的にレンズ状を形成するように堆積している。推測の域を越えるものではないが、主たる堆積土壤が泥質であることを考慮すると、常時水を含有するような環境であった可能性は高い。ただし、ある程度の水量が常時脈々と存在(供給があり)した上で、流れを成していた溝とは思われない。おそらくは雨天や地下水などに起因する水脈と思われる。

<壁・底面> 壁は外反気味に立ち上がり、壁の途中から外傾気味に立ち上がる。断面形は本来、逆台形状であった可能性が高い。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> (第59・62・64・65回225~229・232・233・264~270・274・275・277・278・280・282、写真図版52・54・55) かわらけ片5袋分以上、漆器碗、陶器、陶磁器、古銭が出土している。

かわらけ 覆土上位約2袋分、覆土下位3袋分の出土であるが、手づくねかわらけがほとんどで、上下層での相違は見受けられない。

陶器 常滑産と渥美産の小破片が十数点出土している。

陶磁器 中国産白磁四耳壺の破片1点、16世紀末~17世紀初頭の樟州窯1点、16世紀と思われる唐津産2点が出土している。白磁は覆土上位から、その他は覆土中~下位で出土している。

木製品 用途不明の部材が出土している。

漆器 漆器碗片が出土している。384は内面に赤漆、外面に黒漆に赤漆で文様が描かれる。

古銭 永楽通寶(明、1408年)が1枚出土している。

<時期> 明確には不明である。溝跡1号及び溝跡3号より新しいことはわかる。推測の域を越えないが、43区溝跡1号との時期差は、大きく隔るものではないと思われることから、近世に廃絶された可能性を

示唆する。ただし、状況から溝として機能していた時期については、43区溝跡1・3号より新しい時期であることから近世～現代までの時期幅で捉えられる。現代遺物の出土量が比較的少なかったことから、時期の下限は近代ではないかと推定しておく。

#### 43区溝跡3号

＜検出状況＞ 43区溝跡1号同様にⅢ層上面で検出した。土層断面の観察から重複する溝跡2号より本遺構が古いことがわかる。3条の中で最も大形の溝跡である。道構の長軸方向はN-15°-Eである。

＜規模＞ 開口部径不明、底部径100cm、深さは検出面から195cm、現地表面から290cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 本遺構の覆土と判別できるのは、第31回溝跡断面(B-B')4層系である。灰黄褐色泥質砂質土を主体とし、所々に暗緑灰色泥質粘土質土が層状に入る。砂質土の含有率の割合が、43区溝跡1・2号より多いことから、水が蓄えられていた可能性が考えられる。その場合、當時水があったかどうかといった検討課題が残る。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ (第59・64・65回234～237・276・283～288、写真図版52・54・55) かわらけ小破片、陶器、陶磁器、瓦が出土している。溝跡1・2号に較べ、遺物量は少ない。

かわらけ 内折れが1点出土している。

陶器 常滑産と東北産が数点出土している。東北産は、13～14世紀と推定される。

陶磁器 美濃産の陶磁器片が数点出土している。

瓦 近現代と思われる軒平瓦片が出土した(不掲載)。

＜時期＞ 溝跡2号より古いことは明確であるが、溝跡1号との新旧関係は不明である。出土している陶磁器片は近世と推定されるものであることから、廃絶時期は近世と思われる。構築時期あるいは溝として機能していた時期については、厳密には不明である。12世紀の遺物が少量混入されることから、時期の上限は12世紀で下限は近世と推定される。

#### 43区井戸跡1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。第31次調査(平泉町教育委員会)で、プランの半分を検出しており、当初からその存在は認識されていたものである。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径365cm、底部径265cm、深さ270cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 14層に細分される。緑灰～青灰色粘土質土を主体とする。自然堆積の様相であるが、覆土は地山土を主体とすることから、埋め戻されたもの(人為堆積)と思われる。

＜壁・底面＞ 壁は東側は外傾気味に、西側は直立気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

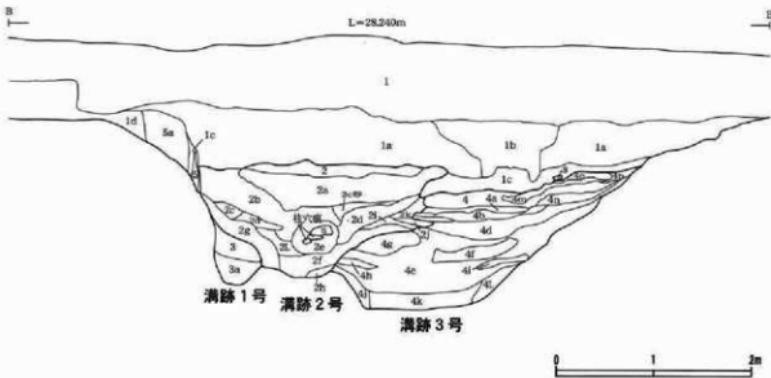
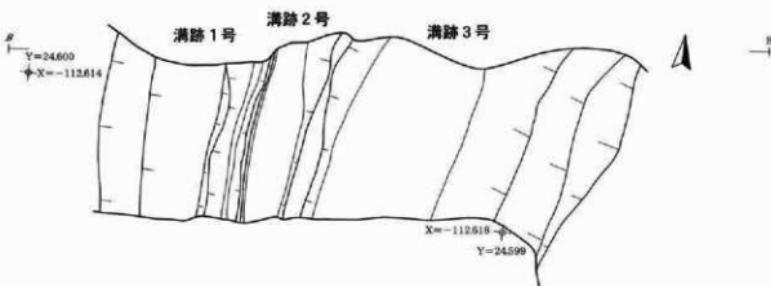
＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 出土遺物がないため明確には不明である。覆土は古い様相が窺えることから12世紀と思われる。遺構外の遺物 遺構外出土遺物はない。

43区のまとめ 溝跡、井戸跡とも過去の調査結果(平泉町教育委員会)より、検出が予想されたものである。溝跡は、区画溝的な性格の可能性が高いもので、構築時期や水が流れていたかの有無等今後に検討課題を残す。

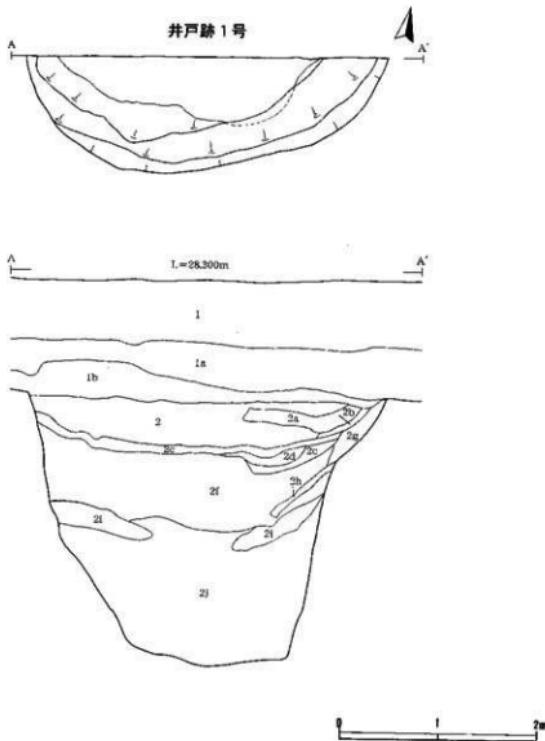
#### 44区(第33回、写真図版23)

位置 県道毛越寺線沿いで、「東北銀行平泉支店」前に位置する。



1. 植物	植土	3a 10GY3/1暗緑灰色	泥質土	縫まり無
1a	10YR2/1黒色	4 2.0YS/5黄褐色	砂質粘土質土	
1b	10YR6/9暗褐色～にい黄褐色	4a 10YR5/2深黃褐色	砂質粘土質土	
1c	10YR7/9暗褐色	4b 10GY2/1-3/1褐色～暗褐色	泥質土	縫まり無 有機質含む
1d	10YR7/9暗褐色	4c 7.5GY4/4暗褐色	砂質粘土質土	
2	10GY3/1暗灰色	4d 10GY4/1-2/1褐色～暗褐色	泥質土	縫まり無 有機質含む
2a	7.5GY6/1暗灰色	4e 10YR4/2暗褐色	砂質粘土質土	
2b	7.5GY5/1暗褐色	4f 110GY7/1明暗灰色	泥質粘土質土	縫まり弱
2c	7.5GY7/1暗褐色	4g 10RG4/1暗褐色	砂質粘土質土	綠灰色土・砂土含む
2d	7.5GY7/1暗褐色	4h 10GY4/2暗褐色	泥質土	縫まり弱
2e	7.5GY3/1暗褐色	4i 10G4/1暗褐色	泥質土	縫まり強
2f	7.5GY3/1暗褐色	4j 10DG5/1-4/1灰青～暗青灰色	泥質粘土質土	縫まり無
2g	10BG2/2暗褐色	4k 10BG5/1-4/1灰青～暗青灰色	泥質砂質土	縫まり無
2h	10GY4/1暗褐色	4l 10YR4/1-3/1褐色	砂質土	
2i	10GY4/1暗褐色	4m 10YR4/1-3/1褐色	砂質土	
2j	10BG3/1暗褐色	4n 2.5Y5/1暗灰色	砂質土	縫まり有
2k	10GY3/1-7.5GY1/暗褐色	4o 2.5Y4/1暗灰色	泥質土	
2l	2.5Y4/1-7.5GY4/1暗オリーブ色	5 10GY4/1暗綠灰色	泥質粘土質土	
2m	10GY4/1暗綠灰色	5a 10GY4/1暗綠灰色	砂質粘土質土	

第31図 43区(1)



43区

- A-A'
- 1 土質 灰土
- 1a 10Y7/2/1灰色 黄褐色・褐色含む 粘土
  - 1b 10Y7/4/2灰黄褐色 粘土質土 黄褐色土含む 粘土
  - 2 5Y6/3/7地オーリーブ黄色 粘土質土 黄褐色土+ 黑色土・粘土含む 鹽化鉄の検出
  - 2a 6Y7/1/-4/1 黄+オーリーブ色 黄褐色 粘土質土
  - 2b 10Y5/3/1灰色 黄褐色 粘土質土
  - 2c 10Y5/3/灰黑色 黄土質土 粘土質土
  - 2d 5Gy4/7地オーリーブ灰土 粘土質土 粘性土
  - 2e 10Y5/1灰土 粘土質砂質土
  - 2f 10Y5/1~6/1灰色 黄土質土 粘土含む
  - 2g 10Y5/1~5/1灰褐色 黄土質土 粘土質土 含少量含む
  - 2h 10Gy5/1鉛灰土 黄土質砂質土
  - 2i 5BG5/1~5/1青灰色 砂質粘土質土
  - 2j 10BG6/1青灰色 粘土質土 砂土含む

第32図 43区 (2)

検出遺構 溝跡3条、柱穴30基を検出した。

#### 44区溝跡1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-85°-Eである。

＜規模＞ 開口部径70cm、底部径50cm、深さ10cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 黄灰色粘土質シルトを主体とし、灰白色ブロックと炭化物を若干含む。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ (第66・67図289~296・298・299・307、写真図版56・57) 覆土上位の1層を主体にかわらけ、陶器、陶磁器が出土している。

かわらけ 手づくねかわらけ大・小形とロクロ成形による小形かわらけが合わせて10点程出土している。

陶器 知多半島産と思われる陶器片が1点出土している(不掲載)。

陶磁器 中国産の白磁碗が1点出土している。

＜時期＞ 出土遺物は全て12世紀のもので、他時期遺物の混在がないことと覆土も古い様相を示すことから、12世紀のものと推定される。

#### 44区溝跡2号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-20°-Eである。

＜規模＞ 開口部径125cm、底部径65cm、深さ28cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 黄灰色粘土質シルトを主体とする。再下位に堆積する4層は砂質土を含み酸化鉄が見られることから、水が蓄えられたり引いたりといった現象があったことが示唆させる。全体に自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ (第67図306・308、写真図版57) 4号ビニール1袋分のかわらけ小破片と陶器片数点が出土した。陶器片は、常滑産と唐津産が出土している。

陶磁器 12世紀後半と思われる中国産の白磁碗1点と不明1点が出土している。

＜時期＞ 明確ではないが、12世紀と推定される。

#### 44区溝跡3号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-95°-Eである。

＜規模＞ 開口部径34cm、底部径20cm、深さ4cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 灰褐色粘土質土による単層である。

＜壁・底面＞ 壁は僅かに立ち上がりが確認できる。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。覆土は古い様相が窺える。

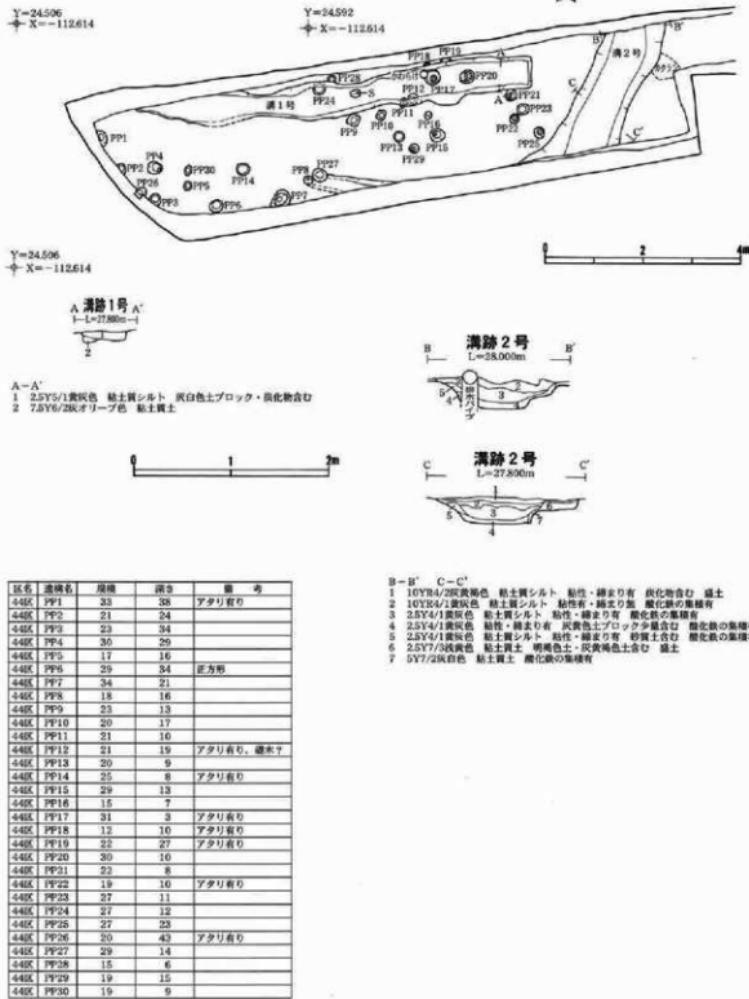
遺構内の遺物 (第66図297、写真図版56)

かわらけ 44区PP28からロクロ成形の小形かわらけが出土している。

遺構外の遺物 (第66・67図300・309・310、写真図版56・57) かわらけと12世紀と推定される陶器・陶磁器小片が出土している。

かわらけ 地山直上より手づくねの小形かわらけが出土している。

陶器 地山直上より産地不明の陶器小破片が数点出土している。



第33図 44区

陶磁器 産地は特定できない

44区のまとめ 検出された溝跡・柱穴は、出土遺物及び覆土の様相から12世紀と推定される遺構である。10m程西の45区からは中世以降と思われる柱穴が多数検出されており、近接地ではあるが時代により生活区域に相違が感じられる。

#### 45区（第34・35図、写真図版24）

位置 県道毛越寺線沿いで、「東北銀行平泉支店」西隣に位置する。

検出遺構 柱穴57基を検出した。

##### 45区柱穴

<位置・検出状況> 45区全域から柱穴を検出した。全ての柱穴が、盛土除去後のⅢ層（地山）面で検出した。

<出土遺物>（第66図301～305、写真図版57） 柱穴からは全般に遺物出土が希少で、また出土したかわらけも実測不可能な小片がほとんどである。

かわらけ PP41出土の小形の手づくねかわらけ1点を掲載した。その他としては、PP15から手づくねの小形かわらけの小片（不掲載）が出土している。

陶磁器 PP18から中国産の四耳壺の胴部片が出土している。

礎板・柱痕 PP9には柱材が残存していた。PP23とPP30からは礎板が残存していた。

<時期> 出土している遺物は12世紀のものであるが、検出された柱穴の覆土は全て灰褐色～黒褐色の粘土質シルトで、中世あるいは近世の可能性が高い。

遺構外の遺物（第67図311、写真図版57） 盛土中からかわらけ5袋分、陶器3点、中国産磁器1点が出土した。

陶磁器 12世紀と推定される中国産青磁碗1点が出土している。

45区のまとめ 検出された遺構全てが柱穴であり、ほとんどの覆土は黒褐色土を主体とする。また、礎板及び礎石を伴うものも検出されている。本区より西側の調査区からは類似する様相の柱穴は検出されていない。また東側においても100m程離れた5・6区で類似する柱穴が検出されるのみで、隣接する44区からは上記の特徴を有する柱穴は検出されていない。第47次調査区の46区の調査成果を含め中世以降になんらかの建物跡が存在した可能性を示唆するが、今回の調査区は断片的な範囲に過ぎないため、推測の域を越えない。

#### 48区（第36図）

位置 県道毛越寺線沿いで、「鈴木雅之氏宅」前に位置する。

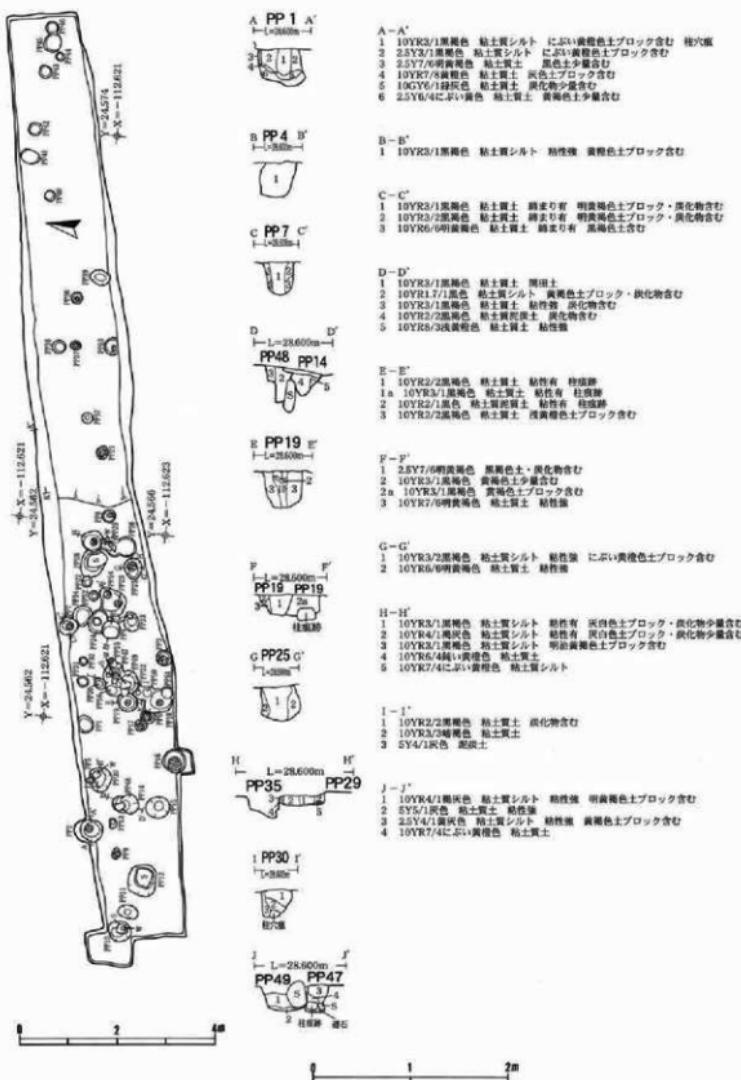
検出遺構 遺構は検出されていない。

遺構外の遺物 現代の瓦片が土坑状の穴から出土した。

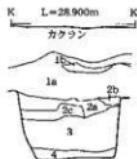
48区のまとめ 現代の瓦片以外の出土遺物はない。47次調査13区で確認された南北に延びる溝跡は本区の若干東側にある水路跡の下に存在すると思われる。

#### 49区（第36図、写真図版25）

位置 県道毛越寺線沿いで、「須田英雄氏宅」前に位置する。



第34図 45区(1)



K - K'

- 1a 10YR8/1 黄褐色 粘土質シルト 塗壁性土含む  
 1b 10YR7/1 黄褐色 粘土質シルト 塗壁性土含む  
 2a 10YR6/2Mオーブ色 粘土質土 含む  
 2b 10Y6/2灰オーブ色 砂質土 布筋褐色土含む  
 2c 10GY8/1 褐色 粘土質土 含む  
 3 STG64オーブ色 黄褐色 砂質土 含む  
 4 10CY7/1 鳥糞灰色 砂質土 布筋褐色土含む

区名	測定名	厚さ	備考
45区	PP1	35	11
45区	PP2	45	39 アタリ有り
45区	PP3	30	81 アタリ有り
45区	PP4	31	37 PP24と重複、PP4が新
45区	PP5	16	17
45区	PP6	28	7 アタリ有り
45区	PP7	36	36 アタリ有り
45区	PP8	24	13 アタリ有り
45区	PP9	20	29 アタリ有り、磚板？
45区	PP10	48×50	17 磚石？及び磚板？
45区	PP11	40×27	15
45区	PP12	64×35	23 塗石
45区	PP13	21	8
45区	PP14	29	22 PP18と重複、新田不明、塗石
45区	PP15	53	12
45区	PP16	48	15 アタリ有り
45区	PP17	22	7 アタリ有り
45区	PP18	42	23 アタリ有り
45区	PP19	40	39 アタリ有り
45区	PP20	22	7
45区	PP21	26	17 アタリ有り
45区	PP22	26	14
45区	PP23	50×50	27 PP21, PP21に重複、PP23が新、アタリ有り
45区	PP24	29	7 アタリ有り
45区	PP25	43×37	37 磚板、アタリ有り
45区	PP26	39	12
45区	PP27	21	11
45区	PP28	60×47	32 PP25と重複、PP28が新、塗石
45区	PP29	38	漆板
45区	PP30	50	31 漆板
45区	PP31	21	21
45区	PP32	15	21
45区	PP33	40×28	18 磚板、塗石
45区	PP34	42×35	21
45区	PP35	45	25 アタリ有り
45区	PP36	29	17
45区	PP37	19	13 アタリ有り
45区	PP38	22	18 アタリ有り
45区	PP39	41×32	9
45区	PP40	21	11
45区	PP41	40×30	24
45区	PP42	26	13 塗石
45区	PP43	25	12
45区	PP44	17	20
45区	PP45	38	27
45区	PP46	22	15
45区	PP47	39	36 塗板
45区	PP48	12	36 PP14と重複、新田不明
45区	PP49	45	24 塗石
45区	PP50	23	10
45区	PP51	25	7
45区	PP52	19	22
45区	PP53	25	17 アタリ有り
45区	PP54	15	14 塗板
45区	PP55	17	2
45区	PP56	26	28
45区	PP57	21	6 アタリ有り

区名	測定名	厚さ	底	備考
45区	PP1	50	38	
45区	PP2	42	44	
45区	PP3	39	23	
45区	PP4	35	13	
45区	PP5	25	20	
45区	PP6	25	21	

第35図 45区 (2)

検出遺構 溝跡4条、土坑4基、柱穴6基を検出した。

#### 49区溝跡1号

＜位置・検出状況＞ I d 層下面～Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-0°-Eである。第22次調査(1993年平泉町教育委員会調査)で検出された1号溝と対応する。

＜規模＞ 規模は開口部径80～154cm、底部径65～80cm、深さ15～30cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は8層に細分される。主覆土は、褐灰～黄褐色粘土質シルト及び粘土質土である。最下層は灰色泥質粘土質土である。2・2a・4・5・6層は自然堆積の様相で、3層は人為堆積層(整地層)と思われる。2層と2a層は類似性が強い土質で、3層を挟んで上下にわかれる。観察所見どおり3層人が為堆積で相違なければ、本溝跡としたものは上下2時期存在する可能性がある。

＜壁・床面(底面)＞ 断面形は逆台形状を呈する。

＜出土遺物＞ 近世以降と思われる陶磁器片が2点出土した。

＜時期＞ 出土している遺物からは、近世以降と思われる。仮に2時期の変遷が存在するなら、1時期の溝(2a～6層を覆土とする溝)が、近世以前に改修され、2時期目の溝(2層を覆土とする溝)が作られた可能性が考えられる。

#### 49区溝跡2号

＜位置・検出状況＞ I d 層下面～Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-165°-Eである。49区上抗4号と重複関係にあり、本遺構が古いと思われる。

＜規模＞ 規模は開口部径40cm、底部径22cm、深さ17cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は2層に大別され、灰～にぶい黄褐色粘土質シルト及び粘土質土である。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 明確には不明である。覆土の状況は古い様相を呈する。

#### 49区溝跡3号

＜位置・検出状況＞ I d 層下面～Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-160°-Eである。

＜規模＞ 規模は開口部径23～50cm、底部径17～24cm、深さ5～15cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は4層に大別され、主覆土はにぶい黄褐～浅黄色粘土質土である。人為堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 断面形はビーカー型状である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 明確には不明である。覆土の状況から近代～現代のものと思われる。

#### 49区溝跡4号

＜位置・検出状況＞ I d 層下面～Ⅲ層上面で検出した。長軸方向はN-140°-Eである。49区土抗1号に切られる。

＜規模＞ 規模は開口部径66～114cm、底部径33～53cm、深さ12cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は2層に大別され、主覆土は浅黄～灰色粘土質土である。人為堆積の様相(?)である。

＜壁・底面＞ 断面形は浅皿状である。

＜出土遺物＞ かわらけ小片1袋分、瀬戸産の陶磁器片1点が出土している。

＜時期＞ 出土遺物は12世紀及び近世のものである。

#### 49区土坑1号

＜位置・検出状況＞ I d層下面～Ⅲ層上面で検出した。49区溝跡4号とは重複関係にあり、本遺構が新しい。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形と推定される。規模は開口部径80～154cm、底部径65～80cm、深さ15～30cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 灰白色粘土質シルトを主体とする。人為堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ (第68図318、写真図版57) かわらけの小片が1袋分出土している。

かわらけ 小形の手づくねかわらけが主体である。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

#### 49区土坑2号

＜位置・検出状況＞ I d層下面～Ⅲ層上面で検出した。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径40cm、底部径22cm、深さ17cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 8層に大別される。全体に灰黄褐色粘土質シルトを主体とし、最下層は灰白～灰色泥質粘土質土である。自然堆積的様相であるが断定できない。

＜壁・底面＞ 壁は直立してたちあがり、断面形はビーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ (第67図312、写真図版57) かわらけ1袋分と陶磁器片2点が出土している。

かわらけ 手づくねが主体である。

陶磁器 濑戸産で、49区溝跡4号出土片と接合する。

＜時期＞ かわらけが出土していること覆土の状況から12世紀の可能性が高い。

#### 49区土坑3号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。プランは北側は調査区外、西・東側は擾乱で破壊されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形と推定される。規模は開口部径23～50cm、底部径17～24cm、深さ5～15cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は上位が黄灰色粘土質土、下位に明褐色粘土質土が堆積する。断面形は不明である。自然堆積的様相を呈する。

＜壁・底面＞ 南壁での観察から壁は外傾して立ち上がる。断面形は不明である。底面はほぼ平坦である。

＜付属施設＞ 東側底面下位より径20cm、深さ15cm程の方形気味の土坑を検出した。

＜出土遺物＞ かわらけ小片が2袋分が出土している。

＜時期＞ 出土している遺物から12世紀と思われる。

#### 49区土坑4号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。49区溝跡2号と重複関係にあり、本遺構が新しいと思われる。覆土の状況からトイレ状土坑と思われる。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、規模は開口部径66～114cm、底部径33～53cm、深さ12cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は7層に細分した。3～7層が所謂トイレ的な土質で、瓜の種子と思われる種子類等が出土している。

48区



第36図 48区・49区

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、断面形はピーカー状を呈する。底面は平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 時期を推定する遺物は出土していない。覆土の状況は古い様相が窺える。

遺構外の遺物 かわらけ小片が盛土中より1袋分と平瓦片が1点出土している。

49区のまとめ 出土遺物がない造構についても、覆土の状況から12世紀の造構と推定されるものが多い。

#### 50区（第37図、写真図版26）

位置 県道毛越寺線沿いで、「小松代ヤエ氏宅」前に位置する。

検出遺構 溝跡1条、土坑1基、柱穴42基を検出した。

##### 50区溝跡1号

<位置・検出状況> I d層で検出した。造構の長軸方向はN-120° - Eである。

<規模> 規模は開口部径33cm、底部径12cm、深さ21cmである。

<覆土・堆積状況> 覆土は褐色粘土質土による単層である。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、断面形は鉢状を呈する。底面は平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 検出面及び覆土の状況から判断して現代と思われる。

##### 50区土坑1号

<位置・検出状況> I d層で検出した。

<平面形・規模> 平面形は梢円形で、規模は開口部径38×25cm、底部径34×15cm、深さは15cm程度である。

<覆土・堆積状況> 覆土は褐色粘土質土による単層である。

<壁・底面> 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 検出面及び覆土の状況から判断して現代と思われる。

##### 50区柱穴

<検出状況> 主にⅢ層中で検出した。アタリが検出面から確認できるものが多い。

<規模> 開口部径は25~40cm、深さは20~60cmでアタリの径から推定して小形のものが多いと思われる。

<覆土・堆積状況> アタリ部分は様々である。掘り方部分は浅黄～黄橙色粘土質土が多い。

<壁・底面> 壁はほとんどのものが直立気味に立ち上がる。底面は平坦もしくは丸底を呈する。

<出土遺物> (第67図313~316、写真図版57) PP35、PP13、PP14、PP16、PP17、PP32からかわらけ小片が、PP10、PP21より常滑産の小破片がそれぞれ2点、PP9、PP10、PP24より中国産白磁が合わせて4点出土している。

陶磁器 出土している白磁は、何れも12世紀と推定される。

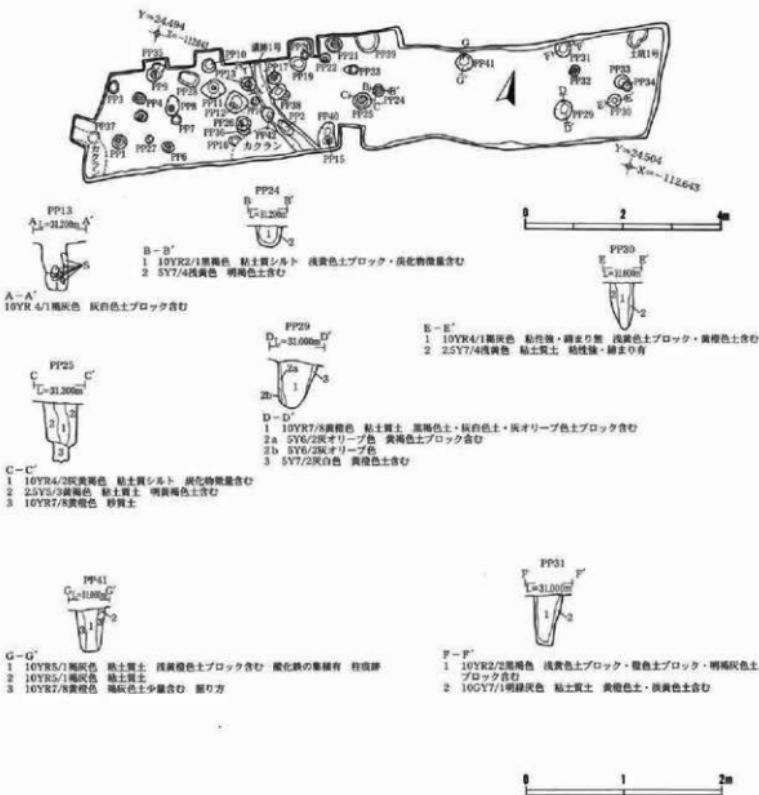
<時期> 出土しているものは12世紀のものである。また、覆土の状況も古い様相が窺える。

遺構外の遺物 (第68図319・320、写真図版57) 盛土中からかわらけ小片が8袋出土している。

かわらけ 手づくねの大形が出土している。

陶器 常滑産の胴部片が出土している。

50区のまとめ アタリの径は10~20cmのものがほとんどであることから、小規模の建物跡が存在したと思われる。



区名	通路名	面積	高さ	備考	区名	通路名	面積	高さ	備考
50区	PP1	29	11	アタリ有り	50区	PP22	19	13	アタリ有り
	PP2	40×18	6			PP23	16	26	
	PP3	20	32			PP24	27	21	アタリ有り
	PP4	23	25	アタリ有り		PP25	36	61	
	PP5	24	8	樹石、アタリ有り		PP26	29	31	アタリ有り
	PP6	25	17	アタリ有り		PP27	15	30	
	PP7	17	19			PP28	41×30	10	
	PP8	37	29	アタリ有り		PP29	25	44	
	PP9	29	36	アタリ有り		PP30	24	47	
	PP10	21	17			PP31	29	52	
	PP11	40×50	47	アタリ有り		PP32	21	16	アタリ有り
	PP12	21	11	アタリ有り		PP33	27	26	
	PP13	25	47	樹石、アタリ有り		PP34	18	40	
	PP14	17	16			PP35	29	27	PP9と重複、新田
	PP15	36	30	PP40と重複、断面不明		PP36	26	25	
	PP16	17	15~23			PP37	27	12	
	PP17	28	38	アタリ有り		PP38	20	11	表面化的軸穴
	PP18	35×24	26			PP39	44	24	
	PP19	34×27	6			PP40	30	39~54	
	PP20	15	14			PP41	30	43	
50区	PP21	32	24	アタリ有り		PP42	29	17	

第37図 50区

### 51区（第38図、写真図版27・28・29）

位置 県道毛越寺線沿いで、「小松代栗三氏宅」前に位置する。

検出遺構 挖立柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝跡3基、土坑4基、柱穴44基を検出した。

#### 51区掘立柱建物跡

＜位置・検出状況＞ 51区井戸跡及び51区溝跡2号のプラン内で検出された柱穴により構成される。建物の長軸方向はN-100°-Eで、平泉町文化財センター調査区に延びる。本調査区では2軒3間の建物を確認できるが、建物跡は調査区外に広がる可能性が高い。

＜平面形・規模＞ 柱穴5個により構成される。柱穴の規模は、開口部径15~26cm、深さ22~48cm程度である。

＜覆土＞ 柱穴の覆土は褐色粘土質土を主体に、褐色粘土質土によるものがある。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期判断となる遺物は出土していない。重複関係にある51区井戸跡及び51区溝跡2号（両者とも12世紀と推定される）より新しい遺構ではあるが、柱穴の覆土は古い様相で捉えられる。井戸跡は12世紀前半と捉えられることから、12世紀の後半あるいは中世の建物跡と推定される。

#### 51区溝跡1号

＜検出状況＞ 検出面はⅢ層中である。遺構の長軸方向はN-170°-Eである。

＜規模＞ 開口部径47cm、底部径25cm、深さ17cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐色粘土質土と褐色粘土質土に大別される。

＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面はやや丸底気味である。

＜出土遺物＞（第68図321、写真図版57） 小さなロクロ成形によるかわらけ2点、常滑片1点が出土している。

陶器 常滑産の胴部片が出土している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

#### 51区溝跡2号

＜検出状況＞ 検出面はⅢ層中である。遺構は南北方向から東にほぼ直角気味に折れる。

＜規模＞ 開口部径70cm、底部径67cm、深さ5cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は若干の炭化物を含む粘土質土で4層に大別される。自然堆積と思われる様相である。

＜壁・底面＞ 溝の上位は削平された可能性が高く、掘り込みは僅かに確認されるだけである。断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞（第68図322、写真図版57） かわらけ小片が3袋分出土している。

かわらけ 手づくねの大形かわらけが主体である。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。

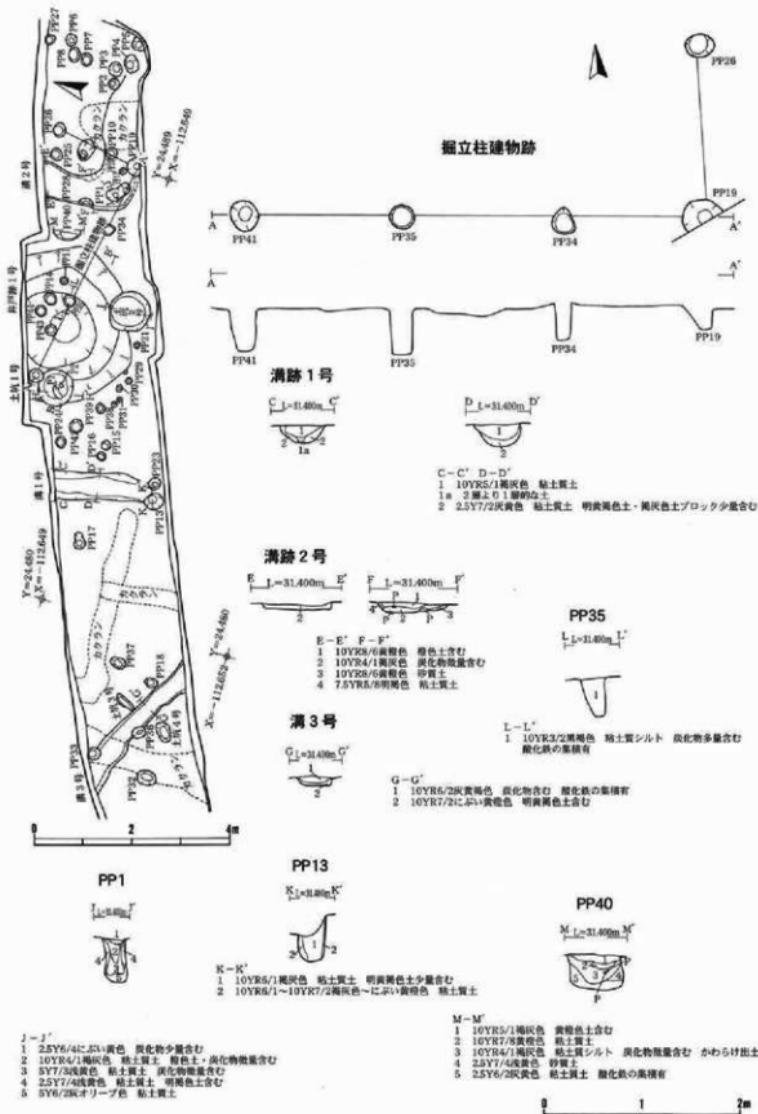
#### 51区溝跡3号

＜位置・検出状況＞ 検出面はⅢ層中である。

＜規模＞ 開口部径37cm、底部径30cm、深さ10cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は灰黄褐色粘土質土を主体とする。人為堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 溝の上位は削平された可能性が高く、掘り込みは僅かに確認されるだけである。断面形は浅



第38図 51区(1)

皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。12世紀に多く見られる溝方向とは異なることから近現代と思われる。

51区井戸跡1号

＜検出状況＞ Ⅲ層上面において、約4mの褐色土の広がりを検出した。トイレ状土坑と思われる51区土坑1号及び51区土坑2号、51区柱穴PP11・PP14・PP35・PP43・PP44と重複関係にあり、本遺構が古い。また検出面前後から多量のかわらけが出土している。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、開口部径310cm、底部径65cm、深さは検出面から375cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は6層に大別される。1層は褐灰色粘土質土を主体とし、地山ブロックが入る混土でかわらけ片を多量に含む。以下上位に2層は黒褐色泥質土、3層は明オリーブ灰粘土質土、4層は黄灰色粘土質土、5層は黒褐色粘土質シルトで有機質に富む。6層は地山の崩壊土と思われる。5層より下位は、7層とした緑灰泥質土による単層である。遺物は最上位1層～5層にかけて出土し、7層からは遺物の出土がない。底面付近は若干砂が混じり、ひしゃくと思われる木製品が出土した。基本的には人為堆積と推定される。

＜壁・底面＞ 断面形は底面から直立し、上位付近で外傾する所謂ロート状を呈する。

＜出土遺物＞ (第68・70図323～342・362・363・364、写真図版58・59・60) かわらけ約30袋分、陶器十数点、木製品が出土している。取り上げ方法はQ1～4の4ブロックに分けて取り上げたが、平面的な違いや傾向は窺い知れなかった。

かわらけ 1層は大形のロクロ成形及び大形の手づくねが主体で出土した。2層は小形のロクロ成形と大形の手づくねを主体に4袋分、3～6層は小形のロクロ成形及び小形の手づくねが3袋分出土した。

陶器 潤美産のこね鉢の破片と常滑産が出土している。

陶磁器 覆土上位から白磁1点と青磁1点が出土した。

木製品 チュウ木？1点、不明品2点が出土している。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。また本遺構と重複関係にある2基のトイレ状土坑(51区七坑1・2号)より古いことから12世紀前半の可能性がある。

51区土坑1号

＜検出状況＞ 盛土及び水田土除去後に、51区井戸跡プラン内で検出した。所謂トイレ状土坑と考えられるものである。51区井戸跡1号と重複関係にあり、本遺構が新しい。第17次調査(平泉町教育委員会)7号土坑と本遺構及び51区土坑2号は220cm間隔で一直線上に並列する。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形である。開口部径75cm、底部径65cm、深さ85cm程度である。

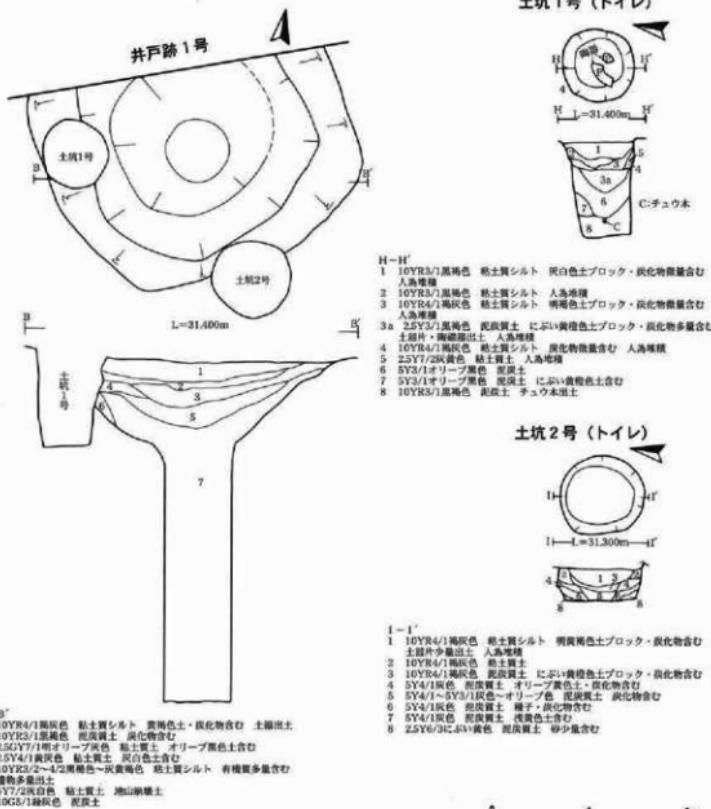
＜覆土・堆積状況＞ 覆土は9層に細分される。1・2層は黒褐色粘土質シルト、3・4・5層は褐灰色粘土質シルト、3a層は黒褐色泥質土、6・7・8層は黒褐色泥質土である。6・7・8層がトイレ土と思われる土質で、有機質に富み、チュウ木と思われる木製品が出土している。

＜壁・底面＞ 壁はほぼ直立し、断面形はピーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ (第69図343～349、389、写真図版59・61) かわらけ6袋分、陶器片、木製品、碁石？が出土している。

かわらけ 手づくねかわらけが主体で全て小片である。

陶器 常滑産の甕の口～頭部片(343)と壺の破片(344)が出土している。343は1～2層にかけて、



- B-B'
- 10YR4/4/1 暗灰色 粘土質シルト 黄褐色土・炭化物含む 土層底土
  - 10YR3/2 暗褐色 泥炭質土 泥炭物含む
  - 2.5Y7/1 明オリーブ褐色 粘土質土 オリーブ黒色土含む
  - 2.5Y7/1 暗灰色 粘土質土 淡灰色土含む
  - 10YR3/2~4 深褐色~灰褐色 泥炭土シルト 有機質多量含む
  - 5Y7/2 深灰色 粘土質土 鳥糞土
  - 5Y7/1 深灰色 粘土質土 深山網葉土

区名	遺構名	規幅	深さ	番号	区名	遺構名	規幅	深さ	番号	区名	遺構名	規幅	深さ	番号
S1K PP1	23	45			S1K PP16	17	14			S1K PP21	10	4		
S1K PP2	32	5			S1K PP17	23	42			S1K PP22	38×29	46		
S1K PP3	26	24			S1K PP18	26	29			S1K PP23	26	38		
S1K PP4	36	41~56			S1K PP19	40	21			S1K PP24	26	36		
S1K PP5	24	23			S1K PP20	15	4			S1K PP25	24	40		
S1K PP6	24	37			S1K PP21	14	9			S1K PP26	27	16		
S1K PP7	25	15			S1K PP22	16	10			S1K PP27	33×23	40		
S1K PP8	30	32			S1K PP23	26	34			S1K PP28	10	4		
S1K PP9	46×29	45			S1K PP24	24	36			S1K PP29	19	3		
S1K PP10	20	9			S1K PP25	26	53			S1K PP30	56	36		
S1K PP11	18	11			S1K PP26	30	40			S1K PP40	31	28		
S1K PP12	23	41			S1K PP27	21	31			S1K PP41	29	31		
S1K PP13	28~38	49			S1K PP28	30	4			S1K PP42	23	19		
S1K PP14	23	17			S1K PP29	13	4			S1K PP43	23	16		
S1K PP15	19	22			S1K PP30	10	4			S1K PP44				

第39図 51区(2)

344は3a層で出土している。

木製品 チュウ木と思われる木製品が8層から6点出土している。

墓石 389は墓石の可能性がある（写真掲載のみ）。

＜時期＞ 出土している遺物は12世紀のものである。また重複関係にある51区井戸跡とは、出土したかわらけの年代観から時期差は僅かと推測される。

#### 51区土坑2号

＜検出状況＞ 盛上及び水田土除去後に51区井戸跡プラン内で検出した。所謂トイレ状土坑と推定されるものである。

＜平面形・規模＞ 平面形はほぼ円形である。開口部径85cm、底部径70cm、深さ47cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は8層に細分される。上位～中位は褐色粘土質シルト、下位は灰～にぶい浅黄橙色泥炭質土で構成される。

＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はピーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ (第69図350～352、写真図版59) かわらけ片が4袋分、常滑2点が出土している。

かわらけ 覆土最上位（1層の最上位）から大形の手づくねを主体とした破片2袋分、覆土中位～下位で1袋分が出土している。また、1層下位から中世かわらけ？と推定される小片が1袋分出土した。

陶器 常滑産の胸部片が1層より出土している。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀と推定される。

#### 51区土坑3号

＜位置・検出状況＞ 水田土除去後に検出した。土坑として登録したが、51区溝跡3号に付随する施設か、あるいは柱穴的な性格のものかもしれない。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形な楕円形で、規模は開口部径43×26cm、深さ16cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 褐灰色粘土質シルトによる単層である。自然堆積的様相であるが明確ではない。

＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形は鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。

#### 51区土坑4号

＜位置・検出状況＞ 水田土除去後に検出した。51区土坑3号と比較して浅い土坑であるが、形状が類似することと位置などから判断して51区溝跡3号に付随した施設の可能性がある。

＜平面形・規模＞ 平面形は不整形な楕円形で、規模は開口部径46×10cm、深さ4cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 褐灰色粘土質シルトによる単層である。自然堆積的様相であるが明確ではない。

＜壁・底面＞ 壁は僅かに確認されたのみである。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。

遺構内の遺物 (第70図365、写真図版59) 51区PP43より白磁の壺と思われる破片が出土している。

遺構外の遺物 (第69・70図353～361・366～368、写真図版59) かわらけ小片14袋分と陶器片が約20片出土している。

かわらけ 手づくねの小形かわらけが主体のようである。

陶器 常滑・渥美産の他に中世と思われる須恵器系が出土している。

陶磁器 白磁2点と青白磁2点が出土している。

#### 51区のまとめ

12世紀と思われる多種な遺構が検出された。複数の遺構同士が重複関係を示すことから、12世紀の中でも前半期と後半期では土地利用に相違が存在するものと捉えられる。代表的なものを年代順に示すと、井戸跡（12世紀前半期）→トイレ状土坑（12世紀中頃？～後半）→掘立柱建物跡（12世紀後半期？～中世）となる。

#### 52区（第40図、写真図版30）

位置 県道毛越寺線沿いで、「滝沢貞治氏宅」前に位置する。

検出遺構 堀跡1条、柱穴9基を検出した。

#### 52区堀跡

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-0°-Eである。

＜規模＞ 板痕跡と思われるアタリ部分の状況から20cm×5cm程の板材が使用された可能性がある。布掘りの規模は、開口部径20cm、底部径12cm、深さ30cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 第40図A-A'ラインで確認されるI・3層が、板材の埋込み方土と捉えられる。

＜壁・底面＞ 布掘りは、南側に向かうにつれ浅くなる。第40図のA-A'ラインでは断面形は深鉢形を呈し、B-B'・C-C'・D-D'ラインでは浅鉢形を呈する。布掘りの深さの相違は、遺構の残存状況の差によるものか、あるいは縦板と横板の違いによるものなのか判断できなかった。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。覆土の様相から12世紀のものと思われる。

遺構外の遺物 出土遺物はない。

52区のまとめ 今回の調査からは、希少である堀跡を検出した。

#### 53区（第41図、写真図版31）

位置 県道毛越寺線沿いで、小松代旅館前に位置する。

検出遺構 溝跡3条、堀跡1条、柱穴9基を検出した。

#### 53区溝跡1号

＜位置・検出状況＞ ほぼⅢ層上面で検出された。53区溝跡2号とは隣接するが重複関係ではない。また南側でプランは終わっている。遺構はN-0°-E方向に延び、53区溝跡2号及び53区堀跡と平行する。

＜規模＞ 規模は開口部径26cm、底部径10cm、深さ10cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土上位～中位に褐色粘土質シルト、下位に灰白色粘土質土が堆積する。自然堆積的様相である。

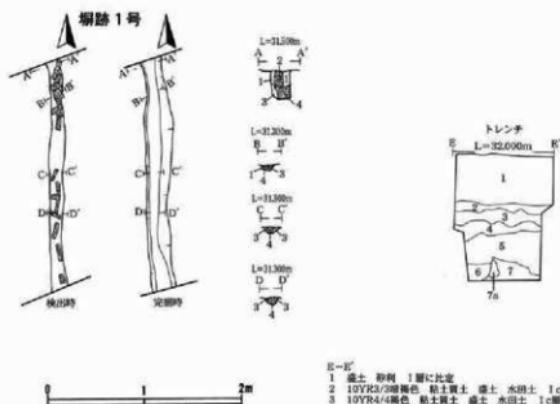
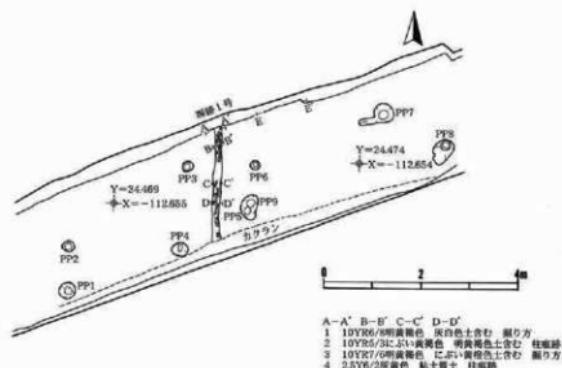
＜壁・底面＞ 壁は外傾して立ち上がり、断面形は鉢形あるいは浅鉢形を呈する。底面は僅かに南側に傾斜する。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。覆土の様相から12世紀のものと思われる。

#### 53区溝2号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出された。遺構はN-0°-Eに延びる。第41図A-A'ライン・B-B'ラインの土層観察結果から53区堀跡とは重複関係にあり、本遺構が新しい。しかし、本遺構上位



No.	区名	連番名	間隔	深度	備考
402	520X	PP1	23	13	
403	520X	PP2	24	22	
404	520X	PP3	25	24	
405	520X	PP4	35	47	
406	520X	PP5	27	55	
407	520X	PP6	18	11	
408	520X	PP7	38	32	
409	520X	PP8	22	39	
410	520X	PP9	32	49	

第40図 52区

に堆積する覆土は同質上であり、また53区溝跡1号・53区堀跡とは遺構の長軸方向が同様なため、堀跡に伴う施設の可能性が推定される。

＜規模＞規模は開口部径24cm、底部径16cm、深さ28cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土上位～中位に灰黄褐色～明黃褐色粘土質土、下位に褐色泥炭質土が堆積する。自然堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁はやや外傾して立ち上がり。断面形はビーカー状を呈する。底面は僅かに北側に傾斜する。＜出土遺物＞（第71図371・372・375、写真図版59） 6層からかわらけと陶器片が数点出土した。かわらけ 手づくねの大形かわらけが出土している。

陶器 混美産の刷部片が数点出土している。

瓦 平瓦片が出土している（不規則）。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀のものと思われる。

#### 53区溝跡3号

＜位置・検出状況＞ III層上面で検出した。遺構はN-0°-Eの方向に延びる。

＜規模＞ 規模は開口部径100～129cm、底部径70～96cm、深さ23cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は3層に細分される。I層は基本土層のI d層に相当する。

＜壁・底面＞ 壁は外反気味に立ち上がり、断面形は浅鉢形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ かわらけ小片1袋分と常滑産の小破片が出土している。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀のものと推定される。

#### 53区堀跡

＜位置・検出状況＞ III層上面で検出された。遺構はN-0°-Eの方向に延びる。

＜規模＞ 布掘りの規模は、開口部径34cm、底部径10cm、深さ19cm程である。

＜覆土・堆積状況＞ 第41図A-A'・B-B'ラインの13層がアトリ部分、12層が掘り方となる。人為堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁は若干外傾気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。覆土の様相から12世紀のものと思われる。

遺構内の遺物 53区PP4から近世と推定される東北産の陶器が出土している。

遺構外の遺物 出土遺物はない。

53区のまとめ 本区から検出された12世紀と推定される溝跡や堀跡は、いずれもN-0°-Eの方向を見ることから、同時期存在の可能性が高い。また、併せて12世紀の中でも時期細分の可能な遺構である可能性がある。

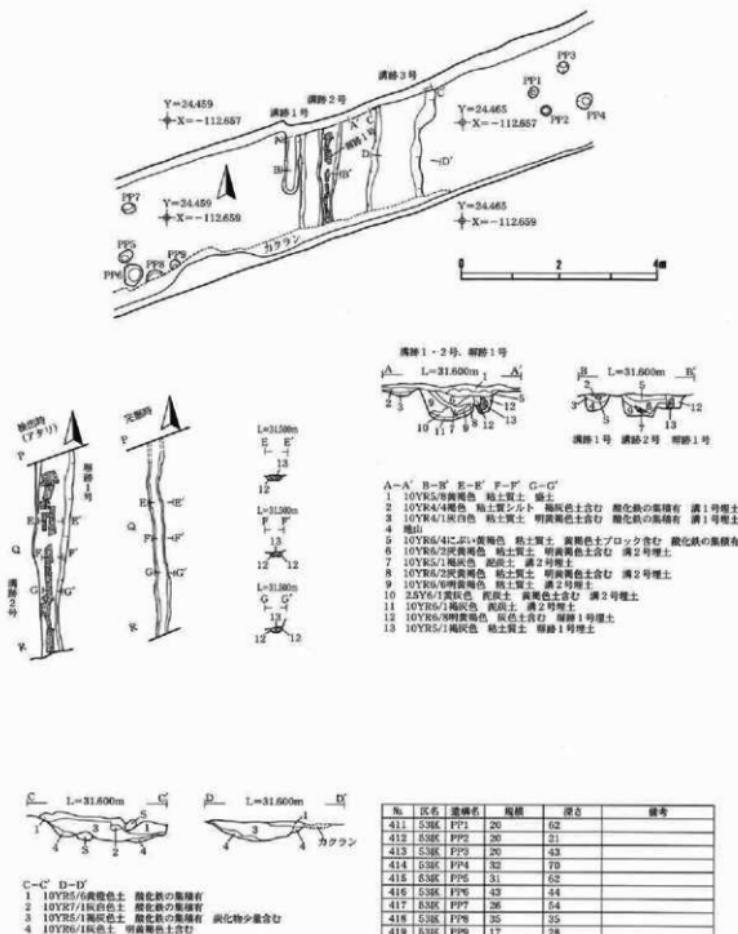
#### 54区（第42図、写真図版32）

位置 県道「志羅山旅館」

検出遺構 溝跡3条、土坑4基、カマド状遺構1基、柱穴32基を検出した。

#### 54区溝跡1号

＜位置・検出状況＞ III層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-0°-Eである。54区土坑3号及び数基の柱穴と重複関係にあるが、本遺構に付随するものか否かの把握はできなかった。根拠は弱いが柱穴は本



第41図 53区

遺構より新しい時期のもので、54区土坑3号は本遺構の底面精査中に検出されたことから付随する施設の可能性が考えられる。

＜規模＞ 規模は開口部径100cm、底部径40cm、深さ12cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 灰白色泥炭質土を主体とする。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外反気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は場所により凹凸が確認されたが、基本的には平坦と推定される。

＜出土遺物＞ (第71図373～375、写真図版59) ロクロ成形のものを主体とするかわらけが数点と常滑産の陶器片が出土した。

かわらけ ロクロ成形によるかわらけが主体で、大形・小形の両者が出土している。

陶器 常滑産の壺の口～頸部が出土している。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀のものと推定される。

#### 54区溝跡2号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-0°-Eである。

＜規模＞ 規模は開口部径31cm、底部径18cm、深さ13cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 黄褐色粘土質土による単層である。自然堆積か人為堆積かの判別はできなかった。

＜壁・底面＞ 壁は西側が外反気味に立ち上がり、東側は直立気味に立ち上がる。底面は丸底状を呈する。

＜出土遺物＞ (第71図376、写真図版60) かわらけが数点出土している。

かわらけ ロクロ成形による大形のかわらけを主体とする

＜時期＞ 出土遺物から12世紀のものと推定される。

#### 54区溝跡3号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-15°-Eである。検出当初は発跡と推定し精査を進めたが、アタリ(板痕跡)部分が明瞭でなく溝跡として登録した。

＜規模＞ 規模は開口部径22cm、底部径12cm、深さ7cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土上位と下位に区分される。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外反気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。覆土の様相から12世紀のものと思われる。

#### 54区土坑1号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。54区土坑2号と重複関係にあり、54区土坑2号の埋土中に本遺構が構築されている。

＜平面形・規模＞ 平面形は円形で、規模は開口部径50cm、底部径31cm、深さは33cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 黒褐色粘土質シルトによる単層である。人為堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形はビーカー状を呈する。底面は平坦である。

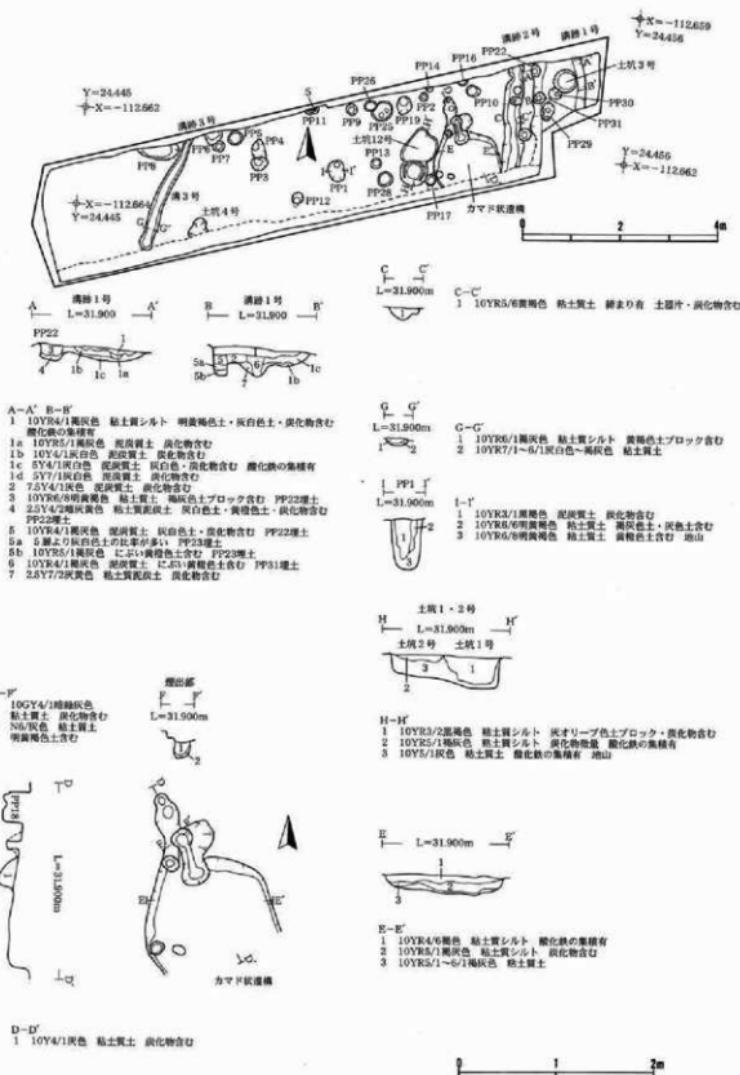
＜出土遺物＞ かわらけが数点出土した。

かわらけ ロクロ成形による大形かわらけの小片が出土している(不掲載)。

＜時期＞ 出土遺物は12世紀のものであるが、覆土の様相から判断して中・近世の可能性が高い。

#### 54区土坑2号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。



第42図 54区

<平面形・規模> 平面形は楕円形で、規模は開口部径72×54cm、底部径66×34cm、深さ6cmである。

<覆土・堆積状況> 覆土上位に褐色粘土質シルト、覆土下位に灰色粘土質土が堆積する。

<壁・底面> 壁は直立気味に立ち上がり、断面形はピーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> (第70図369、写真図版59) 覆土中より陶磁器片1点が出土している。

陶磁器 中国産の青磁片が出土している。

<時期> 出土遺物から12世紀のものと推定される。

54区土坑3号

<位置・検出状況> III層上面で検出した。

<平面形・規模> 平面形は円形で、規模は開口部径50cm、底部径37cm、深さ15cmである。

<覆土・堆積状況> 褐色粘土質土による単層である。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 時期は不明である。54区溝跡1号よりは古いことは言える(付隨施設の可能性有り)。

54区土坑4号

<位置・検出状況> III層上面で検出した。

<平面形・規模> 平面形は不整形で、規模は開口部径40cm、深さ31cmである。底部径は、調査区境の搅乱のため、不明である。

<覆土・堆積状況> 褐色粘土質土による単層である。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 時期は不明である。

54区カマド状遺構

<位置・検出状況> III上面で検出した。

<平面形・規模> 平面形は不整形である。規模は開口部径180×110cm、底部径120cm、深さ19cmである。

<覆土・堆積状況> 覆土上位に褐色粘土質シルト、覆土中位～下位に褐色粘土質土が堆積する。自然堆積の様相である。

<壁・底面> 壁は全体的に緩く外傾気味に立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。

<出土遺物> (第70図370・390・391、写真図版59・61) かわらけ小片、土器塊、美濃産の徳利、碁石と思われる石製品等が出土している。

かわらけ ロクロ成形による大形かわらけの小片が出土している(不掲載)。

陶器 美濃産の徳利が出土している。

石製品 390・391は埋土上位から出土した。碁石と思われる。

<時期> 出土遺物から近世と推定される。

遺構内の遺物 (第71図377、写真図版60)

かわらけ 54区PP20からロクロ成形による小形かわらけが出土している。

遺構外の遺物 (第71図379、写真図版60) 表土から遺物が若干量出土している。

陶器 濱美濃の觸部片が出土している。

54区のまとめ

検出されている遺構は、全般的には12世紀に属するものである。ただし、カマド状遺構は近世と推定されることから、詳細な時期区分ができなかった柱穴類の中には、近世のものも含まれている可能性がある。

#### 55区（第43図、写真図版33）

位置 県道毛越寺線沿いで、「小松代俊介氏宅」前に位置する。

検出遺構 溝跡3条、柱穴6基を検出した。

##### 55区溝跡1号

＜位置・検出状況＞ I d層とⅢ層の漸移層的な面で検出した。遺構の長軸方向はN-175°-Eである。

＜規模＞ 規模は開口部径52cm、底部径25~40cm、深さ18cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は2層に区分される。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形はピーカー状を呈する。底面は平坦である。

＜付属施設＞ 南側調査区外との境付近で溝の両側に柱穴（PP 1~3）が検出された。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。

##### 55区溝跡2号

＜位置・検出状況＞ I d層とⅢ層の漸移層的な面で検出した。遺構の長軸方向はN-5°-Eである。

＜規模＞ 規模は開口部径67cm、底部径40cm、深さ12cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は5層に細分される。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は平坦である。

＜出土遺物＞ 常滑産の陶器片が覆土上位で出土している。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀のものと推定される。

##### 55区溝跡3号

＜位置・検出状況＞ I d層とⅢ層の漸移層的な面で検出した。遺構の長軸方向はN-0°-Eである。

＜規模＞ 規模は開口部径67cm、底部径40cm、深さ12cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は5層に細分される。自然堆積的様相である。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 明確には不明であるが、覆土の様相から12世紀のものと推定される。

遺構外の遺物 出土遺物はない。

55区のまとめ 溝3条のみの検出であるが、2条は12世紀のものと推定されることから、将来的には貴重な資料を提供するものである。

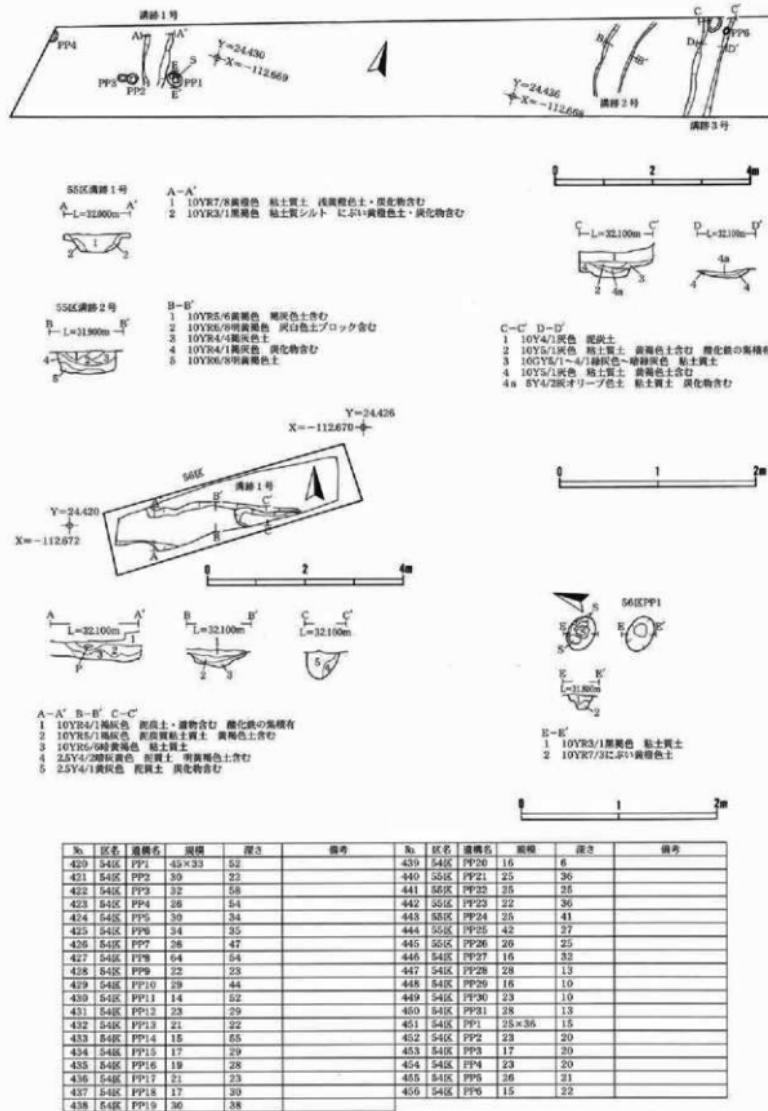
#### 56区（第43図、写真図版34）

位置 県道毛越寺線沿いで、「千葉正氏宅」前に位置する。

検出遺構 溝1条を検出した。

##### 56区溝跡1号

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-90°-Eである。長軸方向から推定すると、第47次調査で検出されたかわらけが多量に出土した溝跡の続きである可能性が高い。標高から推定



第43図 55・56区

すると本調査で検出された部分が上流で、第47次調査で検出された部分が下流となるであろう。なお、当時水が流れている溝かどうかは不明である。参考までに記述すると、精査時は水の引きが悪い悪い場所であった。

＜規模＞ 規模は開口部径80cm、底部径50cm、深さ17cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は褐灰色泥炭質土と暗灰黄色泥質粘土質土に大別される。自然堆積の様相である。

＜壁・底面＞ 壁は緩く外反気味に立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜付属施設＞ 東側底面付近に溝状の掘り込みが確認される。

＜出土遺物＞（第71図380・381、写真図版60） かわらけ小片が多量（15袋）と陶器片が数点出土した。かわらけ ロクロ成形による小形かわらけを主体とする。復元個体は少ない。

陶器 覆土上位から渥美産の小破片が数点出土している（不掲載）。その他としては、13～14世紀と推定される東北産の陶器片が出土している。

＜時期＞ 出土遺物から12世紀のものと推定される。

遺構外の遺物（第71図382、写真図版60）

陶器 東北産の芯器系が1点出土している。

56区のまとめ 今回の調査においては、調査区の幅が最も狭い部分であることと、絶えず水が沸いてくる悪環境であったことから、充分な調査記録を残せたとは言いかねる。特に、47次調査において、かわらけの出土が多かった溝跡の続きと推定される溝跡であることから、本来は重要度の高い遺構であったと捉えられ、将来における本溝跡の続き部分の調査成果を期待してやまない。

#### 60区（第44図、写真図版35）

位置 国道4号沿いで、「たてやま美容室」南隣に位置する。

検出遺構 遺構は検出されていない。

遺構外の遺物 出土遺物はない。

60区のまとめ 遺構、遺物共に確認されなかった。

#### 61区（第44図、写真図版35）

位置 国道4号沿いで、「たてやま美容室」南隣に位置する。

検出遺構 土坑1基、柱穴列1条、柱穴11基を検出した。

61区土坑1号

＜位置・検出状況＞

＜平面形・規模＞ 平面形は長方形で、規模は開口部径92×65cm、底部径72×56cm、深さ12cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 覆土は暗褐色シルトによる単層である。覆土中には礫が混在する。

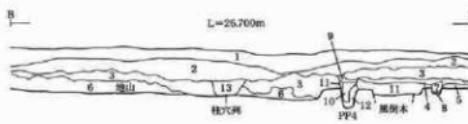
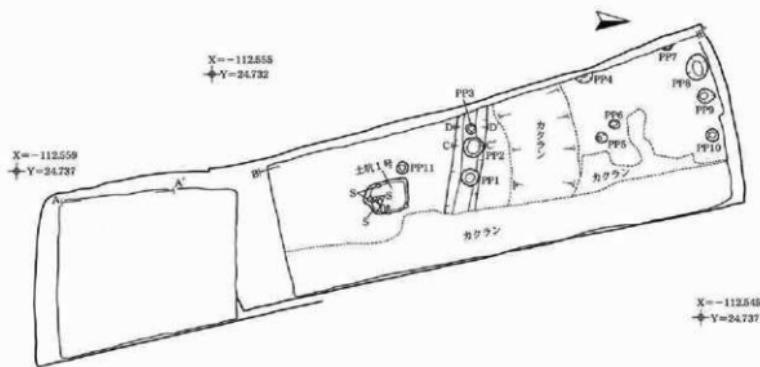
＜壁・底面＞ 壁は直立気味に立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

＜出土遺物＞ 不明である。

＜時期＞ 近現代と推定する。

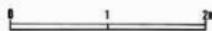
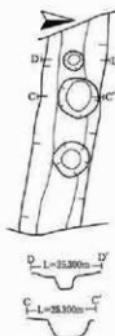
61区柱穴列

＜位置・検出状況＞ Ⅲ層上面で検出した。遺構の長軸方向はN-90°-Eである。深い溝状の掘り込み内からは、3基の柱穴が検出された。



- A-A' B-B'
- 1 砂利 土
  - 2 10YR5/4-4淡青褐色～明黃褐色 粘土質土 現代堆土
  - 3 10YR5/6淡青褐色 黄褐色シルト 屋内堆土 現代堆土
  - 4 10YR5/4褐色 地上更生土 特性・縫まり有
  - 5 10YR5/6黄褐色 粘土質土 特性・縫まり有
  - 6 10YR6/6明黃褐色 粘土質土 地山
  - 7 10YR3/2黄褐色 粘土質シルト 特性・縫まり有 PP7堆土
  - 8 10YR5/6-7褐色 地上更生土
  - 9 10YR4/6-7-3/4褐色～棕褐色 粘土質シルト
  - 10 10YR4/1褐灰色 粘土質シルト 棕褐色土含む PP4堆土
  - 11 10YR5/6黄褐色 粘土質土 棕色土含む 風化未発達
  - 12 10YR5/4C-3/4褐色 地上更生土 PP4堆土
  - 13 10YR5/4C-3/4褐色 地上更生土 PP4堆土 明黃褐色土含む

No	区名	施設名	屢積	厚さ	備考
457	61区	PP1	38	19	
458	61区	PP2	46	19	
459	61区	PP3	26	12	
460	61区	PP4	34	42	
461	61区	PP5	21	19	
462	61区	PP6	21	9	
463	61区	PP7	21	11	
464	61区	PP8	55×43	25	
465	61区	PP9	35	22	
466	61区	PP10	25	18	
467	61区	PP11	22	12	



第44図 60・61区

＜平面形・規模＞ 東西方向に直径21～55cmの3個の柱穴が並ぶ。溝の規模は、開口部径42cm、底部径25cm、深さ16cm程度である。

＜覆土・堆積状況＞ 第44回断面B-B'の13層が本造構の埋上で、にぶい黄褐色粘土質土の単層である。

＜壁・底面＞ 壁は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦気味である。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 時期は不明である。国道4号を挟んだ道路沿いが、来年度調査予定地であることから、本造構の延長部分が検出される可能性が高く、年代を特定できる可能性がある。

造構外の遺物 出土遺物はない。

61区のまとめ 本区から検出された柱穴は、12世紀と思われるものはなかった。ただし、柱穴列については、その可能性が残る。

#### 62区（第45図、写真図版36）

位置 国道4号沿いで、「たてやま美容室」前に位置する。

検出造構 柱穴列1条、柱穴15基を検出した。

##### 62区柱穴列

＜検出状況＞ I d層下位からII a層上位で検出した。浅い溝の底面に柱穴が連続する。造構の長軸方向はN-90°-Eである。

＜平面形・規模＞ 東西方向に直径23～54cmの7個の柱穴が並ぶ。溝の規模は、開口部径59cm、底部径52cm、深さ9cmである。

＜覆土・堆積状況＞ 暗褐～褐色の粘土質シルトにより構成される。調査区境の断面図A-A'（第45図）においては、本造構埋上（8層）の上位に現代の搅乱層があり、埋上はわずかな残存である。

＜壁・床面（底面）＞ 溝の壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面から15cm程の深さの柱穴が伴う。

＜出土遺物＞ 出土遺物はない。

＜時期＞ 不明である。

造構外の遺物 出土遺物はない。

62区のまとめ 第45図の土層断面A-A'を観察した限りでは、覆土は新しい様相が窺えた。ただし、本造構の延長方向に当たる調査区（町文化財センター調査）からも柱穴列が検出されており、検討が必要であろう。国道4号を挟んだ道路沿いが、来年度調査予定地であることから、本造構の延長部分が検出される可能性が高く、年代を特定できる可能性がある。

#### 64区（第46図）

位置 国道4号沿いで、「うちさわ理容店」北隣に位置する。

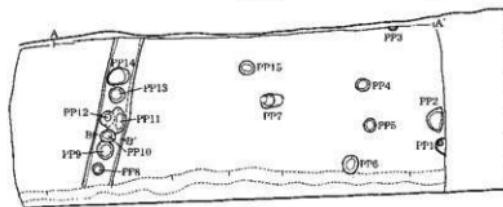
検出造構 造構は検出されていない。

造構外の遺物 出土遺物はない。

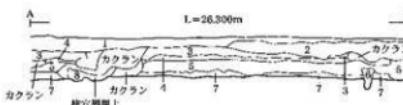
64区のまとめ 今回の調査結果から本区は、従来言われてきたとおり「鉢沢の池」の範囲外であることがわかった。また、同じ国道4号沿いである60～62区と比べて、現地表面から地山面までが50cm程深いことが言える。旧地形が水田造成時（近代以前？）に削平されていると推定される。

X= -112.542  
Y= 24.729

62区

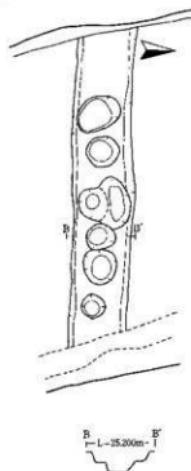


X= -112.532  
Y= 24.733



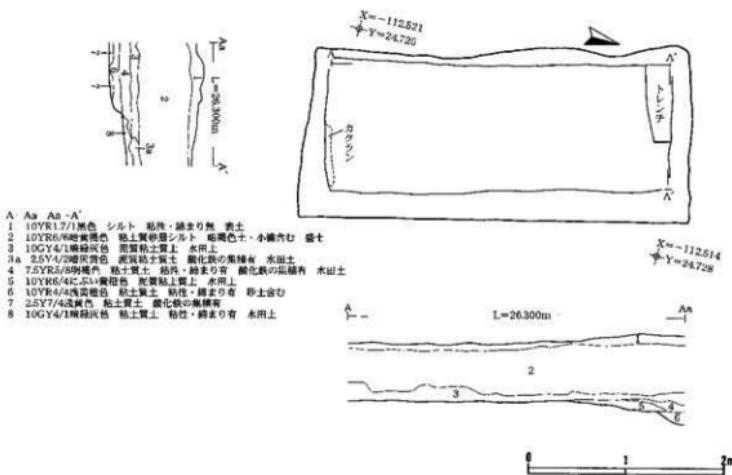
0 2 1 4 m

- A-A'
- 砂利・礫土
  - 10YR7/6明黄褐色 砂質上 動性無 脱まり弱 硬土
  - 2.5Y4/2暗灰紫色 粘土質 動性・強まり有 明度褐色十ブロック・炭化物含む 硬化鉄の集結有
  - 5Y6/2灰褐色 粘土質 動性・強まり有 明度褐色十ブロック・炭化物含む
  - 10YR4/4~2/4暗褐色~暗褐色 牯上質シルト 動性・強まり有 黑褐色上・炭化物含む
  - 10YR4/5褐色 粘土質シルト 動性・強まり有 明度褐色土含む PP3等二
  - 10YR5/6黄褐色 粘土質 動性・強まり有 褐色十含む
  - 10YR3/6~4暗褐色~褐色 粘土質シルト



0 1 2 m

第45図 62区



第46図 64区

## 4. 遺物

本節では第56次調査で出土した遺物について、遺構内外合わせて扱い、その概要を記述する。

出土遺物の時代は、12世紀を主体とし古代～現代までのものが出土しており、時代毎に分けて記載を行う。

### 1 古代の遺物

56次調査において、古代と思われる遺物は、9区堀跡、28区溝跡7号、51区の表土除去中、須恵器小片(不掲載)が出土している。古代と同定される遺構の検出がなく、また小片であるため厳密には年代を特定できるものではない。

9区堀跡は覆土下位からの出土であり、あるいは12世紀の可能性もある。

28区溝跡7号は、12世紀と推定される常滑・瀬美片とともに出土した。

51区表土(盛土)から出土したものは、その出土状況を考えると、現地性ではなく他の場所から運ばれてきた土中に含まれていた可能性がある。ただし、須恵器小片が出土した51区は、12世紀同士の遺構の重複(井戸跡とトイレ状土坑)が確認された地点であることから、12世紀より以前から人的活動が行われていた場である可能性も考えられる。

### 2 12世紀の遺物

12世紀の遺物は、かわらけを主体に知多半島産の陶器、中国産の陶磁器、及び井戸跡から出土した木製品などである。

#### (1) かわらけ

かわらけは、今回の調査からは大コンテナ約5箱分(約150kg)が出土した。手づくねかわらけとロクロかわらけに大別され、さらに大形・小形に区分した。かわらけの種別について、全般的な出土傾向としては手づくねの大形のものが多く、次いで手づくね小形、ロクロ小形、ロクロ大形の順に出土している。

かわらけの分類については、吉田理氏が『泉屋遺跡10・11・13・15次発掘調査報告書』(註1) 中で行ったものを分類基準とし、観察表に記載した。

割合的に最も多いのはD4類に比定されるもので、1段撫で口縁端に面取りが施されやや内湾気味の器形のかわらけである。次いで多いのがD2類に比定される1段撫で、口縁端面取りがなく直線的な器形のかわらけである。希少な種類としては、内折れのものが43区溝3号覆土中と28区の遺物包含層中から出土している。

出土地について、主に12世紀と思われる溝跡・土坑などからの出土が多い。第75図上段には主な出土地とその出土重量(一部点数)を表した。

特殊性を窺える出土状況を示した遺構として、3区土坑2号、28区土坑1号、28区土坑2号が挙げられる。それらは、埋納遺構や廃棄土坑と推定される。5節のまとめととりあげることとする。

かわらけの時期について、松本達速氏によりかわらけの編年試案(1993年松本後に1995年発刊の報告書中の考察編で若干の修正を行っている)が試みられている。同編年試案を参照するとD2・D3かわらけは1175年代後半以降に出現したのではないかと推定されている。その他に分類されたものについては、1175年以前と以降の両者に歸属していた可能性で捉えられており、絶対的な結論は導けていないようである。

#### (2) 国産陶器

12世紀に属すると思われる国産陶器としては、常滑、渥美を主体に、猿投などが出土している。他として、產地が明確ではない須恵器系や東北在地產と思われるものが出土している。

陶器類は、完形品での出土ではなく、全て破片資料である。

a 常滑產 接合しなかった同一個体破片と思われるものを含めて117点出土している。常滑が出土した主な遺構としては、28区溝4号、28区上坑3号、50区PP10、51区井戸跡、51区土坑1号、51区土坑2号などが挙げられる。遺構外の主な出土地としては、28区遺物包含層中、34区盛土中、51区表土中などが挙げられる。器種構成は、大甕、甕、壺（三筋壺）、鉢と推定されるものであるが、小片が多く明確ではない。

b 渥美產 接合しなかった同一個体破片と思われるものを含めて52点出土している。出土の全般的な傾向としては、常滑と共存して出土する場合が多い。主要な出土遺構としては、28区溝4号、31区溝跡1号、31区溝跡3号、などが挙げられる。遺構外の主な出土地としては、28区遺物包含層中、51区表土中などが挙げられる。器種構成は、大甕、甕、壺、鉢、こね鉢と推定されるものであるが、小片が多く明確ではない。

c 猿投產 4点確認された。8区井戸2号から1点、28区上坑2号から2点、42区井戸跡から1点である。

d 須恵器系陶器 產地は特定できないが須恵器系の陶器と推定される。7点確認された。

e 東北在地產陶器 12点確認された。明確な產地や時代は特定できないが、宮城県産で中世の可能性も考えられる。

#### (3) 中国産陶磁器

白磁、青磁、青白磁の小破片が出土している。中国産陶磁器の編年については、『太宰府陶器研究－森田勉氏遺稿集－』（1995年）を参照として観察表に記載した。

a 白磁 21点出土した。2区遺物包含層、9区溝2号、28区溝跡1号、42区井戸跡、43区溝跡1号、43区溝跡2号、44区溝跡1号、44区溝跡2号、50区PP9・10・24、51区井戸跡から出土した。

器種構成は四耳壺、鉢、碗と推定される。

b 青磁 5点出土した。6区溝跡1号、9区溝跡1号、45区盛土、51区井戸跡、54区土坑2号から出土した。

c 青白磁 3点出土した。28区溝跡2号、51区表土中から出土した。

#### (4) 木製品

28区土坑8号、51区井戸跡、51区土坑1号から出土した木製品は、伴出遺物から判断して12世紀と思われる。

28区土坑8号（トイレ状遺構）から、152～155のチュウ木と思われる木製品が出土した。

51区井戸跡から出土した341は刀の鞘、342はチュウ木、364は柄杓の木製品と推定される。

51区土坑1号（トイレ状遺構）から、345～349のチュウ木と思われる木製品が出土した。

#### (5) 種子類

モモ、クルミ、ウメと推定されるものが出土している。第9表を参照戴きたい。

#### (6) その他

砥石？、漆膜、粘土塊などが出土している。

### 3 中世・近世の遺物

#### (1) 国産陶磁器

- a 瀬戸 42区井戸跡から瀬戸産の花瓶 1点と49区土坑 2号から 1点が出土している。
- b 美濃 42区井戸跡から 2点と43区溝跡 3号から美濃産？ 1点が出土している。
- c 唐津 43区溝跡 2号から 2点出土している。
- d 須恵器系 45区PP 1から 1点出土している。
- e 瓷器系 56区盛土中などから出土している。

#### (2) 古銭

永楽通寶が 7点と不明 1点が出土している。永楽通寶（中世末期～近世初頭）は43区溝跡 2号から 1点、43区溝跡 3号から 6点の出土である。9区溝跡 1号から出土した種類不明とした古銭は、北宋の祥府通寶の模鎔錢（中世末期～近世初頭）の可能性が考えられる。

#### (3) 石製品

43区溝跡 1号から墓石、39区溝跡 1号・54区カマド状遺構より墓石が出土している。

#### (4) その他

鉄洋、フイゴの羽口小片などが出土している。時期は不明である。

鉄滓は、2区遺物包含層、51区盛土中から出土している。

フイゴの羽口小片は、30区遺物包含層下位より出土している。出土層位からは12世紀の可能性も考えられる。

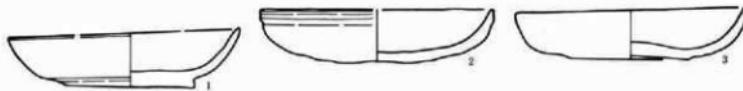
### 4 近代・現代の遺物

平瓦片、軒平瓦片、陶器、陶磁器などが出土している。その中から30区の攪乱層から出土した茶瓶 1点を掲載した。

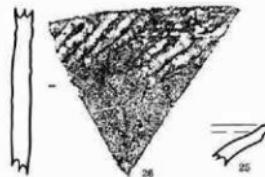
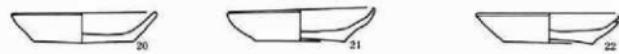
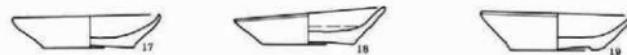
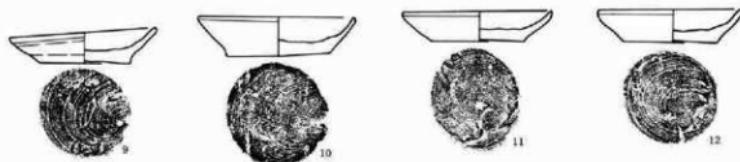
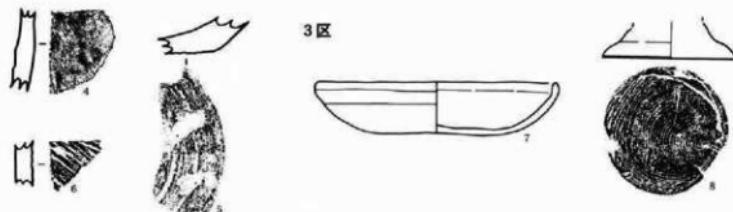
#### <註>

(註 1) 「柳之御所跡出土かわらけ分類試案」『(財) 岩手県埋蔵文化財センター紀要ⅩⅢ』や「かわらけの形態分類と編年」「柳之御所跡報告書分冊 3 考察編」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集を参考に、古山理氏が『泉屋遺跡10・11・13・15次発掘調査報告書』の中で提示した分類を採用する。

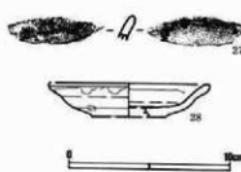
## 2区



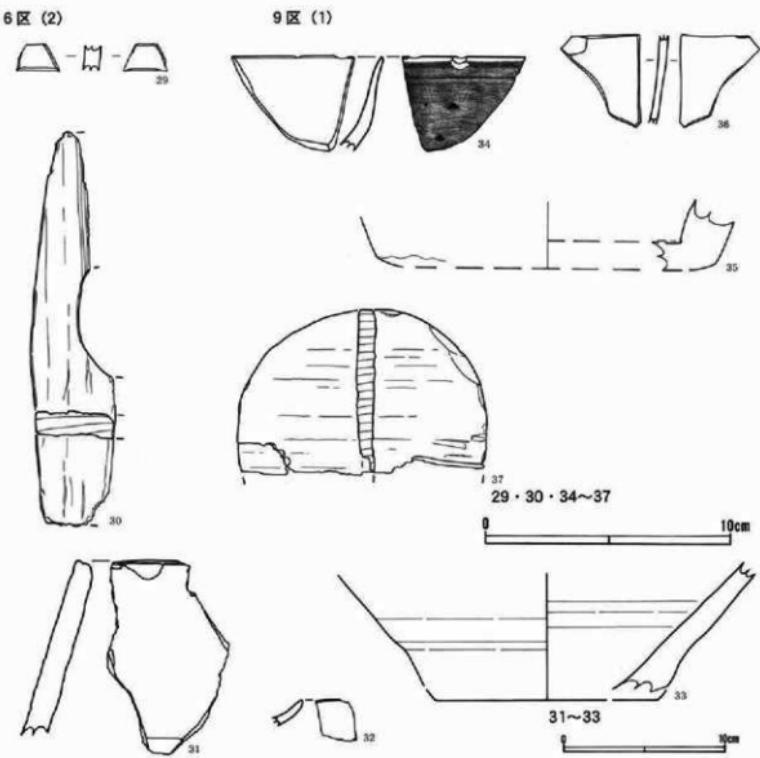
## 3区



## 6区 (1)

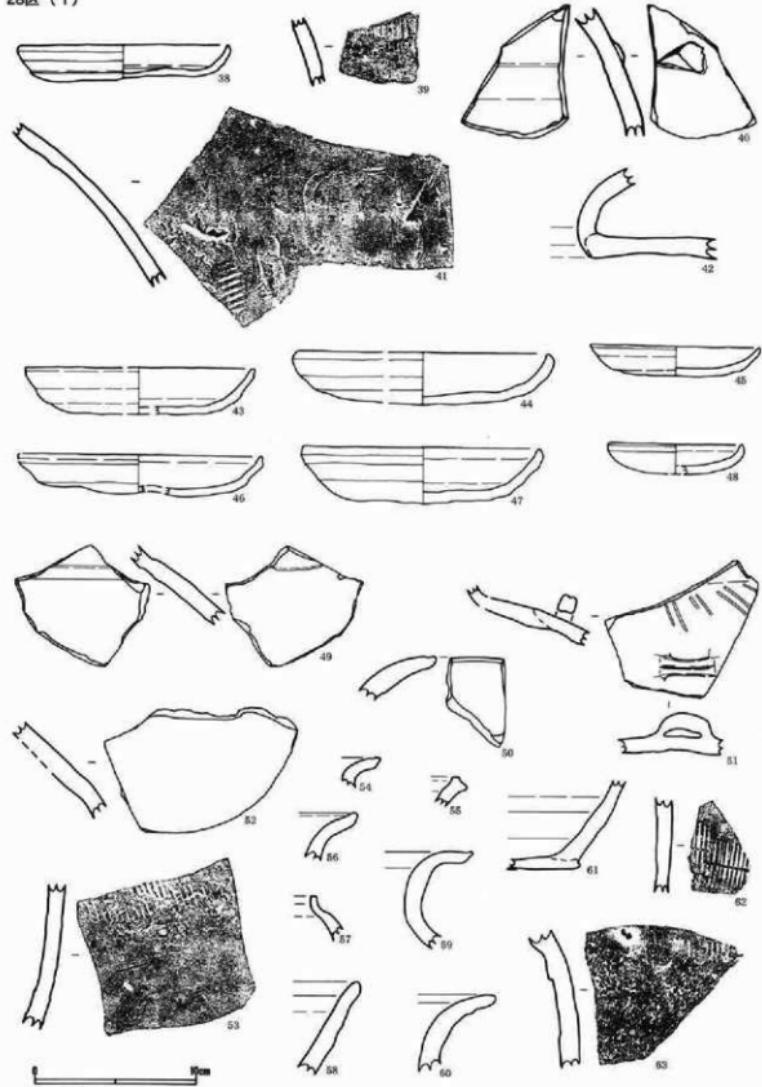


第47図 出土遺物 (1)



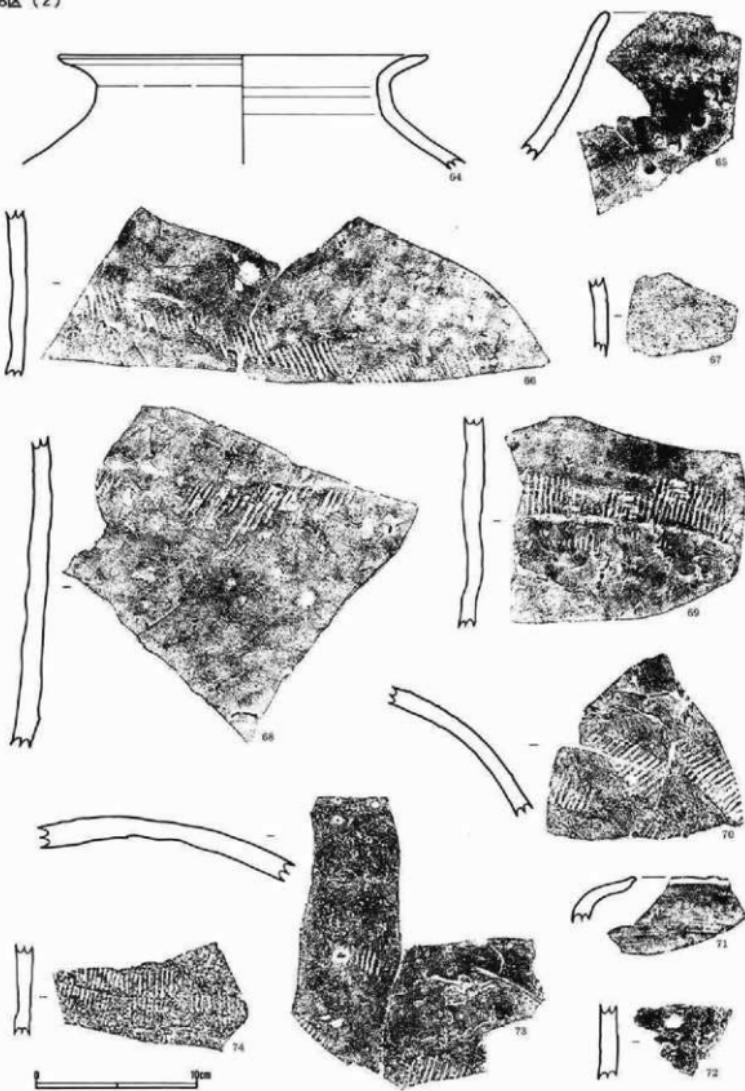
第48図 出土遺物 (2)

28区(1)



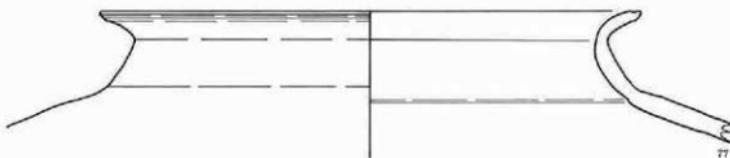
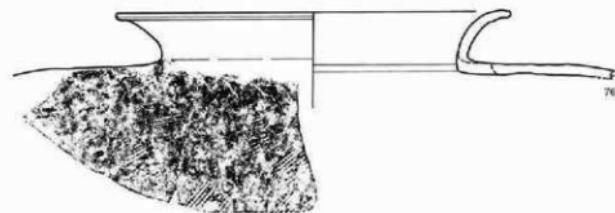
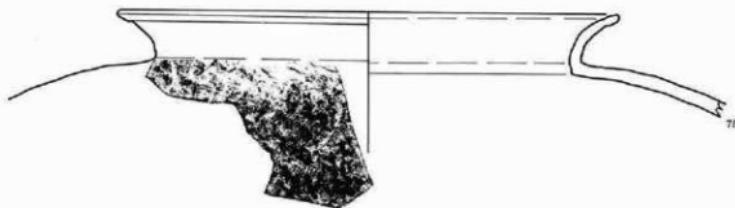
第49図 出土遺物(3)

28区(2)



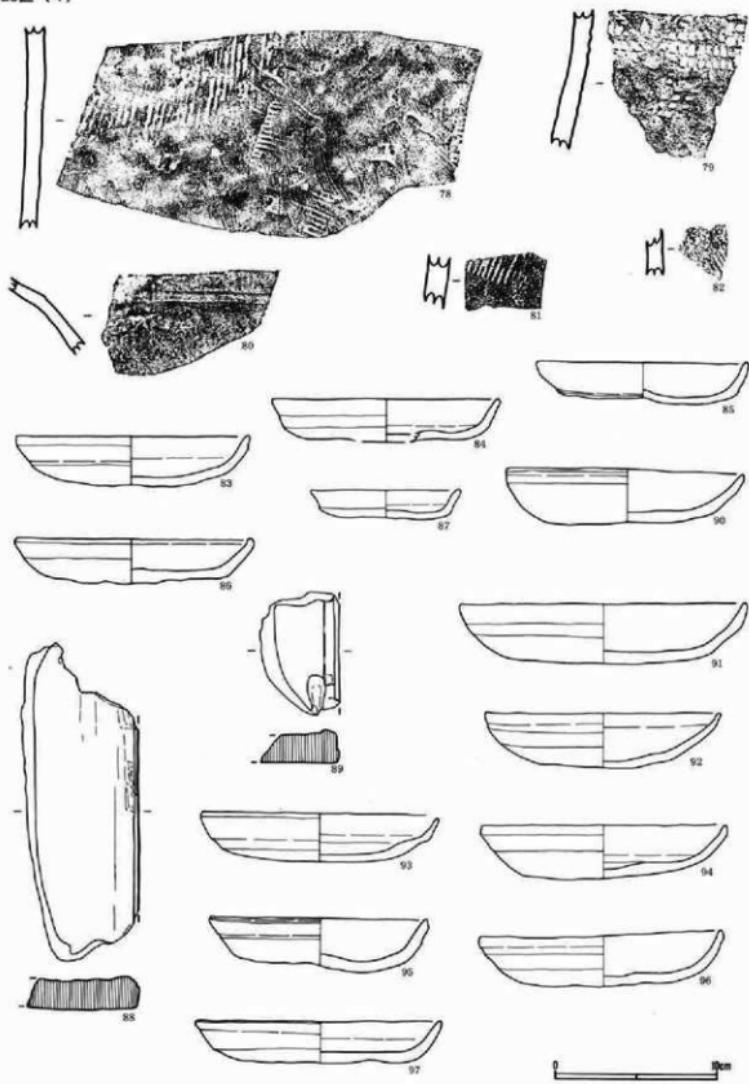
第50図 出土遺物 (4)

28区 (3)



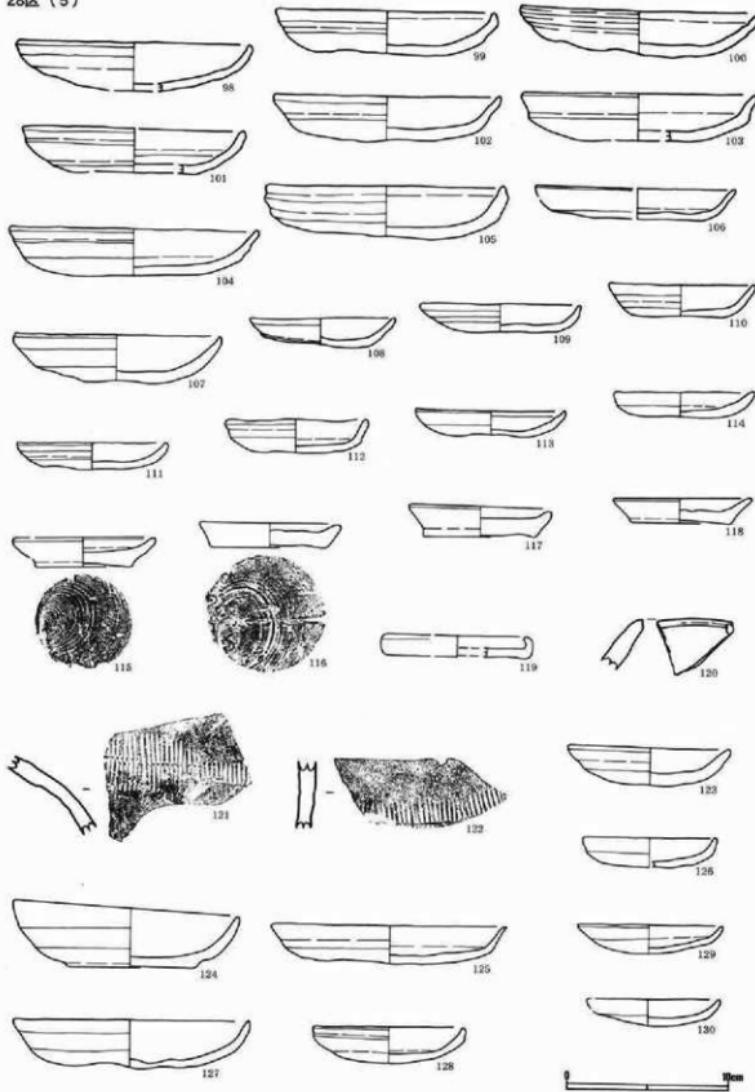
第51図 出土遺物 (5)

28区(4)



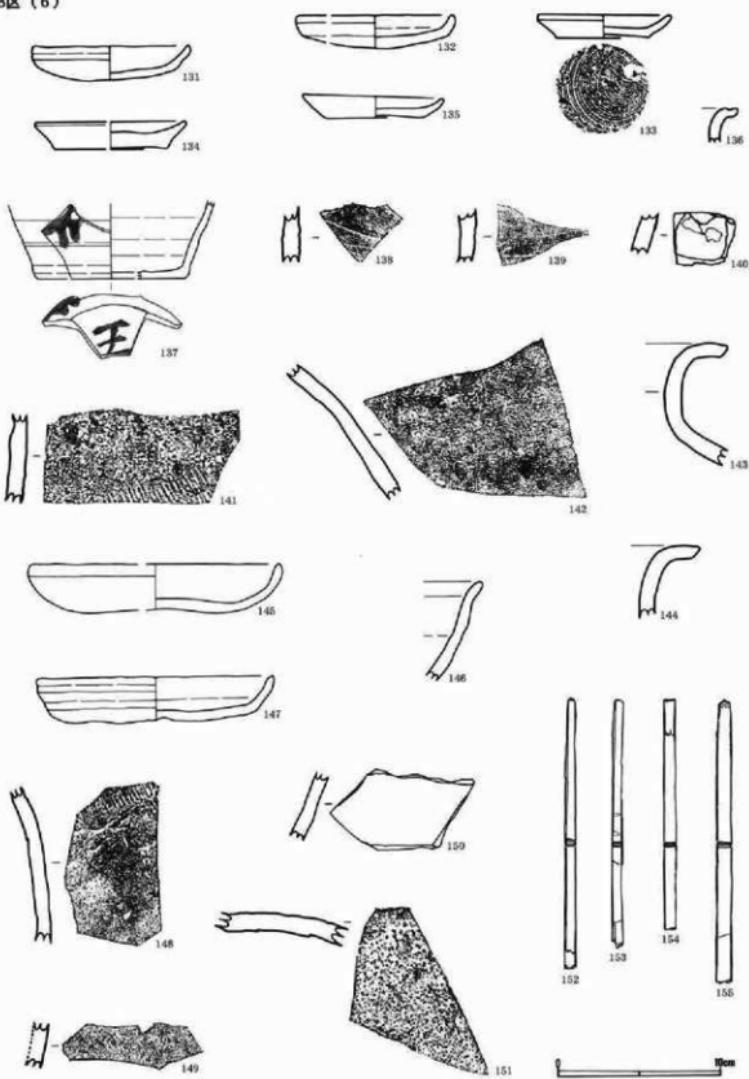
第52図 出土遺物 (6)

28区(5)



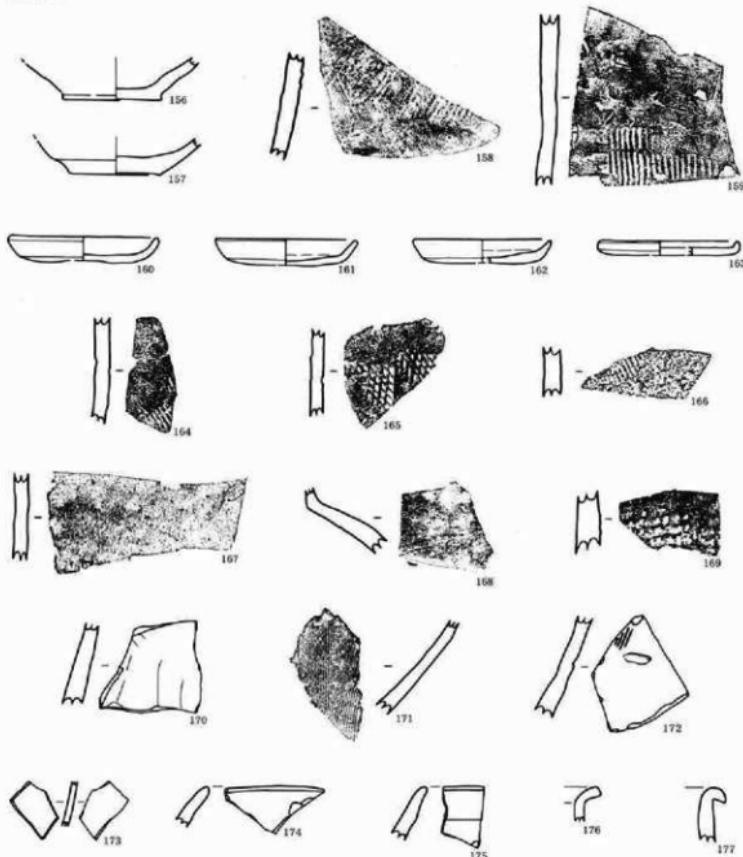
第53図 出土遺物 (7)

28区(6)

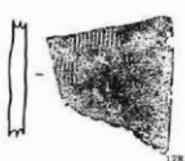


第54図 出土遺物 (8)

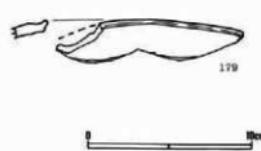
28区 (7)



29区

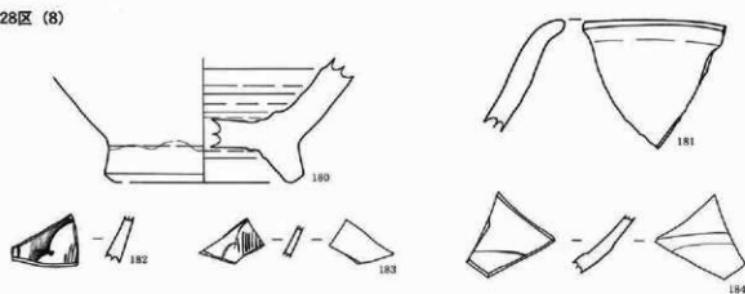


30区 (1)



第55図 出土遺物 (9)

28区 (8)



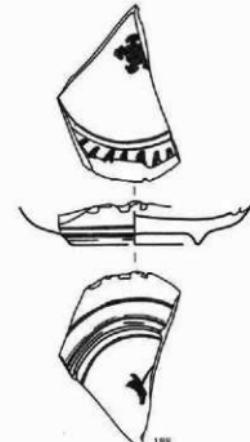
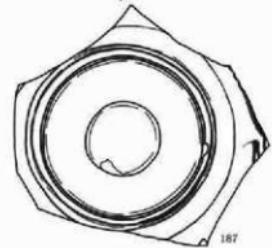
33区 (1)



34区 (1)

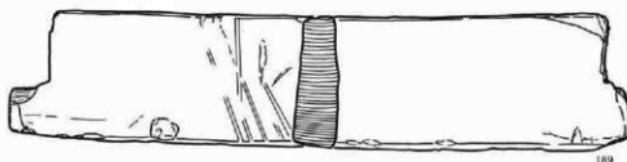


37区 (1)



第56図 出土遺物 (10)

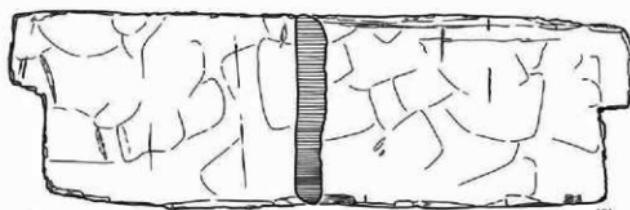
28区 (9)



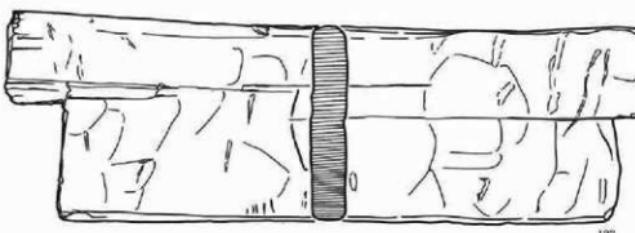
189



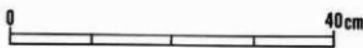
190



191

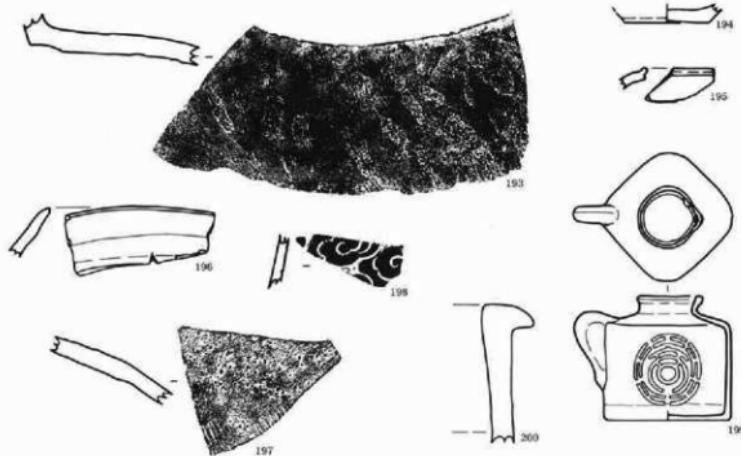


192

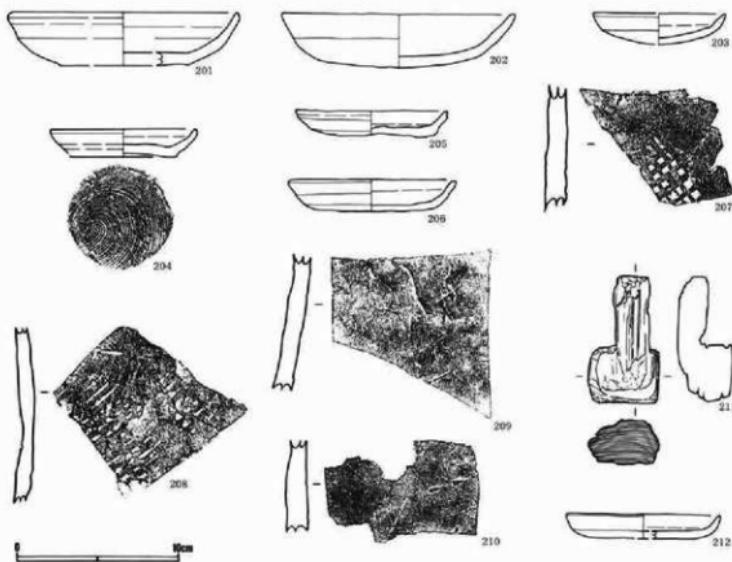


第57図 出土遺物 (11)

30区(2)



31区



第58図 出土遺物 (12)

33区 (2)



34区 (2)



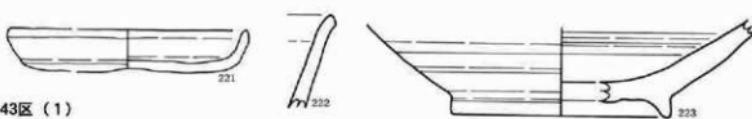
36区



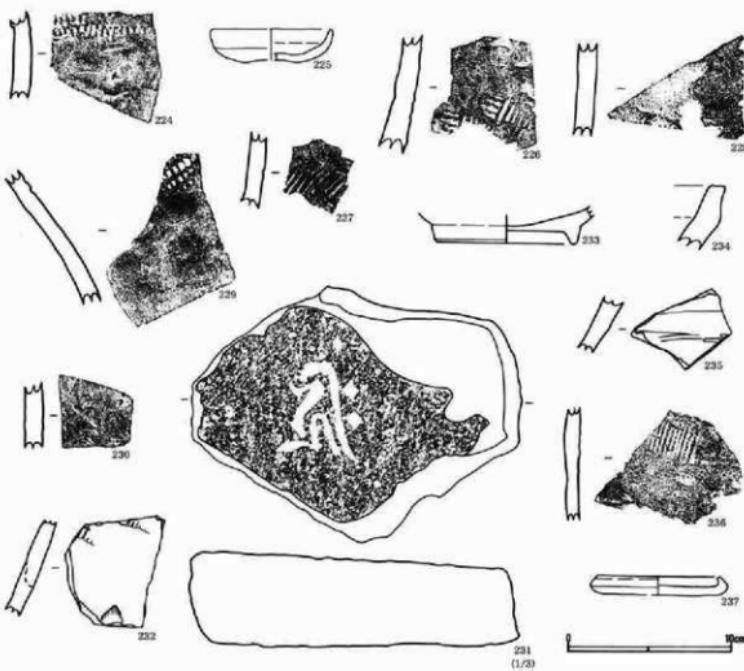
37区 (2)



42区 (1)

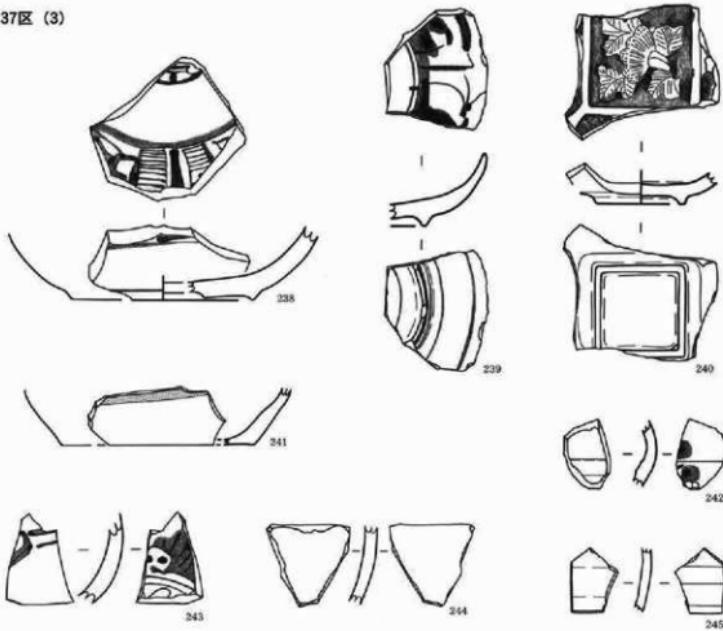


43区 (1)

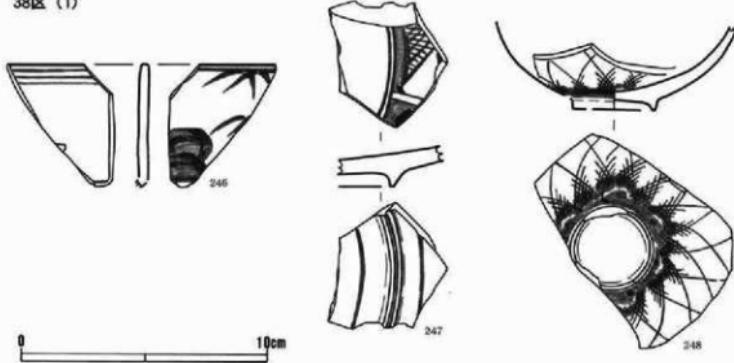


第59図 出土遺物 (13)

37区 (3)

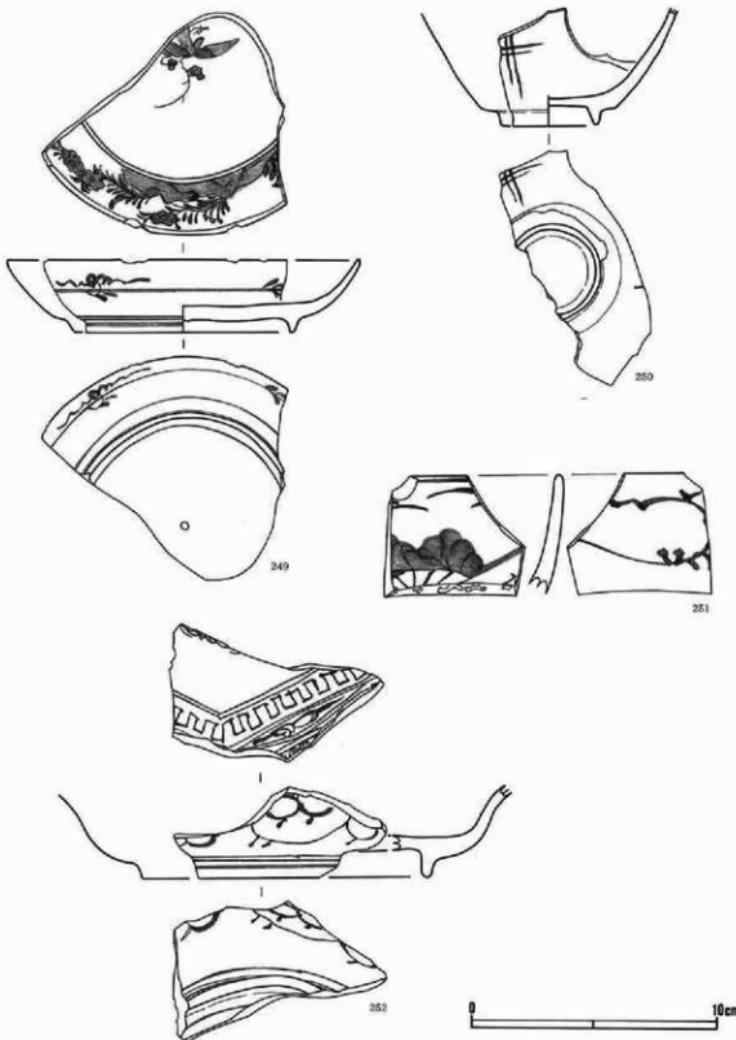


38区 (1)



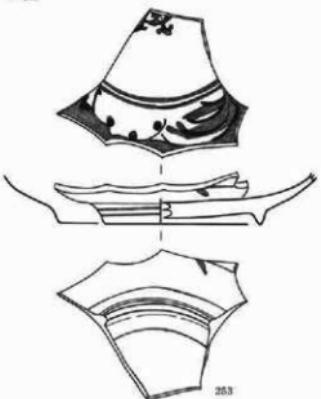
第60図 出土遺物 (14)

38区 (2)

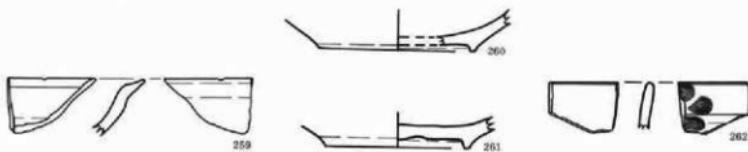
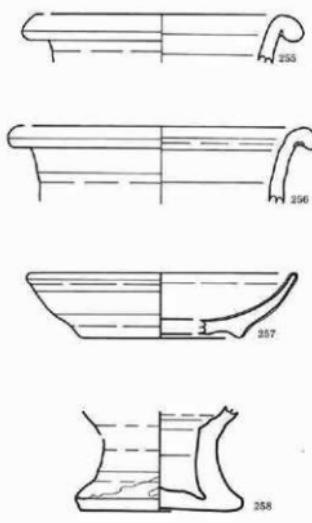


第61図 出土遺物 (15)

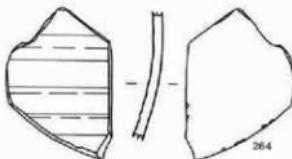
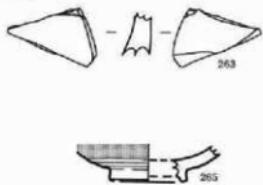
39区



42区

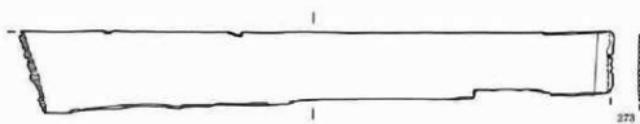
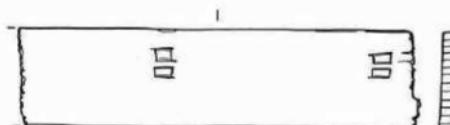
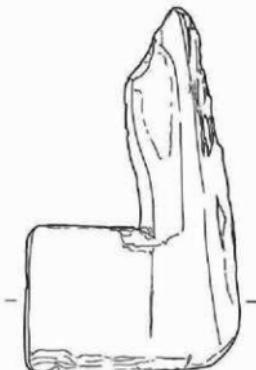
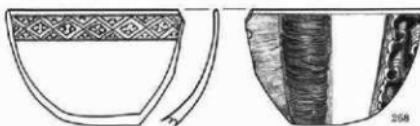


43区 (2)



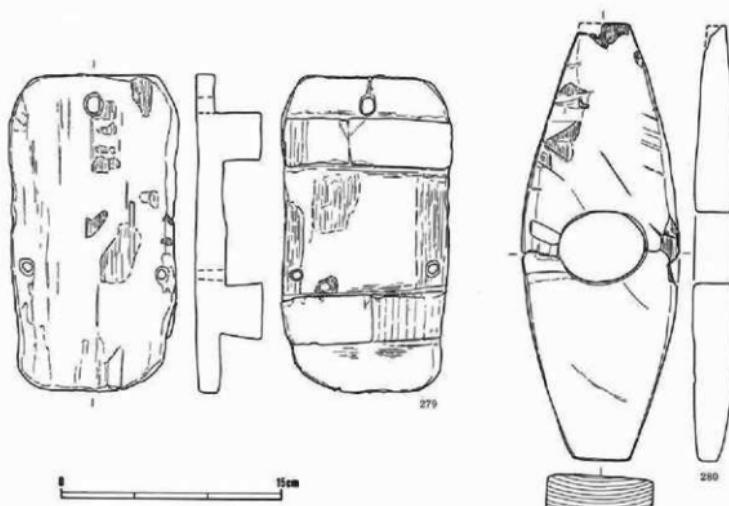
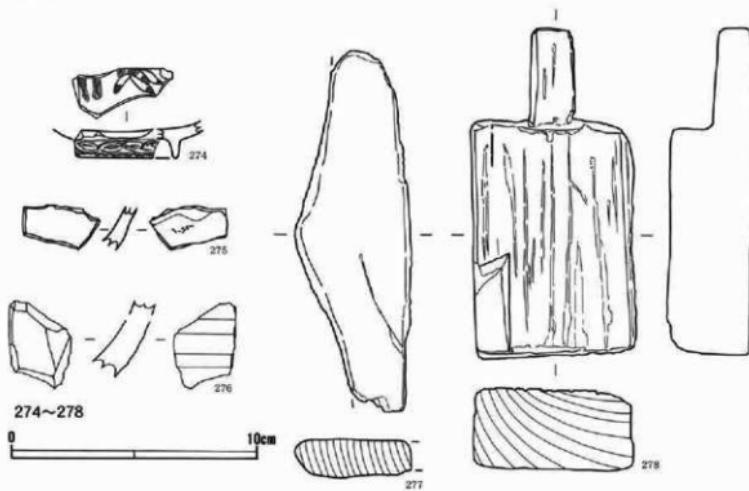
第62図 出土遺物 (16)

43区(3)



第63図 出土遺物(17)

43区 (4)



第64図 出土遺物 (18)

9区(2)



281

43区(5)



282



283



284



285



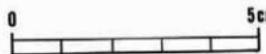
286



287

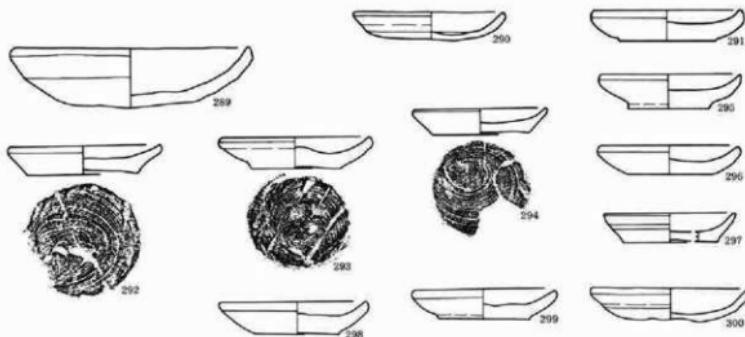


288

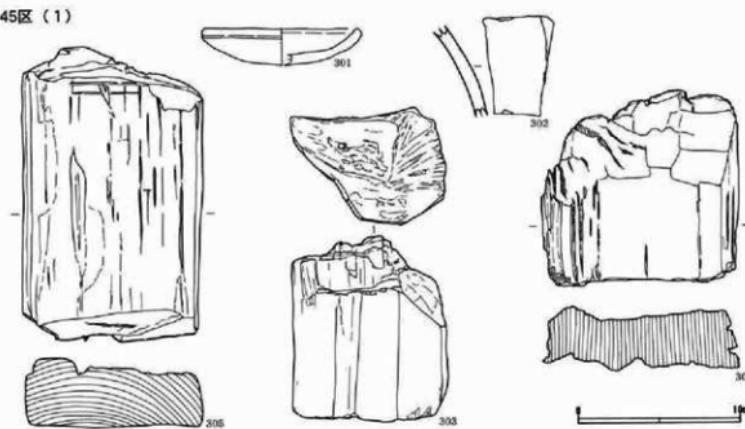


第65図 出土遺物 (19)

44区 (1)

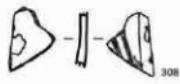
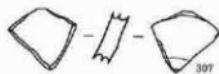
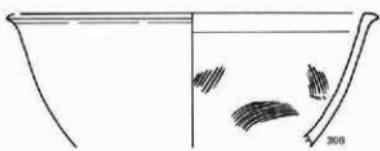


45区 (1)



第66図 出土遺物 (20)

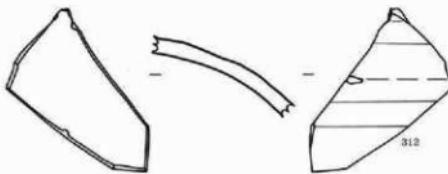
44区 (2)



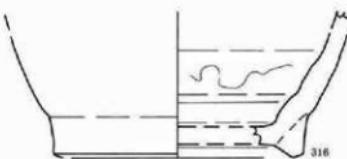
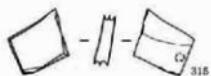
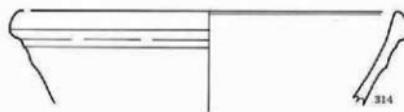
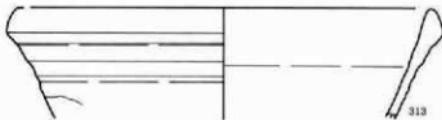
45区 (2)



49区 (1)



50区 (1)



第67図 出土遺物 (21)

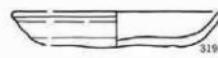
45区(3)



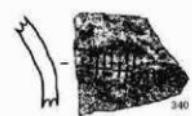
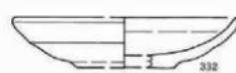
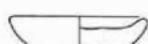
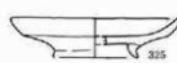
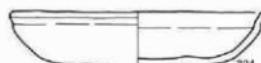
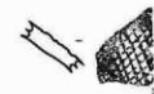
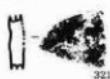
49区(2)



50区(2)

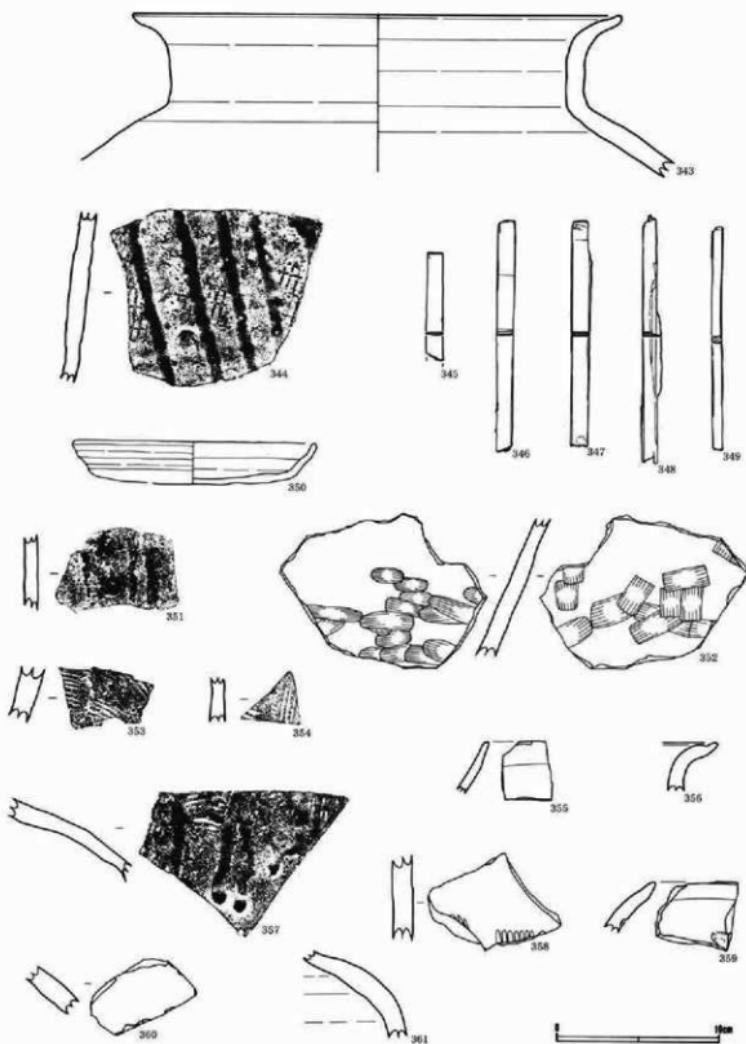


51区(1)



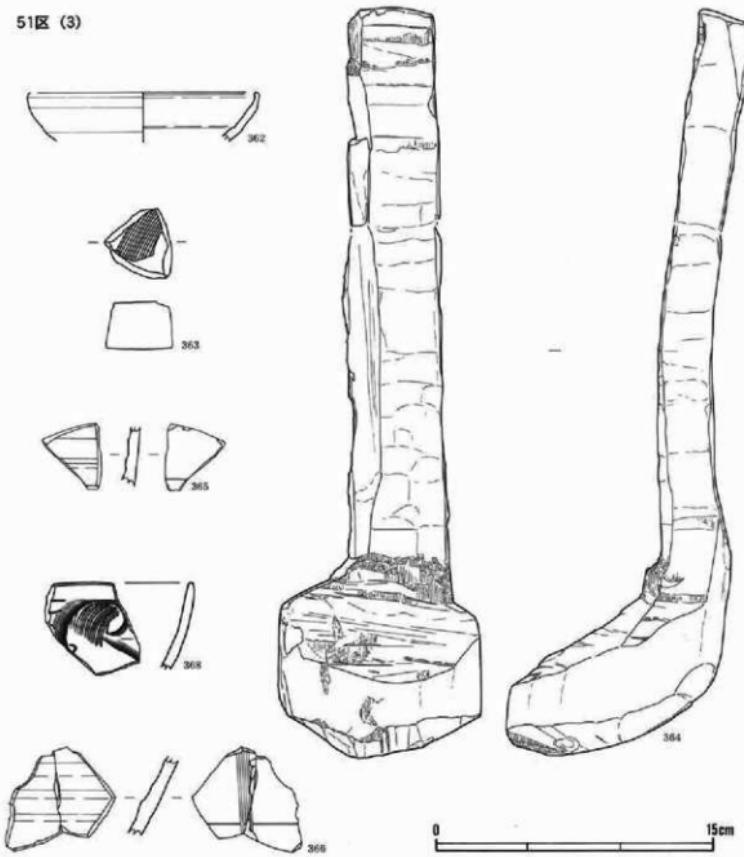
第68図 出土遺物 (22)

51区(2)

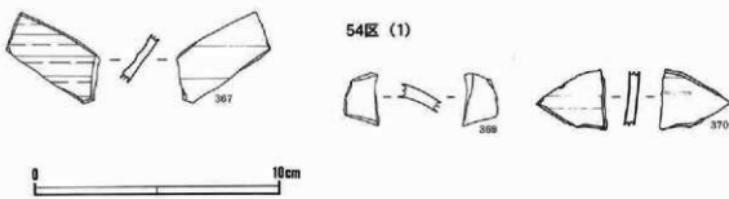


第69図 出土遺物 (23)

51区 (3)

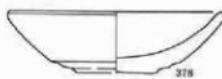


54区 (1)

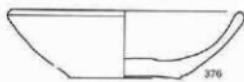
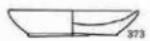


第70図 出土遺物 (24)

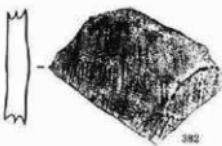
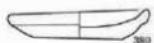
53区



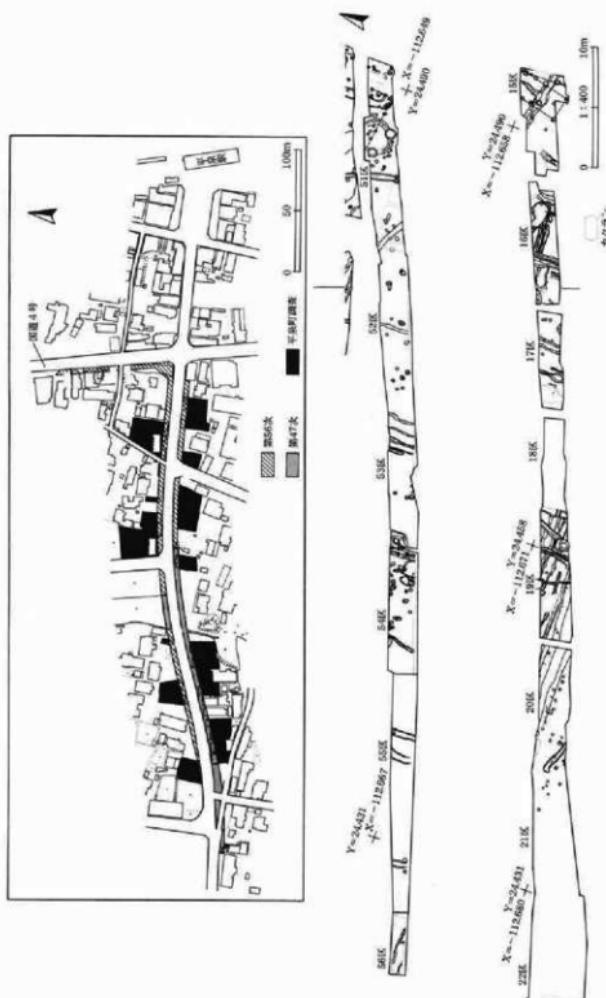
54区 (2)



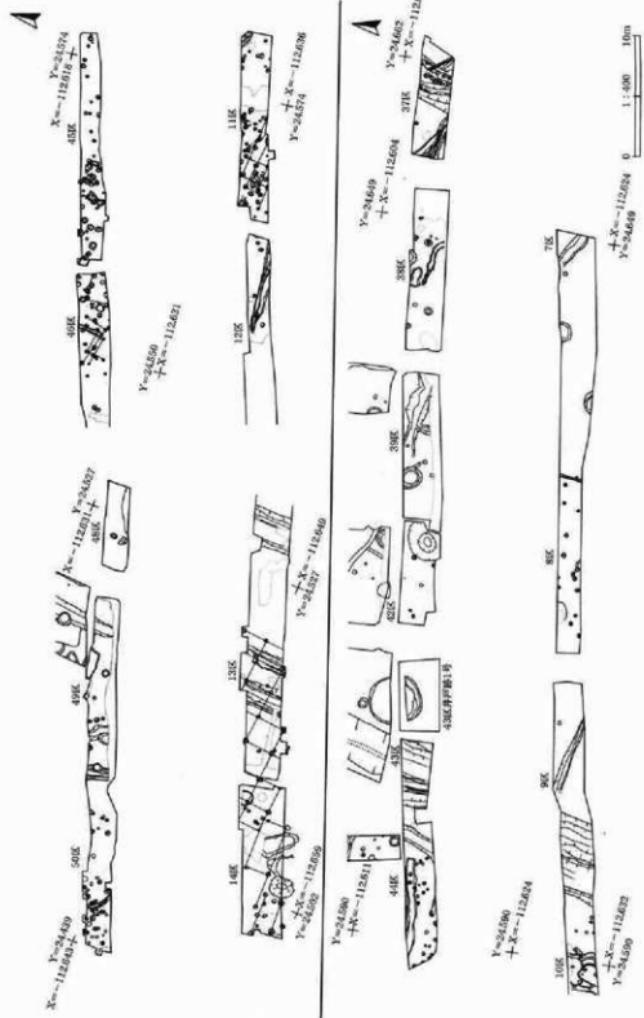
56区



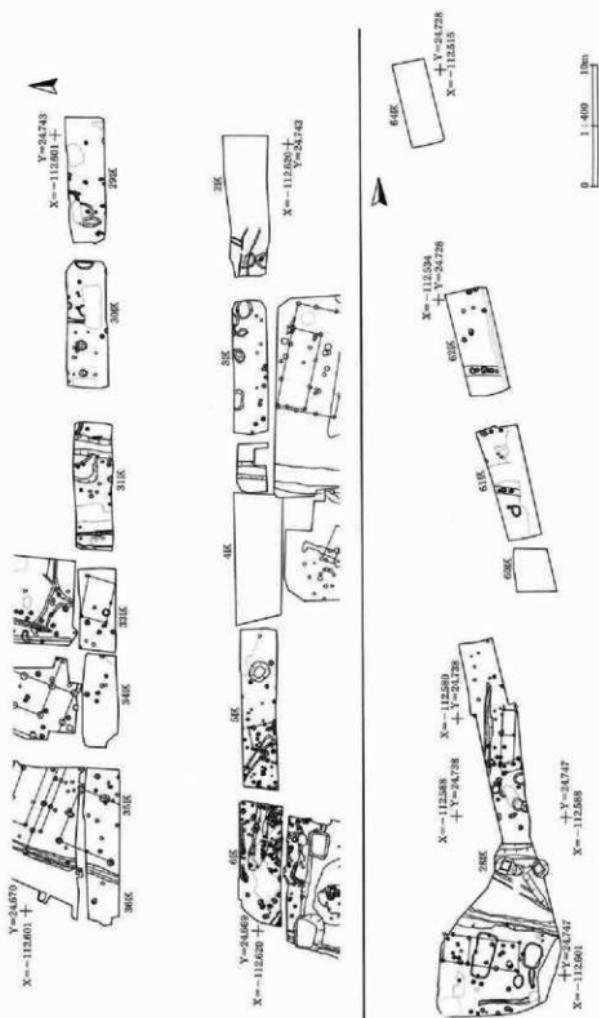
第71図 出土遺物 (25)



第72図 志羅山道路第56次造構配置図（1）



第73図 志羅山遺跡第56次遺構配置図（2）



第74図 志羅山遺跡第56次遺構配置図（3）

## 5. 第56次調査のまとめと若干の考察

第56次調査は、幅3～4mで総全長500m程にわたって調査を行った。検出された遺構は、掘立柱建物跡8棟、溝跡61条、堀跡3条、柱穴列2条、土坑46基、柱穴状土坑620基、井戸跡9基、カマド状遺構3基、木樋1基である。

第72～74図が本調査の範囲及び遺構配置図(1/400)である。一部第47次調査分と平泉町文化財センター調査分(平成8年段階)も合わせて示した。

調査区の幅が全般に狭かったことに起因して、掘立柱建物跡や溝跡など個々の遺構の規模や性格などの詳細については、把握できなかったものが多い。ただし、約500mにもわたって志羅山遺跡に、言わばメスを入れたことで、「都市平泉」を考える上では貴重な資料を提供すると思われる。

本節では、主に12世紀の遺構をとりあげ、「都市平泉」を考える上で特に重要な要素と思われる遺構の長軸方向などに着眼してみた。併せて遺構の年代を相対的に示すかわらけについても分析してみたい。

### 1 掘立柱建物跡

柱穴は620基検出されたが、調査区の幅が狭いことにも起因して建物の復元できたものは8棟のみである。その中で12世紀と推定されるのは28区掘立柱建物跡1号、33区掘立柱建物跡1号・2号、36区掘立柱建物跡1号、51区掘立柱建物跡1号の5棟である。建物の方向としては以下の4種に区分される。

- a N-5° - E 28区掘立柱建物跡1号
- b N-10° - E 33区掘立柱建物跡1号・2号
- c N-25° - E 36区掘立柱建物跡1号
- d N-100° - E 51区掘立柱建物跡1号

これまでの平泉遺跡群の発掘調査事例で見られる、所謂正方位に近い方向をとる建物跡は見られなかった。5°程東に傾く28区掘立柱建物跡1号と、33区掘立柱建物跡1号・2号などに見られる10°程東に傾く建物跡は、出土遺物からは同時期の建物跡である可能性が示唆される。51区掘立柱建物跡1号については、北方向への関係を示す柱配置が確認できなかったが、単純に直交する方向を推定すれば、N-10° - Eの方向を見る建物跡と推定される。N-25° - Eの方向を見る36区掘立柱建物跡1号は、出土遺物ではなく、覆土の様相から時期を推定したものである。第37次調査(平泉町文化財センター)との関連で検討する必要がある。

### 2 溝跡

溝跡は61条を検出している。出土遺物や覆土の様相から、廃絶された時代(埋められた時代)を推定すると、12世紀を主体に中世～現代と思われるものが見られる。

ここでは、12世紀と推定されるものを対象として記述するが、12世紀と同定できなかった大形の溝跡についても合わせて取り扱うこととする。

#### (1) 溝跡の長軸方向について

12世紀と推定される溝跡は32条である。それら溝跡の長軸方向で、下記のa～hに分類した。なお、( )内は開口部径の数値を示した。

a類 N-0° - E 30区溝跡1号 (18cm)、31区溝跡1号 (不明)、31区溝跡4号 (112cm)、43区溝跡1号 (不明)、51区溝跡2号 (70cm)、53区溝跡1号 (26cm) 53区溝跡2号 (24cm)、53区溝跡3号 (100~129cm)、54区溝跡1号 (100cm)、54区溝跡2号 (31cm)、55区溝跡3号 (67cm)  
b類 N-5° - E 31区溝跡3号 (166cm)、43区溝跡2号 (255cm)、55区溝跡2号 (60cm)  
c類 N-15° - E 9区溝跡1号 (280~310cm)、9区溝跡2号 (96cm)、36区溝跡1号 (75cm)、43区溝跡3号 (不明、底部径100cm)、54区溝跡3号 (22cm)  
d類 N-20° - E 44区溝跡2号 (125cm)  
e類 N-85° - E 44区溝跡1号 (70cm)  
f類 N-90° - E 28区溝跡4号 (192cm)、28区溝跡2号 (23cm)、28区溝跡7号 (40~60cm)、56区溝跡1号 (80cm)  
g類 N-95° - E 44区溝跡3号 (34cm)

h類 N-100° - E 以上の角度を取るもの 28区溝跡1号 (60~93cm, N-100° - E)、2区溝跡1号 (65~145cm, N-110° - E)、7区溝跡1号 (84cm, N-125° - E)、49区溝跡2号 (40cm, N-165° - E)、49区溝跡4号 (66~114cm, N-140° - E)、51区溝跡1号 (47cm, N-170° - E)

方向による時期の違い (12世紀の中での細分) が存在するのかどうかは、本遺跡の調査成果からは言及が難しい。溝同士の重複関係から新旧関係を推定できるのは、a類 (N-0° - E)・b類 (N-5° - E)・c類 (N-15° - E) の方向を見る溝跡である。

県道毛越寺線を挟み同一の溝跡である9区溝跡1号 (N-15° - E)と43区溝跡2号 (N-5° - E)の関係で考えれば、b類の溝跡とc類の溝跡は同時期か若しくは短い時期差で捉えられる可能性がある。また、43区溝跡1号 (N-0° - E)と43区溝跡2号 (N-5° - E)・3号 (N-15° - E)の新旧関係からは、a類 (N-0° - E)の溝跡が古い結果を示す。ただし、43区溝跡1号と同一の溝跡は、県道毛越寺線を挟む調査区である9区からは検出されなかった。9区溝跡1・2号とした新しい溝跡に破壊されているのか、あるいは10区 (第47次調査)との境界付近に存在したものか。

## (2) 大形の溝跡

大形と小形の基準について、その定義付けは難しい問題であるが、本項においては開口部径が150cmを越えるものを大形として扱うこととする。

上述した開口部径150cm以上の溝跡は以下の5条が該当する。

9区溝跡1号 (280~310cm, N-15° - E)、28区溝跡4号 (192cm, N-90° - E)、31区溝跡3号 (166cm, N-5° - E)、43区溝跡2号 (255cm, N-5° - E)、43区溝跡3号 (不明、底部径100cm, N-15° - E)

28区溝跡4号を除き、真北方向から東に5°傾く (b類) ものと15°傾く (c類) ものの2種類に大別される。

90°傾く28区溝跡4号については、区画溝的な性格の造構であるならば、直交する角度はほぼ正方位の造構である可能性があり、国道4号線の対岸となる来年度以降の調査 (第73次調査) 結果次第では、ある程度の方向性や性格付けができるものと思われる。

31区溝跡3号は、第40次調査 (平泉町文化財センター)で検出された溝跡の続き部分に相当する。大形、小形で区分すれば大形に比定されるが、開口部径や深さから言って中形と言える規模の溝跡である。

9区溝跡1号と43区溝跡2・3号については、今回の調査で検出された溝跡の中で、最大規模のもので、区画溝的な性格が考えられる。詳細については（3）の項で記述する。

### （3） 9区溝跡1・2号と43区溝跡1・2・3号について（突出して規模の大きな溝跡）

今回検出した溝跡の中で、重複関係からおおよその変遷（新旧）が把握できたのが、9区と43区で検出された溝跡である。

9区の溝跡と43区の溝跡は、県道毛越寺線を挟んで同一の溝跡であり（註1）、第31次・57次調査（平泉町文化財センター）で検出されたものにつながる大形の溝跡（註2）である。

溝跡の変遷（新旧関係）については以下のようになる。

9区溝跡1号（N-15° - E）→9区溝跡2号（N-15° - E）

43区溝跡1・3号（1号と3号の新旧は不明、1号はN-0° - Eで3号はN-5° - E）→43区溝跡2号（N-15° - E）

対応関係については、9区溝跡1号と43区溝跡3号が同一のもので、9区溝跡2号と43区溝跡2号が同一のものと捉えている。

9区側では、9区溝跡1号と9区溝跡2号は新旧に問わらず同方向を示す。対して43区側では、N-0° - E及びN-5° - Eを見る43区溝跡1・3号が、N-15° - Eを見る43区溝跡2号より古いことが把握できた。43区溝跡1号（N-0° - E）と43区溝跡3号（N-5° - E）の新旧関係が掴めないことから、N-0° - Eの遺構とN-5° - Eの遺構のどちらが古いかは厳密には不明である。ただし、9区溝跡1号と43区溝跡3号が推定通り同じ溝跡であるならば、N-5° - Eの溝跡とN-15° - Eの溝跡は地點によって若干方向の差異が見られただけで、同時期に位置づけられる可能性も考えられよう（註3）。

## 3 堀跡

堀跡は9区、52区、53区から各1条づつで、計3条検出している。9区堀跡1号の覆土下位で須恵器片1点を出土した以外に共伴する遺物を持たない。よって、覆土の様相（註4）から時代を12世紀と推定したものである。堀跡の方向は、9区堀跡がN-105° - E、52区堀跡がN-0° - E、53区堀跡がN-0° - Eである。9区堀跡は、長軸方向に延長すると仮定すれば、9区溝跡1・2号とほぼ直角に交わる関係にあり、9区溝跡1・2号の関連（関係）施設である可能性も考えられる。よって、9区堀跡が推定どおり12世紀の遺構であるならば、不明であった9区溝跡1・2号の構築時期（廃絶時期はある程度推定可能）についても、少なくとも12世紀には存在した可能性がある。

## 4 土坑

土坑は47基検出している。その中で12世紀と推定されるのは27基である。

3区土坑1・2・5号、28区土坑1・2・3・4・5・6・7・8・9号、30区土坑1・2・3号、38区土坑1・2・3号、49区土坑1・2・3号、51区土坑1・2・3号、54区土坑1・2号

突出される土坑としては、かわらけ埋納土坑（遺構）、遺物廃棄土坑、トイレ状土坑などが挙げられよう。

### （1） かわらけ埋納土坑（遺構）

3区土坑2号からは、14点の完形品のかわらけが出土した。3区土坑2号は、開口部径31cm、底部径18

cm、深さ20cmの小形の土坑である。第3図は、かわらけの出土状態を段階的に示したものである。精査当初はかわらけの底面を上にして重なった状態で出土する様相を示していたが、精査途中からはかわらけの埋め方（置き方）に、規則性は窺えない状態であった。

出土した14点のかわらけは、全て小形のロクロ成形によるもので、rd類に分類されるもののみである。

### (2) 遺物廃棄土坑

多量のかわらけが28区土坑1号（48個体分と推定）と28区土坑2号（27個体分と推定）から出土した。両者ともに竪穴式に掘られた大形の土坑である。第15図を参照戴きたい。

28区土坑1号は、検出時の段階からかわらけが埋まっている様子が窺えた土坑で、覆土は暗褐色粘土質シルトを主体とする。かわらけの接合関係は、1層同士、あるいは2層同士が多く、若干数1層と2層出土が接合した。覆土最上位（検出面付近で1層の中でも最上位）と床面直上層（2層最下位）同士での接合関係はほとんど示さず、また、4・5・6・7・9層とした壁際土層や壁際床面直上層からの出土がない。

土層の堆積については、覆土中には粘土ブロックの混入もなく、レンズ状堆積を呈する様相であることから、自然堆積層と判断した。ただし、今回の調査で検出された他の12世紀の遺構の覆土と比べて、異質な色調の土（黒褐色土に近い）であり土質は堅い特徴があることから、人為堆積である可能性も強く否定はできない。

28区土坑2号は、28区土坑1号の東約3mに位置し、長軸方向はほぼ同一の方向を取る。覆土は若干輪まりが良い暗褐色粘土質土を主体とする。かわらけなどの遺物は、覆土下位の3層から主体的に出土している。土層の堆積については、28区土坑1号と同様に、自然堆積層と判断されるが断定はできない。

上述した2基の土坑の遺物廃棄について、短い時間の中で廃棄行為が行われたのか、若しくはある程度の時間幅があるのかは、本稿で行ったかわらけの分類が時間尺（編年）となり得るのかどうか判断できないことから、言及が難しい。この問題については、6の項で再度触れることとするが、かわらけの編年が確立を見なければならない事実確認が難しいと思われた。

次ぎに、付属する柱穴について、28区土坑1号は底面及び壁際から5基（内1基は確実に本土坑より新しい）、28区土坑2号は土坑内からは未検出であるが、短軸の中央土坑外から1基検出された柱穴は間連性が窺える位置関係と判断される。両者とも配列関係からは、上屋構造などの存在は推定できない。

遺構の性格付けについて、付近からは火を炊いた痕跡などは確認されていない。かわらけ以外にも常滑産の陶器片（複数個体の破片資料のみ）や木材（なんらかの部材と思われる）が併せて出土している状況から考えて、かわらけ廃棄専用の土坑とは捉えられない。かわらけ自体はなんらかの儀式に関係した遺物と考えられると思われるが、本土坑が儀式に関係した土坑（物送りなどが考えられようか）とは今回の調査成果からは判断できない。不用となった物の廃棄土坑（ゴミ穴）的なものではなかったかと推定しておきたい。

### (3) トイレ状土坑

覆土の様相や出土遺物などから、人間の糞尿の処理となるらかの関連が推定される土坑である。28区土坑8号、49区土坑4号、51区土坑1号、51区土坑2号の4基は、覆土の様相から所謂トイレ状土坑に該当するものと思われる。また、強くは断言できないが、28区土坑3号にも、その可能性がある。

上記した5基の中で、ある程度の時代が特定できる51区土坑1・2号をとり挙げ、若干の考察をしてみた。51区土坑1・2号は、かわらけ（大形の手づくね主体）や常滑産の陶器を作り、また51区井戸跡との重

複関係から（井戸が古い）、12世紀の中でも後半期（第4四半期）の可能性が高いと判断される。

トイレ状土坑と推定したものの覆土は、全般に有機質に富み、植物の種子と思われるものが含まれ、またチュウ木（註5）と思われる木製品が伴うことを特徴とする。それらが便所として機能したのか、2次的に廃棄する上坑なのかについては明確には不明である。51区土坑1号の遺物の出土状況（比較的大きな常滑の破片が覆土上～中位で出土）からは、糞尿廃棄専用の土坑というより、ゴミ全般もしくはゴミ廃棄も併用した土坑ではないかと推定される。

次ぎに、土坑の位置関係について、51区土坑1号と51区土坑2号及び第17次調査（平泉町文化財センター）で検出されている土坑は、N-60°-Wの方向で3基並列の関係を示す。精査時は、掘立柱建物跡を構成していた柱穴を、トイレ状土坑に転用した可能性を考えていた。ただし、N-60°-Wの長軸方向は、普通は12世紀の建物跡の方向とは相違する。それと、51区土坑1・2号の間隔（土坑の中心付近同士で計測）が約220cmであるのに対して、51区土坑1号と第17次調査出土土坑の間隔は190cm前後と若干相違する関係にある。また、51区土坑1・2号は51区井戸跡（12世紀の遺物が出土している井戸跡）の覆土中であることを考慮すると、手づくねかわらけ出現以降という時間幅の中で、井戸→掘立柱建物跡→トイレ状土坑の変遷はむりがある。よって、掘立柱建物跡の柱穴からの転用の可能性は、否定的と言う結論としたい。ただし、井戸に関連した施設、例えば井戸の廃棄に関係した土坑（広義の儀式などを含め）や上屋構造（屢根）などが存在し、その柱穴からの転用である可能性は考えられると思う。

最後に、上述してきたようなことから、51区付近は井戸やトイレ状土坑を頻繁に構築するようなエリア、例えば、建物の中において下級的な役割の場、若しくは庭の隅などであったことが推定される。

## 5 井戸跡

井戸跡は9基を検出した。出土遺物や覆土の様相から、廃絶された時代を推定すると、12世紀と推定されるのが5基、12世紀もしくは中世と推定されるのが1基、中世と推定されるのが1基、近現代と推定されるのが2基である。5区土坑1号のように、井戸を掘る途上（断念したものか）と推定される土坑もある。

### (1) 12世紀と推定される井戸跡

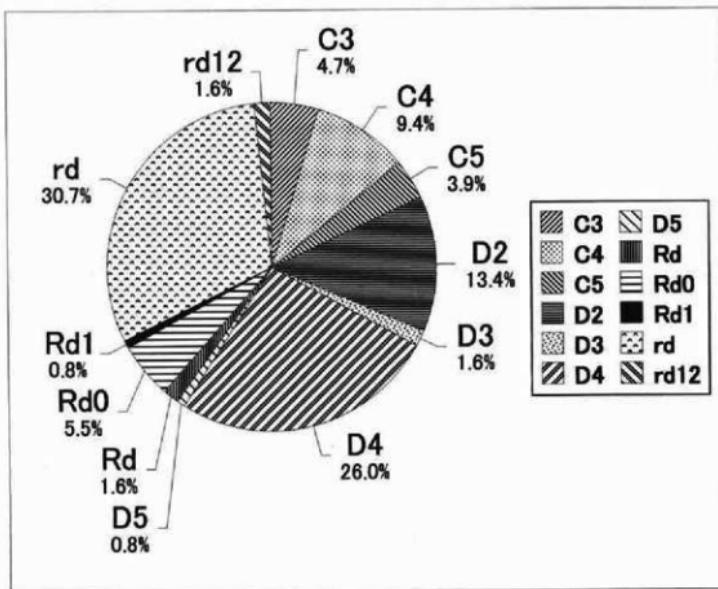
12世紀と推定した井戸跡は、8区井戸跡1号、28区井戸跡3号、42区井戸跡1号、43区井戸跡1号、51区井戸跡1号の5基である。その中で、8区井戸跡1号、28区井戸跡3号、43区井戸跡1号の3基については、出土遺物がなく、覆土の様相から判断して推定するものである。42区井戸跡1号については、厳密には12世紀の遺物と16世紀の陶磁器片などが混在して出土しているが、断面形がロート状を呈することから12世紀の可能性で捉えることとする。

12世紀と推定される井戸跡の特徴をまとめると、開口部付近の断面形がロート状を呈し、新しい時代と推定されるものと比較して全般に開口部径が大きく、深いものが多い。覆土の様相としては、粘土質上（基本層序のⅢ層とした地山粘土）による人為堆積によるものがほとんどである。全般に覆土上位は遺物を包含するが、覆土中位～下位にかけては無遺物層である場合が多く、底面に近い最下位層で、若干の砂の混入が認められる。木製品などは、傾向的に底面付近で出土する場合が多い。

### (2) 51区井戸跡について

51区井戸跡は、出土遺物や他の遺構との重複関係から、12世紀に廃絶されたことを断定できる唯一の井

出土地点	出土量	備考	出土地点	出土量	備考
2区溝跡1号	2.0kg		44区溝跡1号	10点	
2区遺物包含層	5.50kg		44区溝跡2号	0.50kg	
3区土坑2号	14点	全てロクロ小形	49区溝跡4号	0.50kg	
9区溝跡1号	3.50kg	手づくね主体	49区土坑2号	0.50kg	手づくね主体
28区溝跡1号	10.0kg	大形手づくね主体	49区土坑3号	1.0kg	
28区溝跡7号		手づくね主体	50区盛土	4.0kg	大形手づくね主体
28区土坑1号	48点	大形手づくね 30点	51区溝跡2号	1.50kg	
		小形手づくね 11点	51区井戸跡	15.0kg	
		小形ロクロ 7点	51区土坑1号	3.0kg	
28区土坑2号	27点		51区土坑2号	2.0kg	
43区溝跡1号	0.50kg	手づくね主体	51区遺構検出作業中	7.0kg	小形手づくね主体
43区溝跡2号	2.50kg	手づくね主体	53区溝跡3号	0.50kg	
			56区溝跡1号	7.50kg	小形ロクロ主体



第75図 かわらけ分類別構成

戸跡である。

遺物の出土状況としては、覆土上位はかわらけや陶器片が相当量含まれ、覆土中位～下位にかけては出土遺物が皆無で、底面付近に相当する覆土最下位（他の層と比較して砂の含有が多い）で木製品が出土した。

51区井戸跡は、51区土坑1・2号（何れもトイレ状土坑）と重複関係にあり、本遺構が古い。ただし、51区土坑1・2号についても出土遺物などから12世紀に同定される遺構である。よって、本井戸跡は12世紀の中でも古い時期に廃絶された可能性が考えられる遺構でもある。

## 6 かわらけの出土状況について

本項では今回の調査で最も多く出土した遺物であるかわらけを取り挙げる。

かわらけの出土地点については、12世紀と思われる溝跡・土坑を中心に遺物包含層や盛土中から出土した。第75図には主な出土地点とその出土重量（おおよその個体数が把握できるものは点数で明記）を表した。

かわらけの分類基準については、第4節で上述したとおり、古田理氏が行ったものを採用した。内容については、『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書』の267～269頁を参照戴きたい（本稿315頁にも掲載）。

分類別構成（出土量の割合）は、第75図に示した円グラフのようになる。r d・D 4・D 2・C 4類の順で多く出土していることがわかる（註6）。

かわらけの年代的位置付けについて、松本達史によるかわらけの編年試案（1993年松本後に1995年発刊の報告書中の考察編で若干の修正を行っている）が試みられている。同編年試案を参照すると、本稿でD 2・D 3としたかわらけ（註7）は、1175年代後半以降に出現したのではないかと推定されている。その他に分類されたものについては、絶対的な結論は導いていないようである。

本遺跡の中で、層位的な出土状況を掴めた資料としては、28区土坑1号、28区土坑2号、51区井戸跡が挙げられる。それらは、遺物廃棄が短期間で行われたのか、若しくは若干の時期差が存在するのかは検討を要する。上記の3遺構出土かわらけを層位的に示したのが第76図で、共伴した陶器類も一部併せて掲載した。3基の遺構からの出土状況をまとめてみる。

### (1) 28区土坑1号

28区土坑1号のかわらけの出土状況としては、覆土上位の1層と覆土中～下位の2層からの出土が主体を占め、床面からの出土は希少と言える。また、中国産の陶磁器は出土していない。なお、床面上出土のものは、2層出土に含めた。

層位毎にまとめてみる。

1層は、C 3・C 4・C 5・D 4・D 5・r d類が出土している。主体となるのは、C 4・D 4類である。図上での細分は行わなかったが、精査記録で1層の最上位（検出の段階で露出していたもの）として取り上げたものの中にC 3・C 4・D 4・r d類がある。

2層は、C 3・C 4・C 5・D 2・D 4・r d類・内折れが出土している。主体となるのは、C 4・D 2・D 4類である。常滑が同層から4点（内2点は常滑編年のⅡ～Ⅲ期と推定される、1150～1190年）出土している。

2a層は、D 4類が出土している。

床面は、C 4・D 4類が出土している。

8層は、数片の出土をみたが、全て分類不可能な小破片であった。

上記のことから、以下のことがわかった。

- (a) ロクロ成形によるかわらけは、小形のものだけであり、大形のものは出土していない。
- (b) C 4・D 4類は、1層～床面まで出土をみている。
- (c) 2層で主体を占めるD 2類は、1層からの出土はない。
- (d) 4・5・6・7・9層からは、かわらけの出土がない。

#### (2) 28区土坑2号

28区土坑2号のかわらけの出土状況としては、覆土中～下位の3層からの出土が主体を占める。なお、中国産の陶磁器は出土していない。

層位毎にまとめてみる。

1層は、D 3類が出土している。

2～3層は、D 2・D 4類が出土した。2層出土については、明確に同層出土と言えるものがない。129(D 2類)は、2層最下位若しくは3層最上位と言うべき出土層位である。

3層は、C 4・D 2・D 4・r d類が出土している。常滑、獣投及び施釉陶器(137)が併せて出土している。施釉陶器は12世紀後半の中国産と推定される。

3～3a層は、C 4・r d類と渥美が出土している。

3a層は、D 4・R d類が出土している。なお、同層は、東壁際にのみ堆積が見られる層である。3層との明確な新旧関係(堆積時間の新旧)は不明である。第15図の断面(K-K')からは、3a層が新しいように図示を行っているが、状況から見て壁際層である本層が古いと判断される。

上記のことから、以下のことがわかった。

- (a) D 3類は1層からのみ出土している(ただし、1点の出土である)。
- (b) D 2類は3層から主体的に出土している(129は上記のとおり微妙であることを追記して置く)。
- (c) R d類とした大形のロクロかわらけが3a層からのみ出土している。
- (d) 4・5層からの出土がない。

#### (3) 51区井戸跡

51区井戸跡のかわらけの出土状況としては、覆土最上位の1・2層からの出土が主体を占め、5層から若干量の出土がある。

層位毎にまとめてみる。

1層は、R d 0・r d類が出土している。

2層は、D 4・r d類が出土している。主体はD 4類である。

5層は、D 4類が出土している。

3・4・6・7層からの出土はない。

I:記のことから、以下のことがわかった。

- (a) 1層からは、手づくねかわらけが出土していない。
- (b) 本造構から出土した手づくねかわらけ(2層・5層)は、D 4類だけである。
- (c) 3・4層から造物が出土していない状況を考えると、1・2層と5層には、若干の時間差が存在

する可能性が考えられる。

51区井戸跡と重複関係を示す遺構に51区土坑1・2号（何れもトイレ状土坑）がある。51区土坑1・2号は、井戸跡の覆土を截り構築されている遺構で、相当量のかわらけの出土があるものの、小片がほとんどである。よって、手づくね主体であることはわかるが、分類に比定できたのは手づくねかわらけのC4類2点だけである。

#### （4）かわらけについてのまとめ

28区土坑1号、28区土坑2号、51区井戸跡からの出土かわらけを比較すると、以下のことが言える。

（a）28区土坑1号で見られたC3・C5・D5類は、28区土坑2号及び51区井戸跡から出土していない。

（b）28区土坑2号3a層と51区井戸跡1層に見られたRd類（大形のロクロかわらけで、厳密には51区井戸跡出土はRd0類である）は、28区土坑1号からは出土していない。

（c）D2類は、28区土坑1号・28区土坑2号ともに覆土下位からのみ出土している。

（d）D4・rd類は、3基ともに認められる。

（e）51区井戸跡からは、C4類の出土がない。51区井戸跡と重複関係にある51区土坑1・2号及び28区土坑1・2号からは出土している。

上記の結果から、かわらけの年代について若干考察してみたい。

① C4類は、Rd0類より後出的（やや新しい）な可能性がある。

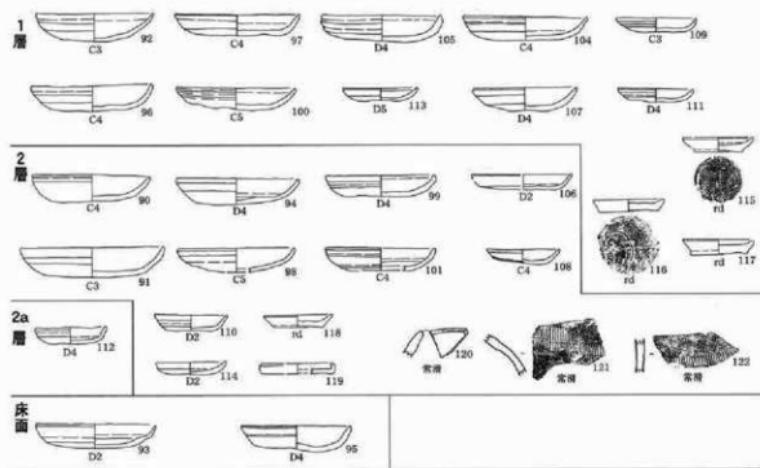
② D2類は、D5類より若干古い可能性が考えられる（松本編年においてD2類かわらけは1175年代後半以降としているため、矛盾する結果となる）。ただし、D5類の出土数が極端に少ないとから、時期差ではなく、製作数に起因する可能性もあることを追記する。

③ rd類と共に共伴関係を示した手づくねかわらけは、C3・C4・C5・D2・D4・D5及び大形のロクロ成形であるRd0類と内折れである。D3類（今回の調査では非常に希少）を除き、全ての種類と共に共伴関係を示したことから、rd類は製作された時間幅が長い可能性で考えられる。

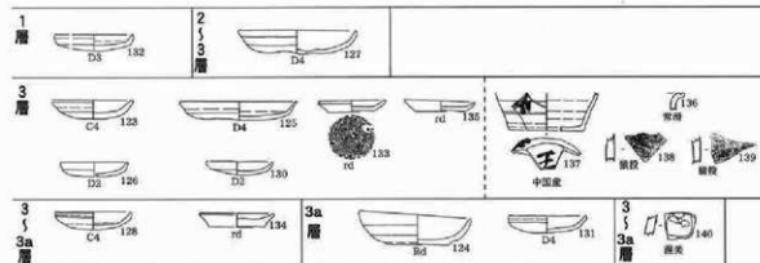
本項の分析である程度の言及が可能と思われるが、Rd0類とした大形のロクロかわらけである。51区井戸跡1層出土のRd0類が、51区土坑1・2号で出土しているC4類より古い時期と仮定すると、Rd0類を出土した遺構は、12世紀後半よりやや古い可能性が示唆される。今回の調査でRd0類のかわらけが出土した遺構としては、2区溝跡1号（C5類共伴）、31区溝跡1号（D4類共伴）、36区溝跡1号、54区溝跡2号である。それら遺構からのかわらけ出土状況を見ても、C4類のかわらけとは非共伴関係を示した。かわらけの編年に問題提起できる可能性は残るものと捉えられる（C4類とRd類が共伴したのは28区土坑2号のみ、ただし層位的にはRd類が下位と捉えられる）。

また、Rd0類のかわらけが出土した溝跡の中には、所謂正方位の長軸を見るもの（31区溝跡1号、54区溝跡2号）も含まれるが、傾向的には長軸方向の問題との関連性については言及できないように思われる。

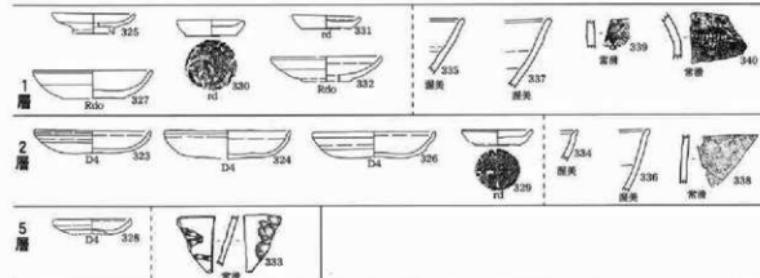
本調査では年代測定などは行っていないため、遺構の重複関係と層位的事実からの資料で言及を行った。よって、製作年代の差ではなく、製作数の問題や焼成者（使用者）の違い（階級や好み）による可能性も考えられる。それと、本稿で採用した口縁部や口唇部の形態や調整による分類では、手づくねかわらけの年代を細分する尺（編年）とはなり得ないのでないかと思われた。参考までに、第77図にはかわらけの法量を示した（註8）。かわらけの編年については、胎土と言った要素への着眼も検討してみるべきかもしれない。



28区土坑 1号



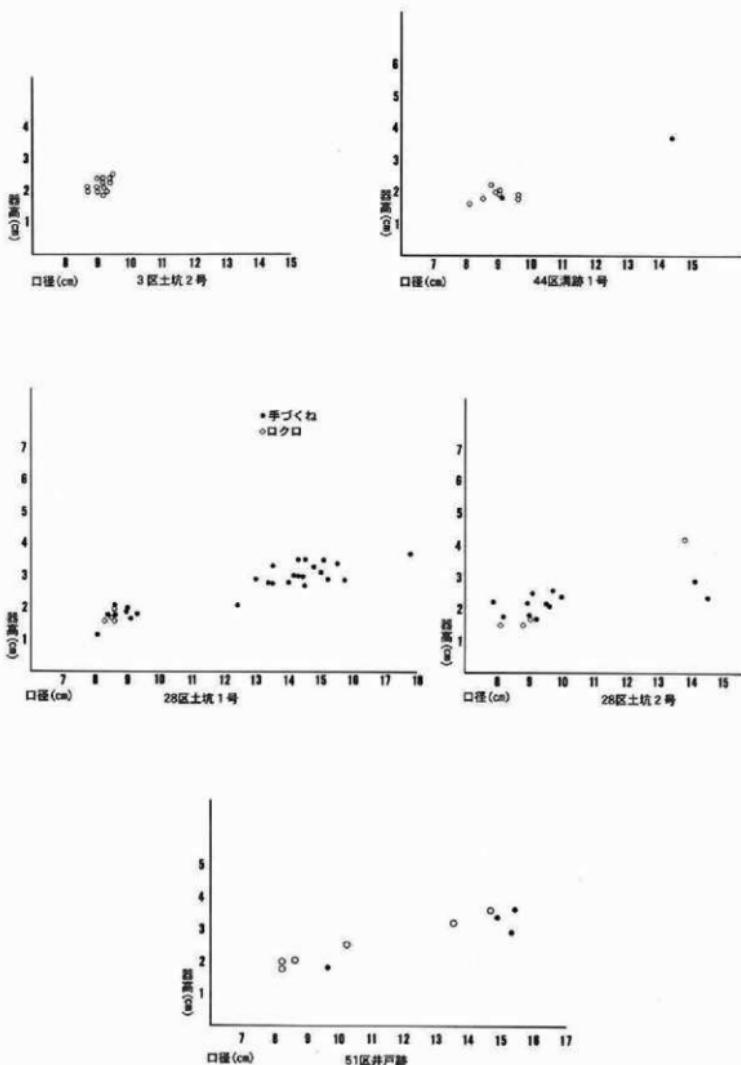
28区土坑 2号



51区井戸跡

S≈1/6

第76図 28区土坑 1、2号、51区井戸跡出土かわらけ



第77図 かわらけ法量図

最後に、結果として本遺跡の出土状態からは編年に寄与できる状況ではなかったように思われ、現段階での見解としては手づくねかわらけ出現以降の短い時間差の中で廃棄されたかわらけが多かったと捉えておきたい。

## 7 総括

今回の調査の内容から、12世紀の土地利用状況などを把握するため、12世紀の遺構の分布や占地について概略をまとめて第56次調査の総括とする。

### (1) 12世紀の遺物出土調査区

先に12世紀を代表する遺物であるかわらけ、陶器、陶磁器の出土調査区（遺構内外合わせて）を挙げてみる。

かわらけを出土した主な調査区としては、2区、3区、28区、31区、43区、44区、49区、51区、54区、56区が挙げられる。

陶器（常滑・瀬美など）を出土した主な調査区としては、2区、28区、30区、31区、43区、51区、56区が挙げられる。

中国産陶磁器（白磁・青磁など）を出土した主な調査区としては、6区、9区、28区、42区、43区、44区、50区、51区が挙げられる。

### (2) 12世紀の占地について

12世紀の遺物出土状況から調査区を大きく捉えると、以下の4つのエリアが12世紀においてなんらかの人間活動が行われた場であったことが窺える（位置関係は第72～74図の遺構配置図を参照戴きたい）。

① 2・3区（現在の国道4号の交差点付近～スーパー丸茂付近） 主な遺構（施設）としては、溝跡、遺物包含層など。

② 28～31区（現在の国道4号の交差点付近～県道毛越寺線沿い岩手日々新聞付近） 主な遺構（施設）としては、掘立柱建物跡、溝跡、土坑（トイレ状含む）、井戸跡、遺物包含層など。

③ 9区・42～44区（現在の県道県道毛越寺線沿い岩手銀行・東北銀行付近） 主な遺構（施設）としては、溝跡、井戸跡など。

④ 49～56区（現在の県道県道毛越寺線沿い志羅山旅館を中心に東西各50m程のエリア） 主な遺構（施設）としては、溝跡、堀跡、土坑（トイレ状含む）、井戸跡など。

### (3) 遺構毎の占地

遺構毎の空間占地について、(2)の項で記述したエリア単位でまとめてみる。

a 挖立柱建物跡 ②のエリアに見られる。また、遺物出土が皆無であった33～36区にも12世紀と思われる掘立柱建物跡の分布が見られる。

b 溝跡 区画溝的機能であることが推定される人形の溝跡は、②・③のエリアに見られた。また、比較的小形の溝跡は、①・④のエリアに見られる。

c 土坑 ②・④のエリアに、遺物廃棄の特殊性が窺える土坑の分布が見られる。併せてトイレ状土坑の分布もこのエリアを主体とする。

- d 井戸跡 井戸跡は、②・③・④のエリアを主体に分布する。特に②のエリアに多い。
- e 遺物包含層 遺物包含層は、①・②のエリアを主体に分布する。

#### (4) まとめ

本節では、主に12世紀の遺構を取り上げ記述を行った。狭い範囲の調査ではあったが、土坑や井戸跡といったその全貌がある程度明らかとなった遺構もある。ただし、それら個々の遺構の詳細な内容については、解明できなかった点が多く、特に遺物廃棄土坑における覆土の堆積要因や廃棄時間の幅などはその最たるものである。また、掘立柱建物跡、溝跡、堀跡のように平面的に大きな広がりを持つ遺構については、今後に検討課題を多多提供するものである。

志羅山遺跡の発掘調査は今後も継続的に行われる予定であることから、全長500mに亘って行った第56次調査の成果が、今後の調査の水先案内の役割を果たすことを期待してやまない。

最後に、本稿執筆並びに遺構配置図作成にあたっては、平泉町文化財センター菅原計二氏・八重樫忠郎氏に多大なご教示を賜った。また、室内整理においては、瀬川幸子、藤村裕子、朝倉恵津子、菊池貴子、中村裕子、佐々木志麻の6名に御尽力いただいた。文末ながら記して心から感謝申し上げる。

#### <註>

(註1) 43区からは3条の溝跡が確認されたのに対して、9区からは2条の溝跡しか確認できなかった。調査時の状況としては、現地表面からかなり深い溝跡であり、銀行と接する調査地で交通量も多い場所であることから、安全対策として矢板（シートバイル）を設置して調査を行った。よって、土層断面図の作成や観察、及び精査は非常に困難であり、尚且つ短時間で行わざるおえなかった経緯がある。おそらくは、9区溝跡1・2号に破壊されているか、若しくは9区と西で接する10区（47次調査分）との間付近に確認できなかっただ根拠である。

(註2) 9区・43区で検出された大形の溝跡は、区画溝の可能性が考えられる。時期について、出土遺物からは近世に改修（少なくとも2回）された後に、廃止されたと捉えられる。構築時期については、明確な位置付けができない。長轍方向的には、12世紀に構築された可能性を示唆する方向を示すが、今後に課題を提供するものである。

(註3) 9区・43区で検出された溝跡は、区画溝と捉えられる大形の溝跡であり、今後の「都市平泉」を考える上でも重要な構成要因と思われる。よって、調査担当として所見を記述しておきたい。N-5°-Eの43区溝跡3号とN-15°-Eの9区溝跡1号が同一のものであることに對しては、櫛土の様相や規格から考えて、その可能性は概めて高いと思われる。先に述べたとおり、地点によって方向に差異が存在するのか、あるいは方向の捉え方（同定ミス）に問題があるものか。

(註4) 今回検出された溝跡は、全て布振り部分と板施跡部分と思われるアリから構成される。

(註5) 本調査で出土しているチュウ木と推定される木製品については、これまでの事例と比較して、断面形に違いが見られるものがある。本当にチュウ木であるのか疑問視される。

(註6) 遺構内外及び掩蔽不掩蔽を問わず第56次調査出土かわらけの中で、分類に比定できるものを対象とした。なお、分類に比定できなかつたものとしては、摩滅の著しい小破片などが該当する。

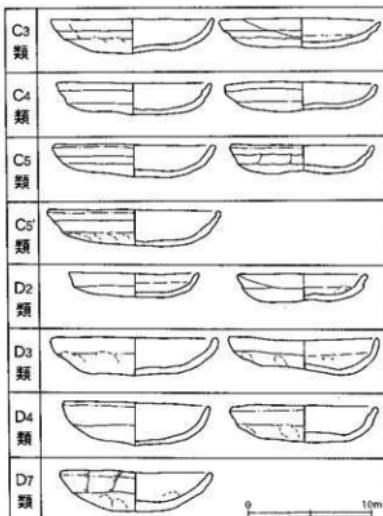
(註7) 復唱となるが、本稿で採用した吉田分類は、松本分類を参照としたかわらけ分類である。よって、松本氏の編年室とそのまま対応させてもらしつかないと判断した上で記載を行った。

(註8) 第77図にはある程度まとめた出土量が得られた遺構のかわらけを取り上げた。法量図は、器高と口径の数値を示した。

#### <参考文献>

- 菅原計一 (1993年)『平泉町遺跡群発掘調査報告書志羅山遺跡第21次調査』岩手県平泉町文化財調査報告書第34集 平泉町教育委員会
- 菅原計二 (1995年)『平泉町遺跡群発掘調査報告書志羅山遺跡第31・32・37次調査』岩手県平泉町文化財調査報告書第49集 平泉町教育委員会
- 菅原計二 (1994年)『平泉町遺跡群発掘調査報告書志羅山遺跡第23・29・30次調査』岩手県平泉町文化財調査報告書第44集 平泉町教育委員会
- 森田 勉 (1995年)『太宰府陶磁研究』森田勉氏遺稿集、追悼集刊行会
- 山本 博 (1970年)『井戸の研究』緑書舎

- 中野晴久他 (1994年) 「生産地における縄文について」シンポジウム「中世常滑焼をめぐる」資料集  
 <岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター関連>
- 国生 尚 (1984年) 「高木遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第93集
- 佐々木務 (1995年) 「志羅山遺跡第14次・25次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第216集
- 三浦謙一・松本達也 (1995年) 「柳之御所跡第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集
- 羽柴直人 (1997年) 「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集
- 松本達也 (1992年) 「柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味」『紀要 XIV』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 松本達也 (1993年) 「柳之御所跡出土のかわらけ縄文試案」『紀要 XIV』
- 松本達也 (1995年) 「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要 XV』



松本達也 1993年柳之御所跡出土かわらけ分類試案の図1を一部改変

手づくねかわらけ分類図

#### 手づくねかわらけ分類表



W1: 窓を兼ねてようとしていた場合はC (は長物)とする

W2: C4とD4との相別は下記の「W2: 窓とよく似た形状の窓(はよって窓など)」

W3: 窓無 (W) つまり(窓の窓)→ 窓無(窓)→ 角形に缺る(口付) A

0

#### ロクロかわらけ分類表

Rd' 1-1

底くぼ溝 417-1  
 小窓 1387-1 (底くぼ溝で引いていた)

ヒドリロコ窓

ヒドリロコ小窓

ヒドリロコ大窓

ヒドリロコ窓

窓: 窓合が全く無い

窓: 窓合がある

底くぼ溝(内窓)

0: 窓無い・窓なしW.

1: 窓有り

2: 窓有り2以上

3: 窓有り3以上

4: 4窓以上

5: 5窓以上入る

第1表 遺構表(1)

年	真番号	回収番号	遺構	開口部位置(cm)	底	基	深さ	備考
	1	2区土坑1号		129×87	105×62	7		橢円形
	1	2区土坑2号		119	90	17		
3	1	2区溝1号		65~145	50~100	14	N-110°-E, 土坑1号(古)を切る	
	1	2区溝2号		42	32	5	N-20°-E	
	2	3区土坑1号		173×76~	117×53~	10	橢円形 光形かわらけ出土.	
4	2・3	3区土坑2号		31	18	8	埋設? かわらけ多数出土	
4	2	3区土坑3号		170×120	140×95	14	橢円形	
4	2	3区土坑4号		196	180	7	不整形 PP13(古)を切る	
4	2	3区土坑5号		129×70	56×33	37	橢円形	
	2	3区土坑6号		83×52	66×44	9	橢円形	
6	4	5区土坑1号		170	90	82	逆台形状	
6	4	5区溝1号		63	42	26	逆台形状 N-125°-E	
	6	6区溝1号		110	45	14	逆台状 k-95' 左PP12PP47PP48PP49PP50PP75PP77PP100PP101H(古)を切る	
	6	6区溝2号		40	33	15	ビーカー状 N-125°-E	
6-7	6	6区溝3号		20	17	10	ビーカー状 N-90°-E	
6-7	6	6区溝4号		20		17	N-90°-E	
6-7	6	6区溝5号		32	27	17	逆台形状 N-110°-E	
8	8	7区溝1号		84	53	10	蝶皿状 N-125°-E	
9	8-9	8区井戸1号		192	110	75~	自然木出土.	
9	8-9	8区井戸2号		157	117	157		
	8	8区土坑1号		77	53	8		
9	8-9	8区溝1号		22	15	5	近世? N-5°-E	
10	10-11-12	9区溝1号		300	50	175	N-15°-E	
10	10-11-12	9区溝2号		96	46	150	溝1号(古)を切る N-15°-E	
10	10	9区溝4号		40~50	20~30	45	N-105°-E	
13-16-17	12	28区井戸1号		162		237		
13-16-17	12	28区井戸2号		178×141	103	160	井戸3号(古)を切る 條線み有(85×85 正方形)	
13-16-17	12	28区井戸3号		89	79	112		
11	13-15	28区土坑1号		377×155	360×146	20	橢円形 かわらけ多量出土 N-15°-E	
11	13-15	28区土坑2号		220	150	32	かわらけ多量出土 N-10°-E	
12	18-19	28区土坑3号		97	53	70	トイレ状造縫 土坑8号との新旧不明	
18-19	28区土坑4号			91	72	10	底部からかわらけ出土.	
18-19	28区土坑5号			46	29	13	不整形 溝7号(古)を切る	
18	28区土坑6号			69	65	16		
18	28区土坑7号			50	30	25	現代井戸跡に切られる	
12	18-19	28区土坑8号		105	80	111	現代井戸跡に切られる 土坑3号との新旧不明	
13-17	13-17	28区土坑9号		52	41	22		
13	13-17	28区土坑10号		105×73	97×66	16	橢円形	
13-14	13-14	28区溝1号		93	41	38	N-100°-E	
13-16	13-16	28区溝2号		23	11	16	N-90°-E	
13-16	13-16	28区溝3号		140~	70~	90~	N-15°-E	
13-14-17	13-14-17	28区溝4号		192	31	110	N-90°-E	
13-14-17	13-14-17	28区溝5号		58	39	20	N-115°-E	
13-16-17	13-16-17	28区溝6号		117	67	64	井戸1号との新旧不明 溝6号(古)を切る N-150°-E	
18-19	18-19	28区溝7号		40~60	18	16	N-90°-E	
20	20	29区土坑1号		36	31	19		
20	20	29区溝2号		9	6	2	N-20°-E	
13	20	29区溝3号		18	14	11	難道部? 溝3号(古)を切る N-65°-E	
20	20	29区溝4号		26	10	7	N-10°-E	
13	20	29区カマド付遺構		183×180~	148×145~	11	不整形	
14	21	30区土坑1号		59	34	18		
14	21	30区土坑2号		65	25	30		
21	30	30区土坑3号		65	51	15		
21	30	30区土坑4号		109×60	89	18	橢円形	
21	30	30区土坑5号		60	37	8		
21	30	30区土坑6号		152	140	7		
21	30	30区溝1号		18	14	6	N-0°-E	
22	31	31区土坑1号		73	32	13	逆台形状	
22	31	31区土坑2号		101×13	89×10	10	橢円形	
22	31	31区溝1号		32~	24~	8	N-0°-E	
22	31	31区溝2号		26	13	18	N-175°-E	
15	22	31区溝3号		166	76	96	N-5°-E	
22	31	31区溝4号		112	49	24	不整形 N-0°-E	
22	31	31区溝5号		28	16	8	N-110°-E	
17	25	36区溝1号		75	27	17	逆台形状 N-15°-E	

第2表 遺構表(2)

写真番号	図版番号	遺構	開口部径(cm)	底部径	深さ	備考
18	27	37区溝1号	177	70	92	N-20°-E
18	27	37区溝2号	80	53	14	N-125°-E
18	27	37区溝3号	44	17	16	溝2号(古)を切る N-105°-E
18	27	37区溝4号	80~	50~	17	溝3号(古)を切る N-100°-E
	27	37区溝5号	32	26	5	N-130°-E
18	27	37区人跡	20	5	14	N-145°-E
19	28	38区土坑1号	60	38	46	
19	28	38区土坑2号	124	118	47	
28		38区土坑3号	38	19	15	
28		38区溝1号	47	38	10	N-100°-E, ピーカー状 逆し字形に曲がる
19	28	38区カマド鉄遺構	180×57	150×32	19	楕円形
20	28	39区井戸1号	180	112	185	
20	29	39区溝1号	170	60	22	浅皿状 N-100°-E
20	29	39区溝2号	50	15~20	15	浅皿状 N-10°-E
21	30	42区井戸1号	310	86	173	
22	12-31~32	43区井戸1号	365	265	270	
22	12-31	43区溝1号	20	180		N-0°-E
22	12-31	43区溝2号	255	60	170	溝1号, 溝3号(古)を切る N-5°-E
22	12-31	43区溝3号	100	100	195	N-15°-E
22	33	44区溝1号	70	50	10	浅皿状 N-85°-E
23	12-33	44区溝2号	125	65	28	逆L字形 N-20°-E
33	33	44区溝3号	34	20	4	N-95°-E
25	36	49区土坑1号	100	50	17	溝4号(古)を切る
25	36	49区土坑2号	69	60	29	
25	36	49区土坑3号	230×70	220×65	5	
36		49区土坑4号	57	50	29	溝2号(古)を切る
25	36	49区溝1号	80~154	65~80	45	ピーカー状 N-0°-E
36		49区溝2号	40	22	21	ピーカー状 N-165°-E
25	38	49区溝3号	23~50	17~24	33	ピーカー状 N-160°-E
36		49区溝4号	66~114	33~53	14	浅皿状 N-140°-E
37		50区土坑1号	38×25	34×15	15	完動かわらけ出土 逆L字形
26	37	50区土坑1号	33	12	21	ピーカー状 N-120°-E
29	38~39	51区井戸1号	310	65	375	
27	38~39	51区土坑1号	75	65	85	トイレ状遺構
27	38~39	51区土坑2号	85	70	47	トイレ状遺構
38		51区土坑3号	43×26		16	不整な急ち込み
38		51区土坑4号	46×10		4	不整な落ち込み
28	38	51区溝1号	47	25	17	ピーカー状 N-170°-E
28	38	51区溝2号	70	67	5	浅皿状 L字型 N-0°-E
27	38	51区溝3号	37	30	10	ピーカー状 N-120°-E
30	40	52区埋立地	20	12	30	N-0°-E
31	41	53区溝1号	26	10	10	ピーカー状 N-0°-E
31	41	53区溝2号	24	16	28	ピーカー状 N-0°-E
31	41	53区溝3号	100~129	70~96	23	浅皿状 N-0°-E
31	41	53区土坑1号	34	10	19	溝2号との新旧不明 N-0°-E
32	42	54区土坑1号	56	31	33	ピーカー状
32	42	54区土坑2号	72×54	66×34	6	楕円形 浅皿状
42		54区土坑3号	50	37	15	
42		54区土坑4号	40		31	
32	42	54区溝1号	100	40	12	浅皿状 N-0°-E
42		54区溝2号	31	18	13	ピーカー状 N-0°-E
42		54区溝3号	22	12	7	ピーカー状 N-15°-E
32	42	54区カマド状遺構	180×110	120×	19	
33	43	55区溝1号	52	25~40	19	ピーカー状 N-175°-E
33	43	55区溝2号	60	50	24	ピーカー状 N-5°-E
33	43	55区溝3号	67	40	12	浅皿状 N-0°-E
34	43	56区溝1号	80~	50~	17	浅皿状 N-90°-E 深い落ち込み有
44	61	61区土坑1号	92×65	72×56	12	長方形 近現代?
35	44	61区穴列	42	25	16	浅皿状 N-90°-E
36	43	62区穴列	59	52	9	浅皿状 N-90°-E

第3表 遺物(1)

掲載番号	写真番号	回収番号	出土地点	層位	種類	口径(cm)	底径	高さ	分類
1	37	47	2区坑1号	覆土中	クロロ大	14.3	8	3.7	R d0
2	37	47	2区坑1号	覆土中	手づくね人	14.3	3.3	3.3	C5
3	37	47	2区坑1号	覆土中	クロロ大	14.6	7.4	3.3	R d0
7	37	47	3区坑1号	覆土上位	手づくね大	14.9		3.4	D4
8	37	47	3区坑1号	灰面土上			8.3		
9	37	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.2	5.7	2.3	r d
10	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.5	6	2.5	r d
11	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.2	5.5	1.9	r d
12	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	8.7	5.8	2.1	r d
13	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.2	5.3	2.4	r d
14	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	8.7	5.5	2	r d
15	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9	5.6	2.4	r d
16	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.2	6	2.3	r d
17	37	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9	5.6	2.1	r d
18	37	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.4	5.8	2.3	r d
19	37	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.4	5.5	2.4	r d
20	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9	6	2	r d
21	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.2	5.6	2.1	r d
22	38	47	3区坑2号	覆土中	クロロ小	9.3	5.6	2	r d
23	38	47	5区P45	覆土中	クロロ小	8.4	7	1.6	r d
24	38	47	5区P24	覆土中	手づくね小	8.2	2.2	2.1	r d
38	39	49	28区坑1号	覆土中	手づくね人	12.9		2.3	C5
43	39	49	28区溝5号	覆土上位(3c)	手づくね人	14.1		2.9	D4
44	39	49	28区溝5号	覆土中(3c)	手づくね大	15.5		3.3	C5
45	39	49	28区溝5号	覆土中(3d)	手づくね小	10.4		1.9	D4
46	39	49	28区溝4号	覆土中(3c)	手づくね大	14.3		2.6	D4
47	39	49	28区溝4号	覆土中(3d)	手づくね大	14.5		3.5	C5
48	39	49	28区溝4号	覆土中(3c)	手づくね小	8.2		1.9	D2
83	42	52	28区坑1号	床面直上	手づくね大	14.2		3.2	D4
84	42	52	28区坑1号	覆土中	手づくね大	14.2		2.5	C3
85	42	52	28区坑1号	覆土中	手づくね大	15		2.3	D2
86	42	52	28区坑7号	床面直上	手づくね大	14.6		2.8	D4
87	42	52	28区溝7号	覆土中	手づくね小	9.4		1.9	D2
90	43	52	28区土坑1号Q1	覆土中位(2)	手づくね大	14.5		3.5	C4
91	42	52	28区土坑1号Q1	覆土中位(2)	手づくね大	17.8		3.7	C3
92	43	52	28区土坑1号Q1	覆土中位(1)	手づくね大	14.3		3.5	C3
93	42	52	28区土坑1号Q3	床面	手づくね大	14.4		3	D2
94	43	52	28区土坑1号Q1	覆土中(2)	手づくね大	15.5		3.4	D4
95	42	52	28区土坑1号Q3	床面	手づくね大	13.5		3.3	D4
96	43	52	28区土坑1号Q1	覆土中位(1)	手づくね大	15.1		3.5	C4
97	44	52	28区土坑1号Q3	覆土中位(1)	手づくね大	15.2		2.9	C4
98	44	53	28区土坑1号Q3	覆土中位(2)	手づくね大				C5
99	44	53	28区土坑1号Q3	覆土中位(2)	手づくね大	13.4		2.8	D4
100	44	53	28区土坑1号Q1	覆土中位(1)	手づくね大	14.5		2.7	C5
101	44	53	28区土坑1号Q1	覆土中(2)	手づくね大	18.5		2.8	C4
102	44	53	28区土坑1号Q2	覆土中位	手づくね大	14		2.8	D2
103	44	53	28区土坑1号Q2	覆土中位	手づくね大	14.3		3	D2
104	44	53	28区土坑1号Q2	覆土中位(1)	手づくね大	15		3.1	C4
105	44	53	28区土坑1号	覆土中位(1)	手づくね大	14.8		3.3	D4
106	44	53	28区土坑1号Q2	覆土中(2)	手づくね大	12.4		2.1	D2
107	45	53	28区土坑1号Q3	覆土中位(1)	手づくね大	13		2.9	D4
108	45	53	28区土坑1号Q1	覆土中位(2)	手づくね大	14.2		3	C4
109	44	53	28区土坑1号Q3	覆土上位(1)	手づくね大	9.3		1.8	C3
110	44	53	28区土坑1号Q1	覆土中位(2)	手づくね大	9		2	D2
111	45	53	28区土坑1号Q1	覆土上位(1)	手づくね大	9.1		1.7	D4
112	45	53	28区土坑1号Q1	覆土中位(2a)	手づくね大	8.6		2.1	D4
113	45	53	28区土坑1号	覆土中位(1)	手づくね大	9.1		1.7	D5
114	45	53	28区土坑1号Q4	覆土中(2)	手づくね大	8.4		1.7	D2
115	45	53	28区土坑1号Q2	覆土上位(1)	クロロ小	8.5	5.8	1.7	r d
116	45	53	28区土坑1号Q2	覆土上位(1)	クロロ小	8.6	7.2	1.6	r d
117	45	53	28区土坑1号Q3	覆土上位(1)	クロロ小	8.6	7	2	r d
118	46	53	28区土坑1号Q2	覆土中(2)	クロロ小	8.3	6.1	1.6	r d
119	53	28区土坑1号Q1	覆土中位(2)	内削れ		8.6	9.9	1.8	
123	46	53	28区土坑2号Q2	覆土中(3)	手づくね大	10		2.4	C4
124	46	53	28区土坑2号Q2	覆土中(3a)	クロロ大	13.8	7.7	4.2	R d

第4表 遺物(2)

測量番号	考古番号	岡版番号	出土地点	層位	種類	口径(cm)	底径	器高	分類
125	46	53	28区十坑2号Q4	覆土中(3)	手づくね大	14.5		2.4	D4
126	46	53	28区十坑2号Q2	覆土中(3)	手づくね小	9			D2
127	46	53	28区十坑2号Q4	覆土中(2~3)	手づくね大	14.1		2.9	D4
128	46	53	28区十坑2号Q2	覆土中(2~3a)	手づくね小	9.1		2.5	C4
129	46	53	28区十坑2号Q3	覆土中(2~3)	手づくね小	9		1.8	D2
130	46	53	28区十坑2号	覆土中位(3)	手づくね小	9.2		1.7	D2
131	46	54	28区土坑2号	覆土上位(3a)	手づくね小	9.5		2.2	D4
132	46	54	28区土坑2号Q3	覆土上(4)	手づくね小	9.6		2.1	D3
133	47	54	28区土坑2号Q2	覆土上(3)	ロクロ小	8.1	5.7	1.5	r d
134	47	54	28区土坑2号	覆土上(3~3a)	ロクロ小	9	6.8	1.7	r d
135	47	54	28区土坑2号	覆土上(4)	ロクロ小	8.8	5.6	1.5	r d
145	47	54	28区上坑4号Q3	床面直上	手づくね大	15.2		3	D4
147	47	54	28区上坑2号	覆土上位	手づくね大	14.6		3.2	D4
156	48	55	28区PP1	覆土下位	ロクロ小	6			r d12
157	48	55	28区PP1	覆土下位	ロクロ小	5.5			r d
160	48	55	28区	遺物(山形)	手づくね小	9.1		1.7	D4
161	48	55	28区	遺物包<夏>	手づくね小	9.6		1.6	D4
162	48	55	28区	遺物包<冬>	手づくね小	8.4		1.5	D2
163	48	55	28区	遺物包含層	内折れ	8.4		0.9	D3
194	51	58	30区土坑3号	覆土中	ロクロ小		5.2		r d
201	51	58	31区溝1号	覆土上位	ロクロ大	14	7.8	3.2	R d0
202	51	58	31区溝3号	覆土下位(1c)	手づくね大	14.2		3.9	D2
203	51	58	31区溝1号	覆土中	手づくね小	9.1		2	D4
204	51	58	31区溝3号	覆土中(1a)	ロクロ小	8.7	6.4	1.8	r d
205	51	58	31区溝3号	覆土下位	手づくね小	9.5		1.6	D4
206	51	58	31区溝3号	覆土中	手づくね小	10.2		2	C3
212	52	58	31区	盛土中	手づくね小	9.5		1.5	D2
217	52	59	36区溝1号	覆土中	ロクロ大				R d0
221	52	59	42区井戸	覆土中	手づくね大	14.5		2.7	C4
225	52	59	43区溝2号	覆土下位	手づくね小	7.5		1.2	D2
237	52	59	43区溝3号	覆土中	内折れ				D4
289	56	66	44区溝1号	覆土中	手づくね大	14.4		3.7	D4
290	56	66	44区溝1号	覆土下位(1)	手づくね小	9.1		1.8	D4
291	56	66	44区溝1号	覆土中(2)	ロクロ小	9.6	6	1.9	r d
292	56	66	44区溝1号	覆土下位(1)	ロクロ小	9.6	7	1.8	r d
293	56	66	44区溝1号	覆土下位(1)	ロクロ小	9	5.4	2	r d
294	56	66	44区溝1号	覆土下位(1)	ロクロ小	8.1	6	1.6	r d
295	56	66	44区溝1号	覆土中(2)	ロクロ小	8.8	5	2.2	r d12
296	56	66	44区溝1号	覆土下位(1)	ロクロ小	8.5	5.3	1.8	r d
297	56	66	44区PP28	覆土下位	ロクロ小	8	5.8	1.8	r d
298	56	66	44区溝1号	覆土中(2)	ロクロ小	9	5.5	2	r d
299	56	66	44区溝1号	覆土中(2)	ロクロ小	9	5.6	2	r d
300	56	66	44区	地山直上	手づくね小	9.7		2.1	D4
301	57	66	45区PP41	覆土中	手づくね小	9.5		2.2	D4
318	57	68	49区十坑1号	覆土中	手づくね小	8.8		1.9	D4
319	57	68	50区	I d	手づくね大	13.8		2.3	D4
322	57	68	51区溝2号	覆土中	手づくね大	13.5		4.8	
323	58	68	51区井戸	覆土中(2)	手づくね大	15.3		2.9	D4
324	57	68	51区井戸	覆土中(2)	手づくね大	15.4		3.6	D4
325	57	68	51区井戸Q2	覆土下位(1)	ロクロ大	10.2	5.1	2.5	
326	57	68	51区井戸	覆土中(2)	手づくね大	14.9		3.4	D4
327	68	51区井戸Q1	覆土下位(1)	ロクロ大	14.6	7.4	3.6	R d0	
328	58	68	51区井戸Q4	覆土中(5)	手づくね小	9.6		1.9	D4
329	58	68	51区井戸	覆土中(2)	ロクロ小	8.6	5.6	2	r d
330	58	68	51区井戸Q1	覆土下位(1)	ロクロ小	8.2	6.2	2	r d
331	58	68	51区井戸Q4	覆土下位(1)	ロクロ小	8.2	6	1.8	r d
332	58	68	51区井戸Q4	覆土下位(1)	ロクロ大	13.5	6	3.2	R d0
350	59	69	51区十坑2号	覆土中(1)	手づくね大			2.2	C4
371	59	71	53区溝2号	覆土中(6)	手づくね大	14.5		3.1	C4
373	59	71	54区溝1号	覆土中	ロクロ小	8	5.4	1.6	r d
374	59	71	54区溝1号	覆土中	ロクロ大				R d
376	60	71	54区溝2号	覆土上位	ロクロ大	14	6.8	4.3	R d0
377	60	71	45区カマド状	覆土上位	ロクロ小				r d
378	60	71	54区PP20	覆土中	ロクロ大	14	5	3.9	R d1
380	60	71	56区溝	覆土中(1)	ロクロ小	9	1.9		r d

第5表 遺物(3)陶器

遺物番号	分類番号	出土地点	層位	種類	器種	部位	年代	備考
4	37	47	2区溝1号	壤土中	陶器	胴部	12c	
5	37	47	2区	壤土上	陶器	底部	12c	
6	37	47	2区	遺物包含層	陶器	胴部	12c	
25	38	47	5区P19	壤土中	常滑	季?	口縫部	12c
26	38	47	5区	泥山原上	東北窓	瓦器系	制底	13~14c
27	39	47	6区PP23	壤土中	常滑	鏈輪小皿	口沿部	14~15c
28	39	47	6区PP58	陶土中	漆?	漆器小皿	口~底部	4世(15c)
31	39	48	9区溝1号	壤土中	水北窓	口~柄部	13~14c	宮城跡?
32	39	48	9区溝1号	壤土中	津津	口	口縫部	13~14c
33	39	48	9区溝1号	壤土中	津津	底	口縫部	13~14c
39	39	49	28区溝1号	西側隅辺	常滑	底?	制下~底部	12c
40	39	49	28区溝1号	西側隅辺	陶器	胴部?	12c	貼花文
41	39	49	28区溝1号	壤土中	陶器	大腹	12c	
42	39	49	28区溝1号	壤土中(1~1a)	陶器	底	12c	
49	39	49	28区溝4号	壤土上位	常滑	口縫部	12c	
50	39	49	28区溝4号	壤土中	津津	口縫部	12c	
51	40	49	28区溝4号	壤土上位	常滑	横耳量	肩部	II
52	39	49	28区溝4号	壤土中	陶器	胴部	12c	
53	39	49	28区溝1号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
54	40	49	28区溝4号	壤土上位	常滑	漆(三焉並?)	II縫部	12c
55	40	49	28区溝4号	壤土上位	羽吻鉢	口縫部	12c	
56	40	49	28区溝4号	壤土上位	陶器	口縫部	12c	
57	40	49	28区溝4号	壤土上位	陶器	口縫部	12c後半	
58	40	49	28区溝4号	壤土上位	陶器	口縫部	12c後半	
59	40	49	28区溝4号	壤土下位	常滑	口縫部	12c	
60	40	49	28区溝4号	壤土下位	陶器	口縫部	12c	
61	40	49	28区溝4号	壤土上位	常滑	底部	12c	
62	40	49	28区溝4号	壤土下位	常滑	胴部	12c	
63	40	49	28区溝4号	壤土中	陶器	肩部	12c	
64	40	50	28区溝1号	北側	常滑	漆?	II~底部	12c
65	40	50	28区溝4号	壤土中(3b)	常滑	鋤形	II縫部	12c
66	40	50	28区溝4号	壤土上位	陶器	胴部	12c	II~III
66	40	50	28区溝4号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
67	40	50	28区溝4号	壤土上位	常滑	胴部	12c	
68	41	50	28区溝4号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
69	40	50	28区溝4号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
70	40	50	28区溝4号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
71	40	50	28区溝4号	北側	常滑	口縫部	12c	
72	41	50	28区溝4号	壤土中	陶器	肩部?	12c	
73	41	50	28区溝1号	壤土中	陶器	口~胴部	12c	
74	41	50	28区溝4号	壤土上位	常滑	胴部	12c	
75	41	51	28区溝4号	壤土中	常滑	胴部	12c	
76	41	51	28区溝4号	壤土上位	陶器	口~肩部	12c	
77	41	51	28区土坑3号	壤土中~下位	常滑	口~肩部	12c	
78	41	52	28区溝1号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
79	41	52	28区溝4号	壤土中~下位	東北窓	胴部	13~14c	宮城跡?
80	41	52	28区溝4号	壤土上位	陶器	肩部	12c	
81	41	52	28区溝4号	壤土上位	陶器	胴部	12c	
82	41	52	28区溝4号	壤土上位	常滑	胴部	12c	
120	45	53	28区L11号	壤土中(2)	常滑	鋤?	II縫部	12c
121	45	53	28区土坑1号	壤土中(2)	常滑	大腹	II縫部	12c
122	45	53	28区土坑1号	壤土中(2)	常滑	胴部	II縫部	12c
136	47	54	28区土坑2号	壤土下位(3)	常滑	三焉蓋	II縫部	II~III
137	47	54	28区土坑2号	壤土中(3)	中環窓	胴部	II後半	施繪、墨書き
138	47	54	28区土坑2号	壤土中(3)	施繪	鋤?	胴部	II~III
139	47	54	28区土坑2号	壤土中(3)	施繪	鋤?	胴部	東夷造型
140	47	54	28区土坑2号	壤土中(3~3a)	陶器	胴部	12c	
141	47	54	28区土坑3号	壤土中~下位	常滑	胴部	12c	
142	47	54	28区土坑3号	壤土中~下位	常滑	大腹	胴部	12c
143	47	54	28区土坑3号	壤土中~下位	須恵器	漆?	II~肩上部	中亞
144	47	54	28区土坑3号	壤土中~下位	常滑	口縫部	12c	
146	47	54	28区土坑7号	壤土中	陶器	口縫部	12c	
148	47	54	28区土坑8号	壤土中	常滑	胴部	12c	
149	47	54	28区土坑8号	壤土下位	陶器	胴部	12c	
150	47	54	28区土坑8号	壤土中	常滑	胴部	12c	
151	47	54	28区土坑9号	壤土中	常滑	肩部	12c	
158	48	55	28区PP63	壤土中	陶器	胴部	12c	
159	48	55	28区PP45	壤土中	陶器	胴部	12c	
164	48	55	28区	遺物包含層	常滑	胴部	12c	
165	48	55	28区	遺物包含層	常滑	胴部	12c	
166	48	55	28区	遺物包含層	常滑	胴部	12c	
167	48	55	28区	遺物包含層	常滑	胴部	12c	
168	48	55	28区	遺物包含層	常滑	胴部	12c	
169	48	55	28区	遺物包含層	常滑	胴部	12c	

第6表 遺物(4)陶器

施設番号	分類番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	年代	備考
170	48	65	28区	遺物包含層	圓底	腹部	12c	
171	48	55	28区	遺物包含層		腹部		
172	48	55	28区	遺物包含層	盒滑	側上部	12c	
173	48	55	28区	遺物包含層		側部		
174	48	55	28区	遺物包含層	圓底	口縫部	12c	
175	48	55	28区	遺物包含層	圓底	口縫部	12c	
176	48	55	28区	遺物包含層	箱狀22 蓋	口縫部	中世	
177	48	55	28区	遺物包含層	圓底	口縫部	12c	
178	48	55	28区	馬十中	常滑	側部	12c	
179	48	55	30区上階1号	塵土下段	常滑	口縫部	12c	
180	48	56	28区第1号	塵土上	常滑	側部	12c	
181	48	56	28区第7号	塵土中	圓底	口縫部	12c後半	
193	51	58	30区土坑2号	底面以上	圓底	直部	12c	
195	51	58	30区	遺物包含層	圓底	口縫部	12c	
196	51	58	30区	遺物包含層	圓底	口縫部	12c	
197	51	58	30区	遺物包含層	常滑	側部	12c	
198	51	58	30区	粗面時		側部		
200	51	58	30区	粗面時		口～側部		
207	51	58	31区清1号	塵土中	圓底	腹部	12c	輪子文(?)
208	52	58	31区清3号	塵土下位(1c)	圓底	側部	12c	
209	52	58	31区清3号	塵土下位(1c)	圓底	側部	12c	
210	52	58	31区清3号	塵土下位(1c)	圓底	側部	12c	
213	52	69	33区	地面上		直部		
214	52	59	33区	地面上上	中國產 小壺	高部	12c	繪輪
215	52	59	33区	地面上上	常滑	側部	12c	
216	52	59	34区	地面上上	常滑	側部	12c	
218	52	59	34区PP12	塵土上位	占押戸 平碗	口縫部	14~15c	灰釉
219	52	59	36区	地面上上	東北單	口縫部		
220	52	59	37区PP1	塵土中		口縫部		
222	52	59	42区井#1	塵土上位	常滑	鉢	11後部	II~III
223	52	59	42区井#1	塵土中	圓底	側ト～底部	12c後半	
224	52	59	43区清1号	塵土上位	圓底	側部	12c	
226	52	59	43区清2号	塵土上位	圓底	側部	12c	
227	52	59	43区清2号	塵土上	常滑	側部	12c	
228	52	59	43区清2号	塵土上位	常滑	側部	12c	
229	52	59	43区清2号	塵土上位	圓底	側部	12c	
232	52	59	43区清2号	塵土上位	常滑	側部	12c	
233	52	59	43区清2号	塵土上位	常滑	直部		
234	52	59	43区清3号	塵土中	東北單	鉢	口縫部	13~14c 高城県産?
235	52	59	43区清1~2号	塵土上位	側戸 三足盤	側下部	14~15c	
236	52	59	43区清3号	塵土上	常滑	側部	12c	
257	53	62	42区井戸	塵土上	側戸	口～底部	16c	大窓期
302	57	66	45区1~18	塵土中	近畿輪窓 四足壺	側部	12c後半	海船
312	57	67	49区十階2号	塵土中	圓	側部		
320	57	68	30区	常滑	側部	12c		
321	57	68	51区井1号	塵土上	常滑	側部	12c	
333	58	68	51区井戸	塵土中(5)	常滑	側部	12c	
334	58	68	51区井戸	塵土中(2)	圓底	口縫部	12c	
335	58	68	51区井戸	塵土上位(1)	圓底	口縫部	12c	
336	58	68	51区井#1	塵土中(2)	圓底	口縫部	12c	
337	58	68	51区井戸Q2	塵土上位(1)	圓底	口縫部	12c	
338	58	68	51区井戸	塵土中(2)	常滑	側部	12c	
339	58	68	51区井戸	塵土上位(1)	常滑	側部	12c	
340	58	68	51区井#1Q2	塵土上位(1)	常滑	側部	12c	
343	59	69	51区井#1号	塵土中(1~2)	常滑	鉢	口～肩部	12c
344	59	69	51区井#1号	塵土中(3a)	常滑	直部	12c	
351	59	69	51区井#2号	塵土中(1)	常滑	側部	12c	
352	69	69	51区十階2号	塵土中(1)	常滑	側部	12c	
353	59	69	51区	塵土中	須志系 葵	側部	中世	
354	59	69	51区	塵土中	常滑	側部	12c	
355	59	69	51区	塵土中		口縫部		
356	59	69	51区	塵土中	常滑	口～無部	12c	
357	59	69	51区	塵土中	常滑	側部	12c	継長格子文と遮風文の複合
358	59	69	51区	塵土中	圓底	側部	12c	
359	59	69	51区	塵土中	圓底	口縫部	12c	
360	59	69	51区	塵土中	圓底	側部	12c	
361	59	69	51区	塵土中	圓底	側部	12c	
370	59	70	54区カマド跡	塵土上位	天農 地利	側部		
372	59	71	53区清2号	塵土上	紀美	側部	12c	
375	59	71	54区清1号	塵土中	常滑	口～無部	12c	
379	60	71	54区	塵土中	圓底	側部	12c	
381	60	71	56区清1号	塵土上位	東北單	側部	13~14c	宮崎県産?
382	60	71	56区	塵土中	東北單 装器系	側上部	中世	

第7表 遺物(5)陶磁器

荷物番号	発見場所	銘	出土地点	層位	種別	胎種	部位	分類	年代	備考
29	45	6区溝1号	覆土中	青磁	碗or皿		腹足	I2c		
34	39	48	9区溝1号	覆土中(下~下位)		口~胸部				
35	39	48	9区溝1号	覆土中(中~下位)	青磁	盤(同类型)	底部		I2c	空色気味、底部まで施釉
36	39	48	9区溝2号	覆土中(中位)	白磁		胸部			
182	48	56	28区溝7号	覆土中	青白磁	碗or皿	胸部		I2c	内面に刻花文、額目文
183	48	56	28区溝7号	覆土中	青白磁	碗or皿	胸部		I2c	内面に刻花文、額目文
184	48	56	28K	地山直上	白磁	碗	胸部下 II		I2c	一部化粧上有り
185	51	56	33区	地山直上			射ト~底部			
186		56	34K	覆土中			II~胸部			
187	51	56	37区溝1号	覆土中			底部			
188	51	56	37区溝3号	覆土中			底部			
199	51	58	30区	複瓦		お茶入れ	兎形 益子	昭和		
238	53	60	37区溝3号	覆土中			底部			
239	53	60	37区溝3号	覆土中			底部			
240	53	60	37区溝3号	覆土中			底部			
241	53	60	37区溝3号	覆土中			胸下~底部			
242	53	60	37区溝3号	覆土中			胸部			
243		60	37区溝3号	覆土中			胸下			
244	53	60	37区溝3号	覆土中			胸部			
245		60	37区溝3号	覆土中			胸部			
246		60	38区	覆土中			口~胸部上			
247		60	38区	覆土中			底部			
248	53	60	38区	覆土中			胸~底部			
249		61	38区	覆土中			II~底部			
250	53	61	38区	覆土中			胸~底部			
251		61	38区	覆土中			II~胸部下			
252	53	61	38区	覆土中			胸~底部			
253	53	62	39区溝1号	覆土中			底部			
254	53	62	39区溝1号	覆土中			II~胸部			
255	53	62	42区井戸	覆土中位	白磁	四耳壺	口縁部	Ⅲ系		
256	53	62	42区井戸	覆土中位	白磁	四耳壺	II縁部	Ⅲ系		
258	53	62	42区井戸	覆土上部	瀬戸	花瓶	底部		I5c後半	
259	53	62	42区井戸	覆土中位			II縁部			
260	53	62	42区井戸	覆土上部	美濃		底部		I6c	
261	53	62	42区井戸	覆土上部	美濃		底部		I6c	
262	53	62	42区井戸	覆土中位			口縁部			
263	53	62	43区溝1号	覆土上部	白磁	碗	胸下	IV系	I2c後	内面施釉(I2c前~中)
264	53	62	43区溝2号	覆土上部	白磁	四耳壺	胸部	Ⅲ系	中世	
265	53	62	43区溝2号	覆土中			底部			
266	54	63	43区溝2号	覆土中			口~底部			
267	54	63	43区溝2号	覆土中			口~胸部			
268	54	63	43区溝2号	覆土中			口~胸部			
269	54	63	43区溝2号	覆土中			底部			
270	54	63	43区溝2号	覆土中	唐津	碗	胸~底部		I6c	
274	54	64	43区溝2号	覆土上部	柳州窯系		底部		I6c~I7c初頭	
275	54	64	43区溝2号	覆土中	唐津		胸部		I6c	
276	54	64	43区溝3号	覆土中	美濃?				近世?	
306	57	67	44区溝2号	覆土上部	白磁	碗	口~胸部	V~db	I2c後半	内面に模文
307	57	67	44区溝1号	覆土中	白磁	碗		V~V3		
308	57	67	44区溝2号	覆土中			胸部			
309	57	67	44区	地山直上			口縁部			
310	57	67	44区	地山直上			胸部下			
311	57	67	45区	覆土中	青磁	碗	胸部	I~I2	龍泉	I2c
313	57	67	50KEP10	覆土中	白磁	碗or壺	IV	I2c~I3c(前半)	玉緑	
314	57	67	50KEP24	覆土中	白磁	碗	口縁部	IV	I2c~I3c(後半)	青磁、胸~体部にかけて緑が半下
315	57	67	50KEP24	覆土中	白磁	碗	胸部			化粧土なし
316	57	67	50KEP9	覆土中	白磁	四耳壺	口~胸部	Ⅲ系		
317	57	68	45KEP21	覆土中	須恵器系		口縁部		中世	
362	70	70	S1区井戸	覆土上部	白磁	碗	II~胸部	V1類		口縁直立気味、化粧土有り
363	59	70	S1KEPQ1	覆土上部	青磁		胸部			中国産
365	59	70	S1KEP43	覆土中	白磁	壺	胸部			化粧土
366	70	70	S1区	表上	白磁	壺	胸部			化粧土有り

第8表 遺物(6) 陶磁器・木製品・石製品・金属製品

発掘番号	写真番号	回収番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	分類	年代	備考
366	59	70	51区	表土	素白磁		胴部		12c	外面に化粧土
367	59	70	51区	盛土上部	白磁	壺	胴部		12c	外面に化粧土
368	59	70	51区	表土	青白磁		口～底部	I-3 龍泉	12c	外面にヘラ及び槌状のもので花文様を施している
369	59	70	54区上坑2号	覆土中	青磁		胴部			

発掘番号	写真番号	回収番号	調査区	遺構	層位	種類	長さ(cm)	幅
30	39	48	6	PP24	覆土中		16.1	3.5
37	39	48	9	溝2号	覆土中	曲物・遮板	16.1	(6.9)
155	48	34	28	土坑8号	覆土中	チュウ木	17.6	0.9
152	48	54	28	土坑8号	覆土中	チュウ木	16.8	0.7
153	48	54	28	上坑8号	覆土中	チュウ木	15.5	0.7
154	48	54	28	土坑8号	覆土中	チュウ木	14.3	0.6
88	41	52	28	井戸1号	覆土中		(19.3)	(7.4)
192	50	57	28	井戸2号	西側	井戸枠	79.8	26.0
190	50	57	28	井戸2号	南側	井戸枠	77.0	18.0
189	49	57	28	井戸2号	北側	井戸枠	76.8	17.2
191	49	57	28	井戸2号	東側	井戸枠	77.4	24.4
211	52	58	31	溝3号	覆土下		7.9	4.4
271	54	63	43	溝1号	覆土中		15.0	8.7
279	54	64	43	溝1号	覆土中	達磨下駄	21.7	11.6
272	54	63	43	溝1号	覆土中	曲物の一郎?	(16.3)	4.0
273	54	63	43	溝1号	覆土中	曲物の一郎?	(24.2)	(3.3)
280	55	64	43	溝2号	覆土中	船材?	30.1	10.6
278	54	64	43	溝2号	覆土中	船材?	13.7	6.8
277	54	61	43	溝2号	覆土中		(14.8)	4.7
303	57	66	45	PP9		柱窓	11.6	9.5
305	57	66	45	PP30	柱窓の下	磚板	18.4	11.2
304	57	66	45	PP28	柱窓の下	磚板	12.2	12.1
364	66	70	51	井戸	8階下段(底部付近)覆土下位	柄杓木完成品?(柄欠損)	31.6	11.0
341	58	68	51	井戸	覆土H(5)	刀の鞘?	(7.8)	(4.6)
342	58	68	51	井戸	覆土H(5)	チュウ木?	12.5	0.6
346	59	69	51	土坑1号	8階埋土中	チュウ木	14.4	1.0
347	59	69	51	土坑1号	8階埋土中	チュウ木	14.0	1.2
348	59	69	51	土坑1号	8階埋土中	チュウ木	15.5	1.2
349	59	69	51	土坑1号	8階埋土中	チュウ木	13.9	0.6
345	59	69	51	土坑1号	8階埋土中	チュウ木	(6.7)	(1.1)

発掘番号	写真番号	回収番号	調査区	遺構名	層位	種類	計測値(g)	備考
388	61	39		溝1号	覆土中	礫石	179.84	
390	61			カマド状遺構	覆土上部	礫石?	1.43	
391	61			カマド状遺構	覆土上部	礫石?	0.85	
231	52	59	43	溝1号	覆土中	基石	278.3	輝石安山岩 北上山地(東鶴山) 中生界
389	61			土坑1号(トイレ状遺構)	覆土中	基石?	4.87	
					井戸1号	礫石	40.11	

発掘番号	写真番号	回収番号	調査区	遺構名	層位	種類	計測値(g)	備考
		5	PP17	検出時			8.22	
281	55	65	9	溝1号	覆土中	古鉄	1.82	
			31	溝3号	クリーニング時		6.52	
282	55	65	43	溝2号	覆土上位	古鉄	3.14	永楽道寶
			51		覆土上部Q1		11.78	
			54	溝1号	覆土中	義法	8.79	
			39	溝1号	覆土中	刀具	16.41	
283	55	65	43	溝3号	覆土中(3)	古鉄	3.44	永楽道寶
284	55	65	43	溝3号	覆土中(3)	古鉄	3.66	永楽道寶
285	55	65	43	溝3号	覆土中(3)	古鉄	3.70	永楽道寶
286	55	65	43	溝3号	覆土中(3)	古鉄	3.77	永楽道寶
287	55	65	43	溝3号	覆土中(3)	古鉄	4.08	永楽道寶
288	55	65	43	溝3号	覆土中(3)	古鉄	3.87	永楽道寶
		2		遺物包含層		鉄津	11.37	
		51		底土上部 井戸付近		鉄津?	13.42	

第9表 遺物(7)漆製品・種子製品

揭露番号	号真番号	出土地点	置位	種類	備考
383	61	28区井戸2号	覆土下位(井戸枠付近)	漆器皿	内面黒漆に赤漆で文様
386	61	28区上坑2号	ベルト南側断面3層下部	?	黒漆
384	61	43区溝2号	覆土中	漆器碗	内面赤漆、外面黒漆に赤漆で文様
387	61	36区溝1号	覆土中(1)	漆盤	
385	61	43区溝2号	覆土中	漆器碗	内-外面黒漆

調査区	遺物名	置位	種類	計測値(g)
3	上坑5号	東側埋土中	モモ	10.58
3	上坑6号	西側埋土中(上位)	モモ	0.15
5	PP3	覆土中	モモ	1.31
6	PP52	覆土中	モモ	0.97
8	井戸2号	覆土中部	モモ	1.30
28	上坑3号	ベルト南側断面(3)	モモ	0.23
28	上坑3号(トイレ状遺構)	覆土中～下位	モモ	2.77
28	上坑8号	覆土中	モモ	1.92
28	上坑8号	覆土下位	モモ	0.14
28	溝1号	覆土中	モモ	0.08
28	溝4号	覆土上位	モモ	1.02
28	溝4号	覆土上位	モモ	0.56
28	溝4号	覆土上位(遺物包含層下位)	モモ	0.90
28	溝4号	覆土中(3)	モモ	1.69
28	溝4号	覆土下位 井戸路2号桟山跡	モモ	0.62
28	溝7号	覆土中(床面直上)	モモ	0.21
31	溝3号	覆土中	モモ	6.88
31	溝3号	覆土中(1)	モモ	4.00
31	溝3号	覆土中(5)	モモ	16.75
31	溝3号	覆土中(5?)	モモ	14.57
31	PP17	覆土中	モモ	0.75
42	溝2号	覆土中	モモ	0.76
43	溝2号	覆土上位	モモ	0.83
43	溝2号	覆土中	ウメ?	0.63
43	溝2号	覆土中	モモ	3.55
43	溝3号	覆土中	モモ	2.70
43	溝3号	覆土中	モモ	0.43
43	溝1-2-3号	溝上上位	モモ	2.24
44	溝2号	覆土中	モモ	4.43
44	溝2号	覆土中	モモ	0.92
44	溝2号	覆土中	モモ	0.25
45	PP24	覆土中	モモ	3.35
45	PP33	覆土中	モモ	0.75
51	上坑2号	覆土上位	モモ	1.83
51	上坑2号(トイレ状遺構)	覆土中	モモ	2.08
28	上坑2号	覆土下位(?)	モモ	0.75
31	溝3号	覆土中	モモ, クルミ, ウメ	11.98
37	溝3号	覆土中	モモ	5.58
45	PP2	覆土中	モモ	3.63
45	PP7	覆土中	クルミ	6.29
45	PP28	覆土中	モモ	1.92
45	PP47	覆土中	モモ	0.40
51	井戸	覆土中(2)	モモ	0.77
51	井戸	覆土中(5)	モモ	2.97
51	井戸	覆土中(5)	モモ	3.14
2		遺物包含層	クルミ	1.21
6		西側埋土中	モモ?	1.15
44		覆土中	モモ?	0.80

# 写 真 図 版



写真図版1 通勤遠景(南から)



写真図版2　道路上空(南から)





2区全景



断面



殉葬1号坑掘



遗物出土状况

写真図版3 遺構(1)



3区全景



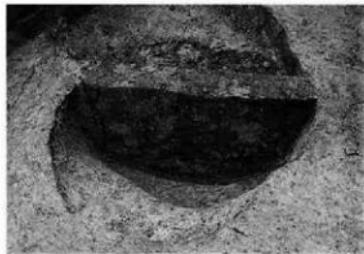
土抗2号遗物出土状况



土抗3·4号完掘



土抗5号完掘

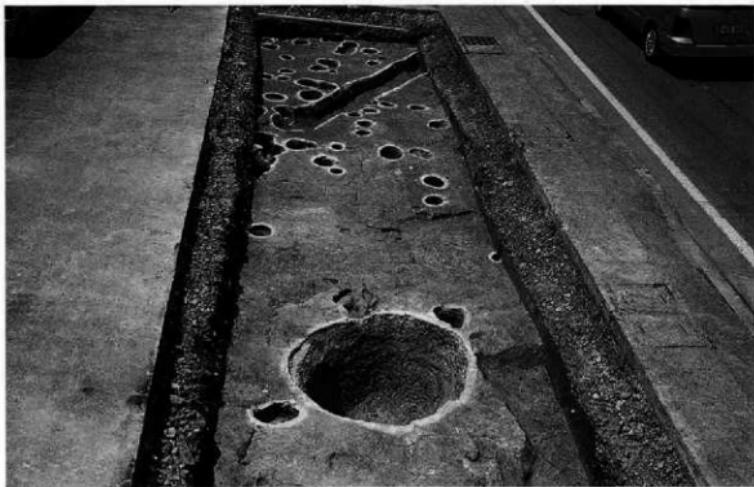


断面

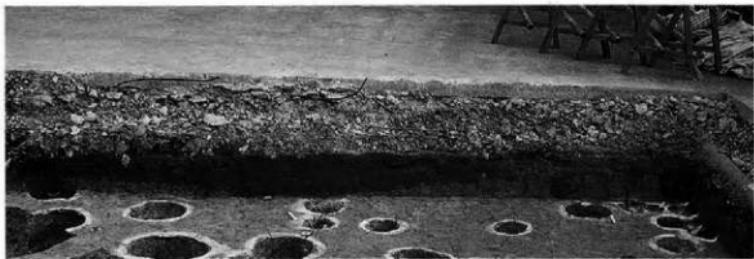
写真図版4 造構(2)



4区トレンチ



5区全景



断面

写真図版 5 遺構(3)



土坑 1号完面



断面



满淤 1号完面



断面



PP51・52完面



PP3断面



PP8・9断面



PP16・17断面

写真図版 6 遺構(4)



6区全景



東側断面

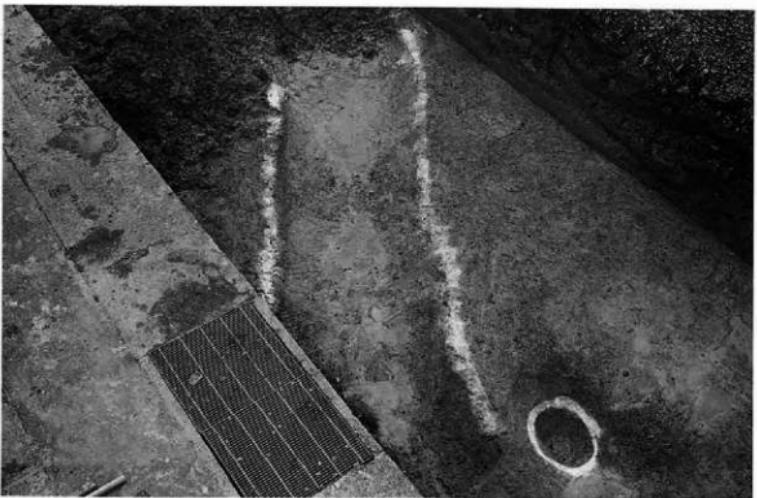


PP41断面



PP120壁石出土状況

写真図版 7 造構(5)



7区清跡1号完掘



8区全景

写真図版 8 遺構(6)



8区基本土層



井戸1号完掘



断面



井戸2号完掘



精査中



溝跡1号完掘



断面

写真図版 9 遺構(7)



9区溝路1・2号完掘



断面

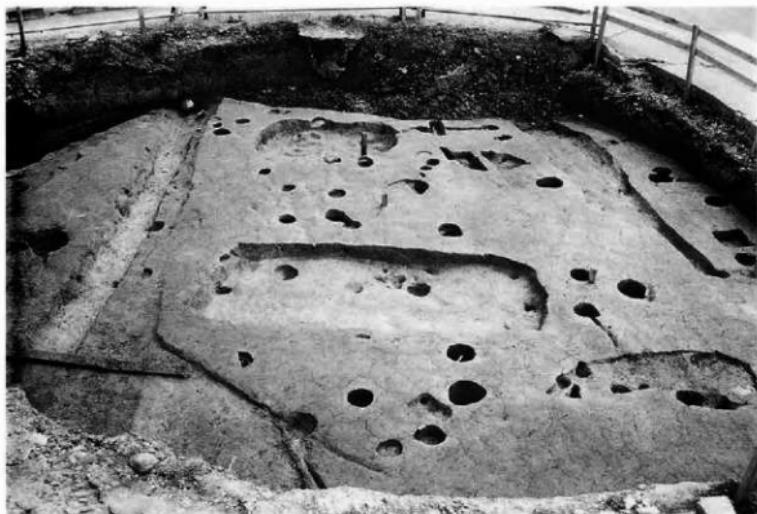


掘跡完掘



断面

写真図版10 道情(8)



28区南侧全景



土坑1号遗物出土状况



遗物出土状况



土坑2号遗物出土状况



遗物出土状况

写真図版11 遺構(9)



28区北側全景



柱立建物跡



井戸跡 2号完掘



土坑 3・8号完掘

写真図版12 遺構(10)



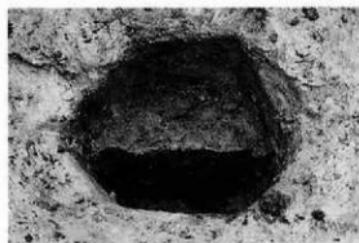
29区全景



カマド状遺構完掘



断面



PP1断面

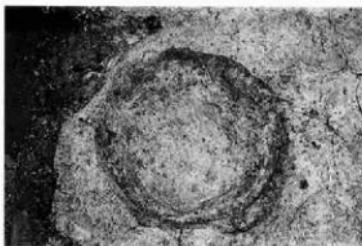


溝跡 2号完掘

写真図版13 遺構(11)



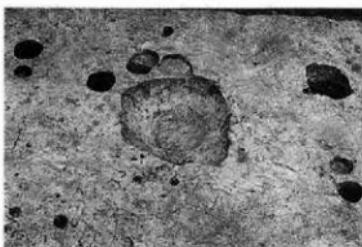
30区全貌



土坑1号完掘



断面



土坑2号完掘



断面

写真図版14 遺構(12)



31区全景



清跡 3号完掘



西侧全景



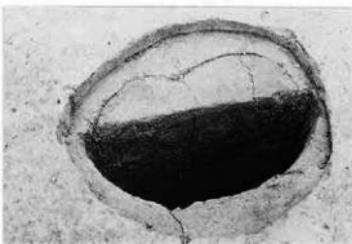
断面



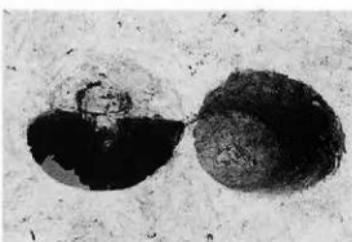
33区全景



34区全景



PP10断面

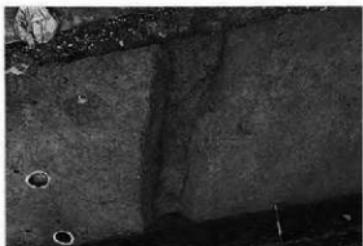


PP4断面

写真図版16 造構(14)



35・36区全景



溝跡1号完掘



断面



掘立柱建物跡



PP16埋土

写真図版17 遺構(15)



37区溝路1号完掘



断面



木桩断面



溝路2・3・4号柱穴完掘



断面

写真図版18 造構(16)



38区全景



焦土检出状况



断面



土抗2号壳面



土抗1号断面

写真図版19 遺構(17)



39区溝跡1・2号完掘



遺物出土状況



断面



井戸跡1号完掘



断面

写真図版20 遺構(18)



42区全景



井戸跡 1号完掘

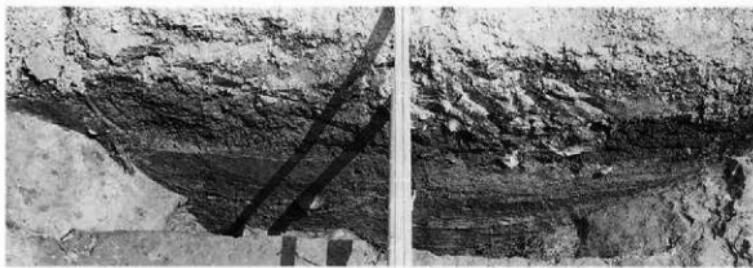


断面

写真図版21 遺構(19)



43区溝跡1・2・3号完掘



断面

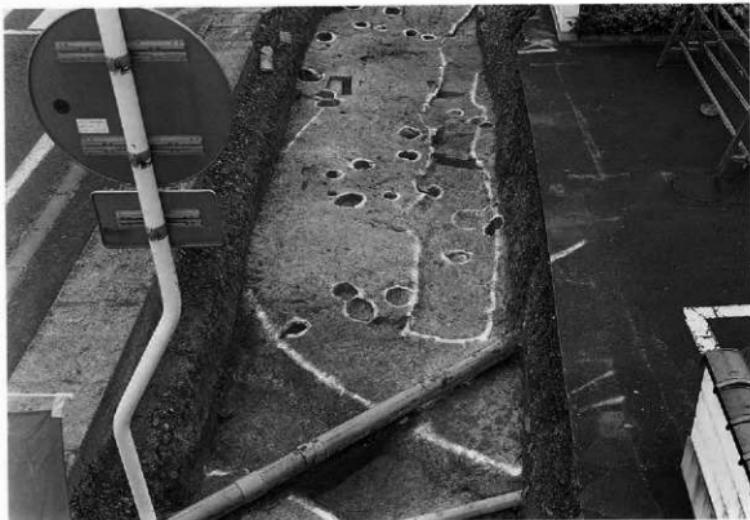


井戸跡1号完掘



断面

写真図版22 造構(20)



44区全景



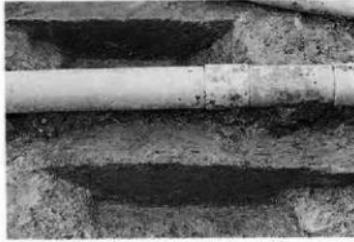
作業風景



溝路1号断面



溝路2号完掘



断面

写真図版23 遺構(21)



45区全景



PP47砾石出土状况



壳器



PP2断面



PP23断面

写真図版24 造構(22)



49区全景



溝跡 1号断面



土坑 2+3号完掘



溝跡 3号・土坑 1号完掘



土坑 1号断面

写真図版25 遺構(23)



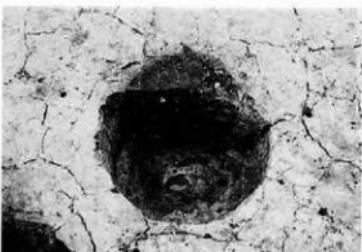
50区全景



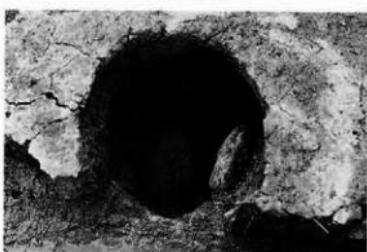
PP群检出状况



满跡1号断面

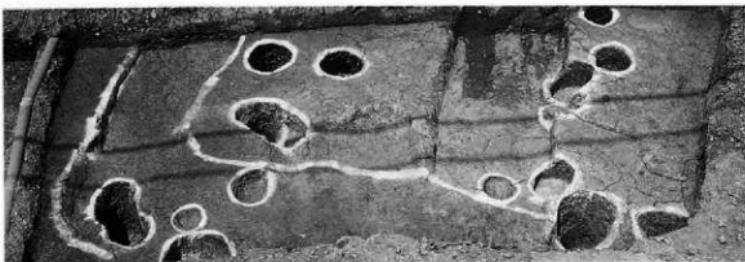


PP24断面



PP13完掘

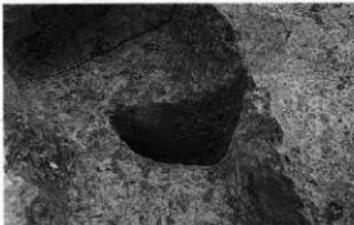
写真図版26 造構(24)



51区溝跡3号完掘



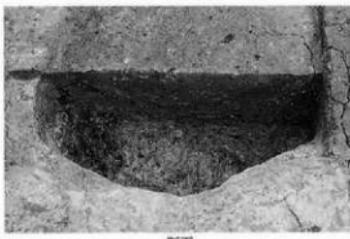
PP41遺物出土状況



PP13断面



土坑1号完掘



断面



土坑2号完掘

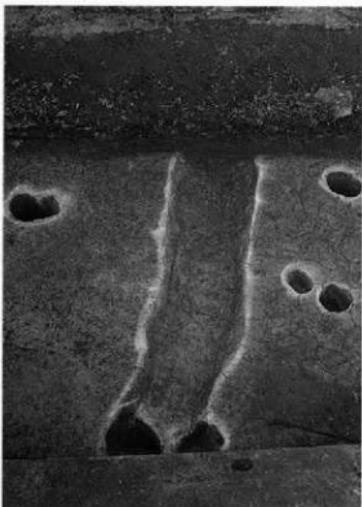


断面

写真図版27 遺構(25)



51区插立柱建筑物跡



溝跡1号完掘



溝跡2号完掘

写真図版28 遺構(26)



51区井戸縫 1号実掘



断面



土坑 1号遺物出土状況



PP35断面

写真図版29 遺構(27)



52区棚跡 1号完掘



検出状況



断面



断面

写真図版30 遺構(28)



53区全景



53区完断



满路1号横出状况



满路1·2号断面

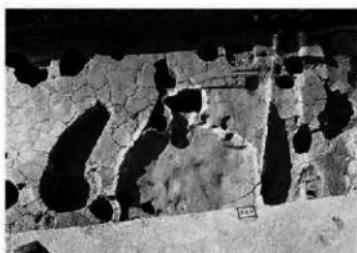


满路3号断面

写真图版31 遗構(29)



54区全景



カマド 1号完掘



カマド断面



土坑 1・2号断面



溝跡 1号断面

写真図版32 遺構(30)



55区溝跡2・3号完掘



溝跡2号断面



溝跡3号断面



溝跡1号完掘



PP1・2完掘

写真図版33 造構(31)



56区全景



溝跡 1号検出状況



遺物出土状況



断面



断面

写真図版34 遺構(32)



60区・61区全景



断面



柱穴列完図



作業風景

写真図版35 造構(33)



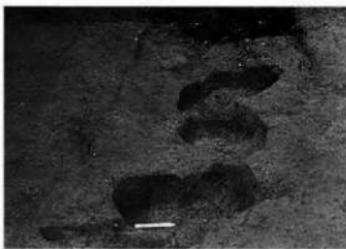
62区全景



断面



检出状况

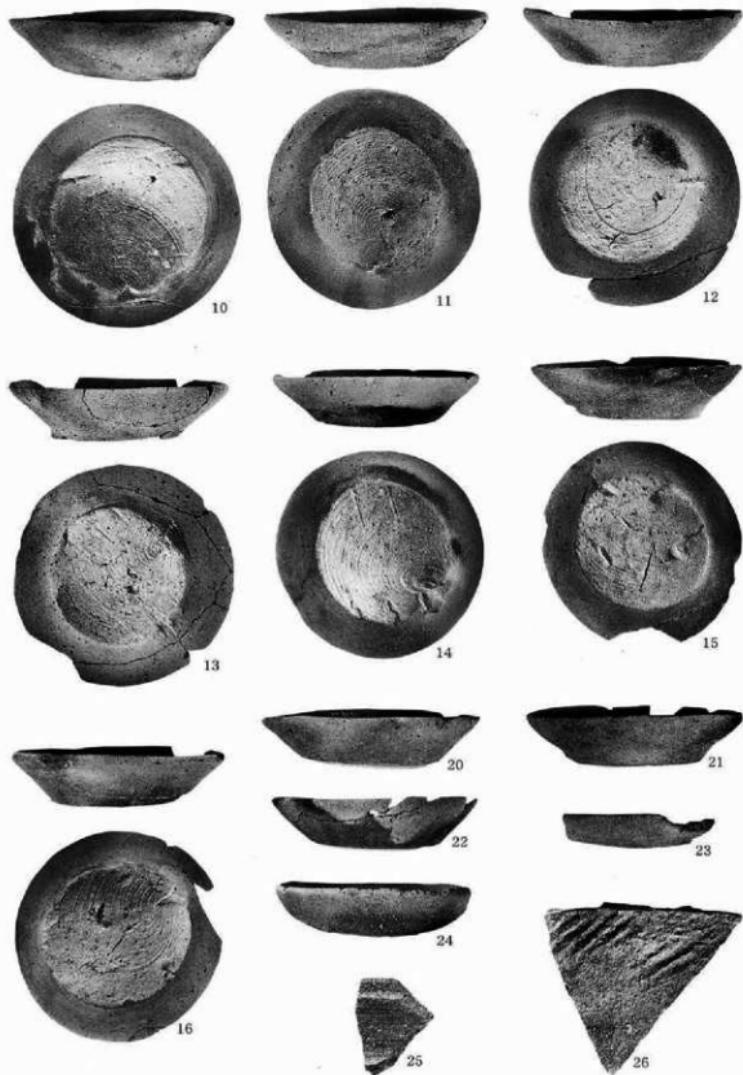


柱穴列

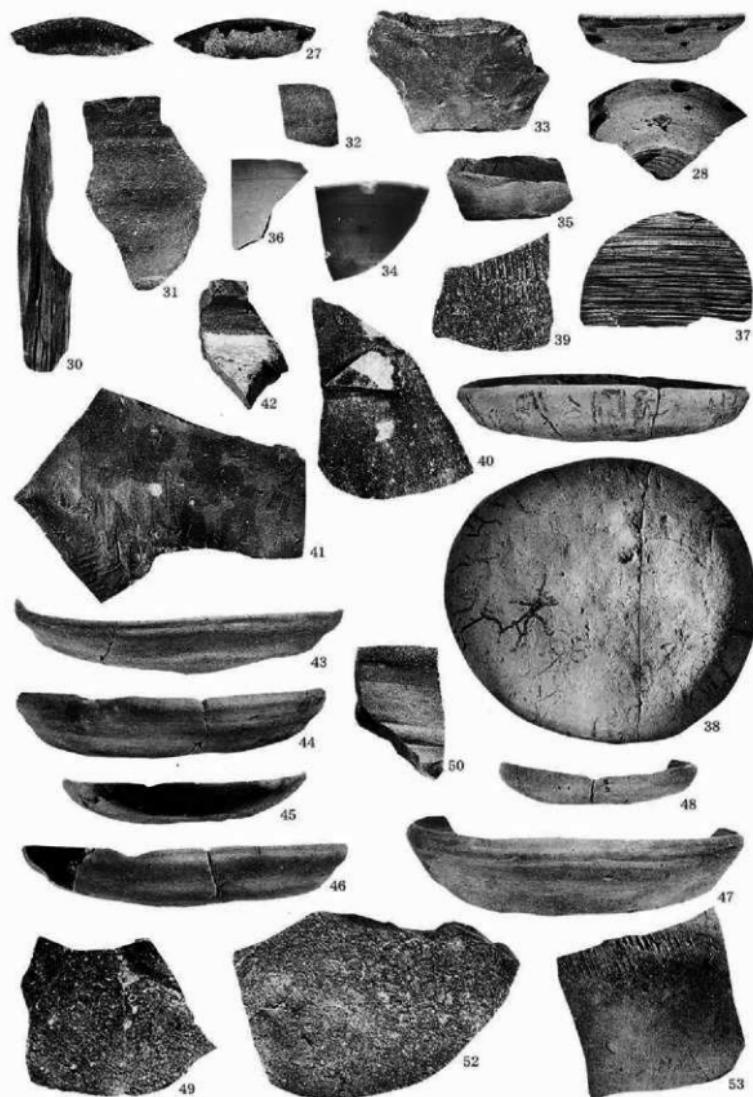
写真図版36 造構(34)



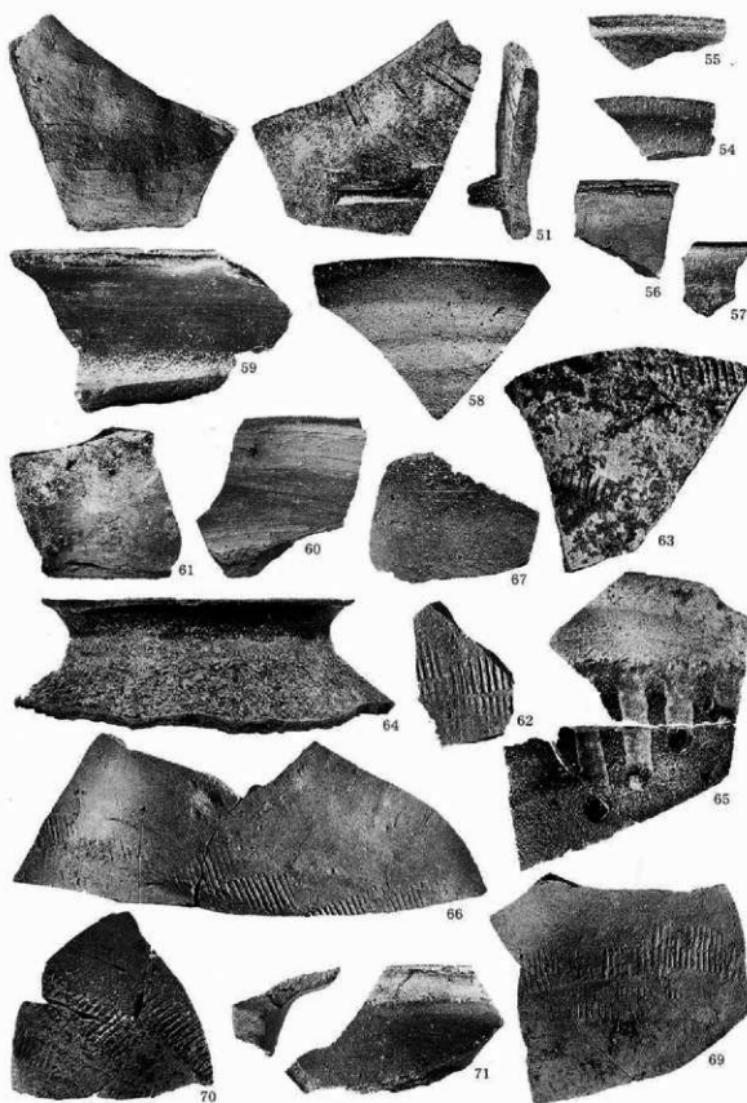
写真図版37 遺物(1)



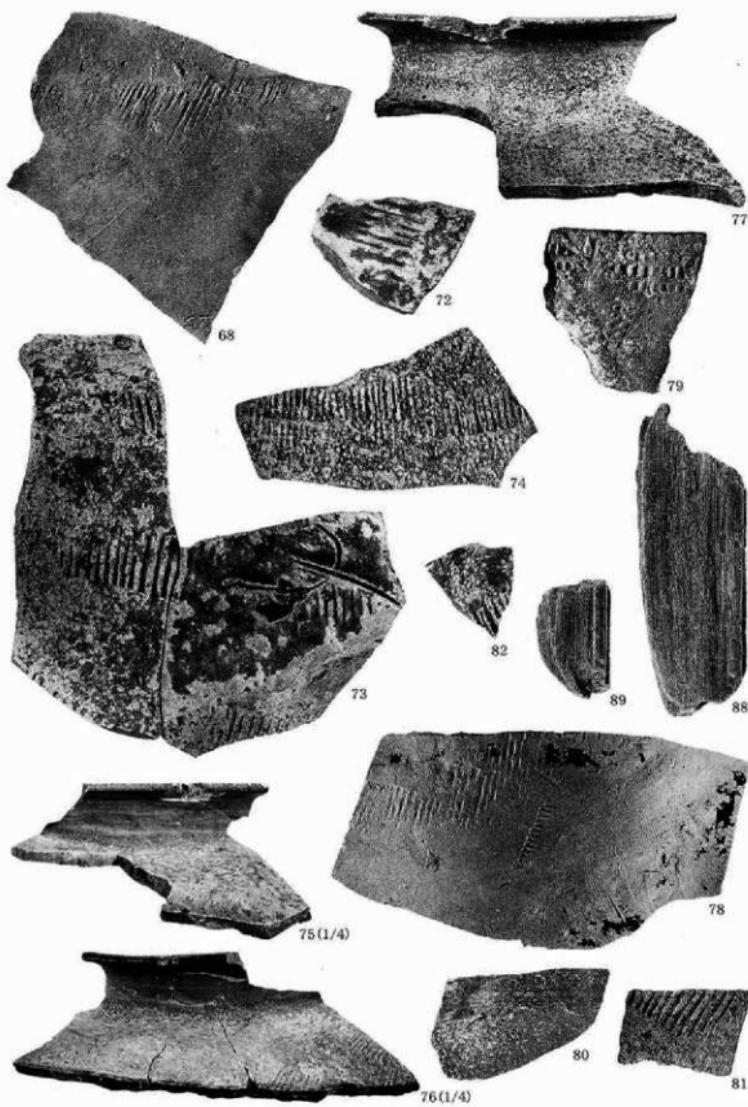
写真図版38 遺物(2)



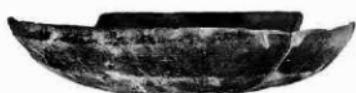
写真図版39 遺物(3)



写真図版40 遺物(4)



写真図版41 遺物(5)



83



84



85



86



93



95

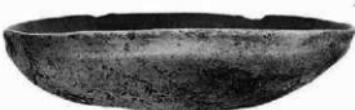
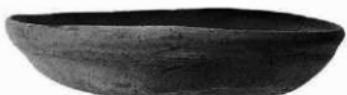


91

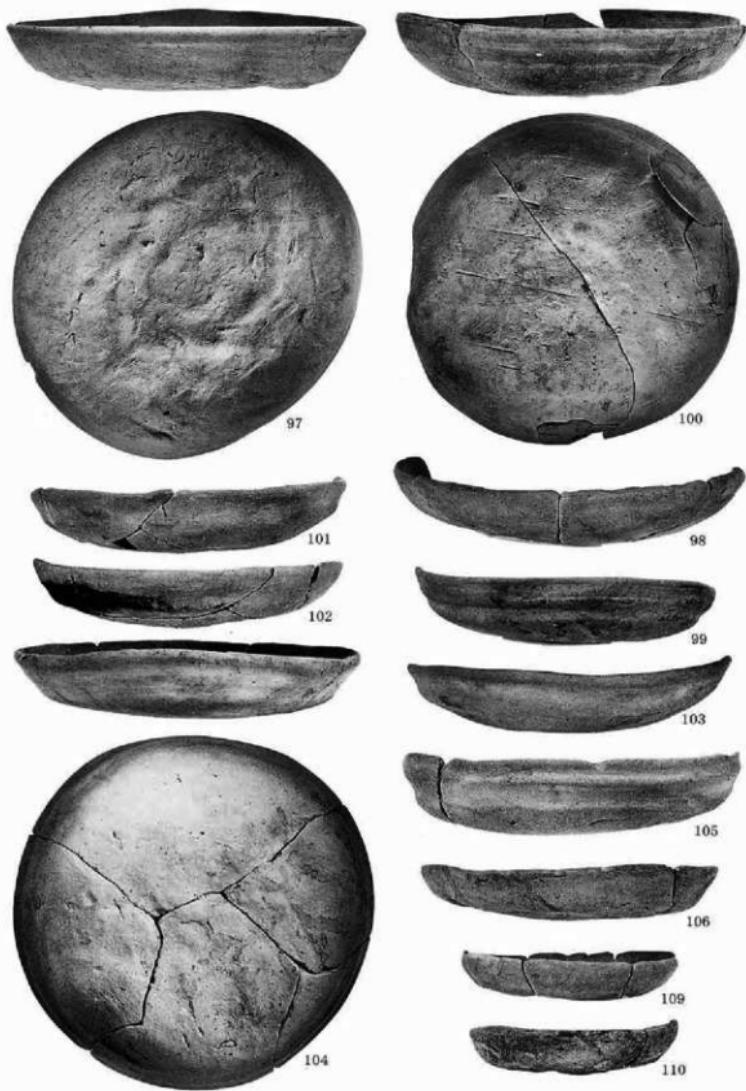


87

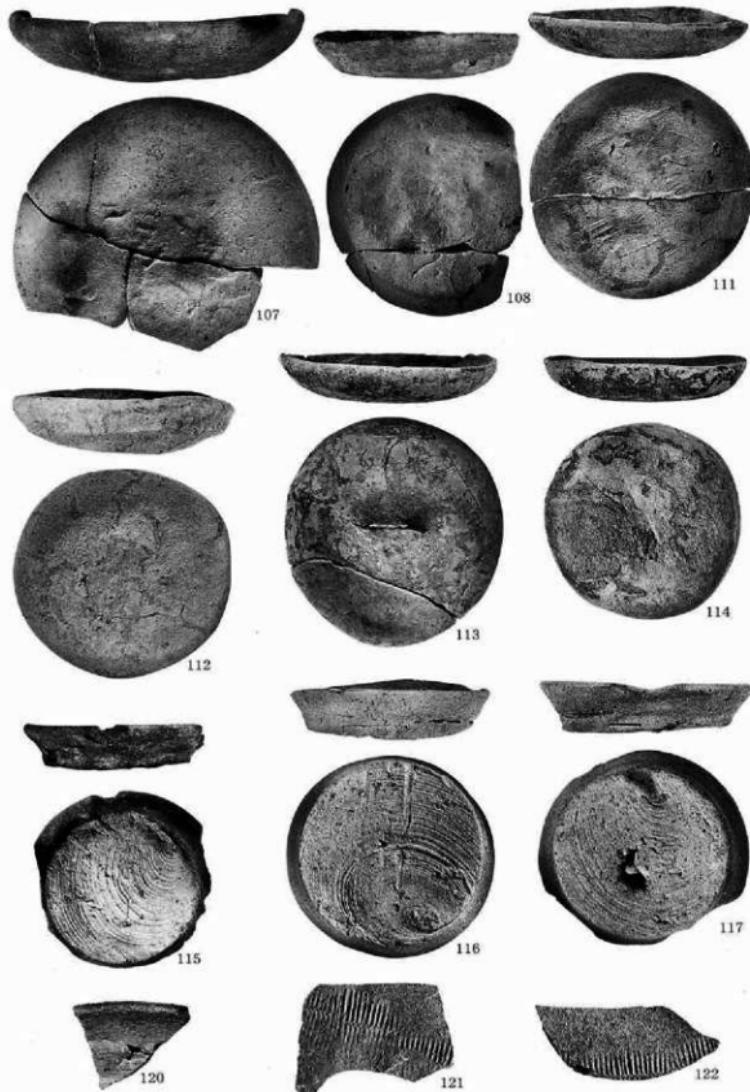
写真図版42 遺物(6)



写真図版43 遺物(7)



写真図版44 遺物(8)



写真図版45 遺物(9)



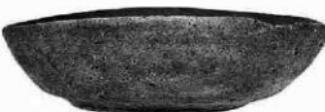
118



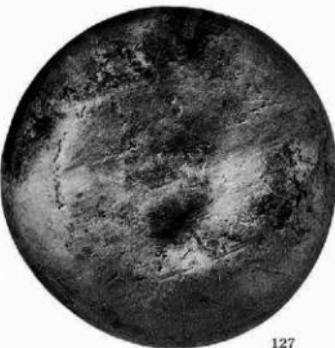
123



129



124



127



125



128



126



131

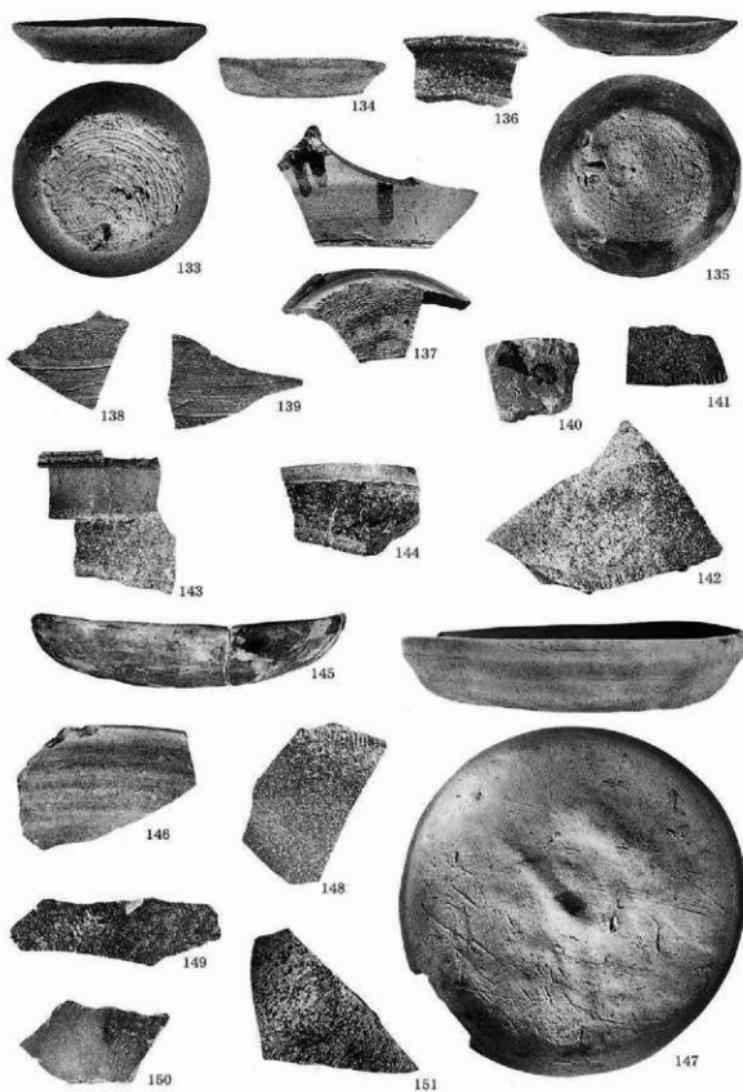


130

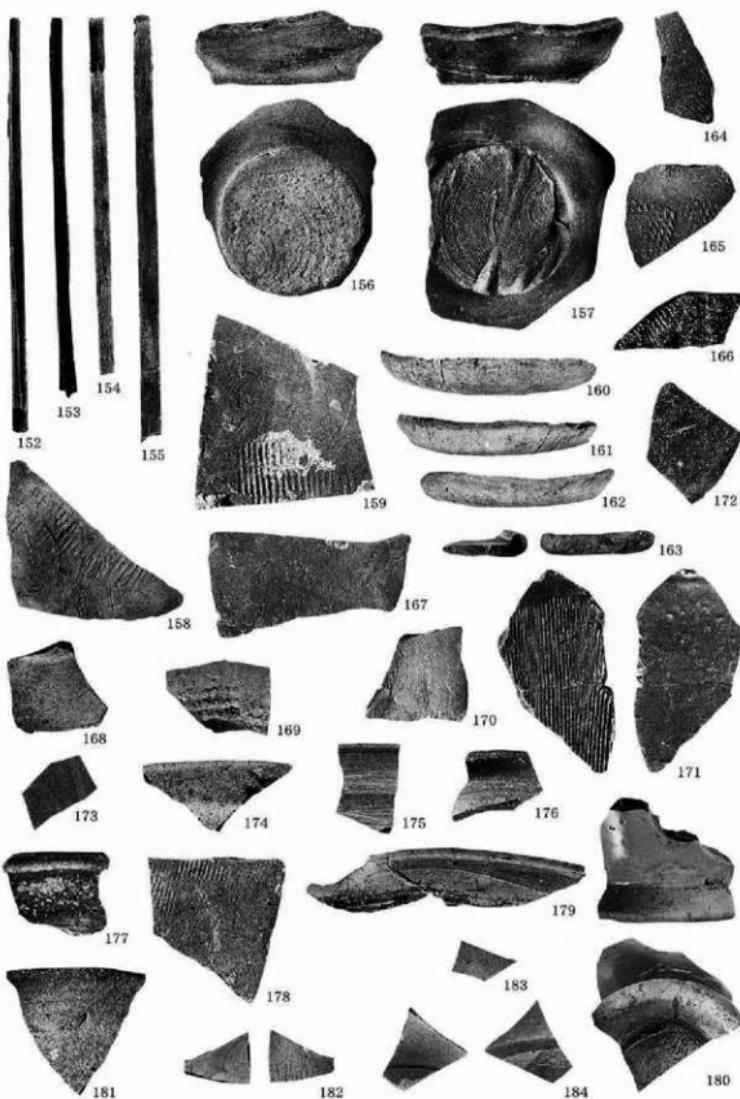


132

写真図版46 遺物(10)

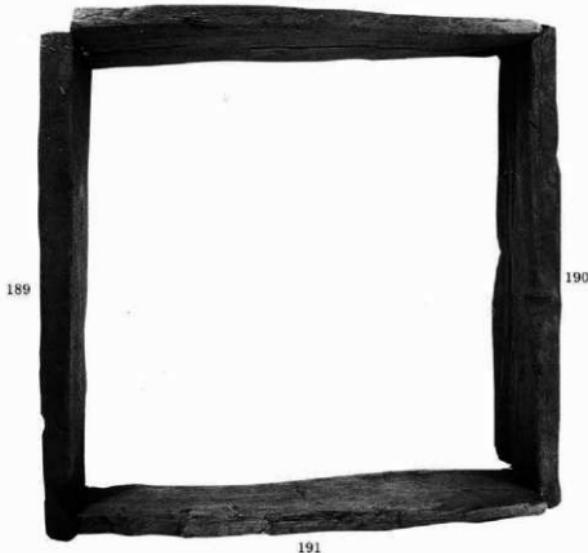


写真図版47 遺物(11)

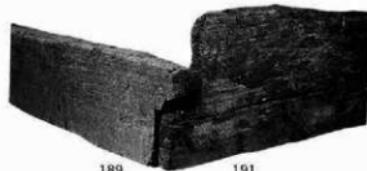


写真図版48 遺物(12)

192



191



191



189

191

写真図版49 遺物(13)



189



191



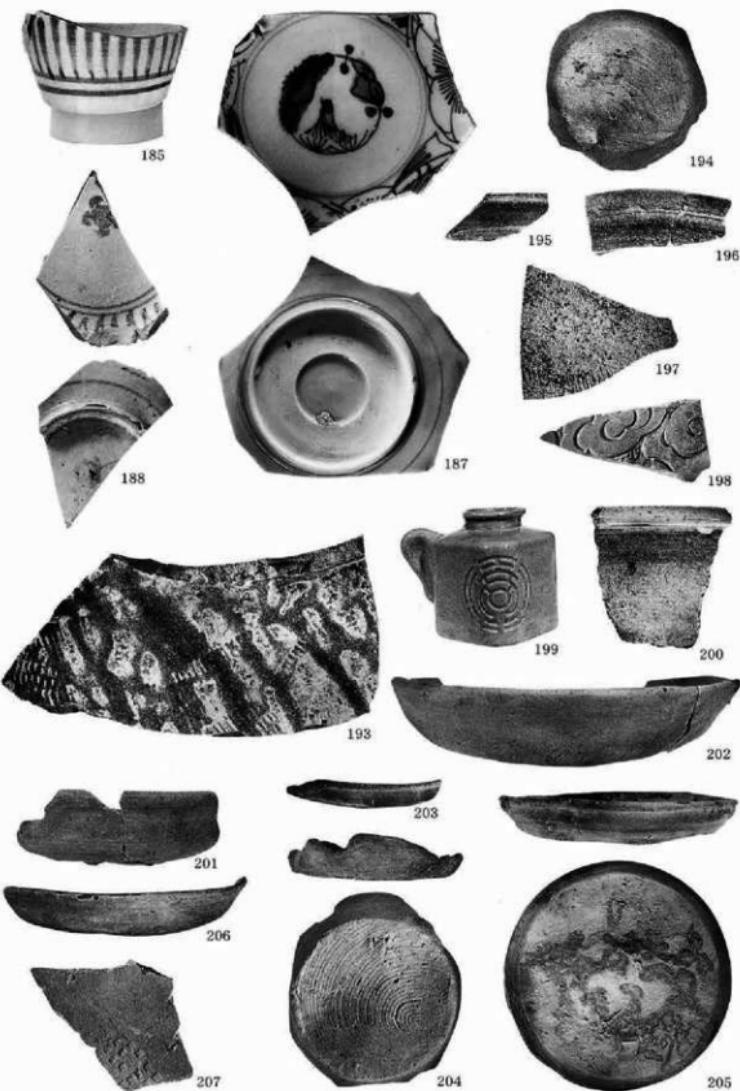
192

外側

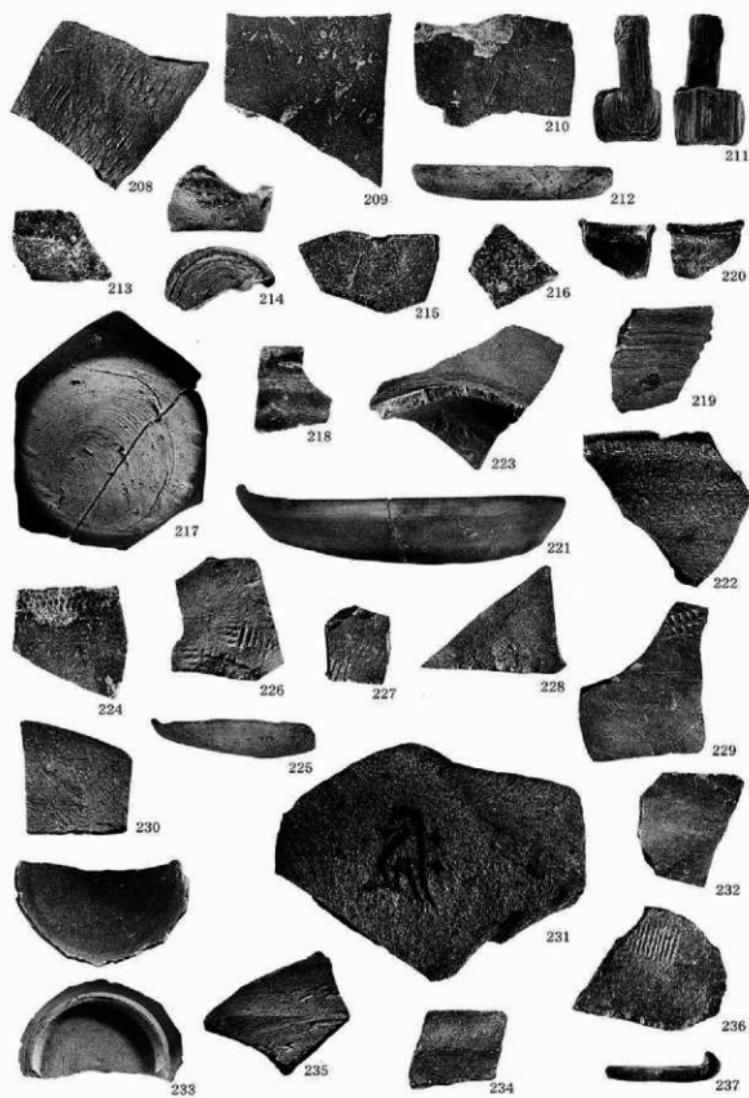


190

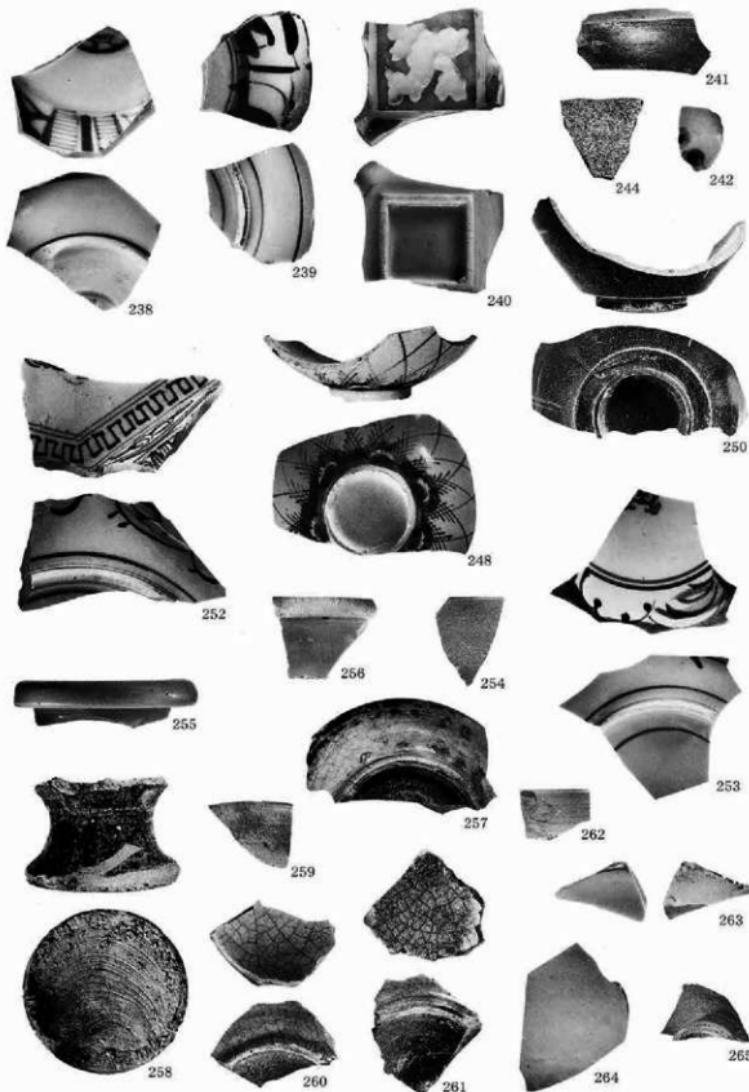
外側



写真図版51 遺物(15)



写真図版52 遺物(16)



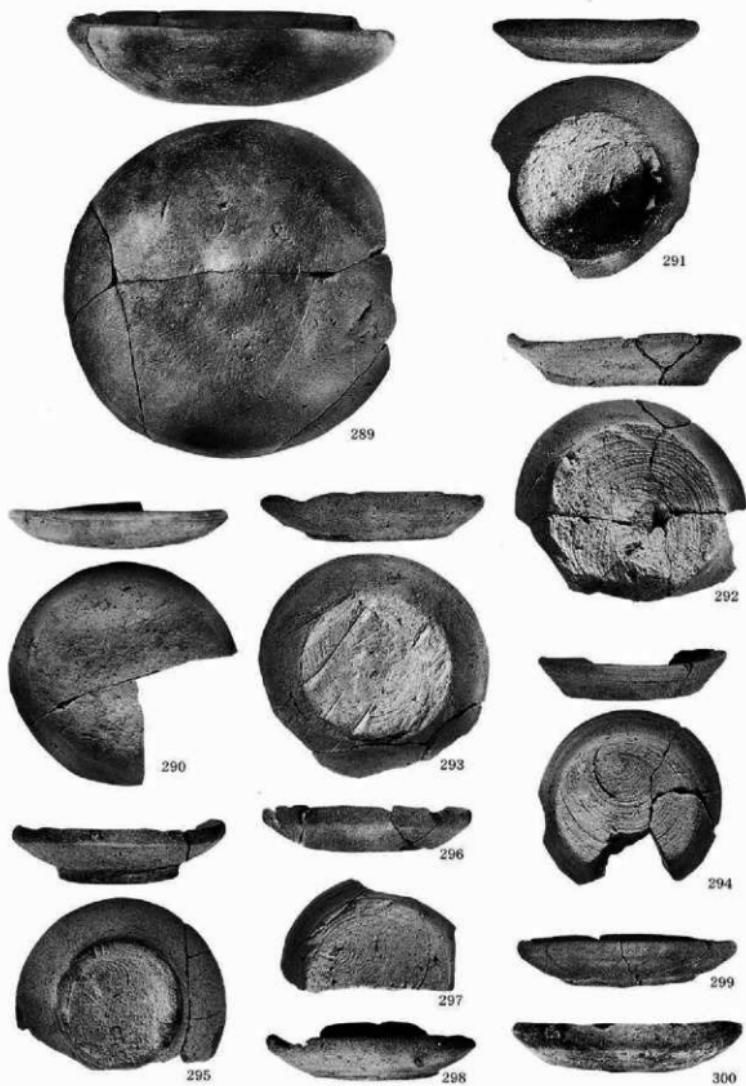
写真図版53 遺物(17)



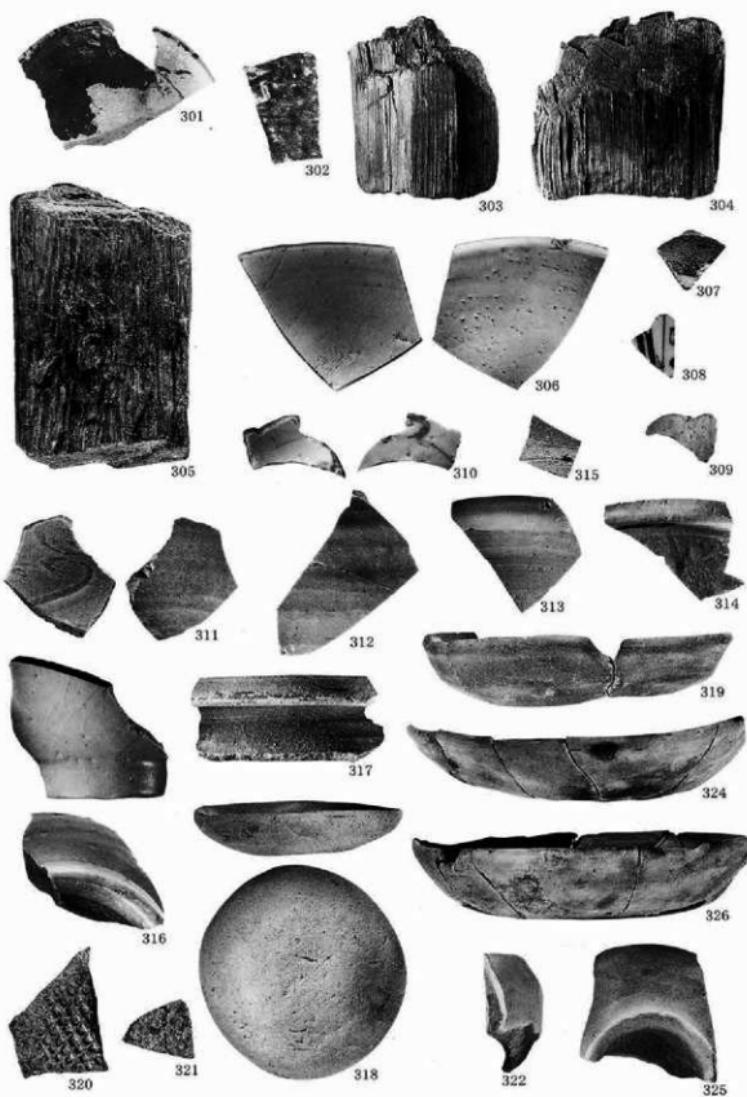
写真図版54 遺物(18)



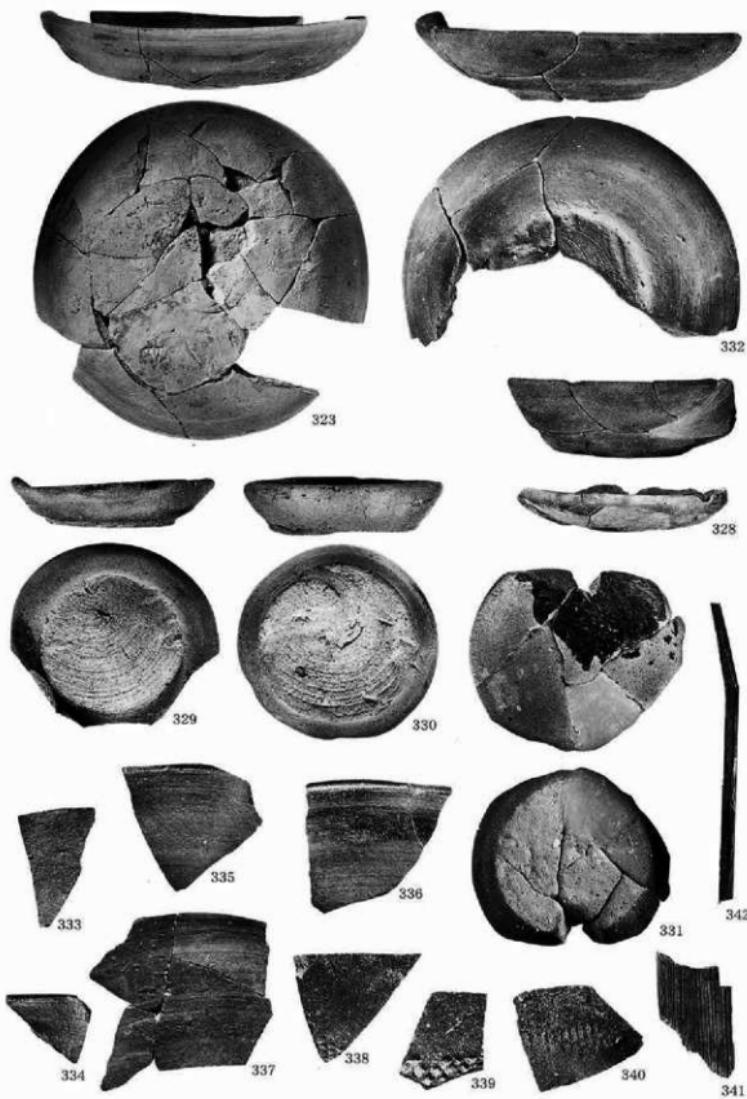
写真図版55 遺物(19)



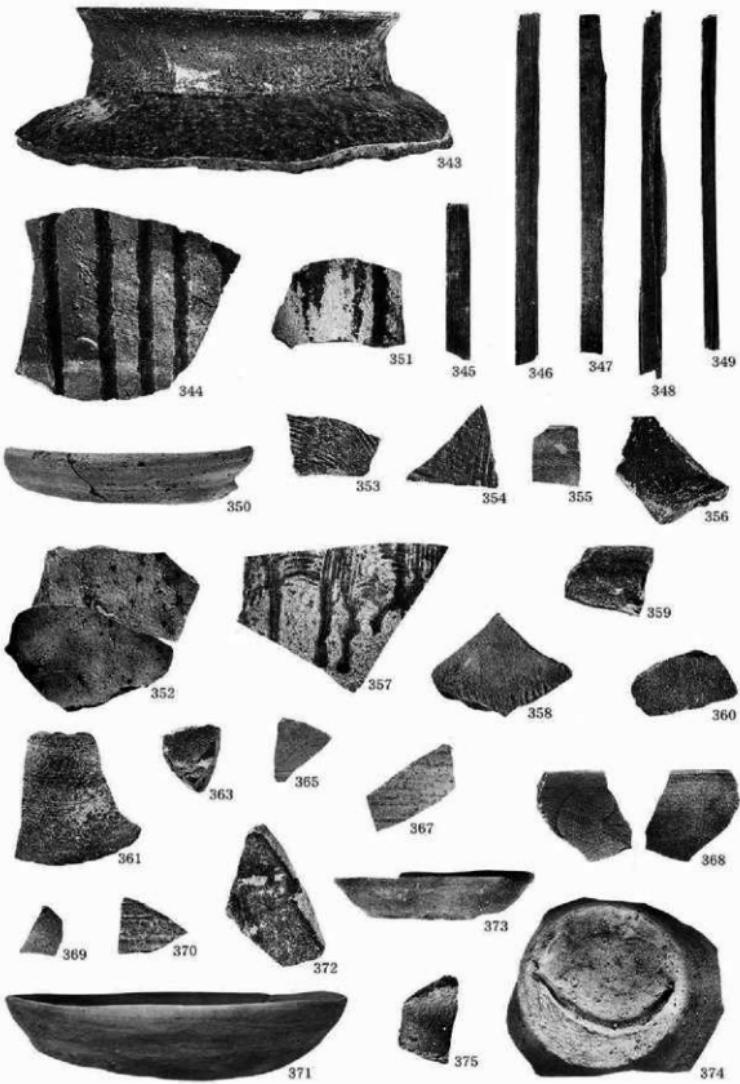
写真図版56 遺物(20)



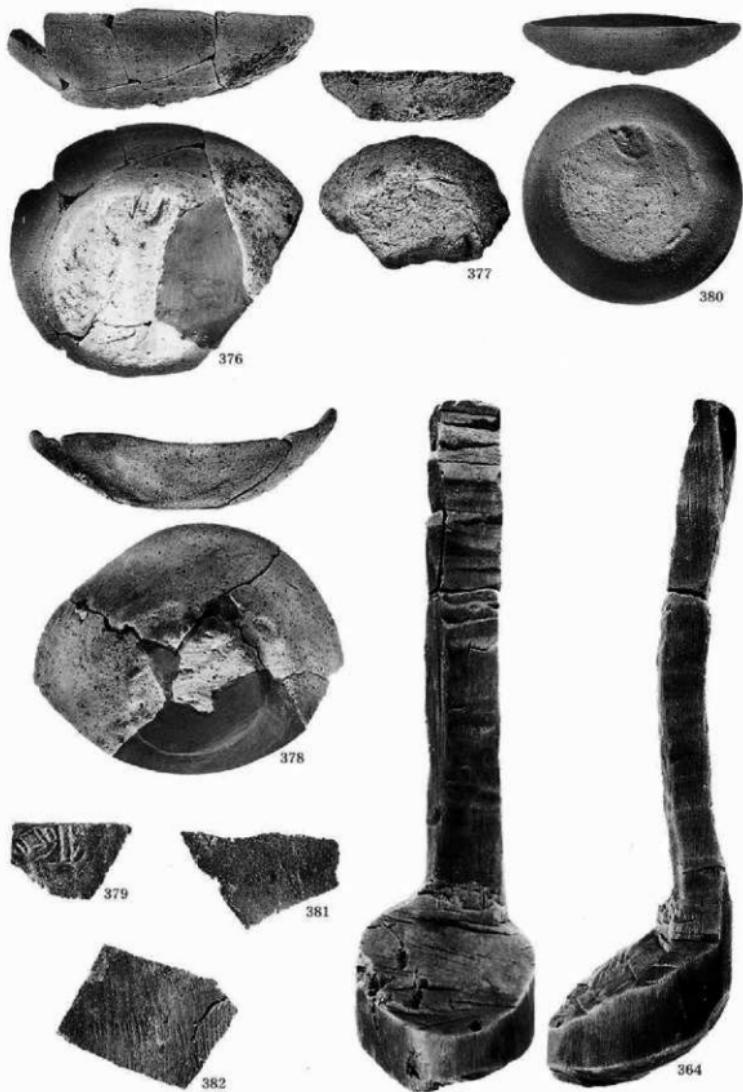
写真図版57 遺物(21)



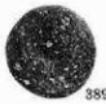
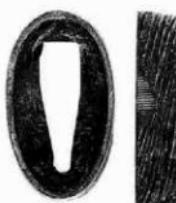
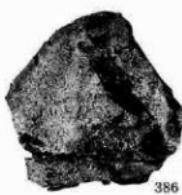
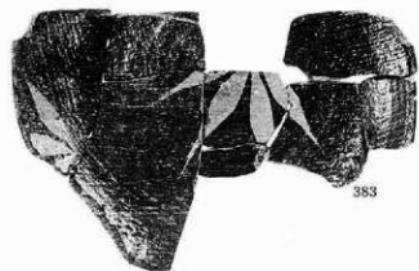
写真図版58 遺物(22)



写真図版59 遺物(23)



写真図版60 遺物(24)



写真図版61 遺物(25)



## **志羅山遺跡第67次調查**



## VI. 第67次調査の報告

### 1. 調査・整理の方法

#### (1) 野外調査について

##### ①グリッドの設定

第67次調査においては、第56次調査で設定した基準点を基にグリッドを区画した。グリッドは、起点を北東に置き、5×5mを1区画とした。南北方向は1～26まで、東西方向はA～Mまでを与え、その組み合わせによってグリッド名とした（1A、2Bなど）。

##### ②遺構の呼称

遺構の呼称については、下記のとおりの略号を調査区毎に付し、通し番号を与えて呼称した。本文中では日本語名で表記しているが、旧遺構名として略号による遺構名も併せて記している。

S B…掘立柱建物跡 SK…土坑 S E…井戸状遺構 S A…堀跡 S D…溝跡 P P…柱穴

#### (2) 室内整理について

##### ①遺構の軸線方向の記載

第67次調査においては、掘立柱建物跡の軸線方向について、正面あるいは棟方向とは関係なく柱筋の線とし、公共座標第X系の北から東または西への傾き度を表示した。桁行・梁行が不明な場合は、東西ラインまたは南北ラインという呼び方とした。また、溝の軸線方向は、水が流れる方向（溝底の傾き）とは関係なく、平面形における溝跡底中央線から公共座標第X系の北から東または西への傾き度を表示した。堀の軸方向については、平面形における布堀り底面中央線から公共座標第X系の北から東への傾きを表示した。

### 2. 基本層序

基本層序は、調査区により多少の違いは見受けられるが、ほぼ次のような土層が順に堆積している。

I a層 国道4号沿い歩道部分のコンクリート抱壁 厚さ約50cm

I b層 明黄褐色土（盛土） 層厚6～32cm前後 砂利・小石・礫混入

I c層 青灰～オリーブ黒～黒色土（盛土） 層厚10～30cm前後

I d層 青灰～明青灰色土（盛土） 層厚3～20cm前後

II a層 暗オリーブ褐色土（旧水田耕作層） 層厚10～20cm前後 粘性有り・締まりやや軟

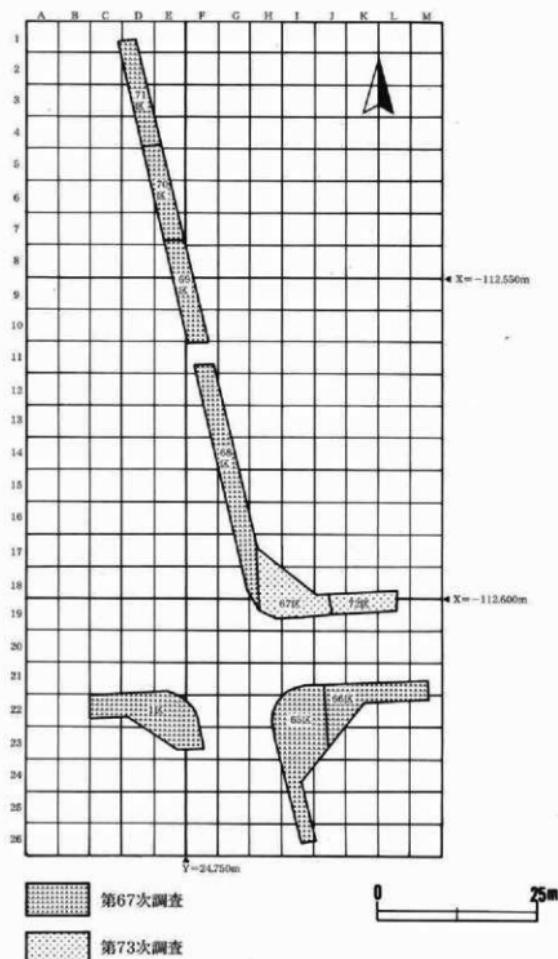
酸化鉄分集積

II b層 黒褐色土（旧水田耕作層） 層厚2～5cm前後 粘性有り・締まりやや軟 酸化鉄分集積

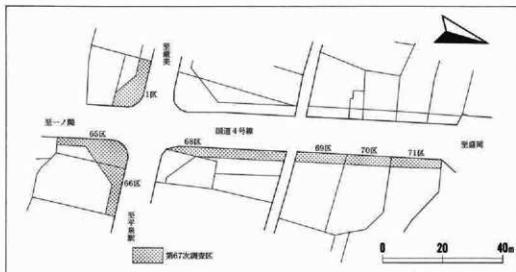
II c層 灰黄褐色土（自然堆積層） 層厚3～20cm前後 粘性有り・締まりやや軟 摩滅したかわらけ

片等含む遺物包含層 1・65・68区で検出。

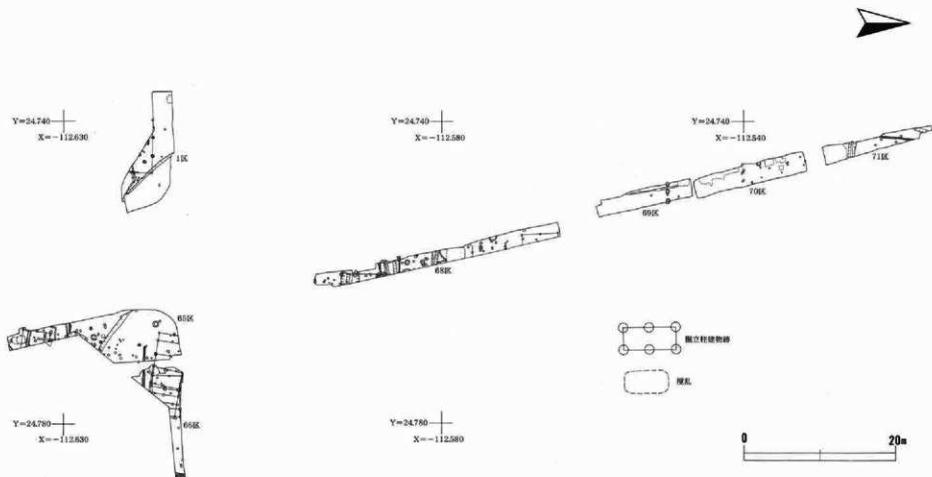
III 層 黄褐色粘土層（地山） 層厚不明 検出時は青灰色であるが、徐々に黄褐色に変化する



第1図 第67次・73次調査グリッド配置図



志羅山遺跡第67次調查區全景



第2図 第67次調査遺構記置図

### 3. 検出された遺構と出土遺物

#### (1) 1区(旧区名74区)(第3図、写真図版3)

位 置 国道4号と県道平泉・巣美渓線との交差点南西側に位置する。

検出遺構 掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑4基、柱穴19基を検出した。

##### 1区掘立柱建物跡1号(旧遺構名74区S B 1)

遺構(第3図、写真図版4)

〈位置・検出状況〉 21D、22E～23Eグリッドに位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。

本遺構を構成するPP6が1区上坑4号と重複関係にあり、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 調査区外にプランが延びるため全体形は不明である。検出規模は東西ラインが3間(総長700cm)、南北ラインが1間(総長210cm)である。南北ラインの軸線方向はN-4°-Eである。柱間寸法は、東西ラインが西から234cm(現行尺7.7尺)、246cm(8.1尺)、220cm(7.3尺)で、南北ラインが210cm(6.9尺)である。東西ライン柱穴間の平均間尺は233cm(7.7尺)である。検出した柱穴の総数は5基で、柱穴の規模は開口部径が20～41cm、深さは削平されているPP9を除き56～76cm程度である。

〈覆土・堆積状況〉 柱穴の覆土は概ね似通っている。据え方(柱痕跡)部分は黒褐色土を主体とし、掘り方部分にはぶい黄色土を主体とする。

出土遺物 柱穴からの出土遺物はない。

時期 掘立柱建物跡を構成する柱穴が遺物包含層除去後に検出されており、また他の遺構との切り合い関係から、12世紀のものと思われる。

##### 1区土坑1号(74区S K 1)

遺構(第3図、写真図版4)

〈位置・検出状況〉 22Eグリッド南西隅に位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。

〈平面形・規模〉 平面形は楕円形で、規模は開口部径52×32cm、深さは17cm程度である。

〈覆土・堆積状況〉 覆土は黒褐色土にぶい黄色土が少量混入する単層からなる。

〈壁・底面〉 東側の壁は直立ぎみに、南側の壁は外傾して立ち上がる。断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底ぎみである。

出土遺物 かわらけが出上了した。

かわらけ 細片が微量出土した(50g)。

時期 不明である。

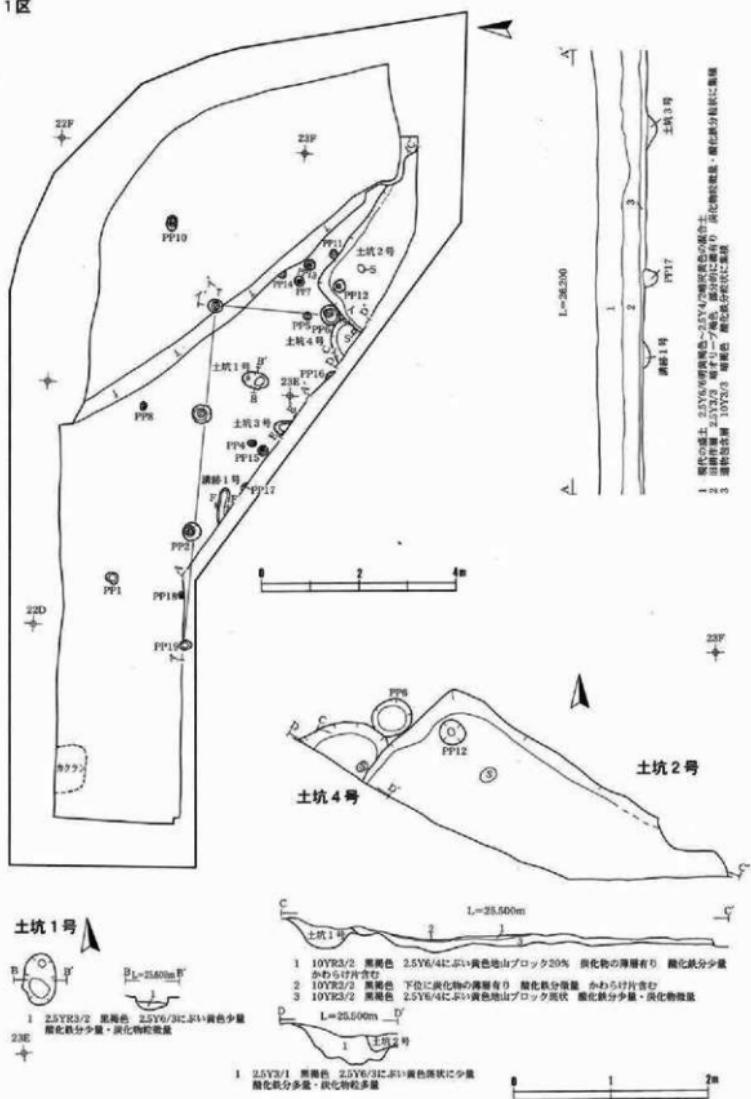
##### 1区土坑2号(74区S K 2)

遺構(第3図、写真図版4)

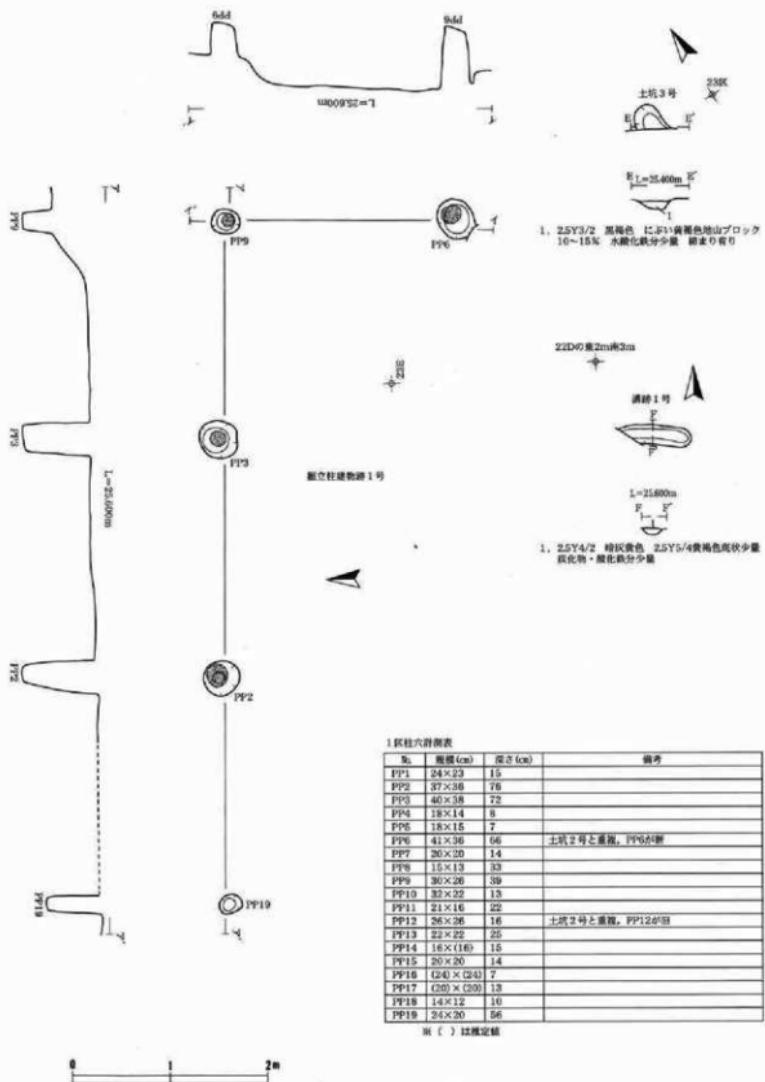
〈位置・検出状況〉 23Eグリッド中央部に位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。1区土坑4号と重複関係にあり、本遺構が新しい。

〈覆土・堆積状況〉 覆土は3層に区分される。いずれも黒褐色土を主体とし、1、3層にぶい黄色土の地山ブロックが入る。人為堆積の様相である。

1区



第3回 1区(1)



第4図 1区 (2)

**(平面形・規模)** 遺構が南側の調査区外に広がることが予想されるため、全体の規模は不明である。深さは4~28cmである。

**(壁・底面)** 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はやや凹凸があるものの概ね平坦である。

**出土遺物（第22図、写真図版14）**

かわらけ、国産陶器、粘土が出土した。

かわらけ 登録したかわらけ6点（手づくね1点・ロクロ5点、登録No.1~6…以下登録略）を含め、4号ビニール袋15袋分（約729g）が出土した。

国産陶器 常滑焼が1点（No.8）出土した。

粘土 粘土塊が2点（約7g）出土した。

時期 出土遺物から12世紀に所属するものと思われる。

**1区土坑3号（74区SK3）**

**遺構（第4図、写真図版4）**

**（位置・検出状況）** 22Dグリッド南東隅に位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。

**（平面形・規模）** 遺構が南側調査区外に広がるため全体形は不明である。確認できるプランから推定すると平面形は梢円形である。深さは11cm程度である。

**（覆土・堆積状況）** 黒褐色土にいぶい黄褐色土地山ブロックの混入する単層の覆土である。

**（壁・底面）** 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 なし。

時期 不明である。

**1区土坑4号（74区SK4）**

**遺構（第3図、写真図版4）**

**（位置・検出状況）** 23Eグリッド北西に位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。1区土坑2号と重複関係にあり、本遺構が古い。

**（平面形・規模）** 遺構が南側調査区外に広がるため全体形は不明である。確認できるプランから推定すると平面形は梢円形状を呈する。深さは23cm程度である。

**（覆土・堆積状況）** 覆土は黒褐色土にいぶい黄色土が斑状に混入する単層の覆土である。自然堆積の様相である。

**（壁・底面）** 壁は下位から中位にかけて外傾し、中位から上位にかけて外反する。断面形は丸底の浅鉢状を呈する。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物はないものの、12世紀と思われる1区土坑2号との切り合い関係から、12世紀に属するものと思われる。

**1区溝跡1号（74区SD1）**

**遺構（第4図、写真図版4）**

（位置・検出状況） 22Dグリッド中央部に位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は約64cmで、規模は開口部幅20cm、底部幅10cm、深さ7cm程度である。軸線方向はN-94°-Eである。地形的には東に緩やかに傾斜するが、水の流れる方向は不明である。

（覆土・堆積状況） 暗灰黄色土に黄褐色土を斑状に混入する单層の覆土である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底である。

出土遺物 かわらけが出土した。

かわらけ 細片が微量（30g）出土した。

時期 不明である。

#### 遺構外出土遺物（第22図、写真図版14）

遺物包含層中よりかわらけ、国産陶器、中国産磁器、金属製品、粘土が出土した。

かわらけ 登録したかわらけ8点（手づくね2点・ロクロ2点・内折4点、No.9~16）を含め、4号ビニール袋約24袋分（約12.1kg）が出土した。

国産陶器 常滑産が10点、瀬美産が7点、須恵器が1点が出土した（No.17~34）。

中国産磁器 青白磁の合子1点（No.35）と白磁の碗1点（No.36）が出土した。

金属製品 鉛錆が1点（No.37）出土した。

粘土 粘土塊が6点（約66g）出土した。

#### 1区のまとめ

1区調査区東側は、調査区西側に比べ約30cmほどの削平を受けて地山面が一段低くなっている。このため調査区東側では検出遺構が少なくなっている。検出された遺構は、削平を受けた調査区東側の柱穴を除き、12世紀の遺物を主体とする遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出された。遺物包含層は層厚3~10cmであり、遺物の大部分は埋没したかわらけである。

1区掘立柱建物跡1号は、PP19以西の柱穴の検出に努めたが検出されなかったため、東西ラインは3回と思われる。時期は遺物包含層除去後のⅢ層で検出され、また12世紀代の土坑との切り合い関係から12世紀に属するものと思われる。

1区土坑2号と1区土坑4号は重複関係から土坑2号が新しく、1区土坑2号が12世紀に属すると思われることから1区土坑4号も12世紀に属するものと思われる。また、1区土坑4号と1区掘立柱建物跡1号のPP6が重複関係にあり、1区掘立柱建物跡1号が古いことが分かった。新旧を整理すると、古い順に1区掘立柱建物跡1号→1区土坑4号→1区土坑2号という図式が成立つ。

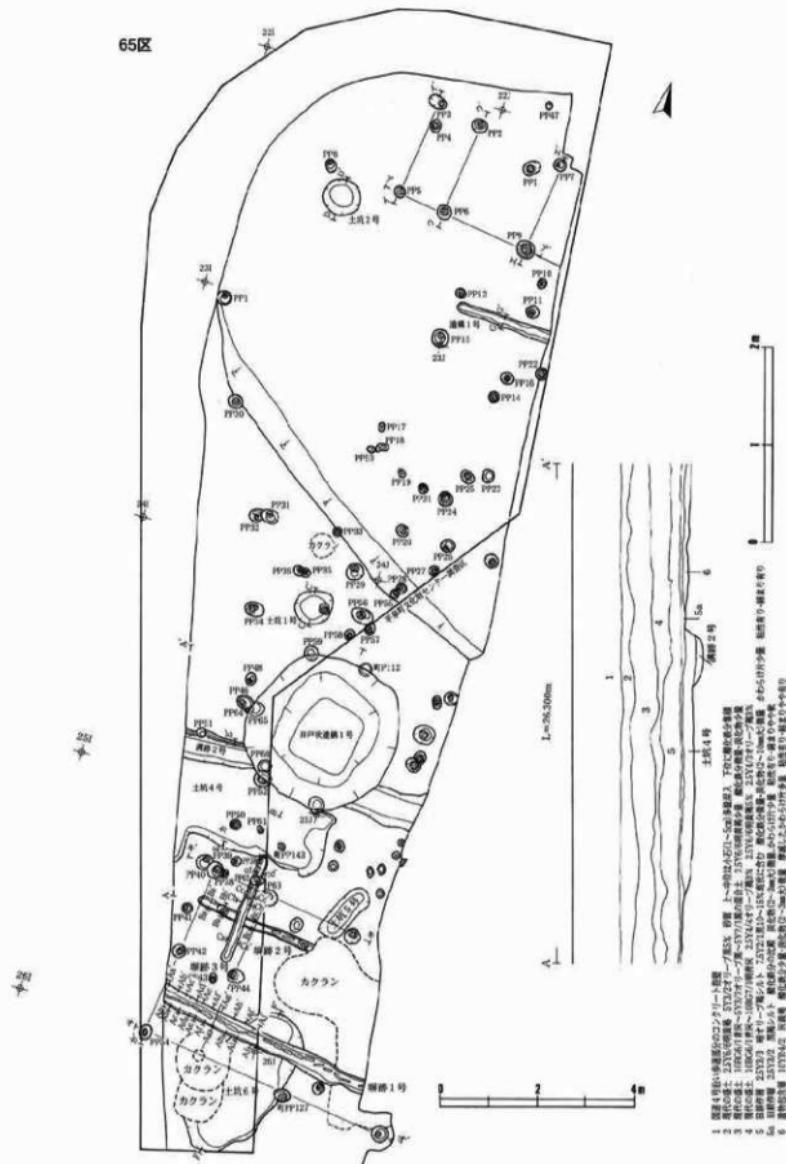
#### （2）65区（旧77区）（第5図、写真図版5）

位 置 国道4号と県道平泉・巣美渓線との交差点南東側に位置する。

検出遺構 掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝跡2条、堀跡3条、柱穴64基を検出した。

65区掘立柱建物跡1号（77区S B 1）…66区掘立柱建物跡1号と同一建物

遺構（第6図）



第5図 65区(1)

〈位置・検出状況〉 21J～21K、22I～22Kグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。柱穴の切り合いで、66区掘立柱2号建物跡、66区掘立柱建物跡3号より本造構が新しい。

〈平面形・規模〉 65区と66区にまたがる掘立柱建物跡である。検出規模は桁行7間（総長780cm）、梁行2間（総長384cm）である。平面形式は桁行5間、梁行2間の身舎の東西に廂が付く建物跡と思われる。本造構は、調査区内に北側部分が延びる可能性もある。梁行の軸線方向は、N-9°-Eである。柱間寸法は、桁行南側が西から190cm（6.3尺）、230cm（7.6尺）、170cm（5.6尺）、廂部分が西側100cm（3.3尺）、東側90cm（3.0尺）で、梁行東側が南から184cm（6.1尺）、200cm（6.6尺）である。平均柱間寸法は桁行197cm（6.5尺）、梁行192cm（6.3尺）で、廂の幅は90～100cmである。検出した柱穴は14基で、柱穴の規模は、開口部径22～42cm、深さ14～38cm程度である。

〈覆土・堆積状況〉 柱穴により若干の差違が見られるが、掘り方が緑灰色土、柱痕跡（据え方）が黒色土～オリーブ黒色土のものが多い。

出土遺物（第22図、写真図版14） 柱穴よりかわらけ、木製品、粘土が出土した。

かわらけ 65区PP5、66区PP1、PP5、PP9、PP10、PP29から、細片が微量（計約67g）出土した。

木製品 65区PP2から漆器が1点（No.40）出土した。両面黒漆塗りが施されており、器種は椀と思われる。

粘土 66区PP9から粘土塊が2点（約15g）出土した。

時期 12世紀に所属するものと思われる。

#### 65区掘立柱建物跡2号（77区S B 2）

##### 遺構（第3図）

〈位置・検出状況〉 25I～26Iグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈平面形・規模〉 調査区内では2間×1間の配列を検出したのみだったが、調査区東側に隣接する平泉町文化財センター調査区で検出された分と合わせた結果、建物の規模は桁行7間（総長約1730cm）、梁行2間（総長372cm）である。平面形式は桁行5間、梁行2間の身舎の西側に廂が付く。梁行の軸線方向はN-9°-Eである。柱間寸法は、当センター調査区分で桁行北側が廂部分も含め西から120cm（4.0尺）、190cm（6.3尺）で、梁行西側が南から186cm（6.1尺）、186cm（6.1尺）である。検出した柱穴は、当センター調査区分で5基と平泉町文化財センター調査区分の9基で、合計14基である。柱穴の規模は、当センター調査区検出分で開口部径27～34cm、深さ58～63cm程度である。

〈覆土・堆積状況〉 少少の差違は見られるものの、掘り方が緑灰色土、柱痕跡（据え方）がオリーブ黒色土のものが多い。

出土遺物（第22図、写真図版14） かわらけ、中国産磁器が出土した。

かわらけ PP38、PP54から細片が微量（約11g）出土した。

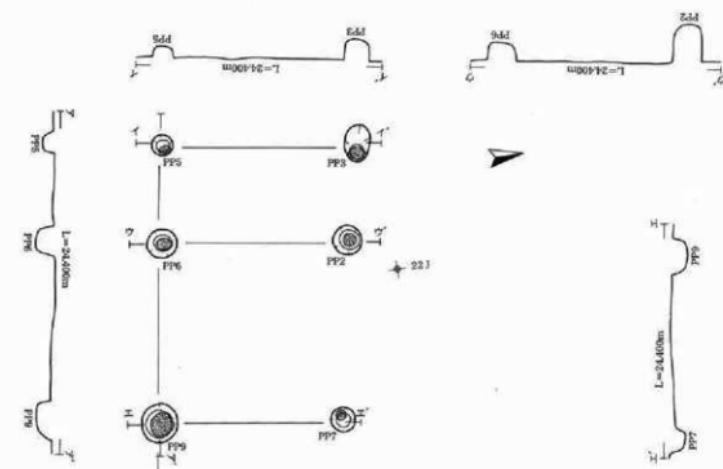
中国産磁器 PP54の掘り方から白磁が1点（No.39）出土した。器種は盃である。

時期 出土遺物から12世紀に属するものと思われる。

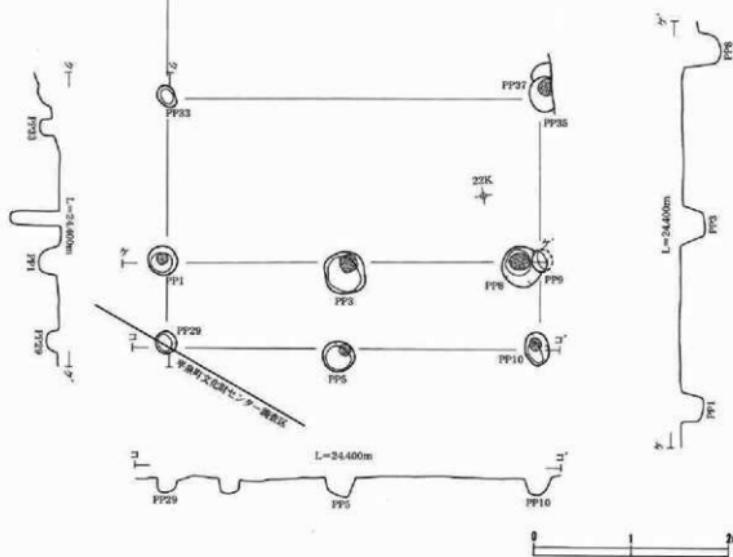
#### 65区井戸状造構1号（77区S E 1）

##### 遺構（第8図）

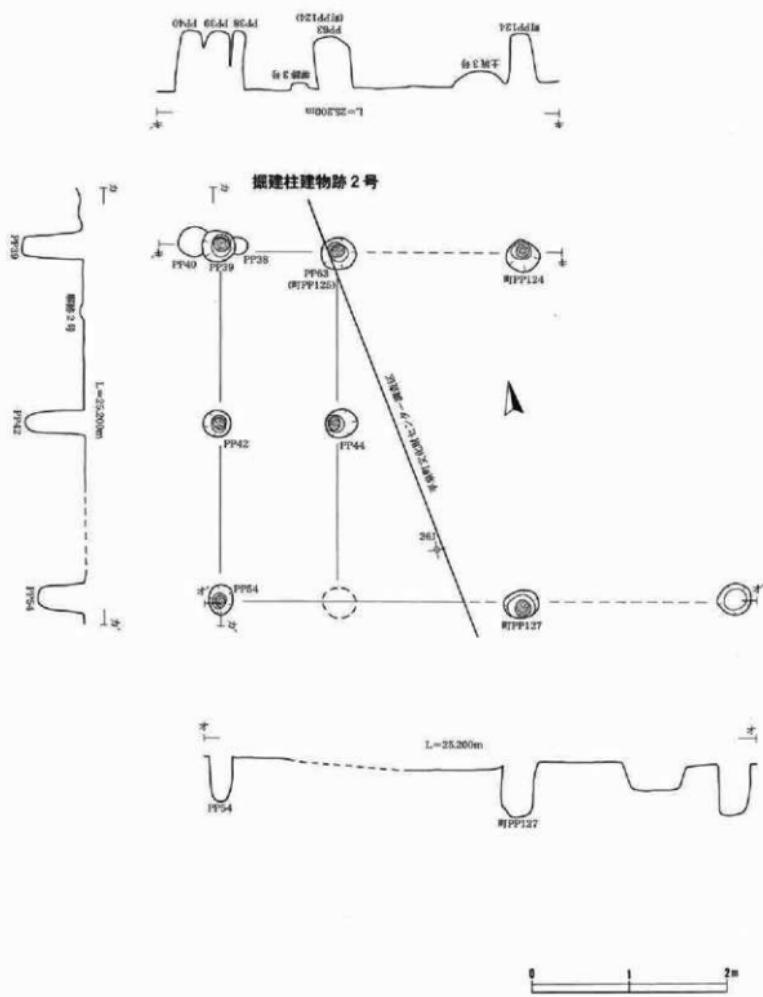
〈位置・検出状況〉 23J～24Jグリッドに位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層上面で検出した。65区4号土坑、65区2号溝の他、柱穴数基と重複関係にあるが、本造構が新しい。造構の大部分は隣接の平泉町文化財セ



掘立柱建物跡 1号



第6図 65区(2)



第7図 65区(3)

ンター調査区にかかる。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ円形で、底面に向かうにつれ方形ぎみとなる。規模は開口部径306cm前後、底部径116～128cm、深さ380cmである。

〈覆土・堆積状況〉 大別すると5層に分かれる。人為堆積的様相を呈する。

〈壁・底面〉 壁は直立ぎみに立ち上がり、深さ80cmあたりから外傾する。断面形はロート状を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 かわらけ、国産陶器、中国産磁器、木製品等が出土した。

遺物はすべて平泉町文化財センターが保管している。かわらけは手づくねが主体である。かわらけは約300kgが出土している。

時期 廃絶は12世紀後半と思われる。

#### 65区土坑1号(77区SK1)

遺構(第9図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉 24Iグリッド北東に位置する。包含層除去後のⅢ層上面で検出した。PP45と重複関係にあり、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉 平面形は梢円形で、規模は開口部径80×67cm、底部径49cm、深さ10cm程である。

〈覆土・堆積状況〉 黒褐色土にいぶい黄色土が斑状に混入する単層の覆土である。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底は丸底である。

出土遺物 かわらけが出土した。

かわらけ 細片が微量(約11g)出土した。

時期 不明である。

#### 65区土坑2号(77区SK2)

遺構(第9図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉 22Iグリッド中央に位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ円形で、開口部径80×76cm、底部径52×46cm、深さ40cm程である。

〈覆土・堆積状況〉 黒色土～オリーブ黒色土の3層に区分される。覆土上部の1層は微量のかわらけを含み、覆土下部の3層は有機質腐植土層となる。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 かわらけが出土した。

かわらけ 細片が微量(約36g)出土した。

時期 12世紀に所属するものと思われる。

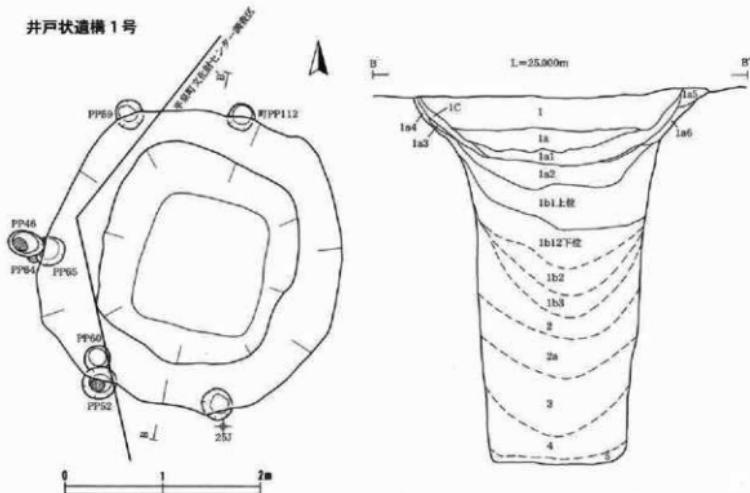
#### 65区土坑3号(77区SK3)

遺構名は付したが、隣接の平泉町文化財センター調査区内に位置するため本文、図版等は掲載していない。

#### 65区土坑4号(77区SK4)

遺構(第9図、写真図版5)

井戸状遺構 1号



地区教育委员会

No	周波数 (Hz)	波長 (cm)	備考
PP1	36×28	32	PP28と重複。PP5が弱
PP2	30×30	40	
PP3	40×25	28	
PP4	36×36	37	
PP5	24×22	44	PP28と重複。PP5が弱
PP6	30×30	20	
PP7	26×24	19	
PP8	26×22	8	
PP9	40×36	17	
PP10	21×29	19	
PP11	27×26	28	
PP12	20×19	8	
PP13	31×28	60	
PP14	22×20	11	
PP15	38×32	12	
PP16	26×26	23	
PP17	19×12	7	
PP18	28×16	5	
PP19	18×12	6	
PP20	36×24	28	
PP21	19×16	13	
PP22	24×23	10	
PP23	28×24	38	
PP24	30×26	21	
PP25	27×24	19	
PP26	28×26	33	
PP27	22×21	16	
PP28	22×20	10	PP26と重複。PP28が強
PP29	36×34	62	
PP30	30×28	44	
PP31	24×26	33	PP32と重複。PP31が弱
PP32	30×27	32	PP31と重複。PP32が弱
PP33	21×25	25	
PP34	30×30	30	
PP35	20×19	21	PP36と重複。PP35が弱
PP36	22×21	25	PP35と重複。PP36が弱
PP37	18×17	28	
PP38	19×18	63	PP39と重複。PP38が弱
PP39	34×32	62	PP38と重複。PP40と重複。

卷(一)問題文集

第8回 65区(4)

〈位置・検出状況〉 22 I グリッド北～中央に位置する。包含層除去後のⅢ層上面で検出した。溝跡 2 号、井戸状遺構 1 号と重複関係にあり、溝跡 2 号より新しく、井戸状遺構 1 号より古い。

〈平面形・規模〉 遺構の西側が調査区外に延び、また北東側が井戸状遺構 1 号に切られており、全体の形状は平面形及び規模は不明である。

〈覆土・堆積状況〉 黒褐色土に黄褐色土が少量混入する単層の覆土である。

〈壁・底面〉 壁は緩く外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

出土遺物 カワラケが出土した。

カワラケ 細片が微量（約 82g）出土した。

時期 出土遺物は微量であるものの、切り合い関係から 12 世紀に属するものと思われる。

#### 65 区土坑 5 号（77 区 SK 5）

遺構名は付したが、隣接の平泉町文化財センター調査区内に位置するため遺構の事実記載や図版等は掲載していない。

#### 65 区土坑 6 号（77 区 SK 6）

遺構（第 9 図、写真図版 6）

〈位置・検出状況〉 25 I ～ 26 I、25 J ～ 26 J グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。65 区溝跡 1 号と新旧関係にあり、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 掘乱により遺構全体の検出はできなかったが、平面形は概ね横長楕円形で、開口部径、底部径は推定でそれぞれ 326 × 250cm、292 × 140cm、深さは最大で 9cm 程である。

〈覆土・堆積状況〉 緑灰色土に黒褐色土が少量混入する単層の覆土である。

〈壁・底面〉 壁は緩く外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物はないものの、他の遺構との切り合い関係から 12 世紀に属するものと思われる。

#### 65 区溝跡 1 号（77 区 SD 1）

遺構（第 9 図、写真図版 6）

〈位置・検出状況〉 22 J グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。66 区溝跡 1 号と同一の溝跡である。

〈覆土・堆積状況〉 オリーブ黒色土～暗オリーブ黒色土の単層である。

〈平面形・規模〉 規模は開口部幅 18 ～ 26cm、底部幅 6 ～ 14cm、深さ 3cm 程である。検出長は 202cm、軸線方向は N-86° - W である。底面の傾きは不明瞭である。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

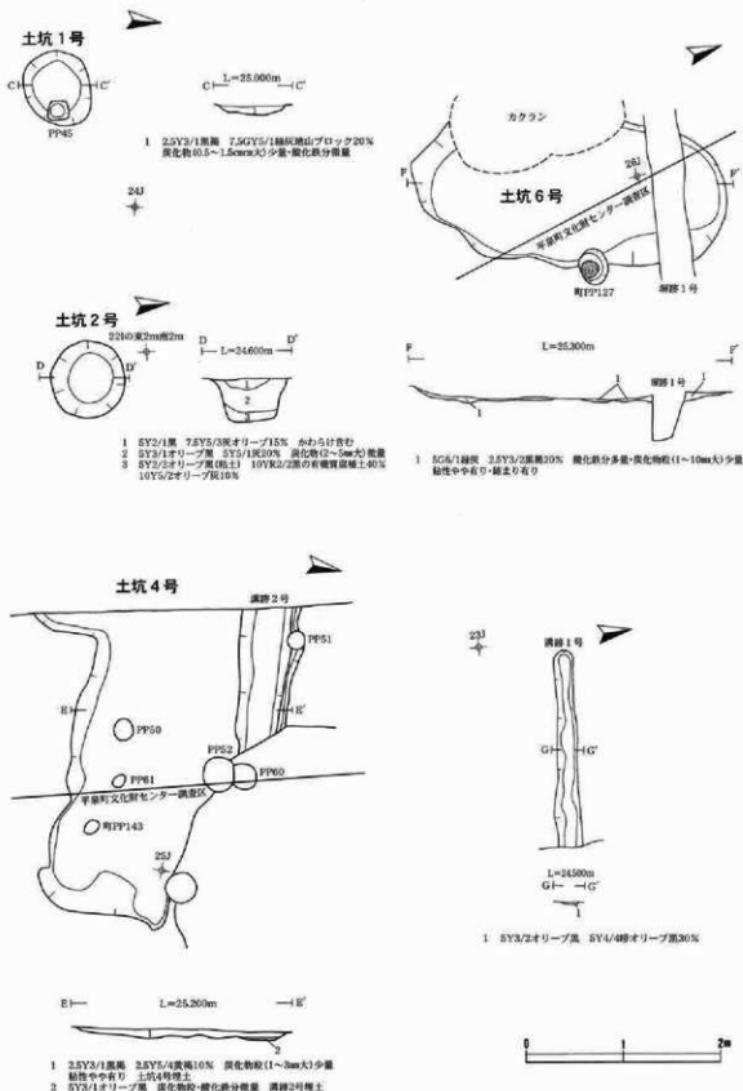
出土遺物 なし。

時期 不明である。

#### 65 区溝跡 2 号（77 区 SD 2）

遺構（第 9 図）

〈位置・検出状況〉 24 I グリッドに位置する。65 区土坑 4 号精査中に検出した。65 区井戸状遺構 1 号、



第9図 65区(5)

65区十坑4号と重複関係にあり、ともに本遺構が古い。

（平面形・規模） 規模は開口部幅42×52cm、底部幅30×24cm、深さ3cm程である。当センター調査区分における検出長は144cm、軸線方向はW-Eである。本遺構は隣接の平泉町文化財センター調査区に延びる。水は東流する構造になっている。

（覆土・堆積状況） オリーブ黒色土の単層である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 当センター調査区分における出土遺物はないものの、隣接の平泉町文化財センター調査区側でかわらけが出土している。

時期 65区井戸状遺構1号が構築される以前の廃絶であることから、12世紀に属するものと思われる。

#### 65区堀跡1号（77区S A 1）

##### 遺構（第10図、写真図版6）

（位置・検出状況） 25 Iグリッド南東に位置する。Ⅲ層上面で検出された。65区6号土坑と重複関係にあり、本遺構が新しい。

（平面形・規模） 検出長は214cm、布堀りの開口部幅は35~45cm、深さは約40~50cmである。遺構は隣接の平泉町文化財センター調査区に延びる。布堀りの軸線方向はN-100°-Eである。板痕跡は軸線方向に対して平行に、布堀りのほぼ中央に列をなして検出された。当センター調査区内における検出された板痕跡の枚数は19枚で、平均的な大きさは、幅35~45cm、厚さ4~5cm程である。

（覆土・堆積状況） 布堀り部分と板痕跡部分の2層からなる。布堀り部分は青灰色土、板痕跡部分は黒褐色土が主体となる。

（壁・底面） 布堀りの壁は直立ぎみに立ち上がり、断面形は深鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

（付属施設） 堀跡に伴う柱穴は検出されていない。

出土遺物 かわらけが出土した。

かわらけ 布堀り部分から、細片が微量（約12g）出土した。

時期 12世紀に属するものと思われる。

#### 65区堀跡2号（77区S A 2）

##### 遺構（第10図、写真図版7）

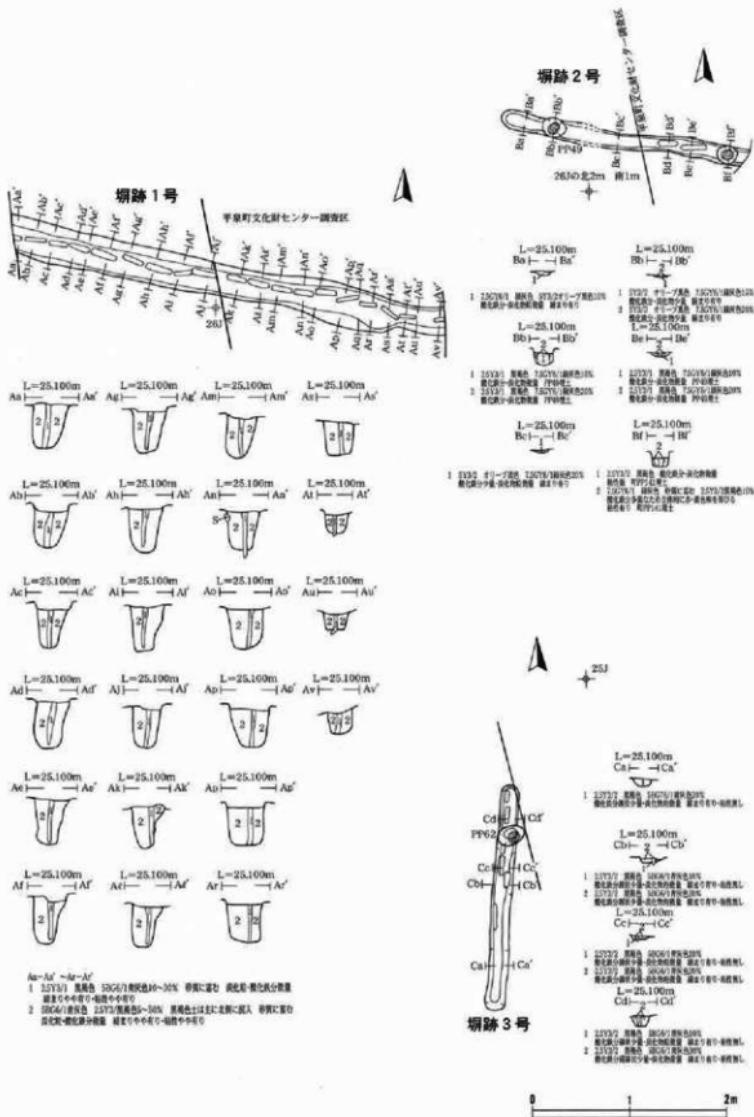
（位置・検出状況） 25 I~26 Iグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。65区堀跡3号と重複関係にあり、本遺構が古い。

（平面形・規模） 検出長は254cm、布堀りの開口部幅16~20cm、深さ2~5cm程である。東は擾乱により一端消失するが、平泉町文化財センター調査区にまで延びる。布堀りの軸線方向はN-99°-Eである。板痕跡は平泉町文化財センター調査区側で2枚検出されており、幅20~27cm、厚さ5~6cm程である。板痕跡は軸線方向に対して平行に、布堀りの中央付近に位置する。

（覆土・堆積状況） 布堀り部分と板痕跡部分の2層からなり、ともにオリーブ黒色土～黒褐色土に緑灰色土が混入する覆土である。

（壁・底面） 布堀りの壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

（付属施設） 柱穴2基が平泉町文化財センター調査区内で検出されており、本遺構に関係するものである



第10图 65区(6)

可能性がある。

出土遺物 なし。

時期 不明である。

#### 65区堀跡3号（77区S A 3）

遺構（第10図、写真図版7）

（位置・検出状況） 25 I～26 Iグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。65区堀跡2号とPP62が重複関係にあり、65区堀跡2号に対しては本遺構が新しく、PP62に対しては本遺構が古い。

（平面形・規模） 検出長は232cm、布堀りの開口部幅18～20cm、深さ3～12cm程度である。布堀りの軸線方向はN-7°～Eである。板痕跡は6枚検出されており、幅12～16cm、深さ3～6cm程度である。

板痕跡は軸線方向に対して平行に位置する。

（覆土・堆積状況） 布堀り部分と板痕跡部分の2層からなり、ともに黒褐色土に青灰色土が混入する覆土である。

（壁・底面） 布堀り部分の壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状～浅鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。

（付属施設） 堀跡に伴う柱穴は検出されていない。

出土遺物 なし。

時期 不明である。

遺構外出土遺物（第22～23図、写真図版14～15） かわらけ、国産陶器、中国産磁器、金属製品、石製品が出土した。

かわらけ 登録したかわらけ4点（手づくね1点・ロクロ2点・内折れ1点、No.49～52）を含め、4号ビニール袋約41.5袋分（約20.7kg）が出土した。

国産陶器 常滑産が7点、渥美産が2点、須恵器が1点、その他が2点（東濃産？の山茶碗、肥前産の猪口）出土した（No.53～64）。

中国産磁器 白磁が1点（No.65）出土した。器種は四耳壺と思われる。

金属製品 鉛滓が1点（No.66）出土した。

石製品 砕石が2点（No.67～68）出土した。

#### 65区のまとめ

本調査区の地形は、北側部分が約30cmほどの削平を受けており、南側部分に比べ一段低くなっている。一段高くなる上端ラインから65区溝跡2号付近（23 I～24 Iグリッド）にかけて層厚5～18cm程度の遺物包含層が存在した。遺物の主体は1区と同じく摩滅したかわらけ片である。

掘立柱建物跡は2棟検出されたが、ともにプランが調査区外に延びるため全体形は把握できなかった。

65区井戸状遺構1号では、最下層から南東隅に正位に置かれた完形の手づくね小型かわらけが出土していることから、儀式的な意味合いのもと意図的に埋め戻された可塑性がある。

65区土坑2号は埋上下半の覆土が有機質腐植土層であり、土壤分析の結果トイレ遺構である可能性が高い。

65区堀跡1号は、後述の66区堀跡2号との関連から土地を区画する意味合いを持つ可能性が考えらる。65区堀跡2号は、平泉町文化財センター調査区に延び、総延長は約23.4mになる。

65区溝跡1号は、削平の影響により検出規模が小さいものと思われる。

### (3) 66区(71区)(第11図、写真図版7)

位 置 65区の東側に隣接する。旧橋本旅館敷地である。

検出遺構 挖立柱建物跡3棟、溝跡1条、堀跡2条、柱穴65基を検出した。

66区掘立柱建物跡1号(71区SB1)…65区掘立柱建物跡1号と同一建物

遺構(写真図版5)

詳細は65区掘立柱建物跡1号を参照

66区掘立柱建物跡2号(71区SB2)

遺構(第12図、写真図版8)

〈位置・検出状況〉 21J~22J、21K~22Kグリッドに位置する。Ⅲ層上面から検出した。柱穴の切り合いでから、66区掘立柱建物跡1号より本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 隣接する平泉町文化財センター調査区分を合わせると、検出規模は東西ライン3間(総長640cm)、南北ライン2間(総長400cm)である。この建物は、北側調査区外へとさらに延びる可能性がある。南北ラインの軸線方向は、N-9°-Eである。柱間寸法は、東西ライン南側が西から220cm(7.3尺)、210cm(6.9尺)、210cm(6.9尺)で、南北ライン東側で南から180cm(5.9尺)、220cm(7.3尺)である。検出した柱穴は平泉町文化財センター側を含め12基で、柱穴の規模は当センター調査区分で開口部径26~42cm、深さ32~56cmである。

〈覆土・堆積状況〉 柱穴は黒褐色土に緑灰色土が混入するものが多い。

出土遺物 かわらけ、粘土が出土した。

かわらけ PP6、PP8、PP22から、細片が少量(約155g)出土した。

粘土 PP6、PP22から、粘土塊が19点(約171g)出土した。

時期 12世紀に所属するものと思われる。

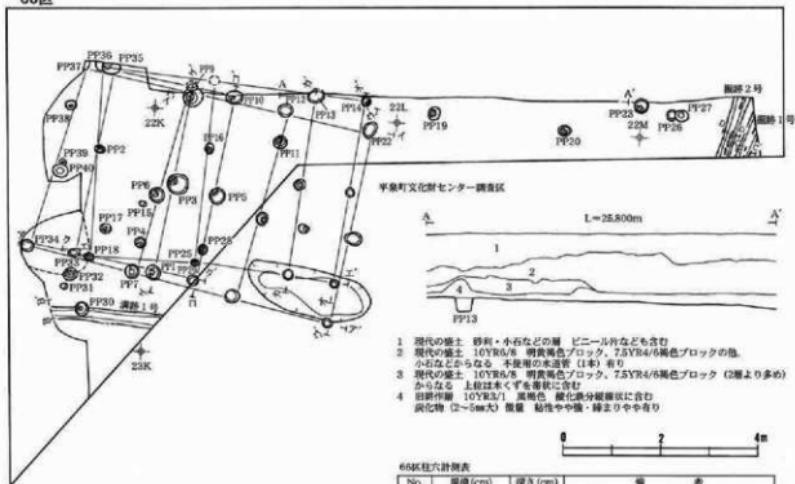
66区掘立柱建物跡3号(71区SB3)

遺構(第13図、写真図版8)

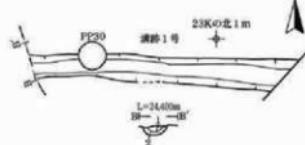
〈位置・検出状況〉 21J~21K、22J~22Kグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。柱穴の切り合いでから、66区掘立柱建物跡1号より本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 隣接する平泉町文化財センター調査区分を合わせると、検出規模は東西ライン3間(総長515cm)、南北ライン2間(380cm)である。平面形式は東西ライン2間、南北ライン2間の身舎の東側に廂が付く。この建物はさらに北側調査区外へと延びる可能性がある。南北ラインの軸線方向は約N-1~7°-Eである。柱間寸法は、廂を含め東西ライン南側が西から220cm(7.3尺)、195cm(6.3尺)、100cm(3.3尺)で、南北ライン東側が南から190cm(6.3尺)、190cm(6.3尺)である。検出した柱穴は平泉町文化財センター調査区分を含め10基で、柱穴の規模は当センター調査区検出分で開口部径14~34cm、深さ約10

66区



- 1 現代の埴土・砂利・小石などの層・ビニール外なども含む
- 2 現代の埴土・10YR6/6 明黄褐色地山・7.5YR6/6褐色地山の堆積物  
小石などからなる 不使用の水道管(日本)有り
- 3 現代の埴土・10YR6/6 明黄褐色地山・7.5YR4/6褐色地山(2層より多く)  
少々の砂利・上部は砂利層を含む
- 4 古旧作層 10YR8/3 黄褐色・酸化鉄分細粒状に含む  
炭化物(2~5mm) 塗膜や中間・縫まりやや有り



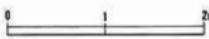
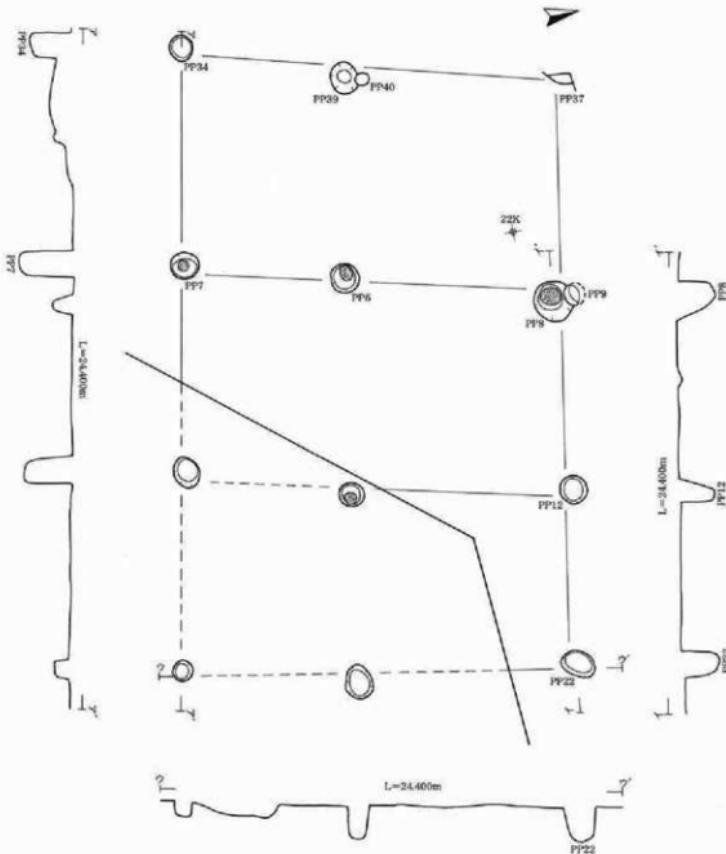
- 1 10YR3/7 黄褐色 10YR6/6明黄褐色地山ブロック底板30%  
炭化物(1~2mm) 地量 粘性有り・縫まりやや有り
- 2 10YR6/2 オリーブ色 10YR3/1黒褐色 10YR5/6明黄褐色地山ブロック  
底板30%粘性有り・縫まりやや有り



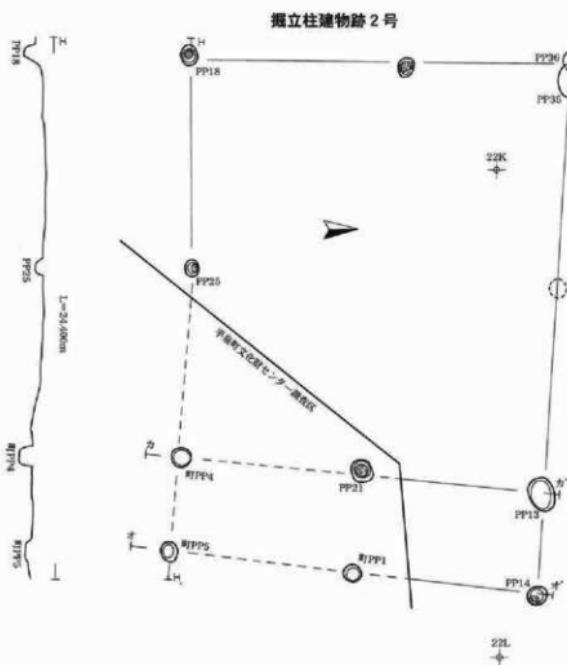
系(ー)は推定値

第11図 66区 (1)

掘立柱建物跡 2号



第12図 66区(2)



0 1 2m

第13図 66区 (3)

～34cm程である。

（覆土・堆積状況） 黒褐色土に緑灰色土が混入するものが多い。

出土遺物 なし。

時期 12世紀に所属するものと思われる。

#### 66区溝跡 1号 (71区 S D 1) …65区溝跡 1号と同一の溝である

遺構 (第11図、写真図版8)

（位置・検出状況） 22J～22Kグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。PP30と重複関係にあり、本遺構が古い。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区内における検出長は202cmで、軸線方向はN-92°-Eである。本遺構は、隣接の平泉町文化財センター調査区に延びる。規模は、開口部幅22～28cm、底部幅12～18cm、深さ12cm程である。

（覆土・堆積状況） 2層からなる。黒褐色土、オリーブ灰色土に黄褐色地山ブロックが混入する覆土である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底状である。

出土遺物 なし。

時期 不明である。

#### 66区堀跡 1号 (71区 S A 1)

遺構 (第11図、写真図版8)

（位置・検出状況） 21M～22Mグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。66区堀跡 2号と重複関係にあり、本遺構が古い。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区における検出長は108cmで、軸線方向はN-18°-Eである。本遺構は、隣接する平泉町文化財センター調査区に約3m程延びるが、堀跡 2号に切られ消失している。布堀りの開口部幅25～28cm、深さ16cm程である。板痕跡は、当センター調査区分で軸方向に対して平行に3枚が検出され、幅約10cm、厚さ2cm程である。

（覆土・堆積状況） 布堀り部分と板痕跡部分の2層からなり、ともに黒褐色土が主体の覆土である。

（壁・底面） 布堀りの壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底状である。

出土遺物 (第23図、写真図版15) カワラケが出土した。

カワラケ 登録したカワラケ 1点 (手づくね、No.69) を含め、細片が微量 (約41g) 出土した。

時期 出土遺物から12世紀に属するものと思われる。

#### 66区堀跡 2号 (71区 S A 2)

遺構 (第11図、写真図版8)

（位置・検出状況） 21M～22Mグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。66区堀跡 1号と重複関係にあり、本遺構が新しい。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区における検出長は130cmで、軸線方向はN-14°-Eである。本遺構は、さらに隣接する平泉町文化財センター調査区に約17～18

m程延びる。

布堀りの開口部幅24~30cm、深さ14~16cm程である。板痕跡は、当センター調査区分で7枚検出されており、うち1枚は軸方向対して直交ぎみである。幅は約10~16cm、厚さは2cm程である。

(覆土・堆積状況) 布堀り部分と板痕跡部分の2層からなり、ともに黒褐色土が主体の覆土である。

(壁・底面) 布堀りの壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底状である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物はないが、埋土等から12世紀に属するものと思われる。

遺構外出土遺物(第23図、写真図版15) かわらけ、国産陶器、粘土が出土した。

かわらけ 4号ビニール袋約2袋分(約907g)が出土した。

国産陶器 常滑窯が3点、渥美窯が1点出土した(№70~73)。

粘土 粘土塊が4点(約47g)出土した。

#### 66区のまとめ

掘立柱建物跡は3棟検出された。柱穴の切り合い関係から66区掘立柱建物跡1号が最も新しい。66区掘立柱建物跡2号、66区掘立柱建物跡3号の新旧は柱穴の切り合いがないため不明である。

溝跡1号は、65区溝跡1号と同一の溝跡であり、当センター調査区における総延長は412cmとなる。平泉町文化財センター調査区分を合わせる総延長は約28.2mとなる。

66区堀跡1号と66区堀跡2号は、軸線方向がそれぞれN-18°-E、N-14°-Eとほぼ同じであり、布堀りの規模や板痕跡の大きさ、埋土の様相なども似通っていることから作り替え等何らかの関わりを持つものと思われる。66区堀跡2号の総延長は、当センター調査区分と平泉町文化財センター調査区分を合わせると約19m程になる。この68区堀跡2号の軸線方向は、白山社参道のN-14°-Eと同じである。一方、65区で検出された65区堀跡1号の軸線方向はN-80°-Wであり、66区堀跡2号の軸線方向とほぼ直角となる。交点部分は検出されなかったが、土地を区画する機能を有していた可能性がある。

\*第73次調査により北辺にあたる導跡が検出されたことから、1つの区画割りであるものと思われる…詳細は第73次調査結果を参照のこと。

#### (4) 68区(75区)(第14図・写真図版9)

位置 国道4号主要地方道平泉・巣鴨線との交差点北東側国道4号沿いに位置する。

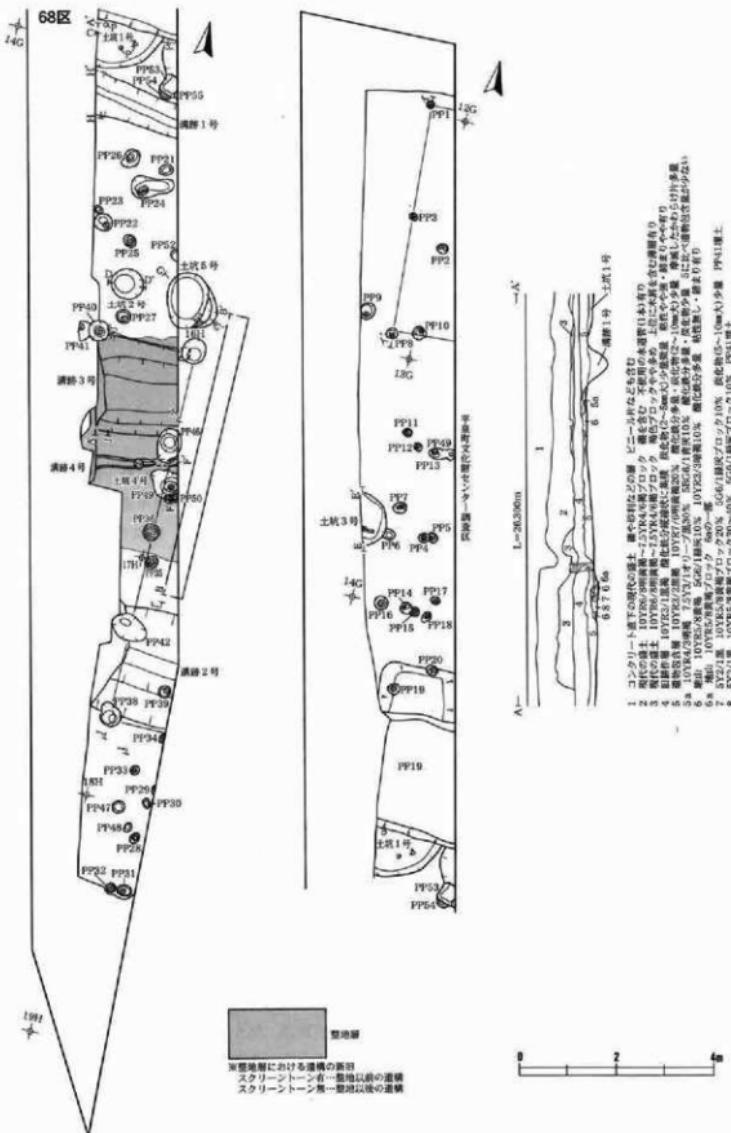
検出遺構 掘立柱建物跡2棟、土坑5基、溝跡4基、柱穴57基を検出した。

#### 68区掘立柱建物跡1号(75区S B 1)

遺構(第15図・写真図版9)

(位置・検出状況) 16G~16H、17G~17Hグリッドに位置する。遺物包含層除去後、Ⅲ層上面及び整地層上面で検出した。68区溝跡2号と重複関係にあるが、本遺構が新しい。

(平面形・規模) 調査区外にプランが伸びるために全体形は不明である。検出規模は桁行5間(総長760cm)、梁行2間(総長410cm)である。桁行の軸方向はN-Sである。柱間寸法は、桁行がすべて190cm(6.3尺)で、梁行北側が西から200cm(6.6尺)、210cm(6.9尺)である。検出した柱穴は、隣接の平泉町文化財セン



第14図 68区(1)

ター調査区分を含め12基で、柱穴の規模は当センター調査区分で開口部径32～76cm、深さ25～58cm程度である。

（覆土・堆積状況） 柱穴は黒褐色土や緑灰色土を主体とした覆土である。PP36には礫石が見られた。

出土遺物（第24図、写真図版16） 柱穴からかわらけ、国産陶器、木製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ PP36、PP38、PP40、PP42、PP46から4号ビニール袋0.5袋分（約271g）が出土した。実測可能なかわらけは、2点（PP40、PP46ともにロクロ、№108～109）である。

国産陶器 常滑産がPP42から1点（№123）、瀬美産がPP40から2点（№120～121）が出土した。

木製品 PP36から種類不明の木製品が1点（№143）出土した。

種子 PP36からウメガ1点、モモが1点出土した。

粘土 粘土塊がPP40から2点、（約24g）、PP46から3点（約20g）出土した。

時期 12世紀に属するものと思われる。

#### 68区掘立柱建物跡2号（75区SB2）

遺構（第16図、写真図版9）

（位置・検出状況） 12F～12Gグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

（平面形・規模） 検出規模は東側に隣接する平泉町文化財センター調査区分を合わせ、桁行2間（総長470cm）、梁行2間（総長470cm）である。この掘立柱建物は北側調査区外あるいは平泉町文化財センター調査区東側へ延びる可能性がある。南北ラインの軸方向は、N-4°-Wである。柱間寸法は、東西ライン南側が西から210（6.9尺）cm、260cm（8.6尺）で、南北ライン西側が南から240cm（7.9尺）、230cm（7.6尺）である。検出した柱穴は平泉町文化財センター調査区分を含め6基で、柱穴の規模は開口部径14～36cm、深さ12～22cm程度である。

（覆土・堆積状況） 柱穴は緑灰色土や黒褐色土を主体とした覆土である。

出土遺物 種子が出土した。

種子 PP1からモモが1点出土した。

時期 12世紀に属するものと思われる。

#### 68区土坑1号（75区SK1）

遺構（第17図、写真図版10）

（位置・検出状況） 14G～15Gグリッドに位置する。遺物包含層除去後のⅢ層上面で検出した。

（平面形・規模） 遺構が調査区外に広がることや擾乱などにより、全体を検出することはできなかった。確認できたプランからは、円形が予想される。

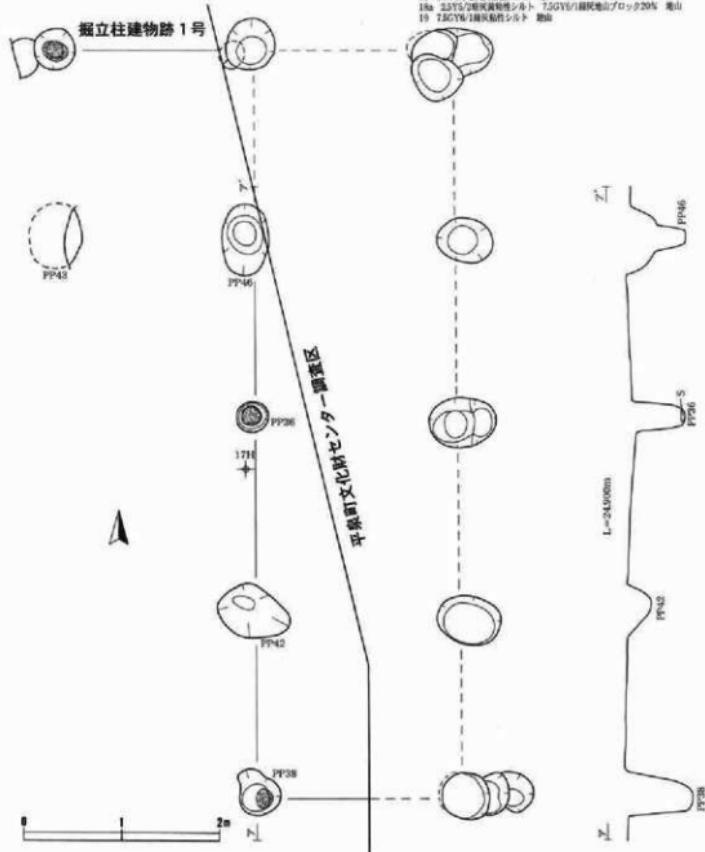
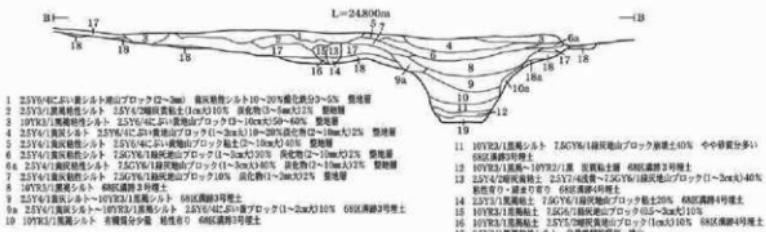
（覆土・堆積状況） 3層に区分される。いずれも黒褐色土を主体とし、オリーブ褐色土ブロックが入る。人為堆積の様相である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形はほぼ浅皿状を呈する。深さは、10～14cm程度である。

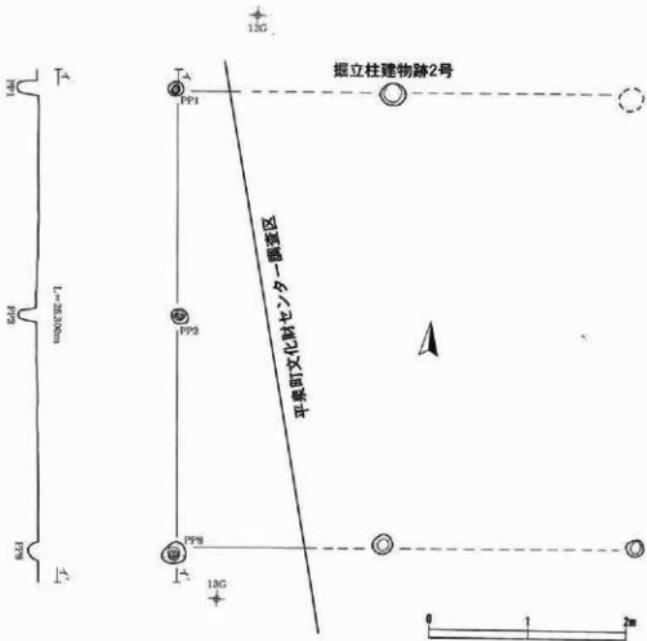
出土遺物（第23～24図、写真図版15～16） かわらけ、国産陶器、粘土が出土した。

かわらけ 登録した6点（手づくね4点・ロクロ2点、№74～79）を含め、4号ビニール袋約2袋分（約923g）出土した。

国産陶器 常滑産が1点（№110）出土した。



第15図 68区(2)



68区柱穴計測表

番号名	規格(cm)	深さ(cm)	備考
PPI1	14×14	12	
PPI2	22×20	10	
PPI3	17×14	19	
PPI4	24×(21)	27	PPI5と重複。PPI4が新
PPI5	22×(22)	30	PPI4と重複。PPI4が旧
PPI6	(26)×14	24	土坑3号と重複。PPI6が旧
PPI7	24×(23)	31	
PPI8	24×(23)	11	
PPI9	26×30	22	
PPI10	29×28	14	
PPI11	26×17	4	
PPI12	18×16	17	
PPI13	34×23	26	PPI49と重複するが、新旧関係不明
PPI14	25×25	35	PPI15と重複。PPI14が新
PPI15	(34)×20	37	PPI14と重複。PPI15が旧
PPI16	28×28	44	
PPI17	18×18	14	
PPI18	24×17	10	
PPI19	23×23	36	
PPI20	26×23	37	
PPI21	29×25	45	
PPI22	42×36	59	
PPI23	18×16	35	
PPI24	86×28	82	
PPI25	26×25	9	
PPI26	44×32	57	
PPI27	30×28	59	
PPI28	22×20	39	
PPI29	21×14	29	平泉町文化センター調査区内
PPI30	18×13	8	

番号名	規格(cm)	深さ(cm)	備考
PPI31	32×22	26	
PPI32	17×15	33	
PPI33	18×16	12	
PPI34	19×18	32	
PPI35	28×25	70	
PPI36	44×32	58	
PPI37	26×23	89	
PPI38	49×44	70	
PPI39	30×22	27	土坑4号と重複。PPI39が旧
PPI40	42×42	56	PPI41と重複。PPI40が新
PPI41	40×(40)	56	PPI40と重複。PPI41が旧。検出のみ
PPI42	41×(41)	25	
PPI43	(64)×(52)	25	検出のみ
PPI44	24×24	20	
PPI45	34×30	18	
PPI46	62×59	57	
PPI47	(30)×(28)	26	平泉町文化センター調査区内
PPI48	52×51	26	平泉町文化センター調査区内
PPI49	21×(20)	26	PPI13と重複するが、新旧不明
PPI50	34×(24)	26	
PPI51	20×15		
PPI52	28×25		
PPI53	(20)×18		土坑4号。PPI54と重複。PPI53が旧
PPI54	18×18		土坑4号。PPI53と重複。土坑4号より前。PPI53より後
PPI55	20×19		調査4号と重複。
PPI56			調査4号の可能性有り
PPI57			PPI58と重複するが、新旧不明
PPI58			PPI57と重複するが、新旧不明

( )は推定値

第16図 68区(3)

**粘土** 粘土塊が1点（約10.5g）出土した。

**時期** 出土遺物から12世紀に属するものと思われる。

#### 68区土坑2号（75区SK2）

##### 遺構（第17図）

（位置・検出状況） 15Gグリッドに位置する。遺物包含層除去後のⅢ層で検出した。

（平面形・規模） 平面形はほぼ円形で、開口部径66×66cm、底部径42×35cm、深さ約11cmである。

（覆土・堆積状況） 2層からなる。1層は焼土を含む覆土である。人為堆積の様相である。

（壁・底面） 壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

**出土遺物** かわらけが出土した。

かわらけ 細片が微量（約16g）出土した。

**時期** 不明である。

#### 68区土坑3号（75区SK3）

##### 遺構（第17図、写真図版10）

（位置・検出状況） 13F～13Gグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。PP6と重複関係にあり、本遺構が新しい。

（平面形・規模） 遺構が調査区外に広がることにより、全体を検出することはできなかった。確認できたプランからは円形が予想される。開口部径110cm、底部径90cm、深さ110cm程度である。

（覆土・堆積状況） 5層に区分される。下位の4、5層は自然堆積の様相を、中位～上位の1～3層は人為堆積の様相である。3層は木製品を含む機窯食土層である。

（壁・底面） 壁は底部から直立気味に立ち上がり、検出面から50cm下がった地点から検出面まではやや外傾する。断面形はピーカー状を呈する。底面はほぼ平坦である。

**出土遺物**（第23～25図、写真図版15～17） かわらけ、国産陶器、木製品、種子が出土した。

かわらけ 登録したかわらけ1点（ロクロ、No.80）を含め、4号ビニール袋約1袋分（約471g）が出土した。

国産陶器 常滑窯が1点（No.111）、源美窯が1点（No.112）出土した。

木製品 3層からチュウ木が3点（No.126～128）、種類不明の木製品が4点（No.129～132）出土した。

種子 3層からモモが1点出土した。

**時期** 12世紀に属するものと思われる。

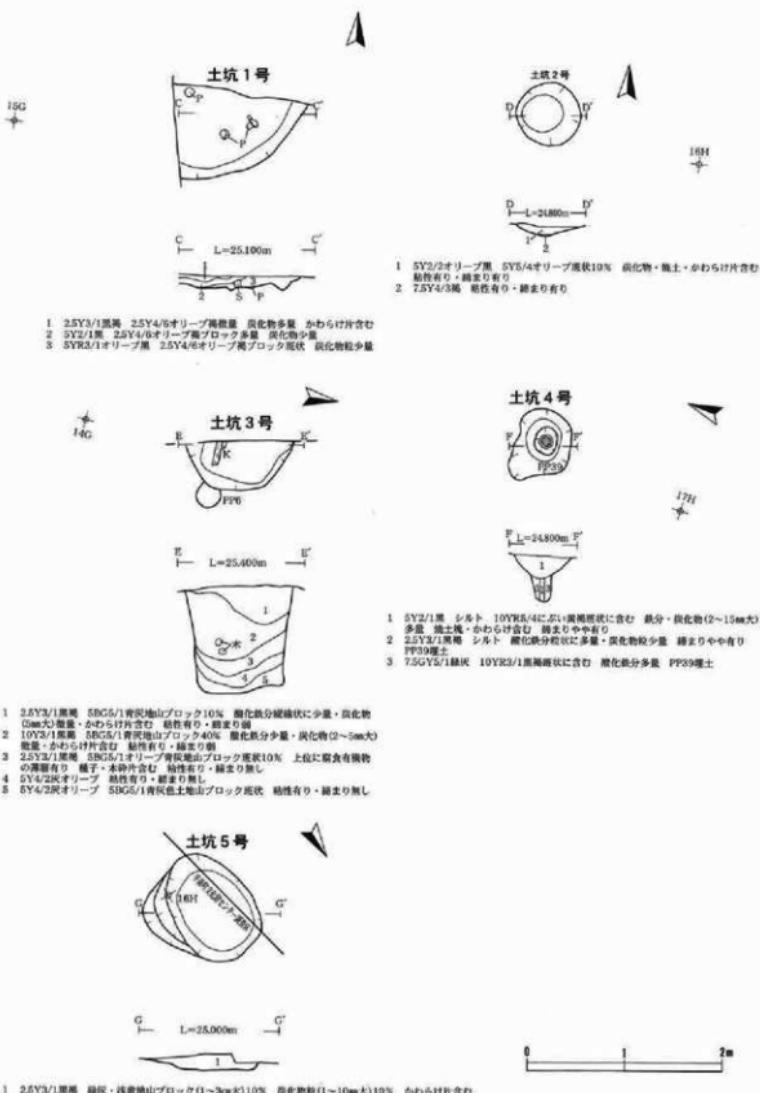
#### 68区土坑4号（75区SK4）

##### 遺構（第17図、写真図版10）

（位置・検出状況） 16G～16Hグリッドに位置する。遺物包含層除去後の整地層直下のⅢ層で検出した。PP39と重複関係にあり、本遺構が新しい。

（平面形・規模） 平面形は不整な楕円形である。規模は開口部径80×56cm、底部径44×35cm、深さ32cm程度である。

（覆土・堆積状況） 黒褐色土主体の単層である。人為堆積の様相である。



第17図 68区(4)

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆三角形状を呈する。

出土遺物（第23図、写真図版15） カワラケ、石製品、粘土が出土した。

カワラケ 登録した6点（手づくね3点・ロクロ3点、No.81～86）を含め、4号ビニール袋1.2袋（約611g）が出上した。

石製品 砕石が1点（No.147）出土した。

粘土 粘土塊が7点（72.84g）出土した。

時期 12世紀に属するものと思われる。

#### 68区土坑5号（75区SK5）

造構（第17図）

（位置・検出状況） 15G～15H、16G～16Hグリッド、平泉町文化財センター調査区にまたがって位置する。遺物包含層除去後のⅢ層から検出した。

（平面形・規模） 平面形は楕円形状であり、規模は開口部径114×100cm、底部径86×64cm、深さ16cm程である。

（覆土・堆積状況） 黒褐色土主体の单層である。人為堆積の様相である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 カワラケが出土した。

かわらけ 平泉町文化財センターが保管している。

時期 12世紀に属するものと思われる。

#### 68区溝跡1号（75区SD1）

造構（第18図、写真図版10）

（位置・検出状況） 14Gグリッドに位置する。遺物包含層除去後のⅢ層で検出した。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区内における検出長は180cmで、軸線方向はN-83' -Wである。開口部幅80cm、底部幅18cm、深さ36cm程である。水は東流する構造になっている。

（覆土・堆積状況） 4層に区分される。概ね黒色土を基調とする覆土であり、1～3層までは炭化物粒を含み、3～4層は粘性が強い。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆三角形状を呈する。

出土遺物（第23～24図、写真図版15～17） カワラケ、国産陶器、中国産磁器、金属製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した8点（手づくね6点・ロクロ2点、No.87～94）を含め、4号ビニール袋約5袋分（約2.3kg）が出上した。

国産陶器 常滑産が1点（No.113）、瀬戸産が2点（No.114～115）出土した。

中国産磁器 白磁が1点（No.124）出土した。器種は皿である。

金属製品 同一個体と思われる釘が2点（No.144～145）出土した。

種子 モモが16点、不明種子が1点出土した。

粘土 粘土塊が6点（約86g）出土した。

時期 12世紀に属するものと思われる。

#### 68区溝跡2号（75区SD2）

##### 遺構（第18図、写真図版11）

〈位置・検出状況〉 17I～17Hグリッドに位置する。Ⅲ層上面及び整地層上面で検出した。68区掘立柱建物跡1号（PP38、PP42）、PP37と重複関係にあるが、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区分の検出長は約156cmであり、隣接の平泉町文化財センター調査区に延びる。長軸の傾きは、N-86°-Wである。規模は開口部幅240cm、底部幅32cm、深さ133cmである。水は東流する構造になっている。

〈覆土・堆積状況〉 13層に区分される。1～3層は人為的堆積の様相である。3、6層は有機質腐食土層で、木製品を含む。12、13層は緑灰色土（粘土質）主体で、砂質分を多く含む。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆三角形状を呈する。

出土遺物（第24～25図、写真図版15～17） かわらけ、中国産磁器、木製品、種子が出土した。

かわらけ 登録した7点（手づくね4点、ロクロ3点、No.95～101）を含め、4号ビニール袋約2袋分（約963g）が出土した。

中国産磁器 青磁が1点（No.125）出土した。器種は壺である。

木製品 蓋と思われるものが1点（No.133）、部材が1点（No.135）の他、種類不明の木製品が7点（No.134、136～141）出土した。

種子 モモが1点出土した。

時期 12世紀後半代に属するものと思われる。

#### 68区溝跡3号（75区SD3）

##### 遺構（第18図、写真図版11）

〈位置・検出状況〉 16Gグリッドに位置する。整地層直下のⅢ層で検出した。68区掘立柱建物跡1号（PP40、PP43、PP46、PP48）と重複関係にあるが、本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区分の検出長は約170cmであり、隣接の平泉町文化財センター調査区に延びる。軸線方向はN-96°-Wである。規模は開口部幅196cm、底部幅70cm、深さ70cmである。水は東流する構造になっている。

〈覆土・堆積状況〉 4層からなる。いずれも黒色土、緑灰色土を主体とする覆土である。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がる。特に北側の壁は大きく外反して立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。

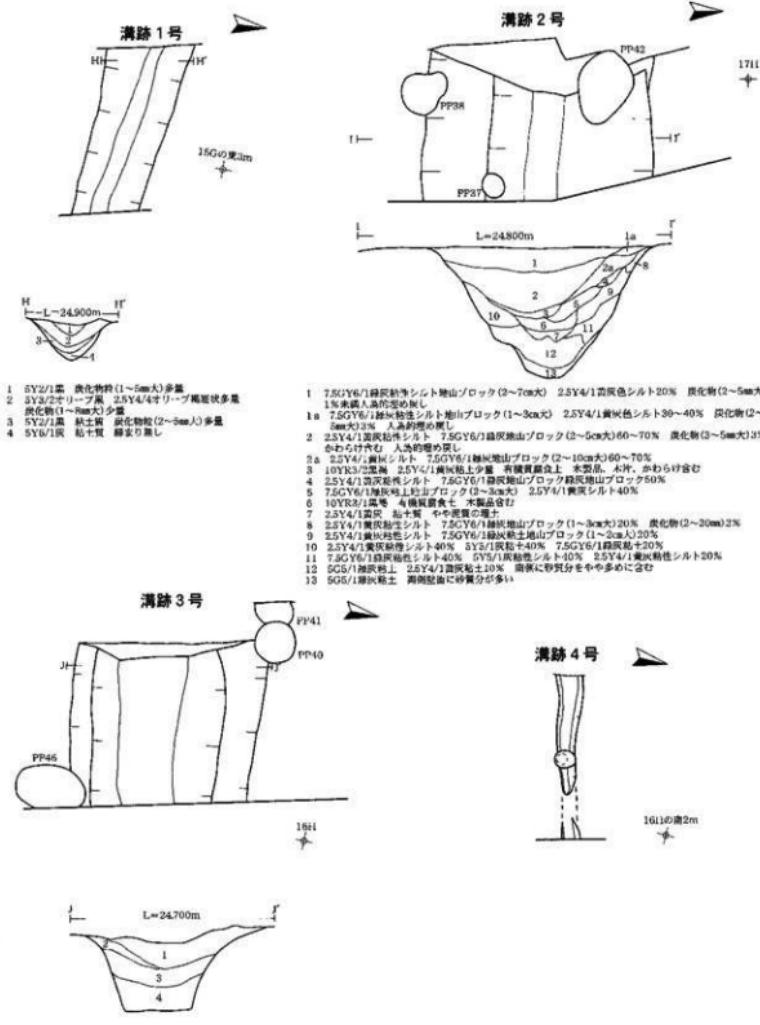
出土遺物（第24図、写真図版16） かわらけ、木製品が出土した。

かわらけ 登録した3点（ロクロ3点、No.102～104）を含め、4号ビニール袋0.8袋分（約387g）が出土した。

木製品 箸状の木製品が1点（No.142）出土した。

時期 12世紀中頃～後半に属するものと思われる。

#### 68区溝跡4号（75区SD4）



第18図 68区(5)

### 遺構（第18図）

〈位置・検出状況〉 16G～17Gグリッドに位置する。整地層内で検出した。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。当センター調査区内における検出長は、途中の消失部分を含め約168cm程であり、隣接の平泉町文化財センター調査区に延びる。軸線方向はN-103°-Wである。規模は、上幅20～26cm、下幅10～18cm、深さ22cm程である。

〈覆土・堆積状況〉 4層からなり、概ね黒褐色土粘土主体の覆土である。

〈壁・底面〉 トレンチ断面での観察によると、南側の壁は外傾して、北側の壁は直立ぎみに立ち上がる。断面形は半円形に似る。

〈付属施設〉 柱穴が当センター調査区内において1基検出されている他、平泉町文化財センター調査区内でも数基検出されている。

出土遺物 なし。

時期 12世紀に属するものと思われる。整地層の状況から68区溝跡3号と同時期に存在していた可能性がある。

**遺構外出土遺物（第25～26図、写真図版17～18）** かわらけ、国産陶器、中国産磁器、金属製品、石製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した14点（手づくね8点・ロクロ6点、No.148～161）を含め、4号ビニール袋18.5袋分（約8.7kg）が出土した。

国産陶器 常滑産が20点、渥美産が19点、須恵器が2点、その他が1点（志野産の皿）出土した（No.162～203）。

中国産磁器 白磁が1点（No.204）出土した。器種は皿である。

金属製品 鉛洋が2点（No.205～206）出土した。

石製品 刃片が2点（No.207～208）出土した。

種子 モモが1点出土した。

粘土 粘土塊が126点（約768g）出土した。

### 68区のまとめ

68区は、比較的大規模な掘立柱建物跡と溝跡の他、整地層、遺物包含層が検出された。遺構の新旧関係を整理すると、古い順に溝跡2号・溝跡3号→整地層→掘立柱建物跡1号となる。溝跡2号・溝跡3号の新旧は不明である。出土遺物がともに似通っており、12世紀中頃～後半が推定される。整地層は厚いところで約30cmほどあり、溝跡3号、溝跡4号を覆う。掘立柱建物跡1号は、その柱穴の規模から大規模な建物であったものと思われる。

遺物包含層は、68区土坑4号付近から調査区南側全体にかけて存在した。層厚は5～20cm程で、遺物の主体は1区・65区と同じく摩滅したかわらけを主体とする。

68区溝跡1号は、65区井戸状遺構1号を除き、今回の調査の中で最も遺物出土量が多かった遺構である。かわらけは、登録した8点（手づくね6、ロクロ2）を含め4号ビニール袋約5袋分（約2.3kg）、国産陶器は常滑産1点、渥美産2点、その他1点の出土、中国産磁器では白磁1点出土、金属製品では釘2点出土、種子ではモモ16点、不明種子1点出土、粘土は粘土塊6点（約86g）出土した。

68区溝跡4号は、整地層を確認するために入れたトレンチの断面からその存在が確認された遺構である。溝としては規模が小さく、またいくつかの柱穴を伴うことから壠跡である可能性も高い。

68区上坑3号は、覆土下部に有機質腐植土層があり、土壤分析の結果トイレ遺構であることが分かった。

#### (5) 69区(旧76区)(第18図、写真図版12)

位 置 町道診療所線を挟んで68区の北側、国道4号沿いに位置する。G S三田商店前である。

検出遺構 柱穴列1条、柱穴7基検出した。

##### 69区柱穴列1号(76区柱穴列1号)

遺構(第20図、写真図版12)

《位置・検出状況》 8E～8Fグリッドに位置する。Ⅲ層上面で各柱穴を検出した。第56次調査においてもほぼ同じ軸線方向上で柱穴列が検出されていることから柱穴列とした。

《平面形・規模》 柱穴列を構成するのは、その規模からPP3、PP5、PP7と思われる。平面形はほぼ真っ直ぐに配列し、軸線方向はW-E正方位である。柱穴の規模は直径44～58cm、深さ29～54cmである。柱間距離はPP3～PP5、PP5～PP7ともに100cmである。

《覆土・堆積状況》 極ね緑灰色土に黒褐色土がまだら状に混入した覆土である。

出土遺物 なし。

時期 不明である。

遺構外出土遺物(第26図、写真図版18) 国産陶器が出土した。

国産陶器 常滑焼が1点(No.209)出土した。

##### 69区のまとめ

69区柱穴列1号等の柱穴が検出された他は、土坑類や溝跡類の検出はなかった。69区柱穴列1号の性格等の詳細は不明である。

#### (6) 70区(旧72区)(第19図、写真図版12)

位 置 69区北側に隣接した国道4号沿いに位置する。ガソリンスタンド三田商店前である。

検出遺構 土坑1基、柱穴列1条、柱穴21基検出した。

##### 70区土坑1号(72区SK1)

遺構(第20図、写真図版12)

《位置・検出状況》 6Eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

《平面形・規模》 遺構が調査区外に広がるため全体形は不明である。検出された分から推定すると平面形は楕円形で、開口部径56×48cm、底部径49×42cm、深さは12cm程度である。

《覆土・堆積状況》 黒褐色土ないし暗灰黄色土～黄褐色土を主体とする2層からなる。明確ではないが、自然堆積の様相である。

《壁・底面》 壁は緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底状である。

**出土遺物** かわらけが出土した。

**かわらけ** 細片が微量（約3g）出土した。

**時期** 遺物は12世紀に属するが微量であり、時期は不明である。

#### 70区柱穴列1号（72区柱穴列1号）

**遺構**（第20図）

〈位置・検出状況〉 6E～6F、7E～7Fに位置する。Ⅲ層上面で各柱穴を検出した。第56次調査においてもほぼ同じ軸線方向上で柱穴列が検出されていることから柱穴列とした。69区柱穴列1号とは約10mの間隔を持ち、ほぼ平行する。

〈平面形・規模〉 検出された柱穴は7基である。重複関係があることから複数期わたり存在していた可能性も考えられる。平面形はほぼ真っ直ぐに配列し、軸線方向はW-E正方位である。柱穴の規模は直径24～30cm、深さ5～26cmである。

〈覆土・堆積状況〉 青灰色土、オリーブ黒色土を主体とする覆土である。

**出土遺物** なし。

**時期** 不明である。

遺構外出土遺物 なし。

#### 70区のまとめ

土坑と柱穴列の検出はあったが、69区と同様に遺構の検出数は少なかった。70区柱穴列1号の性格等の詳細は不明である。

#### （7）71区（旧66区）（第21図、写真図版13）

**位 置** 70区北側に隣接した国道4号沿いに位置する。

**検出遺構** 溝跡2条、柱穴4基検出した。

#### 71区溝跡1号（66区SD1）

**遺構**（第21図、写真図版13）

〈位置・検出状況〉 2D～3Dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は440cmで、軸線方向はN-7°-Eである。開口部幅12～22cm、底部幅8～16cm、深さ8cm程度である。水は南流する構造になっている。

〈覆土・堆積状況〉 オリーブ褐色土主体の2層からなる。自然堆積の様相である。

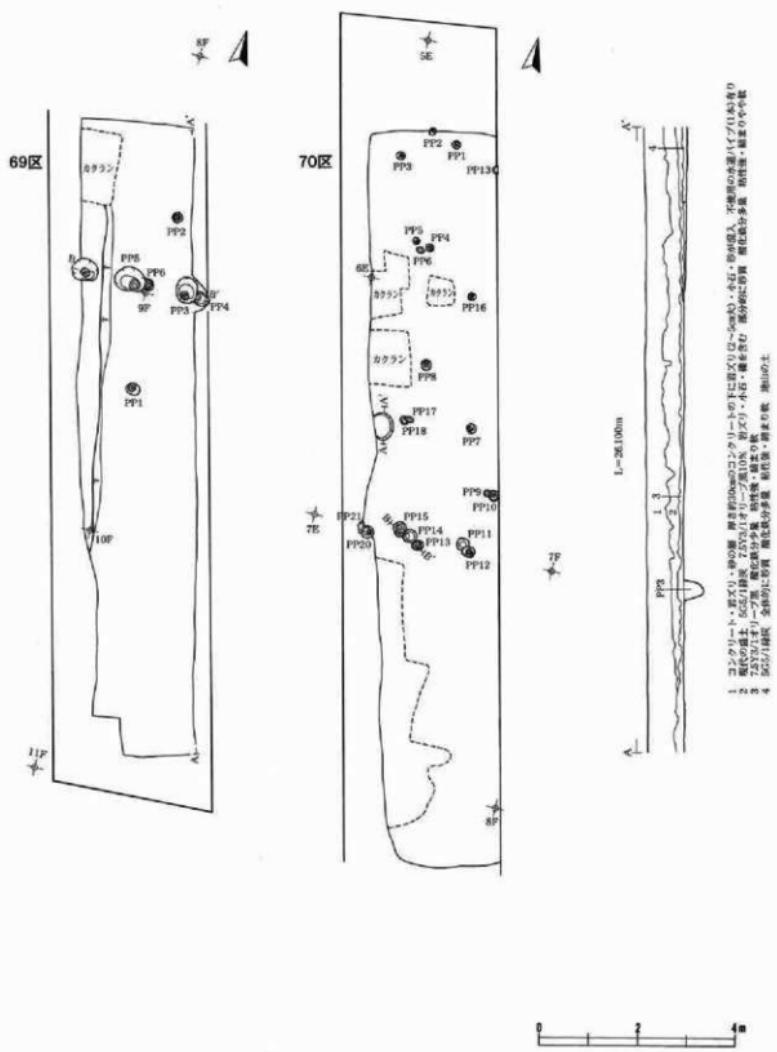
〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅鉢状を呈する。底面は丸底状である。

**出土遺物** なし

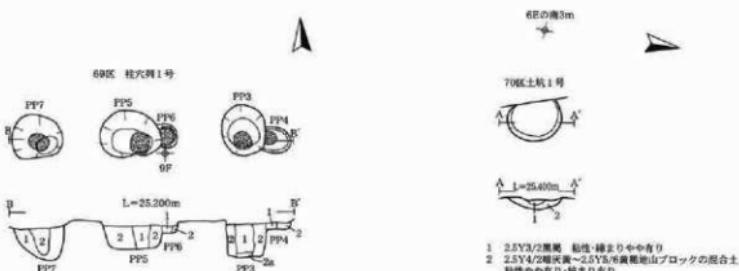
**時期** 不明である。

#### 71区溝跡2号（66区SD2）

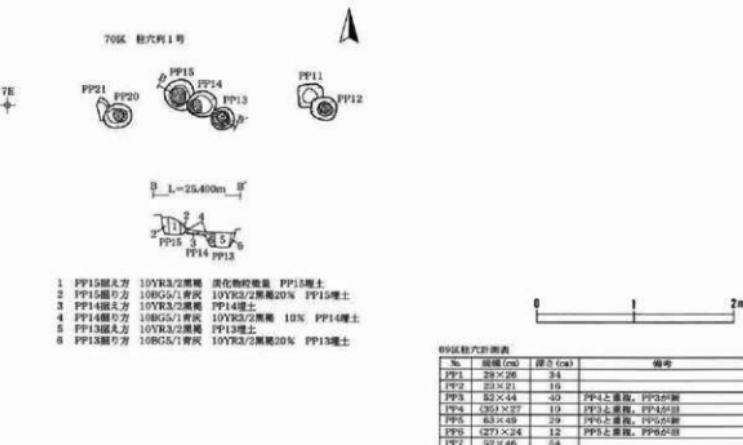
**遺構**（第21図、写真図版13）



第19圖 69區・70區(1)



1 2.5Y3/1黒褐 7.5GY5/1緑灰地山土まだら状10~20% 硅化鉄分少量 PP3~PP7壤土  
 2 7.5GY5/1緑灰地山土 2.5Y3/1黒褐まだら状30% PP3~PP7壤土  
 2a 7.5GY5/1緑灰地山土 2.5Y3/1黒褐まだら状10% PP3壤土



#### ◎ 例題六：列方程解應用題（百分比）

No.	網り方規格	深さ (cm)	底面の 高さ(cm)	杜表面の 有無	往復鉄床規 格(cm)	杜アクリル高 度(cm)
PP7	62×46	54	24.65	有	20×16	24.70
PP5	28×49	29	24.86	有	20×19	24.86
PP6	(26)×34	12	25.01	有	18×16	25.01
PP3	52×44	40	24.73	有	20×19	24.75
PP4	(36)×27	10	25.02	有	(16)×13	25.02

#### 7.9.2.3 管理者和员工的激励制度(见图 7-1)

10種類以上1寸方根の平均値					
名	面積方根 (cm)	深さ (cm)	底面の 距離(m)	根瘤菌の 有無	根瘤菌根幅 (cm)
PP21 (25)×(25)	15	23.04	無	—	25.04
PP20 28×24	26	24.94	有	14×12	24.94
PP15 32×(30)	20	24.99	有	20×18	24.99
PP14 30×26	5	25.01	有	15×12	25.01
PP13 23×22	20	24.86	有	18×16	24.86
PP11 24×23	7	24.95	無	—	24.95
PP12 26×22	26	24.80	有	16×14	24.80

第二部分

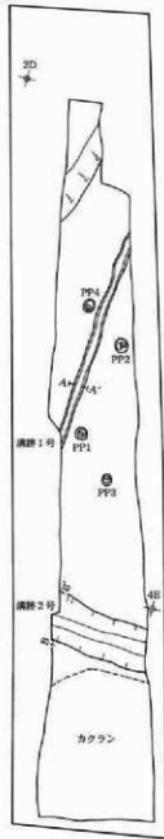
89区粒六計測表			
No.	面積(cm)	総合(cm)	備考
TP1	28×26	34	
TP2	23×21	16	
TP3	52×44	40	TP4と重複。TP2が範囲
TP4	45.5×27	19	TP3と重複。TP4が範囲
TP5	63×49	29	TP3と重複。TP5が範囲
TP6	42.7×24	12	TP3と重複。TP6が範囲
TP7	50×46	24	

（）は複数個

70页

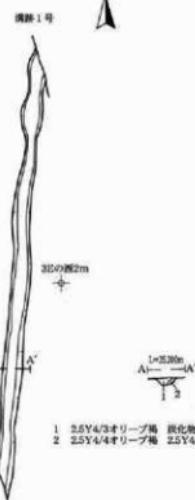
No.	品名	規格 (mm)	座標 (cm)	備考
PP1	18×16	9		
PP1'	18×14	10		
PP2	18×18	12		
PP3	18×17	13		
PP4	14×14	36		
PP5	17×12	38		
PP6	20×20	8		
PP7	22×22	8		
PP8	18×18	10		PP1-P7と重複、PP10が新
PP10	22×22	10		PP9と重複、PP10が新
PP11	24×23	2		PP1-P9と重複、PP11が新
PP12	26×26	26		PP1-P9と重複、PP12が新
PP13	26×26	27		PP1-P9と重複、PP13が新
PP14	22×22	2		PP1-P9と重複、PP14が新
PP15	32×(200)	2		PP1-P9と重複、PP15が新
PP16	16×16	6		
PP17	(16)×12	12		PP1-P9と重複、PP17が新
PP18	16×16	10		PP1-P9と重複、PP18が新
PP19	20×15	15		
PP20	28×24	26		PP1-P9と重複、PP20が新
PP21	25×26	26		PP1-P9と重複、PP21が新

71区

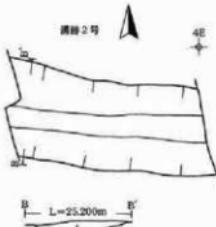


A

2E



1. 2.5Y4/3オリーブ緑 硅化物粒粗量  
2. 2.5Y4/4オリーブ緑 2.5Y4/3オリーブ緑斑状少量



1. 2.5Y4/3オリーブ緑 硅化鉄分多量



71区柱穴計測表

No.	規格(cm)	厚さ(cm)	備考
PP1	25×24	15	
PP2	26×26	29	
PP3	25×19	19	
PP4	27×23	12	

第21図 71区

〈位置・検出状況〉 4Dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は214cmで、軸線の傾きはN-5°-Eである。開口部幅110~116cm、底部幅20~28cm、深さ16cm程度である。水は東流する構造になっている。

〈覆土・堆積状況〉 オリーブ褐色土の単層である。自然堆積的様相である。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がるが、特に北側の壁は緩やかな傾斜を示す。断面形は浅皿状を呈する。底面は丸底状である。

出土遺物 なし

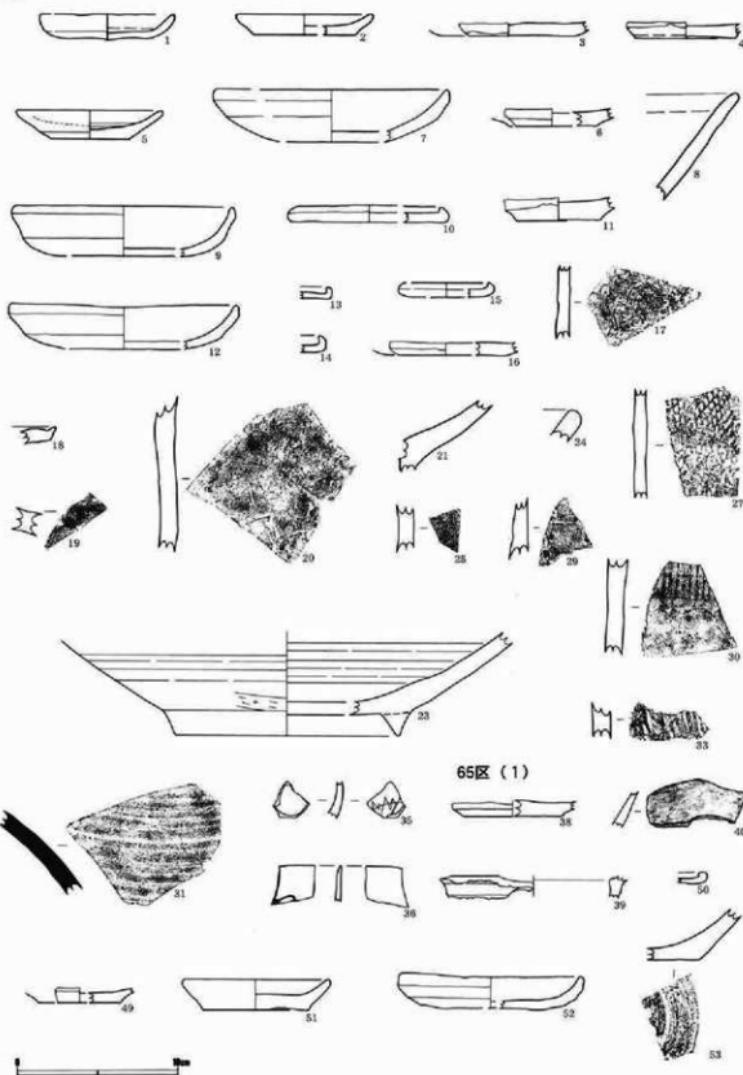
時期 不明である。

遺構外出土遺物 なし。

#### 71区のまとめ

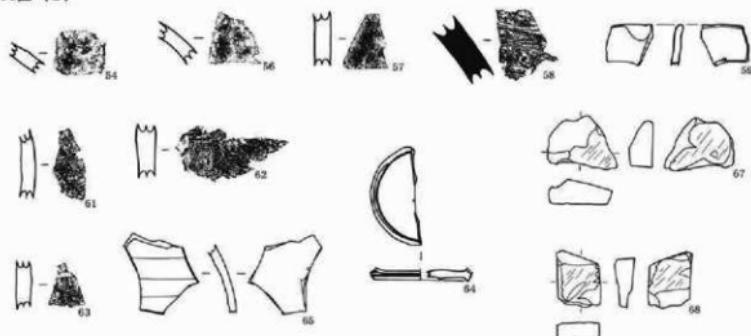
溝跡が2条検出されたが、68区・69区と同様に検出された遺構は少なかった。溝跡2条は、出土遺物がなく時期等の詳細は不明である。

## 1区



第22図 出土遺物 (1)

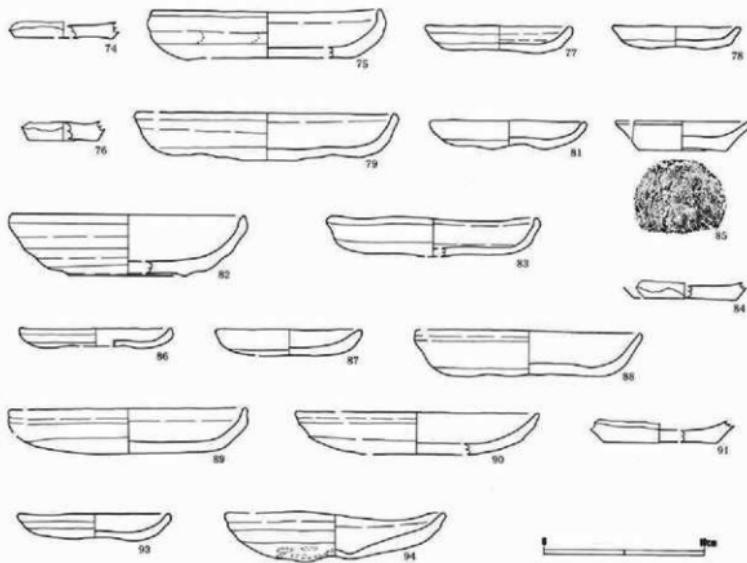
65区 (2)



66区

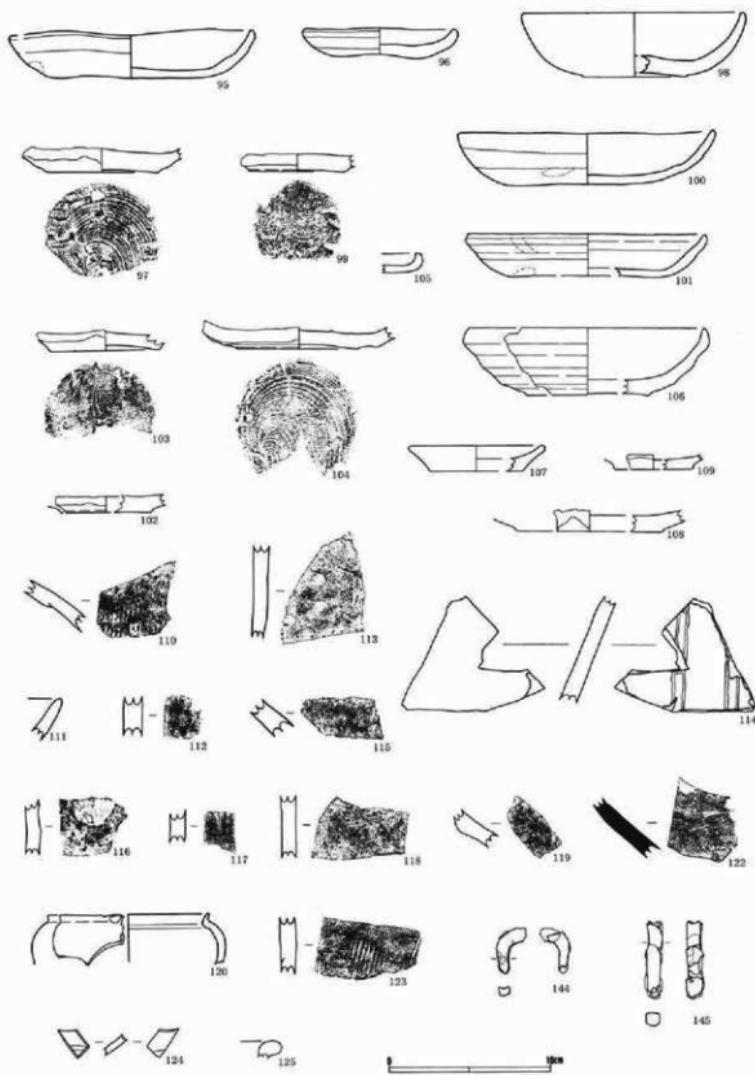


68区 (1)



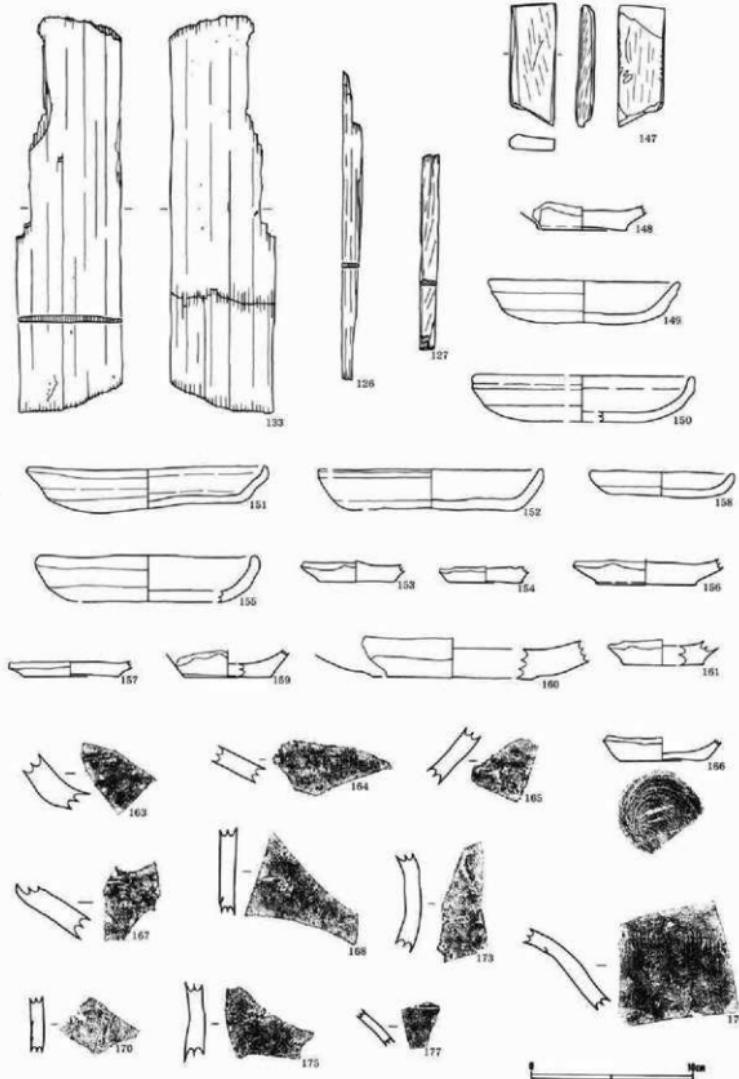
第23図 出土遺物 (2)

68区(2)



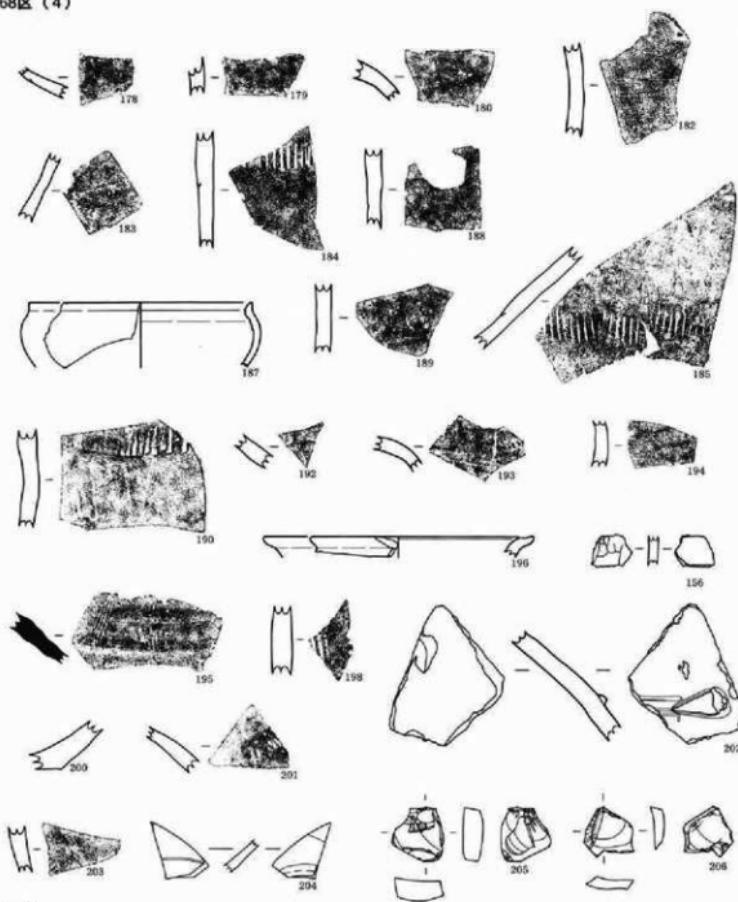
第24図 出土遺物(3)

68区(3)

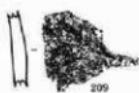


第25図 出土遺物(4)

68区(4)



69区



— 205, 206 1mm

— 205, 206 1mm

第26図 出土遺物(5)

第1表 カワラケ観察表

地名	面積	写真	標高(m)	出没場所	種	形態	分類	出没(cm)	出現(cm)	最高(cm)	生存度(%)	重量(g)	備考
1	22	14	1区・土坂2号	1層	手づくね・小	C3	8.3	1.6	60	30.54	摩滅		
2	22	14	1区・土坂2号	1層	ロクロ・小	rd	(8.4)	(6.3)	1.3	40	20.86	摩滅	
3	22	14	1区・土坂2号	1層	ロクロ・大	Rd		(8.0)		15.94	摩滅、巻軸系切無調整		
4	22	14	1区・土坂2号	1層	ロクロ・小	rd		(6.2)		底部50	29.16	摩滅、巻軸系切無調整	
5	22	14	1区・土坂2号	2層	ロクロ・小	rd	(9.0)	5.0	1.8	50	36.78	摩滅、巻軸系切無調整	
6	22	14	1区・土坂2号	4層	ロクロ・小	rd		(5.4)		底部少	7.55		
7	22	14	1区・P1'	埋土	手づくね・大	D4	(14.4)	3.3	20	35.79	摩滅		
9	22	14	1区・22C	II層	手づくね・大	D4	(13.6)	3.1	20	38.53	摩滅		
10	22	14	1区・22C	II層	内折れ	内折れ	(9.0)		1.1	20	24.93	摩滅	
11	22	14	1区・22C	II層	ロクロ・小	rd		(5.2)	(1.4)	底部50	23.19	摩滅、巻軸系切無調整	
12	22	14	1区・22C	II層	手づくね・大	C4	(14.0)	2.7	20	35.17	摩滅		
13	22	14	1区・22D	II層	内折れ	内折れ			0.7	10	2.41	摩滅	
14	22	14	1区・22D	II層	内折れ	内折れ			1.1	10	5.37	摩滅	
15	22	14	1区・22D	II層	内折れ	内折れ	(5.4)	(4.6)	0.9	10	3.72	摩滅	
16	22	14	1区・22D	II層	ロクロ・大	Rd		(7.4)		底部少	11.31	摩滅、糸切度不明瞭	
38	22	14	65区・PF46	埋土	ロクロ・小	rd		(6.2)		40	25.62	摩滅	
49	22	14	65区・231	II層	ロクロ・小	rd				底部少	5.57	摩滅	
50	22	14	65区・231	II層	内折れ	内折れ			10		2.84	摩滅	
51	22	14	65区・231	II層	ロクロ・小	rd	(9.0)	(6.6)	1.9	65	53.91	摩滅、糸切度不明瞭	
52	22	14	65区・231	II層	手づくね・大	C4	(11.2)	2.1	30	38.71	摩滅		
69	23	15	68区・土坂1号	埋土	手づくね・大	D4	(9.4)	1.9	25	14.84	内面黒色付着物		
74	23	15	68区・土坂1号	埋土	手づくね・大	Rd		(6.0)		底部25	9.04	摩滅	
75	23	15	68区・土坂1号	埋土	手づくね・大	C5	(14.3)	3.0	40	95.81	指凹み縦裂		
76	23	15	68区・土坂1号	埋土	ロクロ・小	rd		(4.2)		底部50	11.50	摩滅	
77	23	15	68区・土坂1号	埋土	手づくね・小	C3	9.0		1.7	6.27	糸切		
78	23	15	68区・土坂1号	埋土	手づくね・小	D2	8.0		1.4	6.08	摩滅		
79	23	15	68区・土坂3号	埋土	手づくね・大	D4	(16.0)	3.0	25	67.51	摩滅、指凹み縦裂		
80					ロクロ・大	Rd		(10.0)		底部20	24.62		
81	23	15	68区・土坂4号	埋土	手づくね・小	C3	9.6		1.7	断完形	64.99	摩滅	
82	23	15	68区・土坂4号	埋土	ロクロ・大	Rd23	(4.4)	(7.2)	4.0	25	65.85	巻軸外切無調整、内面赤カーボン付着	
83	23	15	68区・土坂4号	埋土	手づくね・大	D4	(12.8)		2.5	40	56.31	摩滅、延舌カーボン付着	
84	23	15	68区・土坂4号	埋土	ロクロ・大	rd		(6.4)		底部30	15.61		
85	23	15	68区・土坂4号	埋土	ロクロ・小	rd	8.4	5.6	1.8	70	45.42	摩滅、黒色付着物	
86	23	15	68区・土坂4号	埋土	手づくね・大	D4	(8.5)	1.3	30	22.16	内面カーボン付着		
87	23	15	68区・溝跡1号	1・2層	手づくね・小	D3	(9.0)	1.7	60	51.48	摩滅		
88	23	15	68区・溝跡1号	2・3層	手づくね・大	C5	14.2	2.9	50	122.46	摩滅		
89	23	15	68区・溝跡1号	2・3層	手づくね・小	C4	(14.6)	2.8	70	119.83	摩滅		
90	23	15	68区・溝跡1号	2・3層	手づくね・大	C4	(14.8)	2.6	25	40.27	摩滅、黒色付着物		
91	23	15	68区・溝跡1号	2・3層	ロクロ・小	rd		(7.0)		底部20	19.39	摩滅	
92					ロクロ・大	rd		(7.6)		底部20	11.31	摩滅	
93	23	15	68区・溝跡1号	3層	手づくね・小	C3	9.4		1.7	56.47	摩滅		
94	23	15	68区・溝跡1号	3層	手づくね・大	C4	13.6	3.1	55	123.35	指凹み痕、内面黒や黒色付着物		
95	24	15	68区・溝跡2号	2層	手づくね・大	C5	15.0	3.0	50	111.11	摩滅、指凹み縦裂		
96	24	15	68区・溝跡2号	2層	手づくね・小	D4	9.4	1.9	60	69.27	摩滅、内面黒色付着物		
97	24	15	68区・溝跡2号	2層	ロクロ・大	rd		(7.0)		底部60	81.63	摩滅	
98	24	15	68区・溝跡2号	2層	ロクロ・大	Rd00	(14.0)	(6.4)	4.0	30	84.4	摩滅	
99	24	15	68区・溝跡2号	2層	ロクロ・大	rd		(6.0)	(1.1)	底部75	41.34	摩滅、糸切り端不規則	
100	24	15	68区・溝跡2号	3層	手づくね・大	C3	(15.8)	3.4	90	220.4	指凹み痕		
101	24	15	68区・溝跡2号	4層	手づくね・大	C5	(14.7)	2.7	25	56.93	摩滅、指凹み痕、外側黒色付着物		
102	24	15	68区・溝跡3号	埋土	ロクロ・大	rd		(5.6)	(1.1)	底部25	14.35	摩滅	
103	24	15	68区・溝跡3号	埋土	ロクロ・大	Rd		(6.8)	(1.2)	底部50	41.52	摩滅	
104	24	15	68区・溝跡3号	埋土	ロクロ・大	Rd		(7.4)	(1.0)	新規90	99.16		
105	24	15	68区・内折れ	内折れ	手づくね・大	rd			1.0		7.91	摩滅	
106	24	15	68区・P1'20	埋土	ロクロ・大	Rd124	(14.6)	(7.6)	4.2	20	36.98		
107	24	15	68区・PF39	埋土	ロクロ・小	rd	(8.2)	(5.8)		20	(3.16)	外側黒色付着物	
108	24	15	68区・PF40	埋土	ロクロ・大	Rd		(9.2)		底部少	8.77		
109	24	15	68区・P1'46	埋土	ロクロ・小	rd		(5.0)		底部少	6.50	摩滅	
148	25	17	68区・15G	II層	ロクロ・小	rd		(5.6)	(1.6)	底部60	3.45	摩滅	
149	25	17	68区・15G	II層	手づくね・大	C3	(11.8)	2.7	25	61.03	灯明III、摩滅		
150	25	17	68区・15G	II層	手づくね・大	C4	(13.4)	2.9	20	43.38	摩滅		
151	25	17	68区・15G	II層	手づくね・大	C5	(14.6)	2.9	40	104.42	摩滅、底部中央黒色付着物		
152	25	17	68区・15G	II層	手づくね・大	C3	(13.8)	2.6	60	104.18	摩滅		
153	25	17	68区・15G	II層下部	ロクロ・小	rd		(4.6)		底部60	3.45	摩滅	
154	25	17	68区・15G	II層下部	ロクロ・小	rd		(4.7)		底部80	28.10	摩滅	
155	25	17	68区・15G	II層下部	手づくね・大	C3	(13.4)	2.9	20	45.20	摩滅		
156	25	17	68区・15G	II層下部	ロクロ・大	Rd		(5.0)		底部40	42.58	摩滅	
167	25	17	68区・15G	II層下部	ロクロ・大	Rd		(5.8)	0.9	底部60	32.48	内面黒色付着物	
158	25	17	68区・16G	II層	手づくね・小	D3	8.8	1.8	80	51.26	摩滅		
159	25	17	68区・16G	II層	ロクロ・小	rd		(5.4)		底部30	20.40	摩滅	
160	25	17	68区・16G	II層	ロクロ・大	Rd		(10.0)		底部少	67.22	摩滅、底部は残	
161	25	17	68区・16G	II層	ロクロ・小	rd		(5.0)		底部少	13.66	摩滅	

案かわらけの分類は、松本達也(1996)「かわらけの分類と編集」による。写真は、外側黒色付着物を示す。

第2表 国産陶磁器観察表

販路	出物	年号	高さcm	出土地点	量	位	種類	形	部位	厚さcm	時間	備考
8	22	14	1区	十坑2号	4	層	常滑	片口鉢	口底～側部	0.9	12c	2ないし3個式
17	22	14	1区	22C	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c		
18	22	14	1区	22C	Ⅱ層	常滑	裏	口縁部	1.0	12c		
19	22	14	1区	22C	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.4	12c		
20	22	14	1区	22C	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c	34と接合	
21	22	14	1区	22C	Ⅱ層	常滑	片口鉢	底～底部	1.8	12c後半		
22			1区	22C	Ⅱ層	常滑	片口鉢	側部	0.8	12c		
23	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	片口鉢	底～底部	1.6	12c	26と接合。内面に自然釉の痕跡 2ないし3個式	
24	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	片口鉢	側部	1.2	12c後半		
25	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
26	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	片口鉢	底～底部	1.2	12c	23と接合	
27	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c	外面上に押印	
28			1区	22D	Ⅱ層	常滑	片口鉢	側部	0.8	12c		
29	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c		
30	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c	外面上に押印	
31	22	14	1区	22D	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	?	ロクロ成形	
32			1区	22D	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.5	12c		
33	22	14	1区	22E	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c	外面上に押印	
34	22	14	1区	22E	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c	20と接合	
53	22	14	65区	23I	Ⅱ層	常滑	片口鉢	底部	0.8	12c	底径12cm(推定)。平面自然釉の内は、赤端下邊際ケズ	
54	23	14	65区	23I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c	外面上にぶい跡跡	
55			65区	23I	Ⅱ層	常滑	片口鉢	側部	0.7	12c		
56	23	14	65区	23I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c	外面上に軽やかな跡跡	
57	23	14	65区	23I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
58	23	14	65区	23I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.5	?	ロクロ成形	
59	23	14	65区	23I	Ⅱ層	常滑	片口鉢	底部	0.5	12c後半?	木山座の可能性あり	
60	23	14	65区	24I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
61	23	14	65区	24I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c	外面上自然釉の剥落	
62	23	14	65区	24I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c	外面上に押印	
63	23	14	65区	24I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c		
64	23	14	65区	25I	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.5	12c	直徑5.8cm(推定)。他の口回り削落、胎土は白色、変形	
70	23	15	65区	不明	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.5	12c	外面上自然釉の剥落	
71	23	15	65区	不明	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c		
72	23	15	65区	不明	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.6	12c		
73			65区	不明	Ⅱ層	常滑	片口鉢	底部	1.6	12c	底部にすこ度	
110	24	16	65区	土坑1号	Ⅰ層	常滑	裏	側部	1.0	12c	外面上に押印、軽やかな跡跡	
111	24	16	65区	土坑1号	Ⅰ層	常滑	裏	側部	0.8	12c	11層内面に自然釉の飛沫	
112	24	16	65区	土坑1号	Ⅰ層	常滑	裏	側部	1.2	12c	外面上自然釉の剥落	
113	24	16	65区	土坑1号	Ⅰ・2層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
114	24	16	65区	溝窓1号	1・2層	常滑	裏	側部	1.2	12c	174と接合。外面上に缺跡の戻れ	
115	24	16	65区	溝窓1号	1・2層	常滑	裏	側部	1.3	12c	外面上に軽やかな跡跡	
116	24	16	65区	P116	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c		
117	24	16	65区	P20	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c	外面上に押印	
118	24	16	65区	P24	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
119	24	16	65区	P51	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c	側部部分、外面上に缺跡	
120	24	16	65区	P49	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.5	12c	外面上口縁部に軽	
121			65区	P49	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.5	12c	外面上に軽	
122	24	16	65区	P41	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	?	ロクロ成形	
123	24	16	65区	P42	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c	外面上に押印	
162			65区	13G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c	側部～肩部	
163	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.4	12c	側部部分、外面上に軽	
164	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c	外面上に施跡の刷毛目瓶	
165	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c		
166	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.8	12c	平底。上物糸切り痕	
167	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.4	12c	側部部分。外面上に軽	
168	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c		
169			65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.7	12c	側部部分?	
170	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.8	12c		
171			65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c	側部部分。外面上に軽やかな跡跡	
172			65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.4	12c	外面上口縁部に軽	
173	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c		
174	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c	114と接合	
175	25	17	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.2	12c		
176	25	18	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
177	25	18	65区	15G	Ⅱ層	常滑	二筋窓?	側部	0.5	12c		
178	26	18	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.7	12c	外面上自然釉の剥落	
179	26	18	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
180	26	18	65区	15G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c		
181			65区	16G	Ⅱ層	常滑	裏	片口鉢	側部	0.9	12c	
182	26	18	65区	16G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.0	12c		
183	26	18	65区	16G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	0.9	12c		
184	26	18	65区	16G	Ⅱ層	常滑	裏	側部	1.1	12c	186と接合。外面上に押印	

番号	図版	写真	測定区	出土地点	層位	種類	断面	部位	厚さ:cm	時期	備考
185	26	18	65区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	1.0	12c	外面上押印
186	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	1.1	12c	184と接合。外面上押印
187	26	18	65区	16G	Ⅱ層	鉄尖	球形	口部～側面	0.5	12c	口部外側に鉄
188	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	1.0	12c	
189	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	1.0	12c	
190	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	1.3	12c	外面上押印
191			68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	0.9	12c	外面上鉄の剥落
192	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	1.0	12c	
193	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	0.9	12c	
194	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	0.9	12c	
195	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	0.6	?	側面或底。ロクロ成形
196	26	18	68区	16G	Ⅱ層	常磁	板状	底部	0.7	?	口径16.8cm(推定)。ロクロ成形
197			68区	17H	上層	常磁	板状	底部	0.9	12c	
198	26	18	68区	17H	上層	常磁	板状	底部	1.3	12c	
199	26	18	68区	17H	上層	常磁	板状	底部	0.6	17c 初	
200	26	18	68区	18H	上層	常磁	板状	底部	1.4	12c	
201	26	18	68区	18H	上層	常磁	板状	底部	1.0	12c	面に押印、隠れ
202	26	18	68区	18H	上層	常磁	板状	底部	1.5	12c	被破損か?
203	26	18	68区	18H	上層	常磁	板状	底部	1.1	12c	
204	26	18	68区	小明	土器裏取	常磁	板状	底部	0.9	12c	
209	26	18	69区	9E	埋土	常磁	板状	底部	0.9	12c	

※中国陶器の型式は、赤羽一郎・中野晴久氏による常滑窯産陶器生産地罐年による。

第3表 中國産磁器観察表

番号	図版	写真	測定区	出土地点	層位	種類	断面	部位	底地	分類	備考
35	22	14	1区	22E	Ⅱ層	常磁	板状	台下	脚部	骨部分	
36	22	14	1区	22C	Ⅱ層	白磁	輪	口部	底部	内面に除刻	
39	22	14	65区	P P 54	埋土	白磁	板状	口部	底部	II類	
65	23	14	65区	24I	Ⅱ層	白磁	四角壹	底部	底部	玉様	
124	24	16	68区	溝跡 1号	埋土	白磁	四角壹	底部	底部	玉様	
125	24	16	68区	溝跡 2号	埋土	青磁	四角壹	底部	底部	玉様	
204	26	18	69区	16G	Ⅱ層	白磁	板状	脚部	底部	II類orIV類	

※中国陶器の型式は、横田次次郎・出島(1973)「近畿府出土の輸入中國陶器について」で式別分類と編年を中心として、「九州歴史資料館研究集会」による。

第4表 木製品観察表

番号	図版	写真	測定区	出土地点	層位	種類	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	断面	備考
40	22	14	65区	P P 2	埋土	織機?	2.4	7.0	0.7		片面黒漆
41			65区	P P 8	埋土	不明	6.5	3.8	1.1		
42			65区	P P 8	埋土	不明	5.7	3.2	0.8		
43			65区	P P 8	埋土	不明	4.8	3.3	1.2		
44			65区	P P 8	埋土	不明	5.2	3.6	1.1		
45			65区	P P 8	埋土	不明	4.1	3.0	0.9		
46			65区	P P 8	埋土	不明	5.9	3.7	0.9		
47			65区	P P 8	埋土	不明	4.8	2.5	1.5		
48			65区	P P 8	埋土	不明	3.6	2.2	2.5		
126	25	17	68区	上5号	3層	ちゅう木	19.0	1.2	0.3		スギ
127	25	17	68区	4号 3号	3層	ちゅう木	12.2	1.1	0.5		
128			68区	上5号 3号	3層	ちゅう木?	9.2	1.2	0.3		
129			68区	土5号 3号	3層	ちゅう木?	3.8	2.5	2.5		角形のもの
130			68区	土5号 3号	3層	不明	3.1	4.4	1.1		L字のもの
131			68区	上5号 3号	3層	不明	3.4	2.6	2.1		角形で断面斜め。切り口に嵌付溝
132			68区	土5号 3号	3層	小明	3.9	2.6	2.6		角形で断面斜め。切り口に嵌付溝
133	25	17	68区	溝跡 2号	2層	折合?	24.3	6.3	0.4		スギ
134			68区	溝跡 2号	2層	不明	15.9	1.2	8.5		神社
135			68区	溝跡 2号	3層	部材	9.1	5.5	4.1		片面にケズリ有り
136			68区	溝跡 2号	3層	不明	13.3	5.0	3.2		奥付溝
137			68区	溝跡 2号	3層	不明	10.3	4.7	4.6		全体に炎状
138			68区	溝跡 2号	3層	不明	9.8		2.1cm		径2.1cm 丸棒
139			68区	溝跡 2号	3層	不明	7.8		2.0cm		径2.0cm 丸棒 片面嵌合溝 片面ケズリ有り
140			68区	溝跡 2号	3層	不明	2.1		1.6cm		径1.6cm 丸棒 片面ケズリ有り
141			68区	溝跡 2号	6層	不明	8.2	1.2	0.6		
142			68区	溝跡 3号	埋土	?	12.4	0.9	0.6		マツ属
143			68区	P P 6	埋土	小明	2.9	3.2	1.1		

第5表 石器・石製品觀察表

登録No.	回版	写版	調査区	出土地点	層位	種類	基準	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重量:g	石質	產地	備考
67	23	15	65区	23I	Ⅱ層	石製品	砥石	3.3	4.3	1.0~1.5	20.76	砂岩		2面使用
68	23	15	65区	23I	Ⅱ層	石製品	砥石	3.6	2.6	0.9~1.1	14.84	砂岩		2面使用
147	25	17	65区	土坑4号	堆土	石製品	砥石	7.7	2.8	0.7~1.0	35.59	頁岩		5面使用。側面に深い使用痕
207	26	18	65区	15G	堆上	石器	刮竹	2.1	2.0	0.2~0.3	1.96	珪質頁岩		
208	26	18	65区	15G	巨砾下部	石器	刮片	2.4	2.2	0.7~0.9	5.57	不知道?		

第6表 石器・石製品觀察表

登録No.	回版	写版	調査区	出土地点	層位	種類	基準	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重量:g	石質	備考
37			1区	22D	埋土	鉋					15.54		
66			65区	24 I	Ⅱ層	鉋					6.1		
144	24	17	65区	溝跡1号	埋土	鉋	(4.6)	1.1	0.8		2.41	鈣化苦しい	
145	24	17	65区	溝跡1号	埋土	鉋	(2.8)	0.9	0.6		4.93	鈣化苦しい	
146			65区	P P 15	埋土	鉋					13.19		
205			65区	16G	Ⅱ層	鉋					11.04		
206			65区	18H	堆上	鉋					3.15		

## 4.まとめと考察

志羅山遺跡67次調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡10棟、井戸状遺構1基、土坑14基、溝跡9条、堀跡5条、柱穴列2条、柱穴213基である。遺物はかわらけ、国産陶磁器、中国産磁器、木製品、石製品、金属製品、種子、粘土塊が出土している。12世紀代の遺物が主体となるが、近世の肥前產あるいは志野產の陶磁器が出土している。

### (1) 遺構

#### ①掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の当初の検出数は、1区で1棟、65区で2棟、66区で2棟（65区にまたがる建物跡を除く）、68区で2棟の計7棟であった。その後隣接の平泉町文化財センター調査結果を合わせて検討したところ、68区にさらに3棟の掘立柱建物跡が存在することが分かった。それぞれ68区掘立柱建物跡3号、68区掘立柱建物跡4号、68区掘立柱建物跡5号と命名した。ただし、柱穴の規模等の正確な数値については当センターでは把握をしていない。

検出された掘立柱建物跡は、建物全体の規模が不明なものが多い。確定しているのは65区掘立柱建物跡1号、65区掘立柱建物跡2号の2棟のみである。他の7棟は不確定で、中でも1区掘立柱建物跡1号、66区掘立柱建物跡2号、66区掘立柱建物跡3号、68区掘立柱建物跡3号、68区掘立柱建物跡4号の5棟は、およそその見当はつくものの桁行、梁行が未確定である。このため、廂の有無についても未確定となるが、現時点では廂を持つことが分かっている建物が3棟あり、65区掘立柱建物跡1号と65区掘立柱建物跡2号は東西側に廂を持つ、66区掘立柱建物跡3号は東側に廂を持つ。

建物の軸線方向は、N-4°-WからN-9°-Eの13°内に全て収まる。西よりに傾くのは68区掘立柱建物跡2号と68区掘立柱建物跡5号である。68区掘立柱建物跡1号は南北正方位である。

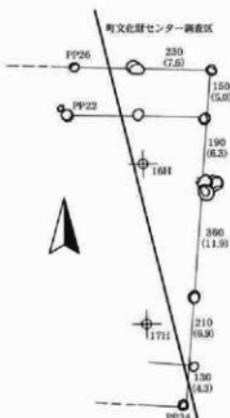
建物の時期については、志羅山地区における遺構検出面はどの時代においてもほぼ同一面であるため、時期の特定が困難である場合も多い。各掘立柱建物跡の時期については本文中に述べてあるとおり、12世紀に属する可能性があるものが多い。1区掘立柱建物跡1号、68区掘立柱建物跡2号、68区掘立柱建物跡3号を構成する多くの柱穴の検出は、遺物包含層下のⅢ層からであった。遺物包含層は摩滅したかわらけを主体とした自然堆積的様相を呈するため、遺物包含層形成以前の建物であることが分かる。埋土の様相や柱穴内からの出土遺物等から12世紀代の掘立柱建物の可能性があると判断した。

68区掘立柱建物跡3号における南北ラインの平均間尺11.4尺は、平泉町の12世紀代の建物跡で多く見られる7尺～8尺に比べ柳之御所跡では8尺、10尺台の建物跡（四面廂建物）が検出されてはいるものの、特異な例と言えよう。

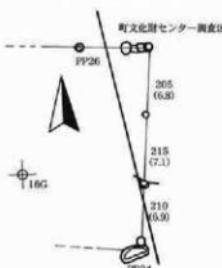
柱穴の切り合い関係から建物の新旧が分かったのが66区である。この調査区では、掘立柱建物跡が3棟検出されたが、柱穴の切り合い関係から掘立柱建物跡1号が新しいことが確認できた。掘立柱建物跡2号、掘立柱建物跡3号の新旧は柱穴の切り合いがないため不明である。

掘立柱建物跡を構成する柱穴からの出土遺物は、極少量であるが出土している。その多くはかわらけ片、国産陶器片、粘土塊等であるが、65区掘立柱建物跡1号のPP2から漆器片、65区掘立柱建物跡2号のPP54から中国産白磁片が出土している。

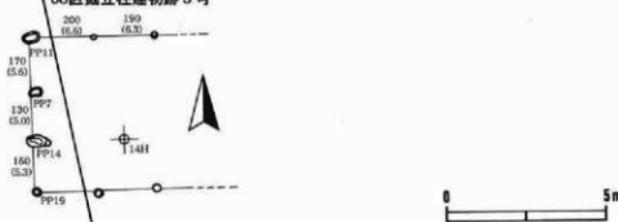
68区掘立柱建物跡 3号



68区掘立柱建物跡 4号



68区掘立柱建物跡 5号



第27図 68区掘立柱建物跡 3・4・5号

## ②土坑

土坑は調査区全体で14基検出されており、その内12世紀に属すると思われる土坑は12基である。内訳は1区3基、65区4基、68区5基である。

遺物包含層除去後に検出されたものが多く、8基を数える。遺物包含層の形成時期は不明であるが、遺物の主体が12世紀代のかわらけであることから、12世紀に属するものとした。

1区では、1区土坑4号と1区掘立柱建物跡1号のPP6が重複関係にあり、掘立柱建物跡1号が古い。これにより1区土坑4号と1区土坑2号が重複関係にあることから、新旧関係は古い順に掘立柱建物跡1号→土坑4号→土坑2号となる。

65区土坑2号と68区土坑3号は、(株)パレオ・ラボに土壤分析を委託し、その結果トイレ遺構の可能性が高いことが分かった(詳しくは付篇の5. 分析・鑑定を参照のこと)。65区土坑2号の平面形は円形で、規模は開口部径80×76cm、底部径52×46cm、深さ40cm程、断面形は逆台形状である。68区土坑3号の平面形は円形が推定され、規模は開口部径110cm、底部径90cm、深さ110cm程、断面はピーカー状である。覆土はともに有機質腐植土層をもつ。68区土坑3号からはちゅう木と思われる木製品が出土している。ただし、その場所をトイレとして実際に排泄行為を行ったのか、人糞をそこに廃棄した場所なのかについては不明である。

## ③溝跡

溝跡は全体で10条検出されており、内訳は1区1条、65区2条、66区1条(65区と同一の溝を含む)、68区4条、71区2条である。12世紀に属する溝は、1区溝跡1号、65区溝跡2号、68区溝跡1号、68区溝跡2号、68区溝跡3号、68区溝跡4号の6条である。この6条についてその特徴をみると、水の流れは不明な1区溝跡1号、68区溝跡4号を除き、東流する構造になっている。軸線はそれぞれ1区1号溝がN-86°-W(N-94°-E)、65区溝跡2号がW-E正方位、68区溝跡1号がN-83°-W(N-97°-E)、68区溝跡2号がN-86°-W(N-94°-E)、68区溝跡3号がN-96°-W(N-84°-E)、68区溝跡4号がN-103°-W(N-77°-E)であり、角度差はN-83°~103°-W(N-77~97°-E)となる。検出長が短い溝も多いため軸線方向に多少のズレが生じるであろうことも考慮する必要があるが、白山社の参道の軸線方向であるN-14°-Eの直角の値であるN-76°-W(N-104°-E)とも異なり、またこれら溝跡に一定の方向性を見つけることはできなかった。

比較的規模の大きい溝は68区の溝跡2号と溝跡3号である。68区溝跡2号が開口部幅240cm、深さ133cm、68区溝跡3号が開口部幅196cm、深さ70cmである。ともにかわらけ、木製品などが出土している。68区溝跡2号は56次調査で検出された28区溝跡4号(軸線方向N-90°-E)と同一の溝と思われる。68区溝跡3号に対応する溝跡は28区では検出されていない。

遺物の出土については、ある程度の規模をもつ溝跡からは出土するものの、底面までの深さが比較的浅い溝跡からはほとんどない。68区溝跡1号は、65区井戸状遺構1号を除き今回の調査の中で最も遺物出土量が多かった遺構である。かわらけは、登録した8点(手づくね6、ロクロ2)を含め4号ビニール袋約5袋分(約2.3kg)、国産陶器は常滑産1点、渥美産2点、その他1点の出土、中国産磁器では白磁が1点出土、金属製品では釘2点出土、種子ではモモ16点、不明種子1点出土、粘土は粘土塊6点(約86g)出土した。本遺構に対応する溝跡は第56次調査28区では検出されていない。

68区溝跡4号は、整地層を確認するために入れたトレンチの断面からその存在が確認された遺構である。

溝としては規模が小さく、またいくつかの柱穴を伴うことから壠跡である可能性も高い。本遺構に対応する溝跡は、68区溝跡1号と同様に第56次調査28区では検出されていない。

時期が不明な溝跡は、65区溝跡1号、66区溝跡1号、71区溝跡1号、71区溝跡2号の4条である。65区溝跡1号は、66区溝跡1号と同一の溝跡で、時期不明としたが、覆土の様相から12世紀の可能性もある。71区の2条は、出土遺物がなく時期等の詳細は不明である。

#### ④壠跡

壠跡は5条検出されており、すべて布堀り部分と板痕跡部分からなる。内訳は65区3条、66区2条である。12世紀に属するのは、65区壠跡1号、66区壠跡1号、66区壠跡2号の3条である。

65区壠跡1号は、比較的明瞭な検出状況であった。規模は布堀り開口部幅35~40cm、深さ40~50cmで、軸線方向と平行に幅35~40cm、厚さ4~5cmの板痕跡が連なる。検出された板痕跡は19枚である。軸線方向はN-80°-Wである。

65区において検出された壠跡1号と壠跡2号は、軸線方向がそれぞれN-18°-E、N-14°-Eとほぼ同じであり、途中壠跡1号が壠跡2号を切る。布堀りの規模や板痕跡の大きさ、埋土の様相なども似通っている。66区壠跡2号は、隣接の平泉町文化財センター調査区に延び、総延長は約19m程になる。

65区壠跡1号と66区壠跡2号の関係であるが、それぞれ軸線方向はN-80°-W、N-14°-Eであり、ほぼ直交する。この壠跡が交わる交点はともに途中消滅により確認できないが、屋敷跡を区画する機能を有していた可能性がある。これら壠跡による区画が存在していたとなると、その区画内に存在していた施設には何があったのだろうか。何らかの生活空間と仮定すると、建物、井戸、便所、廃棄物を棄てる穴（土坑）等が存在したことは想像に難くない。掘立柱建物跡は当センター調査区分の他、平泉町文化財センター調査区においても数棟検出されており（当然建て替えの可能性をもつ）、井戸は65区井戸状遺構1号、便所は65区土坑2号、土坑は65区土坑4号等それら要件を満たす検出がされている。これらを総合するとこの区画は一つの屋敷に相当するものと思われる。今後周辺の調査結果を踏まえながら、さらに検討をしていく必要があろう。

\*第73次調査において北辺にあたる壠跡が検出されたことにより、ほぼ確実に1つの区画を構成するものと思われる…第73次調査結果を参照のこと。

#### ⑤井戸状遺構

65区で1基検出されており、形態は素掘りである。平面形はほぼ円形で、底部に向かうにつれ方形ぎみとなる。開口部径306cm前後、底部径116~128cm、深さ380cmである。覆土は5層に大別され、細分すると18層になる。特に遺物の出土量が多かったのは大別した1層からで、1b層は大量のかわらけを含み、1b1層はかわらけの他、木製品（形代、白木皿、漆器、箸）、種子、馬歛等が出土している。遺物はすべて平泉町文化財センターが保管し、また整理も行っているため現段階では詳細不明であるが、かわらけは約300kgにも及ぶ量が出土している他、これまで出土例のない瓦器質の手づくね風かわらけや黒漆の器面に赤漆で木の葉文様を施した漆器等が出土している（平泉町文化財センターによると、岩手県平泉町文化財調査報告書第71集『志麻山遺跡第69・71次発掘調査報告書』に掲載予定とのこと）。

また、底部底南東隅で正位に置かれた完形の手づくね小型かわらけが出土していることから、井戸鏡めのような何らかの儀式的なことが行われた可能性がある。

#### ⑥遺物包含層

1区、65区、68区で見受けられた。層厚は3~20cm程で、遺物はかわらけ、国産陶器、中国産磁器、金属製品、粘土が出土した。主体は摩滅したかわらけである。

1区では、かわらけが4号ビニール袋約24袋分(約12.1kg)、国産陶器が18点(常滑産10、瀬美産7、須恵器1)、中国産白磁2点、鉛滓1点、粘土塊66gが出土した。

65区では、かわらけが4号ビニール袋約41.5袋分(約20.7kg)、国産陶器が12点(常滑産7、瀬美産1、須恵器1、その他3)、中国産白磁1点、鉛滓1点、砥石2点が出土した。

68区では、かわらけが4号ビニール袋18.5袋分(約8.7kg)が出土した。国産陶器が42点(常滑産20点、瀬美産19点、須恵器2、その他1)、中国産磁器1点、鉛滓2点、石製品2点、種子1点、粘土塊約768gが出土した。

#### ⑦整地層

68区でその存在が確認された。範囲は68区遺構配置図で示したとおりであり、層厚は厚いところで約30cmほどある。覆土は層に区分される。この整地層内ではいくつかの遺構が重複関係にあり、整理すると古い順に溝跡3号→整地層→掘立柱建物跡1号・溝跡4号の順になる。溝跡4号は整地層トレンチ断面からその存在を確認したものである。整地作業については、整地層のトレンチ断面全体から判断して整地層後に溝跡4号ができ、1度の作業で形成されたものと思われる。

### (2) 出土遺物

遺物はかわらけ、国産陶器、中国産磁器、木製品、石製品、金属製品、種子、粘土塊が出土している。調査区全体における出土量を個別にみていくと、かわらけは約66kg、国産陶器は92点、中国産磁器は7点、金属製品7点、石製品6点、木製品27点、その他に種子や粘土塊がある。

遺構内と遺構外に分類すると、遺構外が圧倒的に多い。これは1区、65区、68区に遺物包含層があったためである。1区では、かわらけが4号ビニール袋約24袋分(約12.1kg)、国産陶器が18点(常滑産10、瀬美産7、須恵器1)、中国産白磁2点、鉛滓1点、粘土塊66gが出土した。65区では、かわらけが4号ビニール袋約41.5袋分(約20.7kg)、国産陶器が12点(常滑産7、瀬美産1、須恵器1、その他3)、中国産白磁1点、鉛滓1点、砥石2点が出土した。68区では、かわらけが4号ビニール袋18.5袋分(約8.7kg)が出土した。国産陶器が42点(常滑産20点、瀬美産19点、須恵器2、その他1)、中国産磁器1点、鉛滓2点、石製品2点、種子1点、粘土塊約768gが出土した。

#### ①かわらけ

かわらけは全部で71点の登録をしており、遺構内から45点、遺構外から26点の出上である。内訳は手づくねが29点、ロクロが36点、内折れ6点である。手づくねに対しロクロの数が多いのは、絶対的量が圧倒的にロクロが少ないため、敢えて口縁の残存が半分未満でもロクロは登録したためである。器形はロクロに1点ボウル状がある他はすべて皿である。手づくねは小型が27点、大型が9点である。ロクロは小型が27点、大型が9点(ボウル状含む)である。

分類は、手づくねでは一段なで技法が19点、二段なで技法が9点である。一段なでは、C3が8点(手づくね小4、手づくね大4)、C4が6点(手づくね大6)、C5が4点(手づくね大4)、C5'1点(手

づくね大1)である。二段なでは、D 3が2点(手づくね小2)、D 4が7点(手づくね小3、手づくね大4)である。

ロクロでは口縁部が残存していないものが多く、細分類できたものは少ない。r dが27点、R dが5点、R d00が1点、R d23が1点、R d24が1点、R bが1点である。

#### ②国産陶磁器

国産陶磁器は全部で92点出土しており、造構内出土が15点(常滑産9、渥美産5、須恵器1)、造構外出土が77点(常滑産42、渥美産28、須恵器4、その他3)である。12世紀の国産陶器は常滑産51点、渥美産33点の合計84点の出土である。壺・甕類が64点(常滑産36、渥美産28)、碗・鉢類が19点(常滑産14、渥美産5)、瓶?(常滑産1)が1点である。須恵器は5点出土している。その他は、東濃産?1点、肥前産1点、美濃産(志野)1点の出土である。東濃産?は12世紀後半代の山茶碗、肥前産は18世紀の猪口、志野産は17世紀初頭の皿である。

#### ③中国産磁器

造構内から3点、造構外から4点の合計7点が出土している。種類は白磁が5点、青白磁が1点、青磁が1点である。器種は皿2点、壺3点、碗1点、合子1点である。

#### ④木製品

27点出土しており、すべて造構内からの出土である。用途不明なものが大部分を占めるが、65区掘立柱建物跡1号のPP2からは両面黒漆塗りの漆塗椀?が出土している他、68区土坑3号のトイレ造構からはちゅう木が出土している。

#### ⑤石器・石製品

造構内から1点、造構外から4点の合計5点が出土しており、内訳は砥石が3点、剥片2点である。68区土坑4号から出土した砥石は5面使用で、側面に深い使用痕がある。石質は頁岩である。

#### ⑥金属製品

造構内から3点、造構外から4点の合計7点が出土している。種類は釘2点と鉛滓5点である。釘2点は68区溝跡1号からの出土で銹化が著しい。

#### ⑦その他

種子は、調査区全体で33点23.59g出土している。1点を除き造構内の出土である。種類はモモ21点、ウメ1点、不明9点である。

粘土塊は調査区全体で約1.5kg出土している。

<引用・参考文献>

- ・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第216集（1995）：『志賀山遺跡第14次・第25次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集（1995）：『柳之御所跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第266集（1997）：『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成8年）』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第282集（1998）：『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成9年）』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第6集（1985）：『志賀山遺跡第2・3次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第8集（1986）：『志賀山遺跡第6次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第21集（1990）：『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第24集（1991）：『柳之御所跡発掘調査報告書－第27-29次調査概報－』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第34集（1993）：『志賀山遺跡第21次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第35集（1993）：『志賀山遺跡第13-15-16-17-18-20次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第36集（1993）：『合町遺跡第1次、志賀山遺跡第11-12-19-22次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第40集（1993）：『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第38集（1994）：『柳之御所跡発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第44集（1994）：『志賀山遺跡第23-29-30次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第45集（1994）：『志賀山遺跡第26-27次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第47集（1995）：『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第49集（1995）：『志賀山遺跡第31-32-37次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第51集（1995）：『志賀山遺跡第35次発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・岩手県平泉町文化財調査報告書第55集（1996）：『平泉遺跡群発掘調査報告書』平泉町教育委員会
- ・松本達也（1992）：『柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味』『紀要XII』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・松本達也（1993）：『柳之御所跡出土かわらけ編年試案』『紀要XIII』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・松本達也（1994）：『手づくねかわらけからみた個の解釈』『紀要XIV』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- ・中野晴久（1990）：『三筋壺、その造形と意味をめぐって』『常滑市民館資料館 研究紀要IV』常滑市教育委員会
- ・中野晴久（1995）：『知多島古窯跡群の焼成記号について』『常滑市民館資料館 研究紀要VI』常滑市教育委員会
- ・青木修（1993）：『片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として』『研究紀要 第1輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- ・青木修（1994）：『続片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として』『研究紀要 第2輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
- ・宇野勝夫（1981）：『第4章 遺物の考察』『京都大学埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－白川北殿北辺の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター
- ・横山賢次郎・森田勉（1978）：『太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式と編年を中心として－』『九州歴史資料館研究論集 4』
- ・森田勉氏遺稿集・追悼論文集（1995）：『太宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会
- ・八重畠忠郎（1994）：『常滑・瀬戸窯産業の12世紀後半における変化－国産陶器－括磨東事例から－』『岩手考古学 第6号』岩手考古学会
- ・松本達也（1994）：『ロクロかわらけと手づくねかわらけ』『岩手考古学 第6号』岩手考古学会
- ・赤羽一郎（1995）：『論議－常滑窯製品の編年と流通経路－』『月刊考古学ジャーナルNo.396』ニュー・サイエンス社
- ・中野晴久（1995）：『常滑編年作業と今後の課題』『月刊考古学ジャーナルNo.396』ニュー・サイエンス社

- ・八重樫忠郎（1995）：「平泉遺跡群の常滑焼」『月刊考古学ジャーナルNo.396』ニュー・サイエンス社
- ・荒木伸介（1996）：「平泉・発掘調査の歩み」『月刊考古学ジャーナルNo.407』ニュー・サイエンス社
- ・木澤樹輔（1996）：「都市平泉の地割りについて」『月刊考古学ジャーナルNo.407』ニュー・サイエンス社
- ・及川司（1996）：「中尊寺調査に見る平泉の初期様相」『月刊考古学ジャーナルNo.407』ニュー・サイエンス社
- ・八重樫忠郎（1996）：「藤原氏以後の平泉」『月刊考古学ジャーナルNo.407』ニュー・サイエンス社
- ・千葉信胤（1996）：「平泉地名研究の諸問題」『月刊考古学ジャーナルNo.407』ニュー・サイエンス社
- ・八重樫忠郎（1997）：「輸入陶磁器から見た平泉－分布傾向からの考察－」『貿易陶磁研究集会平泉大会資料集 東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
- ・奈良國立文化財研究所編（1985）：『木器集成図録 近畿古代編』
- ・大田区立郷土博物館編（1997）：『トライの考古学』東京美術
- ・北九州市立博物館（1988）：『北九州の中中国陶磁－出土品にみる古代の日中交流－』
- ・平泉文化研究会編（1992）：『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館
- ・水原慶二編（1995）：『常滑焼と中世社会』小学館
- ・平泉郷土館編（1991）：『平泉の埋蔵文化財』
- ・高橋富雄・三浦謙一・入間田宜夫編（1993）：『奥州藤原氏と平泉』河出書房新社
- ・橋崎彰一編（1990）：『日本の陶磁 古代中世篇4 常滑 湿美 雄飛』中央公論社
- ・沢山由治（1989）：『日本の陶磁人系7 常滑 湿美 越前 珠洲』平凡社
- ・長谷部家爾監（1997）：『放宮博物院 ⑥宋・元の陶磁』NHK出版
- ・長谷部家爾・今井敏編（1995）：『中国の陶磁12 日本出土の中国陶磁』平凡社
- ・出川直樹監（1983）：『やきもの鑑定入門』新潮社
- ・橋崎彰一／宮石宗弘／沢山由治（1992）：『日本のやきもの⑩ 三彩抹釉・瀬戸・常滑』講談社

## 5. 分析・鑑定

### (1) 志羅山遺跡第67次調査出土材の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

#### 1. 試料

試料は9点で、平安時代（12世紀）のものとされる木製品・加工材である（表1参照）。

#### 2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・極目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

#### 3. 結果

試料は以下の3 Taxa（分類群、ここまででは亜属と種という異なる階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I・II」（1989）にしたがった。また、一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。

##### ・マツ属複維管束亜属の一種 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon* sp.) マツ科 №24

早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞によりなり、仮道管内壁には顕著な鉤歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は單列、1～10細胞高前後のものと樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、クロマツ（*Pinus thunbergii*）・アカマツ（*P. densiflora*）と琉球列島特有のリュウキュウマツ（*P. luchuensis*）の3種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

##### ・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 №12, 20

早材部から晚材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晚材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で2～4個。放射組織は単列、1～30細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

##### ・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 №2, 6, 10, 22, 28, 30

環孔材で孔圓部は多列、孔圓外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～20細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・樹木や海苔粗朶などの用途が知られている。

以上の同定結果を検出遺構などや推定されている用途とともに一覧表で示す（表1）。

表1 志羅山遺跡第67次調査出土材の樹種

試料番号	検出遺構など	用 途	種 名
2	65区P24	柱	クリ
6	65区SA1	板塀	クリ
10	68区SD2	3層 不明	クリ
12	68区SK3	3層 ちゅう木？	スギ
20	68区SD2	2層 折敷？	スギ
22	68区P22	柱	クリ
24	68区SD3埋土	箸？	マツ属複維管束亞属の一種
28	68区P37埋土	柱？	クリ
30	69区P7	柱	クリ

#### 4. 考察

柱（柱？を含む）や板塀の用材5点はいずれもクリであった。隣接する泉屋遺跡第16次調査出土の12世紀のものとされる礎板<sup>1)</sup>もクリに同定されている。地面に直接立てたり埋設して使う部材で、しかも強度や耐朽性が要求されるものにクリを用いることは、きわめて適切な樹種選択といえよう。

ちゅう木？・折敷？はともにスギに同定された。試料の用途は確定していないが、泉屋遺跡第16次調査・志羅山遺跡第14次（？）調査<sup>2)</sup>・柳之御所跡出土試料からも類例が報告されている（高橋 1995, 能城 1995）。

箸？はマツ属複維管束亞属に同定された。箸とすれば、複維管束亞属の類例はほとんどない<sup>3)</sup>（伊東ほか 1987, 伊東 1990）。

#### <注>

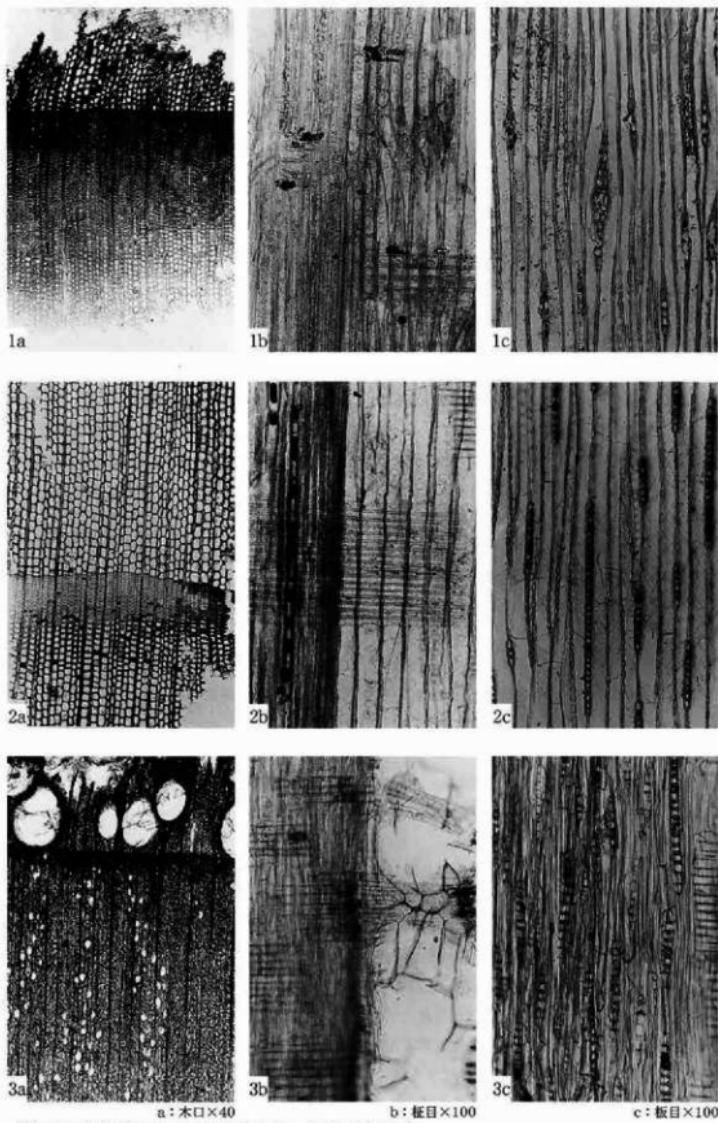
1)：「泉屋遺跡第16次調査出土材樹種同定報告書」（木工舎「ゆい」1997）を参照のこと。

2)：「志羅山遺跡出土材樹種同定報告書」（木工舎「ゆい」1993）を参照のこと。

3)：志羅山遺跡第14次（？）調査試料は、ヒノキ属の一種またはヒノキ属類似種に同定されている（注2）報告書）。

引用文献

- 平井 信二 1979～1982 「木の事典 第1巻～第17巻」, かなえ書房.
- 伊東 隆夫・山口 利徳・林 昭三・布谷 知夫・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途, 「木材研究・資料」, 第23号, 42-210.
- 1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II, 「木材研究・資料」, 第26号, 91-189.
- 能城 修一 1995 柳之御所跡から出土した木製品の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査《分冊1 本文・図版》」, (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 433-456.
- 佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I・II」, 平凡社, 321・305pp.
- 高橋 利彦 1995 柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一関遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査《分冊1 本文・図版》」, (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 423-432.



樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、板目では左から右。  
a : 木口  $\times 40$       b : 板目  $\times 100$       c : 板目  $\times 100$

図版 1 1. マツ属複雜管束亞属の一種 No.24 2. スギ No.20 3. クリ No.22

## (2) トイレ遺構土壌（寄生虫・花粉・種子）分析報告書

平成10年3月

（株）パレオ・ラボ

### (1) 志羅山遺跡の花粉分析・寄生虫卵分析

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

岩手県平泉町に所在する志羅山遺跡において行われた発掘調査で、トイレ遺構と推測される上坑が検出された。以下に記した花粉および寄生虫卵分析は、同試料を用いて行われた大型植物化石分析結果をあわせ、このトイレ遺構を確認する資料を得る目的で行われた。

#### 1. 試料と分析方法

試料は、志羅山遺跡第67次調査の65区2号土坑（SK2）および68区3号土坑（SK3）より採取された2試料である。そのうち土坑最下部の3層より採取されたSK2試料は、黒灰色の砂質シルトで、植物遺体が散在しており、粘性が非常に高くなっている。また、黄褐色のシルト小塊（結核）が少し認められる。SK3試料は土坑中央やや下位の3層より採取された。土相はSK2より黒色が強い黒灰色のやや砂質のシルトで、黄褐色のシルト小塊が散在している。また、細かな植物遺体が少し認められ、粘性はSK2より低い。

これら2つの土坑の時期について、SK2からは12世紀の遺物が出土しており、また、SK3は出土遺物から12世紀の可能性が高いと考えられている。

これら2試料について以下の方法で花粉分析を行った。

試料（湿重約3g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目的篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え体積を測定する。検鏡はこの残渣より適宜ブレバートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

また、寄生虫卵分析は体積を測定した試料（約0.4ml）について上記と同様の方法で分析を行い、最終的な残渣量および検鏡によした量を測定し、1cc当りの寄生虫卵数を算出した。

#### 2. 花粉分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉17、草本花粉16、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計36である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、また、その分布を図1に示した。なお、表や図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に括して入れてある。また、花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したブレバート）を作成し、各々にPLCSS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

検鏡の結果、両試料とも樹木花粉に比べ草本花粉が多く検出されている。個々にみると、SK2ではアブランカ科が70%弱と最優占している。次いでイネ科やヨモギ属が10%弱を示し、その他、クワ科やアザ科・ヒュウガ科が、また、樹木のコナラ属コナラ亜属やクリ属・トチノキ属が1%越えて得られている。SK3では樹

表1 志羅山遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	SK2	SK3
<b>樹木</b>			
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	1
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	4	11
ヤナギ属	<i>Salix</i>	2	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	3	2
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	6	2
イスブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	3	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	12	10
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	1
クリ属	<i>Castanea</i>	14	94
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	2	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	11	1
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	7	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1	-
ジンチョウゲ科	<i>Thymelaeaceae</i>	1	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	1	-
<b>草本</b>			
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	1	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	53	66
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	9	29
クワ科	<i>Moraceae</i>	12	14
イブキトラノオ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	-	1
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	22	86
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	3
キンポウゲ科	<i>Ranunculaceae</i>	1	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	628	19
バラ科	<i>Rosaceae</i>	2	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	3	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	1
ナス属	<i>Solanum</i>	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	55	36
他のキク亜科	other <i>Tubuliflorae</i>	1	6
タンボボ亜科	<i>Liguliflorae</i>	1	2
<b>シダ植物</b>			
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	1	-
單条型胞子	<i>Monolete spore</i>	47	65
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	-	4
<b>樹木花粉</b>			
草本花粉	<i>Arboreal pollen</i>	71	123
シダ植物胞子	<i>Nonarboreal pollen</i>	790	265
花粉・胞子总数	Spores	48	69
	Total Pollen & Spores	909	457
<b>不明花粉</b>			
	Unknown pollen	37	56

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

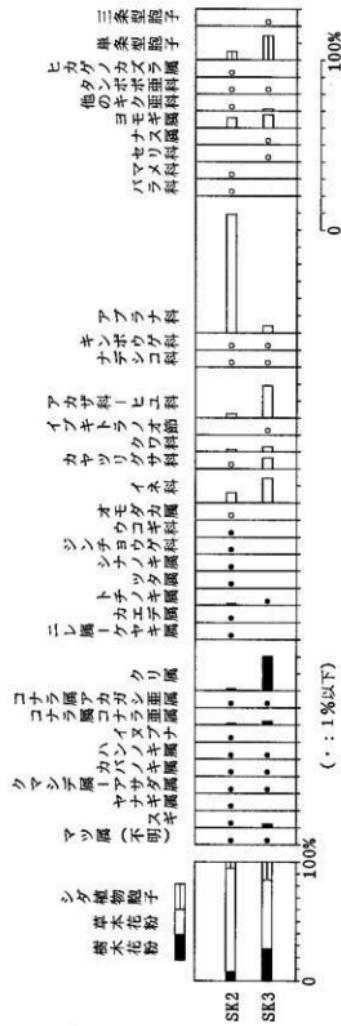


図1 志摩山遺跡の花粉化石分布図  
(出現率は全花粉・孢子総数を基準として百分率で算出した)

表2 試料1cc当たりの寄生虫卵個数

試料No.	全寄生虫卵	鞭虫卵	蛔虫卵	肝吸虫卵
SK2	10859	6561	4185	113
SK3	1366	546	820	0

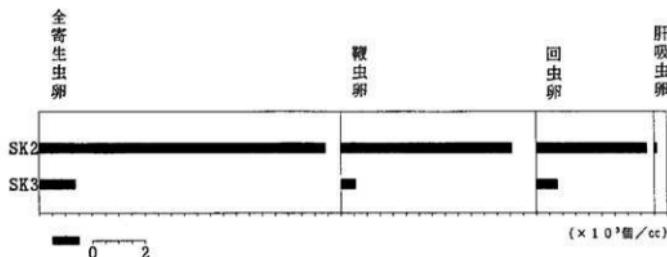


図2 寄生虫卵分布図

木のクリ属が最も多く観察されるものの他は少なく、草本のアザケ科ヒュ科、イネ科、ヨモギ属が目立つて検出されている。

### 3. 寄生虫卵分析結果

表2・図2に検出された寄生虫卵の1cc当たりの検出個数とその分布を示した。両試料とも寄生虫卵が認められ、SK2では約11,000個と非常に多く、そのなかでは鞭虫卵が最も多く、次いで回虫卵で、肝吸虫卵も少し観察された。SK3からは約1,400個の寄生虫卵が検出され、本土坑では回虫卵のほうが鞭虫卵よりも多く得られている。

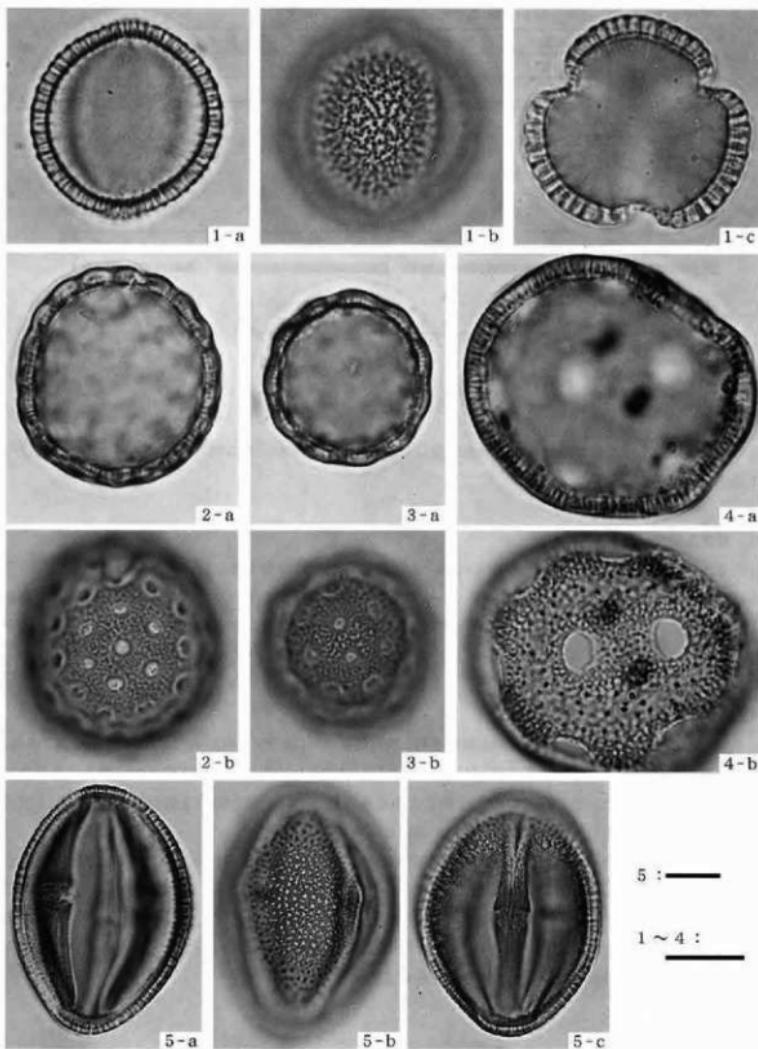
### 4. トイレ遺構について

上記したように両試料から寄生虫卵が検出され、検出個数はSK2が約11,000個、SK3が約1,400個である。これら寄生虫卵の検出数について金原（1997）は、「1cc中に1,000個以上あれば糞便の堆積といえるということがわかつた」と述べている。このことから考えるとSK2土坑とSK3土坑の両土坑とも、土坑の形状も考え合わせ、トイレ遺構である可能性が高いと判断されよう。

なお、鞭虫卵・回虫卵は野菜から、肝吸虫卵は淡水魚からの感染が考えられる（中村ほか、1994）。このうち花粉分析結果から食した野菜について、SK2ではアブラナ科が非常に多く検出されており、いわゆるアブラナやその他カブ・ダイコンなどが推測されるものの大型植物化石としては検出されておらず推測の域を脱し得ない。また、SK3ではアザケ科（アザケ・シロザなど）やヒュ科（ヒュなど）が食用として考えられ、種子が多く検出されているナス属も考えられよう。

#### （引用文献）

金原正明（1997）自然科学的研究からみたトイレ文化。トイレの考古学、大田区立郷土博物館編、東京美術、p.197-216。  
中村敏夫、佐藤淳夫、荒木恒治、辻 守康（1994）医学要點双書10 寄生虫病学 第2版、金芳堂、203p.



図版 1 志羅山遺跡 SK 2 遺構の花粉化石 (scale bar: 10  $\mu\text{m}$ )

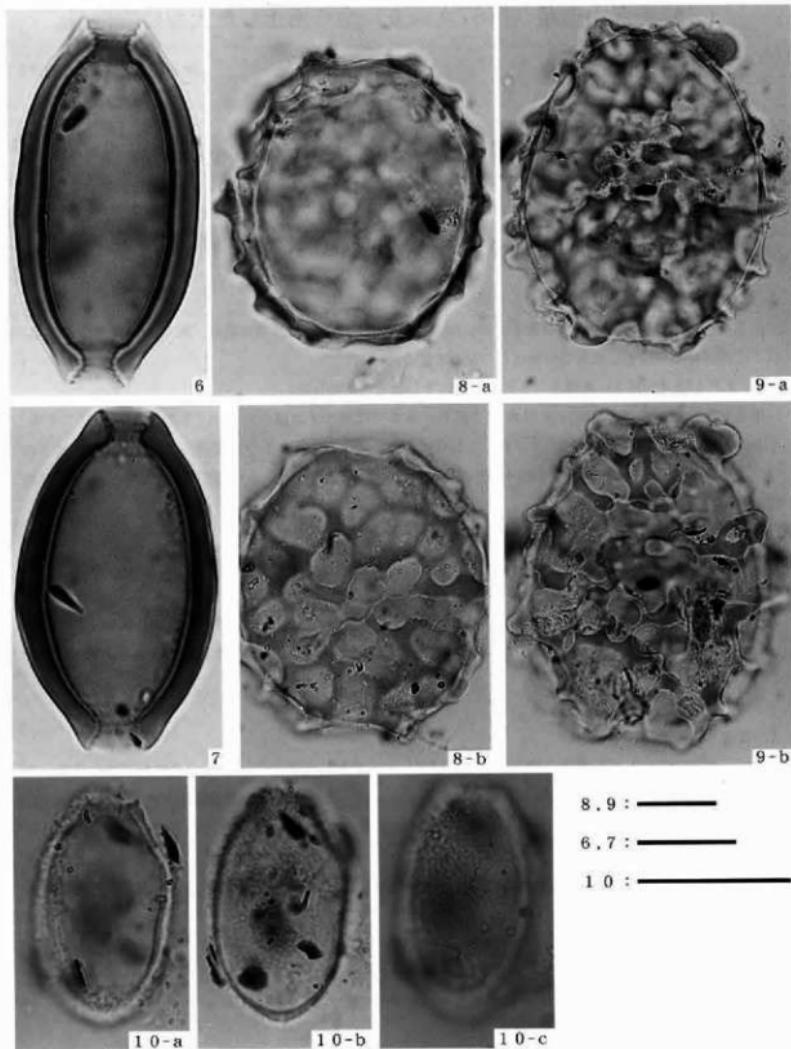
1 : アブラナ科 PLCSS 2227

4 : ナデシコ科 PLCSS 2230

2 : アカザ科-ヒユ科 PLCSS 2228

5 : ツタ属 PLCSS 2229

3 : アカザ科-ヒユ科 PLCSS 2229



図版2 志羅山遺跡の寄生虫卵 (scale bar: 20μm)

6 : 鞭虫卵 PLC.SS 2223 SK2

7 : 鞭虫卵 PLC.SS 2226 SK3

8 : 回虫卵 PLC.SS 2224 SK2

9 : 回虫卵 PLC.SS 2225 SK3

10 : 肝吸虫卵 PLC.SS 2233 SK2

8, 9 : ——————

6, 7 : ——————

10 : ——————

## (2) 志羅山遺跡（第67次調査）から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

### 1. 試料と方法

大型植物化石の検討を行った試料は、65区2号土坑（SK2）の埋土（3層）および68区3号土坑（SK3）の埋土（3層）の2試料である。両土坑ともトイレ遺構と考えられており、時代については出土遺物から12世紀と考えられている。

大型植物化石の採取は、試料約100ccを0.25mm目の篩を用いて水洗篩分けをすることにより行った。

### 2. 出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を表1に示した。両試料から出土した分類群数は、木本2、草本18である。以下に各試料から出土した大型植物化石の記載をする。

#### [65区2号土坑（SK2）の埋土（3層）から出土した大型植物化石]

出土した分類群数は、木本1、草本13である。木本ではキイチゴ属のみが出土した。草本では、イネ、イネ科、ホタルイ属、イボクサ、タデ科、シロザ近似種、カタバミ属、シソ近似種、エゴマ近似種、イヌコウジュ属またはシソ属、ゴマ、メロン仲間、メナモミが出土し、タデ科、シソ近似種、エゴマ近似種が比較的多産した。

#### [68区3号土坑（SK3）の埋土（3層）から出土した大型植物化石]

出土した分類群数は、木本1、草本11である。木本では、ニワトコのみが出土した。草本では、イネ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、タデ科、シロザ近似種、ナデシコ科、ヘビイチゴ属またはオランダイチゴ属またはキジムシロ属、シソ近似種、ナス、ナス属、メロン仲間が出土し、シロザ近似種、ナスが比較的多産した。イネは細かな破片のみが出土したが、破片から推定される個数は、未炭化穎が約3個分、炭化穎が約1個分である。

### 3. 栽培・利用状況

検討した2試料はトイレ遺構の埋土であり、出土した大型植物化石から12世紀の遺跡付近での栽培・利用状況（食生活）を推定することが可能と考えられる。出土したものの中栽培植物と考えられるものは、2号土坑（SK2）では、イネ、シソ近似種、エゴマ近似種、ゴマ、メロン仲間である。3号土坑では、イネ、シソ近似種、ナス、メロン仲間である。これらは当時、食用とされていたと考えられる。他に、3号土坑で多産したシロザ近似種なども栽培されていた可能性があり、キイチゴ属なども食用として利用可能である。

### 4. 大型植物化石の形態記載

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものを主に記載する。

#### イネ *Oryza sativa* Linn. 未炭化穎、炭化穎

未炭化と炭化の穎のみが出土した。穎の表面には、規則的に配列する独特的の顆粒状突起があり、破片であっても同定可能である。

表1 出上した大型植物化石（数字は個数、（ ）内は半分または破片の数）

分類群	部位	SK2(3層)	SK3(3層)
キイチゴ属	核	2	
ニワトコ	種子		1
イネ	木炭化穎	(3)	(11)
	炭化穎		(5)
イネ科	穎	(1)	
カヤツリグサ属	果実		1
ホタルイ属	果実	2	2
イボクサ	種子	1	
タデ科	果実	49	1
シロザ近似種	種子	4(2)	15
ナデシコ科	種子		3(1)
ヘビイチゴ属, オランダイチ	核		(1)
ゴム, またはキジムシロ属	種子	1	
カタバミ属	種子	12(3)	1
シソ近似種	果実	8(2)	
エゴマ近似種	果実	2	
イヌコウジュ属またはシソ属	果実		46(2)
ナス	種子		1
ナス属	種子	1(5)	
ゴマ	種子	1	1(3)
メロン仲間	種子	1	
メナモミ	果実		

タデ科 *Polygonaceae* 果実

黒色、両凸レンズ形で倒卵形。

シソ近似種 *Perilla frutescens* (L.) Britt. var. cf. *crispa* (Thunb.) Benth. 果実

卵形で表面には網目がある。大きさ1.7mm以上、2.0mm未満をシソ近似種とした。

エゴマ近似種 *Perilla frutescens* (L.) Britt. var. cf. *japonica* Hara 果実

大きさ2.0~2.2mmと特に大きなものをエゴマ近似種とした。イヌコウジュ属またはシソ属としたものは、大きさ1.4~1.5mmとやや小さなものである。

ナス *Solanum melongena* Linn. 種子

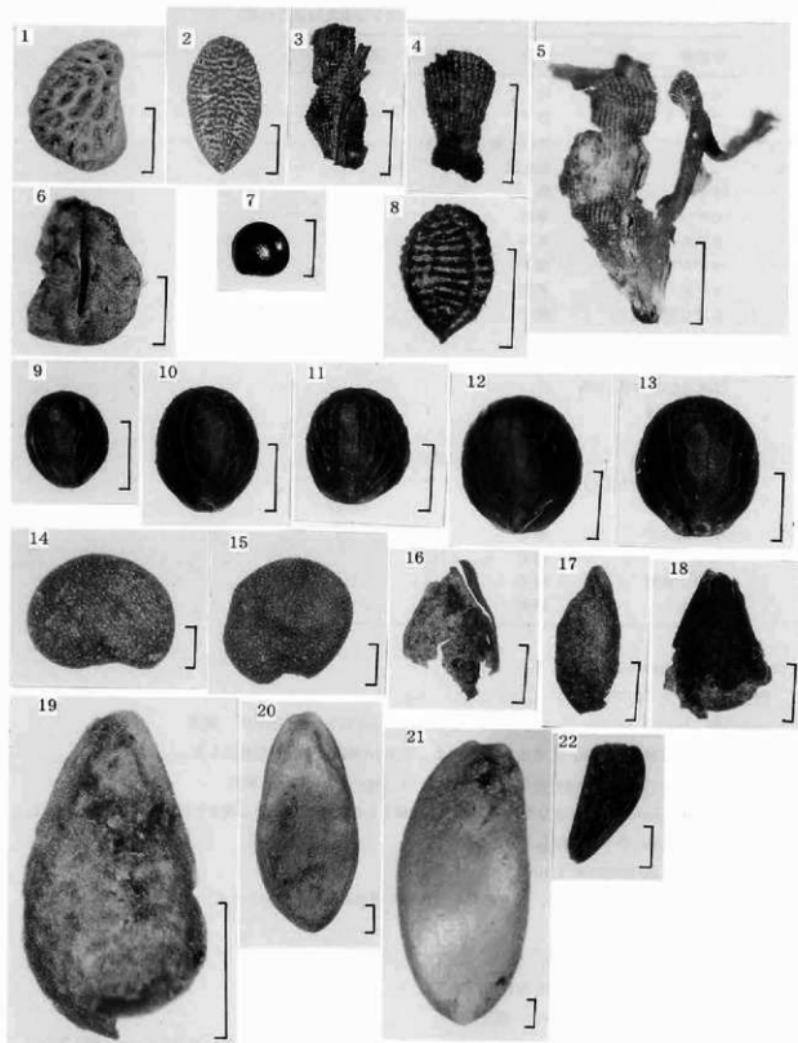
扁平な橢円形で表面は網目模様。野生のものに比べて網目のうねの部分が太く、大きさも3.0~3.8mmと大きい。

ゴマ *Sesamum indicum* Linn. 種子

扁平な卵形で表面には非常に細かな網目がある。

メロン仲間 *Cucurbita melo* Linn. 種子

薄い両凸レンズ形で、先がやや尖る長橢円形。2号土坑から出土したものは、長さ7.8mm、幅3.7mm。3号土坑から出土した完形は、長さ9.3mm、幅4.4mm。



図版1 出土した大型植物化石 (スケールは1mm)

1.キイチゴ属、核、SK2 2.ニワトコ、種子、SK3 3.4.イネ、炭化穂、SK3 5.イネ、未炭化穂、SK3 6.イボクサ、種子、SK2 7.シロザ近似種、種子、SK3 8.カタバミ属、種子、SK2 9.イヌコウジュ属またはシソ属、果実、SK2 10.11.シソ近似種、果実、SK2 12.13.エゴマ近似種、果実、SK2 14.15.ナス、種子、SK3 16~19.ゴマ、種子、SK2 20.メロン仲間、種子、SK2 21.メロン仲間、種子、SK3 22.メナモミ、果実、SK2

志羅山遺跡第67次調査

写 真 図 版



写真図版 1 遠訪遠賀(南から)

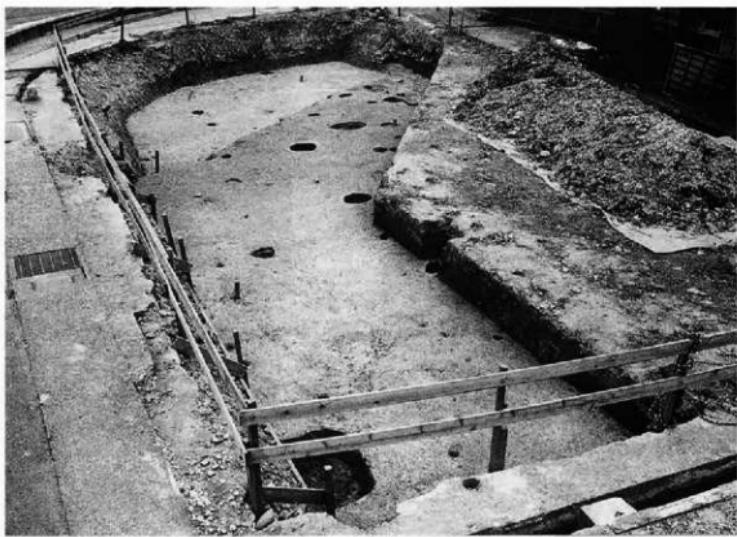


写真図版2 通路上空(南から)





調査区近景

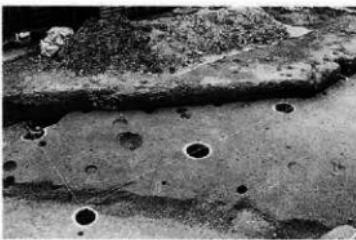


1区全景

写真図版3 調査区近景 1区(1)



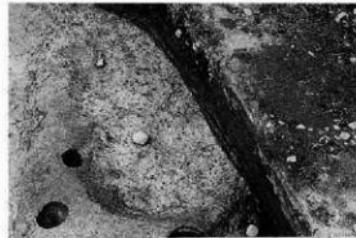
南壁土层断面



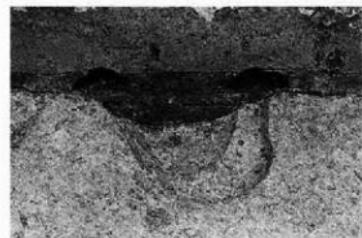
据立柱建物跡 1号



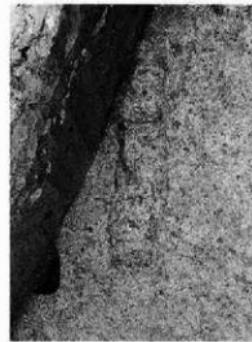
土坑 1号完掘



土坑 2号完掘



土坑 3号完掘



溝跡 1号完掘



土坑 4号完掘



溝跡 1号断面

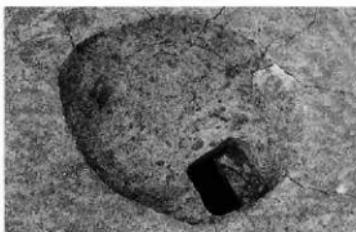
写真図版 4 1区(2)



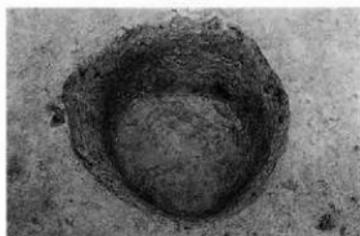
65区全景



西壁土层断面



土坑1号完掘



土坑2号完掘



土坑2号断面



土坑4号完掘



土坑4号断面

写真図版5 65区(1)



土坑 6 号完照



土坑 6 号断面



溝跡 1 号完照



溝跡 1 号断面



溝跡 1 号挖出



Aa-Aa'断面



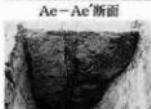
Ac-Ac'断面



Ae-Ae'断面



Ag-Ag'断面



Al-Al'断面



Ak-Ak'断面



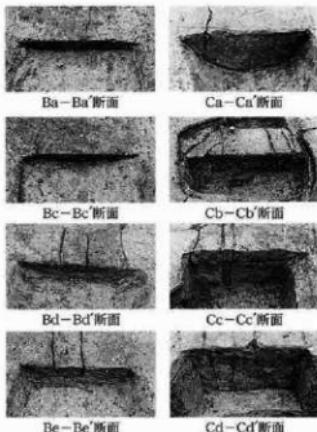
Am-Am'断面



Ao-Ao'断面



断跡2号(タ子)・断跡3号(ヨコ)検出



Be-Be'断面

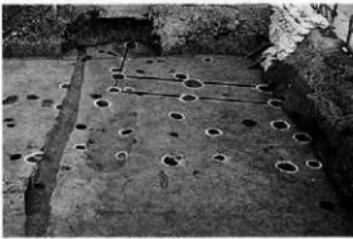
Cd-Cd'断面



66区全景

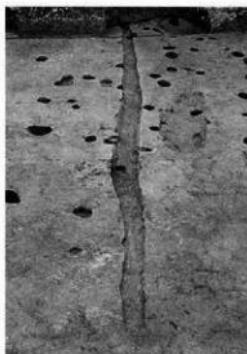
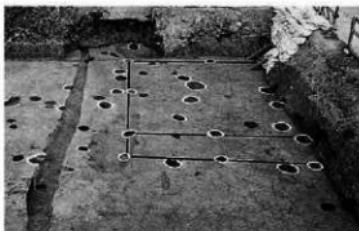


北壁土層断面



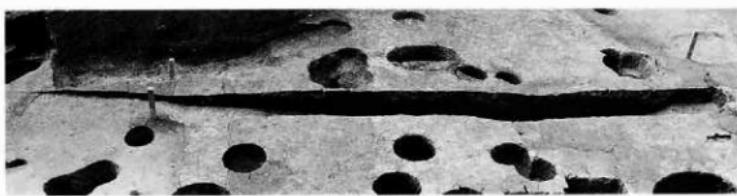
掘立柱建物跡1号

写真図版7 65区(3)・66区(1)





68区全景



トレンチ断面（整地断面）



西壁土断面



作業風景



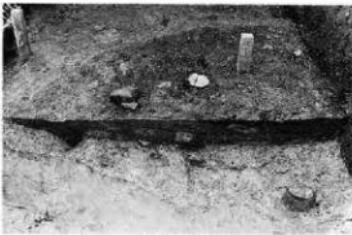
掘立柱建物跡 1号



掘立柱建物 2号



土坑1号完掘



土坑1号断面



土坑3号断面



土坑4号完掘



溝跡1号完掘



溝跡1号断面



溝跡 2号完掘



溝跡 3号完掘



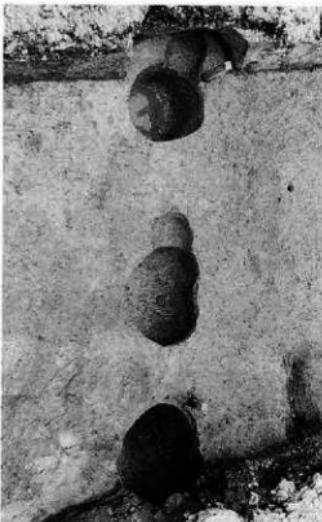
溝跡 2号断面



溝跡 3号断面



69区全景



柱穴列1号完掘



69区東壁土層断面



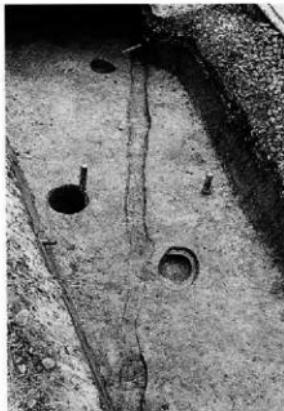
70区土坑1号完掘



70区全景



71区全景



溝跡 1号完掘



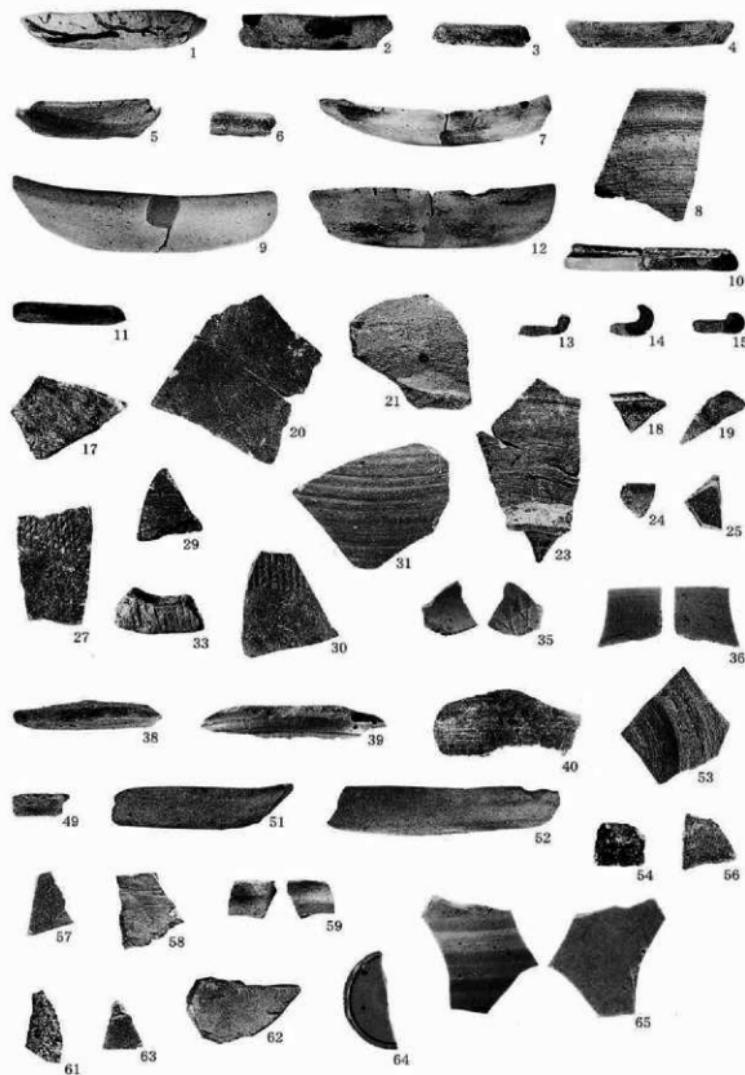
溝跡 1号断面



溝跡 2号完掘



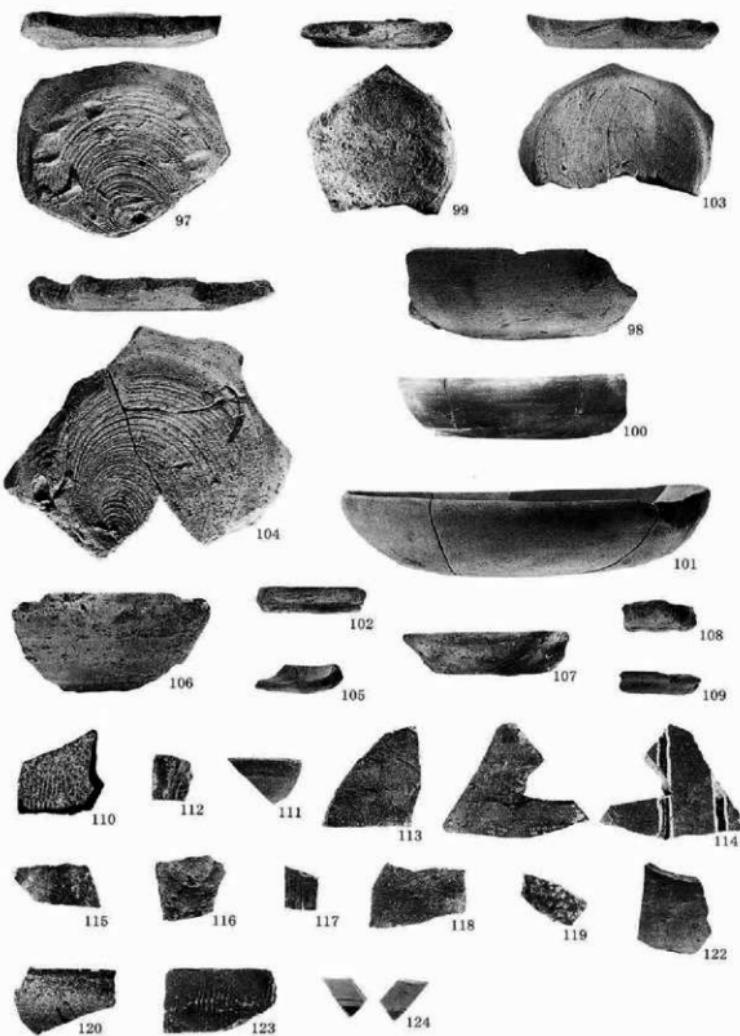
溝跡 2号断面



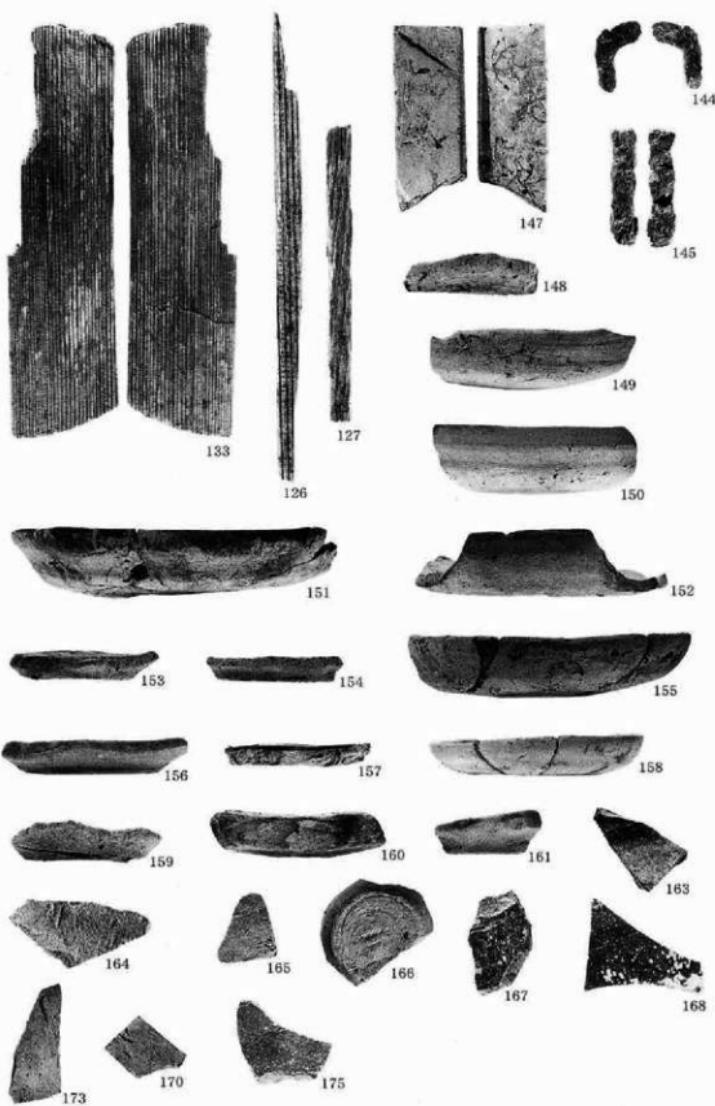
写真図版14 出土遺物(1)



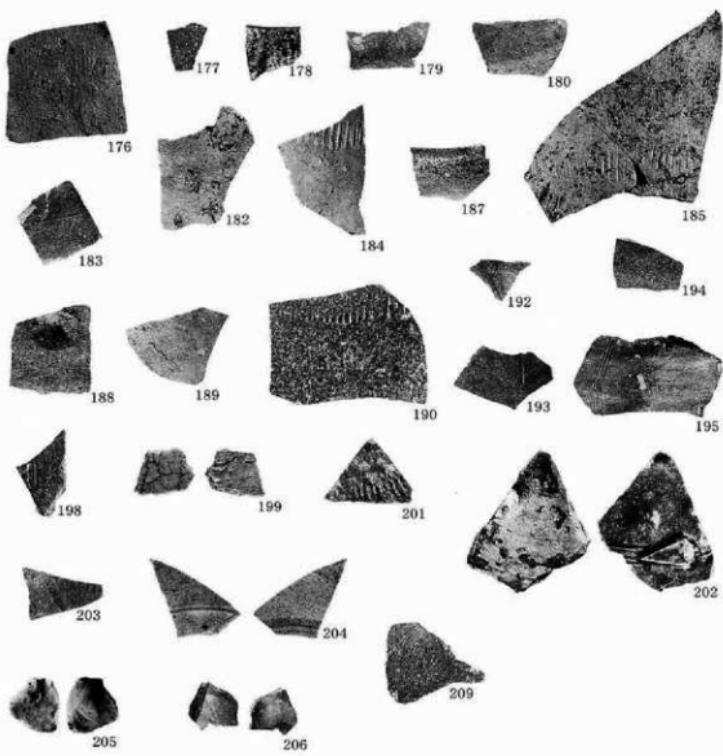
写真図版15 出土遺物(2)



写真図版16 出土遺物(3)

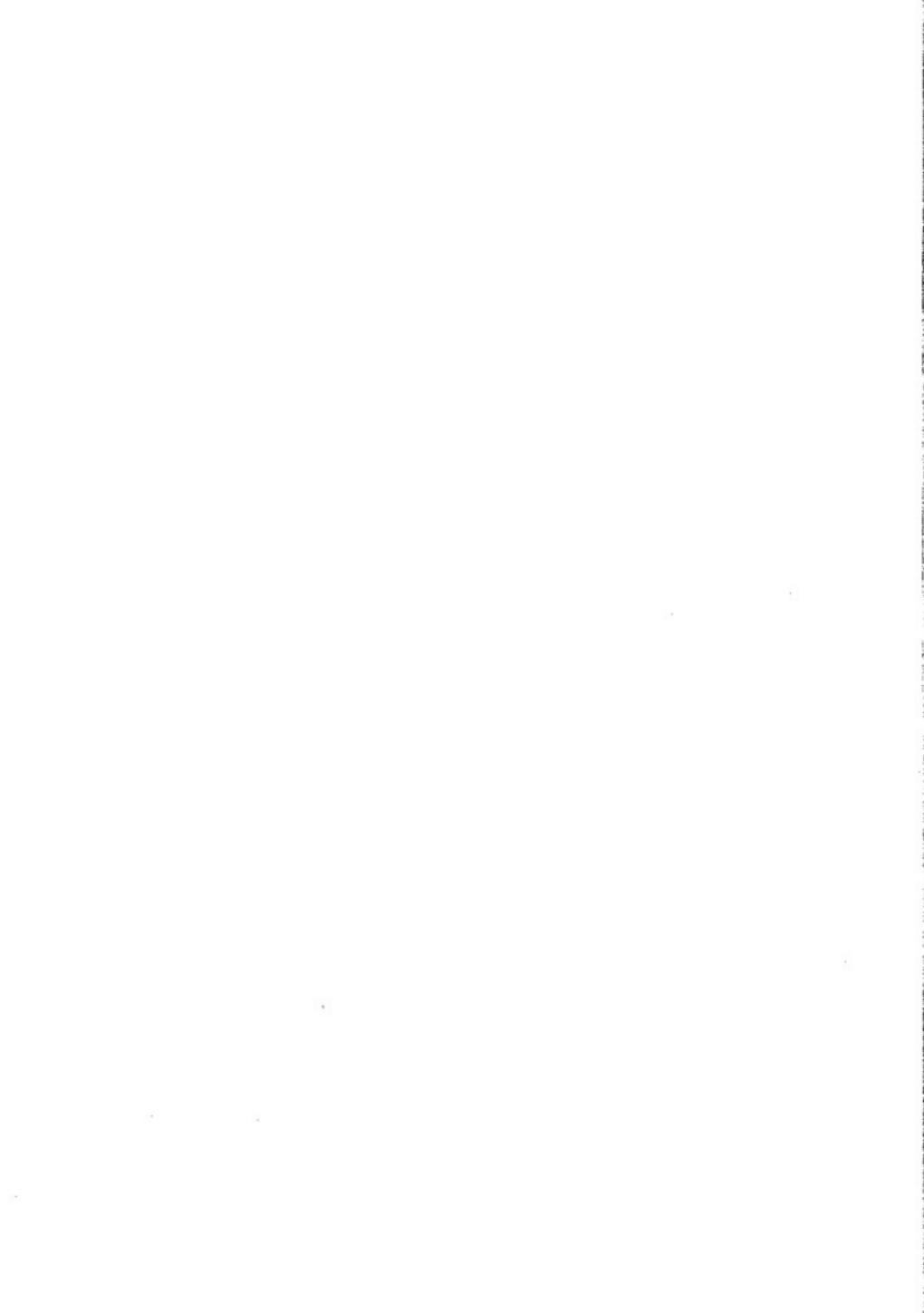


写真図版17 出土遺物(4)



写真図版18 出土遺物(5)

# **志羅山遺跡第73次調查**



## VII. 第73次調査の報告

### 1. 調査・整理の方法

#### (1) 野外調査について

##### ①グリッドの設定

第73次調査においては、第67次調査で設定したグリッドを継続利用して調査を行った。グリッド配置は、第67次調査本文中に図示している。

##### ②遺構の呼称

遺構の呼称についても、第67次調査と同様に以下のような略号を調査区毎に付し、通し番号を与えて呼称した。

S A…溝跡 S D…溝跡 P P…柱穴

#### (2) 室内整理について

##### ①遺構の軸線方向の記載

溝の軸線方向は、水が流れる方向（溝底の傾き）とは関係なく、平面形における溝跡底中央線から公共座標第X系の北から東または西への傾き度を表示した。また、壇の軸方向は、平面形における布堀り底面中央線から公共座標第X系の北から東への傾きを表示した。

### 2. 基本層序

基本層序については、ほぼ次のような上層が順に堆積している（I～III層の大別は第67次調査に対応しているが、a・b等の記号については対応させていない）。

I a層 黄褐色土（盛土） 厚さ20～55cm前後 住居撤去後の盛土

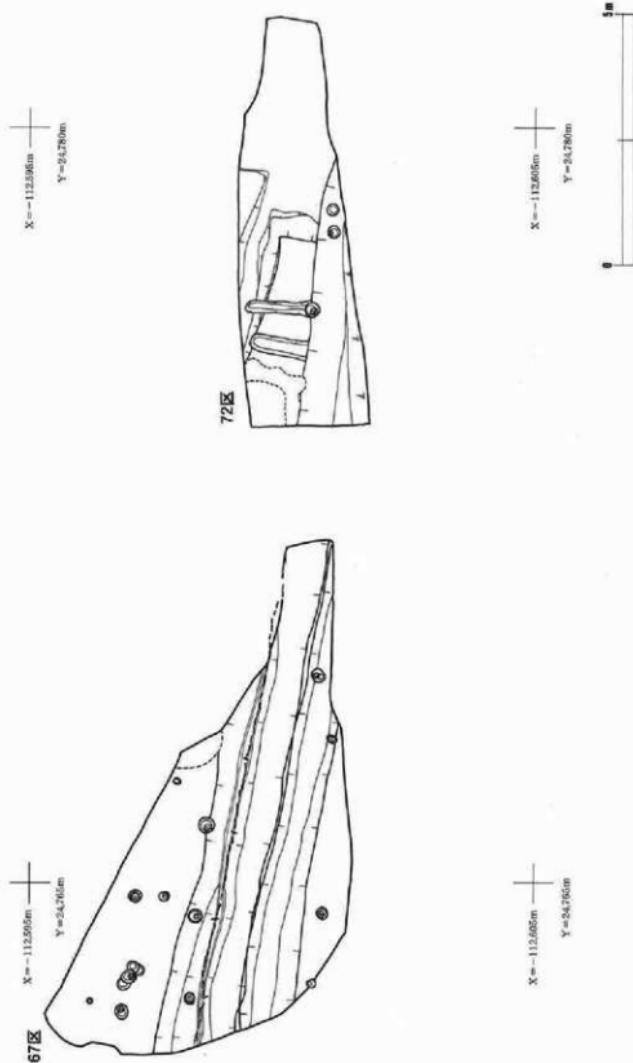
I b層 暗褐色土（盛土） 層厚35～75cm前後

II a層 緑黒～灰オリーブ色土（旧水田耕作層） 層厚10～25cm前後 粘性有り・締まりやや軟 酸化鉄分微量集積

II b層 黒色土 層厚20～40cm 粘性大・締まりやや軟

III 層 黄褐色粘土層（地山） 層厚不明 検出時は青灰色であるが、徐々に黄褐色に変化する

△



第1図 第73次調査造構配置図

### 3. 検出された遺構と出土遺物

#### (1) 67区（第2図、写真図版1）

位 置 国道4号と県道毛越寺線との交差点における北東側、旧旭屋鮮魚店に位置する。

検出遺構 堀跡1条、溝跡2条、柱穴17基である。

##### 67区堀跡1号

遺構（第3～4図、写真図版2～4）

〈位置・検出状況〉 18H～18J、19Jに位置する。Ⅲ層上面で検出した。木造構の下に重なるように67区溝跡2号が検出されている。また、67区溝跡1号と重複関係にあり、ともに本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は20.0m、軸線の傾きはN-100°-E、右堀りの開口部幅116～152cm、底部幅10～12、深さ22～46cmである。

〈覆土・堆積状況〉 堀板材及び辦板材痕跡部分と掘り方の2層からなり、ともに黒褐色粘性シルトを主体とし、緑灰色地山ブロックが混入する覆土である。

〈壁・底面〉 壁は比較的緩やかに外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

出土遺物（第9～24～26図、写真図版10・37～39） かわらけ、国産陶器、中国産磁器、金属製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した2点（手づくね1点・ロクロ1点、登録No.1～2…以下登録略）を含め、4号ビニール袋約6袋分（約3.0kg）が出土した。

国産陶器 常滑産が8点、渥美産が4点出土した（No.3～14）。

木製品 堀板材が54枚出土した（No.1～54）。

種子 モモが10点出土した。

粘土 粘土塊が1点（9.81g）出土した。

時期 12世紀に属する。

##### 67区溝跡1号

遺構（第5図、写真図版1）

〈位置・検出状況〉 18H～18I、19H～19Jに位置する。Ⅲ層上面で検出した。67区堀跡1号と重複関係にあり、本遺構が新しい。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は9.86mで、軸線方向はN-103°-Eである。開口部幅78～106cm、底部幅30～48cm、深さ36cmである。

〈覆土・堆積状況〉 黒色土～オリーブ黑色土主体の3層からなる。1層は人為堆積の様相を、2・3層は自然堆積の様相を呈する。

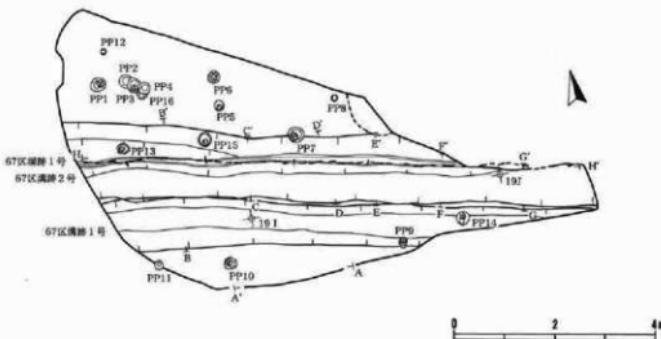
〈壁・底面〉 壁は比較的緩やかに外傾し、断面形は浅皿状を呈する。

出土遺物（第9～11図、写真図版10～17） かわらけ、国産陶器、中国産磁器、木製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した44点（手づくね40点・ロクロ3点・内折1点、No.15～58）を含め、4号ビニール袋約36袋分（約17.9kg）が出土した。

67区

181



A —————— A' L=26.000m

### 柱穴列1号



- 现代の堆土 2.5Y6/3に近い黄 脱落物去後の盛土
- 現代の堆土 10YR2/3暗黒色 水酸化鉄分微量・粘化物(2.3mm大)無量
- 細粒土・緑色 7.5Y4/2灰色オリーブ土10% 水酸化鉄分少量・粘化物微量 粘性大・締まりやや硬
- 10Y2/1黒色粘土 水酸化鉄分少量・炭化物粒(2~5mm大)少量 粘性大・締まりやや軟 かわらけ片含む(下部はどぶ)



191

### 67区柱穴計測表

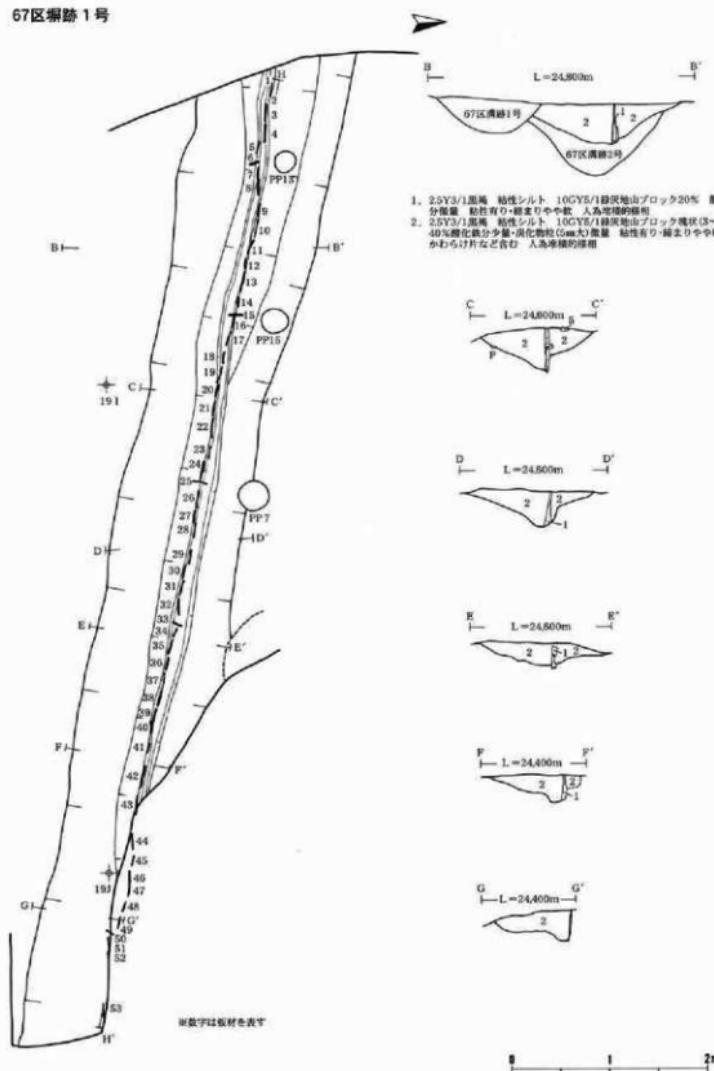
No.	底標(cen)	頂高(cen)	備考
PP1	30×26	47	
PP2	26×(26)	12	PP3と重複, PP2が旧
PP3	27×25	51	PP2, PP4と重複, PP3が新
PP4	26×(25)	29	PP3, PP16と重複, PP3より新
PP5	21×20	22	
PP6	24×22	12	
PP7	31×31	18	67区溝跡1号と重複, PP7が新
PP8	14×14	8	
PP9	22×15	15	67区溝跡1号と重複, PP9が新
PP10	26×22	41	
PP11	18×16	40	
PP12	13×16	3	
PP13	22×21	42	67区溝跡1号と重複, PP13が新
PP14	26×28	30	67区溝跡1号と重複, PP14が旧
PP15	28×26	26	67区溝跡1号と重複, PP15が新
PP16	22×(23)	18	PP4と重複, PP16が新

※ ( )は推定値

0 1 2m

第2図 67区(1)

67区探跡1号

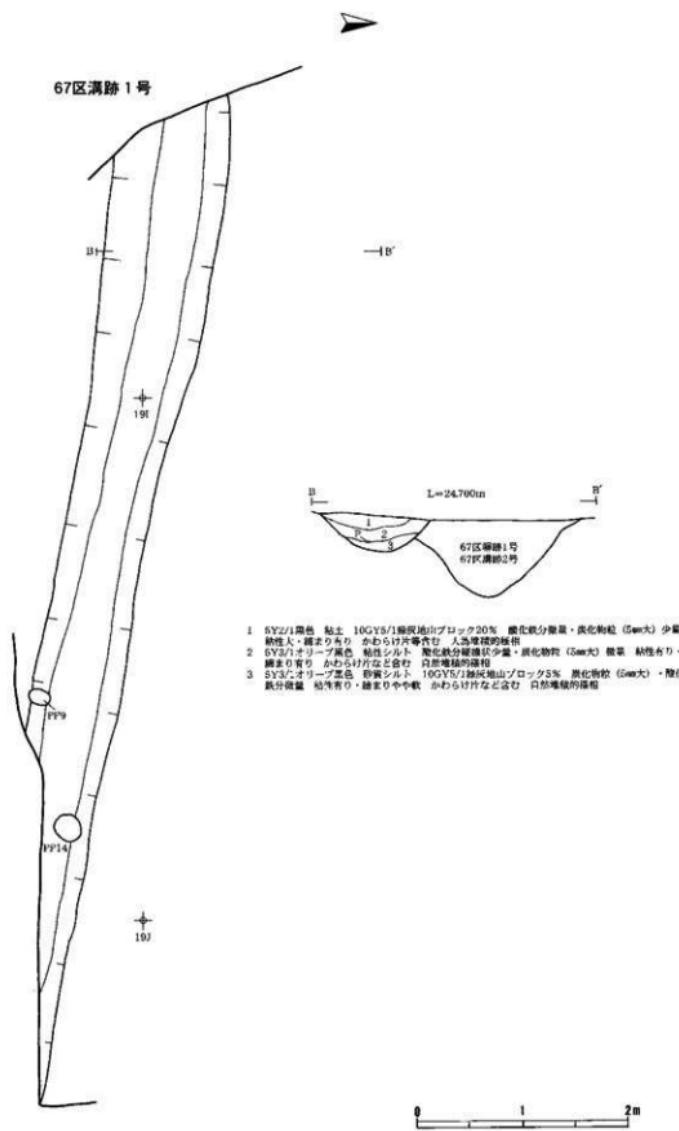


第3図 67区 (2)

67区烟路1号



#### 第4図 67区(3)



第5図 67区 (4)

国産陶器 常滑産が25点、渥美産が1点出土した（№59～84）。

中国産磁器 白磁が3点出土した。碗1点と四耳壺の頸部・底部各1点である（№85～87）。

木製品 漆塗椀が1点出土した（№88）。

種子 モモが19点出土した。

粘土 粘土塊が15点（155.83g）出土した。

時期 12世紀に属する。

## 67区溝跡2号

遺構（第6図、写真図版5～6）

〈位置・検出状況〉 18H～18I、19H～19Jに位置する。67区溝跡1号精査中に sondage下部から sondageに重なるように検出された。本遺構が古い。

〈平面形・規模〉 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は20.0m、軸線の傾きはN-102°-E、開口部幅116～152cm、底部幅17～35cm、深さは検出面から74cmで、67区溝跡1号底面から32cmである。

〈覆土・堆積状況〉 黒褐色土に緑灰色地山ブロックの2層からなり、ともに自然堆積の様相を呈する。1層は水分に富む粘土質の有機質腐植上の覆土である。2層は砂質分に富む粘土質の覆土である。

〈壁・底面〉 壁は緩やかに外傾し立ち上がる。断面形は浅皿状を呈する。

出土遺物（第11～14図、写真図版16～23） かわらけ、国産陶器、木製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した22点（手づくね19点・ロクロ3点、№89～110）を含め、4号ビニール袋約13袋分（約6.4kg）が出土した。

国産陶器 渥美産が5点（№111～115）出土した。

木製品 全部で40点出土した（№116～155）。連衡下駄が2点（№118・155、樹種はそれぞれケヤキ、トチノキ）、曲物が1点（№151、樹種はスギ）、箸が1点（№145、樹種はヒノキ属の一種）の他は、明確な用途は不明である。

種子 モモが12点出土した。

粘土 粘土塊が2点（約32.37g）出土した。

時期 12世紀に属する。

遺構外出土遺物（第14～15図、写真図版23～24） かわらけ、国産陶器、中国産磁器、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した5点（手づくね1点・ロクロ1点・内折3点、№158～162）を含め、4号ビニール袋約15袋分（約7.6g）が出土した。

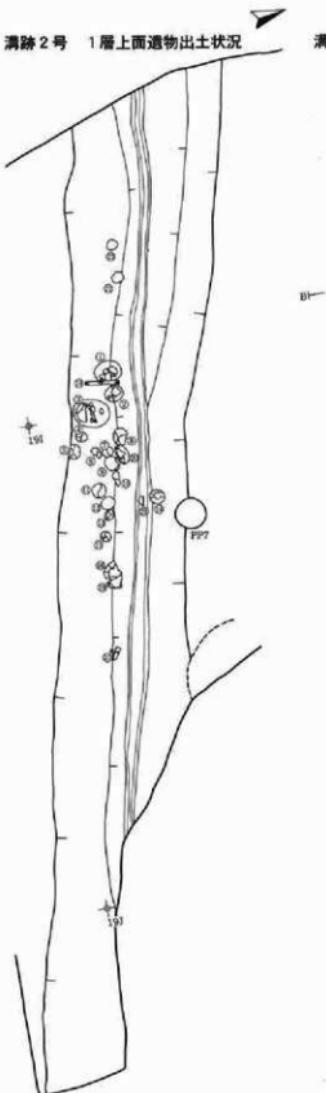
国産陶器 常滑産が21点、渥美産が5点、その他が1点（15世紀中頃の古瀬戸の瓶子）出土した（№163～189）。

中国産磁器 白磁が2点（№190～191）出土した。器種は碗と四耳壺である。

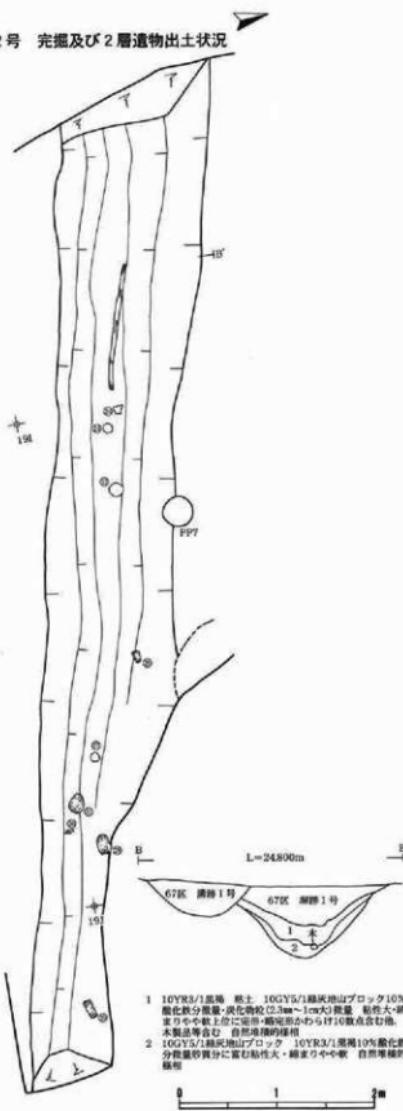
種子 モモが1点出土した。

粘土 粘土塊が4点（31.62g）出土した。

溝跡2号 1層上面遺物出土状況



溝跡2号 完掘及び2層遺物出土状況



第6図 67区(5)

## 67区のまとめ

67区では、67区溝跡1号、67区溝跡2号、67区堀跡1号の3条が検出された。切り合い関係から遺構の新旧は、67区溝跡2号→67区堀跡1号→67区溝跡1号となる。溝跡の時期については、出土遺物等から12世紀後半に属するものと思われる。

67区溝跡1号は、第56次調査における28区溝跡1号と同一の溝と思われる。軸線方向に加え、規模及び覆土等が似通った特徴を示す。

67区溝跡2号は、67区堀跡1号の精査途中で、堀跡埋土下部から堀跡に重なり合うように検出された。溝跡がある期間使用した後人為的に廃絶し、崩に転用したものと判断した。67区溝跡2号の1層上位（67区堀跡1号埋土直下に相当）、すなわち崩に転用される直前の層では、完形または略光形のかわらけが10数点出土している。

67区堀跡1号は、軸線方向に沿うタテ方向の板材とそれに直角のヨコ方向の板材を組み合わせた構造の堀跡である。確認できた板材は54枚で、タテ方向の板材が49枚、ヨコ方向の板材が5枚である。ヨコ板材の間隔は、推定部分を含め西から150cm、166cm、151cm、141cm、180cmで、平均すると約158cmとなる。その間のタテ板材の検出数はそれぞれ8枚、9枚、7枚、8枚、8枚である。

また、67区堀跡1号に対応する可能性のある堀跡が第67次調査の65区、66区において検出されている。65区堀跡1号と66区堀跡2号が土地あるいは屋敷を区画する可能性については第67次調査のまとめで述べているが、67区堀跡1号のN-100°-Eは、65区堀跡1号の軸線方向Nと一致する。整理すると、67区堀跡1号が区画の北辺にある崩、65区堀跡1号が区画の南辺、66区堀跡2号が区画の東辺にあると想えることができる。北辺の67区堀跡1号と南辺の65区堀跡1号の間隔は約34mとなる。この区画の西辺は、56次調査28区と67次調査1区の両調査区から該当する遺構が検出されていないことから国道4号の下に存在するものと思われる。

この区画が何に間に接する区画であるかということについては、後述の遺構のまとめ及び67次調査のまとめで述べているが、おそらく屋敷に伴う区画であろうと思われる。掘立柱建物跡は当センター調査区検出分の掘立柱建物跡に加え、隣接の平泉町文化財センター調査区においても数棟検出されている。遺構の詳細な時期は今後さらに検討が必要と思われるが、12世紀に属する遺構として井戸跡が66区井戸状遺構1号、便所跡が66区土坑2号をはじめ、土坑等も区画内に存在しており、屋敷跡の存在を窺わせている。

## （2）72区（第7図、写真図版7）

位 置 国道4号と県道毛越寺線との交差点における北東側、旧旭屋鮮魚店駐車場に位置する。

検出遺構 溝跡3条、池状遺構1ヶ所、柱穴3基である。

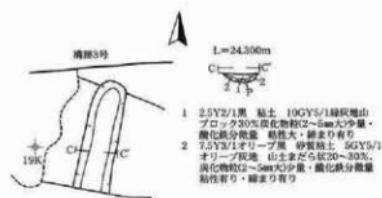
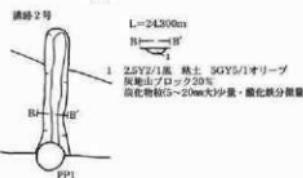
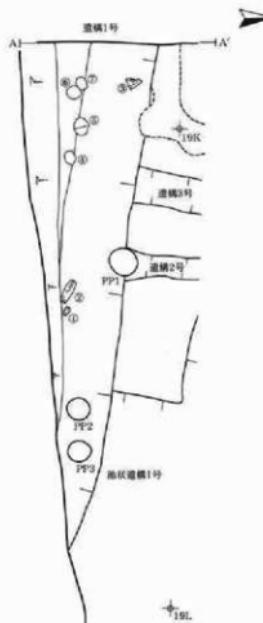
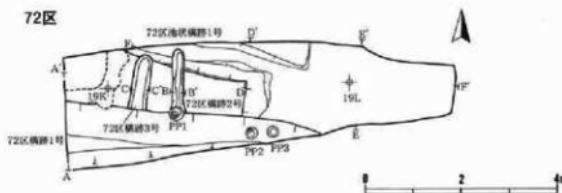
### 72区溝跡1条

遺構（第7図、写真図版7）

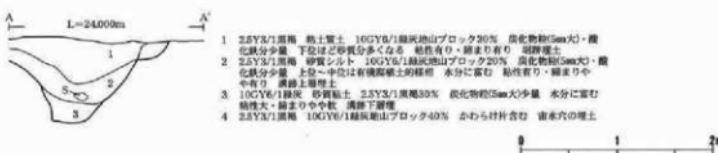
（位置・検出状況） 19J～19Kに位置する。Ⅲ層上面で検出した。67区に続き堀板材の出土が予想されたが出土しなかったため、単に溝跡として命名した。本遺構は72区溝跡2号、72区溝跡3号、72区池状遺構1号と重複し、すべて本遺構が新しい。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は5.3mで、軸線方向はN-98°-Eである。開口部幅は74cm以上、底部幅40cm、深さは検出面から88cmである。

72区



No.	周囲(cm)	深さ(cm)	地 質
PP1	30×30	28	72区油状1号と重複。PP1が割?
PP2	24×24	37	72区油状1号と重複。PP2が割?
PP3	24×22	25	72区油状1号と重複。PP3が割?



第7図 72区(1)

（覆土・堆積状況） 3層からなり、黒褐色土を基調に緑灰色土地山ブロックが混入する覆土である。上位1層は板材及び板痕跡は検出されなかったが、実質痕跡の覆土である。2、3層は水分に富む他、特に2層上位～下位は有機質腐植土の様相を呈する。

（壁・底面） 北壁は外傾して立ち上がり、南壁は不明であるため、断面形は不明であるが、底面が平坦であることから逆台形状が予想される。

出土遺物（第15～16図、写真図版24～27） かわらけ、国産陶器、木製品、種子、粘土が出土した。

かわらけ 登録した13点（手づくね10点、ロクロ3点、№192～204）を含め、4号ビニール袋約9袋分（約4.6kg）が出土した。

国産陶器 常滑産が10点、渥美産23点出土した（№205～237）。

木製品 13点出土した（№238～250）。箸？が1点（№250、樹種はスギ）の他は、明確な用途は不明である。

種子 モモが6点出土した。

粘土 粘土塊が1点（約11.627g）出土した。

時期 12世紀に属する。

## 72区溝跡2条

遺構（第7図、写真図版8）

（位置・検出状況） 18K～19Kに位置する。Ⅲ層上面で検出した。72区溝跡1号と、72区池状遺構1号と重複し、72区溝跡1号より古く、72区池状遺構1号より新しい。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は130cmで、軸線方向はN-6°～Eである。開口部幅22cm、底部幅6～12cm、深さ7cmである。

（覆土・堆積状況） 黒色土にオリーブ灰色土地山ブロックが混入する覆土である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

出土遺物（第16図、写真図版27～28） かわらけ、国産陶器が出土した。

かわらけ 登録した2点（手づくね2点、№251～252）を含め、4号ビニール袋0.6袋分（約0.3kg）が出土した。

国産陶器 渥美産が5点（№253～257）出土した。

時期 12世紀に属する。

## 72区溝跡3号

遺構（第7図、写真図版8）

（位置・検出状況） 18K～19Kに位置する。Ⅲ層上面で検出した。本遺構は72区溝跡1号、72区池状遺構1号と重複し、72区溝跡1号より古く、72区池状遺構1号より新しい。

（平面形・規模） 平面形はほぼ真っ直ぐに延びる線状である。検出長は116cmで、軸線方向はN-12°～Eである。開口部幅36cm、底部幅20～22cm、深さ9cmである。

（覆土・堆積状況） 2層からなり、黒～オリーブ黑色土に緑灰～オリーブ灰色地山ブロックが混入する覆土である。

（壁・底面） 壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状を呈する。

**出土遺物** (第17図、写真図版28) かわらけ、国産陶器が出土した。  
かわらけ かわらけの縞片が4号ビニール袋0.3袋分(約0.14kg)が出土した。  
**国産陶器** 混美産が3点 (No.258~260) 出土した。  
**時期** 12世紀に属する。

#### 72区池状遺構1号

**遺構** (第8図、写真図版9)

**〈位置・検出状況〉** 18K~18L、19K~19Lに位置する。直層上面で検出した。72区溝跡1号、72区溝跡2号、72区溝跡3号と重複し、本遺構が古い。

**〈平面形・規模〉** 溝状部分と低地部分からなり、溝状部分は導水路、低地部分は池と思われる。全体形は不明である。溝状部分の軸線方向はN-101°-E~N-108°-Eで、開口部幅82cm以上、底部幅22~35cm、深さ24cmである。低地部分の汀線は標高24.1m前後で、検出された範囲内における最大の深さは42cmである。

**〈覆土・堆積状況〉** 2層からなり、ともに黒褐色土に緑灰色土地山ブロックが斑状に混入する覆土である。  
**〈壁・底面〉** 溝状部分の南壁はやや緩く外傾して立ち上がる。北壁は不明である。池状部分は遺構の全体が検出されていないため壁、断面形とも不明である。

**出土遺物** (第17~22図、写真図版28~35) かわらけ、国産陶器、木製品、種子、粘土が出土した。  
かわらけ 登録した11点(手づくね10点・ロクロ1点、No.261~271)を含め、4号ビニール袋約6.5袋分(約3.2kg)が出土した。

**国産陶器** 常滑産が36点、混美産が157点出土した (No.272~464)。  
**木製品** 11点出土した (No.466~476)。漆塗椀が5点 (No.466~467、474~476)、曲物が5点 (No.468~472)、用途不明が1点である。

**種子** モモが2点、種類不明が1点出土した。  
**粘土** 粘土塊が31点(約382.96g)出土した。

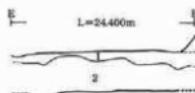
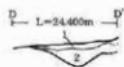
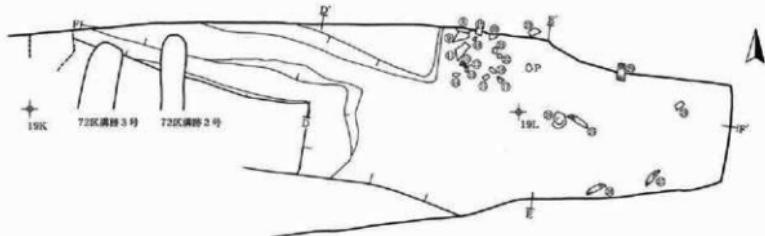
**時期** 12世紀に属する。

**遺構外出土遺物** (第22~23図、写真図版35~37) かわらけ、国産陶器、粘土が出土した。  
かわらけ 登録した2点(手づくね2点、No.477~478)を含め、4号ビニール袋約4袋分(約2.1kg)が出土した。  
**国産陶器** 常滑産が4点、混美産が33点出土した (No.479~515)。  
**粘土** 粘土塊が1点(13.64g)出土した。

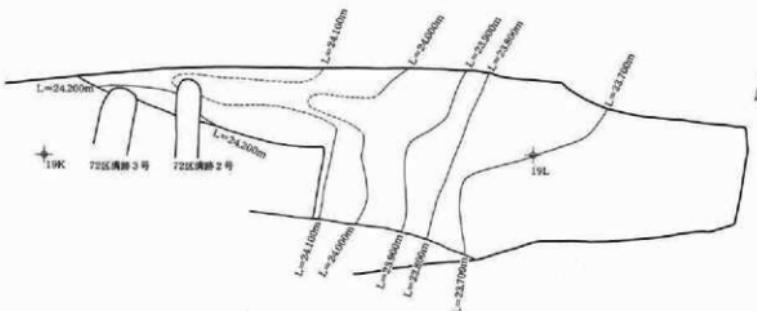
#### 72区のまとめ

72区では溝跡3条、池状遺構1ヶ所が検出され、時期はすべて12世紀に属するものと思われる。  
72区溝跡1号は、67区の調査結果から67区溝跡1号及び67区溝跡2号の延長部分が検出され、解板材の出土が予想されたが、掘り方部分の人為的埋土は確認されたものの、板材および板痕跡は検出されなかった。  
72区溝跡2号、72区溝跡3号は、切り合い関係から72区溝跡1号より古いものと思われる。軸線はそれぞれN-6°-E、N-12°-Eであり、72区溝跡1号に直交するように位置する。規模、覆土の様相等

池状遺構 1号



- 1 2.5Y3/1底面 粘土 SG5/1段灰地山ブロックまだら状40% 灰化物質(2.3mm以下)・炭化物分量、粘性大・細まりやや軟。
- 2 2.5Y3/1底面 砂質粘土 SG5/1段灰地山ブロックまだら状 10~15% 灰化物質(2.3mm以下)・炭化物分量、水分に富む粘性大・細まり無し

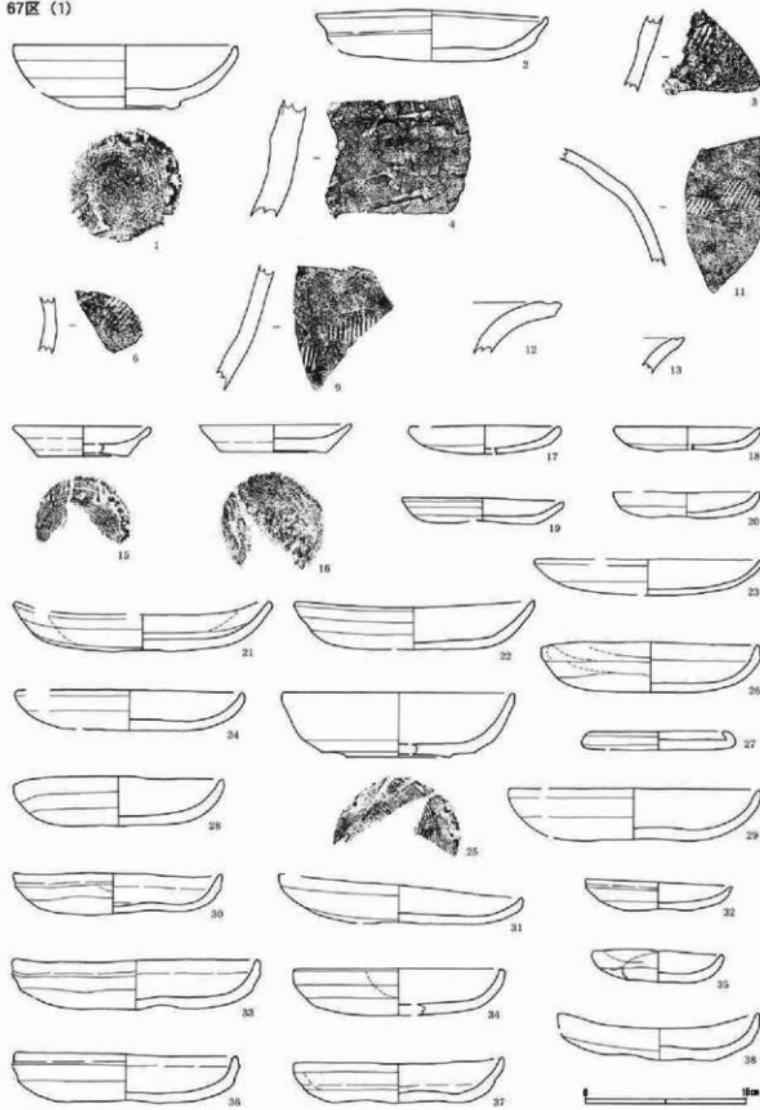


第8図 72区 (2)

似通っている。

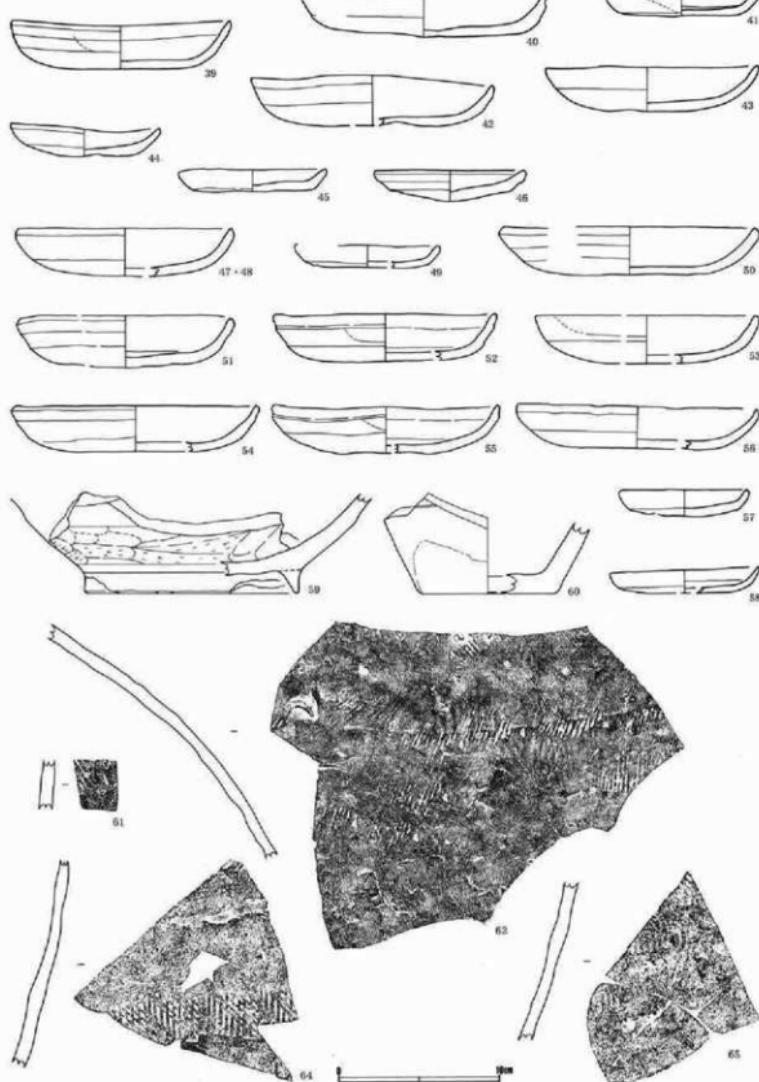
72区池状遺構1号は、西側の溝状部分と東側の低地部分からなる。溝状部分は池上にあたる導水路、低地部分は池跡にあたると思われる。調査範囲が狭いため遺構の全体形は不明である。排水路及び池尻は検出されなかった。溝状部分の軸線方向はN-101°-E～N-108°-Eで、開口部幅82cm以上、底部幅22～35cm、深さ24cmである。約3度の傾斜角をもち、水は東流する構造となる。溝状部分の南壁はやや緩く外傾して立ち上がる。北壁は不明である。低地部分の汀線は標高24.1m前後で、検出された範囲内における最大の深さは検出面から42cmである。池状部分の範囲内では約2度の傾斜角をもつ。また、溝状部分から池状部分の傾斜角は21度である。出土遺物については、すべて12世紀に属するものである。かわらけは完形品ではなく破片が多く、国産陶器は他の遺構に比べ多量に出土している。この第73次調査終了後に、隣接地の調査が平泉町文化財センターによって行われ、雀塔婆が数点出土していることから、儀礼的な性格を持つ池であった可能性もある。

67区(1)



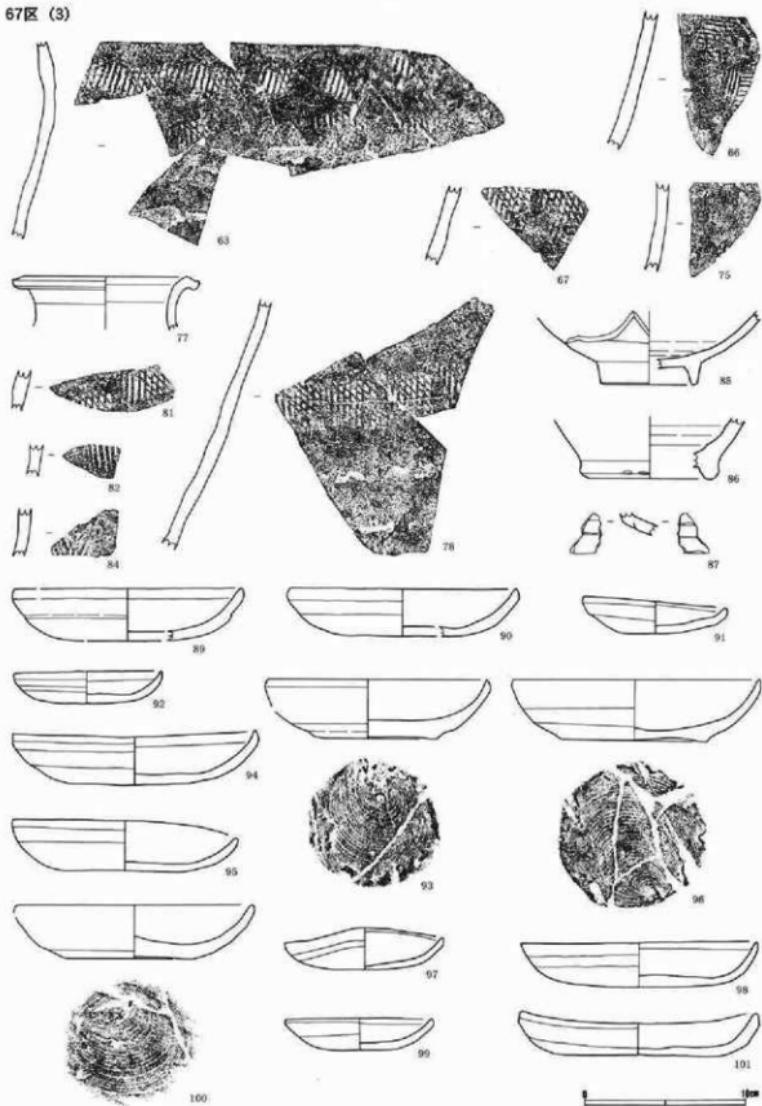
第9図 出土遺物(1)

## 67区(2)

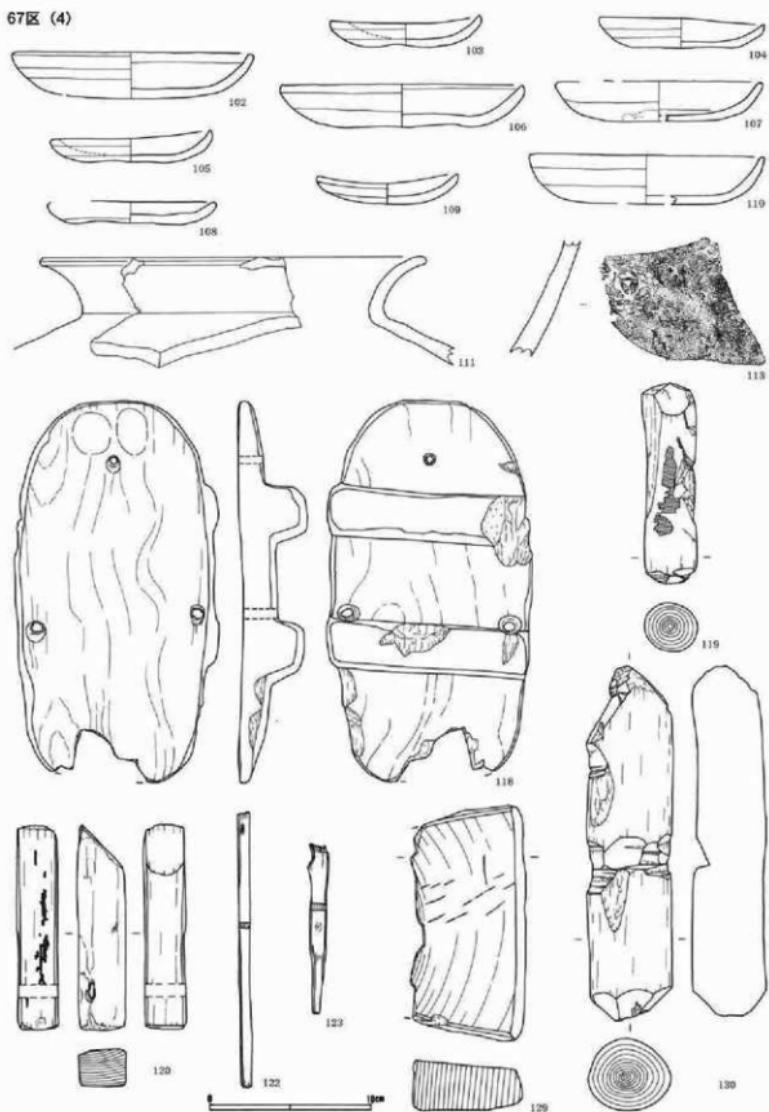


第10図 出土遺物(2)

67区(3)

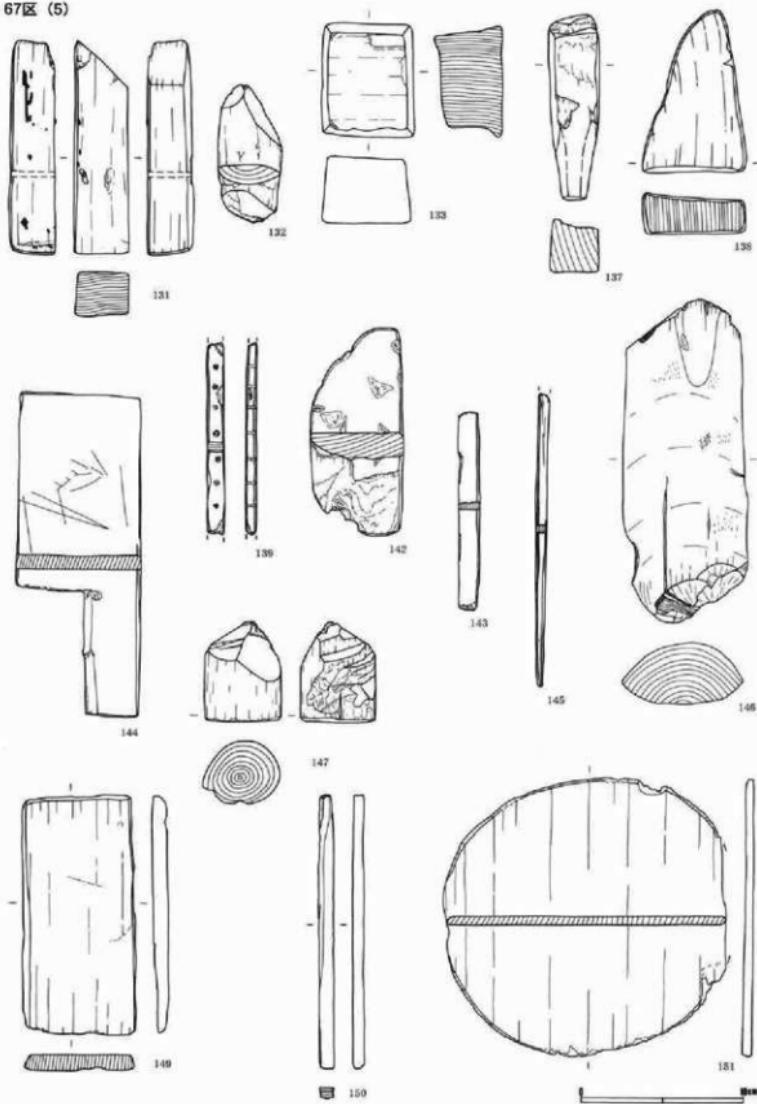


第11図 出土遺物(3)



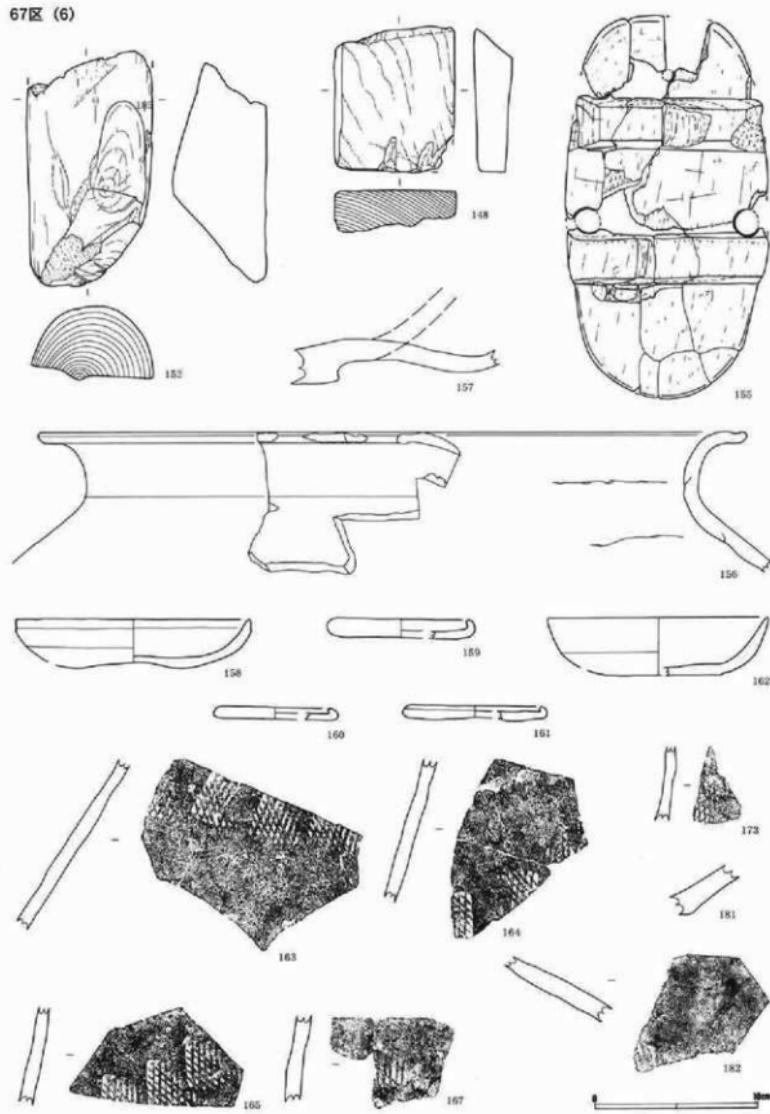
第12図 出土遺物 (4)

67区(5)



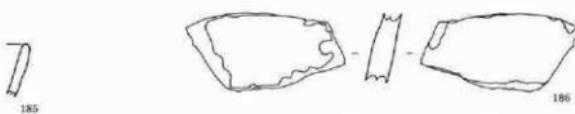
第13図 出土遺物(5)

67区 (6)

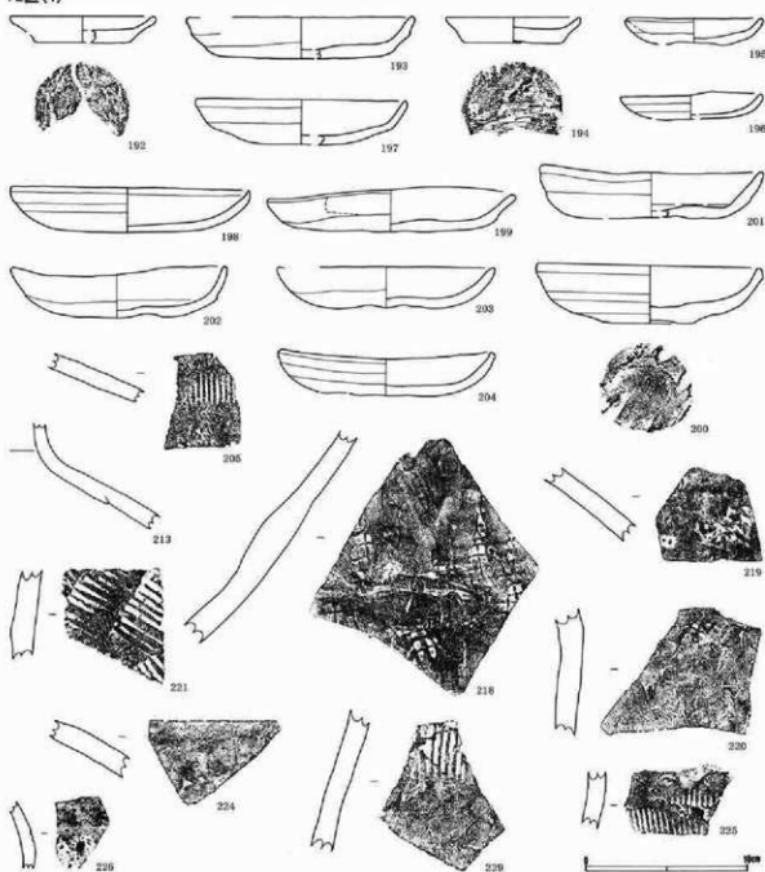


第14図 出土遺物 (6)

## 67区 (7)

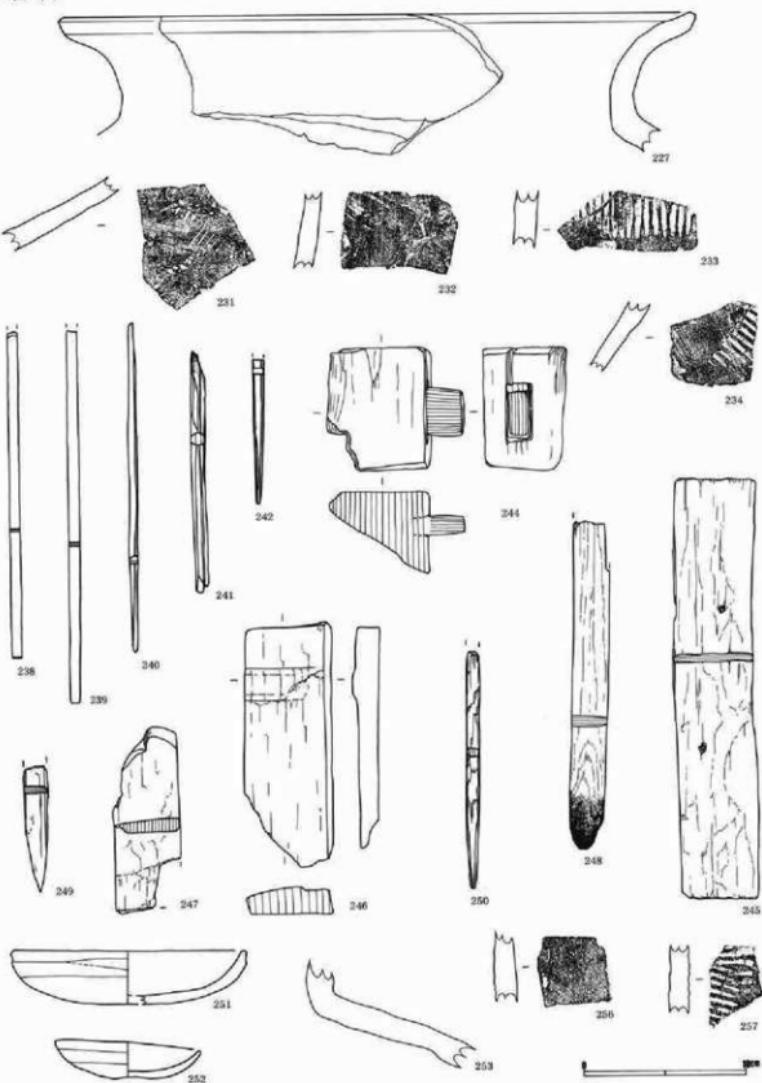


## 72区 (1)



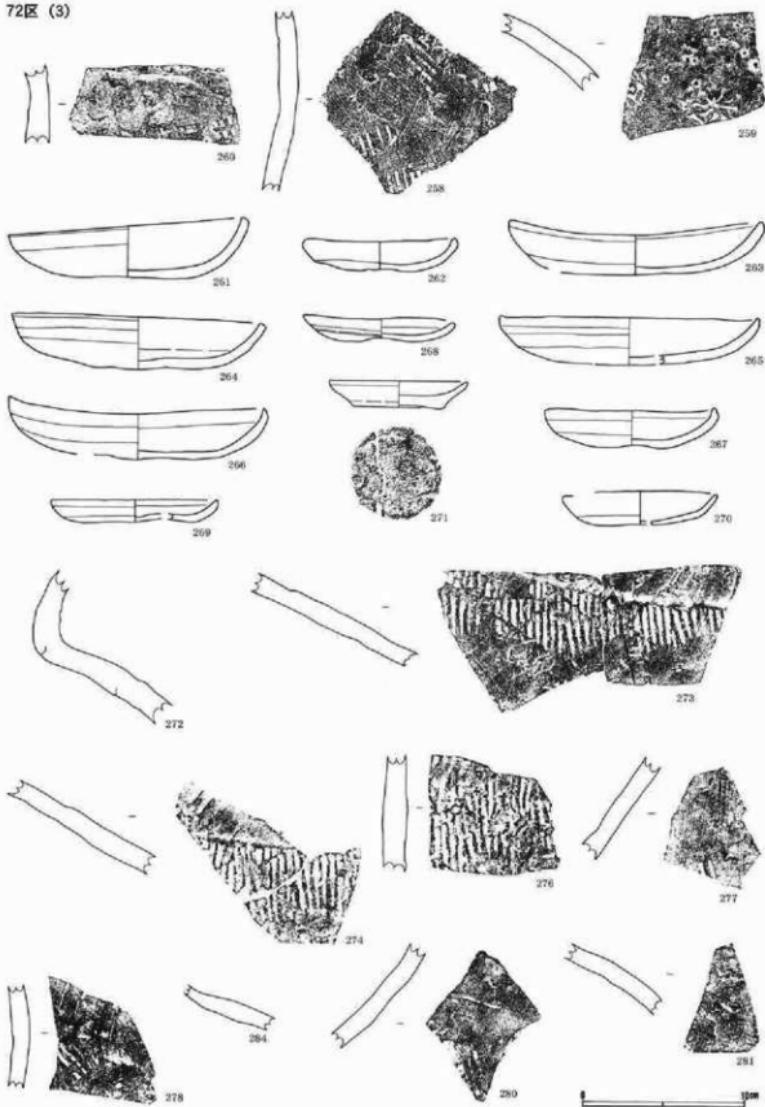
第15図 出土遺物 (7)

72区 (2)



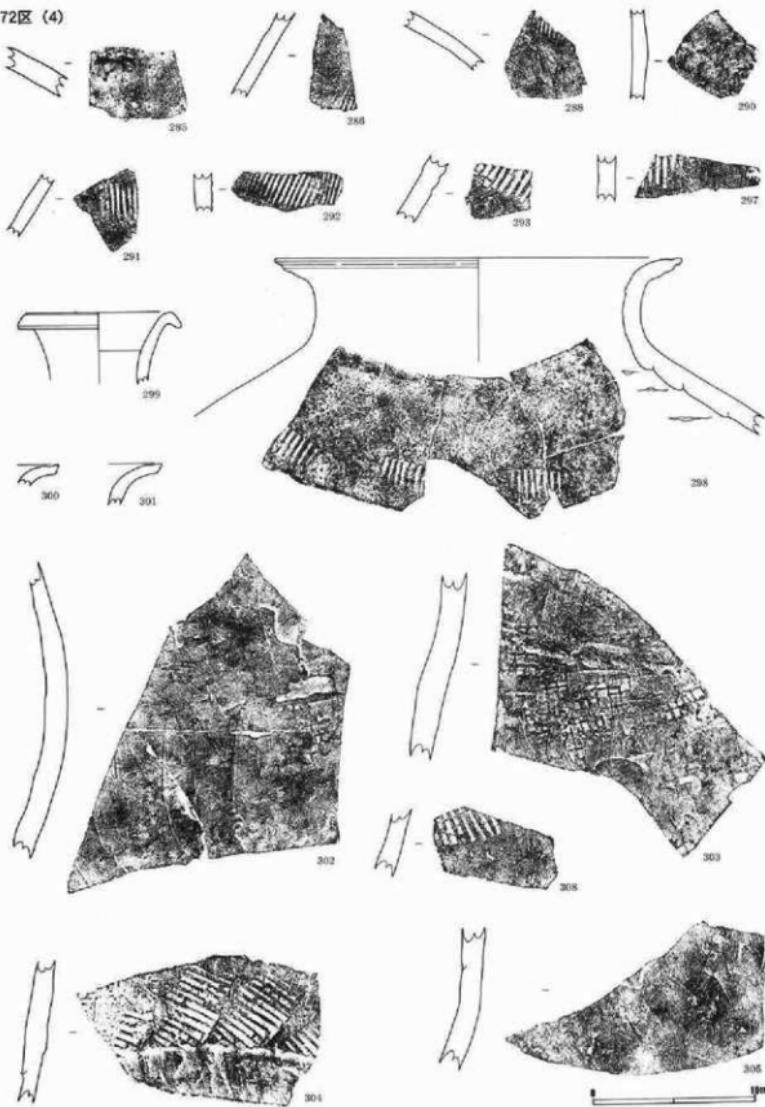
第16図 出土遺物 (8)

## 72区 (3)



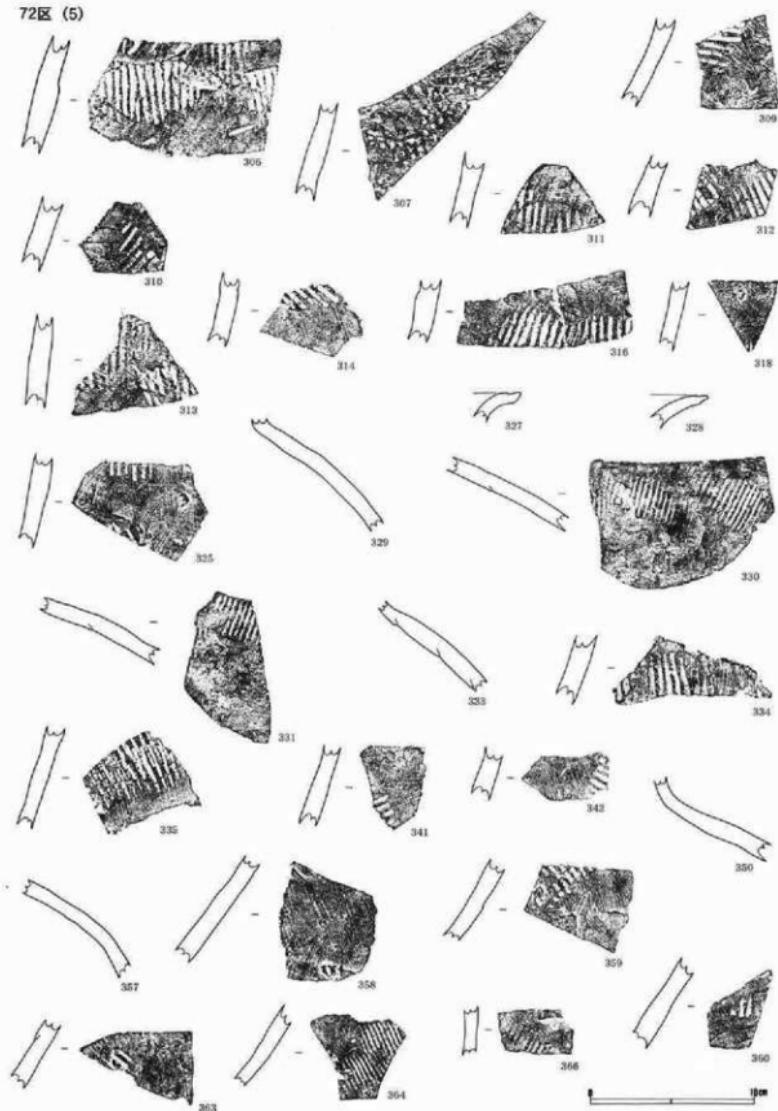
第17図 出土遺物 (9)

72区(4)



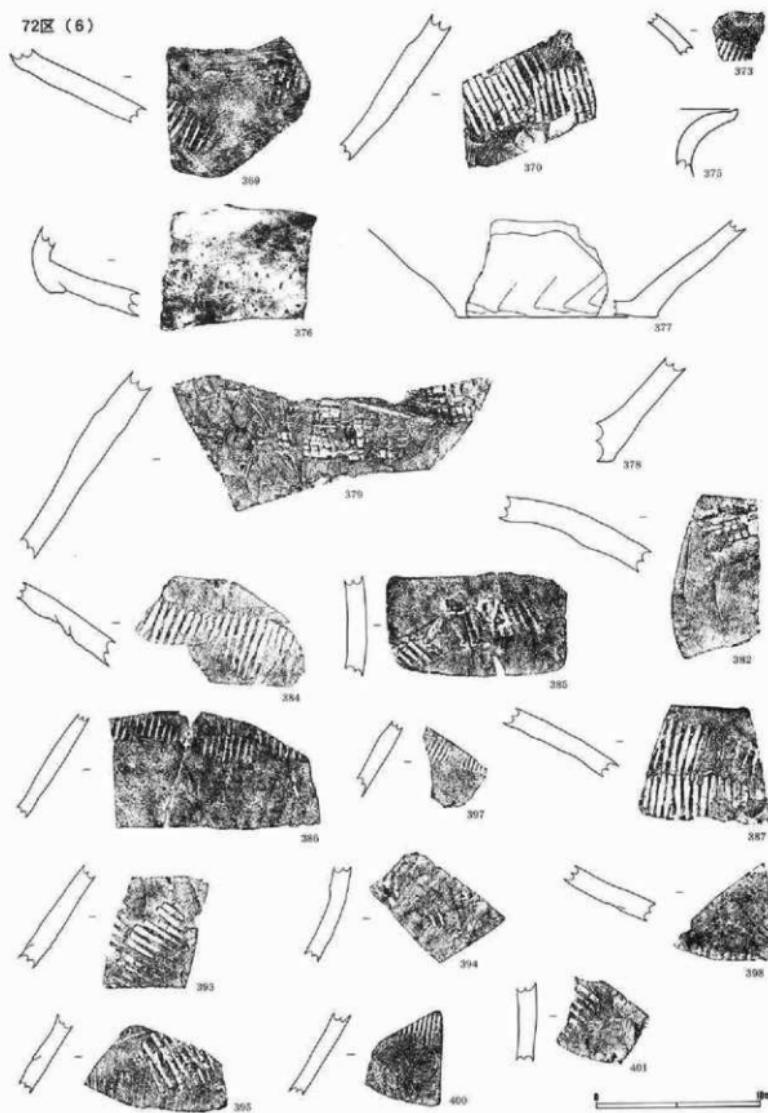
第18図 出土遺物 (10)

## 72区(5)



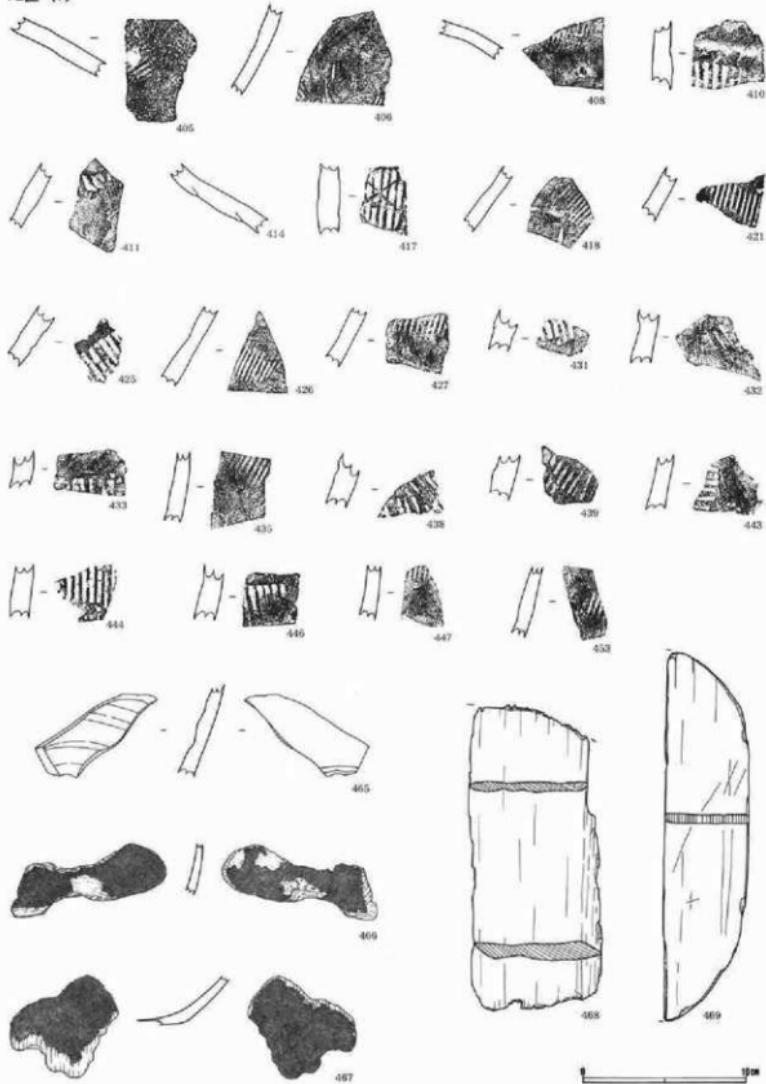
第19図 出土遺物 (11)

72区(6)



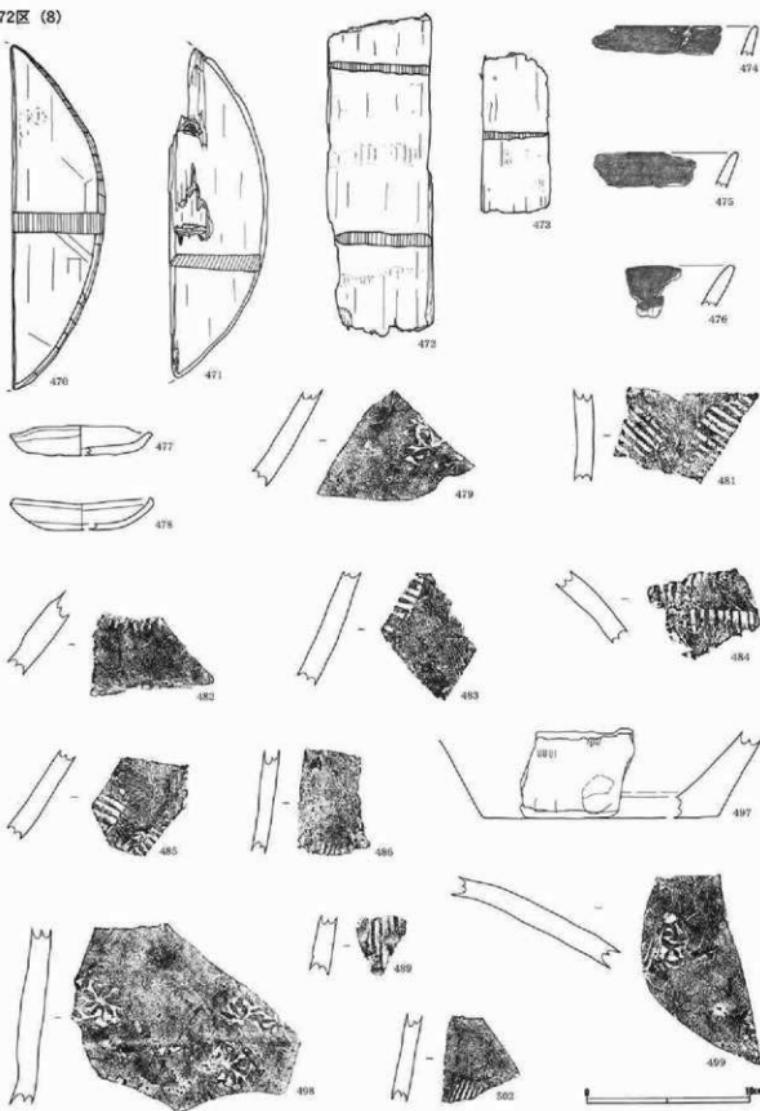
第20図 出土遺物 (12)

## 72区 (7)



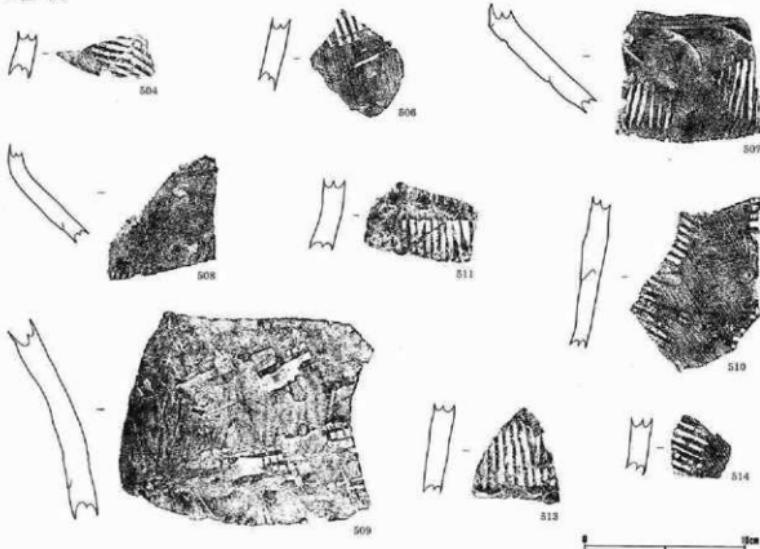
第21図 出土遺物 (13)

## 72区 (8)

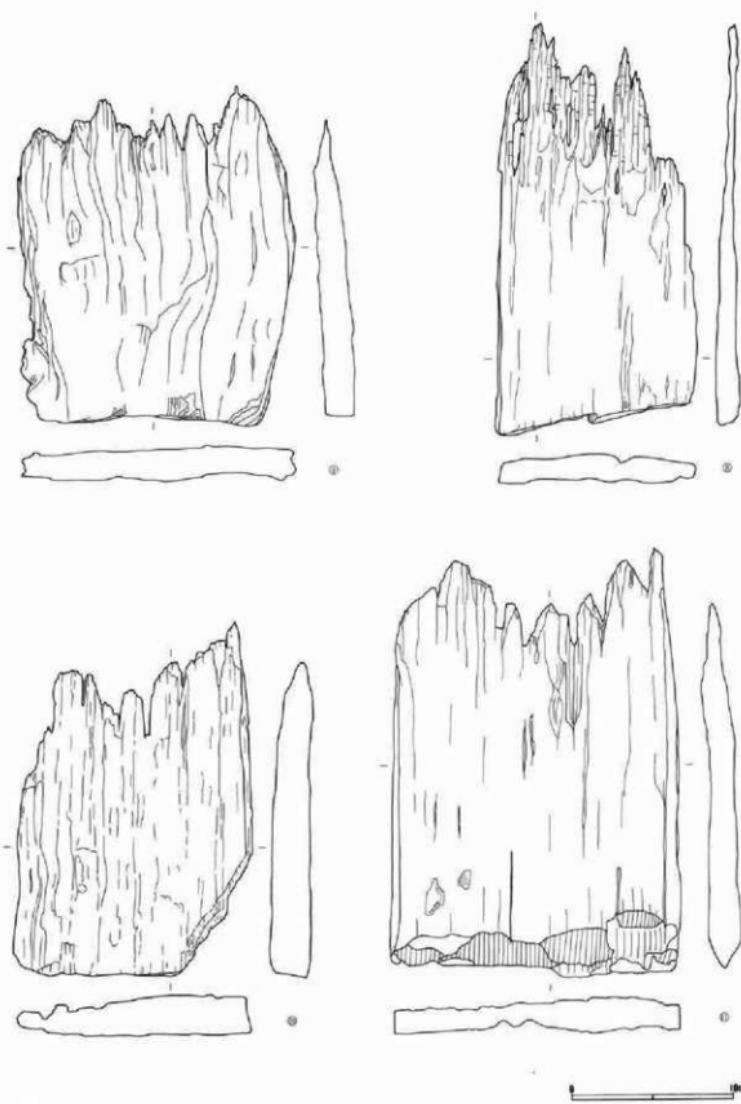


第22図 出土遺物 (14)

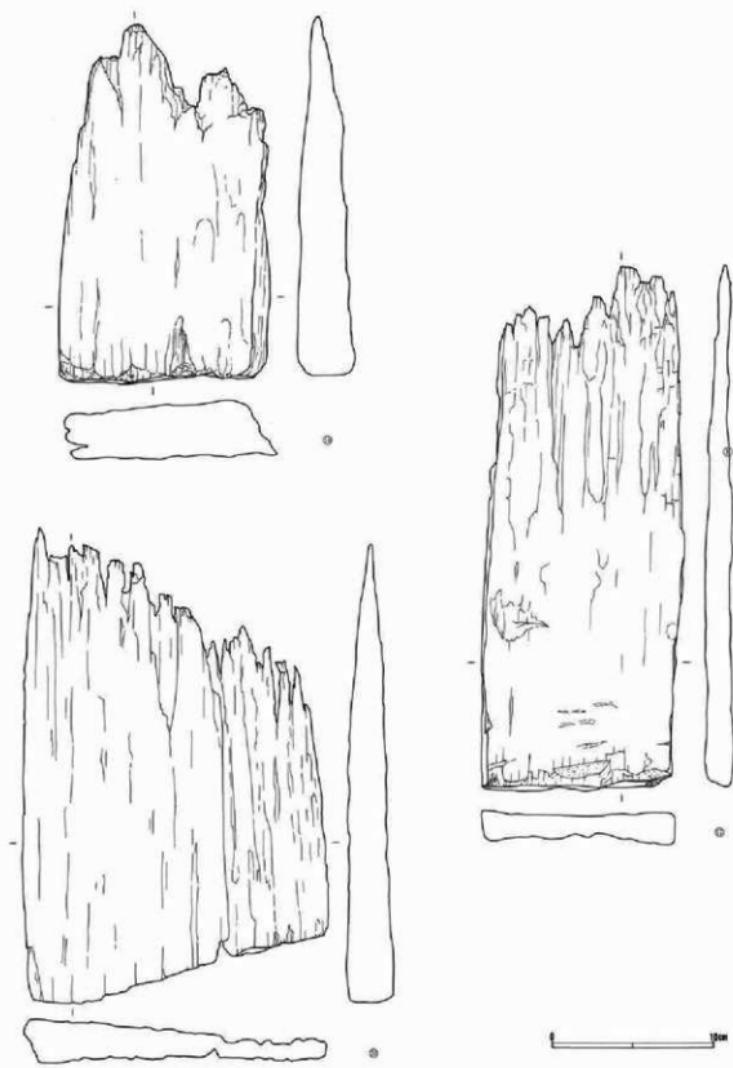
72区 (9)



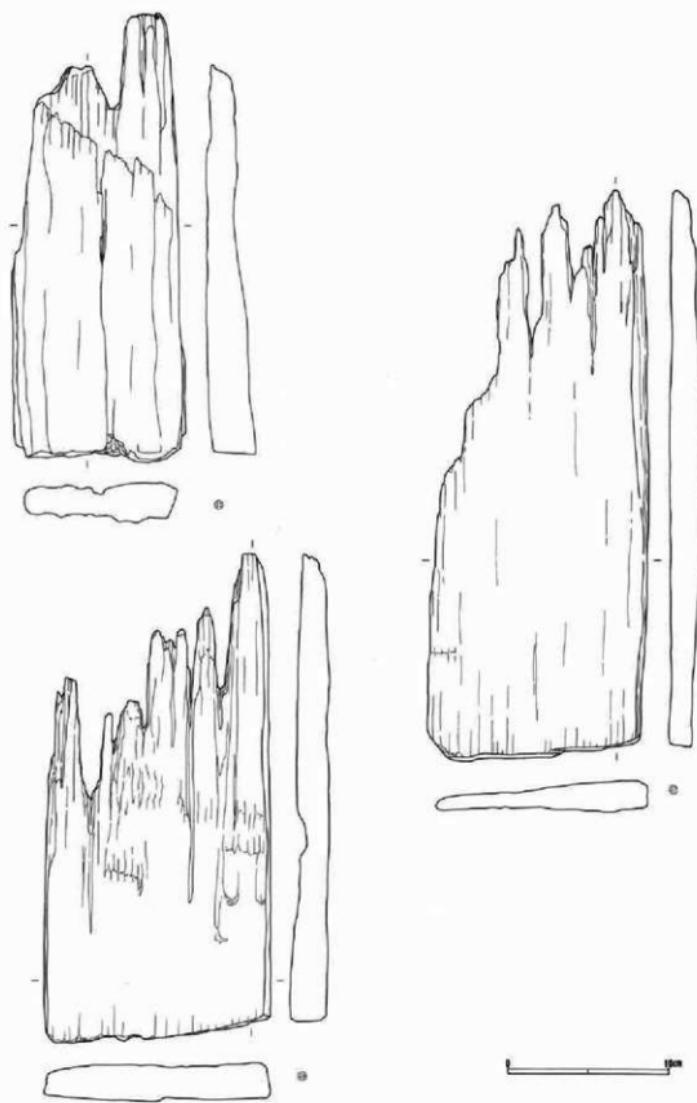
第23図 出土遺物 (15)



第24図 塙板材 (1)



第25図 複板材 (2)



第26図 壁板材（3）

第1表 カワラケ観察表

番号	回数	地盤	出土地点	層位	形名	分類	長さ(cm)	幅さ(cm)	深さ(cm)	発見場所	重量(g)	備考	
1	9	10 67区	街路1号	1層	ロクロ・大	Rd2	(13.8)	6.8	4.0	60	130.82	すのこ底 内面ナメ無	
2	9	10 67区	街路1号	1層	手づくね・大	D4	(14.4)	2.8	70	136.64			
15	9	10 67区	街路1号	1層	ロクロ・小	rd	8.6	(5.8)	1.9	60	49.51		
16	9	10 67区	街路1号	1-2層	ロクロ・小	rd	9.4	6.6	1.8	90	67.71		
17	9	10 67区	街路1号	1-2層	手づくね・小	D3	(9.2)	(1.8)	40	29.95			
18	9	10 67区	街路1号	1-2層	手づくね・小	D3	(9.0)	(1.5)	40	27.28			
19	9	10 67区	街路1号	1-2層	手づくね・小	C6	(10.1)	(6.6)	1.6	90	67.87		
20	9	10 67区	街路1号	1-2層	手づくね・大	D2	(9.0)	1.7	70	46.22			
21	9	10 67区	街路1号	1-2層	手づくね・大	C3	(16.2)	3.0	50	107.58			
22	9	10 67区	街路1号	1-2層	手づくね・大	C5'	(15.0)	3.0	50	125.98			
23	9	11 67区	街路1号	1-2層	手づくね・大	D4	(14.0)	2.2	40	58.04	すのこ底		
24	9	11 67区	街路1号	1-2層	手づくね・大	D4	(14.4)	2.5	60	112.39	すのこ底		
25	9	11 67区	街路1号	1-2層	ロクロ・大	Rd3	(14.6)	7.0	4.0	50	147.60		
26	9	11 67区	街路1号	2層	手づくね・大	C4	13.7	3.0	50	171.01	すのこ底		
27	9	11 67区	街路1号	2層	内折れ	内折れ	(9.6)	1.2	60	45.30			
28	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C3	13.0	3.1	龙	187.05			
29	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(15.6)	3.2	70	125.12			
30	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	12.9	2.6	70	105.40			
31	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(15.2)	3.0	70	129.77			
32	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	9.2	2.0	50	30.75			
33	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(15.0)	3.1	80	185.51	灯明窟?		
34	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C3	(13.2)	(2.9)	50	98.69			
35	9	12 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D3	8.0	2.1	26	61.05			
36	9	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(13.6)	3.1	70	177.38	すのこ底		
37	9	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	12.5	2.8	完	160.13			
38	9	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D2	(12.6)	2.9	60	102.61			
39	10	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C5	13.6	3.0	70	111.82	内面ナメ無		
40	10	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(15.2)	3.0	80	187.79			
41	10	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D2	9.2	1.7	壳	60.80			
42	10	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(15.1)	(3.2)	60	180.39			
43	10	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D2	(13.2)	2.8	60	113.44			
44	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D4	9.2	2.1	壳	84.78			
45	10	13 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D3	9.0	1.5	50	46.66	内面ナメ無		
46	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C5'	(9.4)	1.9	40	39.81			
47	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D4	(13.6)	(3.0)	40	27.51	48と同一個体		
48	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D4	(13.6)	(3.0)	40	62.28	47と同一個体		
49	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D3	(8.8)	(1.4)	40	21.02			
50	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C5	15.5	3.0	70	166.52			
51	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C3	(13.0)	(3.3)	50	87.06	すのこ底		
52	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(13.6)	(2.9)	30	48.36			
53	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D4	(14.0)	(3.0)	30	52.12			
54	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C3	(15.0)	(2.8)	25	33.33			
55	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	C4	(13.8)	(3.1)	40	65.09			
56	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D4	(15.0)	(2.7)	30	40.35			
57	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D3	(7.8)	1.7	40	24.27			
58	10	14 67区	街路1号	3層	手づくね・大	D2	(9.4)	(1.6)	60	38.49			
59	11 16 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C4	(14.4)	(3.0)	25	30.72	67区取り上げ①		
60	11	67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C3	(14.2)	(3.0)	30	53.48	67区取り上げ②	
91	11	17 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C4	(9.0)	2.3	90	64.48	67区取り上げ③すのこ底 内面ナメ無	
92	11	17 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C3	9.2	2.1	壳	56.83	67区取り上げ④すのこ底	
93	11	18 67区	街路2号	1層	18H	ロクロ・大	Rd	(14.6)	7.8	37	80	196.53	67区取り上げ⑤灯明窟?
94	11	18 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C5	15.4	3.4	壳	224.72	67区取り上げ⑥すのこ底 灯明窟?	
95	11	18 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	D4	14.0	3.2	95	178.47	67区取り上げ⑦	
96	11	18 67区	街路2号	1層	18H	ロクロ・大	Rd2	(15.4)	9.0	40	241.89	67区取り上げ⑧	
97	11	18 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C5	10.0	2.6	壳	65.19	67区取り上げ⑨	
98	11	19 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C6	(14.6)	2.9	90	200.10	67区取り上げ⑩すのこ底 内面ナメ無	
99	11	19 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	D4	9.2	2.1	壳	66.25	67区取り上げ⑪	
100	11	19 67区	街路2号	1層	18H	ロクロ・大	Rd	(15.0)	8.0	3.4	70	191.72	67区取り上げ⑫
101	11	19 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C4	(15.0)	2.7	40	85.93	67区取り上げ⑬	
102	12	20 67区	街路2号	1層	18H	手づくね・大	C5	(15.0)	2.9	60	108.01	67区取り上げ⑭ 内面ナメ無	
103	12	20 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	D4	9.4	2.1	壳	65.57	67区取り上げ⑮	
104	12	20 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	C4	10.2	1.9	壳	73.29	67区取り上げ⑯すのこ底	
105	12	20 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	C5	10.0	1.9	壳	68.24	67区取り上げ⑰	
106	12	21 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	C5	15.0	2.7	90	251.13	67区取り上げ⑱すのこ底 内面ガーポン付	
107	12	21 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	D3	12.6	2.5	40	56.19		
108	12	21 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	D3	10.2	1.5	70	60.73	すのこ底	
109	12	21 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	D4	8.8	1.9	90	58.28		
110	12	21 67区	街路2号	2層	18H	手づくね・大	C3	(14.6)	(3.0)	40	76.51	灯明窟	
118	14	23 67区	東横外	表チ	18H	手づくね・大	C4	(14.6)	3.1	70	153.12		
159	14	23 67区	東横外	表チ	18H	内折れ	内折れ	(9.2)	1.2	20	18.30		
160	14	23 67区	東横外	表チ	18H	内折れ	内折れ	(7.6)	0.7	10	4.57		
161	14	23 67区	東横外	表チ	18H	内折れ	内折れ	(9.0)	0.9	20	12.33		

地名	区段	版面	裏面	出土地点	層位	クリット	種類	分類	口径:cm	底径:cm	高さ:cm	胎質	性質	備考
162	14	23	67区	瘡病外	表上	191	コクロ・大	Rd	(13.6)	(7.2)	3.6	60	115.19	
192	15	24	72区	瘡病	1号	191	コクロ・小	Rd	(9.2)	(6.0)	1.6	50	41.51	
193	15	24	72区	瘡病	1号	191	手づくね・人	C4	(13.8)	(7.6)	4.0	83.74		
194	15	24	72区	瘡病	1号	191	コクロ・小	Rd	(8.2)	(6.0)	1.6	60	46.12	
195	15	24	72区	瘡病	1号	1-2層	手づくね・小	D4	8.6		1.7	50	28.14	
196	15	25	72区	瘡病	1号	2層	手づくね・小	C3	(8.8)		(1.7)	40	24.74	
197	16	25	72区	瘡病	1号	2層	手づくね・大	D1	(13.0)		(2.8)	40	58.77	灯明底
198	16	25	72区	瘡病	1号	2層	手づくね・人	C5	(14.8)		2.8	80	162.11	灯明底 すのこ底
199	16	25	72区	瘡病	1号	2層	手づくね・大	D4	16.4		2.8	80	212.29	灯明底
200	16	25	72区	瘡病	1号	2層	コクロ・大	Rd2	14.0	5.8	3.7	80	254.22	
201	16	25	72区	瘡病	1号	不明	手づくね・大	C4	13.9		3.4	80	190.33	
202	16	25	72区	瘡病	1号	不明	手づくね・大	D3	13.1		3.2	80	164.55	
203	16	25	72区	瘡病	1号	不明	手づくね・大	D3	(7.32)		2.6	40	65.25	内面ナメ痕底
204	16	25	72区	瘡病	1号	不明	手づくね・大	C5	(13.0)		(2.8)	30	73.71	
205	16	27	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C4	(14.2)		(5.3)	40	93.38	
206	16	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C5	16.0		2.5	80	60.96	
207	16	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C3	9.0		2.1	60	40.03	灯明底
208	16	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	D4	(5.6)		2.4	50	122.48	
209	17	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C5	16.0		3.0	90	211.90	
210	17	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C5	15.9		(3.1)	70	179.56	
211	17	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C4	(15.8)		3.9	70	224.32	
212	17	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C4	10.6		2.6	90	116.25	
213	17	28	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	C3	9.6		1.8	80	61.23	
214	17	29	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	D4	(10.3)		1.5	70	62.77	すのこ底
215	17	29	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	D4	9.4		2.1	95	62.13	
216	17	29	72区	瘡病	2号	1層	手づくね・大	Rd	(8.4)	5.5	1.7	60	45.74	
217	22	35	72区	瘡病	外丸	手づくね・小	D4	8.8		1.9	60	26.81		
218	22	35	72区	瘡病	外丸	手づくね・小	D4	(8.8)		(2.0)	40	20.68	内外面カーボン付着	

参考から抜けた分類1、第67次調査と同様の方法による。

第2表 国產陶器観察表

地名	形態	断面	出土地点	層位	クリット	縫隙	岩盤	部位	時期	備考
3	9	10	67区	瘡病	1号	1層	(8.1)	裏	唐	腹
4	9	10	67区	瘡病	1号	1層	181	記録	腹	頭
5			67区	瘡病	1号	1層		記録	腹	頭
6	9	10	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
7			67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
8			67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
9	9	10	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
10			67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
11	9	10	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
12	9	10	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
13	9	10	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
14			67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	腹	頭
59	10	14	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	片跡	頭
59	10	15	67区	瘡病	1号	1層	181	常滑	片跡	頭
60	10	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	頭	腹
61	10	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	腹	頭
62	10	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	腹	頭
63	11	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	腹	頭
64	10	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	腹	頭
65	10	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	腹	頭
66	11	15	67区	瘡病	1号	1-2層	181	常滑	腹	頭
67	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
68	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
69	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
70			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
71			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
72			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
73			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
74			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
75	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
76			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
77	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
78	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
79			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
80			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
81	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
82	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
83			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
84	11	16	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
85			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
86			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
87			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
88			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
89			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
90			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
91			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
92			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
93			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
94			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
95			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
96			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
97			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
98			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
99			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
100			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
101			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
102			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
103			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
104			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
105			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
106			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
107			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
108			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
109			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
110			67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
111	12	21	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭
112	12	21	67区	瘡病	2号	1-2層	181	常滑	腹	頭

登録年	回版	版写	調査区	出土地点	房位	グリッド	建設	施設	形位	時期	備考
113	12	21	67区	溝跡2号	2層	181	発表	東	前	12c	外面上押印
114			67区	溝跡2号	2層	191	発表	東	前	12c	外面上押印
115			67区	溝跡2号	2層		発表	東	前	12c	外面上自然縫の流れ落ち
156	14	23	67区		1層4		常備	東	口絃	12c	外面上練跡 内面に輪の飛沫
157	14		67区	PP13			常備	東	口絃	12c	外面上練跡 内面に輪の飛沫
163	14	23	67区	道場外	表土	18II	常備	東	前	12c	外面上練跡 内面に輪の飛沫
164	14	24	67区	道場外	表土	18III	常備	東	前	12c	外面上練跡
165	14	24	67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡 内面に輪の飛沫
166			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	内面上練跡の飛沫
167	14	24	67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡 線跡の剥落
168			67区	道場外	表土	18II	常備	東	前	12c	外面上練跡の剥落
169			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
170			67区	道場外	表土	18III	常備	東	前	12c	内面上練跡の飛沫
171			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	内面上練跡の飛沫
172			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
173	14	24	67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡の剥落
174			67区	道場外	表土	18I	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
175			67区	道場外	表土	18II	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
176			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
177			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上部分の縫跡 内面に輪の飛沫
178			67区	道場外	表土	18H	常備	東	口絃	12c	外面上練跡 内面に輪の飛沫
179			67区	道場外	表土	18H	常備	東	前	12c	外面上練跡
180			67区	道場外	表土	18II	常備	東	前	12c	外面上練跡
181	14	24	67区	道場外	表土	18I	常備	東	前	12c	内面上練跡の剥落
182	14	24	67区	道場外	表土	18I	常備	東	前	12c	外面上練跡の剥落
183			67区	道場外	表土	18I	常備	東	前	12c	外面上練跡
184			67区	道場外	表土	18I	常備	東	前	12c	外面上練跡の剥落
185	15	24	67区	道場外	表土	19I	常備	東	口絃	12c	大きな茶碗か
186	15	24	67区	道場外	表土	19I	古鏡子	瓶子	前	15c 中	瓶底
187			67区	道場外	表土	19I	常備	東	前	12c	外面上練跡の剥落
188			67区	道場外	表土	19I	常備	片口鉢	前	12c	外面上一部自然縫 内面上縫跡
189			67区	道場外	表土	19I	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
205	15	26	72区	溝跡1号	1層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の剥落
206			72区	溝跡1号	2層	19J	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
207			72区	溝跡1号	2層	19J	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
208			72区	溝跡1号	2層	19J	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
209			72区	溝跡1号	2層	19J	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
210			72区	溝跡1号	2層	19J	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
211			72区	溝跡1号	2層	19J	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
212			72区	溝跡1号	2層	19J	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
213	15	26	72区	溝跡1号	2層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
214			72区	溝跡1号	2層	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
215			72区	溝跡1号	2層	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
216			72区	溝跡1号	2層	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
217			72区	溝跡1号	2層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
218	15	26	72区	溝跡1号	2層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
219	15	26	72区	溝跡1号	3層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
220	15	26	72区	溝跡1号	5層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
221	15	26	72区	溝跡1号	3層	19K	発表	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
222			72区	溝跡1号	5層	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
223			72区	溝跡1号	3層	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
224	15	26	72区	溝跡1号	不規	19J	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
225	15	26	72区	溝跡1号	不明	19J	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
226	15	26	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	二輪車	東	12c	外面上一部練跡
227	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	口絃	12c	4点合
228			72区	溝跡1号	不明	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
229	15	27	72区	溝跡1号	不明	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
230			72区	溝跡1号	不明	19K	常備	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
231	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
232	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
233	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
234	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
235			72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
236			72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
237			72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
238			72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
239			72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
240			72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
241	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
242	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
243	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
244	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
245	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
246	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
247	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
248	16	27	72区	溝跡1号	不明	19K	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
249	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	口絃	12c	外面上練跡の飛沫
250	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
251	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
252	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
253	16	28	72区	溝跡2号	1層	19I	溝底	東	口絃	12c	外面上練跡の飛沫
254			72区	溝跡2号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
255			72区	溝跡2号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
256	16	28	72区	溝跡2号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
257	16	28	72区	溝跡2号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
258	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
259	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
260	17	28	72区	溝跡3号	1層	19I	溝底	東	前	12c	外面上練跡の飛沫
261	17	29	72区	溝跡1号	1層	18I	溝底	東	口絃	12c	外面上練跡の飛沫

年月日	回数	場所	出上地点	脚位	グリップ	種類	部位	時刻	備考
273	17	29	72区	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
274	17	29	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
275			72区	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c
276	17	29	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c
277	17	29	72区	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
278	17	29	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
279			72区	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c
280	17	29	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c
281	17	29	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c
282			72区	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c
283			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c
284	17	29	72K	池尻遺構1号	1層	18L	常薄	脛	12c 外面に輪の飛沫
285	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛?	12c 外面に施文 緑輪
286	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印 輪の飛沫
287			72K	池尻遺構1号	1層	18L	常薄	脛	12c
288	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印 輪の飛沫
289			72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c
290	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛?	12c 外面に押印
291	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
292	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
293	18	30	72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
294			72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c
295			72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c
296			72K	池尻遺構1号	1層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
297	18	30	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印 輪の飛沫
298	18	30	72K	池尻遺構1号	2層	18L	常薄	脛	12c 口器
299	18	30	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に自然輪
300	18	30	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に自然輪
301	18	30	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
302	18	30	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印 自然輪
303	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
304	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
305	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
306	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
307	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
308	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
309	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
310	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
311	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
312	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
313	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
314	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
315			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
316	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
317			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
318	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
319			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
320			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
321			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
322			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
323			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
324			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
325	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
326			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
327	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
328	19	31	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
329	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
330	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
331	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
332			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に輪の飛沫
333	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に輪の飛沫
334	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
335	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
336			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
337			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
338			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
339			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
340			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
341	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
342	19	32	72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
343			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
344			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
345			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印
346			72K	池尻遺構1号	2層	18L	握美	脛	12c 外面に押印

登録年	採取年	採取月	採取日	調査員	性別	年齢	種類	部位	時期	回	号	
547	72区	池状遺構1号	2番	18L	雄美	愛	脳	頭	12c			
548	72区	池状遺構1号	2番	18L	常優	愛	脳	頭	12c			
549	72区	池状遺構1号	2番	18L	優美	愛	脳	頭	12c			
550	19	32	72区	池状遺構1号	2番	19K	優美	愛	頭～肩	12c		
551		72区	池状遺構1号	2番	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印		
552		72区	池状遺構1号	2番	19L	優美	愛	脳	12c			
553		72区	池状遺構1号	2番	19L	優美	愛	脳	12c			
554		72区	池状遺構1号	不明	18K	優美	愛	脳	12c			
555		72区	池状遺構1号	小明	18K	優美	愛	脳	12c			
556		72区	池状遺構1号	不明	18K	常優	愛	脳	12c			
557	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c	外間に自然粒	
558	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
559	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
560	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
561		72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c			
562		72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c			
563	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
564	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
565		72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c			
566	19	32	72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
567		72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c			
568		72区	池状遺構1号	不明	18K-19K	優美	愛	脳	12c			
569	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19K	優美	愛	脳～肩	12c	外間に押印	
570	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
571		72区	池状遺構1号	不明	19K	優美	愛	脳	12c	外間に自然粒		
572		72区	池状遺構1号	不明	19K	優美	愛	脳	12c			
573	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19K	優美	愛	脳	12c	外間に押印 自然粒	
574		72区	池状遺構1号	小明	19K	優美	愛	脳	12c			
575	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	口歯	12c	外間に鮮やかな緑釉 2型式?	
576	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳～肩	12c	外間に施文 外間に鮮やかな緑釉	
577	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c		
578	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳～肩	12c		
579	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
580		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
581		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
582	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印 自然粒	
583		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
584	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	房房	愛	脳	12c	外間に押印	
585	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
586	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
587	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
588		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
589		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
590		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
591		72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c			
592		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
593	20	33	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
594	20	34	72区	池状遺構1号	小明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
595	20	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
596		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
597	20	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
598	20	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
599		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
600	20	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
601	20	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
602		72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c			
603		72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c			
604		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
605	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	房房	愛	脳	12c	外間に押印	
606	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
607		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印		
608	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
609		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
610	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
611	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
612		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
613		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に自然粒		
614	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
615		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			
616		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に自然粒		
617	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c	外間に押印	
618	21	34	72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c	外間に押印	
619		72区	池状遺構1号	不明	19L	常優	愛	脳	12c			
620		72区	池状遺構1号	不明	19L	優美	愛	脳	12c			

登録年	出所	件名	出土点	層位	グリッド	種類	性別	年齢	回	
									門類	外因
121	23	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	遺物	男	12c	外因に押印
422	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	遺物	女	12c		
123	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	遺物	男	12c		
424	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	遺物	女	12c		
125	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
426	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c	外因に押印
427	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
428	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	女	12c		
429	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c	外因に鮮やかな縁飾	
130	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c	外因に鮮やかな縁飾	
431	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
432	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
433	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	女	12c	外因に押印
434	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
135	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
436	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c		
137	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
438	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	女	12c	外因に押印
439	21	34	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
440	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
441	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
442	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
443	21	35	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
1441	21	35	72K	海抜遺構1号	不明	19L	陶器	男	12c	外因に押印
445	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
446	21	35	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c	外因に押印
447	21	35	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c	外因に押印
448	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
449	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
450	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
451	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
452	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
453	21	35	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c	外因に押印
454	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
455	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
456	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
457	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
458	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
459	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
460	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
461	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
462	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
463	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	男	12c		
464	-	72K	海抜遺構1号	不明	19L	常滑	女	12c		
479	22	36	72K	遺構外	表土	18J	陶器	女	12c	外因に自然破
480	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
481	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c	外因に自然破
482	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	女	12c	外因に自然破
483	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c	外因に自然破
484	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c	外因に自然破
485	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c	外因に自然破
486	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c	外因に自然破
487	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
488	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
489	22	36	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c	外因に自然破
490	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
491	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
492	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
493	-	72K	遺構外	表土	18K	陶器	男	12c		
494	-	72K	遺構外	表土	18L	陶器	男	12c		
495	-	72K	遺構外	表土	18L	陶器	男	12c		
497	22	36	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c	外因に押印 鹿島青み
498	22	36	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c	外因に施文 内面に鶴の飛沫
499	22	36	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c	外因に押印 内面に鶴の飛沫
500	-	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c		
501	-	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c		
502	22	36	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c	外因に押印
503	-	72K	遺構外	表土	19K	常滑	底	12c	外因に押印	
504	23	36	72K	遺構外	表土	19K	陶器	底	12c	外因に押印
505	-	72K	遺構外	表土	19K	常滑	底	12c		
506	23	36	72K	遺構外	表土	19K	常滑	底	12c	外因に押印
507	23	36	72K	遺構外	表土	19K	常滑	底	12c	外因に押印
508	23	37	72K	遺構外	表土	19K	常滑	底	12c	外因に押印

登録番号	図版	写真	調査区	出土地点	層位	グリッド	種類	頭骨	部位	時期	備考
S09	23	37	72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	12c	外面に押印
S10	23	37	72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	12c	外面に押印
S11	23	37	72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	12c	外面に押印
S12		72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	頭	12c	
S13	23	37	72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	12c	外面に押印
S14	23	37	72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	12c	外面に押印
S15		72区	遺構外	表土	遺失	頭	頭	頭	頭	12c	

\*中国産器物の分類は、第67次調査と同様の分類による。

第3表 国産磁器観察表

登録番号	図版	写真	調査区	出土地点	層位	グリッド	種類	頭骨	部位	時期	備考
85	11	16	67区	溝跡1号	3層	19I	白磁	頭	頭	12c	V類?
86	11	16	67区	溝跡1号	3層	19I	白磁	四耳瓶?	底	12c	
87	11	16	67区	溝跡1号	3層	19I	白磁	四耳瓶	瓶?	12c	
190	13	24	67区	溝跡外	表土	18H	白磁	頭	頭	12c	
191	13	24	67区	溝跡外	表土	19H	白磁	頭	頭	12c	
465	21	35	72区	地状遺跡1号	不明	19I	白磁	四耳瓶?	瓶?	12c	

\*中国産器物の分類は、第67次調査と同様の分類による。

第4表 木製品観察表

登録番号	図版	写真	調査区	遺物名	形状	グリッド	種類	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	種類	備考
85	17	67区	溝跡1号	2層	19I	漆塗筒	25.8	12.6	漆部分4.0			
116		67区	溝跡2号	2層上位	18H	不明					67区取り上げ⑨	
117		67区	溝跡2号	2層上位	18H	不明					67区取り上げ⑩	
118	(6)	21	67区	溝跡2号	2層	18H	漆油付鉢				67区取り上げ⑪	
119	16	22	67区	溝跡2号	2層	18II	不明	12.5	3.4	3.0	ケヤキ	
120	16	22	67区	溝跡2号	2層	18II	不明	11.7	3.0	2.3	ごけ? 付着	
121		67区	溝跡2号	2層	18H	不明					黒漆付着	
122	16	22	67区	溝跡2号	2層	18H	不明	17.5	0.8	0.4		
123	16	22	67区	溝跡2号	2層	18H	不明	10.5	1.3	0.5		
124		67区	溝跡2号	2層	18H	不明						
125		67区	溝跡2号	2層	18H	不明						
126		67区	溝跡2号	2層	18H	不明						
127		67区	溝跡2号	2層	18H	不明						
128		67区	溝跡2号	2層	18H	不明						
129	16	22	67区	溝跡2号	2層	18I	不明	14.6	7.9	3.0		
130	16	22	67区	溝跡2号	2層	18I	不明	22.0	5.4	4.5		
131	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	11.3	3.4	2.9		
132	17	22	67区	溝跡2号	2層	18I	不明	8.6	3.9	1.2		
133	17	22	67区	溝跡2号	2層	18I	不明	7.0	5.7	4.2		
134		67区	溝跡2号	2層	18I	不明						
135		67区	溝跡2号	2層	18I	不明						
136		67区	溝跡2号	2層	18I	部材?					67区取り上げ⑫	
137	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	11.6	3.0	3.4		
138	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	[0.1]	6.4	2.6		
139	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	12.0	1.1	0.7	種1mm程の穴が約1.4cm間隔に7箇所	
140		67区	溝跡2号	2層	18J	不明						
141		67区	溝跡2号	2層	18J	不明						
142	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	13.0	5.8	1.6		
143	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	12.4	1.4	0.4		
144	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	22.0	7.7	1.0	67区取り上げ⑬	
145	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	筆	18.1	0.8	0.5	ヒノキ属の一塊	
146	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	21.1	7.8	3.8		
147	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	6.2	4.7	3.9		
148	18	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	9.0	7.4	2.4		
149	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	14.8	7.0	1.0		
150	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	17.1	1.0	0.7		
151	17	22	67区	溝跡2号	2層	18J	色物	17.2	(18.2)	0.6	大ギ	
152	18	22	67区	溝跡2号	2層	18J	不明	(14.0)	5.7	4.3	67区取り上げ⑭	
153		67区	溝跡2号	2層	18J	不明						
154		67区	溝跡2号	2層	18J	不明						
155	18	23	67区	溝跡2号	3層	19J	漆油下駄	24.0	12.5	漆部分3.5	トナノキ	
238	20	27	72区	溝跡1号	2層	19J	不明	(20.3)	0.6	0.2		
239	20	27	72区	溝跡1号	2層	19J	不明	(23.2)	0.7	0.3		
240	20	27	72区	溝跡1号	2層	19J	不明	20.5	0.6	0.5		
241	20	27	72区	溝跡1号	2層	19J	不明	(15.1)	0.9	0.8		
242	20	27	72区	溝跡1号	2層	19J	不明	(9.0)	0.7	0.4		
243		72区	溝跡1号	2層	19J	不明						
244	20	27	72区	溝跡1号	2層	19K	不明	7.7	8.5	5.1	72区取り上げ⑮	
245	20	27	72区	溝跡1号	2層	19K	不明	26.1	5.3	0.6	72区取り上げ⑯	
246	20	27	72区	溝跡1号	2層	19K	不明	15.2	5.4	1.7		
247	20	27	72区	溝跡1号	2層	19K	不明	11.6	4.1	0.8		

品目	回数	号数	測定区	測定名	部位	グリッド	種類	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	種類	備考
348	20	27	72区	測定1号	2層	19K	不明	20.4	2.4	0.7		
219	20	27	72区	測定1号	2層	19K	不明	(7.8)	1.5	0.5		
250	20	27	72区	測定1号	3層	19K	著?	(14.7)	5.5	0.5	スギ	
466	25	35	72区	池状根構1号	2層上位	18L	連続板	(6.7)	(9.5)	0.5	ケヤキ	72区取引上げ58
467	25	35	72区	池状根構1号	2層上位	19L	連続板	(6.3)	(6.6)	0.6	ケヤキ	72区取引上げ59
468	25	35	72区	池状根構1号	2層	18L	曲物	(9.0)	(8.3)	0.6	アスナロ	72区取引上げ59
469	25	35	72区	池状根構1号	2層	19L	曲物	(2.10)	(6.2)	0.6	スギ	72区取引上げ59
470	25	35	72区	池状根構1号	2層	19L	曲物	(20.5)	(5.7)	1.4	スギ	72区取引上げ59
471	26	35	72区	池状根構1号	2層	19L	曲物	(20.5)	(6.0)	1.0	スギ	72区取引上げ59
472	26	35	72区	池状根構1号	2層	19L	曲物	(20.2)	(6.5)	0.8	アスナロ	
473	26	35	72区	池状根構1号	2層	19L	不明	(9.9)	(4.2)	0.5		
474	26	35	72区	池状根構1号	2層	19L	連続板	(1.8)	(7.9)	0.6		
475	26	35	72区	池状根構1号	2層	19L	連続板	(2.1)	(6.3)	0.6		
476	26	35	72区	池状根構1号	2層	19L	連続板	(3.1)	(3.4)	0.8		

第5表 堆板材観察表

測定区	回数	測定名	堆積名	部位	現存長:cm	幅:cm	厚さ:cm	板方向	先端形状	樹種	備考
①	67K	細跡1号	堆板材		21.0	8.5	1.9	平行			
②	67K	細跡1号	堆板材		17.0	14.0	1.3	平行			
③	67K	細跡1号	堆板材		13.0	18.0	2.0	平行			
④	28	37	67区	細跡1号	堆板材	21.0	17.0	1.9	平行		クリ
⑤	67K	細跡1号	堆板材		17.0	13.0	1.5	平行			
⑥	67K	細跡1号	堆板材		26.9	11.0	3.3	直角			
⑦	67K	細跡1号	堆板材		16.0	14.0	2.0	平行			
⑧	28	37	67区	細跡1号	堆板材	22.0	12.5	1.9	平行		
⑨	67K	細跡1号	堆板材		19.5	14.0	2.4	平行			
⑩	28	38	67区	細跡1号	堆板材	22.0	14.8	2.5	平行		クリ
⑪	28	38	67区	細跡1号	堆板材	26.0	17.9	2.3	平行		
⑫	67K	細跡1号	堆板材		19.0	12.5	2.6	平行	V字		
⑬	67K	細跡1号	堆板材		14.0	14.5	2.7	平行			
⑭	29	38	67区	細跡1号	堆板材	16.2	22.1	1.4	平行		クリ
⑮	67K	細跡1号	堆板材		16.5	12.6	1.7	直角			
⑯	67K	細跡1号	堆板材		25.0	15.0	2.2	平行			
⑰	29	38	67区	細跡1号	堆板材	32.7	12.6	3.0	平行	斜め	
⑱	67K	細跡1号	堆板材		22.0	13.0	2.5	平行			
⑲	67K	細跡1号	堆板材		28.5	18.5	2.8	平行			
⑳	29	39	67区	細跡1号	堆板材	28.0	18.0	2.9	平行		クリ
㉑	30	39	67区	細跡1号	堆板材	28.0	10.8	2.5	平行		
㉒	67K	細跡1号	堆板材		34.0	17.0	2.6	平行			
㉓	67K	細跡1号	堆板材		35.0	14.8	1.8	平行	V字		
㉔	67K	細跡1号	堆板材		35.5	16.5	2.7	平行			
㉕	67K	細跡1号	堆板材		33.2	13.2	2.3	直角			
㉖	67K	細跡1号	堆板材		32.0	16.0	3.1	平行			
㉗	67K	細跡1号	堆板材		40.0	12.0	2.7	平行			
㉘	67K	細跡1号	堆板材		23.0	13.5	1.4	平行			
㉙	67K	細跡1号	堆板材		22.2	16.5	1.6	平行			
㉚	67K	細跡1号	堆板材		19.0	16.0	1.6	平行			
㉛	67K	細跡1号	堆板材		16.5	15.0	1.2	平行			
㉜	67K	細跡1号	堆板材		15.0	16.0	2.4	平行			
㉝	67K	細跡1号	堆板材		9.8	3.3	0.7	直角			
㉞	67K	細跡1号	堆板材		21.5	10.0	2.1	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		21.0	13.0	2.8	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		20.0	18.0	3.4	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		19.8	18.0	1.2	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		26.0	16.2	2.3	平行	V字		
㉟	67K	細跡1号	堆板材		15.3	17.0	1.7	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		25.5	19.0	3.0	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		28.8	14.0	2.2	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		29.0	29.5	2.0	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		25.1	26.5	2.3	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		32.5	26.0	2.6	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		34.0	16.5	2.3	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		31.0	15.4	2.9	平行	V字		
㉟	30	39	67区	細跡1号	堆板材	24.5	13.8	2.2	平行		クリ
㉟	67K	細跡1号	堆板材		29.0	17.0	2.7	平行			
㉟	30	39	67区	細跡1号	堆板材	36.5	14.0	2.3	平行		
㉟	67K	細跡1号	堆板材		22.5	16.5	1.5	直角	V字		
㉟	67K	細跡1号	堆板材		30.5	19.0	2.2	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		32.0	18.5	4.3	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材		32.5	18.0	3.3	平行			
㉟	67K	細跡1号	堆板材							致り上げせず	

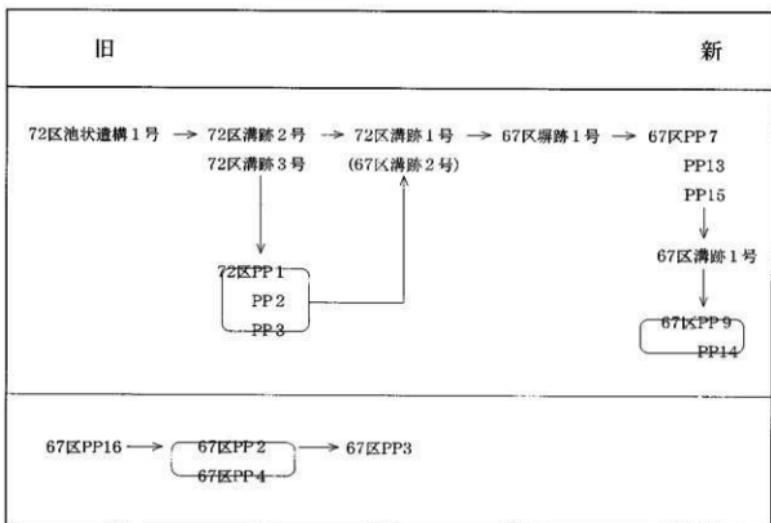
#### 4. まとめと考察

志羅山遺跡73次調査で検出された遺構は、溝跡5条、塙跡1条、池状遺構1条、柱穴列1条、柱穴19基である。遺物はかわらけ、国産陶器、中国産磁器、木製品、種子、粘土塊が出上している。12世紀代の遺物がほとんどであるが、15世紀の占瀬戸の瓶子も1点出土している。

##### (1) 遺構

今回の73次調査では、いくつかの遺構に重複関係が認められ、第6表のような新旧関係を確認することができた。

第6表 遺構の新旧関係



##### ①溝跡及び塙跡

67区では、67区溝跡1号、67区溝跡2号、67区塙跡1号の3条が検出され、72区では、72区溝跡1号(67区溝跡1号、67区塙跡1号と同一の遺構)、72区溝跡2号、72区溝跡3号の3条が検出された。

67区溝跡1号及び塙跡1号は、当初の遺構検出段階ではほぼ平行する2条の溝跡かと思われたが、北側溝跡から塙板材が検出されたため、67区塙跡1号とした。ところが、67区塙跡1号の開口部幅が116~152cmあったため、塙の布堀りにしては幅が広すぎるのではないかと考えていたところ、その後精査を進めてい

くうちに、67区堀跡1号埋上下から溝跡がほぼ重なり合うように存在することが確認された。このため、新たに検出された溝跡を67区溝跡2号と命名することとした。67区溝跡2号の埋土は自然堆積の様相を呈する2層からなることから、堀に作り替えられるまでのある一定期間は溝としての機能を果たしていたものと思われる。すなわち67区溝跡2号をある期間使用した後人为的に廃絶し、堀に転用したものと判断した。67区溝跡2号の1層上位（67区堀跡1号埋上直下に相当）、すなわち堀に転用される直前の層では、完形・略完形かわらけが10数点出土している。

67区堀跡1号は、輪線方向に沿うタテ方向の板材とそれに直角のヨコ方向の板材を組み合わせた構造の堀跡である。確認できた板材は54枚で、タテ方向の板材が49枚、ヨコ方向の板材が5枚（板材No.6、No.15、No.25、No.33、No.50）である。ヨコ板材の間隔は、推定部分を含め西から板材No.6～No.15間が150cm、板材No.15～No.25間が166cm、板材No.25～No.33間が151cm、板材No.33～推定部分までが141cm、推定部分～板材No.50までが180cmで、平均すると約158cmとなる。その間のタテ板材の検出数はそれぞれ18枚、9枚、7枚、8枚、8枚で、平均すると8枚である。タテ板はほぼ隙間無く検出されており、出入りをしていたと思われるような場所は確認されなかった。

検出された板材の大きさは、残存長9.8～34.5cm、幅3.3～29.5cm、厚さ0.7～4.3cmの範囲に収まる。残存状態が比較的良好な板材No.4、8、10、11、14、17、20、21、47、49の10枚のを平均すると残存長26.1cm、幅15.4cm、厚さ2.2cmである。板材No.17は、幅12.6cmあり、先端部分を斜めに片側だけを切り落とし、尖らせたものである。また、板材No.12、23、38、46、50は先端部分の形状がV字状となっている。これらにより木製の板を打ち込む作業が行われたことが推察される。板痕跡の深さは、遺構確認面から26～45cmであり、上層断面註記用のベルト6本の観察からは布堀り底面からさらに1～4cm程打ち込まれていることも確認できた。

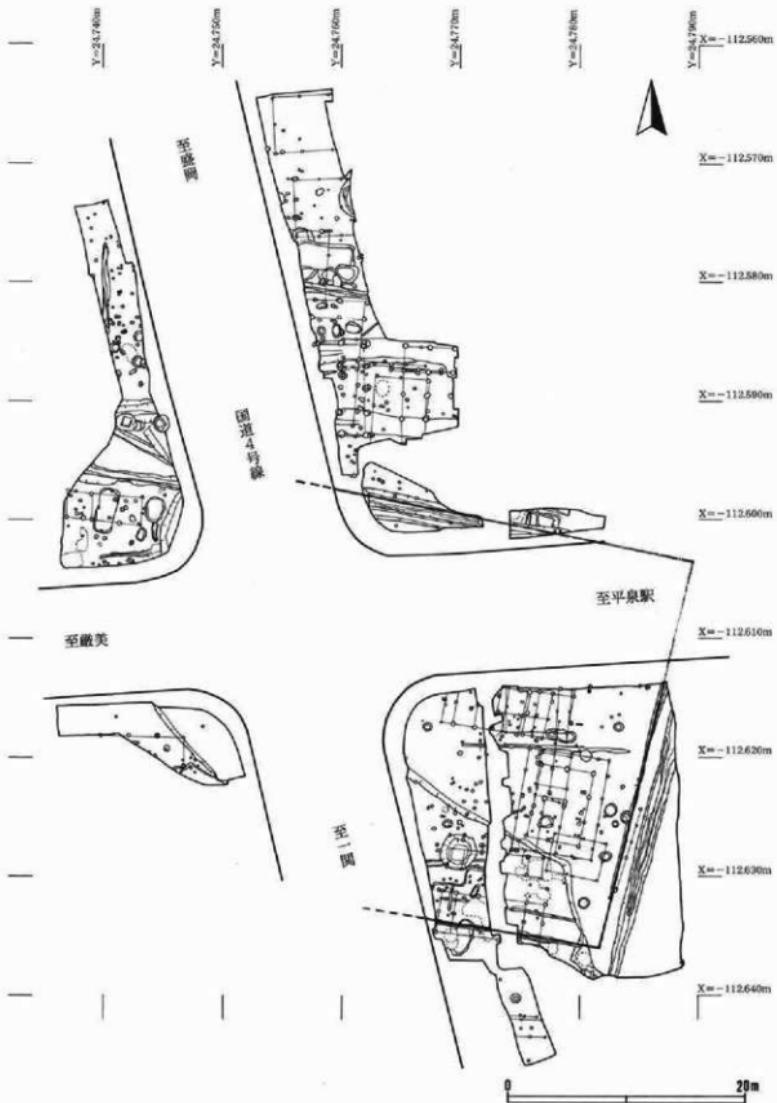
また、タテ方向の板材No.19、No.22、No.24、No.26、No.27、No.40、No.42、No.43、No.44、No.51には長方形状の穴が設けられている。他にも残存はしていないものの穴があったであろうと思われる板材が見受けられる。どのような構造になっていたのかは不明であるが、おそらくほぞ穴的なものと思われる。

67区溝跡1号は、56次調査における28区溝跡1号と同一の溝と思われる。規模、覆土及び輪線方向ともに似通った特徴を示す。

72区溝跡1号は、67区の調査結果から67区堀跡1号及び67区溝跡2号の延長部分が検出され、当然板材が検出されるものと予想していたが、堀を作った際の人为的埋土は確認されたものの、板材および板痕跡が検出されなかつたため溝跡としてのみ命名した。

72区溝跡2号、72区溝跡3号は、切り合い関係から72区溝跡1号より古いものと思われる。輪線はそれぞれN-6°-E、N-12°-Eであり、72区溝跡1号に直交するように位置する。規模、覆土の様相等似通っている。

これら検出された溝跡の時期については、出土遺物等から12世紀後半に属するものと思われるが、新旧関係において新しい67区溝跡1号3層と古い67区溝跡2号2層から接合する常滑産壺（三筋壺？）の口縁部が出土している（No.77）。ともに自然堆積の様相を呈する埋土下層からの出土である。常滑市民俗資料館の中野晴久氏、（財）瀬戸市埋蔵文化財調査センターの吉木修氏による鑑定では編年の3型式に属するとの見解であり、壺の生産は1175～1190年となる。これら遺構の廃絶時期、すなわち遺構の下限年代は12世紀末であることから約20年たらずの短期間内に67区溝跡2号→67区堀跡1号→67区溝跡1号という土木作業が行われていたということになる。



第27図 区画想定図

一方、67区堀跡1号に対応する可能性のある堀跡が第67次調査の65区、66区において検出されている。65区堀跡1号と66区堀跡2号が土地あるいは屋敷を区画する可能性については67次調査のまとめで述べているが、67区堀跡1号のN-100°-Eは、65区堀跡1号の軸線方向N-100°-Eと一致する。65区堀跡1号は布堀り開口部35~45cm、深さ40~50cmで、板痕跡は幅35~45cm、厚さ4~5cmである。66区溝跡2号は、検出規模が布堀り開口部幅24~30cm、深さ14~16cmと小さいが、調査区全体の地山が約30cmの削平を受けており、元の形を想定すると65区溝跡1号と同規模程度になることが予想される。整理すると、67区堀跡1号が区画の北辺にあたる堀、65区堀跡1号が区画の南辺、66区溝跡2号が区画の東辺にあたると捉えることができる。北辺の67区堀跡1号と南辺の65区溝跡1号の南北差は約34mとなる。この区画の西辺は、56次調査28区と67次調査1区の両調査区から該当する遺構が検出されていないことから国道4号下に存在するものと思われる。

また、この区画の全体形については現時点では不明であるが、これまで志羅山遺跡で確認されている方形区画と比較してみたい。これまで志羅山遺跡では、一辺が160mの西側方形区画と、ややその南に位置する一辺が約65mの方形区画、さらには志羅山遺跡東端側で泉屋遺跡にまたがり、鈴沢の池跡に接する方形区画が確認されている。軸線方向を比較すると、西側方形区画がN-2°-E（東辺から約10m西側の区画溝）、その南の方形区画がN-10°-Eであり、今回確認された区画の東辺がN-14°-Eであることから若干のズレが見受けられる。

さらに、この区画が何に関連する区画であるかということについては、67次調査のまとめでも述べているが、おそらく屋敷に伴う区画であろうと思われる。掘立柱建物跡は当センター調査区検出分の掘立柱建物跡に加え、隣接の平泉町文化財センター調査区においても数棟検出されている。遺構の詳細な時期は今後さらに検討が必要と思われるが、12世紀に属する遺構として井戸跡が66区井戸状遺構1号、便所跡が66区上坑2号をはじめ、ゴミ捨て場と思われる土坑等も区画内に存在しており、屋敷跡の存在を窺わせている。

## ②池状遺構

72区池状遺構1号は、西側の溝状部分と東側の低地部分からなる。溝状部分は池上にあたる導水路、低地部分は池跡にあたると思われる。調査範囲が狭いため遺構の全体形は不明である。排水路及び池尻は検出されなかつた。溝状部分の軸線方向はN-101°-E~N-108°-Eで、開口部幅82cm以上、底部幅22~35cm、深さ24cmである。約3度の傾斜角をもち、水は東流する構造となる。溝状部分の南壁はやや緩く外傾して立ち上がる。北壁は不明である。低地部分は標高24.1m前後から始まりものと思われ、確認できた範囲内における最大の深さは検出面から42cmである。約2度の傾斜角をもつ。また、溝状部分から池状部分への傾斜角は21度である。

72区溝跡1号、72区溝跡2号、72区溝跡3号に重複関係が見られ、本遺構が古い。覆土は滯水性の堆積土で、上層下層ともに粘土質であり、下層は砂質を伴う。

精査途中、溝状部分と池状部分の汀線付近には、3~5cm大の黒色のシミ状の広がりが見受けられた。これは護岸に敷き詰めていた河原石を取り去った可能性もあるが、詳細は不明である。

本遺構の性格についてであるが、これまで志羅山遺跡では16次調査、66次調査等で池跡が検出されており、これらと比較していきたい。16次調査は中島をもつ池跡で、報告書によると毛越寺の大泉ヶ池、觀自在王院の舞鶴ヶ池、柳之御所跡検出の池等と比べると規模の違いはもとより、出土遺物から時代や存在意味の違いも見られ、かわらけも完形品は少なく破片がほとんどで儀礼的に使われたとは考えにくいとある。出

土遺物にも13世紀の常滑産窯や13世紀中葉～14世紀の中田産青磁碗が出土している。12世紀に属する66次調査の池跡は、鳳凰が描かれた巻や笹塔婆が多数出土しており、儀式的な意味合いが色濃い。本造構の出土遺物を見てみると、遺物はすべて12世紀に属する。かわらけは完形品ではなく破片が多く、国産陶器は今回の調査全体の出土点数の56.3%にあたる193点が出土している。今回の調査終了後、隣接地を平泉町文化財センターによる調査があり、笹塔婆が数点出土していることから儀礼的な性格をもつ池であった可能性がある。

## (2) 出土遺物

遺物はかわらけ、国産陶磁器、中国産磁器、木製品、種子、粘土塊が出土している。

調査区全体における出土量を個別にみていくと、かわらけは登録した101点を含め約45kg、国産陶器は343点、中国産磁器は6点、木製品62点、その他に種子や粘土塊がある。

造構内出土と造構外出土に分類すると、造構内からの出土が多い。これは、調査面積が狭く調査区のほとんどを造構が占め、第56次や第67次調査で確認された遺物包含層がなかったためである。

### ①かわらけ

かわらけは全部で101点の登録をしており、造構内から94点、造構外から7点である。101点の内訳は手づくねが85点、ロクロが12点、内折れ4点である。器形はすべて皿形である。67次調査で出土したボウル状のものはなかった。手づくねは小型が32点、大型が53点である。ロクロは小型が5点、大型が7点である。

分類すると、手づくねでは一段なで技法が47点、二段なで技法が38点である。一段なでは、C 3が6点（手づくね小2点、手づくね大4点）、C 4が21点（手づくね小3点、手づくね大18点）、C 5が17点（手づくね小4点、手づくね大13点）、C 5'が4点（手づくね2点、手づくね大2点）である。二段なでは、D 2が4点（手づくね小2点、手づくね大2点）、D 3が12点（手づくね小9点、手づくね大3点）、D 4が21点（手づくね小10点、手づくね大11点）である。ロクロではr dが5点、R dが3点、R d 2が4点となる。

造構別にみると、67区溝跡1号は4号ビニール袋約6袋分（約3.0kg）、67区溝跡1号は4号ビニール袋約36袋分（約17.9kg）、67区溝跡2号は4号ビニール袋約13袋分（約6.4kg）、67区溝跡1号は4号ビニール袋約9袋分（約4.6kg）、67区池状造構1号は4号ビニール袋約6.5袋分（約3.2kg）となっており、67区溝跡1号からの出土が最も多い。

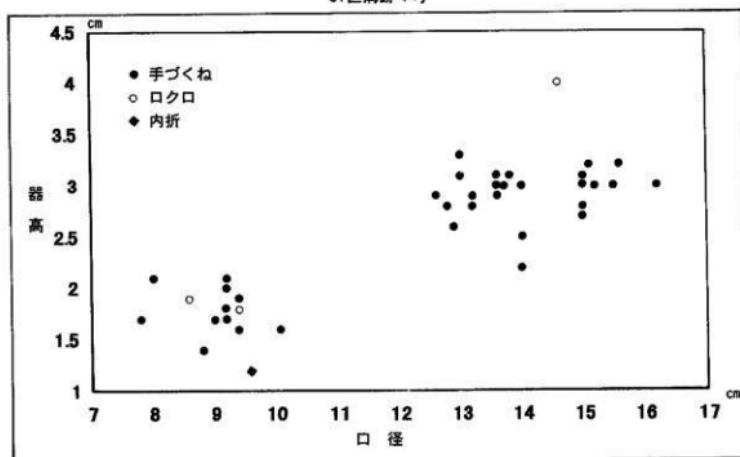
### ②国産陶磁器

国産陶磁器は全部で343点出土しており、造構内が279点（常滑産80点、瀬美産199点）、造構外が64点（常滑産25点、瀬美産38点、その他1点）である。12世紀の国産陶器は常滑産105点、瀬美産237点の合計342点の出土である。壺・甕類が339点（常滑産102点、瀬美産237点）、碗・鉢類が3点（常滑産3点）である。その他、15世紀中頃の古瀬戸の瓶子が1点出土している。

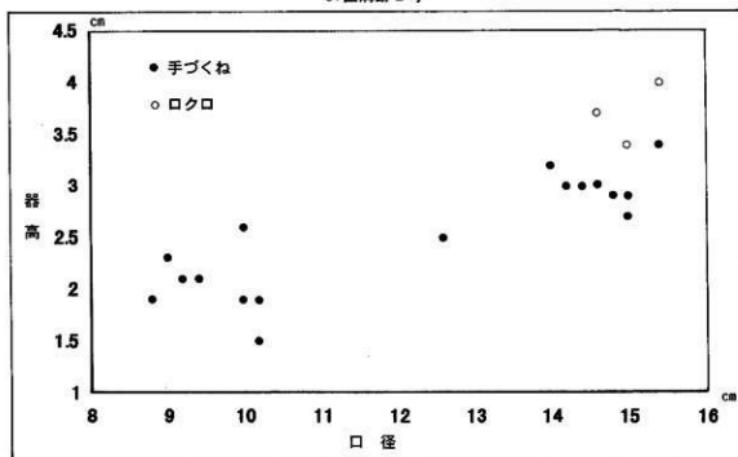
### ③中国産磁器

造構内から4点、造構外から2点の合計6点が出土している。種類はすべて白磁で、器種は壺4点、碗2

67区溝跡 1号

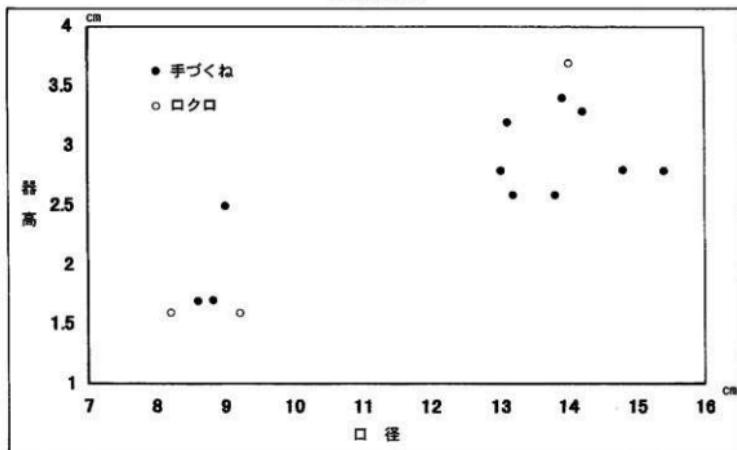


67区溝跡 2号

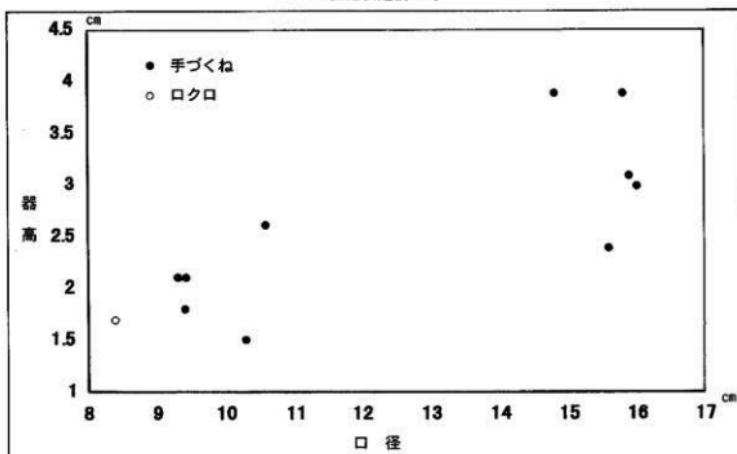


第28図 かわらけ法量分布図（1）

72区溝跡1号

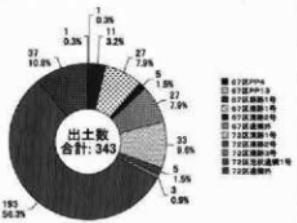


72区池状遺構1号

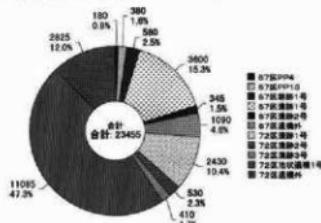


第29図 かわらけ法量分布図（2）

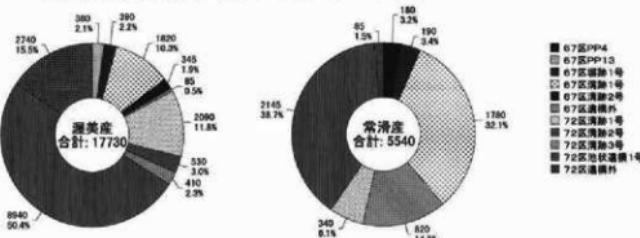
遺構別国産陶器出土数(点)



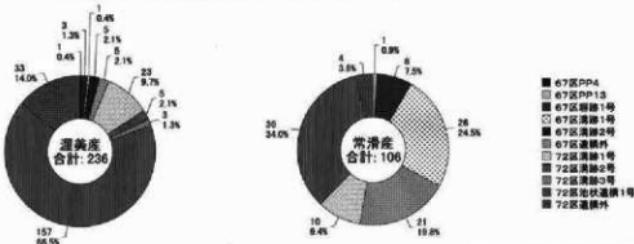
遺構別国産陶器出土量(g)



遺構別国産陶器(渥美産・常滑産)出土量(g)



遺構別国産陶器(渥美産・常滑産)出土数



第30図 国産陶器出土数・出土量グラフ

点である。

#### ④木製品

62点出土しており、すべて遺構からの出土である。用途不明なものが大部分を占めるが、溝跡、池状遺構から漆塗椀6点、連齒下駄2点、箸2点、曲物6点が出土した。

#### ⑤その他

種子は、調査区全体で54点89.63g出土している。ほとんどが遺構内の出土で、種類はモモ52点、クルミ1点、不明1点である。

粘土塊は調査区全体で約637.86g出土している。

#### <引用・参考文献>

市内整理担当者が第67次調査と同じであるため、第67次調査に一括掲載している。

### 3. 分析・鑑定

#### 平泉町志羅山遺跡第73次調査出土材の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

##### 1. 試料

試料は平安時代（12世紀）のものとされる下駄・曲物・漆塗桶・箸などの木製品・加工材12点（No.1～12）と、同時期のものとされる屏板材5点（No.13～17）の計17点である（表1参照）。

##### 2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1、2）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

##### 3. 結果

試料は以下の6 Taxa（分類群、ここでは属と種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I・II」（佐竹ほか 1989）にしたがい、一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（平井 1979～1982）も参考にした。

###### ・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 No.3, 5, 9, 10, 11

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

###### ・ヒノキ属の一種 (*Chamaccyparis* sp.) ヒノキ科 No.2

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型（Cupressoid）で1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第1位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にするほか各種の用途がある。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata*) ヒノキ科 №8, 12

早材部から晚材部への移行は緩やかで、晚材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は小型でヒノキ型で1～6個。放射組織は単列、1～5（8）細胞高。

アスナロは本州・四国・九州に分布する日本特産の常緑高木で、時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata* var. *hondai*）がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具など各種の用途が知られている。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 №13, 14, 15, 16, 17

環孔材で孔圓部は1～4列またはそれ以上、孔圓外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形～円形、小道管は単獨および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・柵木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 №1, 6, 7

環孔材で孔圓部は1～2列、孔圓外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形、単独、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～30細胞高であるが時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、國產広葉樹材の中でも最良のものの一つに上げられる。

・トチノキ (*Aesculus turbinata*) トチノキ科 №4

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼では横縞のリップル・マーク（ripple mark）として認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道（南西部）・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。

以上の同定結果を検出遺構名や推定されている用途とともに一覧表で示す（表1）。

表1 志羅山遺跡第73次調査出土材の樹種

試料番号(登録番号)	検出遺構名	用途	種名
1 (118)	67区溝跡2号	連歛下駄	ケヤキ
2 (145)	67区溝跡2号	箸	ヒノキ属の一種
3 (151)	67区溝跡2号	曲物	スギ
4 (155)	67区溝跡2号	連歛下駄	トチノキ
5 (250)	72区溝跡1号	箸	スギ
6 (466)	72区池状遺構	漆塗椀	ケヤキ
7 (467)	72区池状遺構	漆塗椀	ケヤキ
8 (468)	72区池状遺構	曲物？	アスナロ
9 (469)	72区池状遺構	曲物？	スギ
10 (470)	72区池状遺構	円形木製品	スギ
11 (471)	72区池状遺構	円形木製品	スギ
12 (472)	72区池状遺構	山物？	アスナロ
13 (④)	67区堀跡1号	堀板材	クリ
14 (⑩)	67区堀跡1号	堀板材	クリ
15 (⑭)	67区堀跡1号	堀板材	クリ
16 (⑯)	67区堀跡1号	堀板材	クリ
17 (⑰)	67区堀跡1号	堀板材	クリ

#### 4. 参考

下駄2点はともに連歛下駄であったが、ケヤキとトチノキ製であった。町内の遺跡では柳之御所跡（高橋 1995、能城 1995）や志羅山遺跡第66次調査<sup>11</sup>・泉屋遺跡第15次調査<sup>12</sup>でも12世紀のものとされる下駄が出土・検討されている。その用材を見ると、ケヤキが最も多く、クリやスギがこれに次ぎ、トチノキは柳之御所跡試料1点があるのみである<sup>13</sup>。出上下駄の用材には、このほかにヒノキ属やモクレン属（ホオノキ）などいくつかの針・広葉樹が認められているが、トチノキ製の下駄の出土は全国的にもごく稀な例のようである（伊東ほか 1987、伊東 1990、山田 1993）。

漆塗椀は2点ともケヤキ製であった。柳之御所跡（高橋 前出、能城 前出）や泉屋遺跡第15次調査<sup>12</sup>・同第16次調査<sup>14</sup>の出土試料でもやはりケヤキの用例が最も多い。

箸2点にはスギとヒノキ属が用いられていた。両Taxaとも柳之御所跡（能城 前出）出土試料に多数用いられている。

曲物や山物？、円形木製品〔2点とも木端（こば）面に木釘が打ち込まれていることから、筆者は桶の底板であろうと推測している〕にはスギ・アスナロの針葉樹が用いられている。志羅山遺跡第66次調査<sup>11</sup>・同第67次調査<sup>15</sup>や泉屋遺跡第15次調査<sup>12</sup>・同第16次調査<sup>14</sup>で出土している類例と同様に、削り技法で幅広の板を得るために割製作に優れた針葉樹が選択されたものであろう。

塀の板は5点ともクリが用いられていた。これも志羅山遺跡第67次調査<sup>6</sup>試料と同じく、耐朽性に優れた材質から選択されたものであろう。

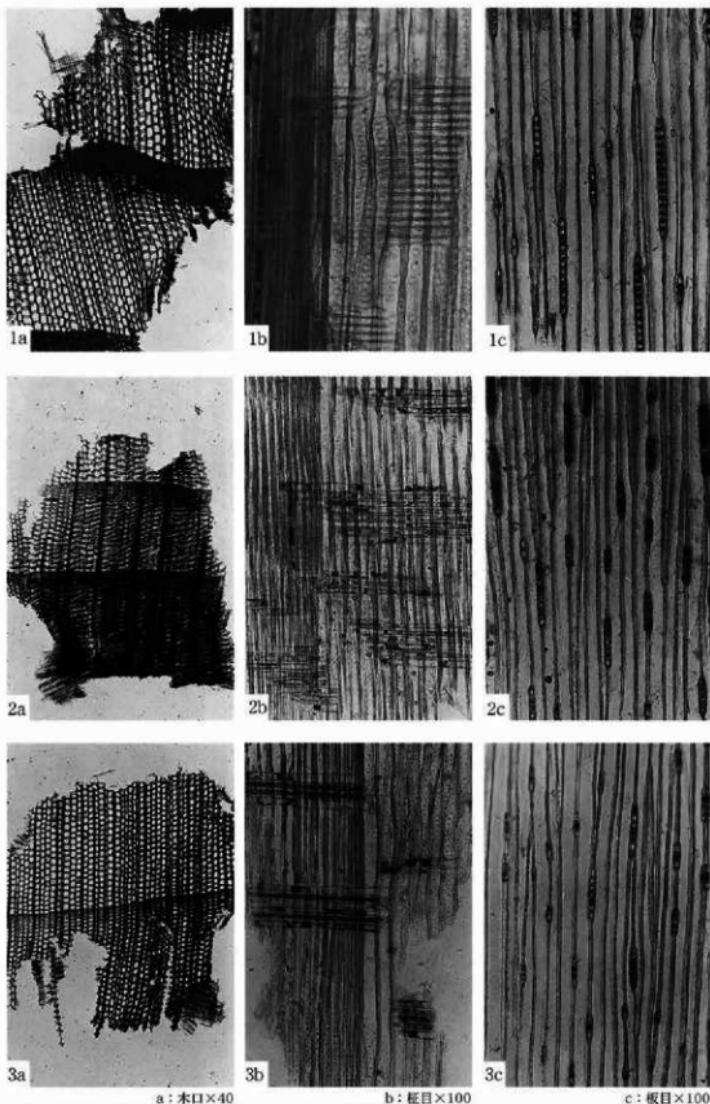
以上のように、トチノキ製の下駄を除くと、いずれも町内にある遺跡の先行調査で知られている用材とはほぼ同じ結果が得られた。それはまた、それぞれの樹種の材質（特長）を知った上で選択が行われていたことを示していると思う。なお、トチノキ製下駄については今後とも注目して行きたいと考えている。

#### <注>

- 1)「志羅山遺跡第66次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1998a)を参照のこと。
- 2)「泉屋遺跡第15次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1996)を参照のこと。
- 3)同定試料数を1点とかぞえ集計した。遺物としては同一資料の苔着下駄でも、台と齒を同定してあれば2点となる。
- 4)「泉屋遺跡第16次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1997)を参照のこと。
- 5)「志羅山遺跡第67次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1998b)を参照のこと。

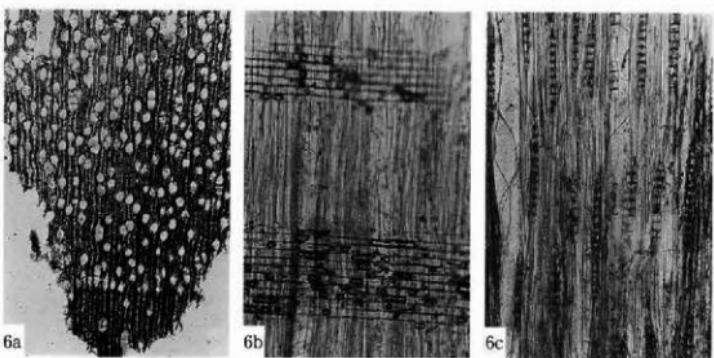
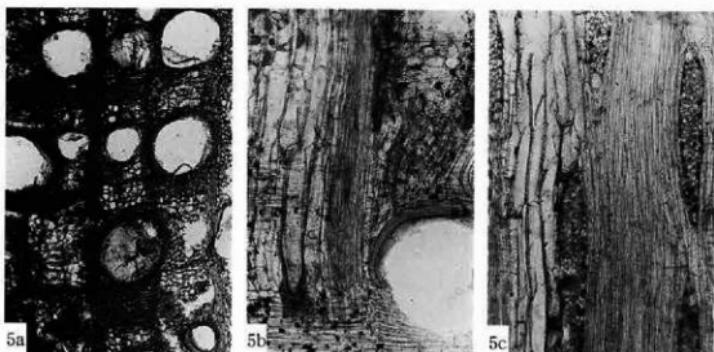
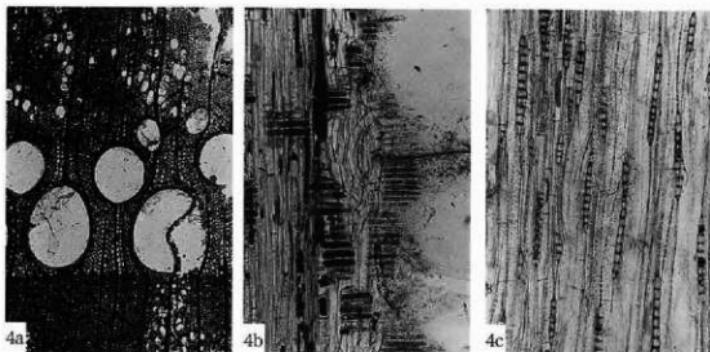
#### 引用文献

- 平井 信二 1979~1982 「木の事典 第1巻~第17巻」, かなえ書房。
- 伊東 隆夫・山口 和蔵・林 昭三・布谷 知大・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途, 「木材研究・資料」, 第23号, 42-210。
- 伊東 隆夫 1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II, 「木材研究・資料」, 第26号, 91-189。
- 能城 修一 1995 柳之御所跡から出土した木製品の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡<分冊1 本文・図版>」, (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 433-456。
- 佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本I・II」, 平凡社, 321・305pp.
- 高橋 利彦 1995 柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡<分冊1 本文・図版>」, (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 423-432。
- 山田 昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史, 植生史研究, 特別第1号, 1-242。



樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、板目では左から右。  
a : 木口×40      b : 板目×100      c : 板目×100

図版1 1. スギ No.11 2. ヒノキ属の一種 No.2 3. アスナロ No.12



a : 木口×40

b : 矢目×100

c : 板目×100

樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ、矢目では左から右。

図版2 4. クリ No.15 5. ケヤキ No.6 6. トチノキ No.4

志羅山遺跡第73次調査

写 真 図 版

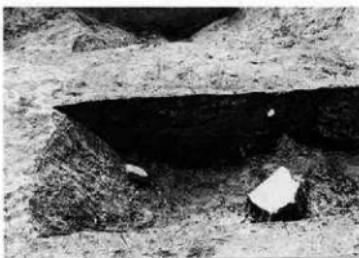




67区全景



溝路1号完掘



溝路1号断面



遺物出土状况

写真図版1 67区(1)



sondage 1号完成



断面B-B'



断面C-C'



断面D-D'



断面E-E'

写真図版 2 67区(2)



断面F-F'



断面G-G'



槌板材①～⑤



槌板材⑥～⑪



槌板材⑫～⑯



槌板材⑰～㉑



槌板材㉒～㉕



槌板材㉖～㉙

写真図版 3 67区(3)



板材⑩～⑪



板材⑫～⑬



板材⑭～⑮



板材⑯～⑰



板材⑱～⑲



作業風景



溝跡2号完堀



溝跡2号断面

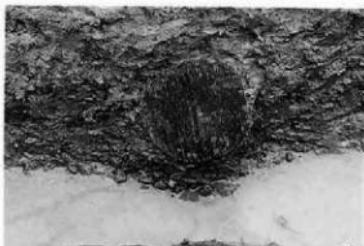
写真図版5 67区(5)



溝跡2号遺物出土状況(1層上面)



遺物出土状況(2層)



遺物出土状況(2層)



遺物出土状況(2層)

写真図版 6 67区(6)



72区全景



满踏1号完墙



满踏1号断面



遗物出土状况

写真图版7 72区(1)



溝跡2号(右)・溝跡3号(左)完壁



溝跡2号完壁



溝跡3号完壁



池状造構1号完堀



断面D-D'



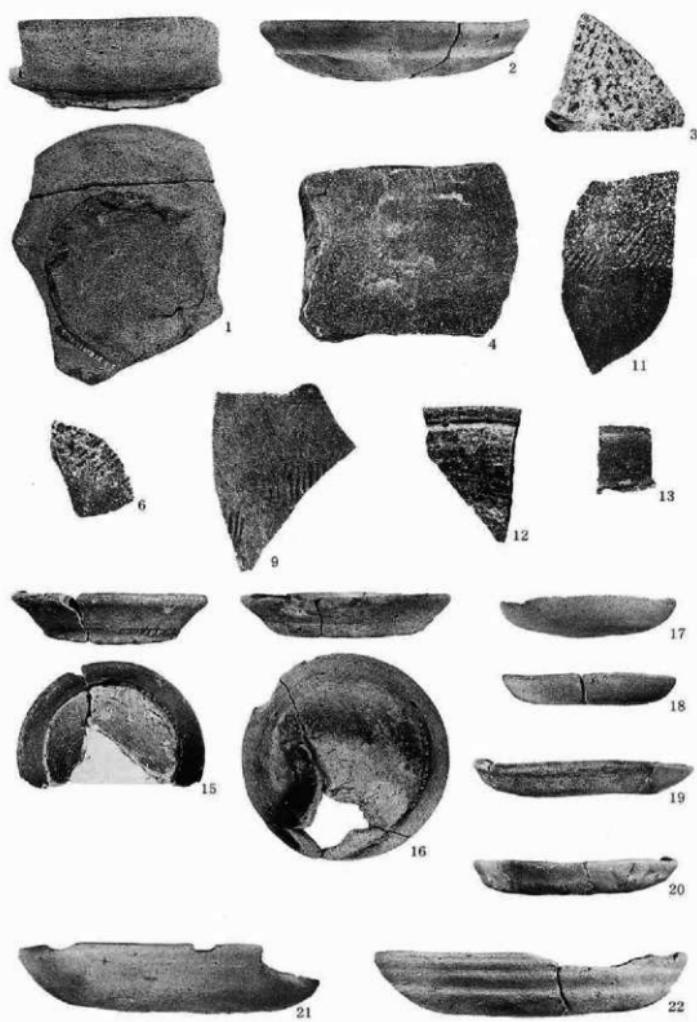
断面E-E'



遺物出土状況



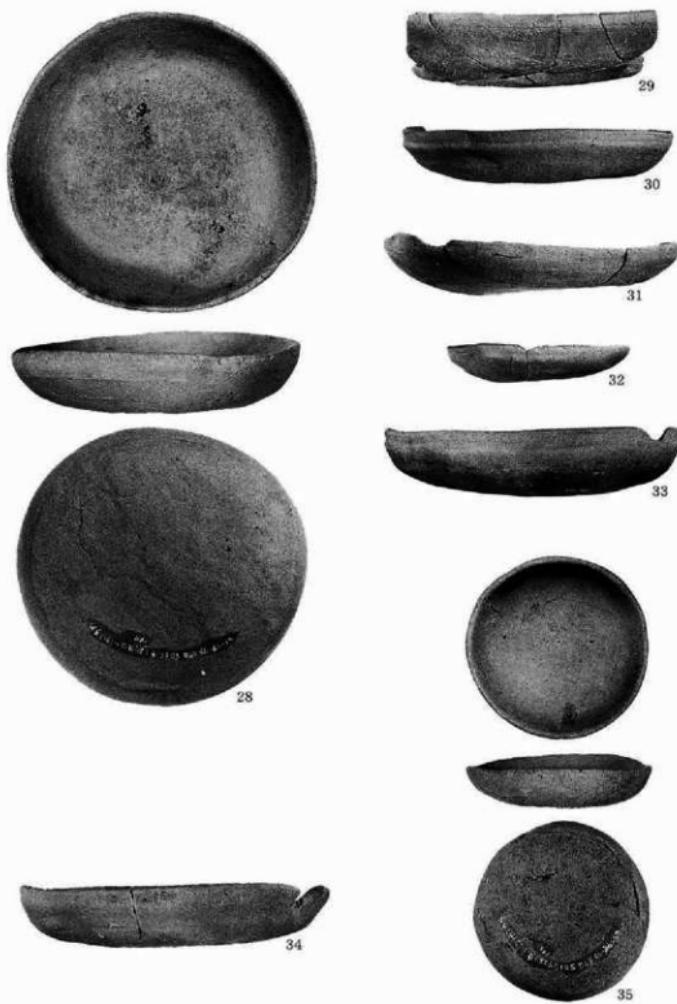
遺物出土状況



写真図版10 出土遺物(1)



写真図版11 出土遺物(2)



写真図版12 出土遺物(3)



36



37



38



40



39



41



43

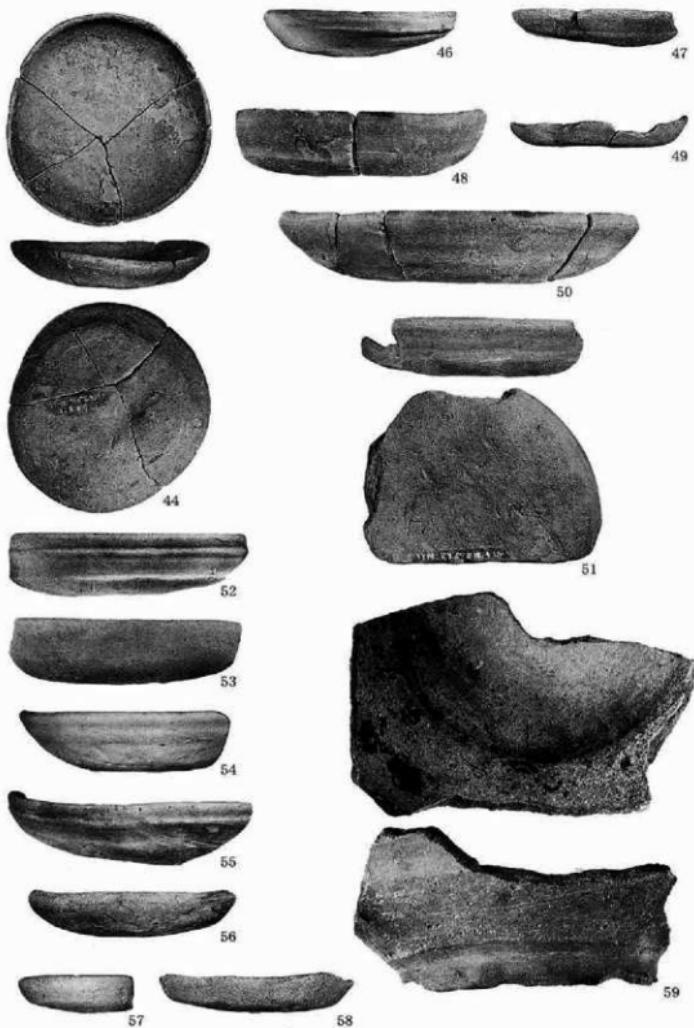


44

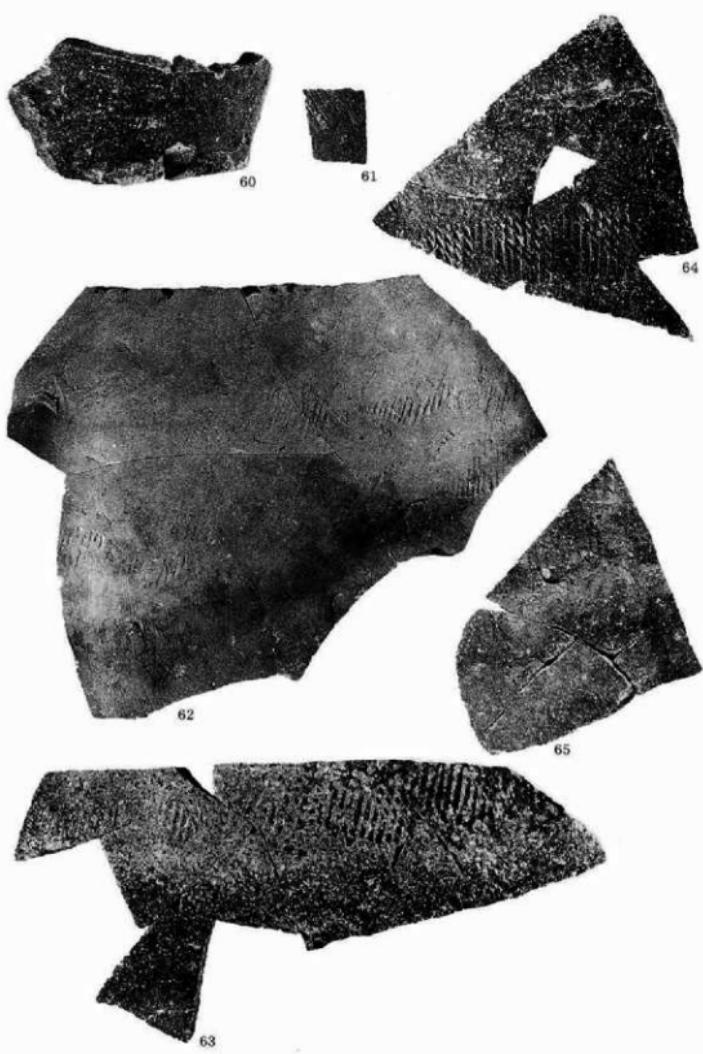


45

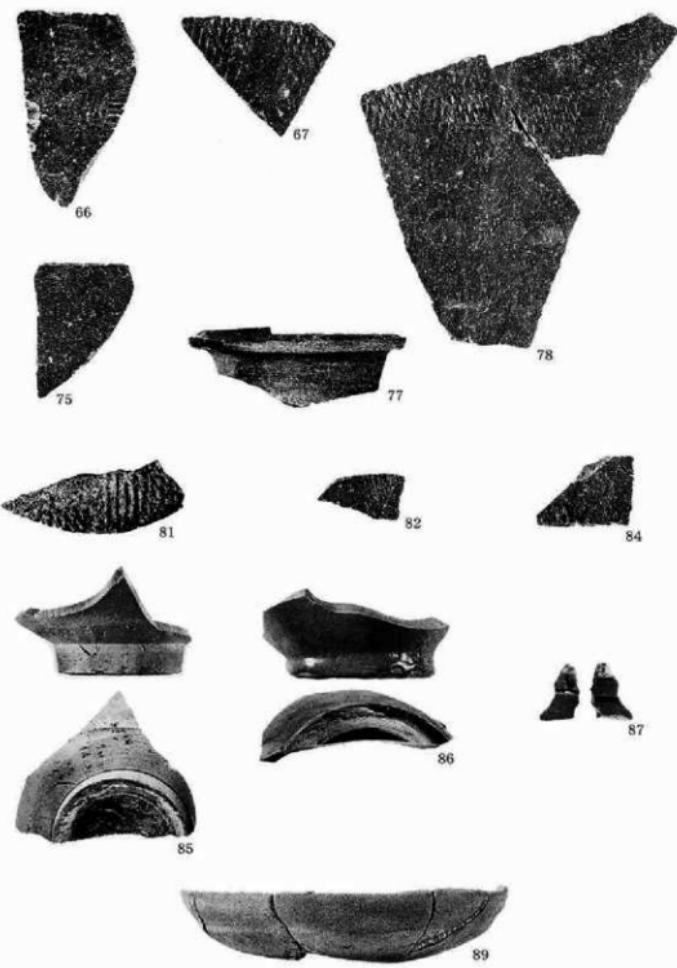
写真図版13 出土遺物(4)



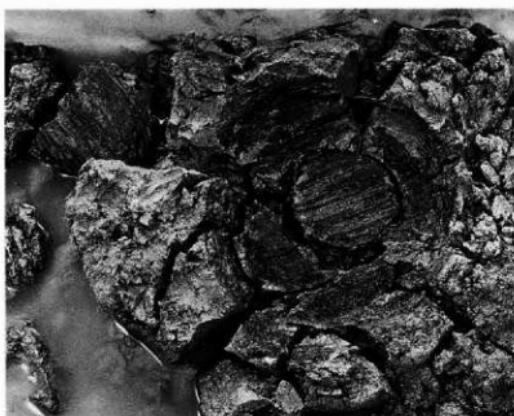
写真図版14 出土遺物(5)



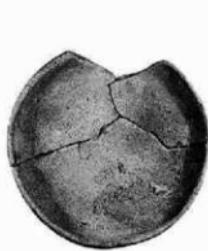
写真図版15 出土遺物(6)



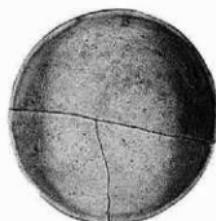
写真図版16 出土遺物(7)



88

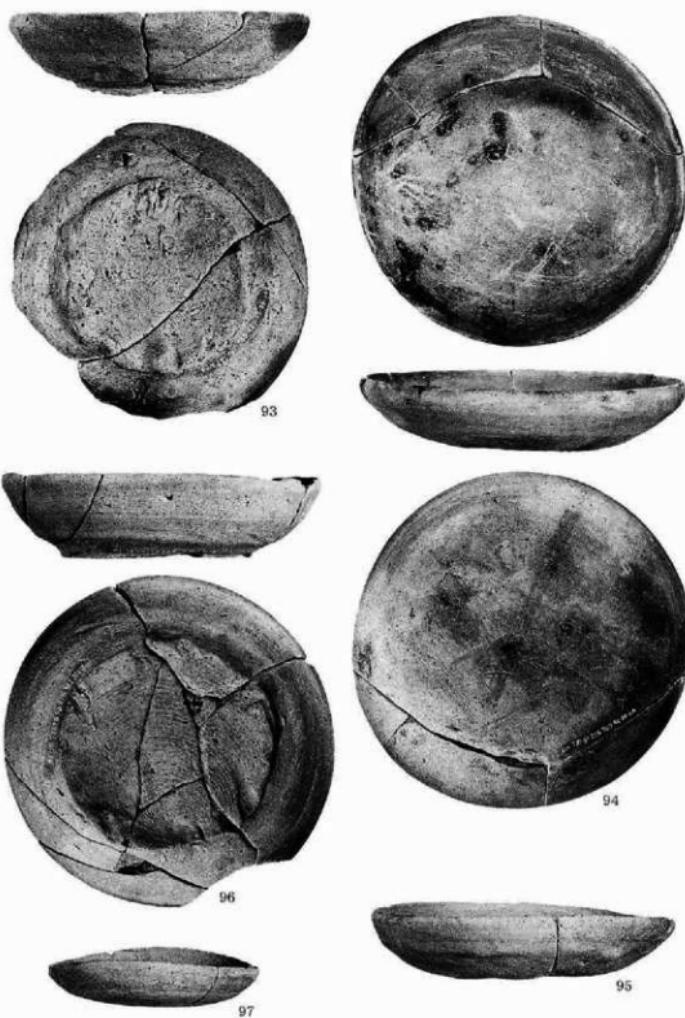


91



92

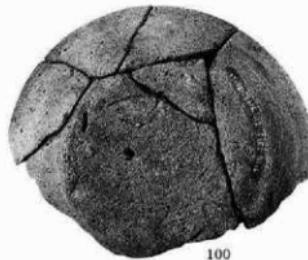
写真図版17 出土遺物(8)



写真図版18 出土遺物(9)

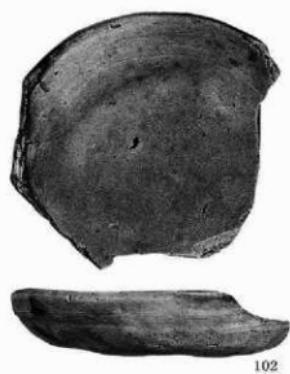


99



100

写真図版19 出土遺物(10)



102



103



105



103



104

写真回版20 出土遺物(11)



106



107



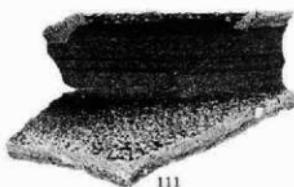
108



109



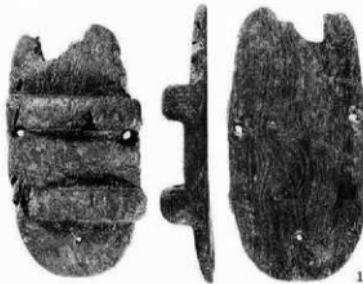
110



111

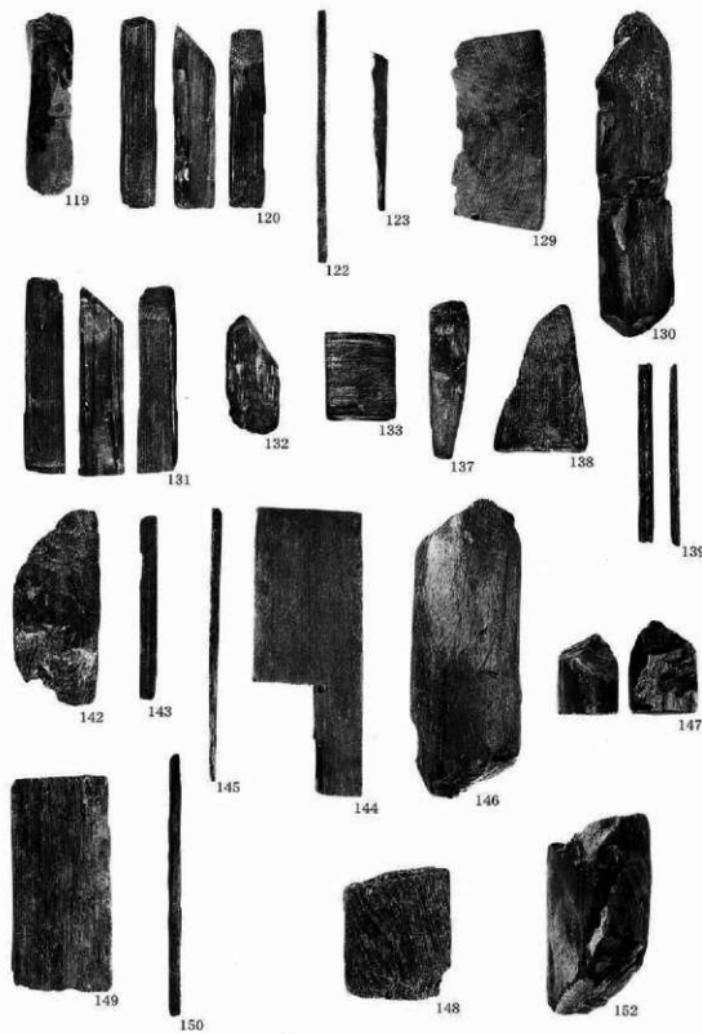


113

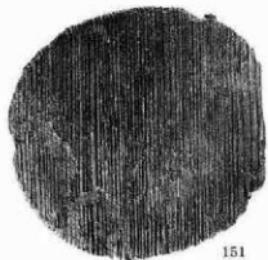


118

写真図版21 出土遺物(12)



写真図版22 出土遺物(13)



151



155



156



158



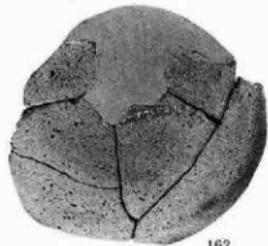
159



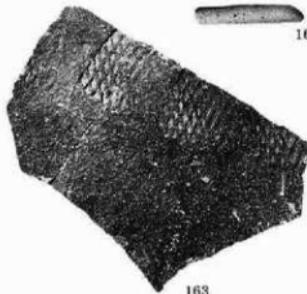
160



161

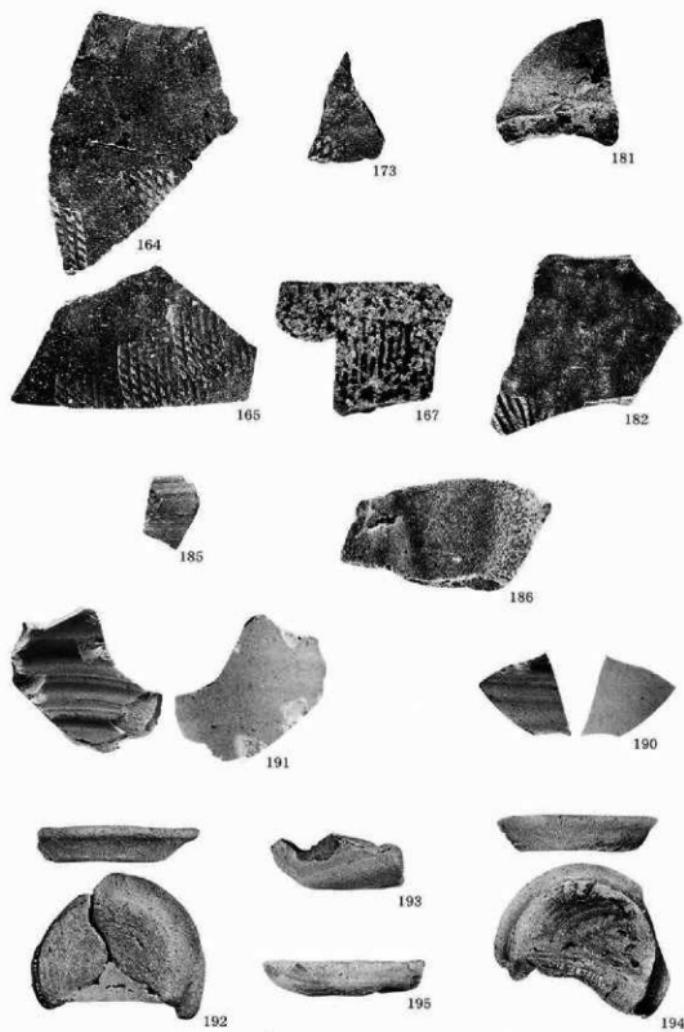


162

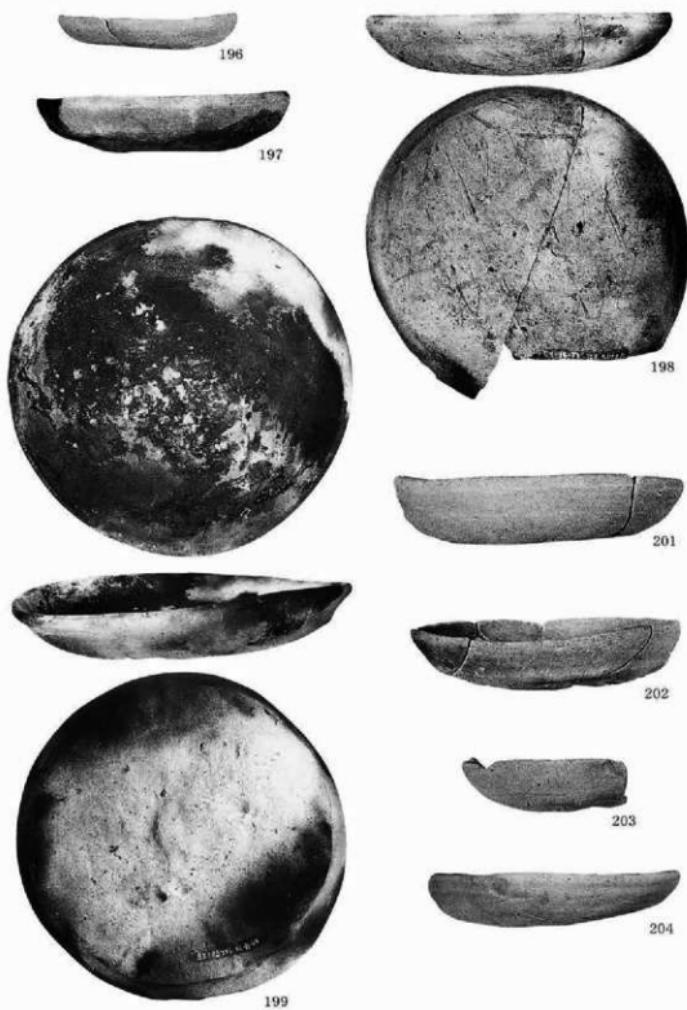


163

写真図版23 出土遺物(14)



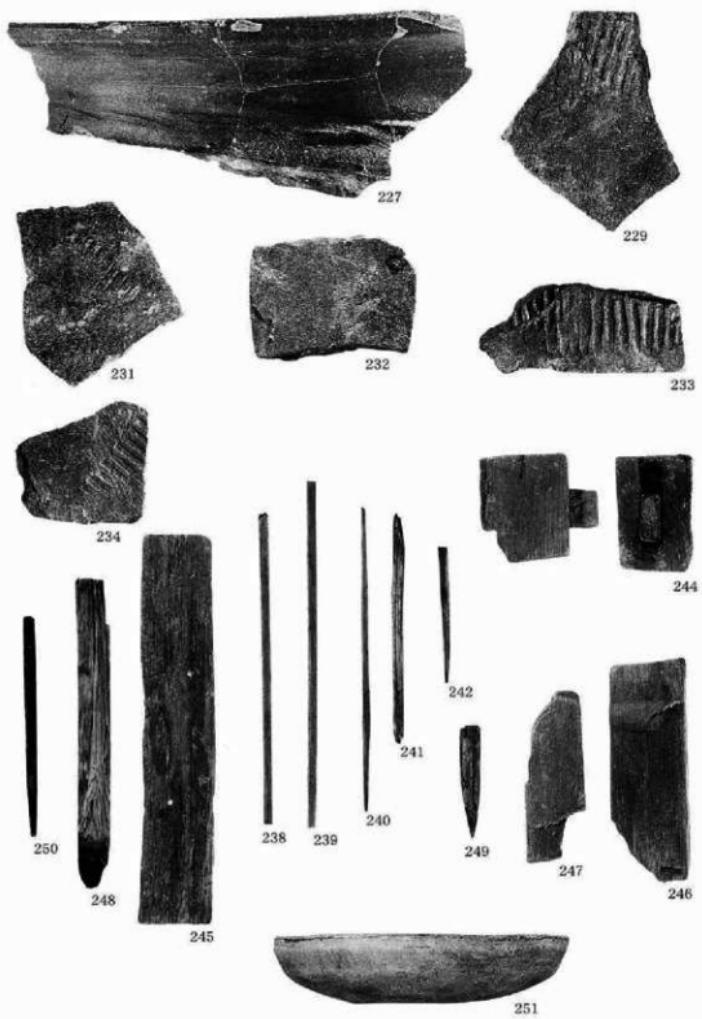
写真図版24 出土遺物(15)



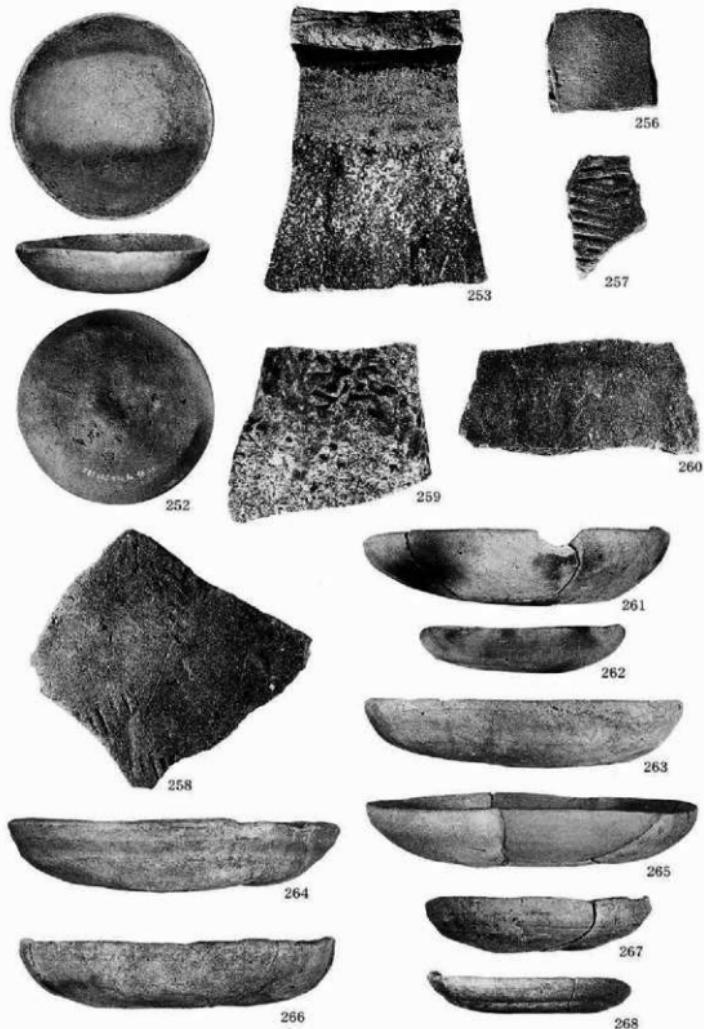
写真図版25 出土遺物(16)



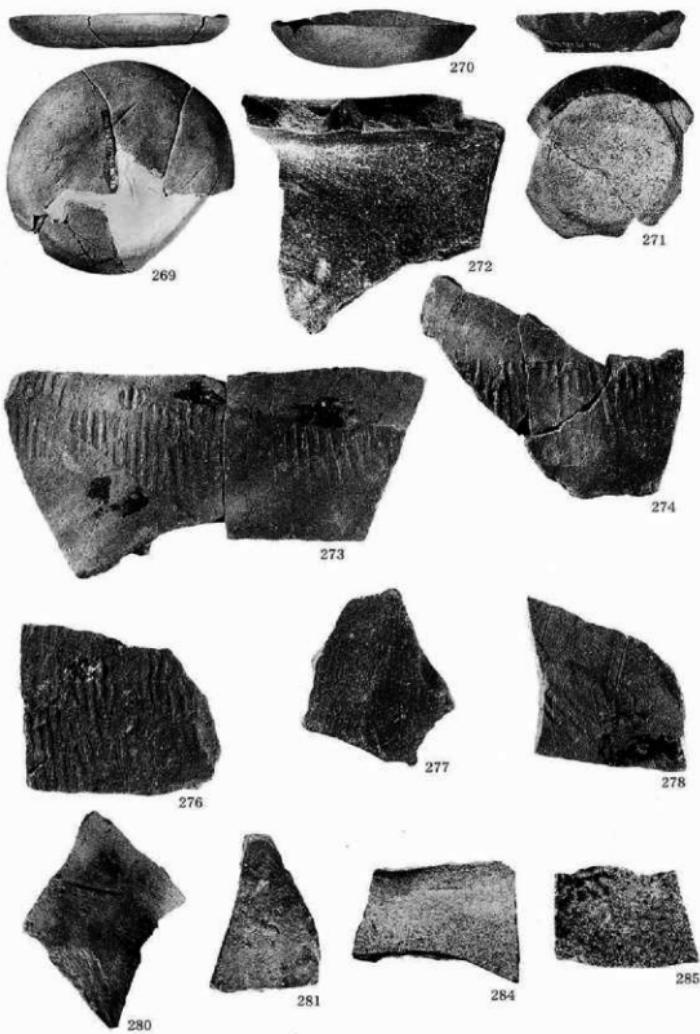
写真図版26 出土遺物(17)



写真図版27 出土遺物(18)



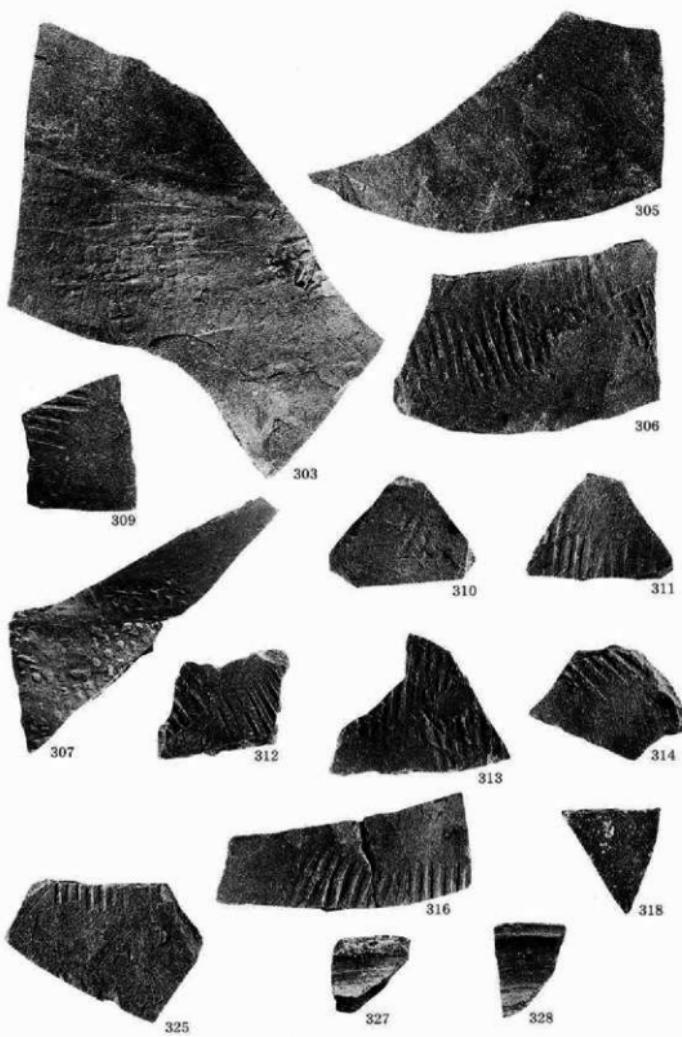
写真図版28 出土遺物(19)



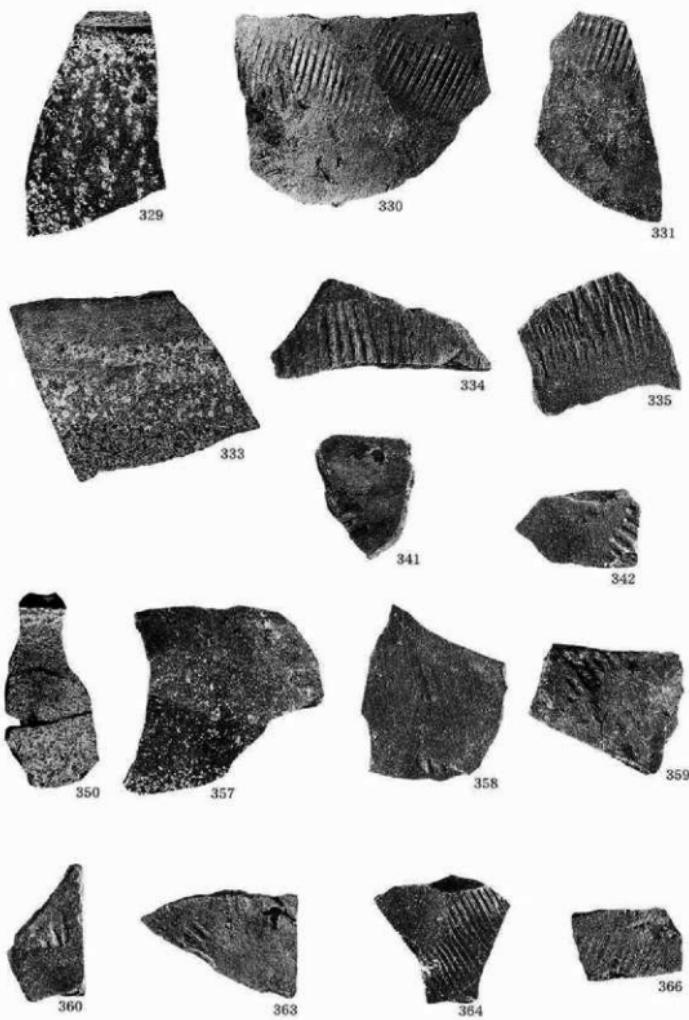
写真図版29 出土遺物(20)



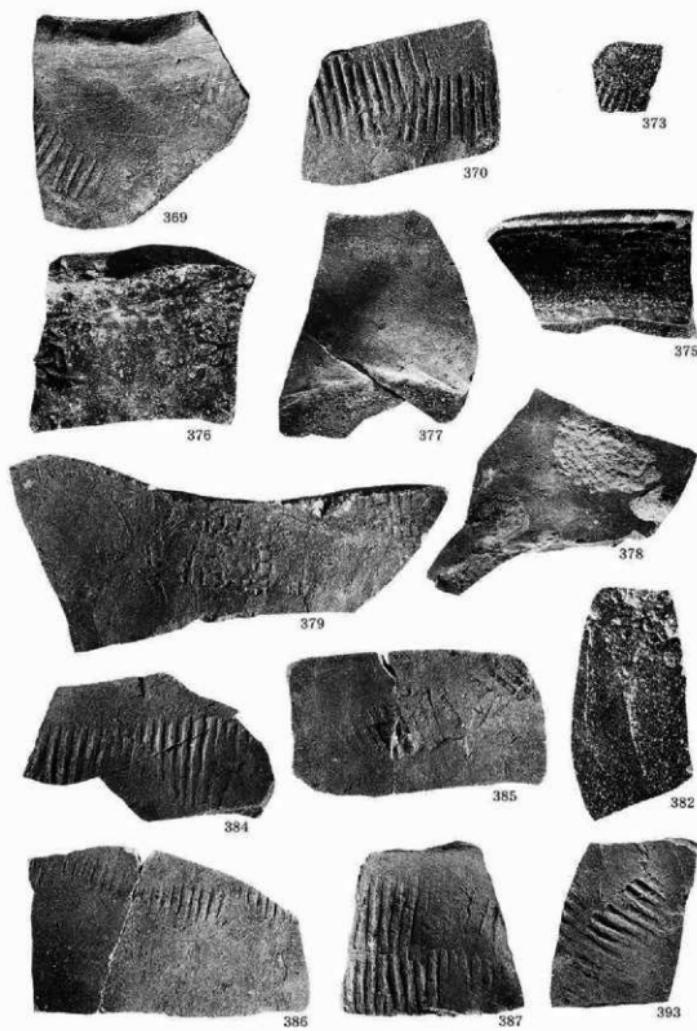
写真図版30 出土遺物(21)



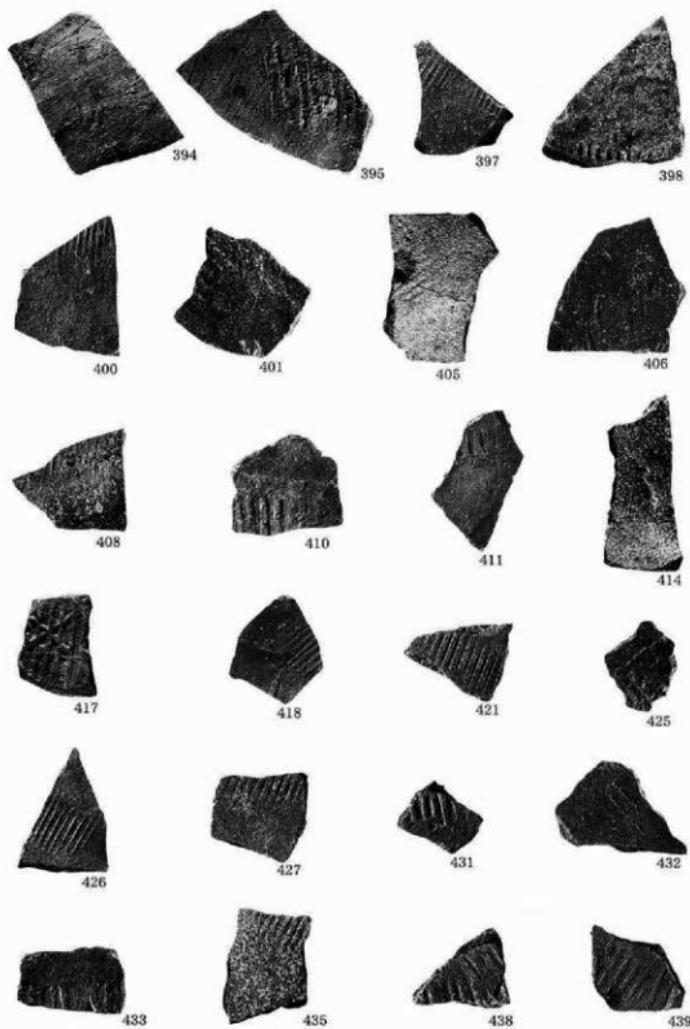
写真図版31 出土遺物(22)



写真図版32 出土遺物(23)



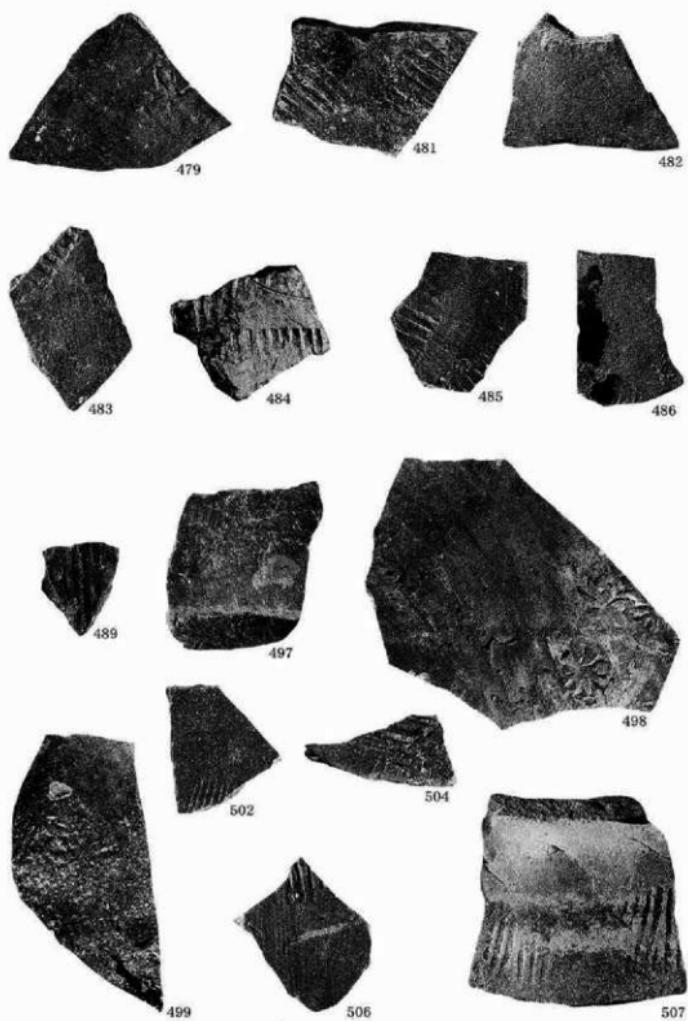
写真図版33 出土遺物(24)



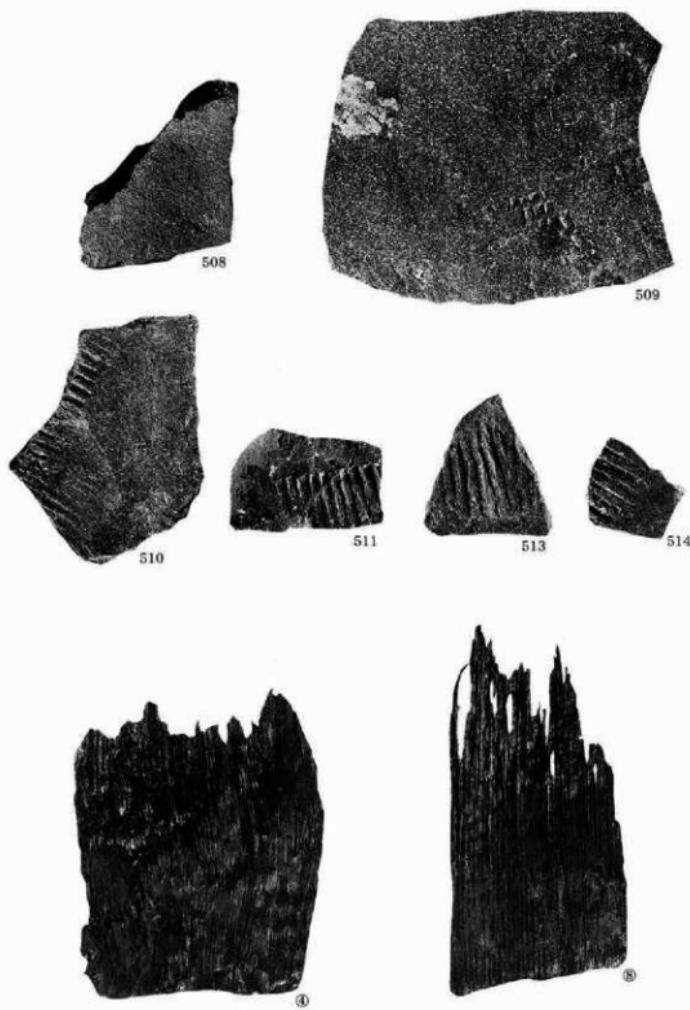
写真図版34 出土遺物(25)



写真図版35 出土遺物(26)



写真図版36 出土遺物(27)



写真図版37 出土遺物(28)



⑨



⑩

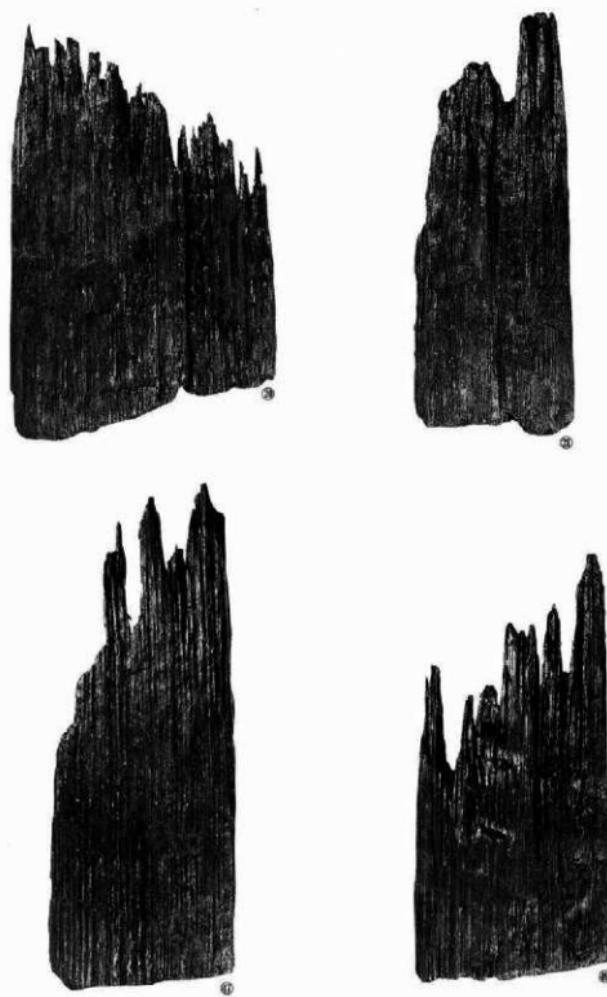


⑪



⑫

写真図版38 出土遺物(29)



写真図版39 出土遺物(30)



# 志羅山遺跡第80次調查



## VIII. 第80次調査の報告

### 1. 調査・整理の方法

#### (1) グリッドの設定と遺構名

グリッドは平面直角座標系(第X系)に合わせた。調査区内に基点1(X=-112,600, Y=24,800)及び基点2(X=-112,580, Y=24,800)を設け、これを結ぶ軸線を基に全体を $5 \times 5\text{m}$ の基本グリッドで調査区全体を区割りした。この区割りの北西隅を原点O(X=-112,585, Y=24,790)とし、東西方向にはA～Lのアルファベット、南北方向には1～6の数字を与え、A 1, B 3…と呼称した。

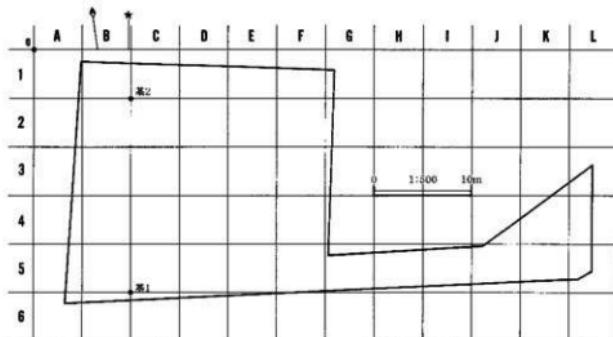
検出された遺構は、種別毎に通し番号を付けて1号住居跡、1号土坑と命名した。なお、今次の調査区は73次調査までの区名では74～76区にあたるが、調査区の幅が他の年次より広く、ほぼ全体を同時に調査でききたため煩雑さを避けて各遺構にはこの区名は付加していない。

#### (2) 遺物の取り上げ

出土した遺物は遺構内については、埋土の上部・中部・下部に分け、床面及び床面直上のものについては場合によって写真撮影や実測(出土標高のみを記録したものもある)後に取り上げた。遺構外出土遺物や包含層出土の遺物は、グリッド名と層位を記して取り上げた。

#### (3) 室内整理

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基に1/100の縮尺図を作成し、仕上がり1/250で掲載した。遺構・遺物の実測図は下記の縮尺で掲載したが、一部に変更があり、図版にはそれぞれスケールまたは縮尺率を付いている。竪穴住居跡：平面図・土層断面図…1/50、カマド・付属土坑断面図…1/30、道路跡：平面図…1/120、各種断面図…1/40、土坑・井戸跡：平面図・断面図…1/40、溝跡：平面図・断面図…1/50、埋納遺構：平面図・断面図…1/20、遺物の実測図等は土器・陶磁器・拓本…1/3(小型：1/2)、土製品…1/3、木器・木製品…1/3(大型：1/4・1/6、小型：1/2)、石器・石製品…1/2・1/3、金属製品…1/2・1/1。なお、各図面に使用した記号、スクリーン・トーンの指示は第3図に示した。



第1図 グリッド配置図

## 2. 基本層序

F 3 グリッド東端と I 6 グリッド中央の土層を基に柱状図を作成(第2図)し、基本層序とした。なお、0層とⅢ層の一部を除いて各層はグライ化し、色調はオリーブ灰色～緑灰色を呈する。

0層：近代の擾乱層及び現代の宅地造成に伴う盛土を一括した。  
50～70cmの層厚を持ち、調査区南東側で厚い。

I層：旧表土層及び水田耕作土と考えられるグライ化土層で、遺物をほとんど伴わない。中世?～近世・近代に亘るものと考えられ、数層に細分されるが今回の調査では一括した。層厚は10～40cmである。

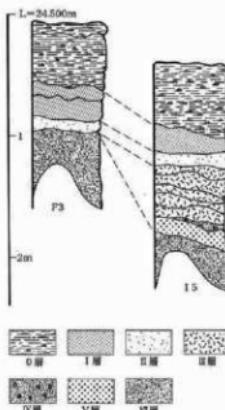
II層：粘性の強いグライ化土層で、調査区のほぼ全面を覆う。炭化物及び12世紀代の遺物を包含するが、多くは小破片な上摩耗が著しい。なお、当層を除去すると各種の遺構が検出される。層厚は10～20cmである。

III層：II層の下部から十和田a降下火山灰までの層を一括した。広義には12世紀の層で旧表土、整地層も含まれる。また、緩い沢地形を呈する遺物包含層部分(G～J 5)では、十和田a降下火山灰の上部に黒味の強い土層が堆積する。

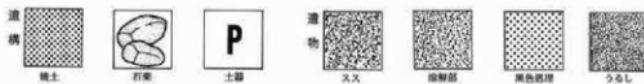
IV層：十和田a降下火山灰層で、1号竪穴住居跡及び6号溝跡、G～J 5 グリッドに堆積する。灰白色の粉状バニス層で、層厚は最大で10cmである。

V層：十和田a降下火山灰下部の層で、降下直前から縄文時代までの土層になるが、包含層部分でのみ確認された。調査区内では10～30cmの層厚を持つが、南側に向かって厚くなっている。

VI層：無遺物層の粘性グライ化土層で基本的には無遺物層であるが、調査区中央部では縄文土器や石器が僅かながら出土することから、一部V層を含むものと考えられる。しかし、肉眼での分層はできなかつた。当面が最終検出面である。層厚は不明で下部はいくぶん砂質となるが、井戸跡底面でも礫層は見られなかった。



第2図 基本土層柱状図



第3図 実測図凡例

### 3. 検出された遺構と遺物

第80次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、道路跡1条、溝跡7条、井戸跡4基、土坑10基、埋納遺構3基、柱穴143個である。竪穴住居跡、溝2条、土坑1基を除き12世紀代の遺構と考えられる。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 1号住居跡

遺構(第4・5図・写真図版8・9)

<検出状況・重複関係> C-4グリッド、調査区中央の南よりに位置する。II層を除去した段階で、酸化鉄を含む黒褐色土の広がりとして検出された。1号道路跡東側溝及び7号土坑と重複し、北東隅部分を前者に、床面中央を後者に切られる。なお、側溝によって分断されるが、検出位置や埋土の状態から6号溝跡は当住居跡に付属する所謂「外延溝」の可能性が高いため、ここでは併せて記述する。

<規模・平面形>東西3.4m、南北3.9mの歪な長方形を呈する。床面積は約10m<sup>2</sup>で、主軸方向(カマド設置壁と直交する線の角度)はE-11°-Nである。

<埋土>上部は黄褐色ブロックを含む黒褐色土と炭化物を含む黒褐色土、下部は粘性が強い浅黄色土が主体となって構成され、この間に十和田a降下火山灰の薄層を挟む。上部の黄褐色土を含む土層は、12世紀代の整地層に使用される土層に類似しており、この可能性が高い。なお、7号土坑はこれらの構成層を切っている。

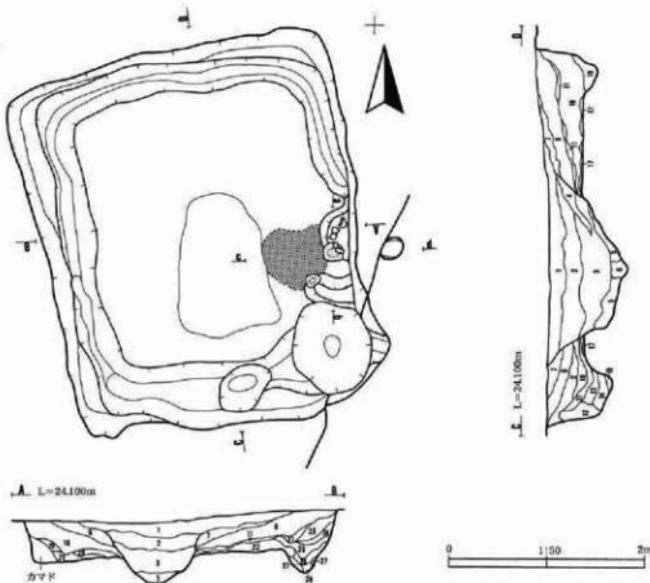
<壁・床面>壁は重複部を除いてほぼ垂直に立ち上がるが、精査の段階で乾燥によって崩落した部分がある。各部の壁高最大値は東壁41cm、西壁44cm、南壁37cm、北壁53cmである。カマドの周囲を除いて幅30~55cm、深さ10~25cmの横溝が巡り、道路側溝壁面の観察では南東隅部から住居外に延びている様に見える。床面はVI層中で、ほぼ全面に粘性が強い土によって3~10cmの厚さで貼り床が施されている。しかし、降雨や湧水により下部の掘り方を明確に把握することはできなかった。また、壁内には塗材の痕跡は認められず、貼り床と同様な土が充填されている部分が多く見られた。

<柱穴>床面からは検出されていない。住居の周辺部からは径20~30cm、深さ6~18cmの柱穴状小土坑が6基検出されたが、分布には規則性はみられず、住居跡との関係も不明である。

<カマド>東壁のいくぶん南寄りに設置されている。天井部は崩落しているが、両袖部は確認できた。断面の観察では、VI層起源の粘土質土によって構築されており、南側では心材として利用していた可能性がある亜円礫が残存していた。また、燃焼部中央の奥には長さ25cm大の楕円礫による支脚が原位置を保っていた。燃焼部には径約65cmの範囲に最大4cmの厚さで焼土層が形成されていたほか、袖部や煙道部の内側も焼けて焼上化していた。煙道部東側及び煙出部は道路側溝によって破壊されているが、壁際から約50cmが残存している。残存部の形態はトンネル式の煙道で約22°の傾斜で上昇する。

<付属施設>付属施設としては貯蔵穴状の土坑と外延溝がある。土坑はカマドの南脇から検出された。洞口部径95×85cm、底部径20×30cm、深さ43cmのすり鉢状を呈するもので、断面の観察では壁溝を切っている。

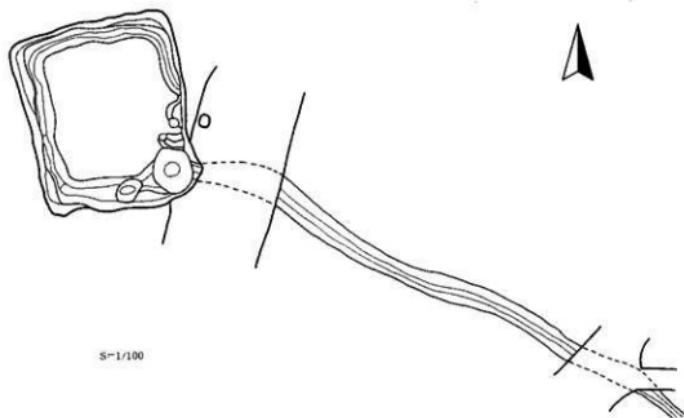
外延溝(6号溝)は、調査区中央南端部D-4~E-5グリッドに位置する。周辺部で検出された遺構の中で最も古く、重複する全ての遺構に切られている。埋土は上部が十和田a降下火山の小ブロックを含む黄褐色土、中部が暗オリーブ褐色土、下部は暗灰色~暗褐色土で構成される。規模は上端幅22~53cm、下端幅12~20cm、深さ40~13cmで、全長9.7mにわたって検出された。断面形はU字状を呈する。方向は北西~南東で、緩く蛇行して調査区外に延びている。底面の高低差は約14cmである。



カマド裏土	
1 10YR3/3	暗褐色 シルト 含泥化物(少) 漢化物
2 10YR5/1	高褐色 粘性シルト 含泥化物(少) 漢化物
3 10YR5/1	高褐色 粘性シルト 含泥化物(少)
4 10YR5/1	高褐色 シルト
5 10YR2/1	暗褐色 含オーブ流紋ブロック
6 10YR3/1	暗褐色 粘土質 含鉄鉱ブロック
7 10YR3/2	暗褐色 シルト 含明礬鉄ブロック
8 10YR3/1	暗褐色 粘性シルト 含泥化物(少)
9 10YR4/1	暗褐色 粘性シルト 含泥化物(少)
10 10YR3/1	暗褐色 粘性シルト 含泥化物(少)
11 10YR3/2	暗褐色 シルト 含Terraブロック・漢化物
12 10YR5/2	オリーブ褐色 シルト
13 10YR3/1	暗褐色 粘性シルト 含泥化物(少)
14 10YR4/1	暗褐色 粘土質土 含泥化物
15 10YR4/1	褐褐色 粘土質土 含オーブ流紋ブロック
16 10YR7/4	浅黄色 粘性シルト 含泥化物ブロック 色化物(黒)
17 10YR7/4	浅黄色 粘土質土 含泥化物
18 10YR7/4	浅黄色 粘土質土 含オーブ流紋ブロック
19 10YR4/6	赤褐色 シルト 含泥化物
20 10YR2/2	灰黃褐色 砂質シルト 含泥土・漢化物
21 10YR4/1	褐褐色 シルト 含オーブ流紋ブロック
22 10YR4/2	灰黃褐色 粘性シルト 含泥化物ブロック
23 10YR4/1	灰褐色 粘土質 含泥化物ブロック
24 10YR2/1	褐褐色 砂質シルト 含泥化物ブロック
25 10YR5/1	灰褐色 粘性シルト 含泥化物ブロック(混合土)
26 10YR4/1	褐褐色 粘土質土 含泥化物ブロック
27 10Y5/2	オリーブ褐色 粘土質土 含泥化物ブロック
28 10YR5/1	褐褐色 砂質シルト 含オーブ流紋ブロック



第4図 1号住居跡（1）



第5図 1号住居跡（2）

なお、住居跡では埋土の中部、溝では上部に火山灰が堆積することや、壁溝の埋土及び土坑との重複関係から推定して、この延外溝は住居の廃絶時にはすでに機能を停止していた可能性が高い。

#### 遺物(第22図・写真図版22)

＜出土状況＞埋土中部から下部及びカマドの周辺部から土器が出土している。なお、埋土中部から石器(425)が出土しているほか、外延溝の埋土から摩耗した繩文土器が出土した。

＜土器＞土師器の壺、甕、須恵器の壺、壺がある。1～4は土師器の壺で、いずれもロクロによって成形され、内面は黒色処理されている。4は底面が切り離し後に、手持ちヘラ削りによる再調整が施されている。5は須恵器の壺であるが、焼成があまく、全体に脆弱である。

6～13は土師器の甕である。6～9は胴部より上半がロクロによって成形されている。10～12はロクロ不使用の甕で、11はいくぶん胴部に膨らみを有する。13の胴部下端には平行叩き目痕が見られる。14は須恵器の壺で、内面には頸部と胴部の縫合目痕が明瞭に観察される。

時期 出土した土器の特徴と埋土中の十和田a降下火山灰の堆積状況から推定して、から9世紀後葉から10世紀初頭の住居跡と考えられる。

## (2) 道路跡

### 1号道路跡

#### 遺構(第6～8図・写真図版10～12)

当道路跡はこれまでの第14・46・66・69・74・78・79次の調査で検出確認されているもので、今回の調査区は最北部にあたり、確認部の総延長は約300mとなる。南端は太田川北岸を東西に走る大規模な溝と繋がり、これ以南には延びないことが第14次の調査で確認されている。南端部から約190mはほぼ南北正方位に向かい、この後100mは11～17° 東に傾く。今回調査した部分では約17° の傾きを持ち、調査区以

北は未確認であるが、このまま延長すると無量光院東辺に接する角度である。

＜検出状況・重複関係＞調査区西側B 1～E 1、B 5～D 5グリッドに位置しする。II層を除去した段階で、ほぼ南北に約23mに亘って併走する2条の溝として検出された。南側は整地地業層を伴うが、検出時点ではこの存在が把握できず、この部分は上部を削りすぎている。1号住居跡、6号溝跡、3号溝跡、4号土坑と重複しいずれの遺構よりも新しい。ただし、1号住居跡を切る7号土坑との新旧関係は、前述の削りすぎのため明確に把握できなかった。記述にあたっては東側側溝を1号溝、西側側溝を2号溝とし、これらの中での新旧はa・bとした。

＜側溝＞1号、2号とも検出当初は1条と考えたが、精査の結果少なくとも1回の改築が行われていることが解った。古期をa、新期をbとして記述する。

1号溝：北端部は現代の擾乱によって上部を破壊されているが、この他の部分は残存状態は良い。断面の観察及び発掘状況から、平面的にはD 3グリッドの南端部付近からb溝が分かれる。しかし、埋土の状態からD 3区以北ではb溝とa溝が同じプランを共有する形となり、この部分の埋土は全てb溝に帰属する。

1 a溝は上端幅119～152cm、下端幅30～45cm(D 3区以北)、深さ44～56cmの規模(D 3区以南)を持ち、断面形は上端が開く箱堀状を呈する。南北両端の高低差はほとんど無く、b溝底面とは最大15cmの高低差を持つ。埋土は、上部が酸化鉄が集積する黄灰～灰色土、下部は灰色～暗オリーブ灰色の粘性土で構成される。これらは中央に向かって傾斜して堆積しており、特に埋め戻した痕跡は認められない。ただ、D 3～D 4区では、b溝と接する部分に酸化鉄を多く含むいくぶん砂質の黄褐色土の堆積が見られた。

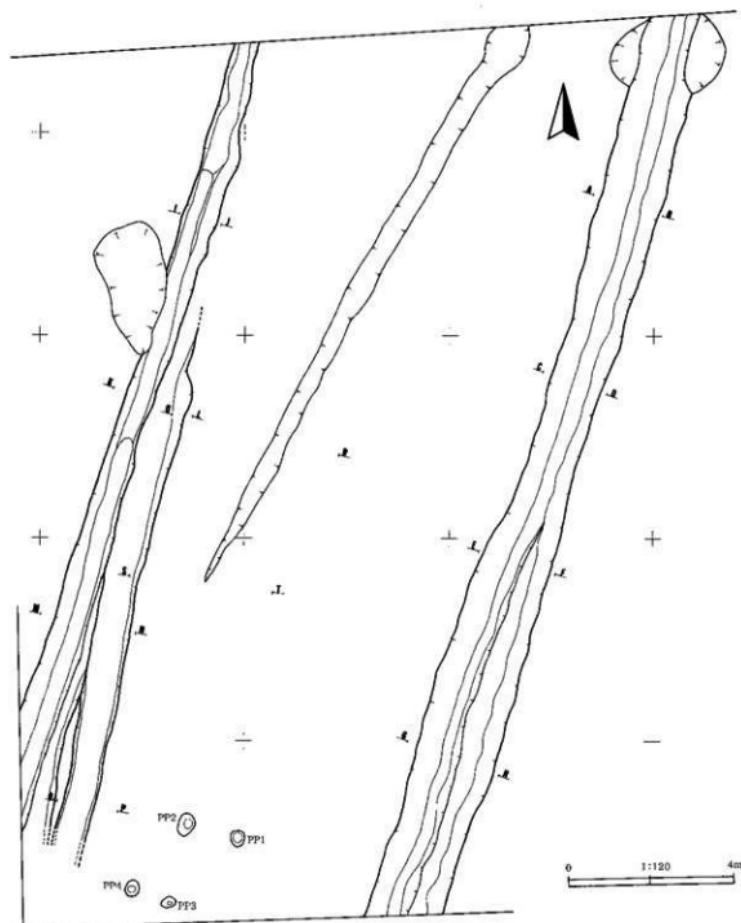
1 b溝は上端幅119～160cm、下端幅20～45cm、深さ59～92cmの規模を持ち、断面形は底面が平坦なU字状を呈する。底面における南北の高低差は約22cmで、南側が下がる。D 3区南端から調査区南端部までは、a溝より約50cm内側(西側)に寄って掘られている。埋土は自然堆積の様相を示し、上部は酸化鉄が集積するいくぶん砂質の暗灰黄色土～オリーブ褐色土、中部・下部は粘性を持つ暗オリーブ灰色土・オリーブ黒色土から構成される。なお、中部にはほぼ一面に木の葉の堆積が見られた。

2号溝：2号溝も1号溝と同様に改築が行われているがいずれも残存状態は悪く、新期のb溝は中央部(B 3区～B 5区)でのみ検出された。この原因については後世の擾乱(削平)による可能性もあるが、道路面の高さがほぼ一定であることから推定すると、元来東西の側溝は不均衡な構造であった可能性もある。また、南端部は湿地となっており、いずれの溝もプランを明確に把握することはできなかった。

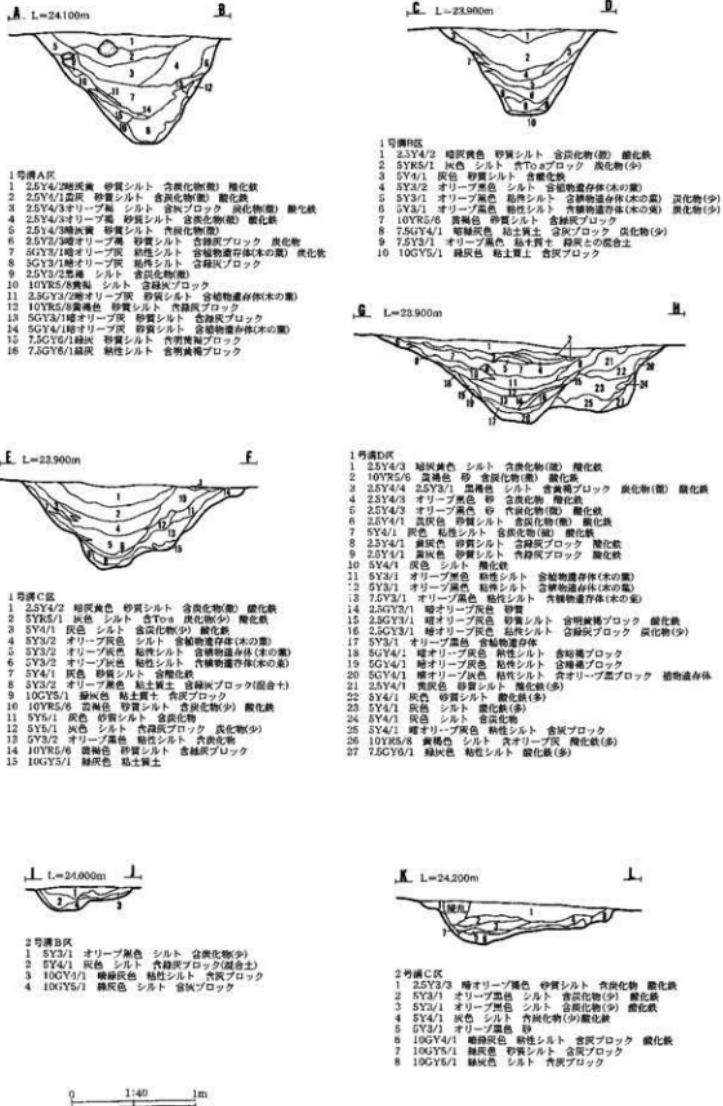
2 a溝は上端幅55～122cm、下端幅35～40cm、深さ5～64cmの規模を持ち、断面形は上端が開く箱堀状を呈する。底面における南北の高低差は約60cmで、南側に下がる。比較的残存状況の良いB 4区での埋土は上部が、酸化鉄の集積する暗オリーブ褐色土～オリーブ黒色土、中部が緑灰色土のブロックとオリーブ黒色土の混合土、下部は暗緑灰色～緑灰色土で構成される。上部の土壤はいくぶん砂質で、層中には緑灰色のブロックを含み、南側道路面を覆う整地土層と同質土である。しかし、断面からはb溝との切り合いを明確につかむことはできなかった。また、中部に堆積する混合土は、人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

2 b溝は平面形ではB 4区中央から東にすれ、B 5区からは独立して南に延びる。B 2区で一部現代の擾乱を受けるが、検出された部分の全長は約13mである。なお、明確に把握できたわけではないが、B 2区以北では2 a溝とプランを共有する可能性が高い。上端幅80～100cm、下端幅65～80cm、深さ3～15cmの規模を持ち、断面形は浅い箱状を呈する。2 a溝底面より8～34cm高く、底面における高低差は約20cmで、南側に下がる。埋土は上部が酸化鉄を含む暗オリーブ褐色土、下部はオリーブ黒色土で構成されるが、断面では2 a溝との明確な切り合いを把握することはできなかった。

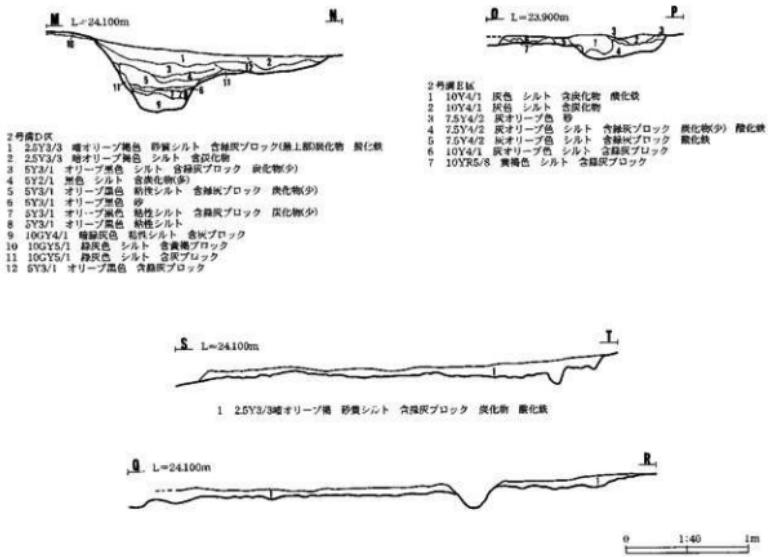
<道路面> 2条の溝に挟まれた部分が道路面となる。中央部北端から近現代の崎渠に擾乱を受けるが、この他の部分は保存状態は良い。検出面での標高は24.17~23.90m、南北方向の標高差は約30cmで、南側がいくぶん低くなる。路幅(側溝中央間の距離)は1a~2a間で、北側10.25m、南側10m、1b~2b間では中央部9.3m、両端部8.5mである。東西方向では北端部は約8cmの高低差をもって東に下がるが、中央部及び両端部では路面中央が高く東西に12~20cm下がり、断面形は緩やかな蒲鉾形を呈する。



第6図 1号道路跡 (1)



第7図 1号道路跡（2）



第8図 1号道路跡（3）

＜整地＞南半部を中心に路面及び2a溝を覆う整地地業が認められた。検出時点での削りすぎのため正確な範囲を実測することができなかったが、概算では約200m<sup>2</sup>である。なお、西側は調査区外になり詳細は不明であるが、この整地地業は道路跡以東にも及んでいる。断面の観察では、周囲よりいくぶん砂質の土にVI層起源と考えられる緑灰色土ブロックを含む混合土を使用している。層厚は2~20cmで、南側が厚い。なお、この整地層下から橋脚跡及び3号溝跡が検出された。

＜橋脚＞道路面中央の南端部B5区で、整地層の下から検出された。この部分は南に向かって緩く傾斜し湿地となっており、これを渡るための構造の遺構と考えた。3号溝土層断面の観察では、3号溝埋土柱穴が切り、この上を整地層が覆っていた。PP1~PP4の4個の柱穴から構成される桁行1間、梁行1間の遺構であるが、桁行はさらに南に延びる可能性がある。軸方向はN-42°-Eで道路跡の軸線より東に傾く。柱間の距離は桁行PP1~PP3が2.3m、PP2~PP4が2.15m、梁間はPP1~PP2が1.25m、PP3~PP4が1.0mである。各柱穴の規模はPP1が開口部径40×35cm、底部径27×25cm、深さ38cm、PP2が58×39cm、27×25cm、36cm、PP3が36×25cm、16×15cm、60cm、PP4が44×33cm、20×19cm、56cmである。なお、PP1とPP2の底面からは礫盤の可能性がある板材が検出された。また、PP2の北西85cmから杭（第16図）が検出されたが、橋脚との関係は不明である。

#### 遺物(第22~27図・写真図版22~27)

＜出土状況＞かわらけ、陶磁器、木器・木製品、石器、鐵製品があるが、ほとんどが東西の側溝からの出

土である。これらの多くは、底面より10~20cm上部から出土しており、この層が当道路跡の最終的な機能面と考えられる。

〈かわらけ〉1号溝（東側側溝）からは約2.8kg、2号溝（西側側溝）からは約1.8kg出土した。15~52は1号溝出土のかわらけである。てづくねかわらけが卓越し、大型のものが多い。なお、ロクロかわらけは小型の小破片1点のみの出土である。

95~126は2号溝出土のかわらけである。1号溝と同様にてづくねかわらけが大半を占めるが、119等のロクロ人型かわらけや112~113のロクロ小型かわらけもある。なお、126は内面に「如？」字が縦刻されたてづくねかわらけである。

〈陶磁器〉ほとんどが小破片で出土量も少なく、1号溝約2.2kg、2号溝約0.9kgである。53~68は1号溝、127~133は2号溝からの出土である。53は渥美産？の鉢で、口縁部は短く内傾し、内面には斑状に自然釉がつく。54・55は渥美産？、56は壺？、57・58・62~64は常滑産？壺、59は壺とされる。65~67は須恵器系陶器の壺と考えられ、内外面には単位の狭い平行叩き目痕を持つ。68は中国産の青白磁合子の蓋で、1/2強が残存する。側面は凹凸により花弁状に装飾し、表面には7？弁の花の押印文が施されている。127は渥美産壺、128は壺、129は常滑産壺、130~132は壺、133は鉢である。なお、小破片で実測はできなかったが、134は中国産青白磁の碗と考えられる。

〈土製品〉1号溝から69が出土した。小破片のため詳細は不明であるが、32次調査で出土している瓶に類似する。

〈金属器〉70は1号溝から出土した環状の鉄製品で、両端はいくぶん幅を減じ聞く。

〈木器・木製品〉東西両側溝から出土しているが、ほとんどが1号溝からの出土である。製品や部品のはか加工痕が頗るに見られるものを掲載したが、自然木も多い。いずれも1号溝からの出土品である。

71・72は木筒である。71は長さ27.3cm、幅5.1cm、厚さ4.5mmのスギ板の片面に片仮名55文字が墨書きされ、ほぼ全文が判読できる。上下両端は1~2mmほどの幅で片面が削がれ、鈍く尖る。また、下端から約2cm上部には直径2mmほどの小孔を2個持つ。両端の削ぎ面や小孔の存在から、木製品の部材を利用した可能性がある。72は長さ26.5cm、幅5.7cm、厚さ4.5cmのスギ板に漢字四文字が墨書きされている。板の片側上下端は角が削られており、折敷の底板を利用したものと考えられる。

73・74は上端が尖り下部に浅い切り込みを持つ木製品で、2個が重なり合って出土した。形代の類であろうか。76は中央に直径約2cmの小孔を持つ円盤状の木製品で、片面には漆状の物質が付着している。漆の底板の可能性がある。77は漆器碗の底であるが、摩耗が著しい。

78~80は底板である。78は片端に桜皮の雜目が残る。81は曲げ物の側板で、内側にはほぼ等間隔に細いスリットが施されている。82は中央に台形の透かしが見られる部材、83は下駄の歯である。84~94は加工痕をもつ木片であるが、用途は不明である。137~139は橋脚の中穴内から出土した礎盤？である。腐食のため形状が判明するものは137だけであるが、いずれもクリ材である。137は片面が鉈状の工具によって斜めに削り落とされており、表面には粗い加工痕が残る。

〈石器〉135・136は2号溝から出土した砥石で、いずれも碎けて小破片となっている。

時期 重複関係及び出土した遺物から12世紀後半代の遺構と考えられる。

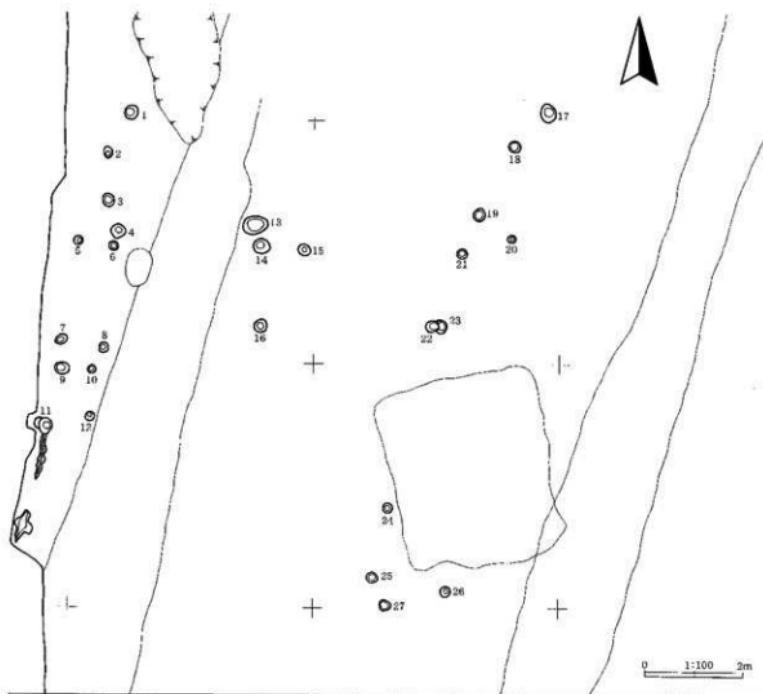
### (3) 柱穴・掘立柱建物跡

柱穴状小土坑は145基（埋納遺構2基を含む）検出された。これらは調査区の西端部、中央南端部、東端部の3区域に集中して分布している。検出面及び埋土の状態からほとんどのものが12世紀代の遺構と考えられる。しかし、いずれも調査区外に接しているため、明確に建物としての配置を確認できたものはない。実測図の掲載にあたっては、想定し得るもの数例を線示するに止めた。

#### 西端部柱穴群（第9図）

1号道路跡以西から12基、道路内から15基、合計27基検出された。道路跡以西（1号溝以西）の12基の内、No.1～3・9～11は道路跡と平行する同一線上に並ぶ。隣接する77次調査区でもこれらと方向を同じにする柱穴群が検出されているが、建物跡として明確に柱配位置を把握することはできなかった。なお、当柱穴列の軸線は77次調査で確認された板列と同軸線上であるほか、No.11の南側からは幅15～5cm、深さ1～4cmの不整な溝状の痕跡が検出されており、周辺部には道路跡に沿った何らかの施設が存在したものと考えられる。

道路上に分布する小土坑の内、No.13～16は整地層の下からの検出である。また、1号住居跡の周囲から



第9図 西端部柱穴群

### 西端部柱穴群

No	位置	径	深さ	備考
1	B2	28×30	21	柱底跡
2	B3	17×22	21	
3	B3	24×28	43	柱底跡
4	B3	29×32	22	
5	B3	16×19	13	
6	B3	18×19	14	
7	A3	18×25	14	
8	B3	20×22	24	
9	A4	25×30	17	柱底跡

No	位置	径	深さ	備考
10	B4	16×20	19	
11	A4	30×36	33	柱底跡 2 基看板?
12	B4	18×19	22	
13	B4	35×53	20	2基蓋板?
14	B4	28×34	11	
15	B4	21×21	21	
16	B4	25×27	30	
17	C2	30×38	7	
18	C3	22×24	9	

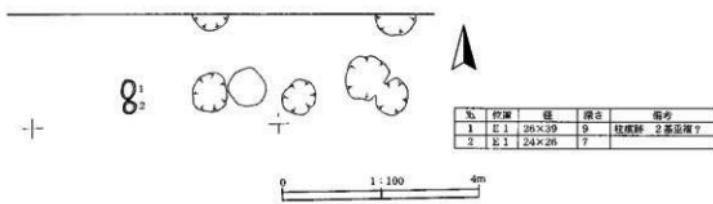
No	位置	径	深さ	備考
19	C3	24×26	7	
20	C3	15×19	7	
21	C3	26×22	12	
22	C3	22×26	13	No.23を切る
23	C3	25×26	18	
24	C4	19×20	11	
25	C4	19×22	7	
26	C4	19×24	6	
27	C4	20×22	12	

検出されたNo.22～26は、埋土の層相が住居跡のそれと類似し、これに伴う可能性がある。

なお、道路跡東側から2基の小土坑（第10図）が検出されているが、周辺部にはこの他の遺構の分布も希で、独立した分布状況を示す。

遺物 埋土から摩耗の著しいかわらけの小破片が出土しているものがあるが、実測できた遺物はない。

時期 埋土の層相から側溝以西のものは12世紀代の遺構と考えられるが、道路跡内のものについては不明である。



第10図 中央部柱穴群

### 中央南端部柱穴群（第11図）

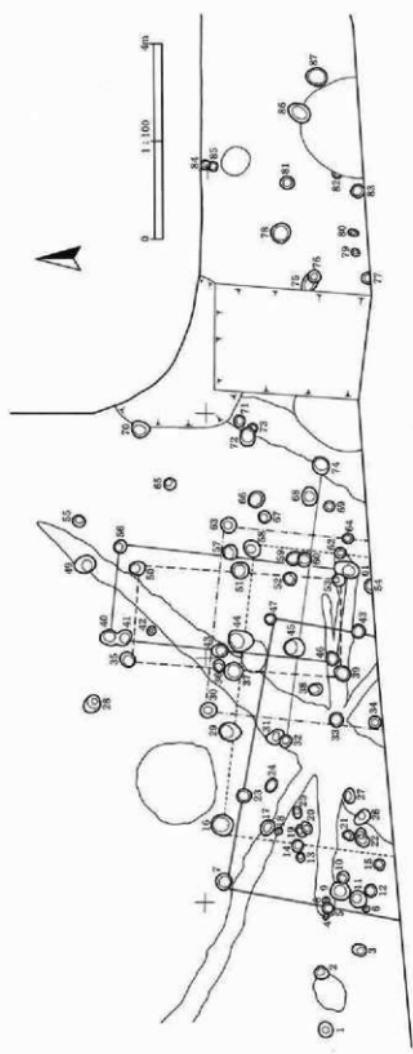
調査区内では最も多く密集度も高い。87基が検出されたが、分布はさらに南側に広がるものと考えられる。周辺部には整地層が見られ、これに覆われるものとこれを掘り込むものがあるが、検出時の削りすぎによって明確に区分することはできなかった。なお、同地区にある3条の溝と重複するものは、5号・8号溝を切り、4号溝に切られている。

他の地区に比べて直径が30cm以上、深さ40cm以上の規模が大型でしっかりしたのものが多く、建物を構成していたものであろう。矩形をなす5例を図示したが、いずれも建物としては小規模で、南側に延びる建物が存在するものと考えられる。なお、群中には井戸跡を伴う1号・2号埋土遺構が存在することから、銅製品鋳造に係わる建物であった可能性が高い。また、隣接する5号井戸跡や、北側約5mに位置する1号井戸は、直接的に共伴を明らかにする資料は得られていないが、建物跡との関係が推定される遺構である。

### 遺物（第28図・写真図版27）

かわらけ、国産陶器、柱材が出土しているが、整理時点での不手際により、出土遺構の詳細は不明となってしまった。140はF5区から出土したロクロかわらけ、141はE5区から出土した陶器片である。141は常滑産窯の口縁部破片で、破損部は漆継ぎが施されている。142・143は柱材で、いずれも角材である。142は残存状態が良く、側面には手斧、底面には斧または鉈による削痕が顕著に観察される。

時期 検出面及び埋土の層相、出土遺物から全て12世紀代の遺構と考えられる。

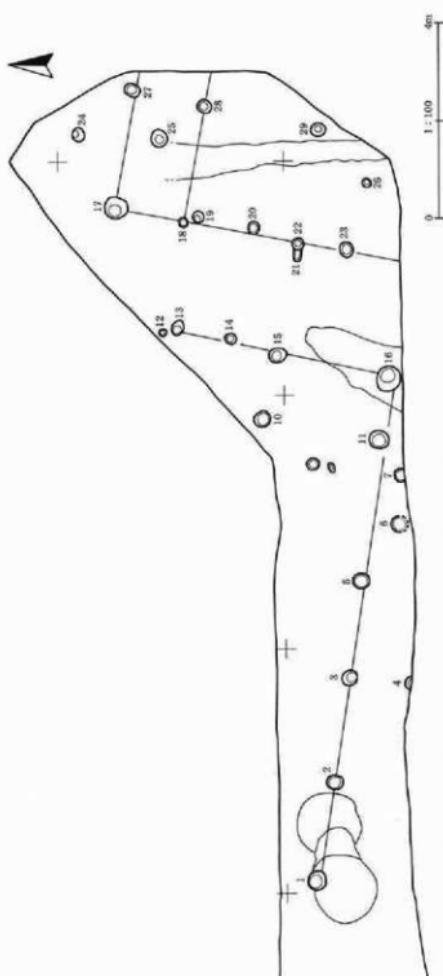


No.	位置	性	深さ	備考
1	D.S	27×28	18	柱状節理
2	D.S	25×30	25	6号土坑を切る
3	D.S	24×33	26	柱状節理
4	D.S	10×18		
5	D.S	22×23	26	
6	D.S	13×15		
7	E.S	33×37	50	
8	E.S	14×15	8	
9	E.S	30×42	54	柱状節理
10	E.S	33×24	24	
11	E.S	35×36	44	
12	E.S	24×29	17	
13	E.S	17×19	21	
14	E.S	24×27	9	
15	E.S	20×24	8	
16	E.S	40×45	44	
17	E.S	34×35	43	柱状節理 6号洞を切る
18	E.S	14×15	13	6号洞を切る
19	E.S	20×24	15	6号洞に切られる
20	E.S	25×35	27	柱状節理
21	E.S	18×23	19	柱状節理 19号切る
22	E.S	25×40	55	柱状節理 2号の通路?
23	E.S	25×30	12	
24	E.S	22×29	11	
25	E.S	18×22	43	
26	E.S	25×40	31	5号洞を切る
27	E.S	21×31	38	5号洞を切る
28	E.4	33×37	49	
29	E.5	48×27	39	柱状節理
30	E.5	25×35	31	
31	E.5	23×30	28	柱状節理 5号洞を切る
32	E.5	22×25	35	5号洞を切る
33	E.5	26×30	34	4号洞を切られる
34	E.5	23×27	23	柱状節理
35	E.4	29×31	64	
36	E.5	21×21	49	5号洞を切る 柱状節理
37	E.5	35×40	54	5号洞を切る
38	E.5	22×28	40	
39	E.5	28×35	39	5号洞に切られる
40	E.5	24×30	48	5号洞に切られる
41	F.4	33×35	50	柱状節理
42	F.4	16×19	22	柱状節理
43	F.5	24×31	25	5号洞を切る
44	F.5	44×50	50	柱状節理 9号土坑を切る
45	F.5	39×41	23	
46	F.5	24×26	85	4号洞に切られる
47	F.5	21×23	10	
48	F.5	24×27	11	4号洞に切られる
49	F.4	32×42	50	5号洞を切る
50	F.5	32×34	13	柱状節理
51	F.5	32×35	62	3号洞を切る
52	F.5	25×28	49	
53	F.5	25×26	35	4号洞に切られる
54	F.5	30×—	21	
55	F.4	24×27	42	
56	F.4	23×27	40	
57	F.5	26×29	39	
58	F.5	31×35	48	
59	F.5	25×42	11	
60	F.5	27×30	13	點状で切る
61	F.5	24×30	44	2号の通路?
62	F.5	23×34	28	4号洞に切られる
63	F.5	33×35	7	
64	F.5	20×21	32	柱状節理
65	F.5	24×25	49	
66	F.5	30×35	23	
67	F.5	24	38	
68	F.5	31×39	37	柱状節理
69	F.5	20×22	19	
70	F.4	34×40	65	
71	F.5	24×27	33	8号洞を切る?
72	F.5	32×29	43	2号の通路?
73	F.5	20×26	18	8号洞を切る?
74	F.5	35×37	29	8号洞を切る 柱状節理
75	G.5	27×—	7	3号戸門に切られる
76	G.5	23×25	6	
77	G.5	25×—	40	
78	G.5	29×40	42	
79	G.5	16×19	8	
80	G.5	14×23	5	
81	G.5	26×27	36	
82	G.5	20×24	7	3号戸門に切られる
83	G.5	26	22	
84	H.4	18×22	42	柱状節理?
85	H.5	20×22	35	
86	H.5	37×50	20	3号戸門を切る
87	H.5	42×45	42	小土坑?

第11図 中央南端部柱穴群

東端部柱穴群（第12図・写真図版21）

29基が検出された。分布は疎らである。包含層中で検出されたNo.1～5はほぼ等間隔（2.2～2.0m）で、



方向E-8°-Wの列をなす。周辺部では最も新しく、重複する11号土坑を切っている。この他、最東部に分布するNo.12～16、17～23、27～29は方向N-13～14°-Eの列をなして分布しており、南東方向に広がる建物を構成するものと考えられる。なお、No.10とNo.12からは大型の青磁片が出土し、互いに接合している。特にNo.12では底面直上からの出土で、これらも埋納遺構の一種と見るべきかも知れない。

No.	位置	径	深さ	備考
1	I.5	37×39	24	11号土坑を切る
2	I.5	31×34	17	
3	I.5	20×34	25	
4	I.5	26×-	38	
5	J.5	30×35	22	
6	J.5	33×36	11	中央に供物柱跡？
7	J.5	23×28	36	
8	J.5	15×26	12	
9	J.5	26×-	-	特徴跡
10	J.4	31×35	53	柱跡跡 上部から青磁片
11	J.5	37×42	64	柱跡跡 法令取り縫？
12	K.4	15×17	61	底部から青磁片
13	K.4	23×32	42	柱跡跡
14	K.4	23×26	47	柱跡跡
15	K.4	29×37	25	
16	K.4	49×54	62	柱跡跡 9号構を切る
17	K.4	45×46	63	上部からかわらけ
18	K.4	23×20	58	
19	K.4	21×22	35	
20	K.4	23×38	36	
21	K.5	16×26	10	柱穴？
22	K.5	24×24	24	
23	K.5	26×31	56	
24	L.4	28×24	41	
25	I.4	33×37	13	7号構に切られる
26	K.5	18×19	20	
27	L.4	25×34	49	
28	L.4	26×29	29	
29	L.5	26×30	54	

第12図 東端部柱穴群

#### 遺物（第28図・写真図版27）

かわらけ、土製品、中国産磁器が出土している。144はK 4区No.14の埋土上部から出土した大型でづくねかわらけ、145はK 4区No.17の埋土上部から出土した小型でづくねかわらけである。146はK 5区No.16から出土した埴輪片である。147は同じ柱穴から出土した瓦片で、片面には細かい布口、片面には縄目がつく。148は竜泉窯産の青磁碗で、J 4区No.10の埋土上部出土から出土した破片とK 4区No.12底面から出土した破片が接合した。内面には毛彫り状の条線文による文様が描かれている。

時期 埋土の層相及び出土遺物から全て12世紀代の遺構と考えられる。

#### （4）井戸跡

##### 1号井戸跡（第13図・写真図版15）

遺構 <位置・検出状況> E 3グリッド、調査区のほぼ中央に位置する。II層を除去した段階で、VI層等のブロックを含む灰褐色土の広がりとして検出された。重複する遺構はない。<規模・形状>開口部径2.23×2.14m、底部径83×70cm、深さ2.15mで、平面形は円形を呈する。壁は下部がほぼ直立し、開口部に向かって緩く聞く。底面は砂質シルト層で、おおむね平坦である。<埋土>全体に中央に落ち込む堆積状況を示す。上部はオリーブ色のブロックや炭化物、酸化鉄を含む灰褐色で、この下に径15~30cmの軽圓礫40数個が層理に沿って検出された。中部は黒味の強い粘性土が主体で、層中には草本類遺残体や加工痕をもつ木材を包含している。下部はグライ化の進んだ粘性土で、底面付近ではいくぶん砂質となる。層中の包含物及び堆積状況から推定して、上部～中部は人為的な堆積層と考えられる。なお、検出面や各壁面には特に痕跡は認められなかったが、埋土中から検出された礫類や木材は何らかの施設の構築材であった可能性がある。

##### 遺物（第29図・写真図版27）

理上からかわらけと国産陶器片が出土しているが量は少ない。149～151は手づくねかわらけで、150・151は小型である。152は常滑産の壺で、口縁部は強く外反し、外面中位に低い凸帯をもつ。なお、口縁部には焼成前の破損痕が見られる。

時期 出土遺物から12世紀代の遺構と考えられる。

##### 2号井戸（第13図・写真図版15）

遺構 <位置・検出状況・重複関係> F 5グリッド、調査区中央南端に位置する。整地層と考えられる黒褐色土を除去した段階で、黒色土の広がりとして検出された。8号溝を切っている。南半部は調査区域外にかかる他、東側は防火用水池による搅乱を受けており、精査できた部分は全体の約1/4だけである。<規模・形状・形状>精査できた部分からの推定すると開口部直径約2m、底部直径約80cm、深さ1.85mで、円形基調の平面形を呈するものと考えられる。壁は底面付近ではほぼ直立し、開口部に向かって緩く聞く。底面は砂質シルト層で、平坦である。<埋土>上部～中部は人為的な堆積層と考えられる黒色土が主体となり、下部はこれらよりグライ化の進んだ土層で構成される。

##### 遺物（第29図・写真図版27・28）

埋土からかわらけ、国産陶器、木製品が出土しているが量は少ない。153・154は小型の手づくねかわらけ、155は大型のロクロかわらけである。156は国産陶器であるが、小破片のため器種は不明である。胎土は緻密でやや砂が入り、猿投産の可能性がある。157は容器の底板と考えられる。

時期 出土遺物および重複関係から12世紀代の遺構と考えられる。

### 3号井戸（第14図・写真図版15）

遺構 <位置・検出状況・重複関係> H 5 グリッド、調査区中央南端に位置する。整地層と考えられる暗褐色土を除去した段階で、黒褐色土の広がりとして検出された。周辺部で検出された柱穴状の小土坑に切られている。なお、南半部は調査区域外にかかる。<規模・形状> 精査の途中で、南側削が崩落したため底面を確認することができなかった。残存部から推定して開口部径 2m 前後で、平面形は円形を基調とした井戸跡と考えられる。<埋土> 崩落のため詳細は不明であるが、上部は人為的な堆積土と考えられるオーリープ灰色土がみられ、この下部はグライ化の進んだ暗緑灰色土が主体を占める。

### 遺物（第29図・写真図版28）

埋土からかわらけ、国産陶器、木製品、金属製品、石製品が出土している。

<かわらけ> 全体で約 1.1kg 出土しているが、小破片が多い。158～161は手づくねかわらけで、158・159は外面にススが付着する。161は内外面に墨書が見られる。小破片のため内容は不明であるが、内面のものは「う」の可能性がある。162・163はロクロかわらけである。

<陶磁器> 出土量は少なく約 200g が出土した。164・166は渥美産、165は常滑産の甕破片である。この他に中国産白磁碗の小破片（167：写真）が出土している。

<木製品> 168～170は箸で、いずれも両端を破損している。この他に自然木や木屑等が出土した。

<金属器> 171は薄い銅版で、折り畳まれており、表面には金が付着する。なお、この他に銅滓約 20g が出土している。

<石製品> 172は硯の破片と考えられる。

時期 出土遺物から12世紀代の遺構と考えれる。

### 4号井戸（第13図・写真図版15）

遺構 <位置・検出状況・重複関係> I 5 グリッド、調査区東側南端部に位置する。遺物包含層精査時に黒色土の広がりとして検出された。西側で11号土坑と重複しこれに切られる。<規模・形状> 開口部径 1.35×1.2m、底部径 60×50cm、深さ 2.7m で、平面形は円形を呈する。壁は底面から僅かに外傾して立ち上がり、開口部付近で緩く開く。底面は砂質シルト層で、おおむね平坦である。<埋土> 上部は植物遺残体を含む黒～黒褐色土、中部～下部は黒色土で構成され、この部分は人為的な堆積土の可能性がある。各層は粘性が強い土壤であるが、下部はいくぶん砂質となっている。

### 遺物（第29～31図・写真図版28・29）

埋土からかわらけ、国産陶器、土製品、鉱滓が出土している。

<かわらけ> 約 1.9kg が出土した。手づくねかわらけとロクロかわらけがあり、量的には手づくねかわらけが多いが、他の遺構に比べてロクロかわらけの割合は高い。173～175は手づくねかわらけの大型、176・177は小型である。178～182はロクロかわらけの大壺、183～185は小型である。

<陶器> 186は渥美産の壺で、頸部はほぼ直立し口縁部は強く外反した後内側に丸まる。器面には全体に緑色の自然釉がかかる。

<土製品> 188・189は坩埚破片で、口縁部内外面は溶変している。184は深さがなく底面が平坦である。内面の溶変も少なく、坩埚ではない可能性がある。

<木製品> 190は埋土中部から出土した人形の首である。顔は横幅はないが、眉、目、鼻、口が深く彫り出され写実的な表現となっている。側面には耳も付けられるが、明確なものではない。頭部は面取りされ、

鳥帽子の表現はない。首先是鈍く尖り、差し込み式の人形首と考えられる。

191は先端が細く尖り、串と思われる。192～194は加工痕をもつが、用途は不明である。195は曲げ物の側板で、内面には浅いスリットが施される。196は表面に3本の細い溝が付けられた丸棒で、用途は不明である。197～199はスギ材による底板である。200～202は埋土中部から出土した直方体の木片で、各面とも割合丁寧な加工が見られるが、用途は不明である。

<鉛滓>約200gが出土している。色調はいずれも赤銅色を呈し、銅滓（カラミ）と考えられ湯玉状のものやメタル反応があるものがある。

時期 出土遺物から12世紀代の遺構である。

## （5）土坑

### 1号土坑（第14図・写真図版16）

遺構 <位置・検出状況> E 1 グリッド、調査区中央北端に位置する。II層を除去した段階でオリーブ褐色の広がりとして検出された。周辺にはほぼ同規模・同形態の土坑が6基検出されているが、埋土の状態や出土遺物からいずれも近代以降の土坑である。<規模・形状>開口部径85×75cm、底部径46×39cm、深さ75cmで、平面形は不整な円形を呈する。壁は僅かに外傾して立ち上がり、断面形はルーズな筒状を呈する。底面は平坦である。<埋土>自然堆積の様相を示し、グライ化したオリーブ褐色土及び灰色土等で構成されている。出土遺物はない。

時期 遺物を伴わないため詳細は不明であるが、埋土の層相から12世紀代の遺構と考えられる。

### 2号土坑（第14図・写真図版16）

遺構 <位置・検出状況> E 2 グリッド、調査区の中央に位置する。II層を除去した段階で、くすんだ黒色土の広がりとして検出された。<規模・形状>開口部径68×65cm、底部径39×36cm、深さ35cmで、平面形は円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、断面形はバケツ形となる。底面は平坦である。<埋土>上部はオリーブ黒色土、中部～下部は緑灰色土のブロックを含む黒色土が主体となって構成される。層中に包含される緑灰色土ブロックの存在から、人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物はない。

時期 遺物を伴わないため詳細は不明であるが、埋土の層相から12世紀代の遺構と考えられる。

### 3号土坑（第14図・写真図版16）

遺構 <位置・検出状況・重複関係> C 2 グリッド、調査区中央西側に位置する。II層を除去した段階で、黒褐色土の広がりとして検出された。1号道路跡の路面で、これに上部を切られるものと考えられる。<規模・形状>開口部径80×65cm、底部径50×45cm、深さ10cmで、平面形は不整な橢円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状となる。底面は凹凸がある。<埋土>黒褐色土が主体で構成されるが、下部には黄褐色土が僅かに見られる。

### 遺物（第33図・写真図版31）

底面から258が出土している。摩耗と小破片のため詳細は不明であるが、胎土の状態や底部外面の形態から土器師壺の破片と考えられる。

時期 出土した土器の特徴及び埋土の層相から、平安時代の遺構の可能性がある。

#### 4号土坑（第14図・写真図版16）

遺構 <位置・検出状況・重複関係> B 3グリッド、調査区の西端に位置する。II層を除去した段階で、くすんだ褐色土の広がりとして検出された。東側で道路跡西侧側溝（2号溝）と重複し、これに切られる。<規模・形状>開口部径76×50±cm、底部径65×45±cm、深さ20cmで、平面形は楕円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状となる。底面は中央部が緩くくぼむ。<埋土>上部は整地層と考えられる暗灰褐色土、中部はオリーブ褐色土、下部は黄褐色～灰色土で構成される。

遺物 埋土からかわらけの小破片が出土したが、実測は省略した。

時期 重複関係及び埋土の層相から推定して、12世紀代の遺構と考えられる。

#### 5号土坑（第14図・写真図版17）

遺構 <位置・検出状況> E 4・5グリッド、調査区中央南側に位置する。II層を除去した段階で検出された整地層に覆われる。<規模・形状>開口部径1.7m、底部径70×65cm、深さ1.2mの大型の土坑で、平面径は円形を呈する。壁は底面から僅かに外傾して立ち上了った後、開口部に向かって開く。底面は砂質シルト層で、平坦である。1～4号井戸跡と比較して浅く土坑として扱ったが、平面規模及び形態から井戸の可能性がある。<埋土>上部は整地層の酸化鉄を多く含む暗褐色土、中部は緑灰・黄褐色ブロックを含む黒褐色土、下部はグライ化が進んだ灰～緑灰色土で構成される。なお、遺構中央の埋土中部から下部にかけて径5cm前後の杭状の棒が5本、直立して検出された。

遺物（第33図・写真図版31）

<かわらけ>手づくねかわらけとロクロかわらけがあるが、いずれも摩耗した小破片で、出土量も少ない。259は小型の手づくねかわらけである。

<木製品>260・261は埋土中部から5本まとめて出土した杭？で、この他のものは乾燥による収縮のため実測できなかった。いずれも自然木で、表皮が付くものが多い。先端は鉈状の工具により鈍く尖らせているが、顯著なものではない。262は表面に粗い手斧痕が見られる材であるが、丁寧な加工ではなく全体の形も歪である。

時期 検出面及び出土遺物から12世紀代の遺構と考えられる。

#### 7号土坑（第15図・写真図版17）

遺構 <位置・検出状況・重複関係> C 4グリッド、調査区中央南よりに位置する。重複する1号住居跡精査中にその存在が確認された。同住居跡の中央部を床下まで切る。なお、1号道路跡との新旧関係は、検出時の削り過ぎのため明確に把握することはできなかった。<規模・形状>1号住居跡床面での規模であるが、南北1.5m、東西1～0.6m。住居跡検出面からの深さは85cmで、平面形は北壁が長い墨丸台形を呈する。壁はいずれも外傾して立ち上がるが、北側では他の壁に比べていくぶん緩やかである。底面は中央に向かってくぼむ。<埋土>上部は暗褐色土、中部～下部は粘性をもつ黒褐色土が主体となって構成されている。各層の堆積状況から、人為的な堆積と考えられる。

遺物 埋土中からかわらけの小破片が出土したが、実測は省略した。

時期 重複関係及び埋土の層相から12世紀代の遺構と考えられるが、これより以降である可能性を残す。

#### 8号土坑（第15図・写真図版17）

**遺構** <位置・検出状況・重複関係>D 5 グリッド、調査区中央南端部に位置する。II層を除去した段階で、黄褐色ブロックを含む暗灰黄色土の不整な広がりとして検出された。東側を柱穴状小土坑に切られる。なお、南北半分を大きく掘りすぎている。<規模・形状>開口部83×60cm、底部68×41cm、深さ13cmで、平面形は不整な楕円形を呈する。残存する壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状となる。底面は凹凸がある。<埋土>上部は暗灰黄色土、下部は黄褐色土で構成されるが、上部の土層は、周辺部に見られる整地層と同質である。出土遺物はない。

**時期** 遺物を伴わず詳細は不明であるが、埋土の層相から12世紀代の遺構と考えられる。

#### 9号土坑（第15図・写真図版17）

**遺構** <位置・検出状況・重複関係>E・F 5 グリッド、調査区中央の南端に位置する。II層を除去した段階で、オリーブ黒色土の広がりとして検出された。北東部を柱穴状小土坑に切られる。<規模・形状>開口部径64×55cm、底部径51×45cm、深さ11cmで、平面形は不整な円形を呈する。壁は外傾して立ち上がり、断面形は浅皿状となる。<埋土>黄褐色ブロックを含むオリーブ黒色土の单層である。

**遺物** 埋土からかわらけの小破片が出土したが、実測は省略した。

**時期** 埋土の層相及び重複関係から12世紀代の遺構と考えられる。

#### 10号土坑（第15図・写真図版18）

**遺構** <位置・検出状況・重複関係>G・H 5 グリッド、調査区中央南端に位置する。II層を除去した段階で黒褐色土の広がりとして検出された。<規模・形状>開口部径60×53cm、底部径42×38cm、深さ39cmで、平面形は円形を呈する。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり、柱穴状の形態をなす。<埋土>全体に緑灰色土のブロックを含む黒褐色土で構成される。なお、ほぼ中央から最大径20cmの木根が検出された。四方に木根を伸ばしており、柱材の残存とは考えられない。しかし、当土坑がこの木根に伴う植樹痕跡であるかどうかは不明である。

**遺物** 埋土からかわらけの小破片が出土しているが、実測は省略した。

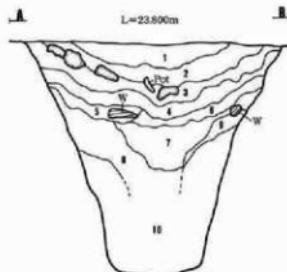
#### 11号土坑（第15図・写真図版18）

**遺構** <位置・検出状況・重複関係>H・I 5 グリッド、調査区東側南端部に位置する。遺物包含層精査時に黒色土の広がりとして検出された。東側で4号井戸跡と重複しこれを切り、北側で柱穴状小土坑に切られる。<規模・形状>開口部径143×125cm、底部径84×80cm、深さ95cmのバケツ状の土坑に最大幅85cm、長さ56cm、深さ20cmの舌状張り出し部からなる。<埋土>層相及び包含物から人為的な堆積と考えられ、各層は土坑の中央部に向かって落ち込む。I部は草本類、木材屑等を多量に含む黒色土及び炭化物の薄層、中部は緑灰色土ブロックを含む黒色土及び炭化物・植物遺残体層、下部は黒色土が主体となっている。

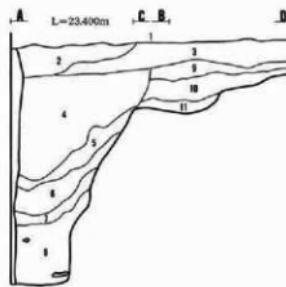
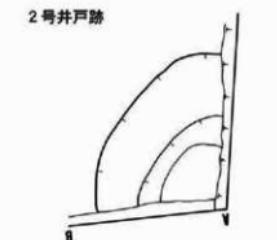
**遺物** (第31・32図・写真図版29・30)

<出土状況>埋土上部から中部にかけてかわらけ、陶器、土製品、木器・木製品、石器、金属製品、鉱滓が出土している。出土量は他の遺構に比較して卓越し、出土状況から造構廃絶時に投棄されたものと考えられる。

<かわらけ>約1.9gが出土している。手づくねかわらけとロクロかわらけの割合はほぼ同じであるが、い



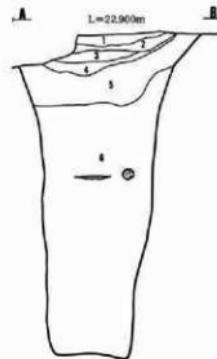
1号規格	2号規格
5Y4/1灰 シルト 含オーピーブロック 売化物	5Y4/4灰 シルト 含オーピーブロック(透底土) やや含水質
5Y2/1黒 色性シルト 含オーピーブロック 売化物	
5G4/1褐色地 動性シルト 土壌の混合土	
7.5Y3/1オートク 素地性シルト 土壌の混合土 含炭化物(少)	植物連存体
9.5Y3/1褐色地 動性シルト 土壌の混合土 含炭化物	植物連存体
5G5/1褐色地 動性シルト 土壌の混合土 含炭化物	植物連存体
10GY5/1褐色地 動性シルト 土壌ブロック	
5G5Y/1オーピーブ床 動性シルト 含炭ブロック 売化物	
5G/1褐色地 動性シルト 下部腐葉	



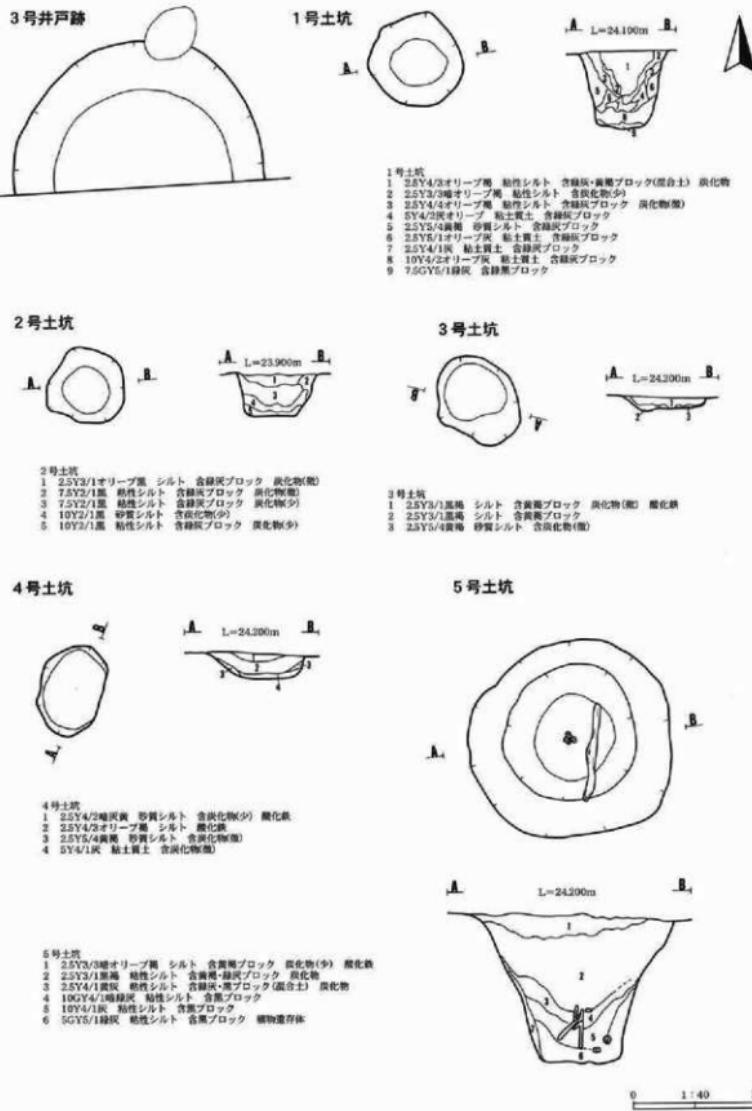
2号昇降・8号昇  
 2.5YV1/灰 黏土質土 含碳化物(少) II層  
 2.5YV1/黑鐵 硅酸性シリル 含オリーブ・ブロック 廉化物  
 2.5YV1/黑 鹽基性シリル 含オリーブ・黒鉄ブロック 廉化物  
 5YV1/黑 黏土質土 含碳化物  
 5YV1/黑 黏土質土 含碳化物  
 5YV1/黑 黏土質土 含碳化物  
 7.GCYV1/黑 黏土質土 含碳化物  
 5YV2/黑 黏土質土 含碳化物  
 5YV2/黑 黏土質土 含碳化物  
 5YV2/黑 黏土質土 含碳化物  
 5YV3/オリーブ 硅酸性・鈣長石・含鈣長石ブロック  
 7.GCYV1/黑 黏土質土 含碳化物  
 7.GCYV1/黑 黏土質土 含碳化物  
 7.GCYV1/黑 黏土質土 含碳化物



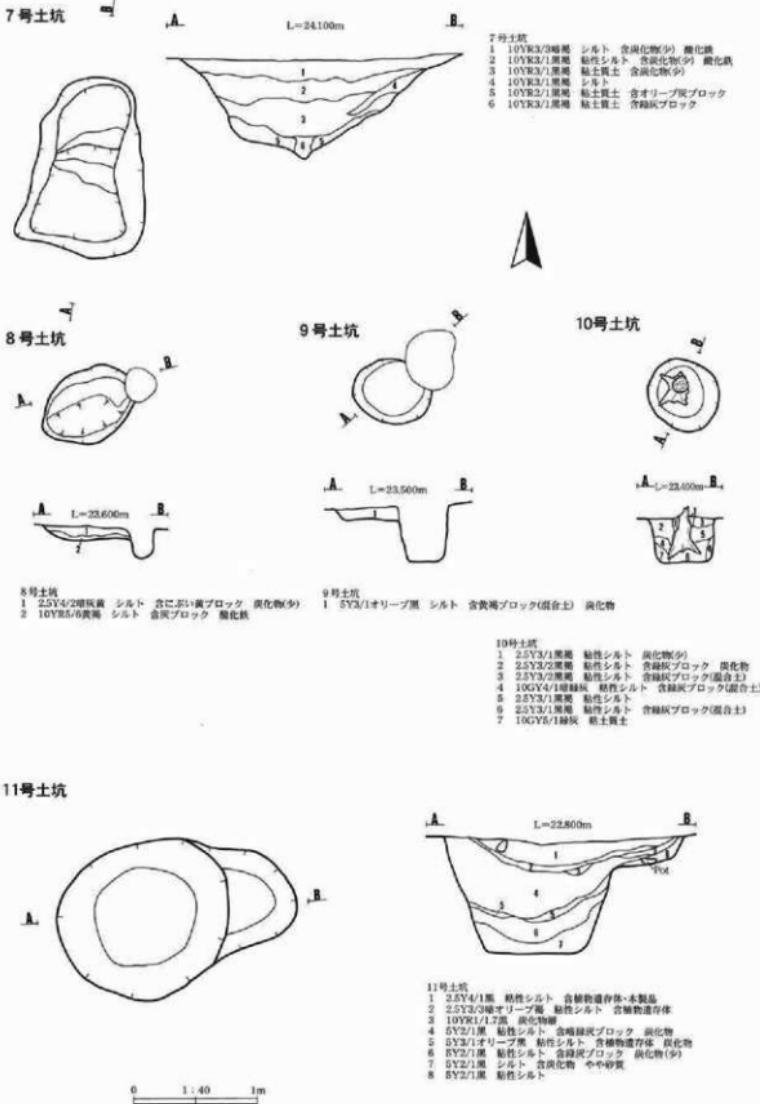
4号井戸跡  
 1 5Y2/1層 粘性シルト 含油化物  
 2 5Y3/2層間 粘性シルト 含植物遺存体  
 3 5Y2/1層 粘性シルト 含油化物  
 4 5Y2/3オーピー層 粘性シルト 露板オーピーブロック 水化物(少)  
 5 5Y2/1層 粘性シルト 含油オーピーブロック  
 6 5Y2/1層 シルト・砂岩シルト



第13圖 1・2・4號井戸跡



第14図 3号井戸跡 1~5号土坑



第15図 7~11号土坑

ずれも完形品はない。203～207は手づくねかわらけで、205・206はいくぶん小型である。207は小型の手づくねかわらけであるが、弱い反りを持つ高台が付く。208・209は大型のロクロかわらけ、210～212は小型のロクロかわらけである。

＜陶器＞出土量は少なく、1kgに満たない。213は張り出し部から出土した渥美産の山茶碗で、底部には低い高台が付く。214は渥美産の壊破片で、外面には平行な押印が施されている。

＜土製品＞215・216は坩埚破片で、いずれも小型である。内面は溶解し、216は青色の光沢を持つ。

＜木器・木製品＞製品及び加工痕を有する木片として、217～255を掲載したが、埋土の上部からは手斧屑が廃棄された状態で出土した。

217～219は漆器椀である。上圧により変形しているが、217・218は低い高台が残り、いずれも内外面に黒漆が塗布されている。220～236は箸で、ほぼ中央から折られているものがある。227・228は断面形が正方形で、上端部は斜めに削がれ、緩く尖る。237～242はいくぶん太く、片端が尖ることから単と考えられる。243～254は加工痕の見られる材であるが、用途が判明するものはない。255は片面が鋸引きされた材で、この面には包丁？等の細い刃物痕が見られることから作業台と考えられる。400は片面に墨書きが見られる木片である。乾燥のため変形してしまったが、厚さ2mmほどの正口板に絵画が描かれている。細い線が十数本観察できるが意匠は不明である。401は表裏両面に斜めに交錯するスリットが施された板片である。

＜石器＞256は偏平な自然石を利用した砥石である。

＜金属器＞257は小さな鉄片で、鍛のため器種・用途とも不明である。なお、鉛滓は170g出土した。

時期 川土造物から12世紀代の遺構と考えられる。

## (6) 溝跡

### 3号溝跡（第16図・写真図版13）

遺構 ＜位置・重複関係＞B・C 5グリッド、調査区南西端部に位置する。1号道路跡を覆う整地層を除去した段階で検出された。南側は湿地状の地形のため、一部を除いて壁を検出することはできなかった。道路跡西側側溝及び橋脚状遺構の南側柱穴に切られる。西側に隣接する第77次調査で検出された1号溝跡と位置・方向が一致し、これと同一遺構の可能性が高い。土層断面の観察では、新旧2条の溝の存在が確認された。古期をa、新期をbとして記述する。 ＜規模・形態＞前述のとおり規模の詳細は不明であるが、残存部及び上層断面からの推定するとa溝は上端幅120cm土、下端幅90cm土、深さ40～60cmで、約7mにわたって検出された。断面形は底面の平坦なU字状を呈し、底面の東側に高低差数cmの段が見られるが、この他の部分はおおむね平坦である。b溝は平面的プランを確認できなかった。埋土断面の観察では、a溝の底面より10cm土上部に底面を有し、a溝の北壁より30cm土南に寄って構築されていたものと考えられる。検出部分での方向は、E-18°-Sの角度で直真に延び、道路跡とほぼ直交している。 ＜埋土＞いずれの溝も最上部は整地層に覆われている。a溝は上部が暗オリーブ灰色土、下部はグラウジングが進んだ緑灰色土で構成される。b溝は暗オリーブ灰色土を主体とする互層によって構成されている。いずれの溝も砂質土の薄層を含み、水性堆積の様相を示す。

### 遺物（第33・34図・写真図版32・33）

＜出土状況＞埋土からかわらけ、国産陶器、木製品が出土している。なお、西側からの遺物には重複する側溝（2号溝）のものが混入している可能性がある。

＜かわらけ＞約2.9kgが出土したが、大半は小破片である。手づくねかわらけとロクロかわらけとの割合

は前者が卓越するが、東側側溝出土のかわらけに比べていくぶん小型のロクロかわらけの割合が多い。236～270は大型、271～273は小型の手づくねかわらけである。274・275は大型のロクロかわらけ、276・277は小型のロクロかわらけである。

<陶器>出土量は少なく約560gで、いずれも小破片である。涙美産、常滑産、須恵器系陶器があるが、量的には涙美産のものがいくぶん多い。278・280は涙美産、279は常滑産、281は須恵器系陶器である。

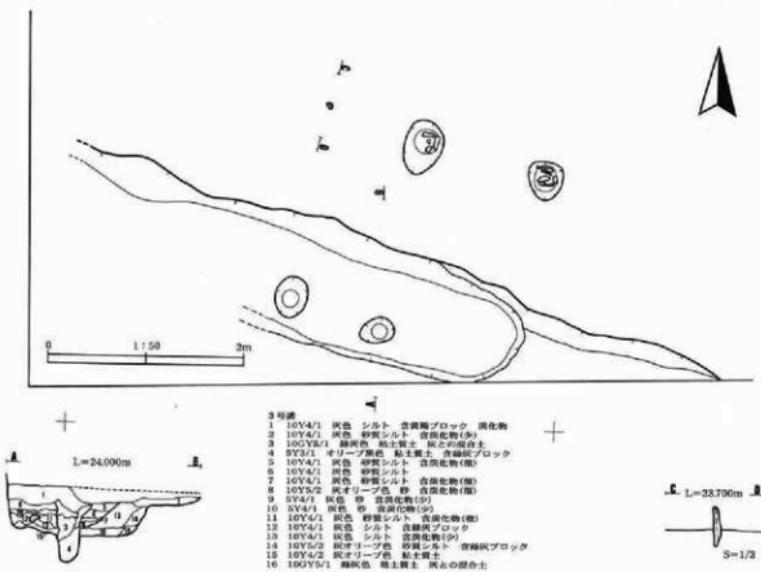
<木製品>283～292の10点を掲載した。283・284は刃物の柄である。前者は目釘穴をもたず鞘とも考えられるが、奥行きが5cm程のため柄とした。後者は約3mmの目釘穴を持つ。285は火切り件で、片端は炭化し回転のため丸くなっている。286は両側からの切り込みをもつ短い薄板である。287・288は底板、289・290は加工痕を持つ板片である。291・292は片端に刃物による切断痕を持つ自然木で、杭と考えたが、291は細く樹木枝の選定層の可能性もある。

＜石製品＞293は面取りされた凝灰岩で、表面には粗い擦痕が見られる。礫石等の石材と考えられる。

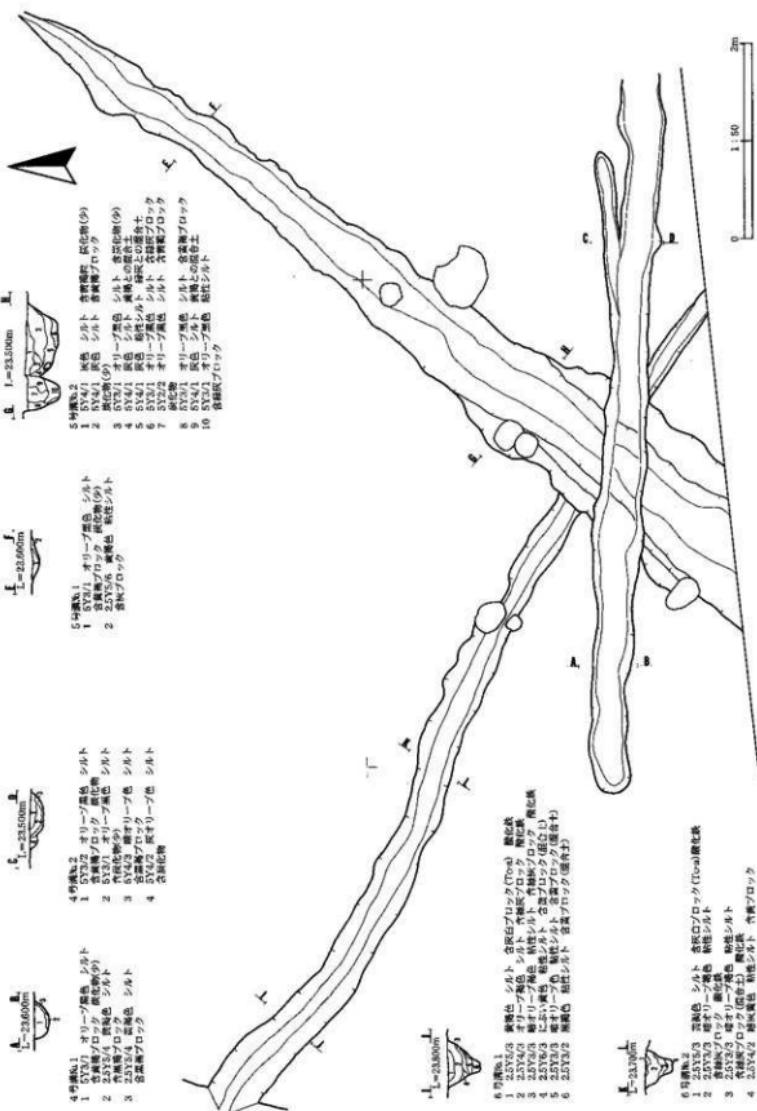
時期 重複関係及び出土遺物から12世紀代の遺構である。

4号溝跡（第17回・写真図版13）

遺構 <位置・重複関係>調査区中央南端部に位置する。D・E・F 5 グリッドにかけて検出された。周辺に分布する遺構中最も新しく、重複する全ての遺構を切っている。<規模・形態>上端幅53~34cm、下端幅40~20cm、深さ20~11cmで、約7.3mにわたって検出された。断面形は緩いU字状を呈し、底面における高低差は約30cmで、東側が下がる。なお、東側で幅15cm土の細い小溝が検出されたが、これを切っている可能性がある。方向は西一東(E-3°-S)で、東側は高地地形となるため検出できなかった。



第16圖 3號溝跡



第17図 4～6号溝跡

<埋上>上部は黄褐色ブロックや炭化物を含むオリーブ黒色土が主体となっている。

遺物 (第34図・写真図版33)

摩耗の著しいかわらけ小破片が出土している。294のロクロかわらけ破片1点を掲載した。破片中には手づくねかわらけもあるが、量はロクロかわらけが多い。

時期 検出面から12世紀代の遺構と考えたが、重複関係等からこれより以降の可能性もある。

5号溝跡 (第17図・写真図版14)

遺構 <位置・重複関係>調査区中央南端部に位置する。F 4・E 5・F 5グリッドにかけて検出された。4号・6号溝と重複し、前者に切られ後者を切る。また周辺部に分布する柱穴状小土坑に切られる。<規模・形態>上端幅100~40cm、下端幅43~20cm、深さ50~5cmで、約10mにわたって検出された。断面形は底面が緩くくぼむU字状を呈し、底面における高低差は約50cmで、南側が下がる。方向は北東-南西(S-38°-W)である。<埋上>上部は炭化物を僅かに含む灰色土、中部から下部は黒色土が主体となって構成されている。

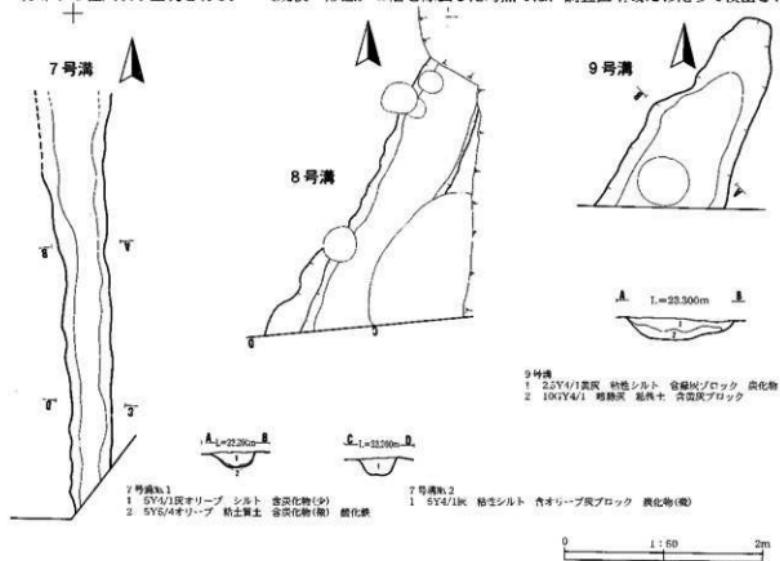
遺物 (第34図・写真図版33)

摩耗の著しいかわらけ小破片が出土している。294のロクロかわらけ破片1点を掲載した。

時期 検出面及び重複関係から、12世紀代の遺構と考えられる。

7号溝 (第18図・写真図版14)

遺構 <位置・重複関係>調査区東端部に位置する。J・L 4・L 5グリッドにかけて検出された。周辺に分布する柱穴状小土坑を切る。<規模・形態>II層を除去した時点では、調査区全域にわたって検出され



第18図 7～9号溝

たが、降雨と湧水により北半部はプランを明らかにすることができなかつた。検出された部分では上端幅60~40cm、下端幅35~20cm、深さ20~12cmで、調査できた長さは約4mである。断面形は底面の平坦なU字状を呈し、底面における高低差は約18cmで南側が下がる。方向は北~南(S=2°~E)で、ほぼ現道に平行する。

埋土 <位置・重複関係>灰オリーブ色土を主体とし、北側では砂質となつてゐる。出土遺物はない。

時期 遺物を作らず詳細は不明であるが、検出時にほぼ同レベルから寛永通寶が出上していることや、周囲の土層の堆積状況から推定して、近世奥州街道の西側側溝の可能性がある。

#### 8号溝(第18図・写真図版14)

遺構 <位置・重複関係>調査区中央南端部に位置する。G・F5グリッドにかけて検出された。2号井戸跡、1号埋納遺構に切られるほか北側は近代の井戸跡によって破壊されている。<規模・形態>上端幅75cm、下端幅65cm、深さ25~20cmで、検出された長さは3mである。断面形は底面が平坦なU字状を呈し、底面における高低差は約26cmで南側が下がる。方向は北東~南西(S=26°~W)である。<埋土>調査区境断面の観察では、最上部は周辺部に分布する整地層に覆われている。上部から中部はオリーブ黒色土が主体、下部はグラウジ化の進んだ緑灰色土で構成される。

遺物 埋土からかわらけの小破片が出土しているが、実測は省略した。

時期 重複関係及び埋土の層相から12世紀代の遺構と考えられる。

#### 9号溝(第18図・写真図版14)

遺構 <位置・重複関係>調査区西端部に位置する。L5グリッドで検出された。柱穴状の小土坑に切られる。<規模・形態>降雨と湧水のため、検出段階で北側を削りすぎており、元来は北に延びていたものと考えられる。検出された部分では上端幅115~70cm、下端幅80~45cm、深さ37~5cmで、精査できた長さは約2mである。断面形は底面は緩いU字状を呈し、底面における高低差は約35cmで南側が下がる。方向は北東~南西(S=25°~W)である。<埋土>最上部は周辺部に分布する整地層に覆われている。上部は炭化物を含む灰オリーブ色土、下部はグラウジ化の進んだ緑灰色土から構成される。

#### 遺物(第34・35図・写真図版33)

<出土状況>埋土からかわらけ、上製品、石器、鉛漆(133g)が出土している。

<かわらけ>破片375gが出土した。ロクロかわらけと手づくねかわらけでは、いくぶん前者の割合が多い。298は大型の手づくねかわらけ、299~301は小型のロクロかわらけである。

<土製品>鋳造関連の遺物が多く、全体では約500gが出土した。坩埚、羽口片が多い。305~306は坩埚破片で、残存部から推定すると小型の部類に属する。307は平瓦の破片で内面には布目、外面上には繩痕が見られる。308は摩耗と剥落によって詳細は不明であるが、鋳型の可能性がある。

<石器>309はほぼ全面に使用痕跡が見られる小型の磨石である。

時期 出土遺物と検出面から12世紀代の遺構と考えられる。

### (7) 埋納遺構

3基を埋納遺構とした。このうち2基は柱穴状小土坑で、柱を除去した後の掘り方に遺物を故意に「入れた」または「埋めた」と考えられる遺構である。なお、遺物が破片であったため、埋納遺構として扱わなかったが、青磁鉢の破片が接合した東端部柱穴群中のNo.10及びNo.12(第12図)も同種の遺構の可能性がある。

### 1号埋納遺構（第19図・写真図版18）

遺構 F5グリッド、調査区中央南端部に位置する。II層及び東側に隣接する近代の防火水槽による搅乱を除去した段階で、上部の埴場が検出された。なお、搅乱部の除去の際掘り方の上部を削りすぎた可能性が高い。8号溝の埋土上を掘り込んで、大小2個の完形埴場を正位に重ねて埋置している。なお、西側約20cmには2号埋納遺構がある。溝の埋土内にあるため、掘り方の平面径及び規模を明確に把握できなかった。断面からの推定すると、径30cm前後、深さ15cm前後の不整な円形を呈する掘り方を有するものと考えられる。

### 遺物（第35図・写真図版33）

310は下段の埴場で、内側と口縁部外面が黒褐色～赤褐色に溶変する。溶変のため詳細は不明であるが、片口状を呈する可能性が高い。器壁は2cm前後で、内面及び口縁部近い部分では発泡状となっている。なお、体部下端には縦横3本の線による格子目文が刻まれている。口唇部までの容量は約100ccである。302は上段の埴場で、片口状を呈する。下段のものと同様に内面及び口縁部画面が溶変するが、特に口縁部付近が顕著である。器壁は下段のものよりいくぶん厚く3cm前後で、口唇部までの容量は約180ccである。

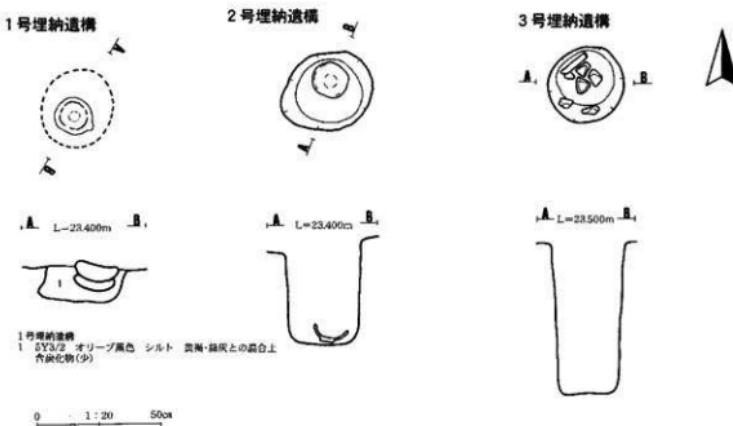
時期 検出面及び包含層中の出土遺物との比較から、12世紀代の遺構と考えられる。

### 2号埋納遺構（第19図・写真図版18）

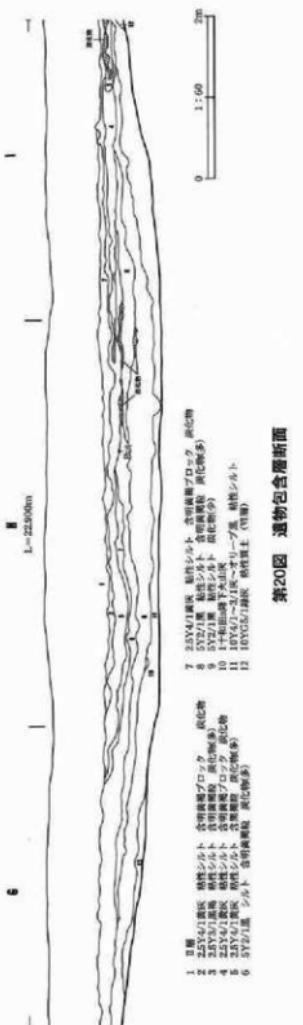
遺構 F5グリッド、調査区中央南端部に位置する。東側約20cmで1号埋納遺構と隣接している。8号溝西壁及び柱穴状小土坑No.73と重複し、これらを切っている。開口部径39×32cm、深さ43cmの柱穴状小土坑（中央南端部柱穴群No.72）の底面に完形漆器挽1個を正位に埋置している。埋土は緑灰色土ブロックを含む黄灰色土が主体で、人為的な堆積である。

### 遺物（第35図・写真図版33）

313は埋納されていた漆器挽で、検出時点では完形品であったが、木質部の劣化が激しく現在は破砕している。八の字に立ち上がる高台を有し、胴部は内湾して口縁部に統く。高台部の内面は浅く削り貫かれている。器面全体に黒漆が塗布されている。



第19図 1～3号埋納遺構



時期 周囲の遺構の状況及び出土遺物から12世紀代の遺構と考えられる。

#### 3号埋納遺構（第19図・写真図版18）

遺構 F5グリッド、調査区中央南端部に位置する。西側約2.5mには2号埋納遺構がある。開口部径35×32cm、底部径23×22cm、深さ62cmの柱穴状小土坑（中央南端部柱穴群No.51）の埋土上部に埴塙大型破片と珪化木を伴う。埋土は緑灰色土ブロック、炭化物を含む黄灰色土で、人為的な堆積である。

#### 遺物（第35図・写真図版33）

312は小型の埴塙で、器壁厚2cm前後、口唇部までの容量は約80ccである。内側と口縁部外側は溶合するが、底面付近は灰白色を呈し顯著ではない。なお、内面には最大直径1mm程の金粒が疎らに付着している。

時期 周囲の遺構の状況及び出土遺物から12世紀代の遺構と考えられる。

#### （8）遺物包含層（第20図・写真図版19～21）

調査区東側、H5～J5グリッドは緩く南側に下がる谷地形を呈し、この部分に遺物包含層が形成されている。調査範囲は約50m<sup>2</sup>、厚さは30～60cmである。

当地区に堆積する層は、基本層序では第Ⅲ層としたもので、黄灰色土・黒褐色土・黒色土を主体とし、これにVI層を起源とする緑灰色土や炭化物層を挟む。なお、上部に見られる黄灰色土は当地区的ほぼ全面を覆い、最終的にこの土層によって整地が行われたものと考えられる。各層は人為的な堆積土（廃棄土）の様相を示し、出土する遺物からほぼ12世紀に形成された土層群と考えられる。層中には土器、陶器、木器・木製品の他に埴塙・羽口を主体とする土製品類や鉛錠（カラミ）等の铸造関連遺物が含まれ、出土量はこれら铸造関連遺物が卓越する。また、細分される層中にはVI層起源の緑灰色土が平面的に検出される部分もあり、單なる「廃棄」のほかに当初から「整地」を目的にしている可能性が高い。遺物 かわらけ、陶磁器、土製品、木器・木製品、金属製品、石器・石製品、鉛錠が出土している。掲載及び記載にあたってはグリッド及び器種毎に行った。なお、H

5～J 5グリッド以外からの出土遺物も当項に含めた他、遺構内から出土した縄文時代の石器類についても掲載している。

〈かわらけ〉(第35図・36図・写真図版34)

314～321は主に調査区中央部から出土したかわらけで、出土総量は約6.5kgある。319は底面に穿孔を持つ可能性がある。320・321には意匠は不明であるが、外面に線刻が見られる。322～334はI 5グリッドから出土したかわらけで、出土総量は約5.7kgである。ロクロかわらけも出土しているがいずれも小破片で出土量も少なく、実測できたものは全て手づくねかわらけである。334は底部中央に直径8mmほどの穿孔を持つ小型かわらけで、内外面にはタール状の物質が付着している。

335～345はI 5グリッドから出土である。出土総量は約12.5kgで、調査区内中最も多い。手づくねかわらけが卓越するが、大小のロクロかわらけも出土している。340はいくぶん深みのある手づくねかわらけで、内面にはハケメ状のナデ痕が明瞭に観察される。また、内外面にはススが付着し、器面の剥落した部分にも見られる。

346～357はJ 5グリッドからの出土かわらけで、総量は約3.4kgである。当グリッドでも手づくねかわらけの出土量が勝るが、他に比較してロクロかわらけの割合が多い。355は底面中央に、に直徑約8mmの穿孔を持つ小型のロクロかわらけである。357はⅢ層最下部から出土した大型のロクロかわらけであるが、胎土や糸切り痕が密なことから土器類の坏形土器の可能性もある。

〈陶器類〉(第36・37図・写真図版35)

調査区全体でも約5kgと、出土量は少ない。国内産の陶器には渥美産、常滑産、須恵器系陶器、猿投系陶器があるが、渥美産と常滑産がほぼ同量出土しており、この他のものはごく僅かである。また、中国産の磁器はさらに少ない。

358は渥美産の鉢で、「ハ」の字に聞く低い高台を持ち、器壁は全体に厚手である。359は須恵器系陶器の鉢で、内面には墨の板跡が見られる。360は渥美産の壺と考えられる。肩部下端まで自然軸が垂れ、底面は釉のため発着する。361は小型の鉢である。胎土は緻密で、猿投系陶器の可能性がある。362は常滑産の壺破片で、二重の菱形押印が見られる。363は常滑産の鉢で、「ハ」の字に聞く低い高台を持ち、内面は使用によるものか、滑らかになっている。364・366・369は渥美産壺、365・370は常滑産壺、367は常滑産壺、368は須恵器系陶器の壺破片である。

小破片のため実測図の作成は省略したが、371～374(写真図版35)は中国産の磁器破片である。371は青白磁の碗と考えられ、破損部に漆絞ぎが施されている。372・374は白磁の碗、373は合子の可能性がある。

〈土製品〉(第37・38図・写真図版35・36)

ほとんどが铸造関係遺物で、9割以上がI 5とJ 5グリッドからの出土である。総出土量は約9kgで、培塙が卓越し羽口がこれに次ぐ。

375～394は培塙であるが、完形品はない。埋納遺構からの完形品と反転埴から、口径が15cm土の大型、12cm土の中型、10cm土の小型の3タイプに分類が可能である。全て胎土には粗粒を多く含んでいる。383・385・388など片口状を呈するものがあるが、全てがこの形態をとるかどうかは不明である。375・380・391・394の内側には金粒、393には銀？粒が付着するが、これらはいずれも小型である。なお、380・395には溶変部分に金銅痕が明瞭に残る。

395～397は羽口で、これらも小破片である。398・399は表面に笠葉痕状の条痕が見られる上製品で、

1号道路跡東側溝出土の69と同様に、軸に類似する。

〈木器・木製品〉(第38図・写真図版36・37)

溝地地形となるH5～J5グリッドからの出土である。402～404は進苗下駄で、403には鼻緒穴が残る。405は上部に両側から2個の刻みを有し、上端は鈍く尖る。墨書きは認められないが、笠塔婆であろう。406は刃物類の柄、407は箸である。408～411は加工痕を有する木片、412は底板である。

〈金属製品〉(第39図・写真図版37)

413～416は銅製品で、H5～J5グリッドからの出土である。413は「U」字状の薄い銅製品で凸面には金箔が付着している。414・415は幾分厚みのある銅版で、鉄状工具による切り屑の可能性がある。416は細い角柱状の銅製品で、角にパリが見られることから鋳造品と考えられる。

417は板状の鉄製品である。418はL4グリッドから出土した寛永通寶で、寶の下部が「ス」となる古寛永である。なお、出土層は7号溝の検出面と同一面である。

〈石製品・石器〉(第39図・写真図版38)

419は緻密な凝灰岩製の石製品で、表面は雲形状に縁取りされ、内部に浮彫が施されている。表面及び側面は厚く黒漆が塗布されている。用途は不明であるが、仏壇等の壇飾りの可能性がある。また、石質は他の砾石に類似し、砥石として最利用するため持ち込まれた可能性もある。

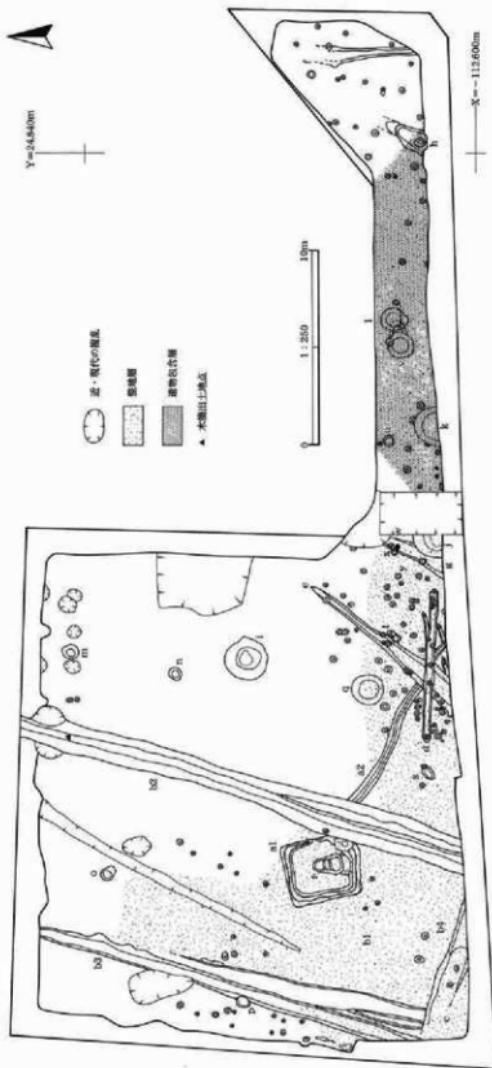
420～424は砾石である。421～424は小型で、多面を使用している。出土地点も他の铸造遺物が集中するH5・I5グリッドからの出土で、铸造品の整形に用いたものであろう。

425～432は繩文時代の石器である。425～426は石鏃で、前2者は無茎凹基鏃、後者は有茎鏃である。429は石砲、他は剥片の縁辺に刃部加工を持つスクレイバーである。

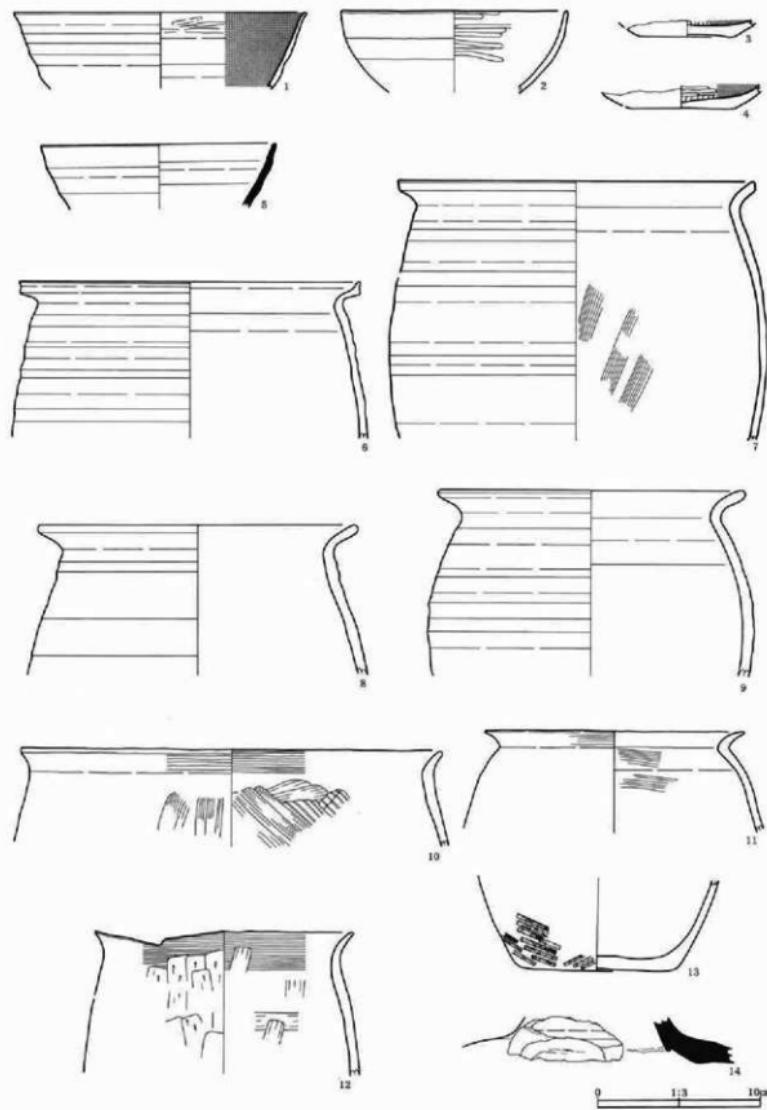
〈鉱洋〉 埴堀や羽口の溶解部分を含むと考えられるが、約9.5kgが出土している。特にI5区からは約7.3kgが出土しており、全体の77%を占める。形態には湯玉状のものや溶洞状のものもあり、これらにはメタル反応が見られる。

検出遺構一覧

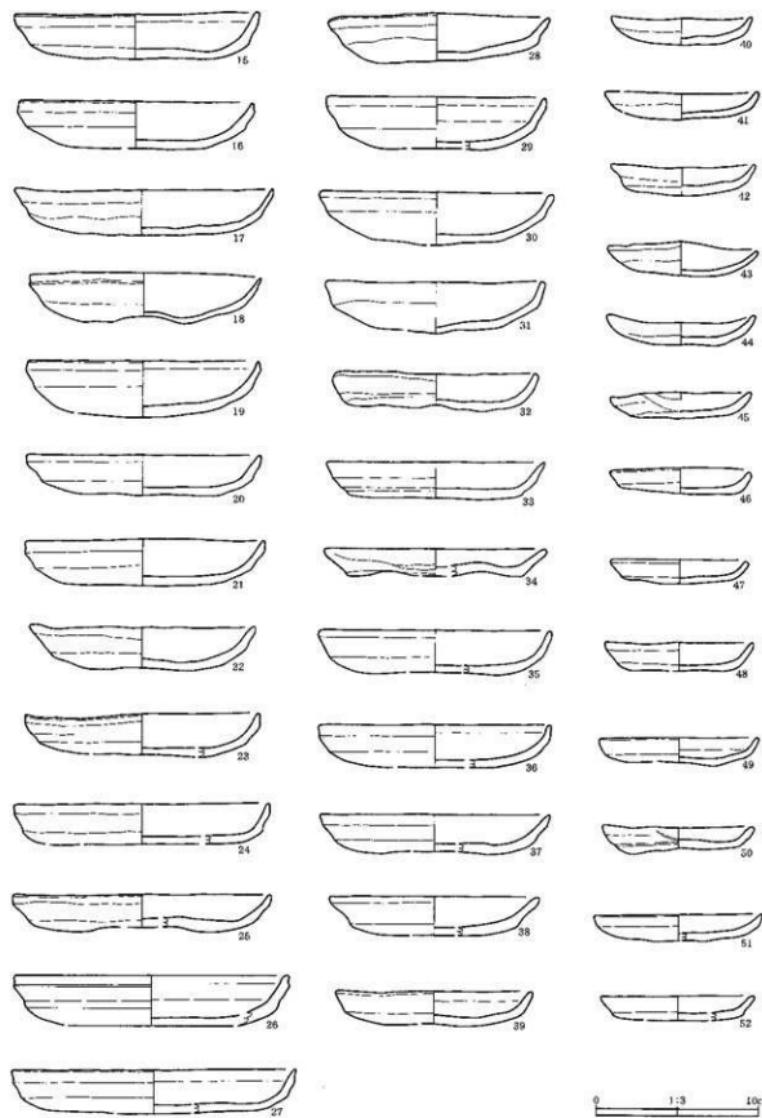
a1	1号仕居跡	k	3号井戸跡
a2	外延溝（6号溝跡）	ℓ	4号井戸跡
b1	1号道路跡（路雨）	m	1号土坑
b2	東側樹海（1号溝）	n	2号土坑
b3	西側樹海（2号溝）	o	3号土坑
b4	橋脚状遺構	p	4号土坑
c	3号溝跡	q	5号土坑
d	4号溝跡	r	7号土坑
e	5号溝跡	s	8号土坑
f	7号溝跡	t	9号土坑
g	8号溝跡	u	10号土坑
h	9号溝跡	v	11号土坑
i	1号井戸跡	w	1号理納遺構
j	2号井戸跡	x	2号理納遺構
		y	3号埋納遺構



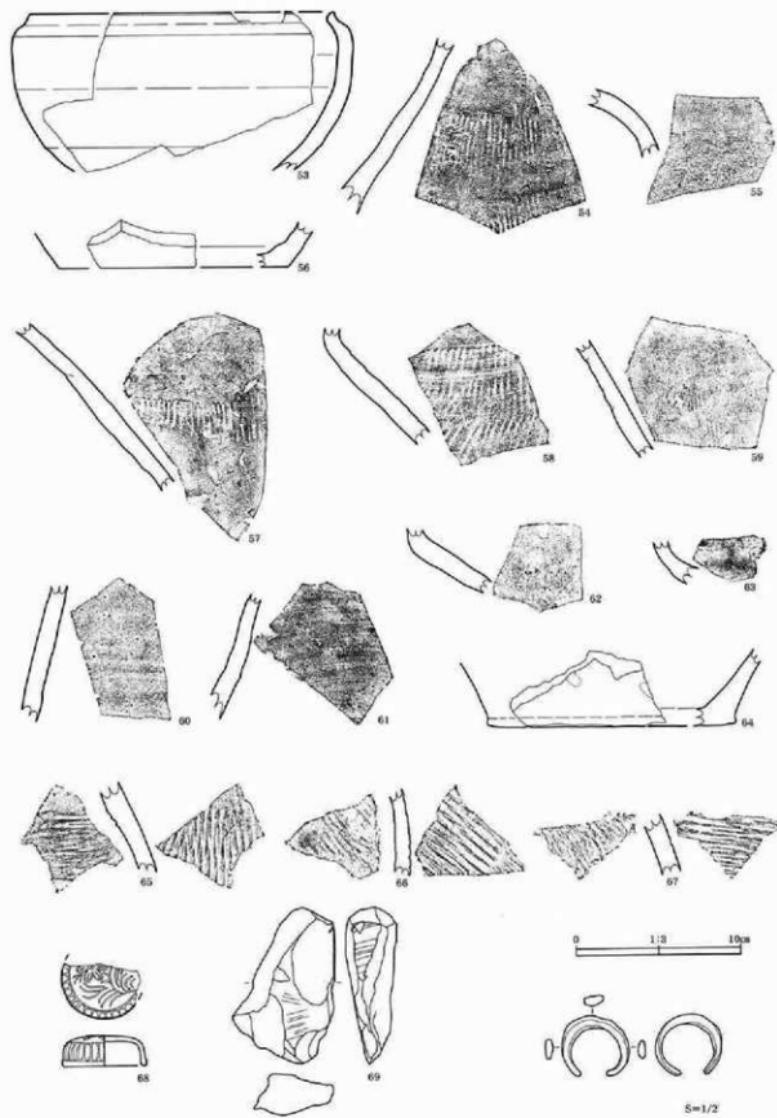
第21図 遺構配置図



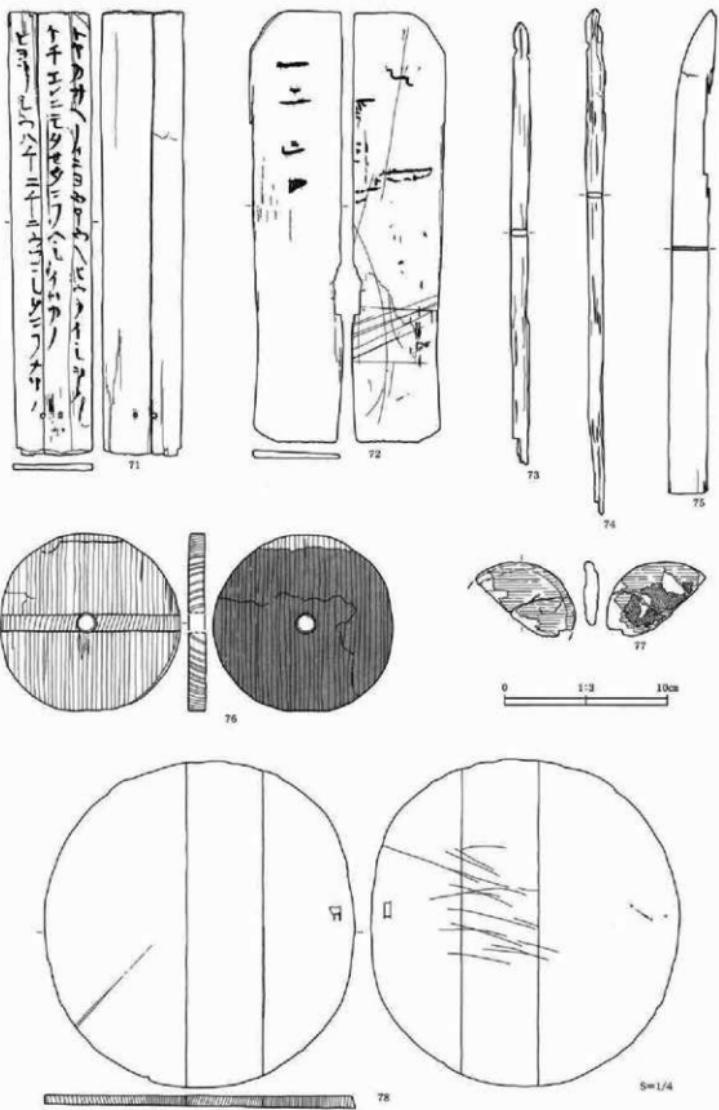
第22図 遺構内出土遺物 1



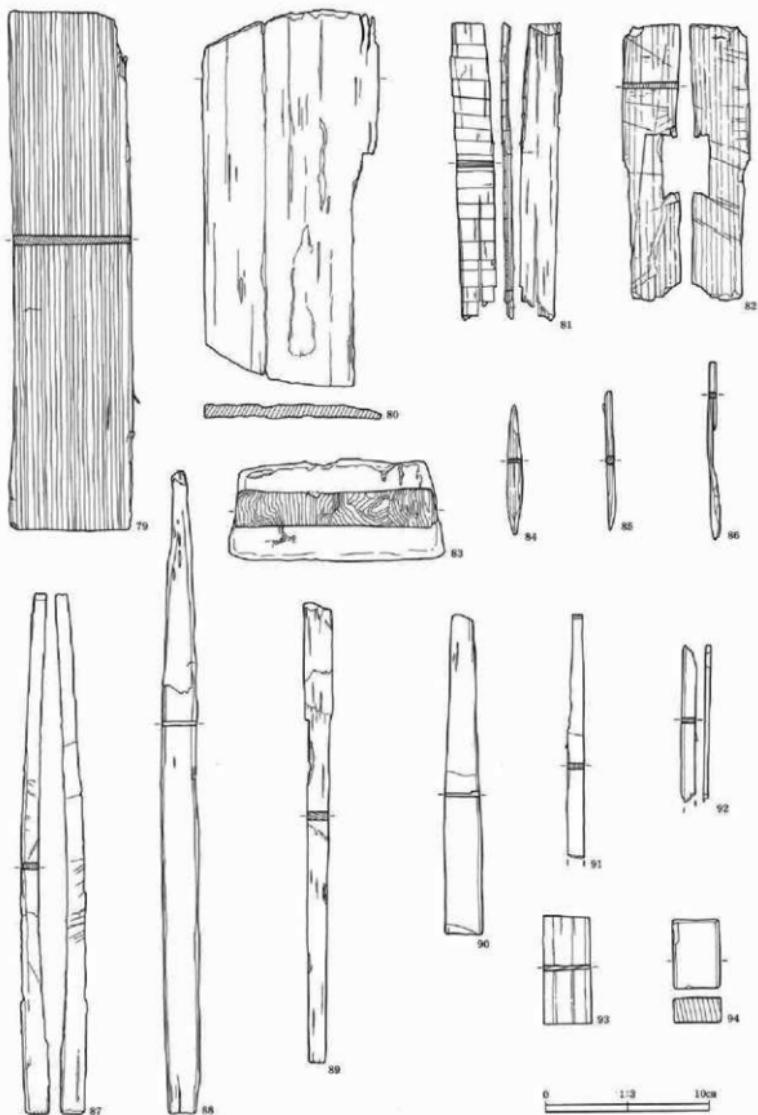
第23図 遺構内出土遺物 2



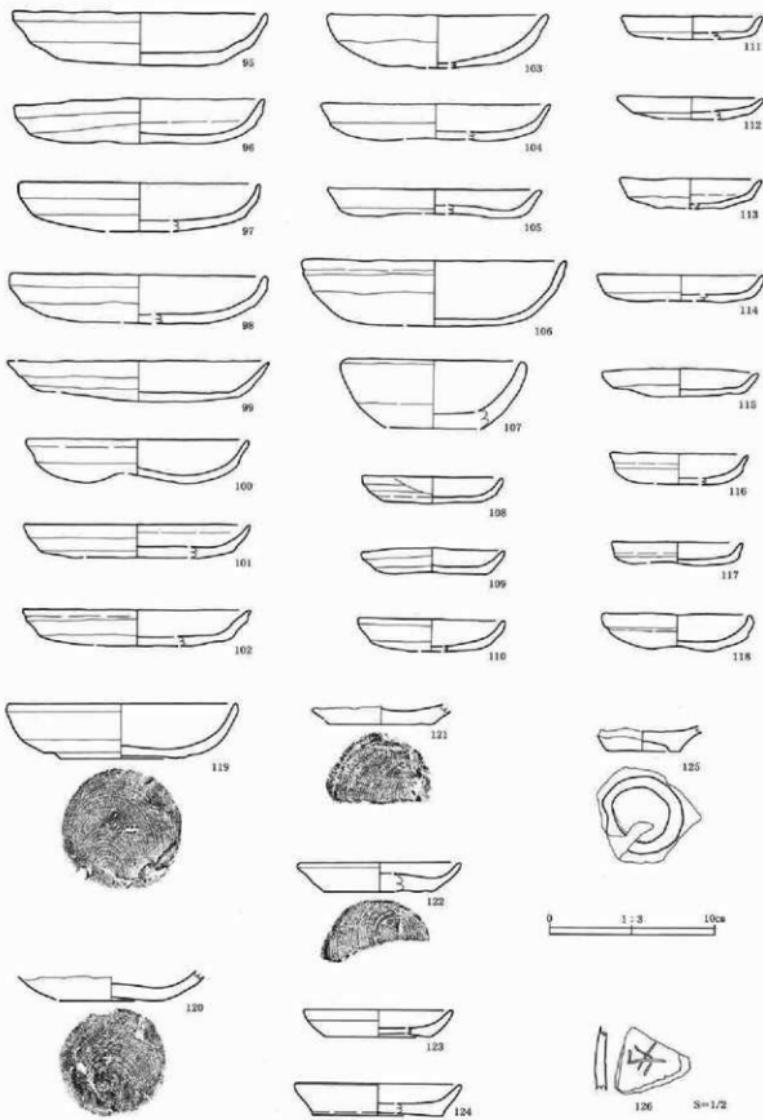
第24図 遺構内出土遺物 3



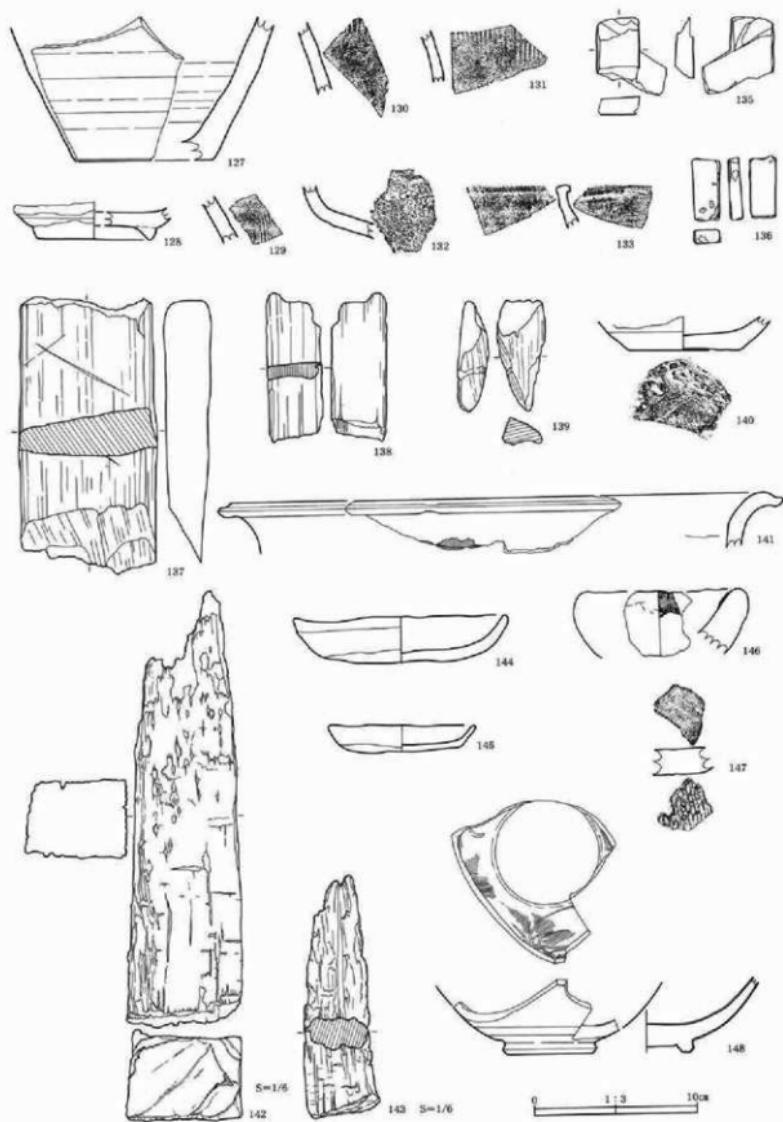
第25図 遺構内出土遺物 4



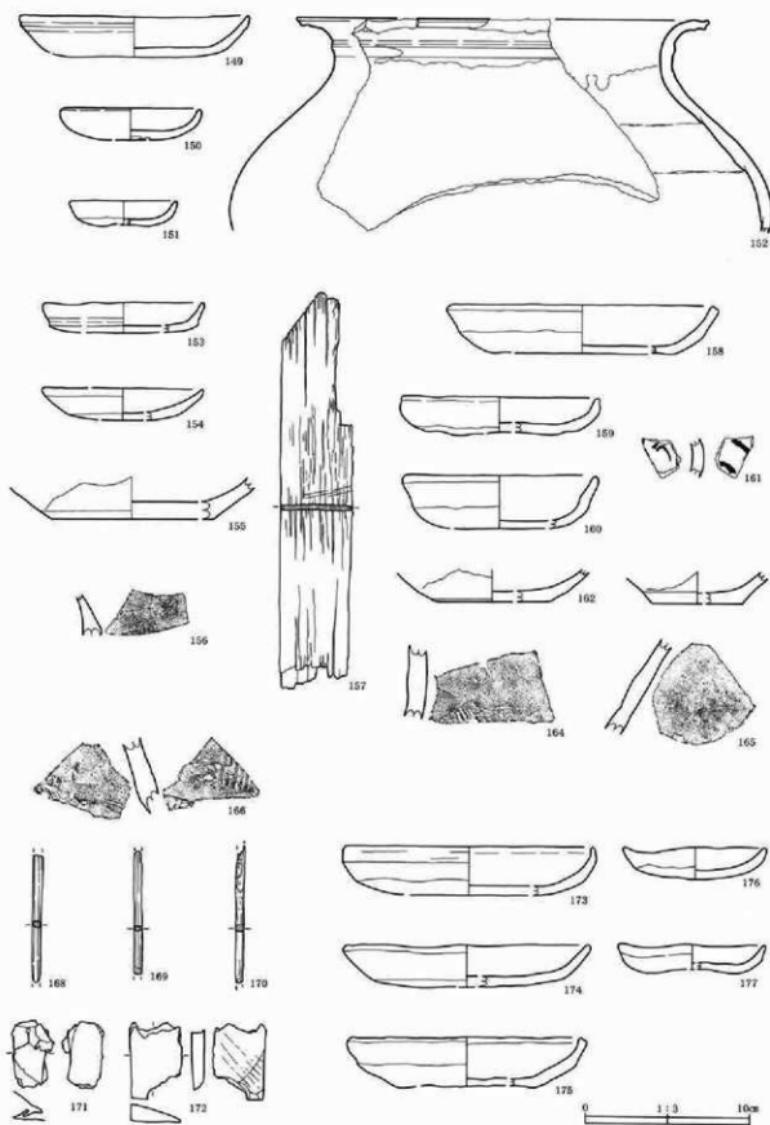
第25図 遺構内出土遺物 5



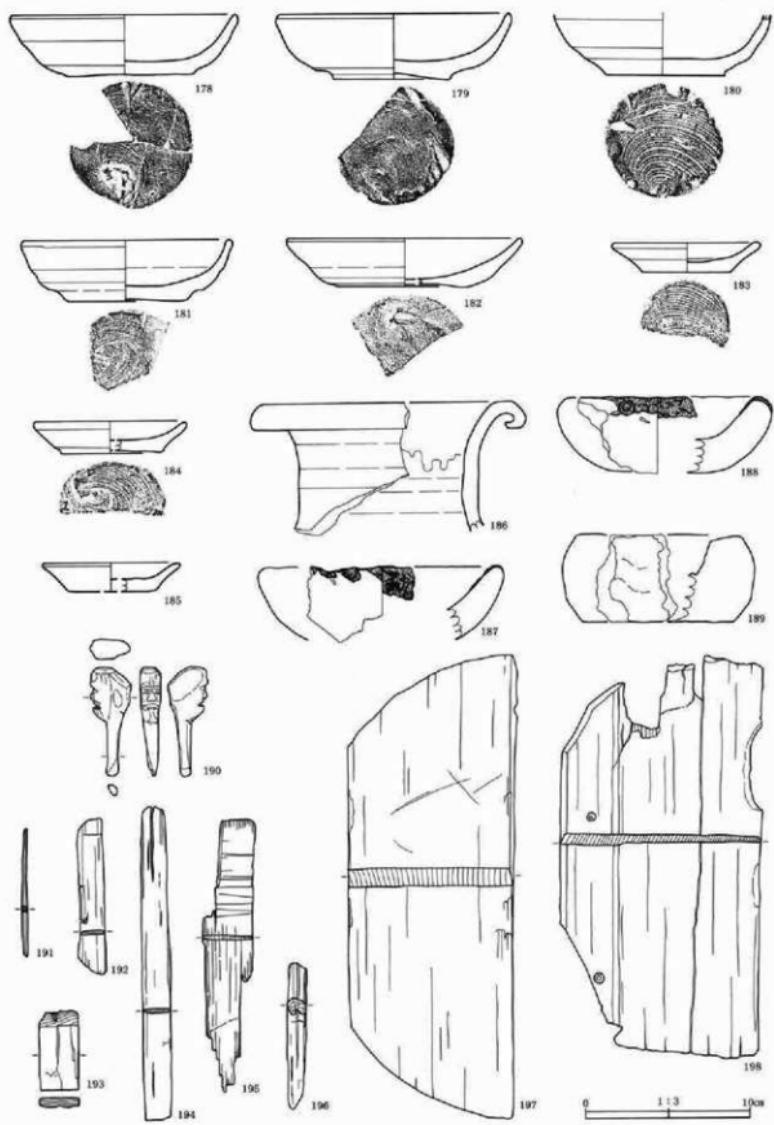
第27図 遺構内出土遺物 6



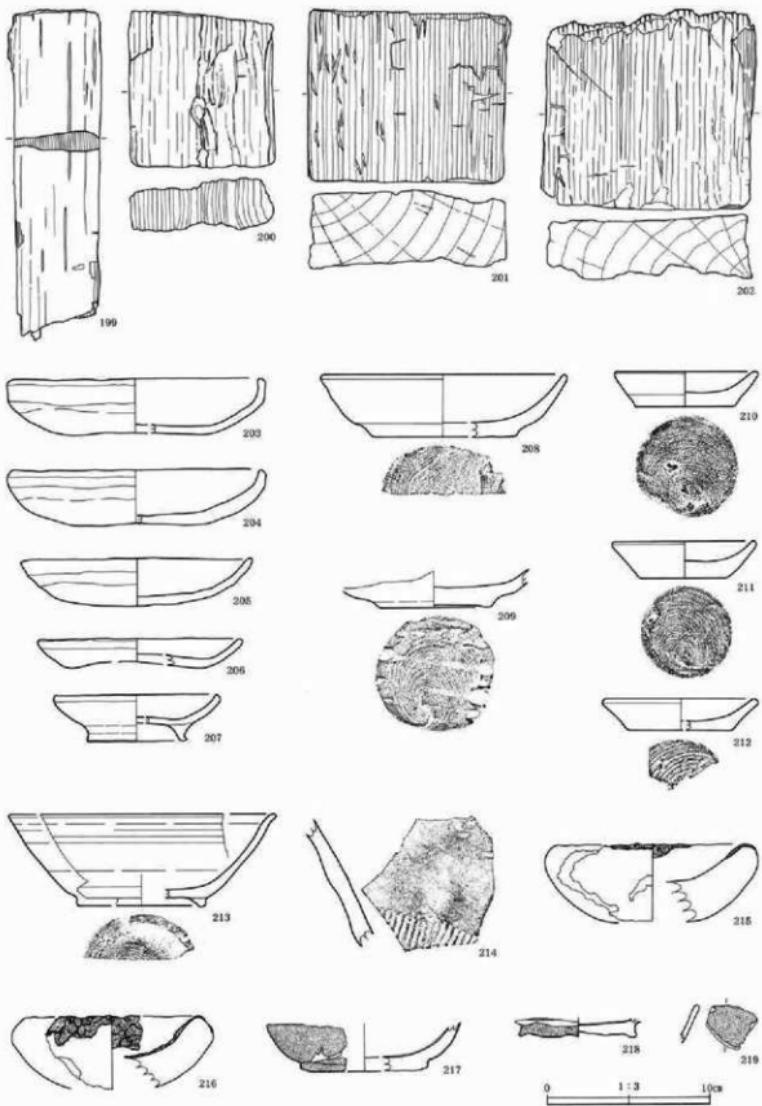
第28図 遺構内出土遺物 7



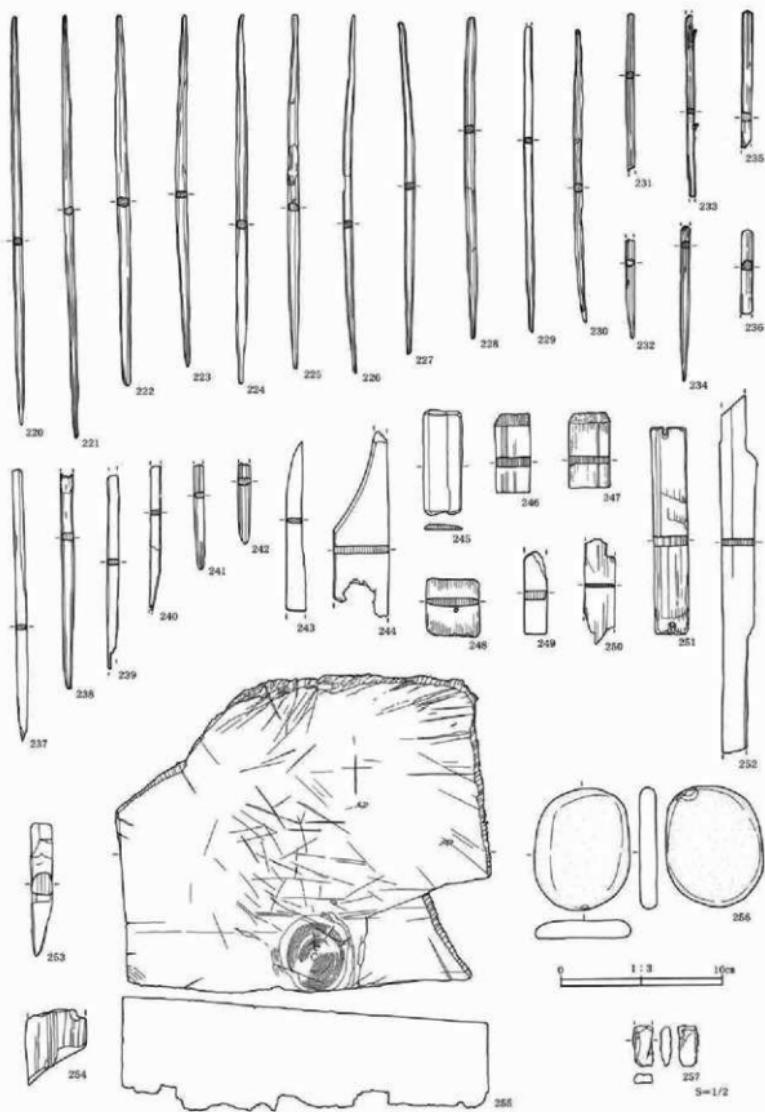
第29図 遺構内出土遺物 8



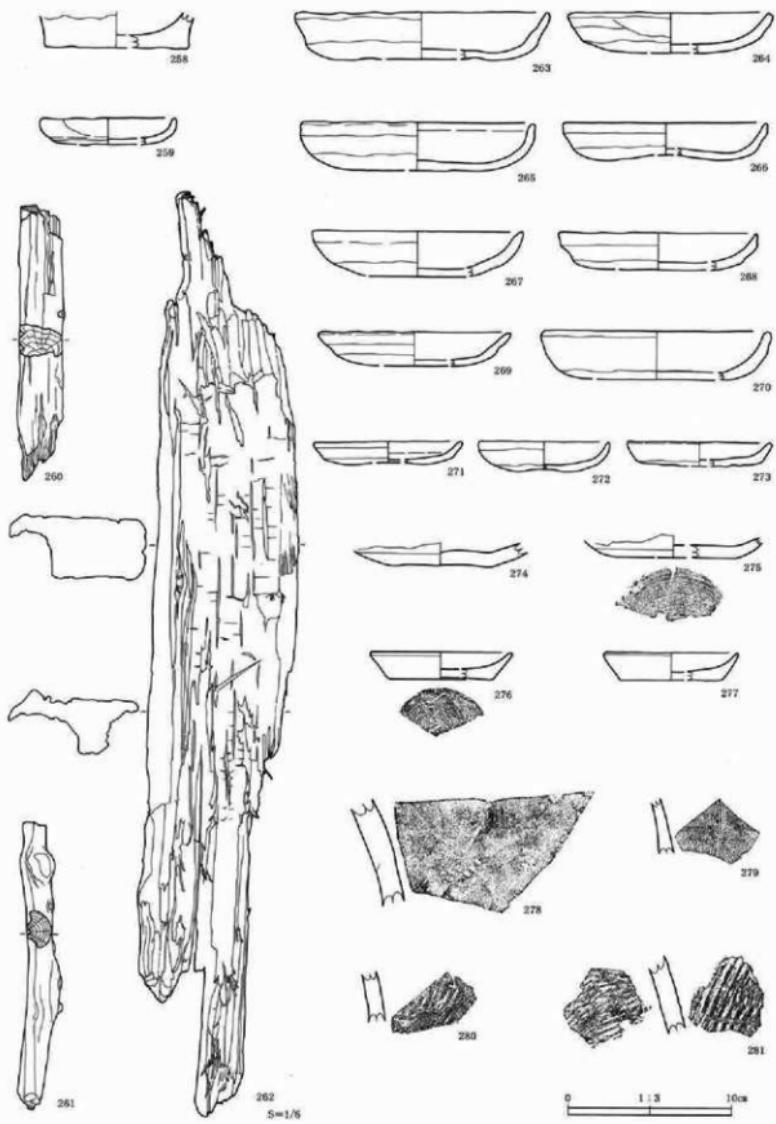
第30図 遺構内出土遺物 9



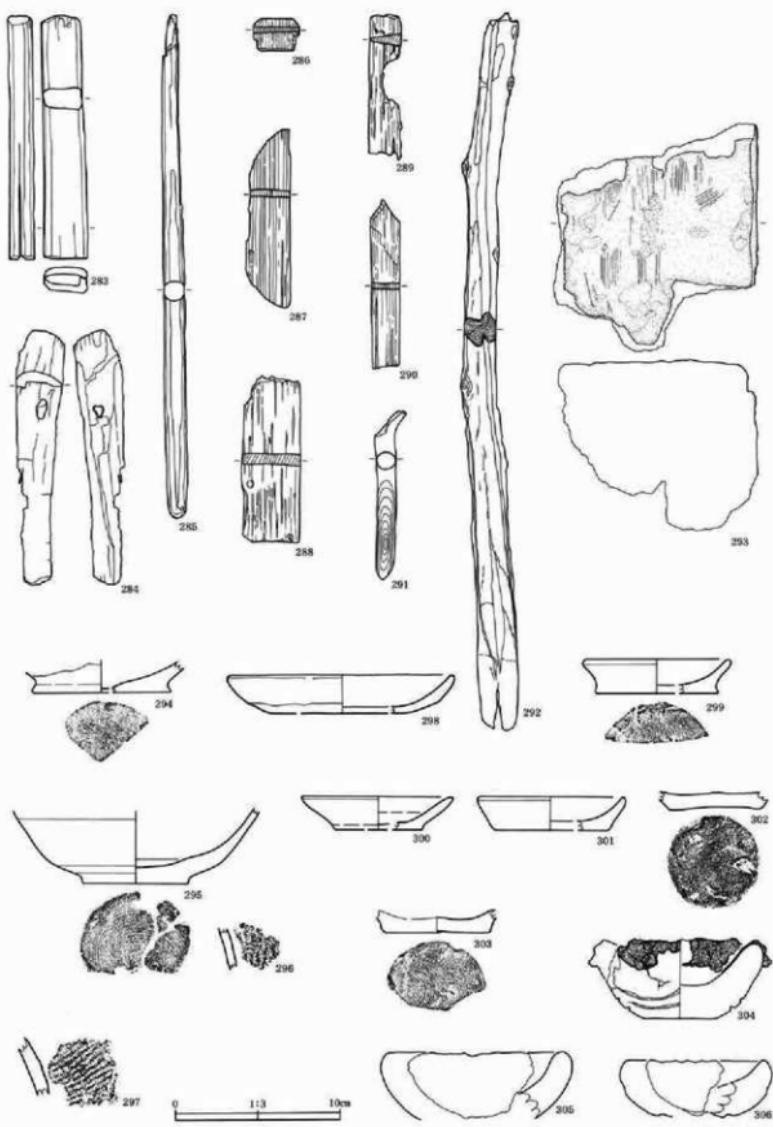
第31図 遺構内出土遺物10



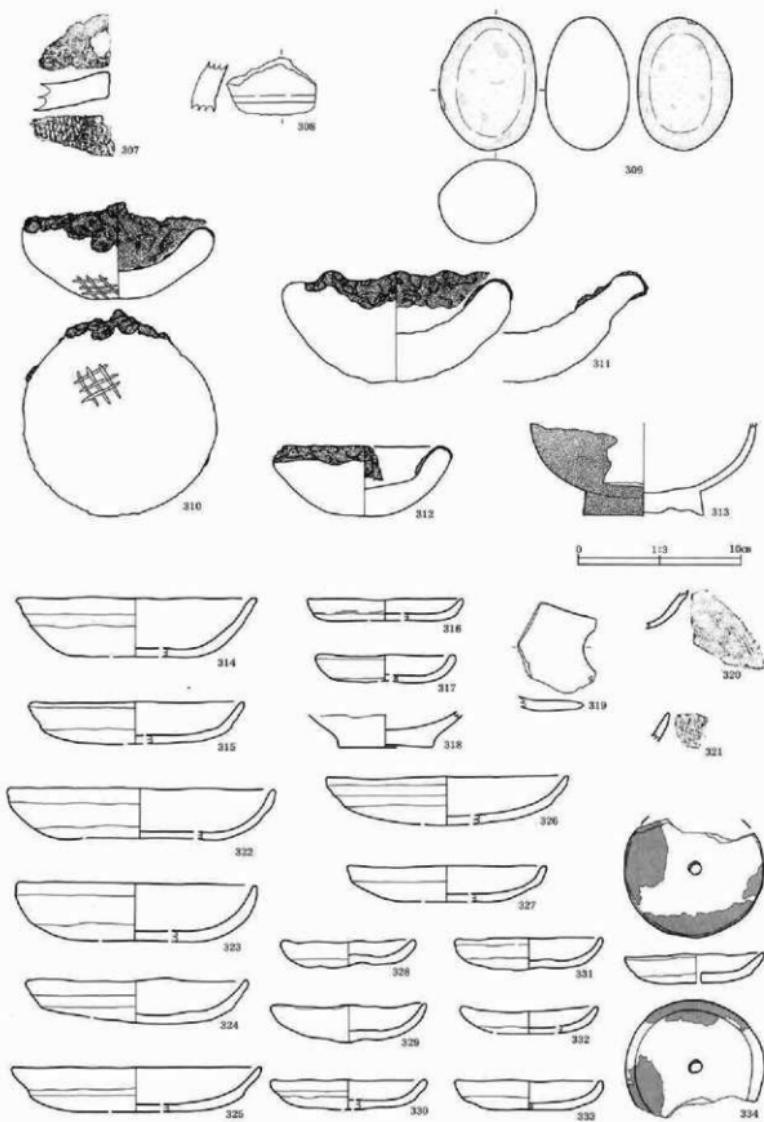
第32図 遺構内出土遺物11



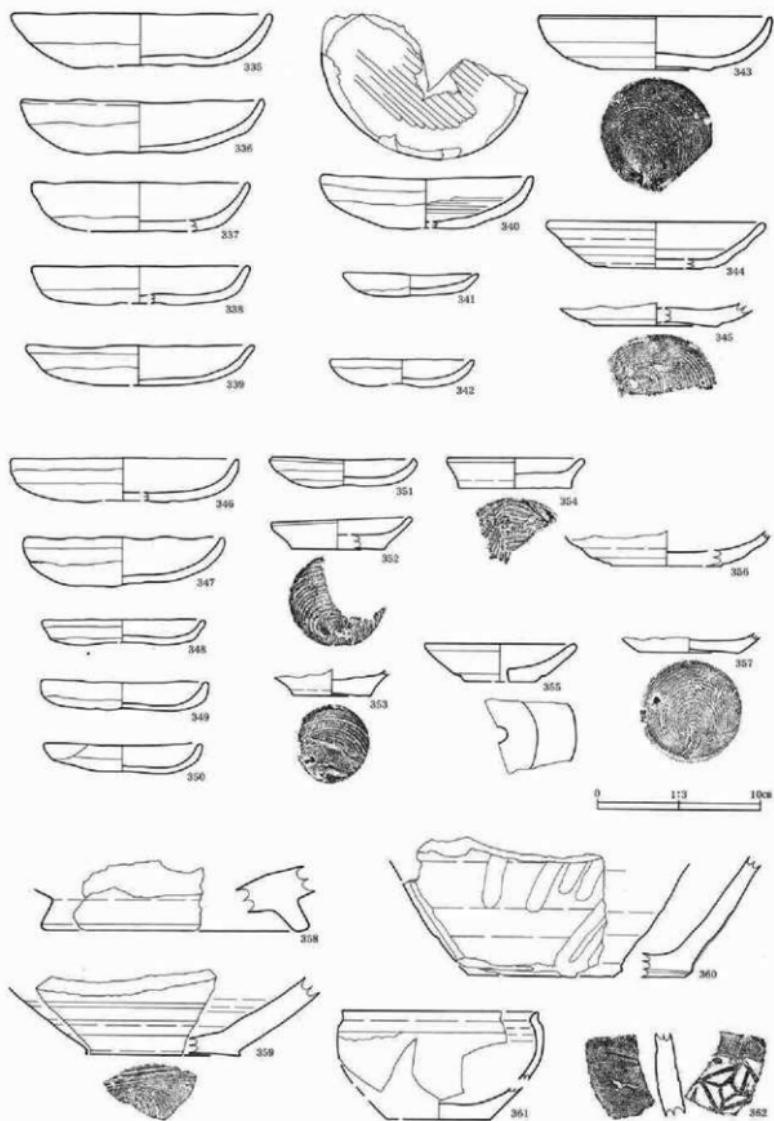
第33図 遺構内出土遺物12



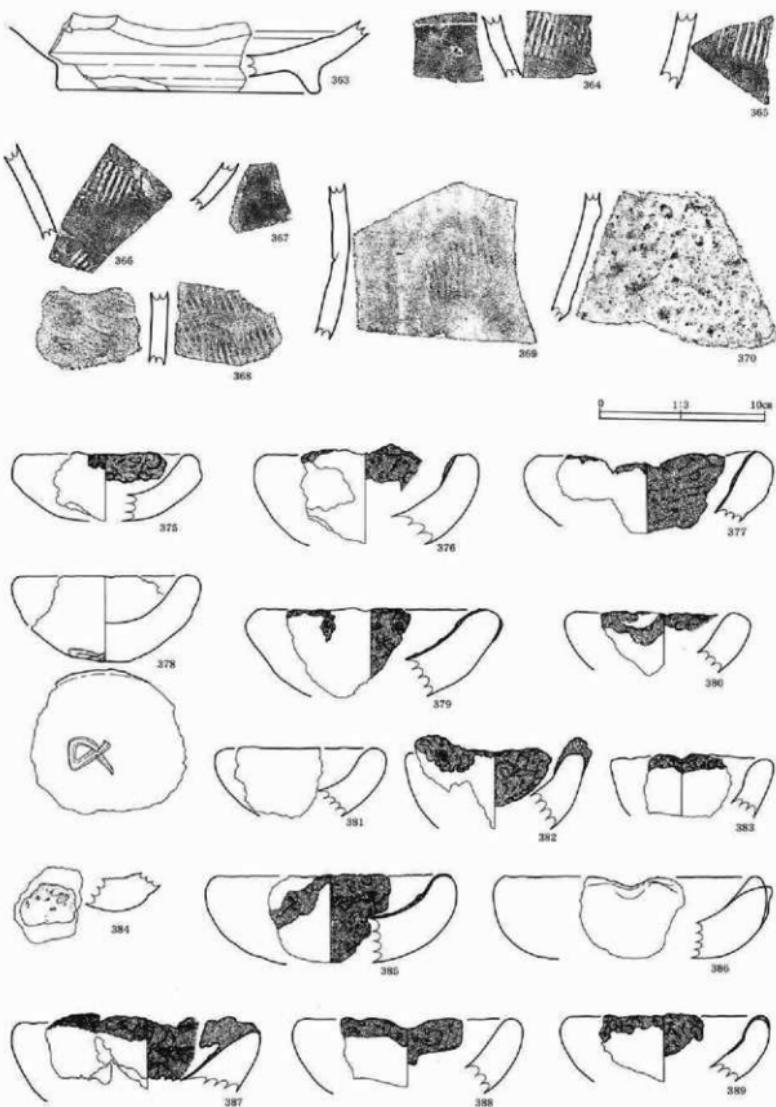
第34図 遺構内出土遺物13



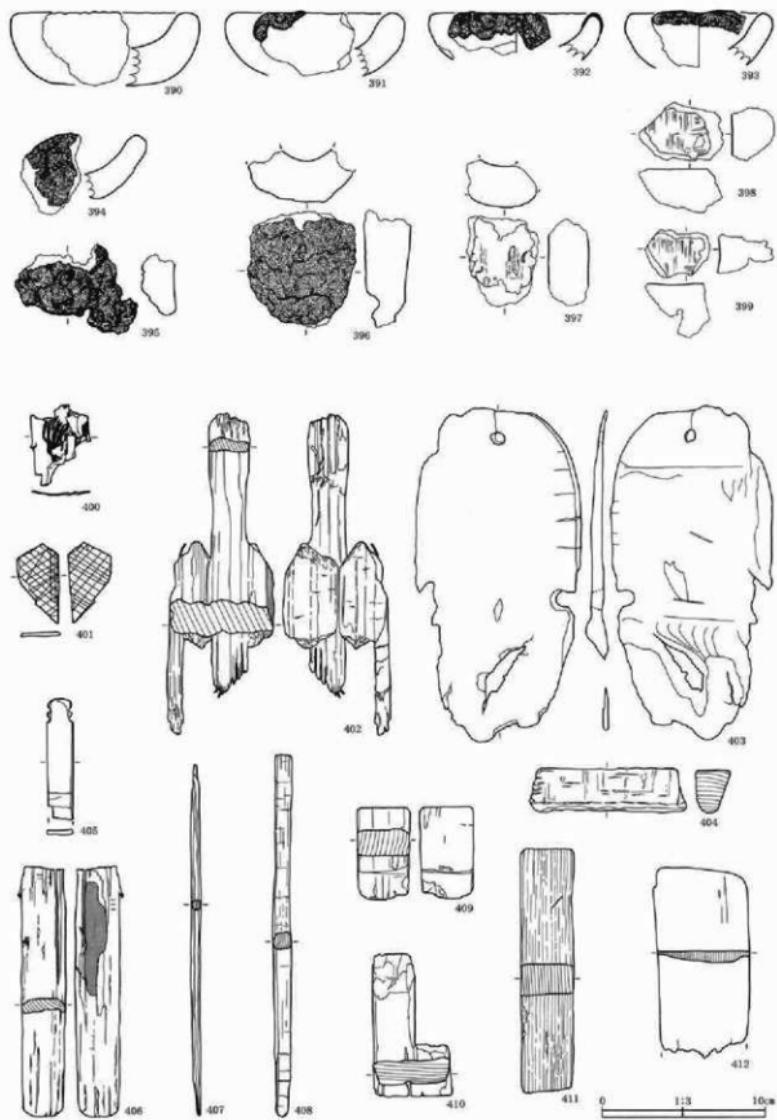
第35図 造構内出土遺物14・包含層出土遺物 1



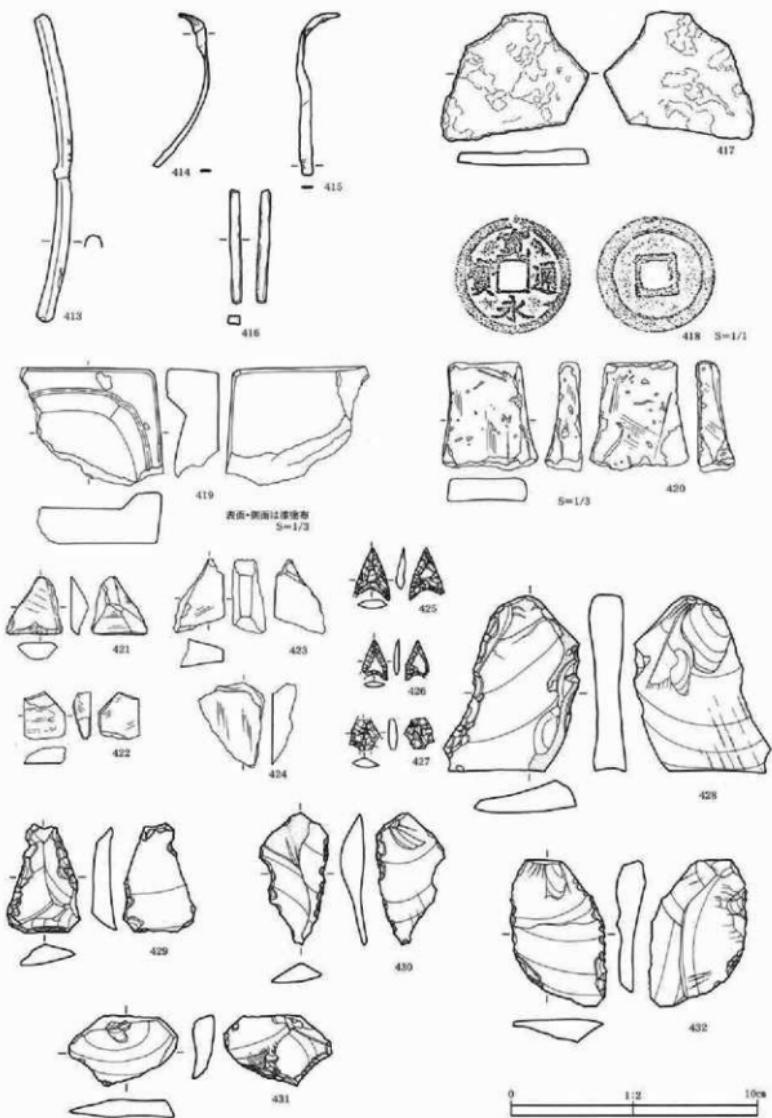
第36図 包含層出土遺物 2



第37図 包含層出土遺物 3



第38図 包含層出土遺物 4



第39図 包含層出土遺物 5

## 土器觀察表

( ) は推定値

図版	出土地點/層位	口径	底径	高さ	残存状態	備考	分類
1	1号住埋土	(18)				土師器杯 脊?: ロクロ成形 内面: ミガキ・黒色処理	
2	1号住埋土	(14)				土師器杯 内面: ミガキ・黒色処理? 二次加熱?	
3	1号住埋土		5.6			土師器杯 ニクロ成形 内面: ミガキ・黒色処理 底面: 回転糸切り痕	
4	1号住埋土		6.4			土師器杯 底面: 円錐型 (持ち手ヘラケズ) 内面: ミガキ・黒色処理	
5	1号住埋土	(14.4)				須恵器甌 ニクロ成形 施成不良	
6	1号住埋土	(21)				土師器甌 口縁~胸半: ロクロ成形 内面: ナデ?	
7	1号住埋土下部	(22)				土師器甌 口縁~胸半: ロクロ成形 内面: ナデ?	
8	1号住埋土	(19.7)				土師器甌 口縁~胸上半: ロクロ成形 内面: ナデ	
9	1号住埋土	(19)				土師器甌 ロクロ成形 内外周ロクロナデ	
10	1号住埋土	(26)				土師器甌 ロクロ: ヨコナデ 脇部: ナデ 内面: ナデ	
11	1号住埋土	(16)				土師器甌 口縁: ヨコナデ 脇部: ナデ? 内面: ナデ 脇面摩耗	
12	1号住埋土	8				土師器甌 ニクロ成形用 口縁: ヨコナデ 脇部: ケズリ 内面: ナデ	
13	1号住埋土			9.8		七郎甌 塵器下端: ナデ+タキ口 内面: ナデ	
14	1号住埋土					須恵器甌 脇部のみ残存 ロクロ成形 内面: 頸筋に微ぎ口	
15	1号埋土下部	15.2		2.8	1/2以上	底面: スノコ状底窓 (浅)	C4
16	1号埋土上部	(14.6)		3	1/2以下	内面: 木目状ナデ	C4
17	1号埋土下部	(16)		2.8	1/2以下	底部: スノコ状底窓 (浅) 器面摩耗	C3
18	1号埋土上部	14.3		3.1	完形	口縁: 内面にスス付着 内面: 木目状ナデ 底面: スノコ状底窓 凹凸	C4
19	1号埋土下部	15		3.5	1/2以上	底面: スノコ状底窓 (浅)	C4
20	1号埋土下部	14.5		2.5	完形	内面と口縁にスス付着	C4
21	1号埋土	14.8		2.9	完形	底面: スノコ状底窓 (浅)	C4
22	1号埋土下部	14		2.8	1/2以上	内面: 木目状ナデ (少) 底面: スノコ状底窓	C4
23	1号埋土下部	14.6		2.5	1/2以上		C4
24	1号埋土下部	(15.8)		2.5	1/2以下	口縁: ナデ浅明瞭 底面: スノコ状底窓	C4
25	1号埋土下部	(16)		2.3	1/2以下		D4
26	1号埋土	(17)		(3.1)	破片	房明瞭 他成: 良好	C4
27	1号埋土上部	(17.6)		2.7	1/2以下	底面: スノコ状底窓 (浅)	C4
28	1号埋土下部	13.7		3.1	完形	内面: 木目状ナデ 全体にイビツ	C4
29	1号埋土下部	(13.6)		3.3	1/2以下	底面: スノコ状底窓 (浅) 全体にイビツ	C4
30	1号埋土	(14.4)		3.3	1/2以下		D4
31	1号埋土下部	13.5		3.5	1/2	底面: スノコ状底窓 (浅)	D3
32	1号埋土下部	12.7		2.5	1/2以上	口縁: 面凹凸 底面: スノコ状底窓 (大きく歪む)	D4
33	1号埋土下部	(13.4)		2.4	1/2以下	底面: スノコ状底窓 (浅)	D2
34	1号埋土下部	(13.7)		1.7	1/2以下	底面: スノコ状底窓 (浅) 全体にイビツ	D2
35	1号埋土	(14.4)		2.7	1/2以下	器面摩耗	C3
36	1号埋土下部	(14.4)		2.6	1/2以下		C4
37	1号埋土	14.2		2.3	1/2以下		C4
38	1号埋土	(13)		2.4	1/2以下	器面摩耗	D3
39	1号埋土下部	(12.2)		2.2	1/2以下	底面: スノコ状底窓 (浅)	D2
40	1号埋土下部	8.2		1.2	ほぼ完形		D3
41	1号埋土下部	9.5		1.7	1/2以上		D3
42	1号埋土下部	8.9		1.8	1/2以上	全体にノビツ	D3
43	1号埋土下部	9.2		2.1	完形	全体にノビツ	D4
44	1号埋土下部	9.2		1.9	1/2	底面: スノコ状底窓 全体にノビツ	D3
45	1号埋土下部	8.7		1.7	完形	口縁: くぼみ 全体にノビツ	C3
46	1号埋土下部	8.8		1.7	完形		D3
47	1号埋土下部	8.6		1.5	1/2以上	全体にノビツ	D3
48	1号埋土下部	(9.2)		1.8	1/2以下	底面: 凹凸	D4
49	1号埋土下部	(9.8)		1.8	1/2以下	底面: スノコ状底窓 (浅) アバタ状	D2
50	1号埋土上部	9.4		1.8	1/2以上	剥離部: 残はね状 器面摩耗	D3
51	1号埋土下部	(10.4)		1.7	1/2以下	口縁部: くぼみ (きさみ)	D2
52	1号埋土下部	13.5		1.5	1/2以下	器面摩耗	D3
95	2号埋土	15.4		2.6	ほぼ完形	底面: スノコ状底窓 (浅) 器面摩耗	C3
96	2号埋土	15.6		3.3	完形	底面: スノコ状底窓	C3
97	2号埋土下部	(14.8)		3	破片		D3
98	2号埋土	(16.8)		3	1/2以下		C4
99	2号埋土	(16)		1.6	1/2	全体にノビツ 器面摩耗	C4

図面No.	出土地点／層位	口径	底径	器高	現存状態	備考	分類
100	2号溝埋土	(13.6)		2.7	1/2以下	底面：凹凸 器面摩耗	D4
101	2号溝埋土	13.8		2	1/2以下		C4
102	2号溝埋土	(14.0)		2.2	1/2以下	器面摩耗	C4
103	2号溝埋土	(13.4)		3.2	1/2	底面：スノコ状圧痕（浅）	D3
104	2号溝埋土	(14.0)		2.2	破片	器面摩耗	D3
105	2号溝埋土	(13.0)		1.7	1/2以下	底面：凹凸 器面摩耗	D4
106	2号溝埋土	(16.2)		4.1	1/2以下	内面：木目状ナデ 全体にイビツ	C3
107	2号溝埋土	(11.4)			破片	厚手	D4
108	2号溝埋土	8.5		1.7	完形	底面：爪痕	D3
109	2号溝埋土	8.8		1.6	完形	器面摩耗	C3
110	2号溝埋土	(9)		2	1/2以下	器面摩耗	C4
111	2号溝埋土	(8.6)		1.4	1/2以下		D3
112	2号溝埋土	(8.7)		1.4	1/2以下	器面摩耗	D3
113	2号溝埋土	(8.6)		1.9	1/2以下	器面摩耗	D2
114	2号溝埋土	(10.2)		1.7	1/2以下	器面摩耗	D3
115	2号溝埋土	9.5		1.7	1/2以上	底面：凹凸 器面摩耗	D3
116	2号溝埋土	8.4		1.9	1/2以下	底面：凹凸	D3
117	2号溝埋土	(8)		1.5	1/2以下	底面：凹凸	D3
118	2号溝埋土	9.2		2.3	完形	厚手 刃削：波形痕（沈縫状）底面：くぼみ	D3
119	2号溝埋土	14.1	7.6	3.4	1/2以上	胎土：海綿骨針	Rd02-0
120	2号溝埋土		6.4		1/2以上	内面：スノコ状 地上：海綿骨針 器面摩耗	
121	2号溝埋土		6.4		破片	ロクロ使用 胎土：脆弱	
122	2号溝埋土	(10)	(8.8)	1.8	1/2以下	器面摩耗	rd11-1
123	2号溝埋土	(9.1)	6.4	1.8	1/2以上	器面摩耗	rd10-1
124	2号溝埋土	(5.2)	8	2	1/2以下	器面摩耗	rd 10-1
125	2号溝埋土		4.5		破片	高台付き 手づくね	
126	2号溝埋土				破片	文字捺印「丸」？	
140	F5区段穴		(6.2)		破片	ロクロ使用 器面摩耗	
144	K4号14堆土上部	13		1.8	1/2以上	器面摩耗	
145	K4号17堆土上部	9		1.8	1/2以上	全体にイビツ	
149	1号井戸埋土	(14.2)		3	1/2	II種：内側スス付着 底面：スノコ状圧痕	C4
150	1号井戸埋土	(5.8)		2	1/2以下	器面剥落	D3
161	1号井戸埋土	(6.6)		1.6	1/2以上	器面摩耗	D3
153	2号井戸埋土	(10)		1.9	小破片	燒成良好	C3
154	2号井戸埋土	(10)		2	小破片	外側スス付着	C4
155	2号井戸埋土		10		小破片	ロクロ使用 二次加熱？ 胎土：海綿骨針	
158	3号井戸埋土上部	(16.6)		3	小破片	底面：スノコ状痕 内面：スス付着	D4
159	3号井戸埋土	(12.2)		2.3	1/2以下	内面：木目状ナデ 底面：スノコ状圧痕 内外面スス付着	D3
160	3号井戸埋土	(12.1)		2.2	小破片	底面：スノコ状圧痕 燒成良好	D3
161	3号井戸埋土				小破片	墨書きわらじけ 为外面に墨書 内面「う」？	
162	3号井戸埋土		(6.6)		小破片	ロクロ使用 底面：スノコ状圧痕？	
163	3号井戸埋土		(5.6)		小破片	ロクロ使用	
173	4号井戸埋土上部	(16.5)		3	小破片	底部内面：丸？状圧痕？	C4
174	4号井戸埋土上部	(15.2)		2.7	1/2以下	底面：スノコ状圧痕 痕痕？ 内面：スス付着	D4
175	4号井戸埋土上部	(14.2)		3	小破片	底面：スノコ状痕 内外面：ナデ感明瞭	D4
176	4号井戸埋土上部	8.8		2	1/2	II種：イビツ 容器：スノコ状底盤（浅）	D3
177	4号井戸埋土上部	9		1.8	1/2	底面：スノコ状圧痕 全体にイビツ	C3
178	4号井戸埋土上部	(13.9)	7.8	3.8	1/2以上	底面：スノコ状圧痕 胎土：海綿骨針	Rd03-0
179	4号井戸埋土上部	(14.3)	7.2	4.1	1/2	底面：スノコ状圧痕 胎土：海綿骨針	Rd 02-0
180	4号井戸埋土上部		7.1			底面：スノコ状圧痕（棒状？）内外面：スス付着 胎土：海綿骨針	Rd02-0
181	4号井戸埋土上部	(12.8)	(7.3)	3.8	小破片	胎土：海綿骨針	Rd 04-0
182	4号井戸埋土上部	(14.4)	(8.4)	3	1/2以下	胎土：海綿骨針（少）	Rd11-1
183	4号井戸埋土上部	(9.1)	5.4	1.9	1/2以下	胎土：少・海綿骨針 燒成良好	rd11-1
184	4号井戸埋土上部	(9.4)	(6.6)	2	1/2	胎土：少・海綿骨針 全体にイビツ	rd11-1
185	4号井戸埋土上部	(8.9)	(5.5)	1.8	1/2以下	胎土：少・海綿骨針	rd10-1
203	11号坑埋土	(15.6)		3.4	1/2以下	内面：出色 底面：スノコ状圧痕（浅）	D3
204	11号坑埋土	(15.5)		2.2	1/2以下	内面：木目状ナデ 底面：スノコ状圧痕	C4
205	11号坑埋土	(12.6)		1.8	1/2以下	底面：スノコ状圧痕（浅） 二次加熱？ II種：スス付着	C3
206	11号坑埋土						D4

図面	出土地点／層位	口径	底径	高さ	残存状態	備考	分類
207	11号上坑埋土	(10)	(6)	2.9	1/2以下	手づくね面	
208	11号上坑埋土	(15.2)	8.6	3.9	1/2以下 焼成良好	二次加熱？	Rd02-0
209	11号上坑埋土	7			1/2以下	底面：スノコ状圧痕 脱土：砂	Rd0-0
210	11号上坑埋土	8.9	6.1	2.2	ほぼ完形	胎土：海綿骨針	rdt2-1
211	11号上坑埋土	9	5.4	2.3	ほぼ完形	底面：スノコ状圧痕 脱土：海綿骨針	rdt1-1
212	11号上坑埋土	(9.4)	(6.4)	2	1/2以下	内面：スヌ付着 脱土：海綿骨針	rdt1-1
258	3号上坑埋土下部			(8.8)		上部器表 全体に摩耗	
259	5号上坑埋土	(8.4)		1.7	小破片		D3
263	3号溝埋土	(15.6)		3	1/2以下	底面：凹凸 内外面スス付着	D3
264	3号溝埋土	(12.6)		2.5	1/2以下	底面：スノコ状圧痕 内外面スス付着	D4
265	3号溝埋土	(14.4)		3	1/2以下	口縁：一部イビツ（片口状？）底面：スノコ状圧痕（浅）	C3
266	3号溝埋土	(12.6)		2.4	小破片		C4
267	3号溝埋土	(13)		(2.8)	小破片	内面：木目状ナデ	D3
268	3号溝埋土	(12.3)		2.3	小破片	外側：段明瞭	C4
269	3号溝埋土	(12)		2.1	小破片	外側：ナデ痕明瞭	D4
270	3号溝埋土	(14.2)		3	小破片	内面：木目状ナデ 内外面スス付着	D4
271	3号溝埋土	(9.2)		1.4	小破片	内外面スス？付着	D3
272	3号溝埋土	(8)		1.9	小破片	底面：凹凸	C3
273	3号溝埋土	(8.8)		1.4	1/2以下	内外面スス？付着	D2
274	3号溝埋土			6.4	破片	底面：スノコ状圧痕 内外面スス付着	Rd
275	3号溝埋土			(7.4)	小破片		Rd
276	3号溝埋土	(8.8)	6.2	1.7	1/2		rdt1-1
277	3号溝埋土	(8.5)	6	1.7	1/2以下	器面摩耗	rdt1-1
294	4号溝埋土			(8.5)	小破片	ロクロ使用 脱土：海綿骨針	
295	5号溝埋土上部			(6.5)	1/2以上	胎土：海綿骨針 二次加熱 脱面剥落	Rd03-0
296	5号溝埋土上				小破片	調文十器 基文のみL.R. 器面摩耗	
297	6号溝埋土				小破片	調文上器 基文のみL.R.? 器面摩耗	
298	9号溝埋土	(14)		2.4	小破片	器面摩耗	D4
299	9号溝埋土	(9)	(7.4)	2.1	1/2以下	胎土：海綿骨針 焼成良好	rdt1-1
300	9号溝埋土	(9.4)	(5.4)	2.1	小破片	口唇・口縁：スヌ付着	rdt1-1
301	9号溝埋土	(9)	(6.8)	2.1	1/2以下	胎土：海綿骨針 脱面摩耗	rdt1-1
302	9号溝埋土			5.6	小破片	ロクロ使用 脱土：海綿骨針 器面摩耗	
303	9号溝埋土			6.5	小破片	ロクロ使用 焼成良好	
314	C5直層	(14.8)		3.6	1/2以下	底面：スノコ状圧痕 内外面スス付着 焼成良好	C3
315	D-E4直層	(13.2)		2.6	1/2以下	内外面：スス付着（内曲多量）	D4
316	B5直層	(9.6)		1.4	1/2	底面：スノコ状圧痕（浅）	D3
317	B-C3直層	(8.6)		1.8	1/2以下	外側：スヌ付着（少）	D3
318	A3-E4直層			5.8	1/2以下	ロクロ使用 底面：スノコ状圧痕 脱土：海綿骨針 器面摩耗	
319	B5直層				破片	底部穿孔？ 空洞摩耗	
320	D-E4直層				小破片	外側：割隙？	
321	D20層				小破片	外側：刻繙？	
322	H5直層	(16.0)		3.1	1/2以下	内面：スヌ付着（少）	C4
323	H5直層	(14.8)		3.6	1/2	底面：スノコ状圧痕（浅）	C4
324	H5直層	13.6		2.8	1/2	底面：スノコ状圧痕 内外面：スス付着 全体にイビツ	D4
325	H5直層	(15.4)		2.7	1/2以下	外側：ナデ明瞭 底面：スノコ状圧痕（浅）	C4
326	H5直層	(14.8)		3	1/2以下		C4
327	I1.5直層	(12.2)		2.2	1/2以下	底面：スノコ状圧痕 内外面：スス付着（剥れ口にも付着）	D3
328	H5直層	8.4		1.7	1/2以上	底面：凹凸	D3
329	H5直層	9.6		2.4	完形	外縁：ナデ不明瞭 底面：植物纖維の糞便 个体にイビツ	D3
330	H5直層	(9.6)		1.8	1/2以下	底面：スノコ状圧痕（明瞭）	D3
331	H5直層	9		2	ほぼ完形	底面：スノコ状圧痕（浅） 焼成良好	D4
332	H5直層	8.4		1.7	1/2以下	器面摩耗	D3
333	H5直層	9		1.8	1/2		D4
334	H5直層	8.2		1.8	1/2以上	底部：穿孔（径8mm） 内外面：スス付着（多）	D3
335	I5直層	16		3.4	1/2	底面：スノコ状圧痕 凹凸（少）	D3
336	I5直層	14.9		3.2	完形	内外面：スス付着	D4
337	I5直層	(13.3)		3	1/2以下		D3
338	I5直層	(13.4)		2.4	1/2以下	底面：スノコ状圧痕 焼成良好	D3
339	I5直層	14		2.4	1/2以下	内面：木質灰ナデ 底面：スノコ状圧痕	D3

図No.	出土地点/層位	口径	底径	高さ	残存状態	備考	分類
340	I 5 重層	(13)		3.1	1/2	内面：木目状ナメ（広）内外面：スス付着（測定面にも付着）	C3
341	I 5 重層	8.3		1.5	錆斑光形	底面：焼紋	D3
342	I 5 重層	(8.9)		1.7	1/2以上		D3
343	I 5 重層	(14.3)	6.8	3.4	1/2以上	内面：スス付着 効土：海綿骨針	Rd03-0
344	I 5 重層	(13.4)	(6)	2.9	1/2以上	内外面：スス付着 二次加熱（一部溶け）	Rd14-1
345	I 5 重層		(7.6)		破片	内外面：スス付着	Rd
346	J 5 重層	(14)		2.7	1/2以下	底面：スコク状圧痕（浅）	C4
347	J 5 重層	12.4		3.1	1/2以上	底面：凹凸 全体にイビツ	D3
348	J 5 重層	(10)		1.6	1/2以上	外側：スス付着	D3
349	J 5 重層	10.3		1.8	完形		D3
350	J 5 重層	9.8		1.9	錆斑光形	外側：スス付着（少）	D3
351	J 5 重層	9		1.9	完形	底面：凹凸（少）	C4
352	J 5 重層	8.7	5.6	2	1/2以上	底土：海綿骨針	Rd11-1
353	J 5 重層下部		4.8		1/2以上	ロクロ使用 効土：海綿骨針	
354	J 5 重層	(8.2)	(6.2)	1.9	1/2以上	底面：着手	Rd11-1
355	J 5 重層	(9.2)	(4.4)	2.4	1/2以下	底面：手印。（深8mm）効土：海綿骨針	Rd12-1
356	J 5 重層		(6.8)		破片	内外面：スス付着 二次加熱？	Rd
357	J 5 重層下部		6.2		破片	上部溶杯？	Rd?

陶磁器觀察表

( )は推定値

図No.	出土地点/層位	口径	底径	高さ	残存状態	備考	
53	1号 sond. +	(18.6)			1/2以下	錆斑跡 内面：白色の斑状自然釉	
54	1号 sond. +				小破片	錆斑迹 外面：平行押印 内面：自然釉	
55	1号 sond. + 上部				小破片	錆斑迹？	
56	1号 sond. + 上部	(14)			破片	錆斑迹？	
57	1号 sond. + 上部				小破片	常滑焼 外面：平行押印	
58	1号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印（深）	
59	1号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印（浅）	
60	1号 sond. + 上部				小破片	常滑跡	
61	1号 sond. + 下部				小破片	常滑片口跡 内面：自然釉	
62	1号 sond. +				小破片	常滑焼 外面：自然釉	
63	1号 sond. +				小破片	常滑焼 外面：自然釉	
64	1号 sond. +	(15.2)			小破片	常滑焼	
65	1号 sond. + 下部				小破片	須恵器系飾器 内外面：タタキ目	
66	1号 sond. + 下部				小破片	須恵器系飾器 内外面：タタキ目	
67	1号 sond. + 上部				小破片	須恵器系飾器 内外面：タタキ目	
68	1号 sond. +			1/2以上	青白釉合子蓋		
127	2号 sond. +	(8.4)		1/2以下	錆斑迹？		
128	2号 sond. +	(7)			1/2以上	錆斑跡？ 内面：白色の斑状自然釉	
129	2号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印	
130	2号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印	
131	2号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印	
132	2号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：自然釉 内面：擦？	
133	2号 sond. + 下部				小破片	常滑片口跡	
134	2号 sond. +				小破片	青白釉焼？	
141	E 5 区柱穴周土	(34.6)			破片	常滑焼？ 全体に鉄難？ 滴墨色	
148	MNa10-K5Nb12		5.3		1/2以下	青磁焼 肉厚り灰文様	
152	1号井戸周土	(25.2)			1/2以上	常滑焼 口縁：鉄難跡破損	
156	2号井戸周土				小破片	常滑跡？（小壺？）臉上：鐵窓	
164	3号井戸周土				小破片	粗糲焼？ 外面：平行押印	
165	3号井戸周土				小破片	常滑焼？ 外面：自然釉	
166	3号井戸周土				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印	
167	3号井戸周土				小破片	白磁焼	
186	4号井戸周土上部	(16.8)			破片	粗糲焼？ 青色の自然釉	
213	11号井戸周土	(16.6)	(8)	5.7	1/2以下	粗糲山葉形？ 内面：自然釉（少）・一帯滑らか	
214	11号井戸周土				小破片	粗糲焼？ 外面：平行押印	
278	3号 sond. +				小破片	錆斑焼？ 外面：格子状押印	
279	3号 sond. +				小破片	常滑焼？ 外面：平行押印（縦）	

図No.	出土地点／層位	L1種	底絵	高さ	残存状態	備考
280	3号埋理土			小破片	製美甕？ 外面：平行押印	
281	3号埋理土			小破片	須恵器系陶器甕？ 内外面：平行タタキ目	
358	E 3Ⅲ層	(16.4)		破片	製美甕？ 手型	
359	G + H 5Ⅲ層	(9.4)		破片	須恵器系鉢？ 内面に墨？	
360	G + H 5Ⅲ層	8.8		破片	製美甕？ 精美な底付	
361	H 5Ⅲ層	(12)	6.1	(6.7)	1/2以下 合成復元 製美？ 鉢？ 織投系陶器？	
362	H + I 5Ⅲ層			小破片	常滑甕？ 菱形押印	
363	I 5Ⅲ層	(16.2)		破片	常滑？ 鈴 内底：透らか	
364	I 5Ⅲ層			小破片	製美甕？ 外面：平行押印	
365	I 5Ⅲ層			小破片	常滑甕？	
366	I 5Ⅲ層			小破片	製美甕？ 外面：平行押印	
367	I 5Ⅲ層			小破片	常滑甕？ 外面：白胎 黏土：鐵鑄	
368	J 5Ⅲ層下部			小破片	須恵器系陶器甕？ 内外面：平行タタキ目	
369	J 5Ⅲ層下部			小破片	製美甕？ 外面：自然胎	
370	K 4Ⅲ層下部			小破片	常滑甕？ 外面：自然胎	
371	C 5Ⅲ層			小破片	青白紺？ 藤原式	
372	H 5Ⅲ層			小破片	白紺	
373	I 5Ⅲ層			小破片	白紺小物 合子？	
374	I 5Ⅲ層			小破片	白紺鉢？	

### 土製品觀察表

( ) は推定値

図No.	出土地点／層位	種別	残存状態	備考
69	1号溝埋土上部	甕？	小破片	管の葉状の外模
146	K 5Ⅲ層16壁土	坩埚	小破片	口径：(9.3cm) 内底：斜底 (少) 黏土：鐵鑄 (初期)
147	K 5Ⅲ層16壁土	瓦	小破片	外面：圓凸 内面：布目
187	4号井戸埋土	坩埚	1/2以下	口径：(1.4cm) 器高：(4.7cm) 内面：溶解 黏土：鐵鑄 (初期)
188	4号井戸埋土上	坩埚	1/2以下	口径：(1.3cm) 器高：(4.7cm) 内面：溶解 (灰色) 翼附上端：円形の痕跡 新上：鐵鑄 (初期)
189	4号井戸埋土上部	鋤堅？	1/2以下	口径：(1.0cm) 器高：(5.4cm) 斜底？ (9.1cm) 内面：溶解 (少) 黏土：鐵鑄 (初期)
213	11号土坑埋土	坩埚	1/2以下	口径：(1.2cm) 器高：(4.9cm) 口径：片口状？ 内面：溶解 黏土：鐵鑄 (初期)
216	11号土坑埋土	壇壠	1/2以下	口径：(1.1cm) 器高：(4.6cm) 内面：溶解 黏土：鐵鑄 (初期)
304	9号溝埋土	坩埚	1/2以下	口径：(1.0cm) 器高：(4.9cm) 内面：溶解 外面：沈縫 黏土：鐵鑄 (深)
305	9号溝埋土	坩埚	1/2以下	口径：(1.0cm) 器高：(4.1cm) 内面：斜底 (少) 白褐色 黏土：鐵鑄 ?
306	9号溝埋土	坩埚	小破片	口径：(5.4cm) 器高：(3.5cm) 内面：溶変 (少) 黏土：鐵鑄 ?
307	9号溝埋土	瓦		外縁：圓凸 内面：布目
308	9号溝埋土	鉢型？	小破片	内面：削落 黏土：鐵鑄 (初期)
310	1号埋納遺構下段	坩埚	完形	口径：11.6cm - 12.3cm 器高：5.5cm 容積：約1000cc 片口状？ 内面：溶解 溶解部に金鉄施底面：桔子状溶解 黏土：鐵鑄 (初期) ?
311	1号埋納遺構上段	坩埚	完形	口径：14cm - 15.5cm 器高：6.8cm 容積：約1800cc 片口状？ 内面：溶解 黏土：鐵鑄 (初期) ?
312	2号埋納遺構	坩埚	1/2以下	口径：9.8cm 器高：4.3cm 1錠部：内外輪溶解 内面：金付着 前上：鐵鑄 (初期)
375	H 5Ⅲ層	坩埚	1/2以下	口径：(1.0cm) 器高：(4.1cm) 内面：溶解 (少) 金付着 黏土：鐵鑄 (初期)
376	I 5Ⅲ層下部	坩埚	1/2以下	口径：(1.25cm) 内面：溶解 (赤褐色) 黏土：鐵鑄 (初期)
377	I 5Ⅲ層	坩埚	1/2以下	口径：(1.6cm) 内面：溶解 (赤褐色) 黏土：鐵鑄 (初期)
378	I 5Ⅲ層	坩埚	1/2以下	口径：(1.6cm) 器高：5.3cm 内外面：溶解 溶変なし (未使用?) 底面：沈縫式？ 前上：鐵鑄 (初期)
379	I 5Ⅲ層上部	坩埚	小破片	口径：(1.4cm) 内面：溶解 (赤褐色) 黏土：鐵鑄 (初期)
380	I 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(9.8cm) 内外面：溶解 内面：金鉄 金付着 黏土：鐵鑄 (初期)
381	I 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(9.8cm) 内面：溶解 (少) 黏土：鐵鑄 (初期)
382	I 5Ⅲ層	坩埚	1/2以下	口径：(10.6cm) 口輪沿為外彌：溶解 黏土：鐵鑄 (初期)
383	I 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(9.2cm) 口輪沿：六口状 内外面：溶解 (少) 黏土：鐵鑄 (初期)
384	I 5Ⅲ層	坩埚	小破片	内面：溶変 (少) 金付着 黏土：鐵鑄 (初期)
385	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(1.4cm) 口錐部：片口状 内面：溶解 (赤褐色) 黏土：鐵鑄 (少) 鉄酸
386	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(15.2cm) 器高：(5cm) 1錠部：片口状 前上：鐵鑄 (初期)
387	J 5Ⅲ層	坩埚	1/2以下	口径：(14.6cm) 内面：溶解 (少) 白褐色 黏土：鐵鑄 (少) 鉄酸
388	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(12.7cm) 口錐部：片口状 内面：溶解 (少) 白褐色 黏土：鐵鑄 (初期)
389	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(12cm) 内外面：溶解 (赤褐色) 前上：鐵鑄 (初期)
390	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(11.6cm) 器高：(4.6cm) 内外面：溶解 (少) 黏土：鐵鑄 (初期)
391	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(11cm) 口錐部：内外輪溶解 (少) 内面：金付着 黏土：鐵鑄 (初期)
392	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(10cm) 1錠部：内外輪溶解 (少) 内面：金付着 黏土：鐵鑄 (初期)
393	J 5Ⅲ層	坩埚	小破片	口径：(8.2cm) 口錐部：内外輪溶解 (少) 内面：金付着 黏土：鐵鑄 (初期)

図No.	出土地点/層位	種別	残存状態	備考
394	J 5 Ⅲ層	切端	小破片	内面：漆皮・金付着 背土：織物（絹織）
395	I 5 Ⅲ層	羽口	小破片	孔径：3cm 土 全体に溶解 分離
396	I 5 Ⅲ層	羽口	1/2以下	孔径：3.5cm 土 全体に溶解（少）
397	J 5 Ⅲ層	羽口	小破片	孔径：3cm 土 背土：織物（絹織？）
398	K 5 Ⅲ層	範型？	小破片	瓢？ 表面：葉菜状痕跡 内面：剥落
399	K 5 Ⅲ層	範型？	小破片	瓢？ 表面：葉菜状痕跡 内面：剥落 No.395と同一個体？

木器・木製品観察表

図No.	出土地点/層位	種別	樹種	備考
71	1号溝埋土下部	木簡	スギ	片面に片仮名文 両端に削ぎ面 下端に径2mmの小孔
72	1号溝埋土下部	木簡	スギ	片面に漢字文 両端角を加工 折敷等の底板利用
73	1号溝埋土	形代	スギ	No.74と重なって出土
74	1号溝埋土	形代	スギ	No.73と重なって出土
75	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
76	1号溝埋土下部	有孔円盤	スギ	瓢の底板？ 中央に径2cmの円孔 タール状の付着物
77	1号溝埋土下部	漆器物	ケヤキ	武部のみ残存
78	1号溝埋土下部	底板？	スギ	瓢等の底板？
79	1号溝埋土下部	底板？	スギ	
80	1号溝埋土下部	底板？	スギ	
81	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材（曲げ物？）
82	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材？
83	1号溝埋土下部	卜数の衝	ケヤキ	
84	1号溝埋土下部	形代？	スギ	
85	1号溝埋土下部	箸？	アヌラロ類似種	
86	1号溝埋土下部	形代？	スギ	
87	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
88	1号溝埋土下部	木札？	スギ	
89	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
90	1号溝埋土下部	木札？	スギ	
91	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
92	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
93	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
94	1号溝埋土下部	不明	スギ	木製品部材
137	B 5 区PP1	縦板？	クリ	
138	B 5 区PP2	縦板？	クリ	
139	B 5 区PP1	縦板？	クリ	
142	F 5 区K74	柱材	クリ	
143	F 5 区K664	柱材	クリ	
157	2号井戸埋土	底板？	スギ	
168	3号井戸埋土	箸？	アヌラロ	
169	3号井戸埋土	箸？	アヌラロ類似種	
170	3号井戸埋土	箸？	マツガラ複数管束葉瓢	
190	4号井戸埋土上部	人形	アヌラロ類似種	頭部削取り 口端は尖る（差し込み式？）左耳欠損。
191	4号井戸埋土上部	串	アヌラロ類似種	
192	4号井戸埋土	底板？	スギ	曲げ物？
193	4号井戸埋土	不明	スギ	木製品部材
194	4号井戸埋土	木札？	スギ	
195	4号井戸埋土	凹凸物	スギ	
196	4号井戸埋土	丸膠	広葉樹	（微孔材？）
197	4号井戸埋土下部	底板	スギ	
198	4号井戸埋土下部	底板	スギ	
199	4号井戸埋土	底板	スギ	
200	4号井戸埋土	不明	スギ	
201	4号井戸埋土	不明	アヌラロ	
202	4号井戸埋土	不明	アヌラロ	
217	11号土坑埋土上部	漆器物	ケヤキ	
218	11号土坑埋土上部	漆器物	ケヤキ	
219	11号土坑埋土上部	漆器物	ケヤキ	

図面No.	出土地点/層位	種別	樹種	備考
220	11号土坑埋土	著		劣等品
221	11号土坑埋土	著	アスナロ	
222	11号土坑埋土	著	アスナロ	
223	11号土坑埋土	著		完形品
224	11号土坑埋土	著	アスナロ	
225	11号土坑埋土	著	スギ	
226	11号土坑埋土	著	アスナロ	
227	11号土坑埋土	著	スギ	
228	11号土坑埋土	著	アスナロ	
229	11号土坑埋土	著	スギ	
230	11号土坑埋土	著	アスナロ	
231	11号土坑埋土	著	スギ	
232	11号土坑埋土	著	スギ	
233	11号土坑埋土	著	アスナロ	
234	11号土坑埋土	著	ヒノキ属	
235	11号土坑埋土	著?	モクレン属	
236	11号土坑埋土	著?	モクレン属	
237	11号土坑埋土	串	アスナロ	
238	11号土坑埋土	串?	スギ	
239	11号土坑埋土	串?	スギ	
240	11号土坑埋土	串?	スギ	
241	11号土坑埋土	串?	アスナロ	
242	11号土坑埋土	串?	スギ	
243	11号土坑埋土	小桐	スギ	木製品部材
244	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
245	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
246	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
247	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
248	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
249	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
250	11号土坑埋土	不明	アスナロ	木製品部材
251	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
252	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
253	11号土坑埋土	不明	ココラ属コナラ亜属コナラ節	木製品部材
254	11号土坑埋土	不明	スギ	木製品部材
255	11号土坑埋土	不明	アスナロ	作業台?
260	5号土坑埋土	杭		
261	5号土坑埋土	杭	ケンボナシ	
262	5号土坑埋土	不明	アスナロ	木製品部材
282	3号溝埋土	不明	マツ属被管束系木材	木製品部材
283	3号溝埋土	柄	スギ	
284	3号溝埋土	柄	カツラ	
285	3号溝埋土	火切り枠	スギ	
286	3号溝埋土	丸札?	スギ	雨代?
287	3号溝埋土	底板?	スギ	
288	3号溝埋土	不明	アスナロ	木製品部材
289	3号溝埋土	不明	アスナロ	木製品部材
290	3号溝埋土	木札?	スギ	
291	3号溝埋土	机?	イスガヤ	弘い枝?
292	3号溝埋土	机?	エゾノキ属	弘い枝?
313	2号溝納遺物	漆器物	ケヤキ	
400	11号土坑埋土	木輪?	アスナロ類似種	古間に乾固? 乾固不明
401	11号土坑埋土	不明	スギ	
402	H5区直轄	連曲下駄	スギ	
403	J5区直轄	連曲下駄	モクレン属	
404	J5区直轄	連曲下駄	スギ	
405	I5区直轄	管絃袋	スギ	
406	J5区直轄	柄	アスナロ	
407	I5区直轄	著		

図No	出土地点／層位	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
408	J 5 区Ⅱ層	不明	スギ				木製三脚材	
409	J 5 区Ⅱ層	不明	スギ					
410	J 5 区Ⅱ層	不明	スギ				木製台枠材	
411	J 5 区Ⅱ層	不明	スギ				木製台枠材	
412	J 5 区Ⅱ層	底板	スギ					

石器・石製品觀察表

( ) は推定値

図No	出土地点／層位	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	产地	備考
135	2号溝堆下下部	砾石	(4.8)	(4.3)	(1.1)	18.25	頁岩	奥羽山脈	破損品
136	2号溝堆下下部	砾石?	3.4	1.6	7.5	8.47	頁岩	奥羽山脈	使用痕は1面 ターベ状付着物
172	3号井戸埋土	硯?	(4.7)	(3.3)	(1.0)	.94	粘土岩	北上山地	破損品 小破片
256	11号土坑埋土	砾石?	7.5	5.9	1.1	84.63	凝灰岩	奥羽山脈	片面使用?
293	3号溝堆土	砾石?	(14)	(12.4)	(10.5)	157.0	滑面凝灰岩	奥羽山脈	1面半粗面
309	9号溝堆土	砾石	8.2	5.9	5.2	335	花崗閃长岩	奥羽山脈?	両面使用? 全体滑らか
419	J 5 区Ⅱ層	仏具飾り?	(7.3)	(8.7)	(3.2)	170.84	凝灰岩	奥羽山脈	表面浮形 表面・側面は漆塗り
420	D 4 区Ⅱ層下部	砾石	6.6	5.8	1.4	102.16	砂岩	奥羽山脈	4面使用
421	J 5 区Ⅱ層	砾石	3.5	3.4	1.5	11.28	リパライト	奥羽山脈	小型 両面(多)使用
422	J 5 区Ⅱ層	砾石	2.9	2.5	1.1	9.44	凝灰岩	奥羽山脈	小型 3面使用
423	H 5 区Ⅱ層	砾石	(4.5)	(3.1)	(1.7)	22.74	凝灰岩	奥羽山脈	3面使用 破損品
424	J 5 区Ⅱ層	砾石	(5.2)	(4.1)	(0.4)	29.63	リパライト	奥羽山脈	破損品
425	1号井戸上	石錐	2.4	1.6	0.4	1.98	頁岩	北上山地	無茎凹基盤 かえし欠損
426	F 5 区Ⅱ層	石錐	1.9	1.1	0.25	0.5	頁岩	北上山地	無茎凹基盤 かえし欠損
427	F 5 区柱穴堆土	石錐	(1.4)	(1.4)	0.4	0.77	赤色頁岩	北上山地	有茎錐 基盤・先端欠損
428	H 5 区Ⅱ層	不定形石器	7.2	5.6	1.3	58.26	頁岩	奥羽山脈	縫い凹刃 片面加工 破損品?
429	D 4 区Ⅱ層下部	石錐	4.5	2.9	0.8	11.15	メノウ	奥羽山脈	一部片削加工
430	B 5 区Ⅱ層	不定形石器	5.4	2.8	0.8	10.44	頁岩	北上山地	縫い凸刃+抉入 一端片削加工
431	H 5 区柱穴堆土	不定形石器	2.9	4.4	0.7	6.86	凝灰岩	奥羽山脈	縫い凹刃(部分的) 片面加工
432	1号井戸埋土	不定形石器	6.0	3.9	1.0	27.24	頁岩	北上山地	縫い凸刃 強両面からの加工

金属器觀察表

( ) は推定値

図No	出土地点／層位	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
70	1号溝埋土	環状鉄製品	2.5	2.7	0.4	1.5	用途不明 先端部に向かってぼぼまる
171	3号井戸埋土	銅版鏡	(4.1)	(2.1)	0.03	5.3	薄4・銅版 鏡面に金付着 断り剥まれる
257	11号土坑埋土	不明	1.2	0.8	0.4	1.5	全体鋸化
413	J 5 区Ⅱ層	銅版鏡	12.6	0.65	0.05	3.33	全体に渦曲 金付着
414	J 5 区Ⅱ層	銅版鏡	6.6	0.5	0.05	2.3	
415	J 5 区Ⅱ層	銅版鏡	6.25	0.55	0.05	2.31	
416	J 5 区Ⅱ層	棒状鉄製品	4.65	0.45	0.35	3.62	多片にバリ
417	H・J 5 区Ⅱ層	板状鉄製品	5.2	6.0	0.6	43.3	破損品?
418	L 4 区Ⅱ層	銅鏡					資源通報(吉澤永)被熱?

## 4.まとめ

### (1) 遺構

ここでは、今回の調査で検出された主だった遺構と遺物について、若干の予察を含めてまとめたい。

#### 堅穴住居跡

1棟のみ検出された。出土した十器の特徴と埋土中の十和田a降下火山灰の堆積状況から推定して、9世紀後半期～10世紀初頭期の遺構と考えられる。平泉町内での該期住居跡の検出例は以外に少なく、柳之御所跡、瀬原遺跡、三日町遺跡、東屋遺跡で各4～1棟が調査されているに過ぎず、大きな集落跡は確認されているない。また、中尊寺境内からは埋土中にT o-a火山灰の堆積する人溝が検出されている。律令体制の定着時、当地がどの様な役割をはたしていたかを検討するには、更なる資料の蓄積が必要と考えられる。なお、住居跡に付随して検出された「外延溝」は安代町上・山VII遺跡、玉山村芦名沢I遺跡、盛岡市台太郎遺跡等で検出例がある。上の山VII遺跡を除き、立地場所が沢筋に近いことから排水施設の可能性がある。

#### 道路跡と周辺遺構

第14調査で検出されて以来、第46・66・74・78・79次の調査で検出確認されている遺構で、今時調査は最北部となる。西側の側溝は浅くなるが、東側では充分な深さを持って調査区外に続いており、さらに北へ延びていることが確認された。今時の調査では、南側で側溝と整地層に改築痕跡が確認されている。また、3号溝及び橋脚状施設との重複関係からは、当時の市街地設計の一端を窺わせる資料が得られた。以下に若干の試案を述べる。

3号溝は西側に隣接する第77次調査でも確認されており、方向は今時調査の1号道路跡とほぼ直交している。断面図の観察では、溝自体改築が行われていたようで、埋没後は橋脚に切られている。3号溝は73次における67区1・2号溝及び1号堀跡、73区における1号溝及び1号堀跡とほぼ平行となっている。なお、堀跡は県道南側の第67・69次調査で検出されている建物跡を囲む堀跡につながることが予想されている。これらの事象から、3号溝が当道路に先立つ町割り区画溝、あるいは73次73区1号、67区1・2号溝と対をなす道路側溝であった可能性が考えられる（旧区画と仮称）。そして旧区画が少くとも1回の改築後に、1号道路跡によって寸断されたものと考えられ、1号道路跡設置後も西側では、建物群を囲む堀跡として旧区画が生かされたのではだろうか。

旧区画の広がりであるが、西側の67・73次調査区と56次調査区では、67区1・2号、73区1号は56次28区1号溝とほぼ方向が一致する。しかし、68区で検出された2条の溝は3号溝と若干角度を異にしており問題を残すが、あえて求めるとすると第2号溝の可能性があり、これは56次28区4号溝につながるものと考えられる。なお、東側では現道にかかるため不明確である。3号溝は75次調査で検出されている溝跡につながる可能性もあるが、南側で対応するものではなく、今後さらに検討を要する課題である。

1号道路跡に限って見れば、旧区画を寸断する形で構築された道路は幅約10mで、交差部分には小規模な橋が設置されたものと考えられる。75次・79次調査及び今時調査の結果、現道の下は旧河道となっていることが予想され、1号道路跡の南側も湿地状の地形を呈している可能性が高い。橋はこの湿地を渡るために施設と考えた。この後、整地による道路整備が行われたものと考えられる。整地層の分布から推定すると、この整地地業の際南半部の側溝が改築され、道路幅が8～9mになった可能性がある。道路の最終形に伴う周辺遺構の共存関係を判断するだけの資料は得られなかったが、板塀に区画された建物跡群がこの時期成立した可能性は高いと思われる。

これらの遺構群について、絶対年代を知る得る資料は見いだされなかつた。しかし、道路跡は他の遺構との重複において、重複する全ての遺構より新しいことが確認されている。また、東側側溝（1号溝）の埋没状況は、水性堆積の様相を示し、特に埋土中に一面に堆積する木の葉層の存在を考えると、この側溝は「都市平泉」が機能を停止した時期から管理保全行われなくなった可能性が高い。

なお、蛇足になるが、77次調査で出土した多量の笠塔婆は、旧区画を表す際の「祓い」等にかかる儀礼遺物の可能性があるものと思われる。

## （2）遺物

### かわらけ・陶磁器

出土遺物の中で最も量が多い遺物はかわらけで、これは平泉における12世紀代の遺跡の大きな特徴であり、今時の調査でもこの傾向は同じである。出土地点では、道路跡の東西側溝と東側の包含層からのものが全体の8割を占める。出土地点が限られるため調査区全体を考察する資料とはならないが、手づくねかわらけとロクロかわらけの割合はほぼ7：3となる。なお、包含層ではロクロかわらけの割合がいくぶん多い。また、ロクロかわらけは小型のものが卓越し、これらの出土状況は12世紀代でも後半の後葉期の様相と一致している。

陶磁器は出土量は少ない。これは遺跡の性格、特に市街地における「場所」の性格によるところが大きいと考えられる。国産陶器には、渥美、常滑、須恵器系の陶器があり、渥美産と常滑産がほぼ同量の割合を示す。なお、胎上等から猿投石と考えられるものが僅かにあるが、科学的分析は行っていない。

中国産磁器はさらに少なく、全体でも10破片、9個体分だけの出土である。面積あたりの出土頻度は76.6ml／1点で、この点では他の調査区を圧倒するが、微細な小破片が多い。なお、東端部の柱穴から出土した大型の青磁碗破片は、特異な出土状況を示し、今後事例の増加を待つて検討を要する課題と言えよう。

### 鉄製関係遺物

今時の調査において特筆される遺物の一つに、鉄製に関連した遺物群がある。種類は土製品、金属製品、鉛滓、小型砥石、木炭で、時期は異なるが奈良県飛鳥池遺跡の鉄造遺構からの出土遺物と同じである。土製品は坩埚（「とりべ」を含むものと考えられるが、判別はできなかった）と羽口で、出土量は前者が関連遺物中でも卓越している。出土地点は一部遺構内からのものがあるが、大半は調査区東側の遺物包含層からのもので、包含層が鉄造遺物の「捨て場」と考えて良いであろう。

なお、特殊な出土例として、大小2個の坩埚を正位に重ねて埋置してあった「埋納遺構」がある。また、柱穴状の小土坑に小型の坩埚破片が伴う「埋納遺構」もある。後の出土形態は、鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校内）に類似例がある。同遺跡では、鉄作業を行っていたと考えられる小規模な建物跡の柱穴内から、生粘土、鉛滓、炭、鋳型破片が詰め込まれた状態で出土している。調査担当者である河野真知朗氏は、「作業終了時に作業小屋を解体し、不要となった鋳型や材料を柱を小屋をバラした柱穴に捨てたものではないか」との解釈を行っており、作業を行った職人は注文により屋敷内に「出職」したのではないかと指摘している。当遺跡においてもこれと同様な形態が確認されたことになろう。なお、前者については、やはり作業の終了に際しての「儀礼」的な遺構と考えられる。

坩埚は大半が破片で、溶解による変形も多いことから形状を復元できるものは少ない。しかし、上記の埋納遺構から出土した完形品等を参考にすると、容量が180cc前後の大型（口径15cm±）、100cc前後（口径

12cm±）の中型、80cc前後（口径10cm以下）の小型に分類が可能である。この内大型と中型は、内部の溶変部の色調が光沢を持つ赤褐色と呈し、銅を溶かしたものと考えられる。また、小型のものは内面の溶変が少なく、色調も灰褐色を呈する。さらに内面には金及び銀？の小粒が付着しているものが存在する。これらのことから溶かす素材別に、大きさの違う坩埚を使い分けていることが推定される。なお、いずれの胎土にも耐火のため粉殻が多量に含まれている。

金属器は銅製品で、板屑状のものが多い。また、角にバリが付く角柱状のものもある。銅板には表面に金が塗布されたものが2点あり、金粒が付着する坩埚の存在からも、「金銅製品」を作っていたことが窺われる。なお、明確に鋳型と考えらるものはなく、製作品を特定するには至らなかったが、坩埚の容量や金が付着する銅板等の出土品から「从具」関係を製作していた可能性がある。

今回の調査では、炉跡等の遺構は検出されず工房跡は不明であるが、遺物の出土状況から包含層の北側にこれらの遺構が存在する可能性は高い。また、埋納遺構周辺の柱穴群は、鋳造に係わった職人が使用した建物であろう。

平泉町内の鋳造遺構としては、白山社遺跡から梵鐘の鋳造施設が検出されており、これと合わせて今回の調査で得られた資料は、「中世都市」内における鋳造事業の形態を解明する上で非常に多くの好材料を追加できたものと考えられる。

### 木簡

今回の調査で特筆される資料のもう一点は、仮名文が墨書きされた木簡である。道路跡東側側溝からの出土で、周辺部からは漢字が書かれた木簡も出土している。出土層位は埋土の下部で、底面より20cm前後である。下部の土層は幾分沙質のラミナ層で、溝が機能していた最終底面の可能性が高い。

墨書きはかなり鮮明で、ほとんどの文字が判読できる。仮文は「トヤカサキノニヨウホウキヤウノイシヲハケチエンニモタセタマウヘシ イツカノ ヒヨリシウハチニチニウツ（二・マ）シタマウナリ」である。0の部分はいくぶん不鮮明であるが、上下の短い横線2個で構成されており「二」または「マ」と読める。

内容であるが、文頭の「トヤカサキ」は地名と考えられる。平泉町内には、毛越寺の別院に金剛院鳥谷崎坊（鳥屋ヶ崎坊・鳥屋崎坊）があり、これを指す可能性が高いが、宮城県栗駒町鳥矢ヶ崎、岩手県花巻市鳥谷ヶ崎、前沢町塔ヶ崎等周辺部には同一或いは類似した地名も多い。なお、現在の金剛院は他の別院と共に毛越寺の西側にあるが、これらは元々市街地の南側に点在していたものが江戸時代に租税対策のために現在地に移転したもので、本来の所在地を特定するまでには至っていない。

「ニヨウホウキヤウ」については、川島茂裕氏より「ウの字が一字多いが、如法経ではないか」との御教示を受け、後に続く「ノイシ」を合わせて「如法経の石」と考えられる。二行目はそのまま「結縁に持たせ給うべし」で、「イツカノ」は「五日の」で、三行目の「日より十八日に」に続く。「ウツ（二・マ）シタマウヘシ」は「写にし給う」或いは「写つ増し給う」となり、文面から後者の方がより通りが良いように思われる。

今後も検討を重ねて行くが、報告書作成段階としては「鳥谷ヶ崎の如法経の石をば 結縁に持たせ給うべし 五日の日より十八日に写つ増し給うなり」との解釈を取る。

「如法経の石」であるが、『平家物語』巻第六「経の島」に「石の面に一切経を書ひて…」の記事及び尼崎市大物遺跡から出土している「纏石経」に当たるものと考えられる。如法経信仰は、9世紀に円仁による法華経写経にはじまり、平安時代末から鎌倉期に貴族社会に普及したもので、先の『平家物語』にも登場する。

また、該期は陶磁器を用いた経塚の普及期でもあり、岩手県各地には奥州藤原氏に関係したと考えられる経塚が多数確認されている。さらに、特殊な例として法華經を墨書きしたかわらけが前沢町寺ノ上経塚から出土しており、紙、石、かわらけを用いる形態が存在していたことが判明した。内容に関しては「だれが」「だれに」「だれのために」等の大きな問題が残るが、今後の追加資料に期待したい。

本箇の内容から12世紀後半期には、近畿地方で行われていた「礪石經」の風習が、当地でも行われていたことが確認された。「都市平泉」の宗教面での活動を考察する上で貴重である。

#### 〈参考・引用文献〉

- 松本達雄：1998「12世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」、『中近世土器の基礎研究』XIII、日本中世土器研究会  
八重樫忠郎：1996「輸入陶磁器から見た柳之御所」—内浦地区と外部地区—、『中近世土器の基礎研究』XI、日本中世土器研究会  
——：1997「輸入陶磁器から見た柳之御所—分布傾向からの考察—」、『東北の貿易陶磁』、日本貿易陶磁研究会  
——：1999「平泉のかわらけの問題点」、『第12回北陸中世考古学研究会資料』  
——：1998「平泉・白山社遺跡の梵鐘鉄造場」、『季刊考古学』第62号  
中野晴久：1995「常滑焼編年作業と今後の問題」、考古学ジャーナルNo.396  
前川佳代：2000「平泉の都市プラン」、『亨楽史苑』45号、奈良女子大学史学会  
五十嵐伸矢：1998「鉄造鍛錬からみた古代・中世の銅鑄物生産」、『季刊考古学』第62号  
斎木秀雄：1989「街のなかの鍛冶屋と鍛物陣」、『よみがえる中世3』  
河野真知朗：1989「武家によばれた鍛冶屋」、『よみがえる中世3』  
金子佐知子：2000「前沢町寺ノ上経塚出土のかわらけ經」、『岩手考古学』第12号、岩手考古学会  
飯村 均：1997「中世の製鉄・鉄造」、『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第8集  
林 文理：1988「中世如法經信仰の発展と構造」、『寺院叢書1、中世寺院の研究』、中世寺院研究会  
「奈良國立文化財研究所 年報 1999-II」、奈良國立文化財研究所、1999  
「飛鳥池遺跡—飛鳥藤原第98次調査 -現地説明会資料」、奈良國立文化財研究所、飛鳥藤原宮発掘調査部、1999  
『昭和校訂 平家物語』、武蔵野書院、1969  
『平泉町史』、史料編二、平泉町、1993  
『福原京とその時代』、『対外交流の門』博多・平安京・北の都奥州平泉』、神戸市教育委員会・神戸市埋蔵文化財センター、1996  
「志羅山遺跡第31・32・37次発掘調査報告書」、平泉町教育委員会、1995  
「志羅山遺跡第35次発掘調査報告書」、平泉町教育委員会、1995  
「志羅山遺跡第52次発掘調査報告書」、平泉町教育委員会、1997  
「柳之御所跡」、(財) 岩手見聞か振興事業団埋蔵文化財センター、1995  
「泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書」、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1997  
「志羅山遺跡第次発掘調査報告書」、(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、2000

## 5. 分析・鑑定

### (1) 志羅山遺跡第80次調査出土火山灰の分析鑑定

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

岩手県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、岩手火山、秋田駒ヶ岳火山、十和田火山など東北地方北部に分布する火山のほか、遠く北海道、中部、中国、九州、さらには、中国北朝鮮国境などに位置する火山に由来するテフラ(火山碎屑物、いわゆる火山灰)が数多く認められる(たとえば、早田・八木、1991など)。テフラの中には噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、遺跡発掘調査の際に認められたテフラについて、発掘調査担当者により採取された試料を対象に火山ガラス比分析、重鉱物組成分析(以上を合わせてテフラ組成分析と呼ぶ)、屈折率測定を行って、示標テフラとの同定を行うことになった。

#### 2. 分析試料

テフラ分析の対象となった試料は、平泉町志羅山遺跡第80次調査1号住居跡において発掘調査担当者により採取されたものである。

#### 3. 分析・測定方法

##### (1) テフラ組成分析(火山ガラス比・重鉱物組成分析)

テフラ組成分析手順は、次の通りである。

- 1) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 2) 80°Cで恒熱乾燥。
- 3) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 4) 側光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別組成を求める(火山ガラス比分析)。
- 5) 側光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める(重鉱物組成分析)。

##### (2) 屈折率測定

屈折率の測定は、温度一定屈折率測定法(新井、1972、1993)による。

#### 4. 分析結果

1号住居跡試料のテフラ組成ダイヤグラムを図1に、火山ガラス比分析の結果を表1に示す。重鉱物組成については、磁鉄鉱や斜方輝石が認められたものの、重鉱物が1/4-1/8mm粒子全体の2%に満たないため、分析不可能であった。試料に含まれる火山ガラスの割合は72.4%で、量の多い順に、軽石型(纖維束状、スボンジ状: 68.4%)、パブル型(平板状: 2.4%)、中間型(1.6%)である。色調としては、無色透明や白色の火山ガラスが認められる。

屈折率測定の結果を表2に示す。火山ガラス(n)の屈折率は、1.502-1.506(modal range: 1.503-1.505)で

ある。また、数少ない斜方輝石(γ)の屈折率は、1.706-1.708である。これらのことから、この試料には、915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田火山灰(To-a, 町田ほか, 1981)に由来するテフラ粒子が非常に多く含まれている可能性が高いと考えられる。

なお、本資料に含まれるTo-a起源の火山ガラスの屈折率は、町田ほか(1981)や町田・新井(1992)などのテフラ・カタログに記載されているTo-aのそれより高い。これは、カタログに値が載せられている火山ガラスが始源である十和田火山近傍で採取されたもので、十分に水和が行われていない分厚い火山ガラスが多く含まれているためと考えられる。実際、十和田火山から遠い本遺跡のような岩手県南部や仙台市周辺さらに福島市周辺で検出されたTo-aに含まれる火山ガラスの屈折率については、今回の値と同じような値が得られる(古環境研究所、未公開資料)。なお、テフラが一次堆積層として認められたか否かについては、現地において土層断面を観察できなかったことから言及できない。

表1 火山ガラス比分析結果

試料採取地点	bw	md	pm	その他	合計
1号住居址土坑	6	4	171	69	250

数字は粒子数。bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

表2 屈折率測定結果

試料採取地点	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
1号住居址土坑	1.502-1.506 (1.503-1.505)	1.706-1.708

屈折率測定は、温度一定屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による。( )は、modal rangeを示す。

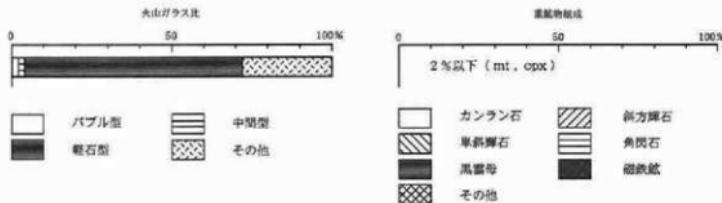


図1 志羅山遺跡におけるテフラ組成ダイヤグラフ

#### 文献

- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.  
 新井房夫(1993)温度一定屈折率測定法. 日本国第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.  
 早川由紀夫・小山真人(1998)日本海を挟んで10世紀に相次いで起きた二つの大噴火の年月日. 火山, 第2集, 43, p.403-407.  
 池田まゆみ・福沢仁之(1997)青森県小川原湖と十三湖における過去2300年間の環境変動と地震津波. 平成8年度文部省科研研究成果報告書「汽水湖堆積物を用いた過去200年間の気候・海水準・降水量変動の解明」(研究代表者 福沢仁之), p.124-159.  
 可田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, p.276.  
 可田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.  
 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之(1966)馬鹿川中・下流域の段丘と火山灰. 第四紀研究, 5, p.29-35.  
 早田 勉・八木浩司(1991)東北地方の第四紀テフラ研究. 第四紀研究, 30, p.369-378.

## (2) 平泉町志羅山遺跡第80次調査出土材の樹種

高橋利彦(木工合「ゆい」)

### 1. 試料

試料は非炭化材(以下「材」と呼ぶ)120点<sup>1)</sup>と炭化材12点(C-1-C-12、本稿では材と区別するため各試料番号の前にC-を付けた(第1表))で、12世紀のものとされる溝跡・井戸・土坑などの遺構や沢状の窪地の包含層から検出されたものである。箸や漆器・下駄などの日用品、形代・人形・埴塔婆などの祭祀具、杭や柱などの土木・建築用材と推定されている木製品・加工材が含まれているが、用途不明のものも多い(木器観察表参照)。用途不明の加工材の中には、再利用や転用のために切り落としたり、削ったりした端材と思われるものもあった。

### 2. 方法

材試料のプレパラートの作製には、筆者が遺物から採取した材片を用いた。材片は少なくとも足かけ2年分を含み、かつできるだけ少ない量となるように努め、調査担当者と協議しながら採取した。剃刀の刃を用い、試料の木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)3面の徒手切片を作製し、これをガムクロラールで封入したプレパラートを、生物顕微鏡で観察・同定した。

炭化材は調査担当者によって選び出されたものである。試料の木口・柾目・板目の3断面を作製し、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡(SEM、加速電圧10kV)で観察・同定した。SEM観察にあつては(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。

併せて各分類群1点の顕微鏡写真図版を作成した(図版1-6)。作製したプレパラートとネガ・フィルムはすべて木工合「ゆい」に保管されている。

### 3. 結果

No.196は採取量が十分でなかったため同定できなかった。確実な同定ができないため類似種としたものを含め131点が以下の18分類群(ここでは属・亜属・節・種の異なる階級の分類単位を総称している)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I・II」(佐竹ほか1989)にしたがい、県内での分布については「岩手県植物誌」(岩手植物の会1970)も参照した。一般的な性質などについては「木の事典第1-9巻」(平井1979-1981)も参考にした。( )のついた試料番号は類似種としたものを示している。

#### ・マツ属複維管束亜属(*Pinus subgen. Diploxyylon*, sp.)マツ科 No.170, 282

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞、エピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は單列、1-15細胞高のものと樹脂道をもつ筋錐状のものがある。

複維管束亜属(二葉松類)には3種あるが、県内ではクロマツ(*Pinus thunbergii*)が沿岸部に、アカマツ(*P. densiflora*)が全域に自生する。クロマツは本州～琉球の海沿いに多く生育し、また占くから砂防林として植栽されてきた。アカマツは北海道南部から九州に自生し、また植栽される。材は重硬で、強度は大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途がある。

- ・スギ科(*Cryptomeria japonica*)スギ科 No.71~82, 84, 86~94, 157, 192~195, 197~200, 225, 227, 229, 231, 232, 238~240, 242~249, 251, 252, 283, 285~287, 290, 401, 402, 404, 405, 408~412

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はスギ型(Taxodioïd)で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では、現在植林面積第一位の重要な樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

- ・ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.)ヒノキ科 No.234

早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

ヒノキ属には2種あるが、県内にはサワラ(*Chamaecyparis pisifera*)が中部以南に生育する。サワラは本州(岩手県以南)と九州に自生し、また植栽される常緑高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的には同属のヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

- ・アスナロ(*Thujopsis dolabrata*)ヒノキ科 No.(85), 168, (169), (190), (191), 201, 202, 222, 224, 226, 228, 230, 233, 237, 241, 250, 255, 262, 288, 289, (400), 406

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型~スギ型で1~6個。放射組織は単列、1~10細胞高。No.85・169・190・191・400は乾燥による変形や劣化、樹脂の存在などにより特徴が十分観察できなかったため類似種とした。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。県内に自生するのは変種のヒノキアスナロ(*T. dolabrata var. honda*)のみともされる。ヒノキアスナロ(ヒバ)は北海道(渡島半島以南)・本州北部に自生する。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

- ・イヌガヤ(*Cephalotaxus harringtonia*)イヌガヤ 科No.291

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は不明瞭。樹脂細胞はあるが、樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はトウヒ型(Piceoid)で1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁にらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは本州(岩手県以南)・四国・九州に分布する常緑小高木~低木で、時に植栽される。北海道西部・本州(主として日本海側)・四国的一部には匍匐性の変種ハイイヌガヤ(*Charringtonia var. nana*)が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具・旋作材などの用途が知られている。

- ・ヤマナラシ属(*Populus* sp.)ヤナギ科(5号土抗理土)

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。管孔は単独およ

び2-3個が複合、横断面では梢円形へやや角張った梢円形。道管は単穿孔をもつ。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

ヤマナラシ属には3種あるが、県内にはヤマナラシ(*Populus sieboldii*)とドロヤナギ(*P. maximowiczii*)が自生する。ヤマナラシは北海道・本州・四国の大規模な丘陵地などに、ドロヤナギは北海道・本州(中部地方以北)の河岸などに生育する落葉高木である。材は軽軟で、強度・耐朽性は低い。マッチ軸木・箱・経木・火薬用木炭などの用途がある。

・カバノキ属(*Betula* sp.)カバノキ科C-9

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合、横断面では角張った梢円形。道管は階段穿孔を有し、段数は10前後、壁孔は密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1-4細胞幅、1-30細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

カバノキ属は11種が自生し、主として本州中北部・北海道の山地・高山・寒冷地などに生育する落葉高木～低木である。県内にはウダイイカンバ(*Betula maximowicziana*)やミズメ(*B. grossa*)など6種が生育する。材質は種によって異なるが、ミズメの材は重硬・強韌で、各種の道具・器具材、木地・家具材等に用いられる。

・クマシデ属(*Carpinus* sp.)カバノキ科C-2, C-11, C-12

散孔材で、管孔は放射方向に2-4(10以上)個が複合、横断面では梢円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は対列状～交互状に配列。放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性1-3細胞幅、1-40細胞高のものと集合組織がある。柔組織は短接線状、ターミナル状。年輪界は明瞭。

クマシデ属は5種あるが、県内にはサワシバ(*Carpinus cordata*)、クマシデ(*C. japonica*)、イヌシデ(*C. tschonoskii*)、アカシデ(*C. laxiflora*)の4種が自生する。サワシバは北海道・本州・四国の山地に普通で九州には少ない。クマシデは本州・四国・九州に、イヌシデは本州(岩手・新潟県以南)・四国・九州に、アカシデは北海道南部・本州・四国・九州に生育する温帯落葉高木～低木である。このうち、アカシデは山野に普通にみられ、二次林の構成種である。材はやや重硬で、割裂性は小さく、曲げ木や木地、薪炭材などに用いられる。

・ブナ属(*Fagus* sp.)ブナ科C-4, C-7, C-10

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合、横断面では多角形、分布密度は高い。道管はほぼ単穿孔をもつが、晩材部では段数が10前後の階段穿孔をもつものもある。放射組織は同性～異性、單列・數細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状、散在状。年輪界は明瞭。

ブナ属はブナ(*Fagus crenata*)とイヌブナ(*F. japonica*)の2種がある。ブナは北海道南西部(黒松内低地帯以南)・本州・四国・九州に、イヌブナは本州(岩手県以南)・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナの方がブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落を作ることはない。ブナは日本の冷温带落葉樹林を代表する樹木である。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinns* sp.)ブナ科 No.260, 253, C-5, C-6

環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～精円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、單列、1~20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(ドングリ)が開花の年に熟すグループで、カシワ(*Quercus dentata*)、ミズナラ(*Q. crispula*)、コナラ(*Q. serrata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)といいくつかの変・品種がある。カシワ・ミズナラ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(青森県を除く)・四国・九州に分布する。このうち、コナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・構材などの用途があり、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・クリ(*Castanea crenata*)ブナ科 No.137, 138, 139, 143, 142

環孔材で孔圏部は1~多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では精円形～円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った精円形～多角形、管壁はとともに薄い。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性單(-2)列、1~15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、構木などに用いられる。

・ケヤキ(*Zelkova serrata*)ニレ科 No.77, 83, 217~219, 313

環孔材で孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～精円形、単独。小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~10細胞幅、1~30(60)細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにもなる。材はやや重硬で、強度は大きいが、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つにあげられる。

・モクレン属(*Magnolia* sp.)モクレン科 No.235, 236, 403

散孔材で管壁は中庸～薄く、横断面では角張った精円形～多角形、単独および2~4が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は5種があるが、県内にはホオノキ(*Magnolia obovata*)・コブシ(*M. praecoccissima*)・タムシバ(*M. sulcifolia*)の3種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の遼潤～湿性地に生育するが西日本にはやや少ない。タムシバは本州・四国・九州の山地～低地生育し、日本海側に多い。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないとから、器具・建築・家具・建具材などのは

か、指物・木地・下駄齒・刃物類など特殊な用途も知られている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るとされ、ホオノキに準じた使われ方をする。

・カツラ(*Cercidiphyllum japonicum*)カツラ科 No.284

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~3個が複合、分布密度は高い。晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は階段穿孔をもち、段数は20以上。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

カツラは北海道から九州に分布する落葉高木である。カツラ属にはこのほかに、本州北・中部の亜高山帯に分布するヒロハカツラ(*Cercidiphyllum magnificum*)がある。カツラの材はやや軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、強度・保存性は低い。大径材が多く欠点が少ないため、各種の道具・器具・木地・家具・建築・彫刻材などに用いられる有用材の一つである。

・サクラ属(*Prunus* sp.)バラ科C-1

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2~8個が複合、晚材部に向かって管径を減少させる。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~4細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状、散在状。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属は15種が自生し、多くの変・品種がある。県内にはイヌザクラ(*Prunus buergcriana*)やウミズザクラ(*P. grayana*)など8種が自生するほか栽培品種も多い。落葉性の高木~小高木である。材は一般に中程度~やや重硬・強韌で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材・機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。

・カエデ属(*Acer* sp.)カエデ科C-3, C-8

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔をもち、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30(100)細胞高。柔組織はターミナル状、周囲状または隨伴散在状。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属は27種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木~低木である。県内にはカラコギカエデ(*Acer ginnala*)やハウチワカエデ(*A. japonicum*)など15種が自生する。材は一般にやや重硬・強韌で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

・ケンボナシ(*Hovenia dulcis*)クロウメモドキ科 No.261, 他(5号土抗埋土)

環孔材で孔周部は1~3列、孔周外で急に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁厚は中庸で、横断面では楕円形、単独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独および放射方向に2~3個が複合する。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織周囲状~翼状、散在状、ターミナル状。年輪界はやや明瞭。

ケンボナシは北海道(奥尻島)・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装饰材・家具材として賞用され、器具・楽

器・旋作・薪炭材などにも用いられる。

・エゴノキ属(*Styrax* sp.)エゴノキ科 No.292他(5号上抗埋土)

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、2~4個が複合または単独で配列、年輪界付近で管径を減少させる。道管は階段穿孔をもち、段数は5~10。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20(50)細胞高。柔組織は短接線状・散在状。年輪界は不明瞭。

エゴノキ属は3種あるが、県内にはエゴノキ(*Styrax japonica*)とハクウンボク(*S. obassia*)の2種が自生する。エゴノキは北海道(渡島)・本州・四国・九州・琉球に、ハクウンボクは北海道(北見・石狩以南)・本州・四国・九州に分布する落葉高木~小高木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、旋作・器具・薪炭材などに用いられる。

#### 4. 考察

同定対象となった材試料を通覧すると、スギが過半数(52.5%)を占め、全体の20%を占める(ヒノキアスナロを含む広義の)アスナロ(類似種を含む以下同様)とともに多用されていることが目につく(表2)。この点は、隣接する志羅山遺跡第66次・第74次調査(高橋印刷)や柳之御所跡(能城1995、高橋1995)出土試料にも共通して認められた傾向である。ただし、ヒノキ属が1点のみである点はそれらとは異なっている。

主な用途をみると、箸・木札・串・形代・木筒・蓋や底板など薄板やその加工品とみなせるものの大半がスギ製で、アスナロも用いられている。そして、その他の樹種が用いられている例はごく少ない。削製性と加工性の良さから両種が選ばれたものであろう。この点も66次・74次調査や柳之御所跡試料と共通する点である。これに対し、礎板3点と柱2点はいずれもクリであった。クリは国産材の中では最高の耐朽性をもち、倒立柱等の用材としては最適と考えられる樹種であることから、この点が選択理由になったものと思う。また、漆器はいずれもケヤキ製であった。ケヤキは柳之御所跡試料でも圧倒的多数を占め、また現在まで続いている用材でもある。上記の先行調査でも指摘されているように、用途応じた樹種が選択されているといえよう。

箸は19点(箸?を含む)が対象となったが、アスナロ(10点)・スギ(5点)・モクレン属(2点)・複維管束亜属(1点)・ヒノキ属(1点)の5分類群が認められた。74次調査試料で検討した18点すべてがスギであったことは異なっている。74次調査試料は、祭祀用に一時に作られたものである可能性も指摘されている(高橋印刷)が、本試料で多くの樹種が用いられているのは、これらが日用の「ケ」のものであるためかもしれない。74次試料が中央部が太く両端に向かって細くなる「両口箸」<sup>2)</sup>であるのに対して、本試料の多くが太さの変化のほとんどない「寸胴形」や一端のみが細くなる「片口型」であることもこの現れかもしれない。なお、モクレン属と複維管束亜属は柳之御所跡試料には認められず、初出例の可能性もあるが、箸(?)とされていることから断定はできない。また、No.235・236(モクレン属)は、箸であれば、その形状がほぼ一致することからも一对のものである可能性がある。

下駄4点は、歯のみのものも含めていずれも連齒下駄であり、スギ(2点)・ケヤキ(1点)・モクレン属(1点)が用いられていた。いずれも柳之御所跡試料でも認められている用材である。

No.285はヒキリ杵とされるものであり、スギに同定された。残存部の最大径は10×11mmほどである。出土品でヒキリ杵の樹種が検討された例は少ないので、杵と対になって使われるヒキリ板の用材はスギの例が多い(高崎・岩城1981、伊東ほか1987、伊東1990)。また、スギ製の板と杵を用いてのキリモミ式による復

元(発火)実験によると、出土品での検出例の多い、径8–11mmのものが成功率が高く、平均発火時間<sup>3)</sup>も最短の40秒前後となっている(高崎・岩城1981)。試料はまさにこの範囲にあり、効率的な発火が行われていたものと推測している。

No.196は種類不明の広葉樹で、一部が焼失しているものである。残存部の断面は半円形で、周囲には縦に通った3本の小溝がある。本来は互いに直交する位置に4本の溝をもつ丸棒であろう。用途は不明とされているが、筆者はこれを「難」の柄と考えている。このような形状の柄をもつ難は現在でも市販・使用されている。

ところで、5号土抗出土のエゴノキ属(図版18a)には樹皮が残っていた。その最終年輪は、晩材部の形成が認められるものの、前年までの年輪と比較するとその形成が終了するところまではいっていないようである。したがって、その死亡時期(死とされていることからその伐採時期)は夏(おそらく盛夏以前)であろうと推定<sup>4)</sup>している。

炭化材は12点が対象となったが、6分類群が認められた。試料数が少ないにもかかわらず、多くの樹種が用いられているといえよう。用材はコナラ節やクマシデ属・カエデ属など、いずれも重硬な樹種である。一般には、重硬な樹種ほど火力が強く火保ちのよい良質な炭材になるとされている(岸本・杉浦1980)。また、試料の中には金属光沢があるものや、同定用の断面の作製が困難なほど硬く焼き結まったものが多く、消し炭や簡便な伏せ焼きなどではなく、窯窓製炭法によって焼成したものであることを窺わせる。あるいは、炭焼きを専業とする人々によって焼かれたものかもしれない。

#### 〈注〉

- 1) 同定資料の一部は不掲載となっている。
- 2) 両口箸には「神人火食」の意味がある(一色1993)とされる。
- 3) 回転の開始から木粉に火種のできたことが確認されるまでの時間とされている。
- 4) ただし、当時も現在と同様の気温変化や樹木の生長があったとみなしてのものである。

#### 引用文献

- 半井信二1979-1981「木の事典第1-9巻」、かなえ書房。  
一色1993著「文化史(改訂版)、御茶の水書房、237pp。  
伊東隆夫・山口和穂・林昭三・布谷知夫・島地謙1987日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途、木材研究・資料、第23号、42-210。  
伊東隆夫1990日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ、木材研究・資料、第26号、91-189。  
岸本定吉・杉浦鉄治1980「日唯炭焼き師入門」、総合科学出版、253pp。  
能城修一1995柳之御所跡から出土した木質品の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一間遊水池、平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査《分冊1 本文・図版》」、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、433-456。  
佐竹義輔・原寛・瓦理後次・富成忠大(編)1989「日本の野生植物木本I・II」、平凡社、321・305PP。  
高橋利彦1995柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一間遊水池、平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査《分冊1 本文・図版》」、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、433-444。  
高崎利彦・印刷中・志麻山遺跡第65次・第74次調査出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集 志麻山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書 一間遊水池事業関連遺跡発掘調査」、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、433-444。  
高崎幸男・岩城正大1981古代日本の発火技術—その自然科学的研究、群羊社、91pp.

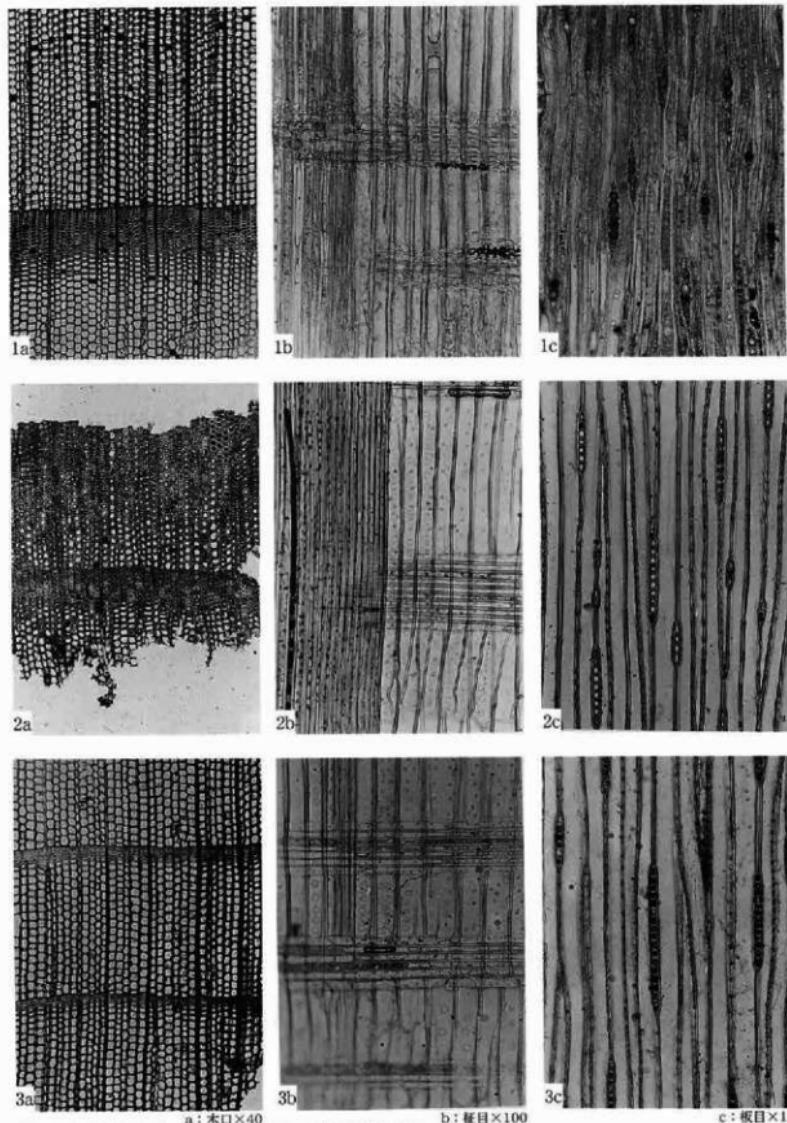
表1 志羅山遺跡第80次調査出土炭化材の樹種

資料No.	地点・層位	種名	資料No.	地点・層位	種名
C-1	H5区Ⅲ層	サクラ属	C-7	I5区Ⅲ層	ブナ属
C-2	H5区Ⅲ層	クマシデ属	C-8	I5区Ⅲ層	カエデ属
C-3	H5区Ⅲ層	カエデ属	C-9	9号溝	カバノキ属
C-4	I5区Ⅲ層	ブナ属	C-10	4号溝	ブナ属
C-5	I5区Ⅲ層	コナラ属コナラ属コナラ属	C-11	3号溝	クマシデ属
C-6	I5区Ⅲ層	コナラ属コナラ属コナラ属	C-12	11号溝	クマシデ属

表2 志羅山遺跡第80次調査出土材の用途別樹種構成 ※?のついたものも各用途に含めた

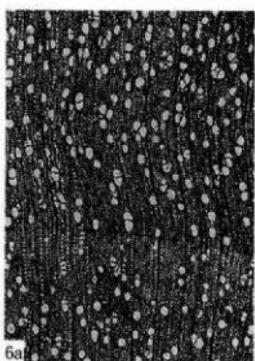
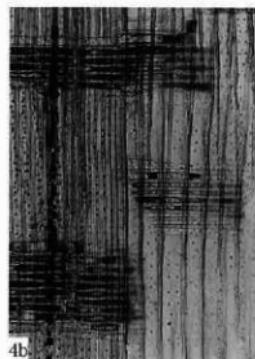
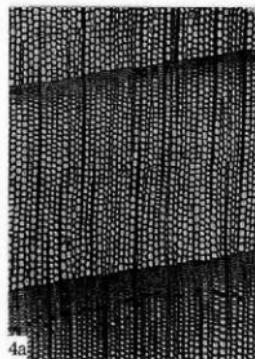
分類/用途	著	杭	蓋/底	漆器	串	木札	礎板/柱	下駄	形代	その他	炭化材	合計
複縫管束亞属	1									1	2	
スギ	5		9		4	5		2	4	34	63	
ヒノキ属	1										1	
アスナロ	10*					2*				12*	24	
イスガヤ		1									1	
ヤマナラシ属		1									1	
カバノキ属										1	1	
クマシデ属										3	3	
ブナ属										3	3	
コナラ属		1							1	2	3	
クリ							5				5	
ケヤキ			6					1			7	
モクレン属								1			3	
カツラ									1		1	
サクラ属										1	1	
カエデ属										2	2	
ケンボナシ		7*									7	
エゴノキ属		2									2	
不明広葉樹										1	1	
合計	19	12	9	6	6	5	5	4	4	50	12	132

\*:類似種を含む。



樹木の肥大成長方向は木口では画面下から上へ、板目では左から右  
 a : 木口×40      b : 板目×100      c : 板目×10

図版 1 1.マツ層複雜管束亞属No.38 2.スギNo.81 3.ヒノキ属No.84



a:木口×40

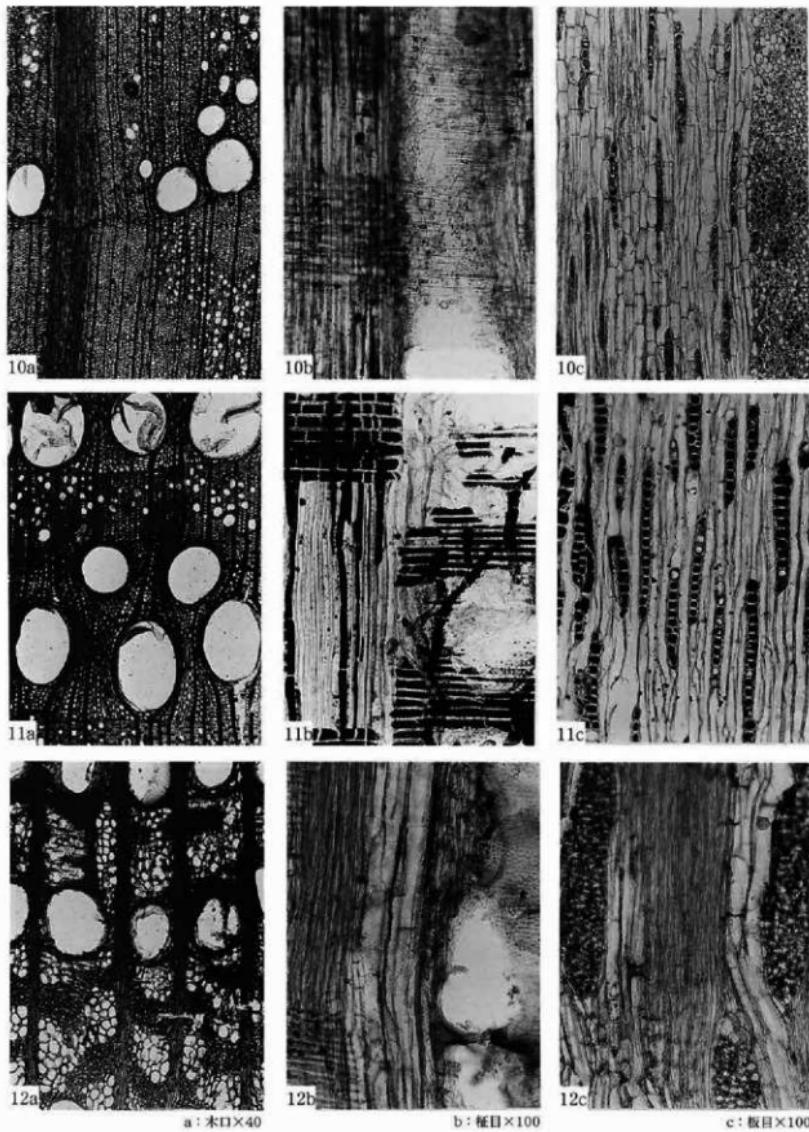
b:桿目×100

c:板目×100

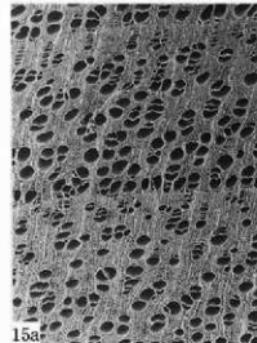
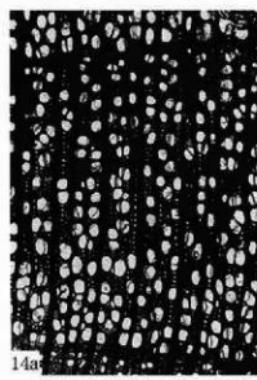
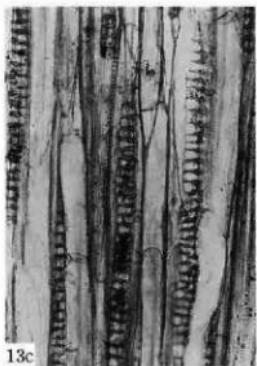
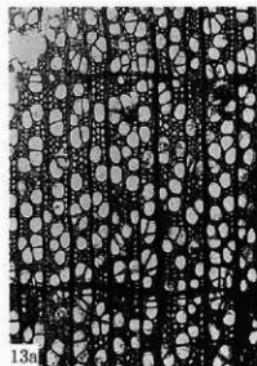
図版2 4.アスナロNo.36 5.イヌガヤNo.34 6.ヤマアラシ属No.58



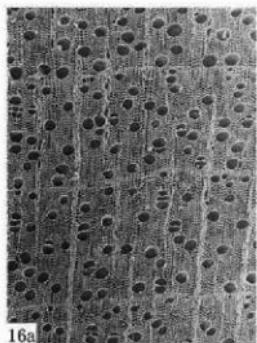
図版3 7.カバノキ属C-9 8.クマシデ属C-11 9.ブナ属C-4



図版4 10.コナラ属コナラ亜属コナラ節No.104 11.クリNo.106 12.ケヤキNo.14



図版5 13.モクレン属No.98 14.カツラ属7 15.サクラ属C-1



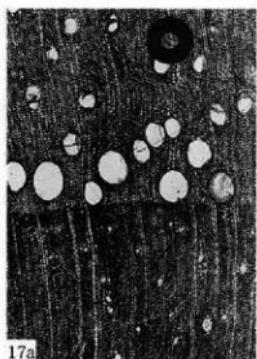
16a



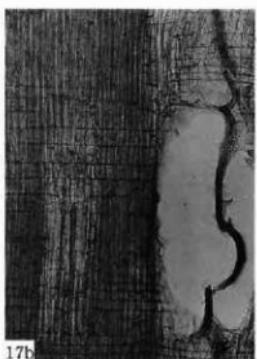
16b



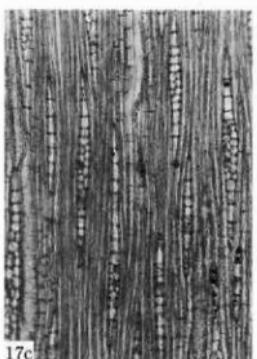
16c



17a



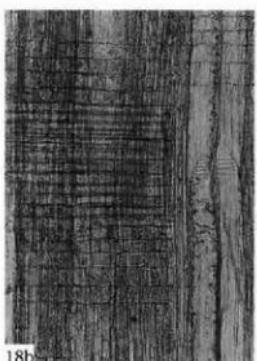
17b



17c



18a



18b



18c

a:木口×40

b:径目×100

c:板目×100

図版6 16.カエデ属C-3 17.ケンボナシNo59 18.エゴノキ属No.33

### (3) 志羅山遺跡第80次調査出土の種実

高橋利彦(木工舎「ゆい」)

#### 1. 資料

資料は2点で、1号溝(東側道路側溝)埋土下部とJ5区Ⅲ層下部からそれぞれ検出されたものである。

#### 2. 結果

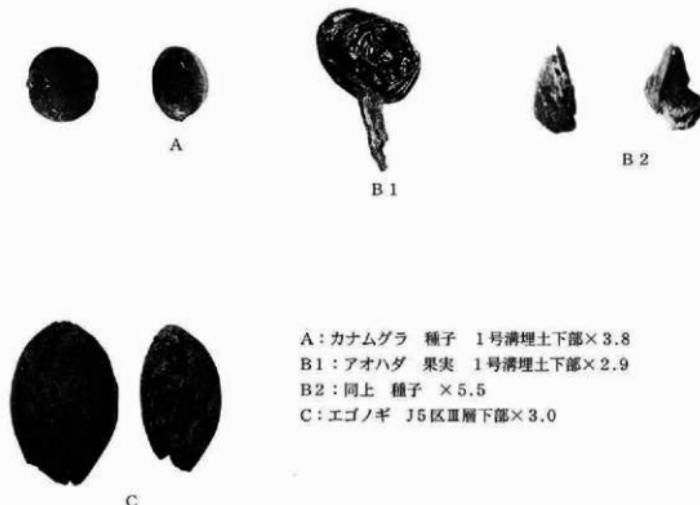
以下の3分類が認められた(下表)。数字は個体を示している。併せて写真図版(図版7)も作成した。資料は(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに返却された。

1号溝埋土下部	カナムグラ	種子	5
	アオハダ	果実	4
J5区Ⅲ層下部	エゴノキ	種子	8

カナムグラ(*Humulus japonicus*)はクワ科の1年生つる性草本で、路傍や林縁などに生育する。

アオハダ(*Ilex macropoda*)は果実であったため中から種子を取りだして観察・同定した。種子はやや未熟なようである。アオハダはモチノキ科の落葉高木～小高木である。北海道西南部から九州の低山地の林内に生育する。

エゴノキ(*Styrax japonica*)はエゴノキ科の落葉高木である。材資料の中にも認められている。



図版7



志羅山遺跡第80次調査

写 真 図 版





平泉町市街地（南から）



調査区近景（南から）

写真図版 1 空中写真



道路跡（南から）

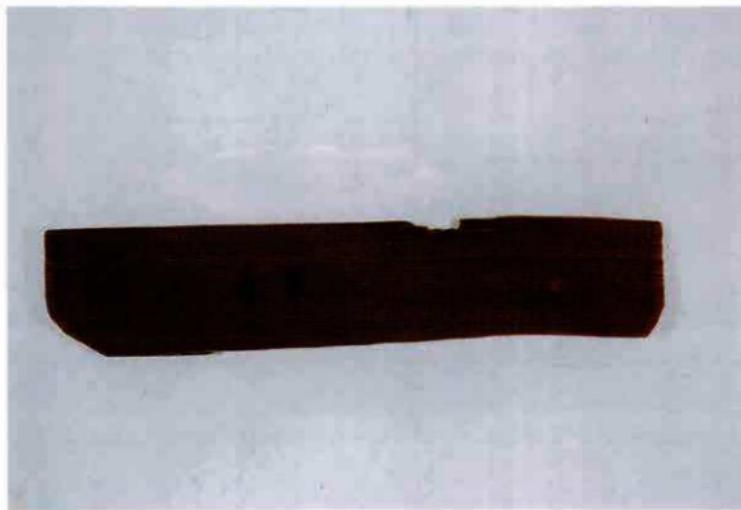


木闌出土状況

写真図版 2 1号道路跡



No.71

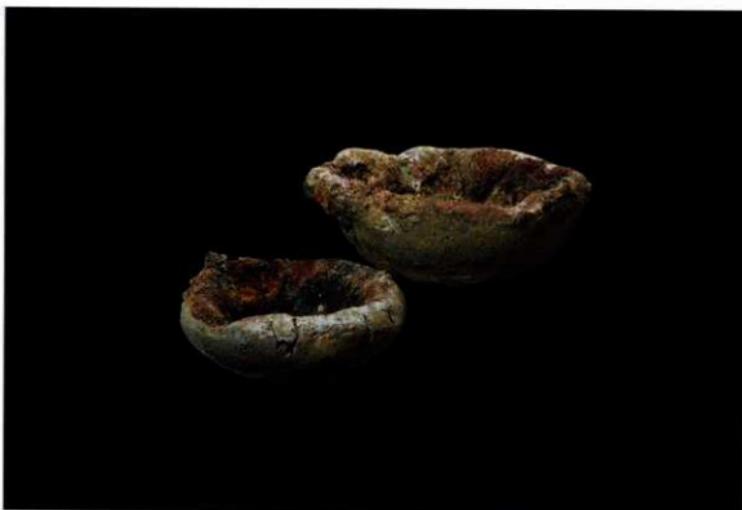


No.72

写真図版 3 道路跡出土木簡



塔瑪検出状況

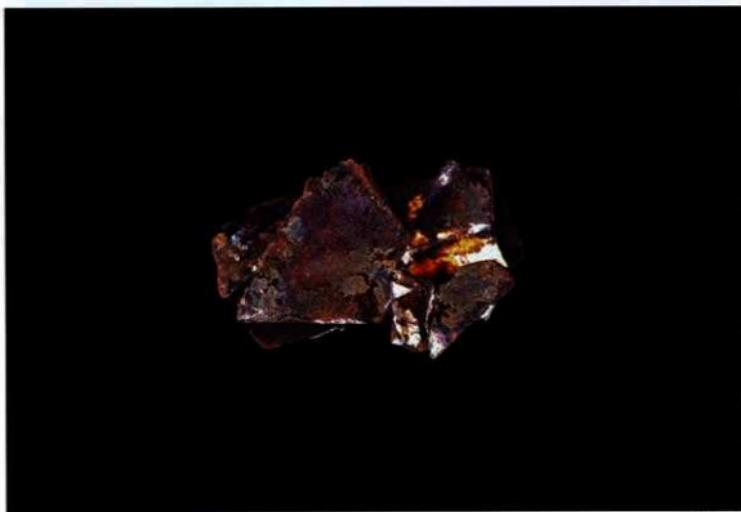


出土塔瑪

写真図版 4 1号埋納遺構



金付着培塿片



金付着銅板

写真図版 5 出土遺物



銅切りくず



中国産鋳器

写真図版 6 出土遺物



調査区全影(南から)



F3区土層断面

O層

I層

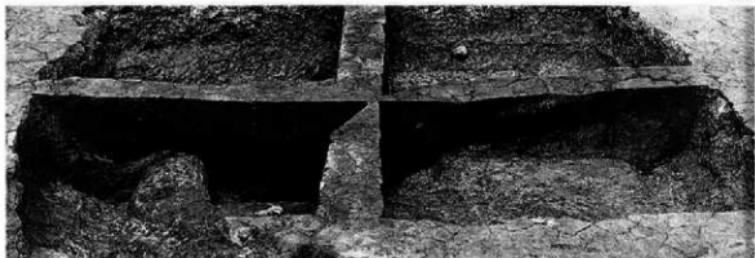
II層

VI層

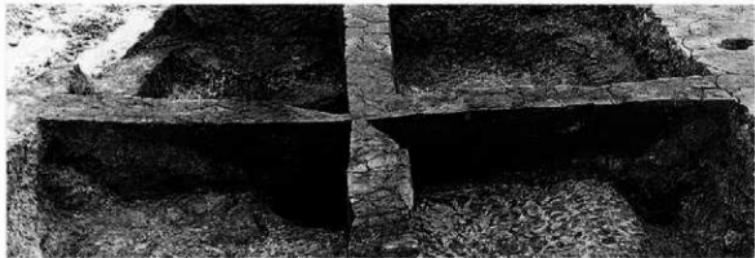
写真図版7 空中写真・基本層序



平面



埋土断面(南-北)



埋土断面(東-西)

写真図版8 1号住居跡(1)



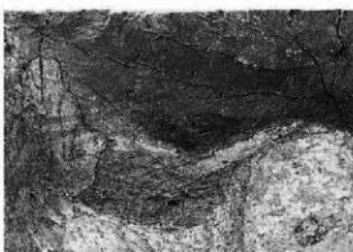
カマド平断面



煙道部断面



筒部断面



壁溝断面



外延溝(6号溝)平面



外延溝断面



外延溝断面

写真図版 9 1号住居跡(2)



平面



橋脚状道路平面

写真図版10 1号道路跡(1)



東側側溝(1号溝)断面



東側側溝(1号溝)断面



東側側溝(1号溝)断面



東側側溝(1号溝)断面



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



精査風景

写真図版11 1号道路跡(2)



西侧侧沟(2号沟)断面



西侧侧沟(2号沟)断面



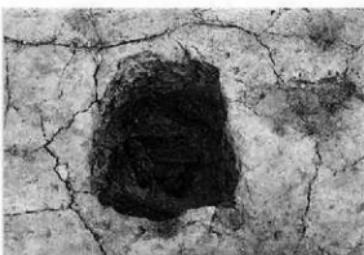
西侧侧沟(2号沟)断面



西侧侧沟(2号沟)断面



整地断面



脚印状遗物PP 1



脚印状遗物PP 2

写真図版12 1号道路跡(3)



3号溝平面



3号溝断面



4号溝平面



4号溝断面



4号溝断面

写真図版13 溝跡(1)



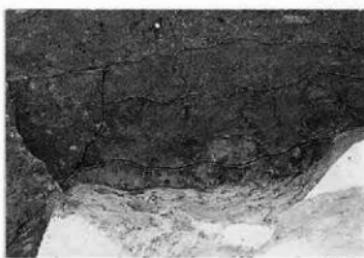
5号溝平面



5号溝断面



5号溝断面



8号溝断面



7号溝断面



9号溝平面



9号溝断面

写真図版14 溝跡(2)



1号井戸平面



1号井戸検査状況



1号井戸断面



2号井戸断面



3号井戸平面



3号井戸断面



4号井戸平面



4号井戸断面

写真図版15 井戸跡



1号土坑平面



1号土坑断面



2号土坑平面



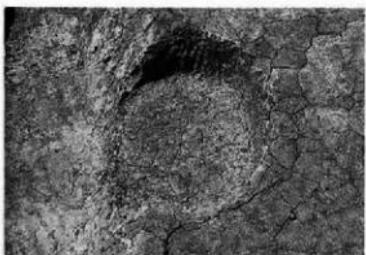
2号土坑断面



3号土坑平面



3号土坑断面



4号土坑平面



4号土坑断面

写真图版16 土坑(1)



5号土坑平面



5号土坑断面



5号土坑挖出状况



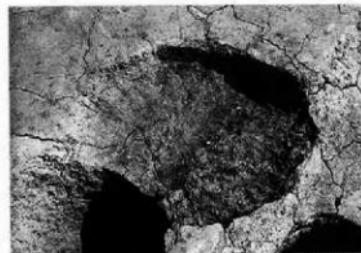
7号土坑平面



8号土坑平面



8号土坑断面

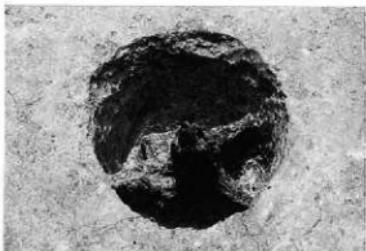


9号土坑平面



9号土坑断面

写真図版17 土坑(2)



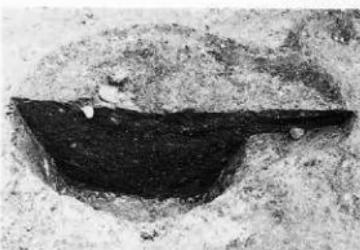
10号土坑平面



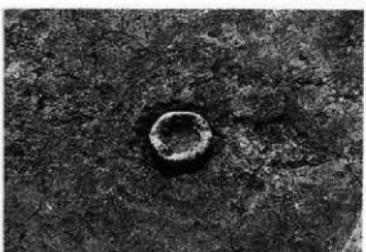
10号土坑断面



11号土坑平面



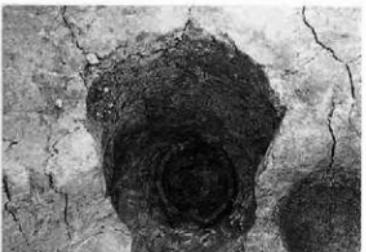
11号土坑断面



1号埋纳遗構平面



1号埋纳遗構断面



2号埋纳遗構平面



3号埋纳遗構平面

写真図版18 土坑(3)・埋納遺構



H4区断面

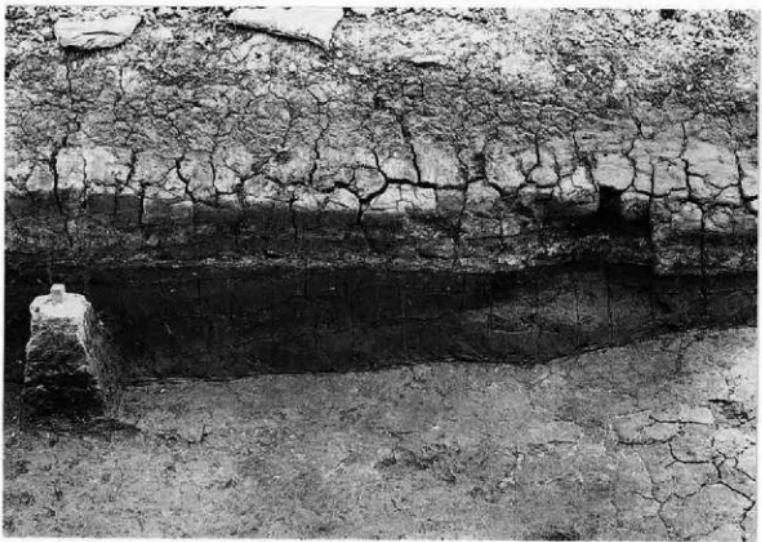


I4区断面

写真図版19 遺物包含層(1)



J4 区断面



K4 区断面

写真図版20 遺物包含層(2)

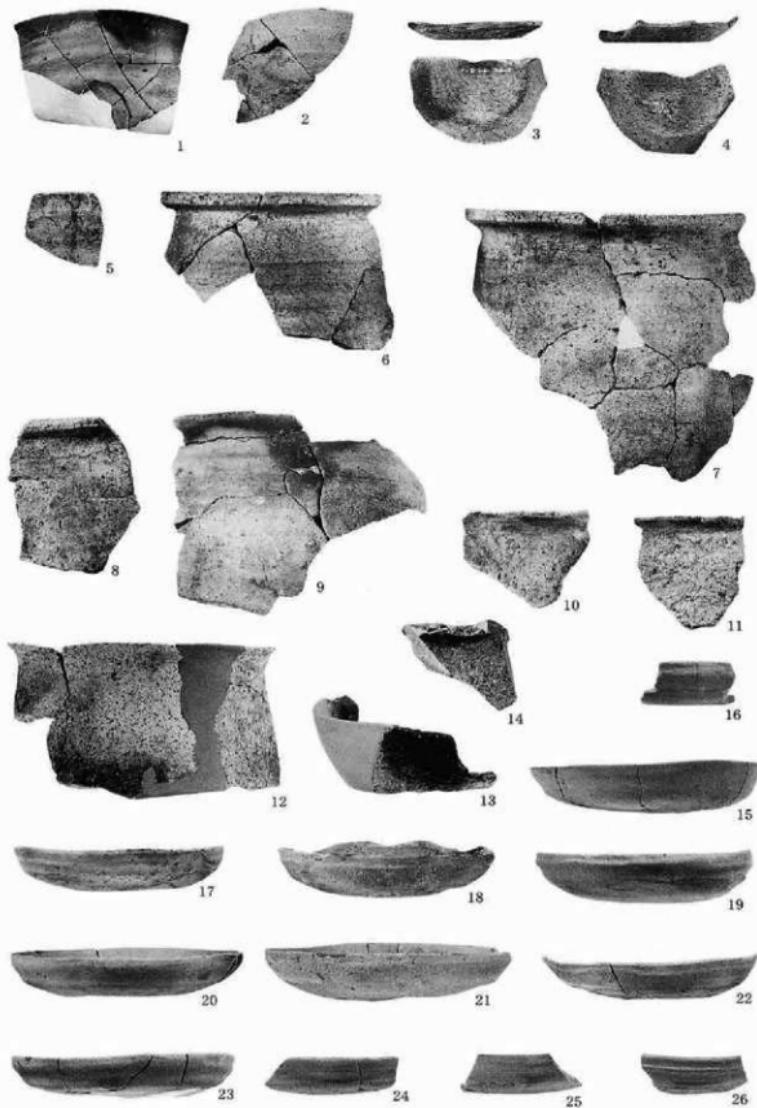


J·J5区断面(南側)

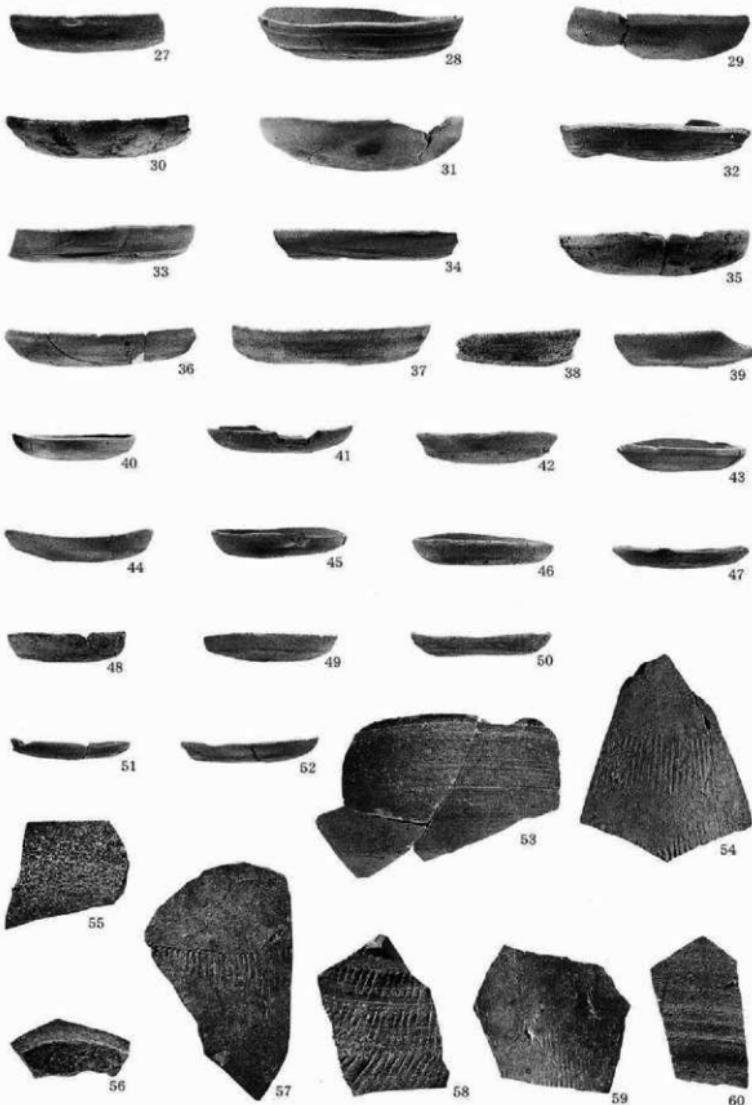


東端部柱穴群

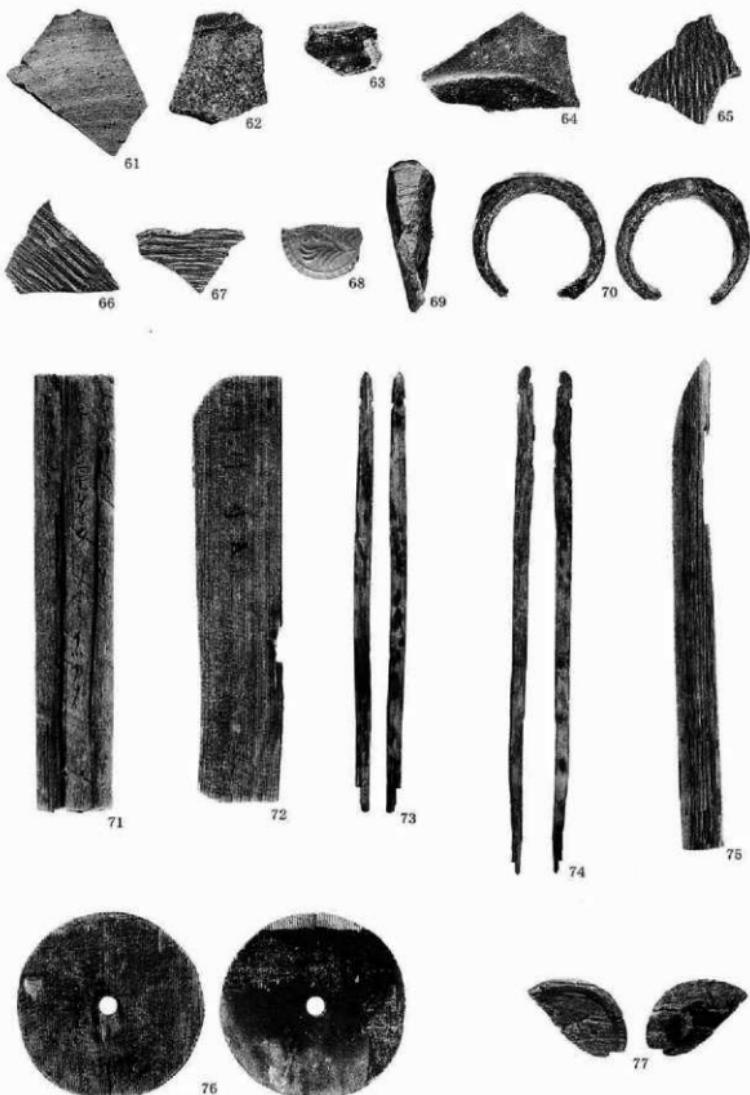
写真図版21 遺物包含層(3)柱穴群



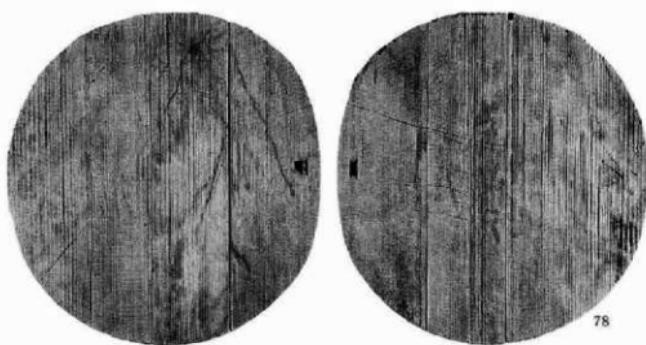
写真図版22 遺構内出土遺物(1)



写真図版23 遺構内出土遺物(2)



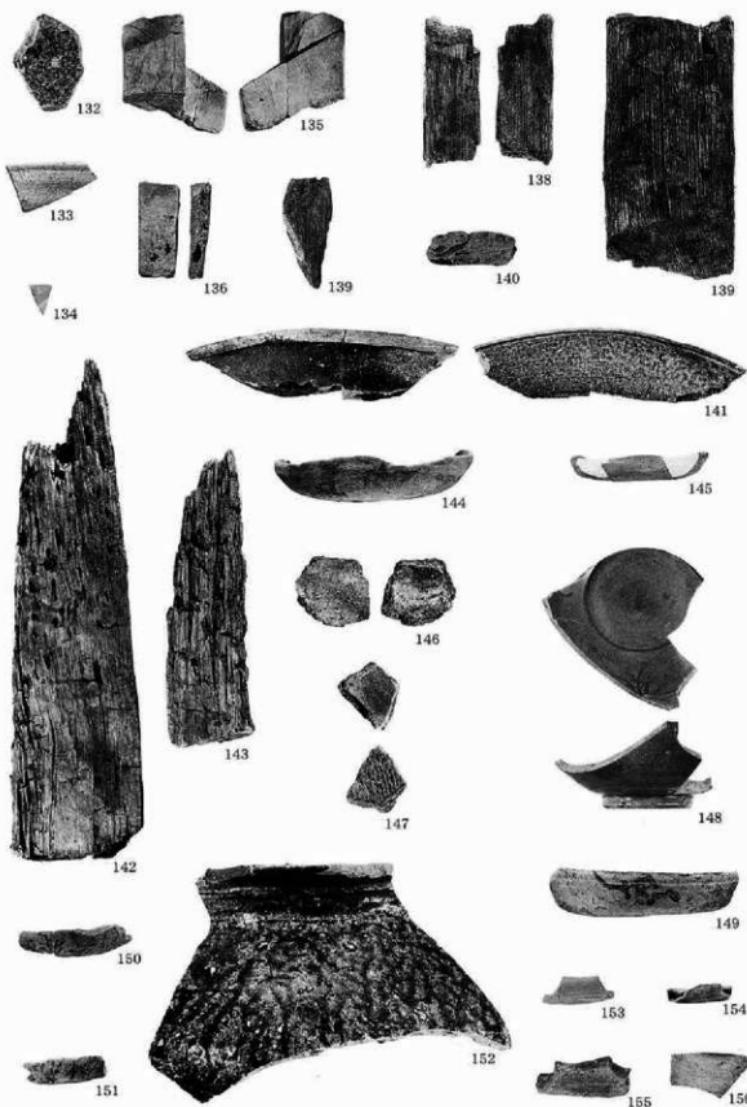
写真図版24 遺構内出土遺物(3)



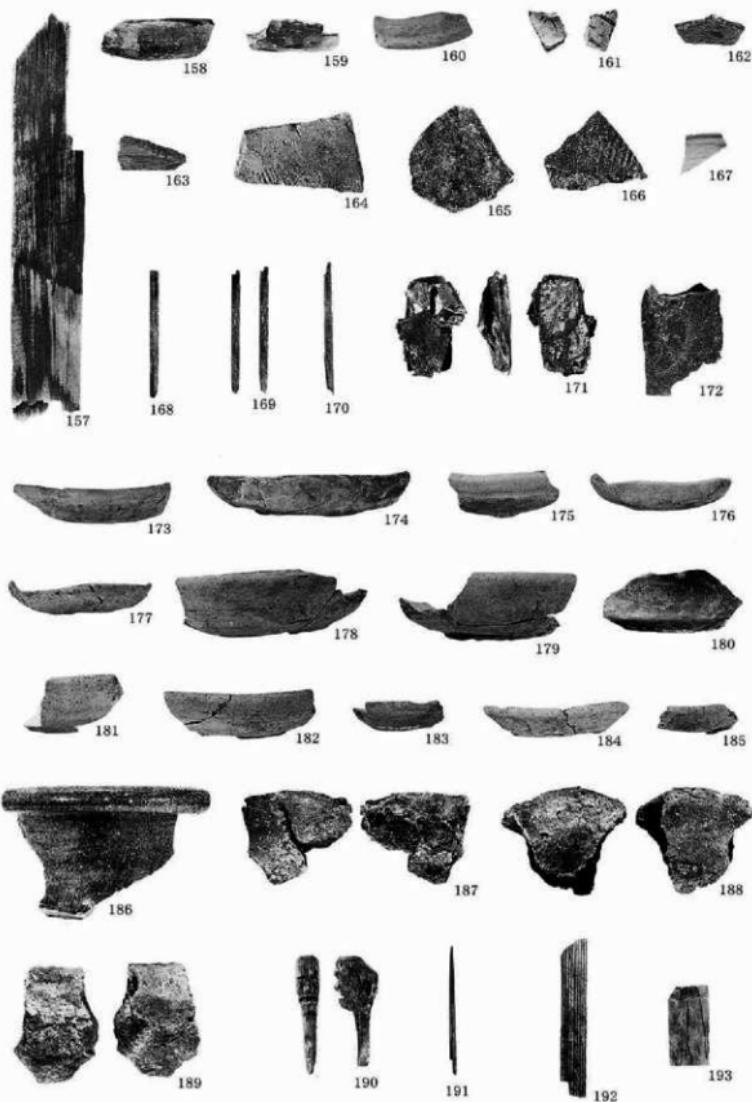
写真図版25 遺構内出土遺物(4)



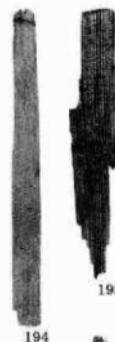
写真図版26 遺構内出土遺物(5)



写真図版27 遺構内出土遺物(6)



写真図版28 遺構内出土遺物(7)



194



195



196

197



198



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208



209



210



211

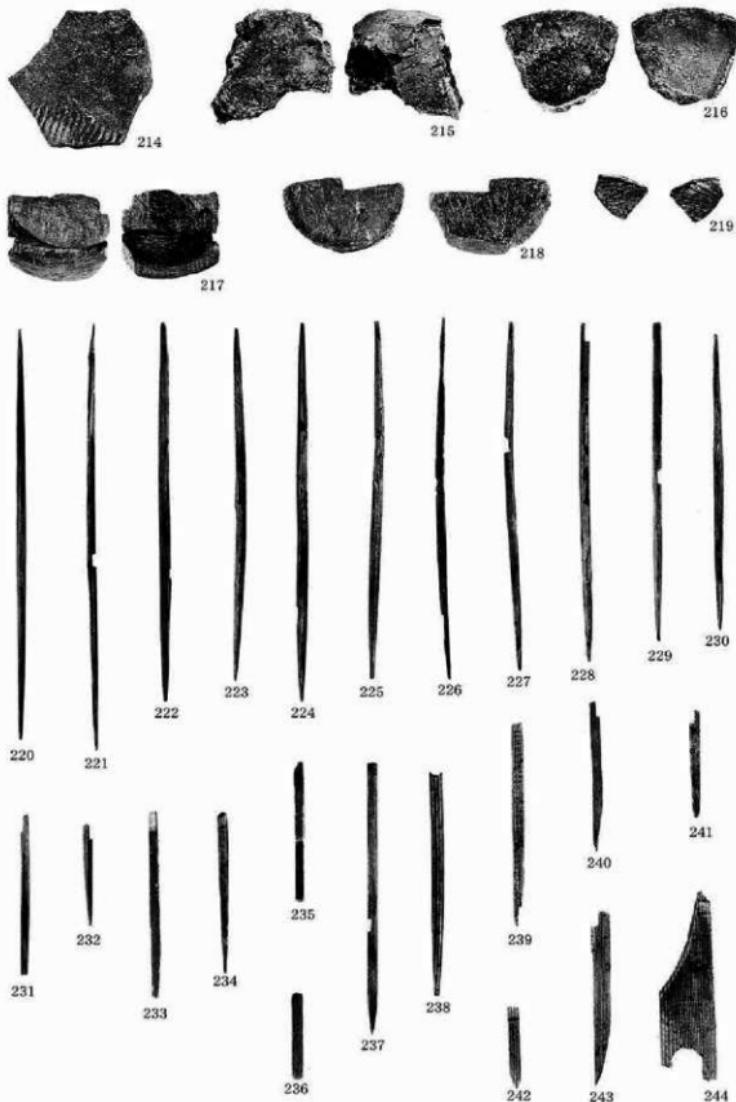


212

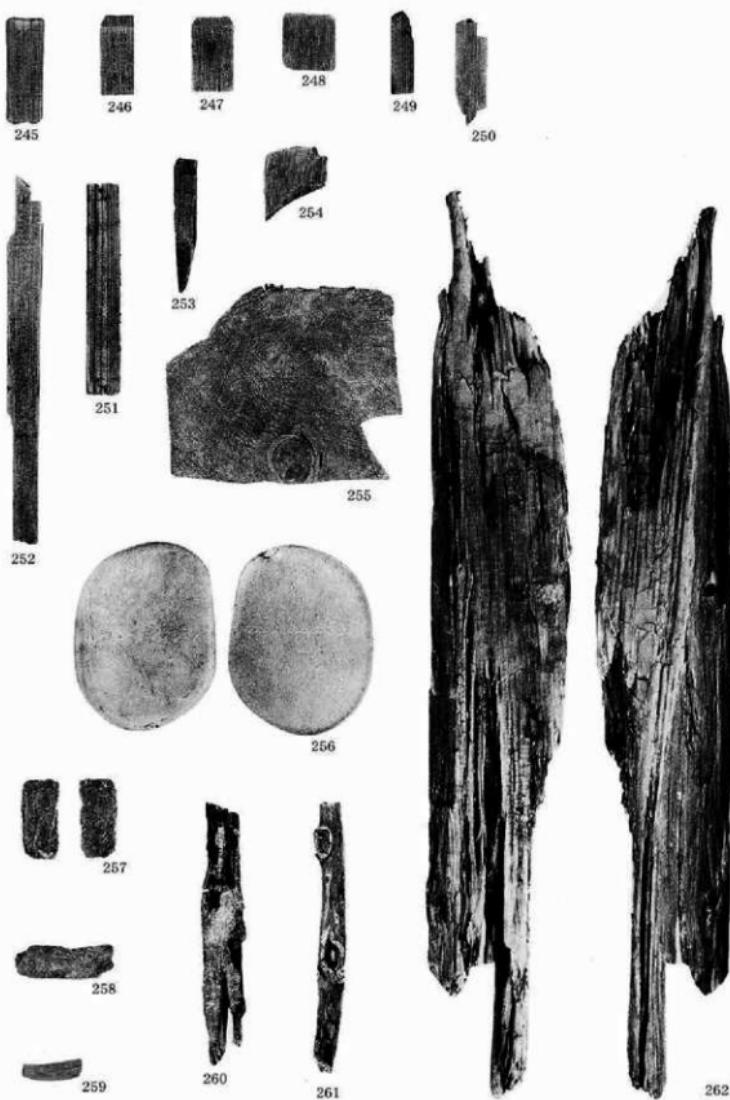


213

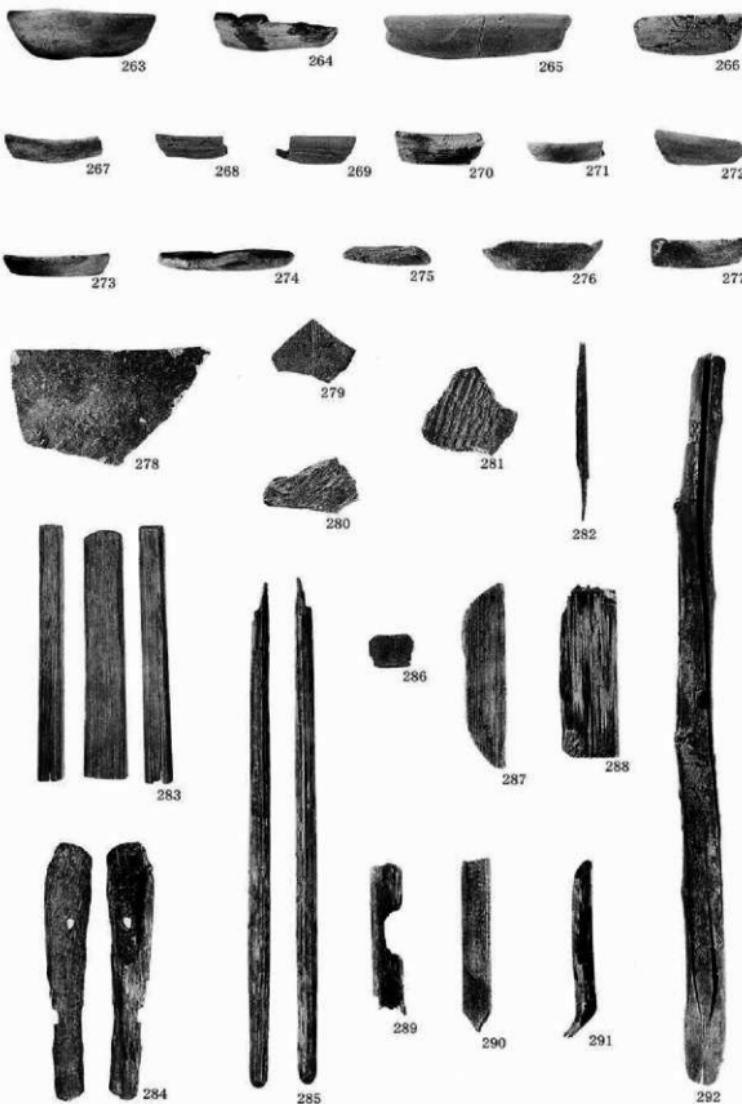
写真図版29 遺構内出土遺物(8)



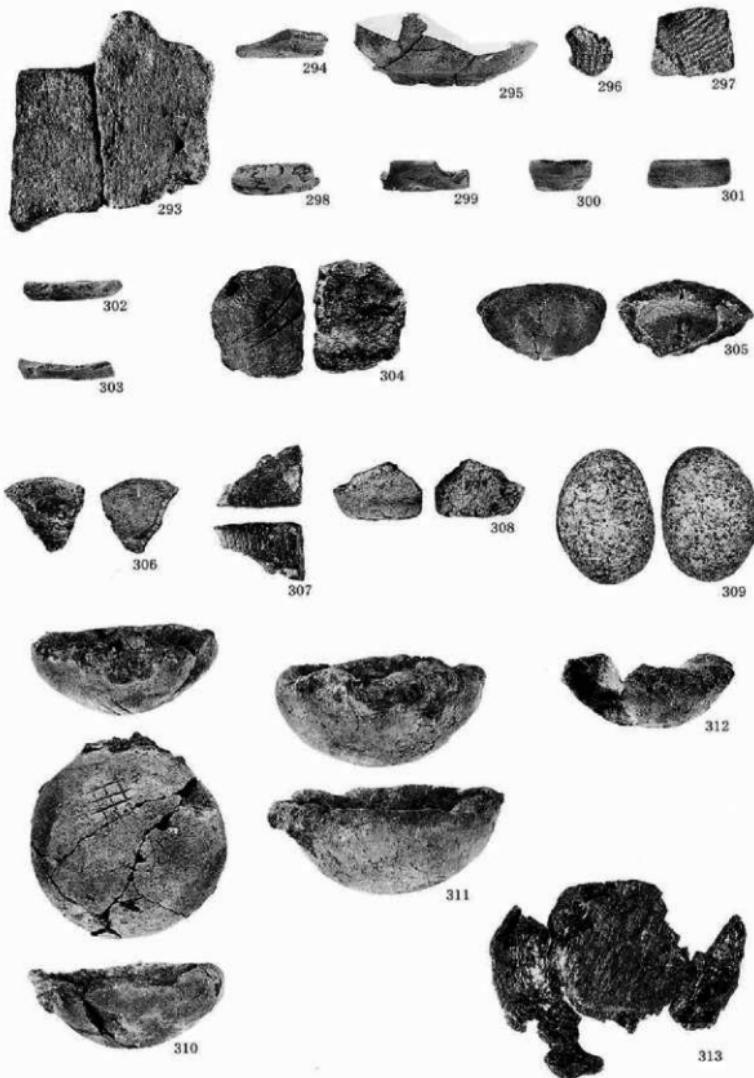
写真図版30 遺構内出土遺物(9)



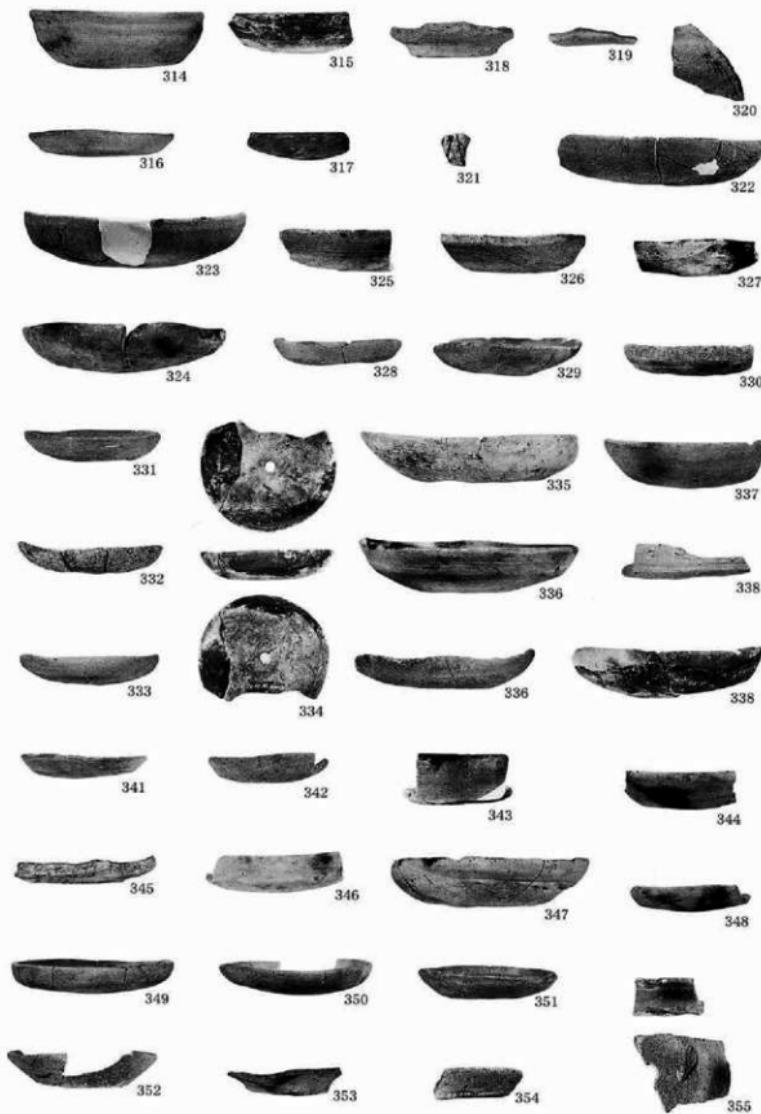
写真図版31 遺構内出土遺物(10)



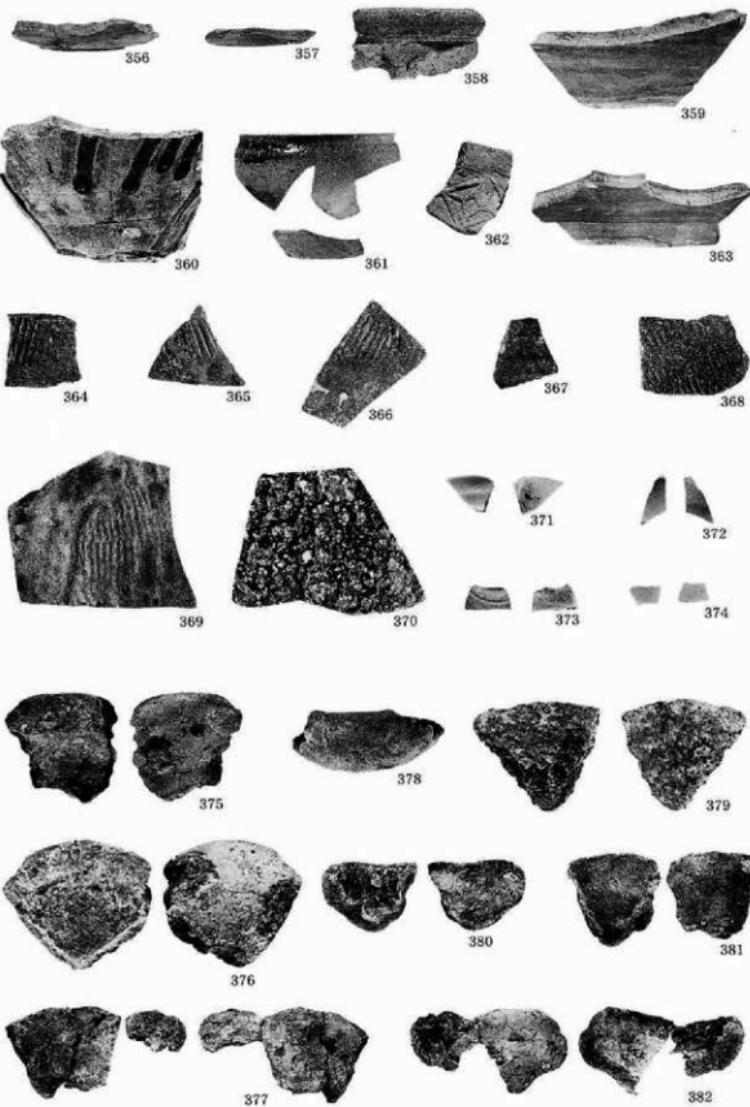
写真図版32 遺構内出土遺物(11)



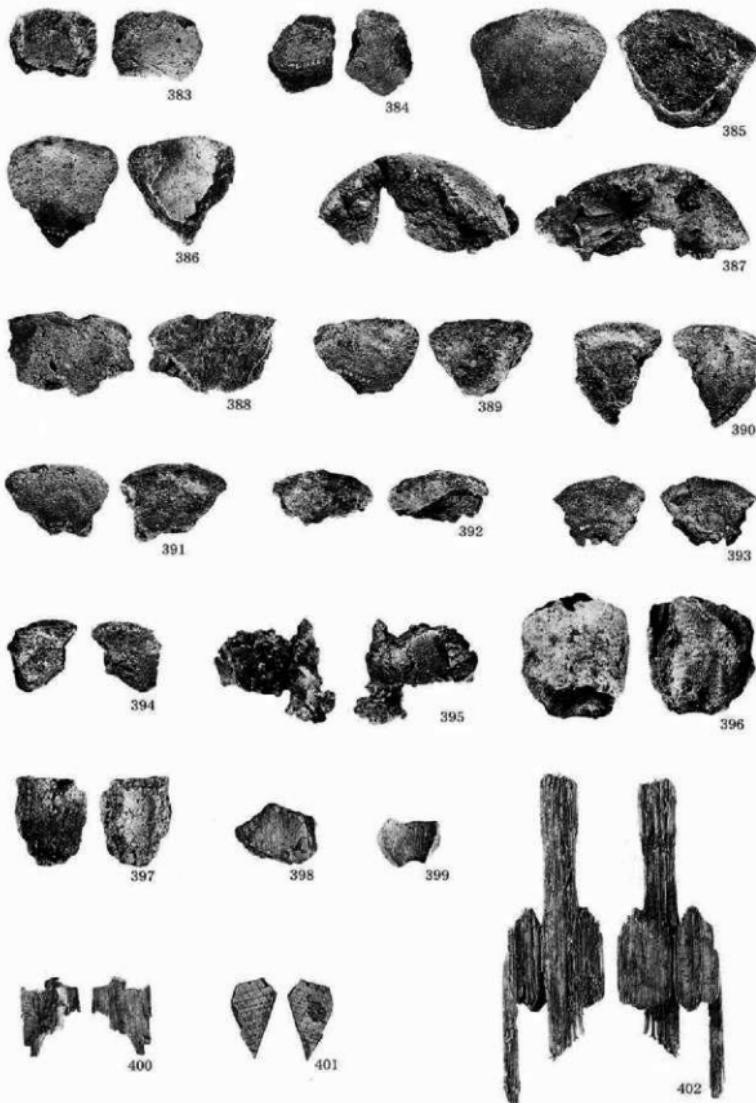
写真図版33 遺構内出土遺物(12)



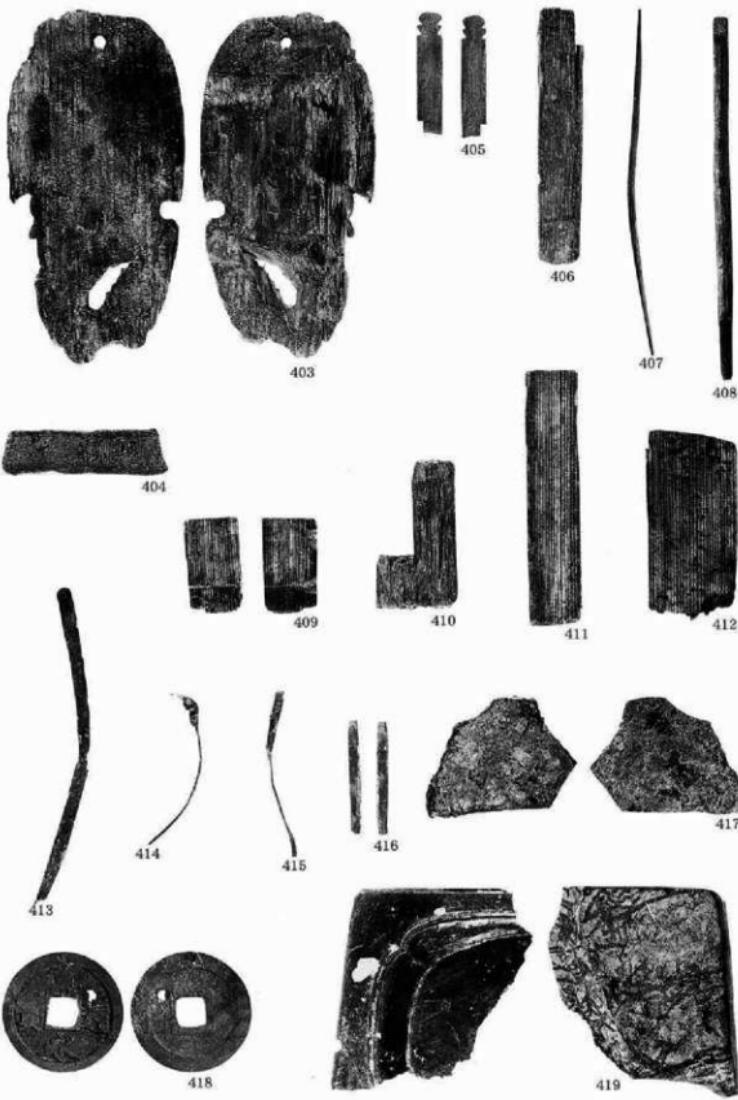
写真図版34 包含層出土遺物(1)



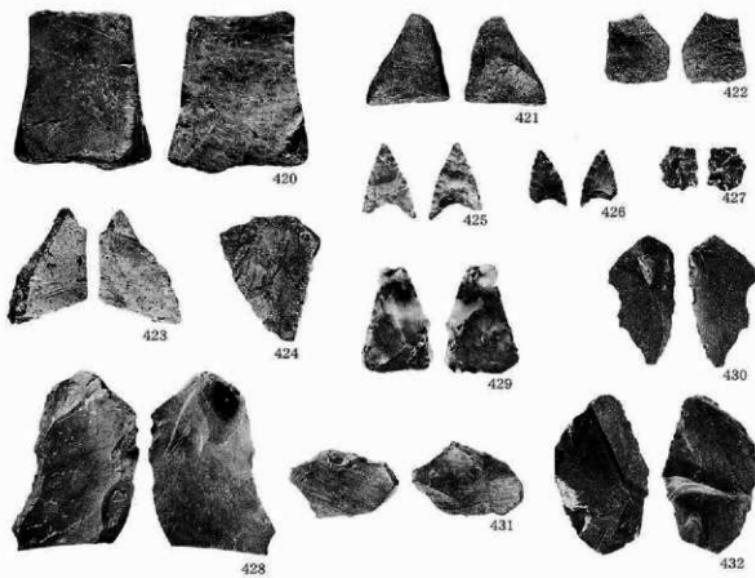
写真図版35 包含層出土遺物(2)



写真図版36 包含層出土遺物(3)



写真図版37 包含層出土遺物(4)



写真図版38 包含層出土遺物(5)



写真図版39 木簡(71)赤外線写真

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

〔樂風〕

所長 伊藤民也

副 所 長 櫻 田 次 男

〔管理類〕

課長補佐主事  
課長主事  
長佐主事  
川山立口  
浪崎花影  
清善多睦  
德光加志  
夫志士

嘱託 千葉芳夫  
〃 藤恵子  
〃 新田トヨ  
〃 佐々木光重

(調査第一課)

期限付 鈴木 聰(12月退職)  
専門調査員

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第352集

**志羅山遺跡発掘調査報告書**

(第47・56・67・73・80次調査)

**都市計画街路毛越寺線整備事業関連遺跡発掘調査**

印刷 平成13年3月9日

発行 平成13年3月16日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-0122 盛岡市みたけ2-22-50

電話 (019)641-8000

FAX(019) 641-8085

---

